

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 640 集

まぎど まぎど
間木戸Ⅱ遺跡・間木戸Ⅴ遺跡発掘調査報告書

三陸沿岸道路建設事業関連遺跡発掘調査

2015

国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
(公財)岩手県文化振興事業団

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 640 集

間木戸Ⅱ遺跡・間木戸Ⅴ遺跡発掘調査報告書

2015

国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
(公財)岩手県文化振興事業団

間木戸Ⅱ遺跡・間木戸Ⅴ遺跡発掘調査報告書

三陸沿岸道路建設事業関連遺跡発掘調査

序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、この地に住み生きてきた人々の痕跡であり、県民のみならず、国民的な遺産であることから、将来にわたって保存され、広く理解と活用がなされることが望まれます。

一方、豊かな県土づくりに公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団は、埋蔵文化財センター設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その記録を残し保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、三陸沿岸道路建設事業に関連して平成25年度に発掘調査された山田町間木戸Ⅱ遺跡・間木戸Ⅴ遺跡の調査成果をまとめたものです。間木戸Ⅱ遺跡では、縄文時代前期から中期の竪穴建物跡が密集して見つかったことや、多量に出土した同時期の遺物から当時の集落の一端が判明いたしました。また、7世紀末から8世紀初頭の竪穴建物跡からは、まとまった資料が出土しており該期資料を比較検討するうえで欠くことのできない一括資料を提示することができました。そして、間木戸Ⅴ遺跡では、製鉄関連遺構が見つかり、本県沿岸部の製鉄史に関する調査成果が得られました。

調査によって見つかった地域の宝は、東日本大震災で被災された山田町の皆さんによって発掘されたものです。本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながるると同時に、その保護や活用、学術研究など未来に希望を感じる拠り所として役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、調査を委託された国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所、ご助言を賜りました山田町教育委員会、ならびに調査にご協力いただいた山田地区の方々をはじめとする関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成27年3月

公益財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 菅野 洋樹

例 言

- 1 本書は岩手県下閉伊郡山田町に所在する間木戸Ⅱ遺跡および間木戸Ⅴ遺跡の発掘調査を記録した報告書である。
- 2 本遺跡の発掘調査は、三陸沿岸道路建設事業に伴い、記録保存を目的として実施した緊急発掘調査である。本調査は、国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所と岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課の協議を経て、国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所の委託を受けた公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが行った。
- 3 岩手県遺跡台帳における各遺跡の遺跡コード・調査略号は以下のとおりである。
【間木戸Ⅱ遺跡】LG94-0007・MGDⅡ-13
【間木戸Ⅴ遺跡】LG84-2098・MGDⅤ-13
- 4 各遺跡の野外調査実施期間・調査面積・室内整理期間、各担当者は以下のとおりである。
【間木戸Ⅱ遺跡】
〔野外調査〕平成25年4月9日～同7月31日／1,510㎡／佐藤あゆみ・佐藤剛・北村忠昭・阿部勝則
〔室内整理〕平成25年6月17日～12月13日／金子昭彦 平成25年12月16日～平成26年3月28日／佐藤あゆみ・佐藤剛・金子昭彦・阿部勝則
【間木戸Ⅴ遺跡】
〔野外調査〕平成25年4月9日～同6月30日／1,200㎡／北村忠昭・佐藤あゆみ・佐藤剛
〔室内整理〕平成25年12月16日～平成26年3月28日／佐藤あゆみ・佐藤剛・北村忠昭
- 5 本文の執筆は、国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所…Ⅰ「調査に至る経過」、金子昭彦…縄文～弥生土器、佐藤剛…土師器・須恵器、佐藤あゆみ…その他遺物・間木戸Ⅱ遺跡、北村忠昭…間木戸Ⅴ遺跡といったように主分担した。文責は文末に（ ）で示している。
- 6 本書中の平面座標値には、平面直角座標第Ⅹ系（世界測地系）を用いた。
- 7 基準点測量は平成25年4月に実施し、これを元に設定した区画杭を調査時に使用した。
- 8 基準点測量業務は釜石測量設計株式会社に委託した。
- 9 空中写真撮影は、東邦航空株式会社に委託した。
- 10 石器図化業務の一部（剥片石器実測図作成）は株式会社ラングに委託した。
- 11 各種試料の分析・鑑定等は下記の機関・個人に委託した。
花崗岩研究会（石質鑑定）、株式会社加速器分析研究所（放射性炭素年代測定）、株式会社パリオ・サーヴェイ（黒曜石産地同定）、JFEテクノロジー株式会社（鉄滓等分析）、斉藤慶史氏（動物遺存体同定）。
- 12 野外調査では下記の機関・個人の協力を得た。（敬称略）
岩手県教育委員会生涯学習文化課、国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所、山田町教育委員会生涯学習課、宮古市教育委員会、釜石市教育委員会、公益財団法人北海道埋蔵文化財センター、斉藤慶史（青森県教育庁文化財保護課）。
- 13 これまでに、調査成果の一部を現地説明会資料、発掘調査概報などで公表しているが、本書と記載事項が異なる場合はすべて本書が優先する。
- 14 調査で得られた一切の資料は、岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

目 次

I	調査に至る経過	1
II	遺跡の立地と環境	1
1	遺跡の位置とその環境	1
2	遺跡周辺の地形	2
3	周辺の遺跡	4
III	野外調査と室内整理	7
1	野外調査	7
(1)	グリッド設定	7
(2)	試掘・表土除去	7
(3)	遺構検出・精査	7
(4)	実測	8
(5)	写真撮影	8
2	室内調査	9
(1)	作業手順	9
(2)	遺構	9
(3)	遺物	9
3	凡例	9
(1)	遺構	9
(2)	遺物	10
(3)	凡例図	10
IV	間木戸Ⅱ遺跡の調査	11
1	概要	11
(1)	遺構数・遺物数	11
(2)	遺構名称	11
(3)	層序	11
2	遺構	15
(1)	竪穴建物跡	15
(2)	土坑	57
(3)	焼土・炉跡	60
(4)	集石遺構	65
(5)	柱穴	70
(6)	沢跡	70

3 遺物	73
(1) 縄文～弥生土器	73
(2) 土師器・須恵器	138
(3) 土製品	140
(4) 石器・石製品	140
(5) 鉄製品	160
(6) 鉄滓類	160
(7) 銭貨	160
(8) 動物遺存体	160
V 間木戸V遺跡の調査	175
1 概要	175
(1) 遺構数・遺物数	175
(2) 遺構名称	175
(3) 層序	175
2 遺構	177
(1) 竪穴建物跡	177
(2) 土坑	179
(3) 焼土遺構	183
(4) 埋設土器	183
(5) 工房跡	183
(6) 炭置き場跡	190
(7) 廃滓場	191
(8) 不明遺構	194
(9) 柱穴	194
(10) 包含層	194
3 遺物	197
(1) 縄文～弥生土器	197
(2) 土師器・須恵器	197
(3) 土製品	198
(4) 石器	198
(5) 鉄製品	204
(6) 羽口	204
(7) 炉壁	204
(8) 鉄滓類	205

VI 分析・鑑定	218
1 間木戸V遺跡、間木戸II遺跡における放射性炭素年代(AMS測定)	218
2 間木戸II・V遺跡出土黒曜石の産地同定	224
3 間木戸II・V遺跡出土鉄滓類の成分分析	229
4 間木戸II遺跡出土動物遺存体の同定	301
VII 総括	304
1 縄文時代	304
2 古代	306
(1) 土師器	306
(2) 鉄製品	307
(3) 竪穴建物跡について(26号竪穴建物跡を中心に)	310
(4) 製鉄関連遺構群について	312
3 近隣遺跡の中における間木戸II・V遺跡	314
報告書抄録	433

表目次

第1表 周辺遺跡一覧	6	第12表 新旧遺構名対応表	176
間木戸II遺跡		第13表 縄文～弥生土器観察表	199
第2表 新旧遺構名対応表	14	第14表 鉄滓出土量一覧(1)(2)	210
第3表 縄文～弥生土器観察表	74	第15表 土師器観察表	214
第4表 竪穴建物跡別縄文土器出土一覧表	162	第16表 土製品観察表	216
第5表 土師器・須恵器観察表	162	第17表 石器観察表	216
第6表 土製品観察表	163	第18表 鉄製品観察表	217
第7表 石器観察表	163	第19表 羽口観察表	217
第8表 石製品観察表	172	第20表 炉壁観察表	217
表9表 鉄製品観察表	172	総括	
第10表 銭貨観察表	172	第21表 縄文時代竪穴建物跡一覧表	305
第11表 鉄滓出土一覧表	173	第22表 古代の製鉄関連遺構検出遺跡一覧表	313
間木戸V遺跡			

図版目次

第1図 遺跡位置図・調査区と周辺の地形	2	間木戸II遺跡	
第2図 地形区分図	3	第6図 間木戸II遺跡調査区全体図・基本層序	12
第3図 周辺の遺跡	5	第7図 遺構配置図・北	13
第4図 グリッド配置図	8	第8図 遺構配置図・中央	13
第5図 凡例	10	第9図 遺構配置図・南	14

第10図	1号竪穴建物跡	15
第11図	2号竪穴建物跡	16
第12図	3号竪穴建物跡(1)	17
第13図	3号竪穴建物跡(2)	18
第14図	4号竪穴建物跡(1)	21
第15図	4号竪穴建物跡(2)	22
第16図	5号竪穴建物跡	23
第17図	6号竪穴建物跡	24
第18図	7号竪穴建物跡	25
第19図	8号竪穴建物跡	27
第20図	9号竪穴建物跡	28
第21図	10号竪穴建物跡	30
第22図	11号竪穴建物跡(1)	31
第23図	11号竪穴建物跡(2)	33
第24図	12号竪穴建物跡	34
第25図	13号竪穴建物跡・14号竪穴建物跡(1)	35
第26図	14号竪穴建物跡(2)	37
第27図	15号竪穴建物跡	38
第28図	16号竪穴建物跡	39
第29図	17号竪穴建物跡	41
第30図	18号竪穴建物跡	42
第31図	19号竪穴建物跡・20号竪穴建物跡	43
第32図	21号竪穴建物跡	45
第33図	22号竪穴建物跡・23号竪穴建物跡	46
第34図	24号竪穴建物跡	47
第35図	25号竪穴建物跡	48
第36図	26号竪穴建物跡(1)	50
第37図	26号竪穴建物跡(2)	51
第38図	27号竪穴建物跡	52
第39図	28号竪穴建物跡	53
第40図	29号竪穴建物跡	55
第41図	30号竪穴建物跡(1)	56
第42図	30号竪穴建物跡(2)	57
第43図	1～7号土坑	62
第44図	8～10・12・13号土坑	63
第45図	11号土坑	64
第46図	1～4号焼土遺構	66
第47図	5・6・10号焼土遺構	67

第48図	7～9号焼土遺構	68
第49図	11号焼土遺構・1号集石遺構	69
第50図	柱穴	71
第51図	沢跡	72
第52図～116図	縄文～弥生土器(1)～(65)	74
第117図～120図	土師器・須恵器(1)～(4)	141
第121図	土師器・須恵器(5)・土製品	145
第122図～132図	石器(1)～(11)	149
第133図	石製品・鉄製品・銭貨	161

間木戸V遺跡

第134図	間木戸V遺跡調査区全体図・基本層序	176
第135図	1・2号竪穴建物跡	178
第136図	3号竪穴建物跡(1)	180
第137図	3号竪穴建物跡(2)	181
第138図	1～4号土坑	184
第139図	5号土坑・1～3号焼土遺構	185
第140図	4号焼土遺構・1号埋設土器	186
第141図	1号工房跡(1)	188
第142図	1号工房跡(2)	189
第143図	2号工房跡	192
第144図	1号不明遺構(1)	193
第145図	1号不明遺構(2)・柱穴	193
第146図	1・2号炭置き場跡	195
第147図	腐洋場・包含層	196
第148図	縄文～弥生土器(1)	199
第149図	縄文～弥生土器(2)	200
第150図	土師器(1)	201
第151図	土師器(2)	202
第152図	土師器(3)	203
第153図	石器	206
第154図	土製品・鉄製品・羽口・炉壁	207
総括		
第155図	土師器	308
第156図	沢田II遺跡出土錫杖鉄製品	309
第157図	鉄器基礎分類図	310
第158図	26号竪穴建物跡出土遺物一覧	311
第159図	遺構の分布範囲	316

写真図版目次

間木戸Ⅱ遺跡 (遺構)

写真図版1	航空写真	319
写真図版2	調査区全景・基本層序	320
写真図版3	1号竪穴建物跡・28号竪穴建物跡	321
写真図版4	2号竪穴建物跡	322
写真図版5	3号竪穴建物跡(1)	323
写真図版6	3号竪穴建物跡(2)	324
写真図版7	4号竪穴建物跡(1)	325
写真図版8	4号竪穴建物跡(2)	326
写真図版9	5号竪穴建物跡	327
写真図版10	6号竪穴建物跡	328
写真図版11	7号竪穴建物跡	329
写真図版12	8号竪穴建物跡	330
写真図版13	9号竪穴建物跡	331
写真図版14	10号竪穴建物跡	332
写真図版15	11号竪穴建物跡	333
写真図版16	12号竪穴建物跡	334
写真図版17	13号竪穴建物跡	335
写真図版18	14号竪穴建物跡	336
写真図版19	15号竪穴建物跡	337
写真図版20	16号竪穴建物跡	338
写真図版21	17号竪穴建物跡	339
写真図版22	18号竪穴建物跡	340
写真図版23	19号竪穴建物跡	341
写真図版24	20号竪穴建物跡	342
写真図版25	21号竪穴建物跡	343
写真図版26	22号竪穴建物跡	344
写真図版27	23号竪穴建物跡	345
写真図版28	24号竪穴建物跡	346
写真図版29	25号竪穴建物跡	347
写真図版30	26号竪穴建物跡(1)	348
写真図版31	26号竪穴建物跡(2)	349
写真図版32	27号竪穴建物跡	350
写真図版33	29号竪穴建物跡	351
写真図版34	30号竪穴建物跡	352
写真図版35	1号～4号土坑	353
写真図版36	5号～8号土坑	354
写真図版37	9号～12号土坑	355

写真図版38	1号～4号焼土遺構	356
写真図版39	5号～7号b焼土遺構	357
写真図版40	7号c～9号焼土遺構	358
写真図版41	10号・11号焼土遺構	359
写真図版42	1号集石遺構、沢跡	360

間木戸Ⅴ遺跡 (遺構)

写真図版43	調査区全景・基本層序	361
写真図版44	1号竪穴建物跡	362
写真図版45	2号竪穴建物跡、1号焼土遺構	363
写真図版46	3号竪穴建物跡(1)	364
写真図版47	3号竪穴建物跡(2)、 1号・2号土坑	365
写真図版48	3号～5号土坑、2号焼土遺構	366
写真図版49	3号・4号焼土遺構、1号埋設土器、 1号廃滓場、包含層	367
写真図版50	1号工房跡(1)	368
写真図版51	1号工房跡(2)	369
写真図版52	2号工房跡(1)	370
写真図版53	2号工房跡(2)、1号炭置き場跡	371
写真図版54	2号炭置き場跡、1号不明遺構	372

間木戸Ⅱ遺跡(遺物)

写真図版55～95	縄文～弥生土器(1)～(41)	373
写真図版96	縄文～弥生土器(42)、 土師器・須恵器(1)	414
写真図版97～100	土師器・須恵器(2)～(5)	415
写真図版101	土製品、石製品、鉄製品、銭貨	419
写真図版102～108	石器(1)～(7)	420

間木戸Ⅴ遺跡(遺物)

写真図版109	縄文土器	427
写真図版110	土師器(1)	428
写真図版111	土師器(2)	429
写真図版112	石器	430
写真図版113	土製品、鉄製品、羽口(1)	431
写真図版114	羽口(2)、炉壁	432

I 調査に至る経過

間木戸Ⅱ・Ⅴ遺跡は、一般国道45号三陸沿岸道路事業（山田～宮古南）の事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

三陸沿岸道路は、宮城、岩手、青森の各県の太平洋沿岸を結ぶ延長359kmの自動車専用道路で、東日本大震災からの早期復興に向けたリーディングプロジェクトとして、平成23年度にこれまで事業化されていた区間も含め、全線事業化された復興道路である。

当該遺跡に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、平成24年11月9日付け国東整陸一調第1005号により、三陸国道事務所長から岩手県教育委員会生涯学習文化課長あてに試掘調査を依頼し、平成25年1月8日～9日にわたり試掘調査を行い、平成25年2月18日付け教生第1619号により、工事に先立って発掘調査が必要と回答がなされたものである。

その結果を踏まえて、岩手県教育委員会と協議を行い、平成25年4月1日付けで公益財団法人岩手県文化振興事業団と委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

(国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所)

II 遺跡の立地と環境

1 遺跡の位置とその環境（第1図）

間木戸Ⅱ遺跡・間木戸Ⅴ遺跡は、岩手県の沿岸部、岩手県下閉伊郡山田町山田に所在する。山田町は、三陸海岸のほぼ中央に位置し、山田湾と船越湾を有する。遺跡が位置する山田町山田地区は、カキ・ホタテなどの養殖が盛んな山田湾に面しており、湾に注ぐ関口川周辺は、宅地や農地として利用されている。また、関口川河口付近は東日本大震災による大津波で甚大なる被害を受けた地域でもあり、河口からおよそ1km離れたJR山田線は平成26年現在復旧の目処が立っていない状況である。両遺跡は、山田町役場から北へ1.5kmの山林にある。周辺には現在、仮設住宅が建ち並ぶ。緯度・経度は、間木戸Ⅱ遺跡で緯度39度28分57.936秒・経度141度57分13.052秒、間木戸Ⅴ遺跡は緯度39度29分04.977秒・経度141度57分16.670秒付近である。

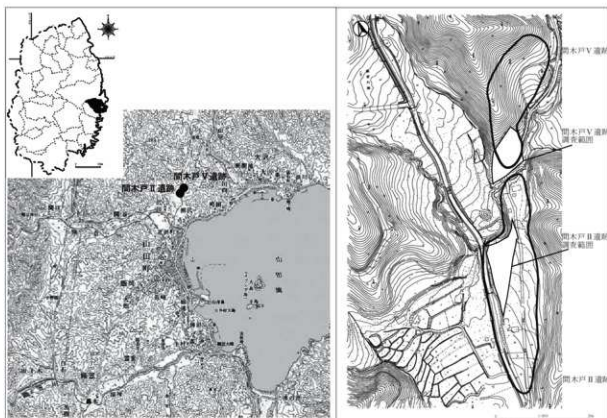
調査前は両遺跡とも山林で、栗園もしくは「椎茸のほだ木」の伏せ込み作業場となっていたが、間木戸Ⅱ遺跡では、植生された杉の根が調査区を埋め尽くしている状況であった。また、遺跡北側には間木戸一里塚が所在し、西側は町道によって削平されていた。

町道は、江戸時代に主要道路として使用されていた部分であり、これに付随する間木戸一里塚は、寛永20年（1643）に、宮古大樋間で完成した9対の一里塚のひとつである。当時も周辺には民家等が少なく、今回の調査では寛永通宝が2枚出土したが江戸時代に該当する遺構は検出していない。

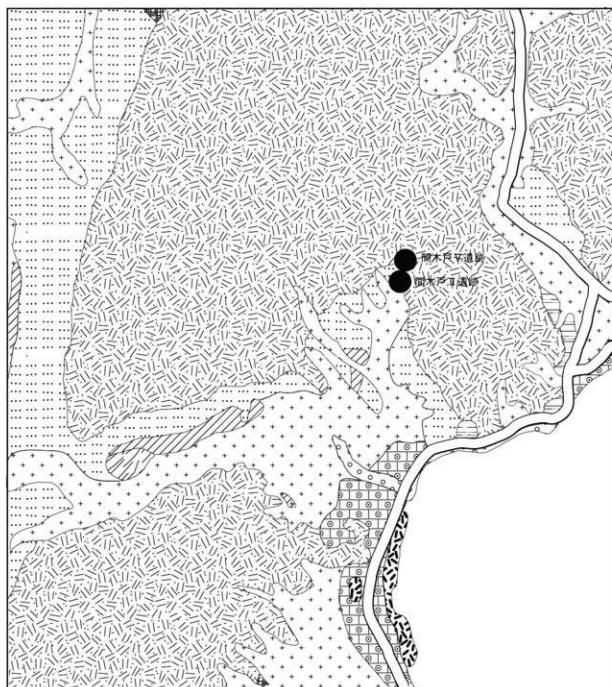
両遺跡とも遺物を地表面で採取でき、間木戸Ⅴ遺跡周辺では、鉄滓が散見されていた。近隣の住民からは、「このあたりでは鉄滓がたくさん落ちている。」と度々耳にした。

2 遺跡周辺の地形 (第2図・写真図版1)

山田町は総面積263.45km²のうち、山林が236.04km²を占める。西側には北上高地、そこからは丘陵地が連なり、リアス式海岸が太平洋に面している。山田湾に面する低地は、北上高地に連なる標高807mの山母森に水源をもつ関口川により形成された沖積平野である。河口付近で合流する関木戸川は、関口川の左支川で、この関木戸川により開析された谷部に両遺跡は所在する。周辺は、風化花崗岩層で構成された標高150m以下の小起伏山地で、関口川周辺の平野部より北側に入り込むため、両遺跡は山田湾を望むことはできない場所にある。両遺跡は、関木戸V遺跡北側の痩せ尾根から南面へ続く斜面に位置し、北側上流より南西へ流下する沢を境に、北が関木戸V遺跡、南が関木戸II遺跡に分けられる。この沢は関木戸II遺跡北西で関木戸川と合流する。関木戸II遺跡は、それらによって形成された扇状地状の緩斜面に立地する。標高は14~18mである。西側は道路により削平を受けていた。関木戸V遺跡は、北側は尾根から続く急斜面、中央付近から南側は沢により形成された段丘状の緩斜面に立地し、中央付近は調査区を横断する作業道によって削平を受けていた。標高は、23~30mである。関口川周辺の平野部よりおよそ12~27m標高が高い。より標高の高い関木戸V遺跡では、尾根の先端部で風化した花崗岩が露頭している部分もあり、表土を数cm掘るとマサ土化した土壌が確認でき表土の発達が少ない。この風化花崗岩には鉄を作るのに良質な砂鉄が多く含まれている。



第1図 遺跡位置図・調査区と周辺の地形



第2図 地形区分図

3 周辺の遺跡（第3図・第1表）

山田町では491の遺跡が岩手県遺跡台帳に登録されている（平成24年12月現在）。町内の遺跡は低地に確認されることは少なく、小起伏山地もしくはその縁辺に確認されているものが多い。そのうち、本遺跡周辺の遺跡を抜き出した107遺跡について、第3図および、第1表に記した。その中から縄文時代、古代、製鉄関連の遺跡について概要を述べることにする。

縄文時代に該当する遺跡は沢田Ⅰ、大畑Ⅰ遺跡等があげられる。沢田Ⅰ遺跡は、縄文時代早期から平安時代の遺構が重複する複合遺跡である。沢田Ⅰ遺跡から出土した早期の土器片は、現在のところこの時期に人々が山田町へ住み始めた証拠となっている。遺跡の主体となる時期は縄文時代前期と中期で、前期の遺構の埋土に十和田中糠火山灰が堆積する大木2a式以前の竪穴建物跡や、前期に帰属するロングハウスなどの大形建物跡が複数検出され、中期末葉まで竪穴建物跡がみられることから集落の継続が確認されている。大畑Ⅰ遺跡では、大木10式を主体とした集落が確認され、石囲炉・土器埋設炉・複式炉等様々な形態の炉をもつ竪穴建物跡や多数の土坑について報告されている。

古代に該当する遺跡についてであるが、房の沢Ⅳ遺跡、大畑Ⅱ遺跡等があげられる。房の沢Ⅳ遺跡は、間木戸Ⅱ遺跡から直線距離で600mに位置し、平成8・9年度（第1～3次調査）に調査が行われ、7世紀から8世紀にかけて継続して造られた古墳群が検出されている。古墳は山田湾を望める尾根の斜面地に造営され、埋葬主体部からは、鉄鏃・麻手刀・錫製鋼などが出土している。とりわけ土器と一緒に埋葬している例が多い特徴的である。同時期に属する集落が周辺でまだ確認されていないが、今回の間木戸Ⅱ遺跡で検出された竪穴建物跡が該当する可能性がある。大畑Ⅱ遺跡は、重複しない平安時代の竪穴建物跡5棟が検出されている。出土している赤焼き土器の坏の特徴から10世紀前半に位置付けており、近接して検出された鍛冶炉や工房跡と併せ、10世紀の鉄生産に従事した人々が住んでいた集落として報告されている。

古代製鉄関連の遺跡では、後山Ⅰ、上村遺跡等があげられる。山田町は本県の中でも製鉄関連遺構の検出が特に多い地域である。平安時代後半の製鉄関連遺構が調査された後山Ⅰ遺跡では、時期差が認められる7棟の工房跡、製鉄炉を含む鉄生産炉が29基、15基の炭窯も近接して検出されている。また、鍛冶工房を再利用したと考えられる竪穴建物跡のカマドには、芯材に鉄滓が設置されていた。上村遺跡では、奈良時代に帰属する製鉄炉8基、鍛冶炉2基、竪穴建物跡1棟が検出された。鉗子など鍛冶工程で使われていた道具類のほか、約2.5トンの鉄滓が出土している。両遺跡とも、丘陵地の南向き斜面で鉄生産遺構が検出され、原料である砂鉄を採取できる風化花崗岩層上に立地している。加えて、山林に囲まれており燃料となる木炭の原料である木材を容易に入手できる環境にあった。山田町内で確認されている製鉄関連遺跡は、概ねこのような立地状況にあてはまる。

参考文献

（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

1994『上村遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第202集。

1995『大畑Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第218集。

1997『沢田Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第268集。

1998『房の沢Ⅳ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第287集。

2000『沢田Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第318集。

2001『大畑Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第342集。

山田町教育委員会2002『細浦Ⅳ・後山Ⅰ遺跡発掘調査報告書』山田町教育委員会埋蔵文化財調査報告書第9集。

Ⅲ 野外調査と室内整理

1 野外調査

(1) グリッド設定(第4図)

検出遺構と出土遺物の詳細な記録に座標値を使用するため、両遺跡を網羅するグリッドを設定した。X=-56600、Y=96300を原点とし、南東に向かい100m×100mの大グリッドを設定した。さらにその正方形の各辺を25等分して、4×4mの小グリッドとした。よって、グリッドの表示は、「II A 25y」のようにになっている。

また、便宜上、平面図の作成で小グリッドを4つに分け2×2mのグリッドも使用している。現場調査時には使用していない呼称であるが、本報告書内では「II A 25y-SE」といったような表記にしている。グリッド凡例は4図の通りである。

調査区内には、基準杭とグリッド割付用杭を業務委託により打設した。

(2) 試掘・表土除去

調査開始時、調査区域は伐採根が密集していたため、土層の堆積状況や遺構の検出面を確認するため任意に試掘トレンチを設定し、人力で掘削を行った。

これにより問木戸II遺跡では、当初想定していた遺構の検出面より30～50cmほど上に黒褐色土が(基本層序Ⅲb層)堆積すること、そこから縄文土器が多く出土することがわかった。この黒褐色土は、調査区域全体に厚く堆積していたが、その細分が困難であったため、遺構検出面を再検討することとなった。

バックホーとキャリアダンプを使つての表土除去は、調査区域南部から行った。表土除去中も遺物が多量に出土する状況に反して、それに伴う遺構プランは全く見えてこず、終に調査区域中央付近で、これまでと異なる古代の遺物が伴う方形プランを確認できた。

問木戸V遺跡も、バックホーを使い標高の高い北側急斜面地から表土除去を行った。急斜面地は表土直下でマサ土(地山)が検出されたが、中腹からは、マサ土より上位の暗褐色土(基本層序Ⅲ層)で遺構が検出された。

(3) 遺構検出・精査

遺構検出は、表土除去の後、鋤簾(じょれん)等を用いて行った。縄文時代の遺構が存在すると思われる区域は、全て黒褐色土(基本層序Ⅲb層)に覆われていた。真っ黒な土は縄文の遺物包含層であり、平面的に遺構のプランを把握するには時間を要すると判断し、古代の遺構精査に着手すると併行して、設定したグリッドに準じ包含層の掘り下げと検出を進めた。そのため、平面的に検出できた遺構は少なく、平面が壊された状態になったものが多い。

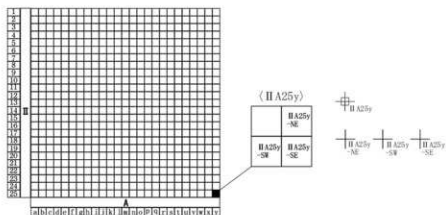
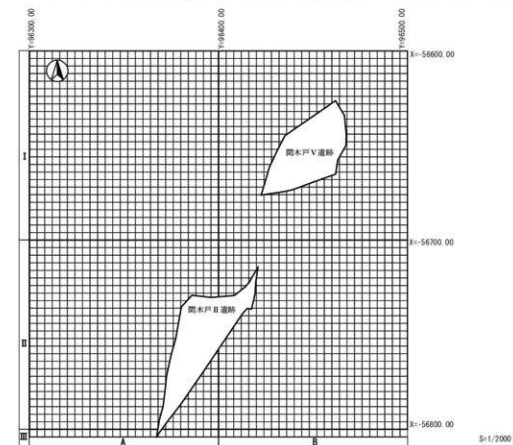
その作業を進めてプランを把握できたものについては、以下のような精査方法をとった。遺構の規模に応じて2分法・4分法を使い分け、土層断面を観察しながら埋土を掘り進めた。遺構の重複が認められた場合、平面観察やサブトレンチで新旧関係の把握に努めた。遺物は、包含層掘り下げ時にはグリッド名、遺構と判断した時点で遺構名を付しそれぞれ出土層位を記録し取り上げた。

(4) 実 測

遺構の平面図は、電子平板を使用し、デジタルデータとして記録した。断面図は水平に設定した水糸を基準に遺構の種類や規模などを考慮し20分の1、10分の1などの縮尺で手実測・作図した。遺物出土状況等の微細図は、写真撮影後、画像補正を行いデジタル作図した。

(5) 写 真 撮 影

遺跡・遺構の記録写真には、デジタル一眼レフカメラを基本に、6×7cm判カメラ（モノクロ）と、6×9判カメラ（モノクロ）も併用し撮影した。その際に、所定の撮影カードを用い記入と写し込み



第4図 グリッド配置図

を行い、写真整理に利用した。調査終了時には小型飛行機による空中写真の撮影を行った。

2 室内調査

(1) 作業手順

出土遺物は、野外作業と並行して調査事務所内と間木戸V遺跡内で洗浄を行い、それ以外については、6月より室内において遺物洗浄を始めた。その後、接合・復元作業・実測を行い、拓影作成・トレースの作業と併行して遺物撮影・観察表作成・図版作成を行っている。遺構は、デジタルトレースをした断面図と、現場時に電子平板を用いデータ化した平面図を用い遺構図版を作成した。それらをふまえて、原稿執筆・遺構図版作成・遺構写真図版作成を行った。

(2) 遺構

電子平板で作図した遺構平面図と、デジタルトレースを行った遺構断面図は、デジタルデータとして描画ツールソフトを使用し編集と割付を行った。写真はデジタル一眼レフで撮影したRAWデータをビットマップ画像編集ソフトでレンズ補正後、JPEGに変換し写真図版として掲載している。なお、レンズ補正は、カメラレンズの特性で生じる歪みに対して行っている。

(3) 遺物

出土土器は縄文土器と土師器、須恵器に選別し、袋番号で管理し重量計算ののち選別したものに注記を行った。実測は器形の復元が可能なものから順次行い、拓本も併用している。また貼り付け等で拓本が困難なものについては、平面的な実測も行った。石器については、分類を行い遺構内出土を中心に図化の選別を行った。なお、剥片石器の図化は、(株)ラングに業務委託をした。鉄製品については、おおまかな錆を除去した後、X線撮影を行い実測した。鉄製品の一部は、岩手県立博物館へ保存処理に委託した。羽口・炉壁・鉄滓は、分類を行い、それぞれ袋番号で管理し重量計測を行った。羽口と炉壁は、器形の特徴が把握できるもののみ実測し、それ以外は重量表や観察表への記載にとどめた。

3 凡例

(1) 遺構

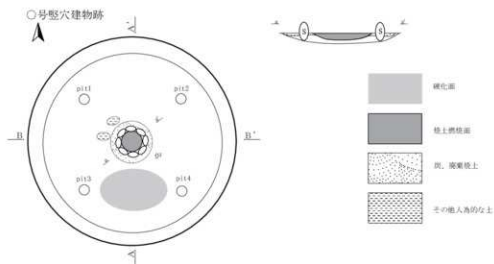
- い. 遺構実測図の縮尺は、堅穴建物跡、土坑が1:50、炉跡断面、焼土遺構が1:20を基本とした。図版ごとにスケール及び縮尺を付した。
- ろ. 平面図の推定は破片線で示し、重複する遺構については切り合っているものを表示し、不透明度を下げて示した。
- は. 土層の色調観察には、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」を使用した。
- に. 図中の「P」は土器、「S」は石、「I」は鉄製品、「T」はトレンチ、「BT」岩手県教育委員会生涯学習文化課が行った試掘トレンチを略号で示した。
- ほ. 図中で表現している網掛けやスクリーントーンの類別は、下記の凡例図を参照していただきたい。

(2) 遺物

- い、遺物実測図の縮尺は、縄文土器・土師器・須恵器・礫石器、羽口、炉壁が1:3、剥片石器が2:3、土製品・石製品・鉄製品は1:2を基本とした。大きさにより異なる縮尺にしているものもあり、各図にスケールおよび縮尺を付した。
- ろ、遺物の計測位置および、スクリーントーンの主な用例は凡例図のとおりである。観察表の計測値は、残存値の場合()・推定値の場合〔 〕で表記した。
- は、本書で記載されているコンテナのサイズは、大コンテナ42×32×30cm、中コンテナ42×32×20cm、小コンテナ42×32×10cmである。

(3) 凡例図

- 遺構図 -

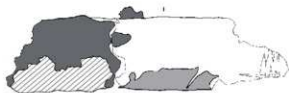


- 遺物図 -

土師器



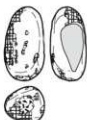
羽口



剥片石器



礫石器



第5図 凡例

IV 問木戸Ⅱ遺跡の調査

1 概 要

(1) 遺構数・遺物数

検出遺構は、竪穴建物跡30棟(縄文25、古代5)、焼土・灰跡11基(縄文・古代)、土坑13基(縄文)、柱穴19個(縄文・古代)、集石遺構1基(縄文)、遺物包含層1,000㎡(縄文)、出土遺物は、土器(縄文・古代)大コンテナ54箱、石器(縄文・古代)大コンテナ4箱、土製品・石製品などである。遺構の位置は第6～9図の通りである。

(2) 遺 構 名 称

野外調査で使用した仮名称は、報告書掲載にあたり、SIOを○号竪穴建物跡、SK△を△号土坑といったように変更している。詳細は、第2表で対比していただきたい。

(3) 層 序

調査区域の中央部・北部と、南部では土層堆積に違いが確認できた。中央部と北部では基本層序1が該当し、南部は基本層序2が該当する。基本層序の観察図は第6図の通りである。なお、調査区を横断するように中央部で土層観察を行っているが、後述する沢跡の項目で提示する。

I. 10YR4/2 灰黄褐色。粘性弱。締まりやや疎。シャリシャリ。調査区域北部では南から続く表土の上に盛土がされている。

II. 10YR2/1 黒色。粘性やや強。締まりやや疎。草根中量。のっぺり。(古代遺構埋土主体)

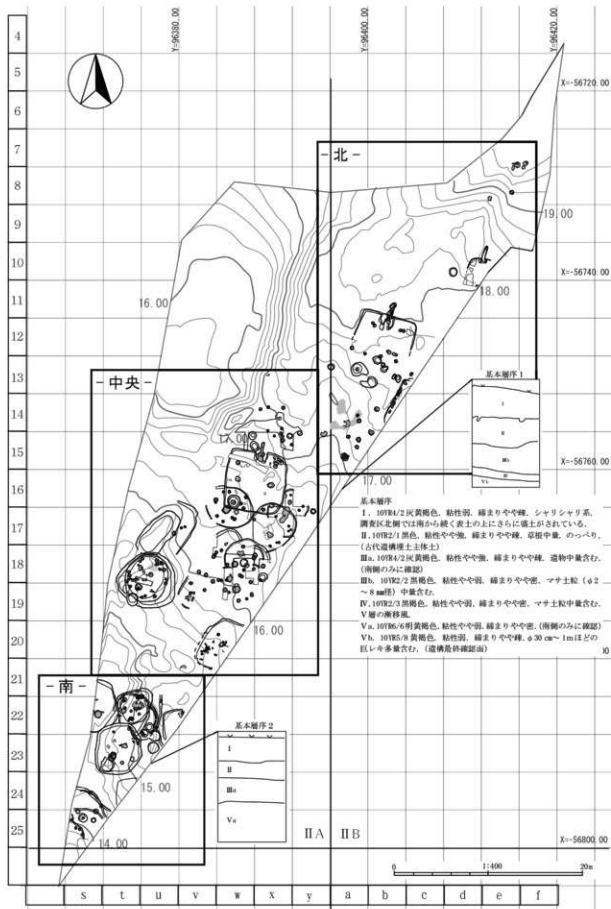
III a. 10YR4/2 灰黄褐色。粘性やや強。締まりやや疎。遺物中量含む。(南部のみに確認)

III b. 10YR2/2 黒褐色。粘性やや弱。締まりやや密。マサ土粒(φ2～8mm径)中量含む。

IV. 10YR2/3 黒褐色。粘性やや弱。締まりやや密。マサ土粒中量含む。V層の漸移層。

V a. 10YR6/6 明黄褐色。粘性やや弱。締まりやや密。(南部のみに確認)

V b. 10YR5/8 黄褐色。粘性弱。締まりやや疎。φ30cm～1mほどの巨礫を多量含む。(遺構最終検出面)

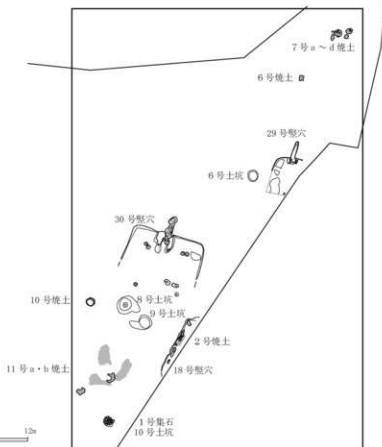


第6図 間木戸Ⅱ遺跡調査区全体図・基本層序

調査区・北



0 1:300 12m

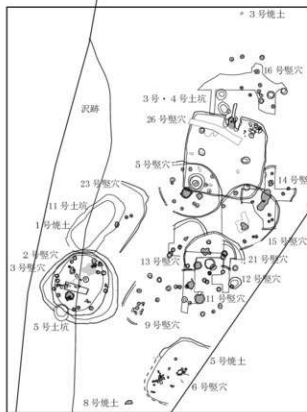


第7図 遺構配置図・北

調査区・中央

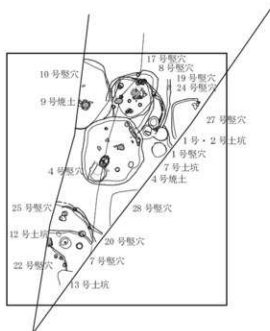


0 1:300 12m



第8図 遺構配置図・中央

調査区・南



第9図 遺構配置図・南

第2表 新旧遺構名対応表

報告書掲載名	現場使用名	報告書掲載名	現場使用名	報告書掲載名	現場使用名
1号壑穴建物跡	SI03	1号土坑	SK01	1号焼土遺構・0跡	SN01
2号壑穴建物跡	SI05	2号土坑	SK02	2号焼土遺構・0跡	SN02
3号壑穴建物跡	SI07	3号土坑	SK03	3号焼土遺構・0跡	SN03
4号壑穴建物跡	SI08	4号土坑	SK04	4号焼土遺構・0跡	SN04
5号壑穴建物跡	SI09	5号土坑	SK05	5号焼土遺構・0跡	SN05
6号壑穴建物跡	SI10	6号土坑	SK06	6号焼土遺構・0跡	SN06
7号壑穴建物跡	SI11	7号土坑	SK07	7号a焼土遺構・0跡	SN07
8号壑穴建物跡	SI12	8号土坑	SK08	7号b焼土遺構・0跡	SN08
9号壑穴建物跡	SI13	9号土坑	SK09	7号c焼土遺構・0跡	SN09
10号壑穴建物跡	SI14	10号土坑	SK10	7号d焼土遺構・0跡	SN10
11号壑穴建物跡	SI16	11号土坑	SK11	8号焼土遺構・0跡	SN11
12号壑穴建物跡	SI17	12号土坑	SK13	9号焼土遺構・0跡	SN12
13号壑穴建物跡	SI18			10号焼土遺構・0跡	SI25
14号壑穴建物跡	SI19			11号焼土遺構・0跡	SI26
15号壑穴建物跡	SI20			1号集石遺構	SI01
16号壑穴建物跡	SI21				
17号壑穴建物跡	SI23				
18号壑穴建物跡	SI27				
19号壑穴建物跡	SI28				
20号壑穴建物跡	SI29				
21号壑穴建物跡	SI30				
22号壑穴建物跡	SI31				
23号壑穴建物跡	SI32				
24号壑穴建物跡	SI33				
25号壑穴建物跡	SI34				
26号壑穴建物跡	SI01				
27号壑穴建物跡	SI02				
28号壑穴建物跡	SI04				
29号壑穴建物跡	SI15				
30号壑穴建物跡	SI22				

2 遺 構

(1) 竪穴建物跡

1号竪穴建物跡 (第10図、写真図版3)

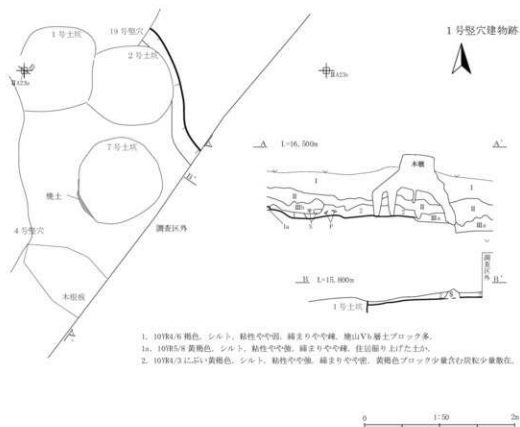
〔位置・検出状況〕調査区南、ⅡA22a付近に位置する。遺構検出作業時に木根と絡んで、大形の縄文土器片が検出された。この付近には、褐色の不整形プランが広がっており、この時点で遺構が重複していることが想定できた。そのため、掘り下げを行いながら観察したところ、重複する竪穴建物として検出した。〔規模・形状〕重複する遺構や木根により消失している部分が多く全容は不明である。〔埋土・堆積状況〕Vb層を掘り込んで作られている。〔壁・床面〕緩やかに外傾する。床面は若干凹凸があるが概ね平坦である。〔炉〕7号土坑に切られる形で、焼土範囲を検出している。

〔柱穴・付属施設〕検出されなかった。〔重複遺構〕4号、20号竪穴、1号・2号・7号土坑に切られる。〔出土遺物〕床面から石鏃S003が出土している。その他、石斧S217、敲磨器S351。〔帰属時期〕遺構の重複関係から、縄文時代中期中葉以前に帰属すると考えられる。

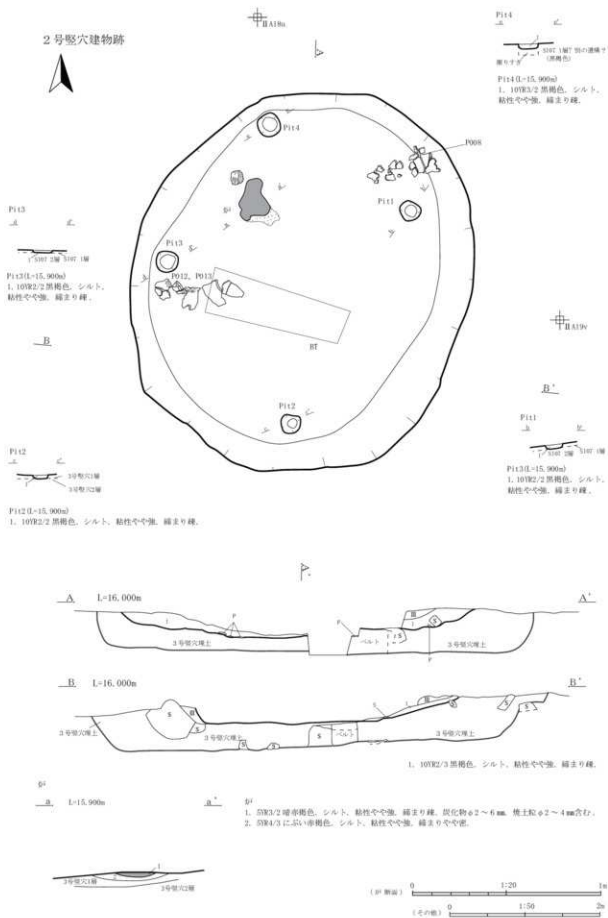
(佐藤 あゆみ)

2号竪穴建物跡 (第11図、写真図版4)

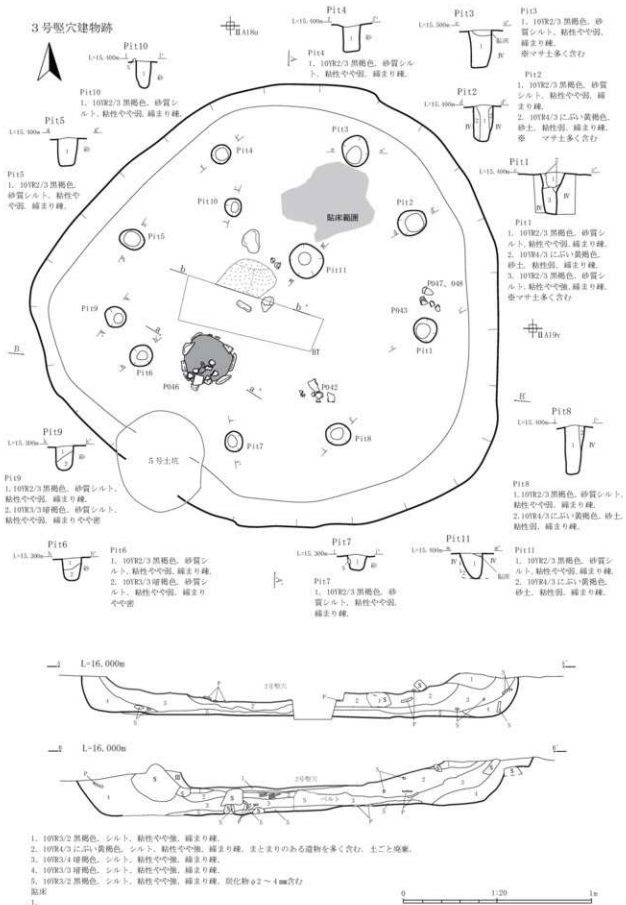
〔位置・検出状況〕調査区中央、ⅡA19u付近に位置する。Ⅲ層下位の3号竪穴を精査中に暗褐色シルトの広がりを検出した。掘り下げたところ、3号竪穴の1層上面で、浅く落ち込む床面と炉、柱穴、遺物の広がりを確認した。〔規模・形状〕 5.0×4.4 mで、楕円形である。〔埋土・堆積状況〕堆積土は自然堆積で、暗褐色シルトを主体とする。中央部分の埋土は重機による木根の抜取りの際に欠



第10図 1号竪穴建物跡



第11図 2号竪穴建物跡

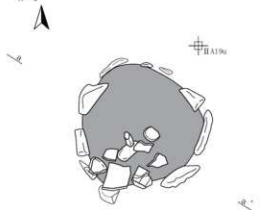


第12図 3号竪穴建物跡 (1)

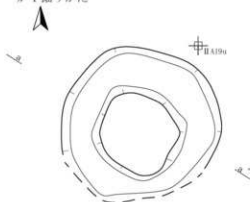
2 遺構

3号竪穴建物跡

炉1



炉1掘りかた

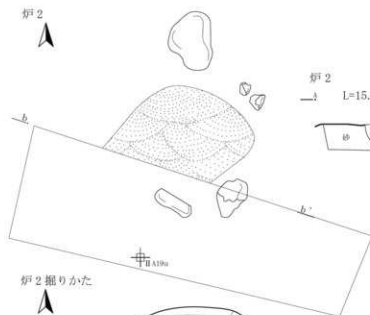


炉1



1. 5YR2/3 暗赤褐色。砂質シルト。粘性やや弱。締まり硬。炭化物φ5~8mm 焼土粒φ1~5mm 含む。
2. 5YR3/6 暗赤褐色。砂質シルト。粘性やや弱。締まり硬。炭化物φ2~4mm 少量含む。焼土粒φ1~5mm 多く含む。
3. 5YR4/8 赤褐色。砂質シルト。粘性やや弱。締まり硬。
4. 10YR3/3 暗褐色。砂質シルト。粘性やや弱。締まり硬。

炉2

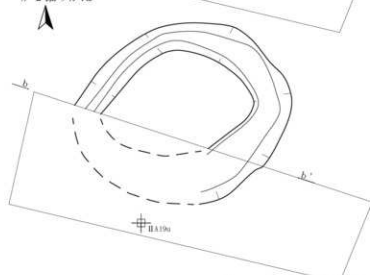


炉2



1. 10YR3/3 暗褐色。砂質シルト。粘性やや弱。締まり硬。締まりは4より弱い。
2. 5YR2/4 暗赤褐色。砂質シルト。粘性やや弱。締まり硬。
3. 5YR4/6 赤褐色。砂質シルト。粘性やや弱。締まり硬。
4. 10YR3/4 暗褐色。砂質シルト。粘性やや弱。締まり硬。

炉2掘りかた



0 1:20 1m

第13図 3号竪穴建物跡(2)

失した。床面は3号竪穴の1層上面となっており、浅く落ち込んでいることから、3号竪穴の竈みを利用した住居跡である。〔壁・床面〕壁はなだらかに立ち上がり、床面はボウル状に浅く落ち込む。

〔炉〕炉1は不整形な地床炉である。中央からやや北西側に片寄っている。〔柱穴〕Pit 1～4の4本柱である。Pit 1～3は3号竪穴の2層を底面とし、Pit 4は3号竪穴の3層を底面とする。すべて浅いものである。〔付属施設〕検出しなかった。〔重複関係〕5号土坑、3号竪穴より新しい。〔出土遺物〕床面から縄文土器P008～013、敲磨器S235が出土した。埋土下位からボタン状土製品G002、その他石匙S140、石鏡S176、石核S208、石斧S227、敲磨器S236等。〔帰属時期〕床面から出土した遺物と遺構の重複関係から縄文時代中期中葉に帰属する。

(佐藤 剛)

3号竪穴建物跡（第12図・13図、写真図版5・6）

〔位置・検出状況〕調査区中央、II A19u付近に位置する。生文課の試掘の際に、トレンチにより暗褐色土を主体とする落ち込みと焼土（石囲炉2）を検出しており、住居跡を想定し着手した。周囲のⅢ層下位を精査したところ、暗褐色シルトの広がりを検出した。掘り下げたところ、平坦な床面と石囲炉、柱穴、遺物の広がりを確認した。〔規模・形状〕6.3×5.9mで、やや潰れた六角形である。形状は、柱穴の配置に対して南西側と北東側が張り出している。南西側の壁は砂質土のため、北東側は砂状の風化花崗岩のため、使用時または廃棄時に崩落があった可能性がある。このことから本来の形状は楕円形であった可能性がある。〔埋土・堆積状況〕堆積土は自然堆積で、暗褐色シルトを主体とする。西側の半分は砂を主体とする河川堆積層を掘り込んで壁と床面を構築しているため、埋土はやや砂質が強い。〔壁・床面〕壁はやや急角度に立ち上がり、床面はほぼ平坦である。北側の一部では、暗褐色土に褐色土がブロック状に混じる貼床を検出した。〔炉〕石囲炉1と2は両者とも円形の石囲炉である。石囲炉2は石組が抜き取られていることから、石囲炉2が古く、石囲炉1が新しいと考える。石囲炉1の石組は円形に溝を掘り込んだ部分に礫の長辺を下にして縦に9個配置し構築している。石組は南側の一部で途切れているように見えるが、今回の調査におけるトレンチ調査の際に、礫を一部破損させてしまったためであり、本来は一周していた。礫はすべて扁平な中角礫で、石質は風化花崗岩が8点である。石囲炉2の石組も同様に円形の溝状に掘り込んだ部分に礫を配置し構築している。石組は南側の1点のみ構築時の状態で残され、それ以外に残っているものは破損しており、その他は抜き取っていると考える。北側の礫は溝の中にはなく、掘り込みも見られないことから、自然の状態と考えるが、石組の一部として利用していた可能性がある。礫はすべて扁平な中角礫で、石質はすべて風化花崗岩である。〔柱穴〕主柱穴はPit 1～8・11で、Pit 1～8を周囲に配置し、中央にPit 11を配置する。Pit 9・10は支柱穴または建替えと考える。〔付属施設〕Pit 11〔重複関係〕23号竪穴と11号土坑より新しく、2号竪穴と5号土坑より古い。〔出土遺物〕床面から縄文土器P042・043・045～048、石鏡S006、石斧S218・219、敲磨器S238～240等が出土している。その他石鏡S007～009、石匙S119、スクレイパーS152、石鏡S177、敲磨器S241～250、砥石S353、台石S368、棒状の石製品G020等。〔帰属時期〕遺構の重複関係と床面から出土した遺物から縄文時代中期中葉に帰属する。

(佐藤 剛)

4号竪穴建物跡（第14図・15図、写真図版7・8）

〔位置・検出状況〕調査区南、II A23tに位置する。1号竪穴建物跡同様に、褐色シルトの広がりを確認し掘り下げを行い、石組みの炉跡を検出した。〔規模・形状〕5.9×5.2mの楕円形を呈する。床面までの残存深度は59cm前後である。〔埋土・堆積状況〕床面直上にはマサ土を含んだ灰黄褐色シル

トが厚く堆積する。東側ではこの堆積土より黒味が強くなる。炉付近では焼土粒を含むのが確認できる。東壁際には、崩落土として褐色シルトが堆積するが、北側は、重複する遺構の埋土が混じり黒褐色シルトの堆積が認められる。埋土中位～上位には多量の縄文土器を包含している。埋土中位に認められる褐色シルトは調査区南側にのみ確認できるⅢa層に類似する。〔壁・床面〕外傾気味に立ち上がる。西壁は、地山と堆積土が近似しており、床面の締まりをたよりに掘り広げ締まりの無くなった部分をその範囲としている。床面は、Vb層に似るマサ土が硬く締まり、概ね平坦である。〔炉〕検出時に確認された石組みは当初石囲炉を想定していたが、南側に広がる不明瞭なシミにサブトレッチを入れたところ、炭や焼土粒が広がる締まりのある面を確認し前庭部をもつ複式炉と判明した。複式炉は南壁際に設けられる。床面中央側に石囲部が検出され、これに付属して南壁際に掘り窪められた前庭部を検出した。石囲部は、95×75cmのカマボコ形で、磨り石や、同様の規模の花崗岩を用い、二重の石組みが配されている。前庭部に面する部分には、30cm前後の巨礫が間仕切りとなっている。燃焼面は床面より8cm低くなり、カリカリに焼成された焼土が石組部内全体に厚く堆積していた。石組み内燃焼面の前庭部よりには、略完形の縄文土器深鉢が潰れて検出された。前庭部は床面から深さ23cmに掘り窪められ、底面には焼土や炭が散在していた。掘りかたは、石組み部全体を対象としている。複式炉のほかにも、床面で焼土範囲を2カ所検出している。いずれも掘りかたはない。〔柱穴〕壁際に4基検出した。形状から、pit1に対応する柱穴が存在した可能性があるが検出できていない。〔付属遺構〕なし。〔重複遺構〕1号・8号・10号・25号竪穴建物跡、1号土坑を切る。〔出土遺物〕床面及び炉から縄文土器P131～141、石鏃S010・011、敲磨器S251・252等が出土している。その他、石鏃S012～015、スクレイパーS153・168、敲磨器S253～255、砥石S354、軽石製の浮子G031等。〔帰属時期〕遺構の重複関係や竪穴の構造、床面の出土遺物から縄文時代中期中葉～後葉に帰属する。

(佐藤 あゆみ)

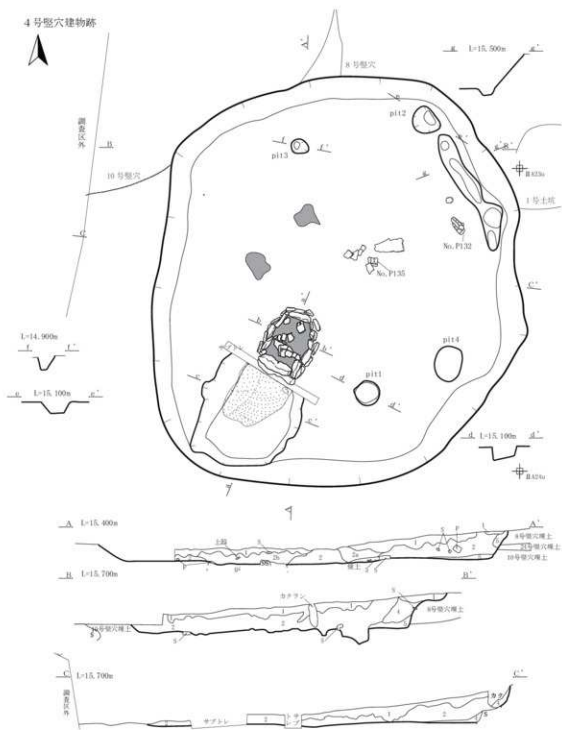
5号竪穴建物跡 (第16図、写真図版9)

〔位置・検出状況〕調査区中央、ⅡA17w付近に位置する。Ⅲ層下位を精査中に暗褐色シルトの落ち込みを検出した。掘り下げたところ、平坦な床面と複式炉、炉を確認した。柱穴は床面では検出できず、すべてⅣ層上面まで掘り下げて検出した。〔規模・形状〕5.0×4.3mで、円形である。〔埋土・堆積状況〕堆積土は自然堆積で、暗褐色シルトを主体とする〔壁・床面〕壁はやや急角度に立ち上がり、床面はほぼ平坦である。〔炉〕複式炉1は長方形の石囲炉と円形の浅い皿状の前庭部が組み合うものである。中央からやや南に片寄っている。石組みは隅丸長方形に溝を掘り込んだ部分に礫を13個配置し構築している。礫はすべて扁平な中角礫で、石質は風化花崗岩が11点、砂岩が2点である。炉1は不整形な地床炉である。複式炉1の南東側に位置する。〔柱穴〕主柱穴はPit2・4～6・11の5本柱である。Pit3・12は支柱穴である。Pit1・7～10は建替えと考える。〔付属施設〕検出しなかった。〔重複関係〕なし。〔出土遺物〕炉から縄文土器P164～166・168、石鏃S016・017、敲磨器S256・257等が出土している。その他、石鏃S018等。〔帰属時期〕出土遺物から縄文時代中期中葉に帰属すると考えられる。

(佐藤 剛)

6号竪穴建物跡 (第17図、写真図版10)

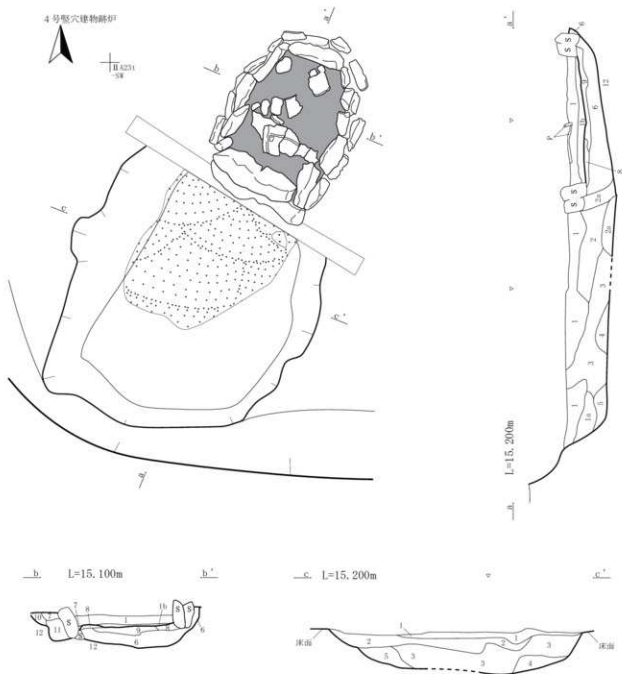
〔位置・検出状況〕調査区中央、ⅡA20w付近に位置する。Ⅲ層下位を精査中に暗褐色シルトの落ち込みを検出した。調査区の境の壁面を精査したところ、Ⅲ層上面からの掘り込みと炉、平坦な床面を検出した。掘り下げたところ、平坦な床面と柱穴、遺物の広がりを確認した。南西側の壁は先に掘り



1. 10182/1 黒褐色。シルト、粘性やや弱。綿まりやや弱。マサ土粒少量含む。
2. 10184/2 灰黄褐色。シルト、粘性やや弱。綿まりやや弱。マサ土中量含む。遺物多量含む。
- 2a. 2層に連続強くなる。
3. 2層に粘土粒少量散在する。
3. 50cm以下 緑赤褐色。シルト。下位の粘土による影響で粘土混じる層。
4. 10184/4 褐色。砂質シルト。粘性やや弱。綿まりやや弱。マサ土粒中量含む。
5. 10182/3 黒褐色。シルト、粘性やや弱。綿まりやや弱。炭粒少量。黄褐色砂質シルト混じる。マサ土粒少量含む。

0 1:50 2m

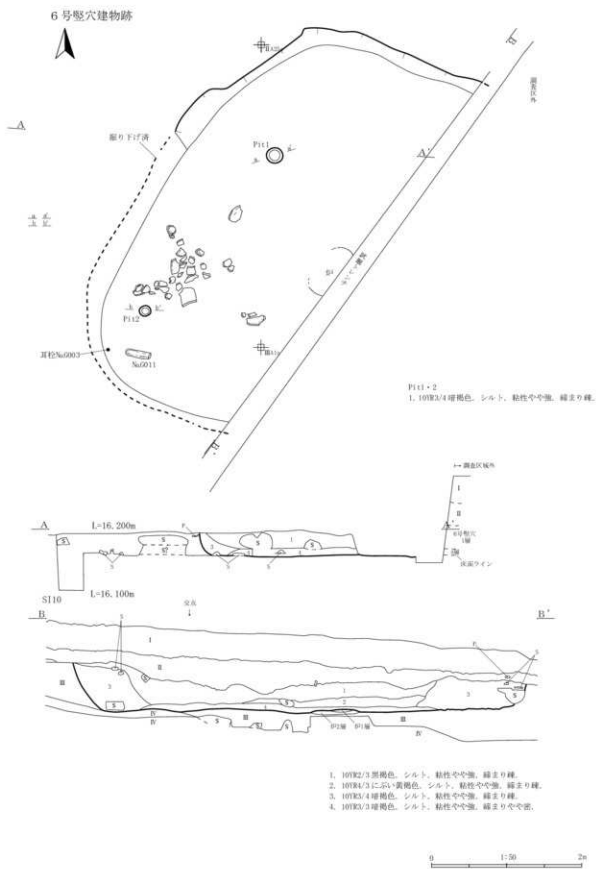
第14図 4号壑穴建物跡(1)



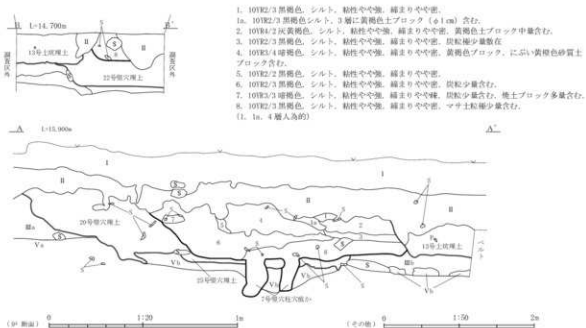
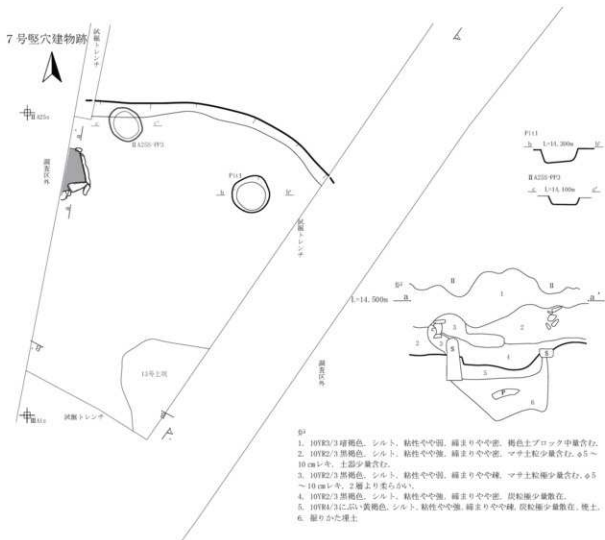
1. 10YR2/3 黒褐色。シルト。粘性やや弱。締まりやや疎。炭粒。焼土粒少量散在。マサ土粒少量含む。
- 1a. 10YR2/3 黒褐色。シルト。1層よりマサ土粒少ない。
- 1b. 1層が下位の焼土により赤黄気味になる。
2. 10YR2/1 黒色。シルト。粘性やや強。締まりやや疎。マサ土粒少量含む。
- 2a. 2層より黄味が強くなる。
3. 10YR2/3 黒褐色。シルト。粘性やや強。締まりやや疎。炭粒。焼土粒少量散在。
4. 10YR3/4 緑褐色。シルト。粘性やや弱。締まりやや密。マサ土粒中量含む。西側に多く堆積。
5. 10YR2/2 黒褐色。シルト。粘性やや強。締まりやや密。マサ土粒1~2層より大きい(中量含む)。
6. 10YR4/4 褐色。シルト。粘性やや弱。締まり密。マサ土粒少量含む(限りかた)。
7. 10YR3/2 黒褐色。シルト。粘性やや弱。締まりやや疎。(限りかた)
8. 5YR5/8 明赤褐色。シルト。粘性やや弱。締まりやや疎。焼土ブロック多量含む。
9. 5YR5/8 明赤褐色。シルト。粘性やや弱。締まりやや密。カリカリ。焼土。
10. 10YR3/1 黒褐色。シルト。粘性やや弱。締まりやや密。(限りかた)
11. 10YR4/3 に近い黄褐色。シルト。粘性やや強。締まりやや密。焼土粒。炭粒全体に混じる。(限りかた)
12. 10YR3/1 黒褐色。シルト。粘性やや弱。締まりやや密。マサ土粒少量含む。

0 1:20 1m

第15図 4号堅穴建物跡(2)



第17図 6号竪穴建物跡



第18図 7号竪穴建物跡

下げってしまったため、欠失してしまった。また、南西側の床面は、上部の堆積と遺物の広がりを基に確認した。〔規模・形状〕調査区外に広がるため部分的な検出であるが、5.7mの幅をもつ方形基調の遺構である。〔埋土と堆積状況〕堆積土は自然堆積で、暗褐色シルトを主体とする〔壁・床面〕壁はやや急角度に立ち上がり、床面はほぼ平坦である。〔炉〕炉1は地床炉である。断面のみの検出のため形状は不明である。〔柱穴〕主柱穴はPit 1・2の2本柱である。〔付属施設〕検出しなかった。

〔重複関係〕なし。〔出土遺物〕床面の土器集中範囲から縄文土器P176・177、石鏃S019、敲磨器S258、耳飾り土製品G003、石棒G011等が出土している。その他、石鏃S020～022、石甕S178、敲磨器S259～261等。〔帰属時期〕床面から出土した遺物から縄文時代中期中葉と考えられる。

(佐藤 剛)

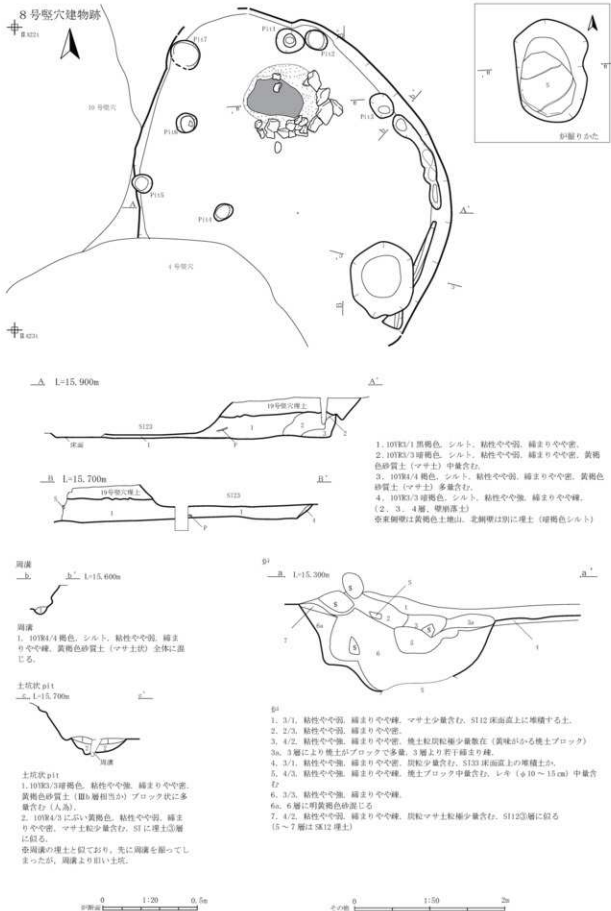
7号竪穴建物跡（第18図、写真版11）

〔位置・検出状況〕調査区南、II A25s付近に位置する。調査区南端部では、中央部とは違う様相の堆積土が広がり、大量に縄文土器が包含されているのを表土掘削時に確認しており、調査区際をVb層まで掘り込み、調査区壁での土層断面において遺構の検出を行った。〔規模・形状〕東西を調査区外にかかり、南側は試掘トレンチで消失しているため形状は不明である。床面までの残存深度は27cm前後である。〔埋土・堆積状況〕床面直上に堆積する黒褐色シルトは、壁際で炭粒を含む。埋土上位には、黄褐色土がブロックで含まれ人為的な様相を示す。〔壁・床面〕外傾気味に立ち上がる。床面は、重複する23号・26号竪穴建物跡の埋土とVb層が硬く締まり、平坦である。〔炉〕壁際に石囲炉が設けられているが調査区外にかかるため全体像が不明である。直線的な石組みの配置がなされており、方形になると考えられる。土坑状の掘りかたを確認している。〔柱穴〕深さ20cm、直径45cmほどの柱穴が1基検出された。その他、A断面で柱穴状の掘りこみを2カ所確認している。〔付属施設〕なし。〔重複遺構〕21号・23号・26号竪穴建物跡を切り、14号土坑に切られる。〔出土遺物〕埋土下位から縄文土器P216～234、敲磨器S262～264等が出土している。その他、斧状土製品G004、石鏃S023～028、スクレイパーS156～158、半円形石製品G015。〔帰属時期〕出土遺物から縄文時代中期中葉に帰属すると考えられる。

(佐藤 あゆみ)

8号竪穴建物跡（第19図、写真版12）

〔位置・検出状況〕調査区南、II A23t付近に位置する。1号竪穴建物跡同様に、褐色シルトの広がりを確認し掘り下げを行い、17号・20号竪穴建物跡精査時検出にいたった。〔規模・形状〕4.3×4.1mの楕円形を呈する。床面までの残存深度は34cm前後である。〔埋土・堆積状況〕床面直上には、黒褐色シルトが厚く堆積する。壁際には、Vb層を起源とするマサ土を多量に含む黄褐色砂質シルトが堆積し崩落土の様相を示す。上部は、17号・20号竪穴建物跡により消失している。〔壁・床面〕直立気味に外傾する。床面は、Vb層が硬く締まり、概ね平坦である。〔炉〕北側に石組みを検出した。石組みは円形であったと考えられるが、一部の礫が雑然と散らばるように検出された。焼土は燃焼面としてではなく、炭粒と混じり石組みの内外で広範囲に散在していた。このことは、炉が破壊されたことが想定される。掘りかたは、135×89cmの大形で床面からの深さは、およそ50cmを測る。底面に径90cm程の礫が露出しているが人為的なものか、Vb層に含まれる巨礫なのかは不明である。〔柱穴〕柱穴が7基検出された。〔付属施設〕西壁際に周溝状の溝を検出しているが、南・東壁際には検出できていない。この周溝には、崩落土と考えられるマサ土が堆積土全体に混じっている。これを切るように、規模が100×81cmの土坑も付属していた。床面からの深さは32cm程、埋土上位が黄褐色砂質土をブロックで含む人為的な様相である。〔重複遺構〕4号・17号・20号竪穴建物



第19図 8号竪穴建物跡

ルトの落ち込み、平坦な床面を検出した。さらに、ベルト部分のみで平坦な床面と壁面を確認した。柱穴は床面では検出できず、すべてⅣ層上面まで掘り下げて検出した。〔規模・形状〕一部の検出のみで不明であるが、楕円形または隅丸長方形の可能性がある。〔埋土・堆積状況〕堆積土は自然堆積で、暗褐色シルトを主体とする。〔壁・床面〕壁はなだらかに立ち上がり、床面はほぼ平坦である。〔炉〕石囲炉Ⅰは長方形の石囲炉である。柱穴の位置から推定すると長軸側に片寄っている可能性がある。また、Pit 5 と重複していることから、別の場所から移設してきた可能性がある。しかし、周辺では、他の炉は検出しなかった。石組みは隅丸長方形に掘り込んだ部分に礫を配置し構築している。石組みの礫は南西側の立位の1点のみ構築時の状態で残されているものの、それ以外に残っているものは外側に横倒しになっているか、破損している。掘り方も北西側では形状が広がっているところがあり、北側は抜き取っていると考える。これらのことから、石組みを抜取り後に住居を廃棄したと考える。礫はすべて扁平な中角礫で、石質は風化花崗岩が3点、砂岩が3点である。〔柱穴〕主柱穴はPit 1～5またはPit 1～4・6の5本柱である。Pit 5は石囲炉Ⅰを完掘した後に検出したもので、石囲炉Ⅰよりも古い。石囲炉と重複しているため、建替えのあった可能性がある。〔付属施設〕検出しなかった。〔重複関係〕柱穴の配置から11号竪穴と重複関係にあった可能性が高いが、周囲を掘り下げてしまったため、不明である。〔出土遺物〕床面および炉から縄文土器P278～280、石鏃S043、台石S369等が出土している。〔帰属時期〕出土遺物から縄文時代中期中葉中葉に帰属すると考えられる。

(佐藤 剛)

10号竪穴建物跡 (第21図、写真図版14)

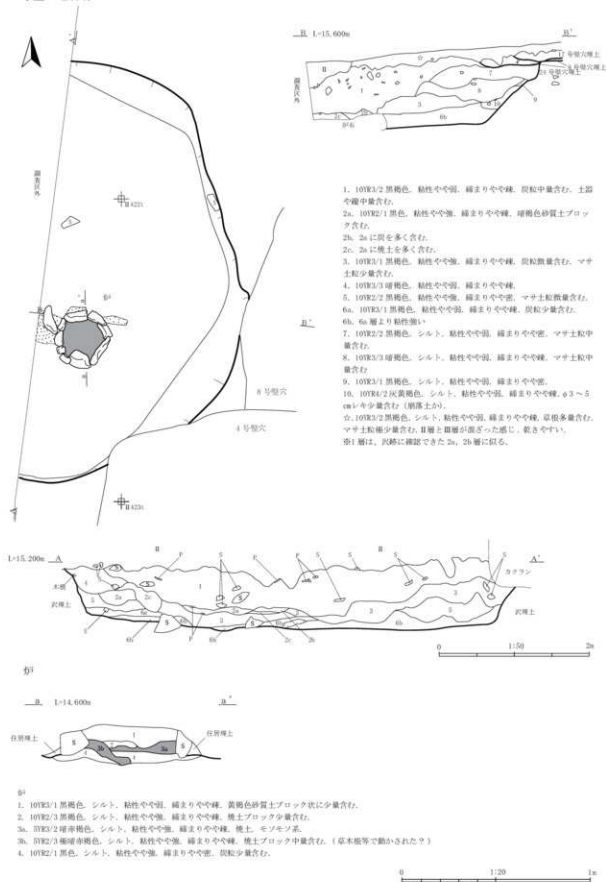
〔位置・検出状況〕調査区南、ⅡA22tに位置する。1号竪穴建物跡同様に、褐色シルトの広がりを確認し掘り下げを行い、8号・17号・25号竪穴建物跡精査時沢跡の埋土とともに検出にいたった。〔規模・形状〕およそ半部を調査区外にかかるが、径5.5mの円形を呈すると考えられる。床面までの残存深度は78cm前後である。〔埋土・堆積状況〕床面直上には、炭粒を含む黒褐色シルトが堆積する。全体的に炭粒を含み、マサ土の混入は少ない。埋土中位には、焼土や炭が廃棄されたような様相で堆積する。埋土上位1層は、沢跡の埋土にも確認ができ、多量の縄文土器を包含している。〔壁・床面〕直立気味に外傾する。本遺構は、沢跡埋土を掘り込んでおり、床面は、粘性のある暗褐色シルトが硬く締まり平坦である。〔炉〕ほぼ中央に石囲炉を検出した。風化した花崗岩を用いた石組みは、円形に配置される。燃焼面は床面とほぼ同じ高さで、モソモソとした焼土が検出された。焼土は石組みの東側にも広がりをみせている。掘りかたは、浅く石組みの重鎮が弱い。〔柱穴〕検出されなかった。〔付属施設〕なし。〔重複遺構〕8号・17号・19号竪穴建物跡、沢跡切る。〔出土遺物〕床面および炉から縄文土器P284～286等が出土している。その他石鏃S044～051、石匙S122、スクレイパーS155・159、石鏃S171、楔形石器S183、石斧S228、敲磨器S272～276等。〔帰属時期〕遺構の重複関係と出土遺物、AMS測定の結果から縄文時代中期前葉から中期中葉に帰属すると考えられる。

(佐藤 あゆみ)

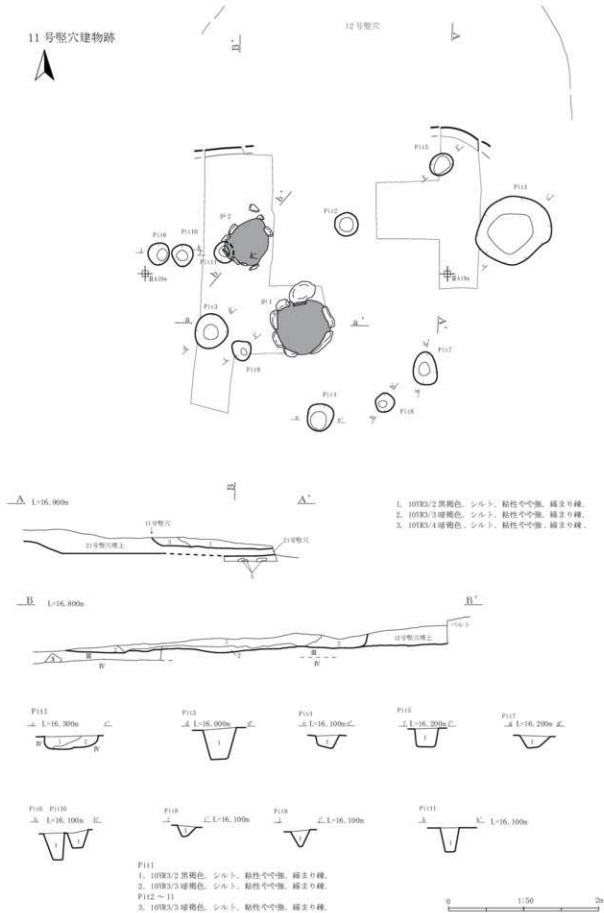
11号竪穴建物跡 (第22・23図、写真図版15)

〔位置・検出状況〕調査区中央、ⅡA18w付近に位置する。Ⅲ層下位を精査中に石囲炉を検出した。周囲に残っていた土層観察用のベルトを精査したところ、Ⅲ層下位からの掘り込みと暗褐色シルトの落ち込み、平坦な床面を検出した。掘り下げたところ、ベルト部分のみで平坦な床面と壁面を確認した。柱穴は床面では検出できず、すべてⅣ層上面まで掘り下げて検出した。〔規模・形状〕一部の検出のみで不明である。〔埋土・堆積状況〕堆積土は自然堆積で、暗褐色シルトを主体とする。〔壁・

10号竪穴建物跡



第 21 図 10号竪穴建物跡



第22図 11号竪穴建物跡(1)

床面) 壁は急角度に立ち上がり、床面はほぼ平坦である。〔炉〕石囲炉1は円形で、石囲炉2は方形の石囲炉である。石囲炉2は石組みの多くが抜き取られていることから、石囲炉2が古く、石囲炉1が新しい。石囲炉1の石組みは円形に溝を掘り込んだ部分に礫を7個配置し構築している。石組みは北東側の一部で途切れており、抜き取られた可能性がある。礫はすべて扁平な中角礫で、石質は風化花崗岩が6点、砂岩が1点である。石囲炉2の石組みは長方形に溝を掘り込んだ部分に礫を配置し構築している。石組みは南西側と北西側、南東側と北東側の1点が構築時の状態で残され、その他は抜き取っていると考える。〔柱穴〕主柱穴はPit 2～4・7の4本柱である。Pit 5・6・8～10は支柱穴または建替えと考える。〔付属施設〕Pit 1は円形で浅い皿状の土坑である。埋土は自然堆積と考える。〔重複関係〕12号堅穴、13号堅穴より新しい。柱穴の配置から9号堅穴と重複関係にあった可能性が高いが、周囲を掘り下げたため不明である。〔出土遺物〕床面から縄文土器P319～322・424、石鏃S052、敲磨器S277等が出土している。その他石鏃S053等。〔帰属時期〕床面の出土遺物から縄文時代中期中葉に帰属すると考えられる。

(佐藤 剛)

12号堅穴建物跡 (第24図、写真図版16)

〔位置・検出状況〕調査区中央、II A18w付近に位置する。Ⅲ層下位を精査中に石囲炉を検出した。周囲に残っていた土層観察用のベルトを精査したところ、Ⅲ層下位からの掘り込みと暗褐色シルトの落ち込み、平坦な床面を検出した。掘り下げたところ、ベルト部分と北側に掘り残していた場所で平坦な床面と壁面を確認した。柱穴は床面では検出できず、すべてⅣ層上面まで掘り下げて検出した。〔規模・形状〕一部のみの検出で不明であるが、5m前後の幅を持つ楕円形の可能性が考えられる。〔埋土・堆積状況〕堆積土は自然堆積で、暗褐色シルトを主体とする。〔壁・床面〕壁は急角度に立ち上がり、床面はほぼ平坦である。〔炉〕石囲炉1は円形の石囲炉である。中央から南西側に片寄っている。石組みは円形に溝を掘り込んだ部分に礫を12個配置し構築している。礫はすべて扁平な中角礫で、石質はすべて風化花崗岩である。〔柱穴〕主柱穴はPit 2～7の6本柱である。Pit 8は支柱穴と考える。〔付属施設〕Pit 11は円形で浅い皿状の土坑である。埋土は自然堆積と考える。〔重複関係〕11号堅穴より古く、13号堅穴より新しい。〔出土遺物〕床面から縄文土器P329・330、台石S367等が出土している。その他、石鏃S054・055、石匙S142、敲磨器S278等。〔帰属時期〕床面の出土遺物から縄文時代中期中葉に帰属すると考えられる。

(佐藤 剛)

13号堅穴建物跡 (第25図、写真図版17)

〔位置・検出状況〕調査区中央、II A17w付近に位置する。Ⅲ層下位を精査中に地床炉を検出した。周囲に残っていた土層観察用のベルトを精査したところ、Ⅲ層下位からの掘り込みと暗褐色シルトの落ち込み、平坦な床面を検出した。掘り下げたところ、ベルト部分と北側に掘り残していた場所で平坦な床面と壁面を確認した。柱穴は床面では検出できず、すべてⅣ層上面まで掘り下げて検出した。〔規模・形状〕一部の検出のみで不明であるが、楕円形または隅丸長方形の可能性が高い。〔埋土・堆積状況〕堆積土は自然堆積で、暗褐色シルトを主体とする。地床炉に近接する床面には、細かい炭化物と焼土粒が混じって堆積していた。焼成(燃焼?)面が見られないことから、地床炉からの灰を掻き出したものの可能性がある。〔壁・床面〕壁はやや急角度に立ち上がり、床面はほぼ平坦である。〔炉〕炉1は不整形な地床炉である。〔柱穴〕主柱穴はPit 1またはPit 2である。1本柱と考えるが、長軸上に組み合う2本柱を検出できなかった可能性もある。Pit 1は埋土と形状から抜き取られたと考えられるため、Pit 2は建替えである。〔付属施設〕検出しなかった。〔重複関係〕12号堅

11号竪穴建物跡

炉1



a



a'

炉1掘りかた



a



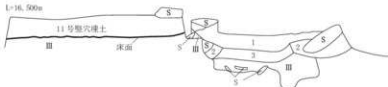
a'

D1

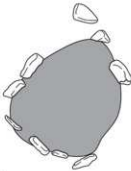
1. 5YR3/3 暗赤褐色、シルト、粘性や中強、締まり硬、炭化物2～4mm少量含。
2. 10YR3/3 暗褐色、シルト、粘性や中強、締まり硬。
3. 5YR4/6 赤褐色、シルト、粘性や中強、締まり硬。

炉1

a



炉2



炉2掘りかた



D2



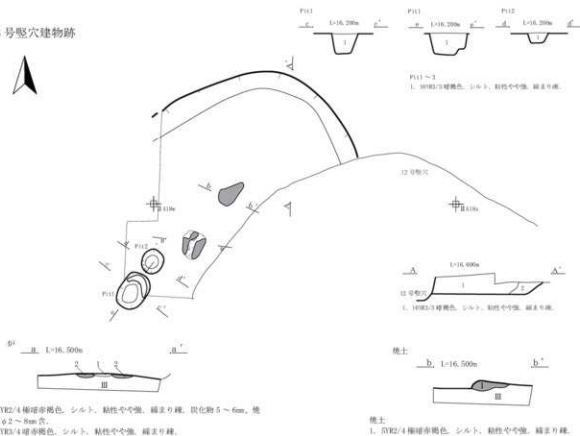
D12

1. 5YR3/3 暗赤褐色、シルト、粘性や中強、締まり硬、炭化物2～4mm少量含。
2. 5YR4/6 赤褐色、シルト、粘性や中強、締まり硬。
3. 10YR3/3 暗褐色、シルト、粘性や中強、締まり硬。

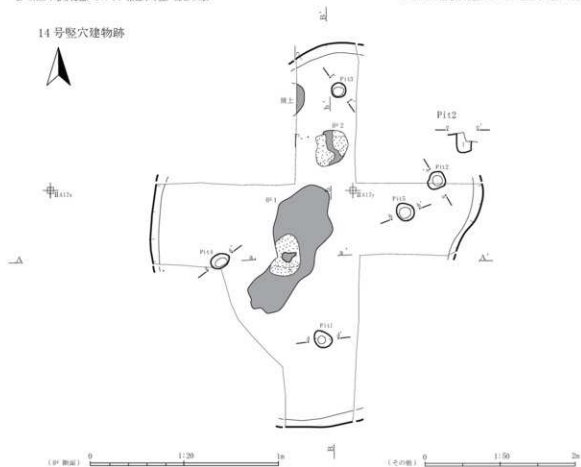
0 1:20 5m

第23図 11号竪穴建物跡(2)

13号竪穴建物跡



14号竪穴建物跡



第25図 13号竪穴建物跡・14号竪穴建物跡(1)

穴より古い（11号竪穴B-B参照）。〔出土遺物〕床面から縄文土器P332等が出土している。〔帰属時期〕遺構の重複関係と床面の出土遺物から縄文時代前期に帰属すると考えられる。

〔写真 編〕

14号竪穴建物跡（第25・26図、写真図版18）

〔位置・検出状況〕調査区中央、II A17y付近に位置する。Ⅲ層下位を精査中に地床炉（炉1）を検出した。周囲に残っていた土層観察用のベルトを精査したところ、Ⅲ層下位からの掘り込みと暗褐色シルトの落ち込み、平坦な床面を検出した。掘り下げたところ、ベルト部分と南西側の一部で床面を確認し、ベルト部分のみで壁面を確認した。さらに、床面で地床炉（炉2）と柱穴を検出した。〔規模・形状〕5m×4.3mで、一部の検出のみであるが、楕円形の可能性が高い。〔埋土・堆積状況〕堆積土は自然堆積で、暗褐色シルトを主体とする。炉2に近接する床面には、細かい炭化物和焼土粒が混じって堆積していた。焼成（燃焼？）面が見られないことから、地床炉からの灰を掻き出したものの可能性がある。〔壁・床面〕壁はやや急角度に立ち上がり、床面はほぼ平坦である。〔炉〕炉1と炉2は両者とも不整形な地床炉である。炉1は中央に位置し、炉2は北側に片寄っている。〔柱穴〕主柱穴はPit 1～4の4本柱である。Pit 5は支柱穴または建替えと考える。〔付属施設〕検出しなかった。〔重複関係〕平面での観察から、15号竪穴より新しい。〔出土遺物〕床面から縄文土器P334、石鏃S056等が出土している。その他、敲磨器S279等。〔帰属時期〕遺構の重複関係と床面の出土遺物から縄文時代前期中葉から後葉に帰属すると考えられる。

〔写真 編〕

15号竪穴建物跡（第27図、写真図版19）

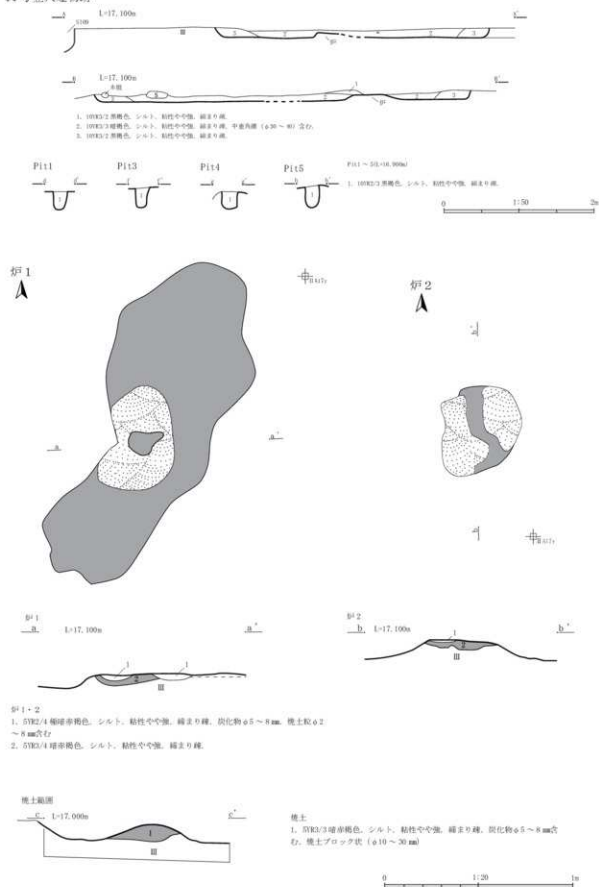
〔位置・検出状況〕調査区中央、II A17x付近に位置する。Ⅲ層下位を精査中に地床炉を検出した。周囲に残っていた土層観察用のベルトを精査したところ、Ⅲ層下位からの掘り込みと暗褐色シルトの落ち込み、平坦な床面を検出した。掘り下げたところ、ベルト部分と南西側の一部で床面を確認し、壁面を確認した。柱穴は床面では検出できず、すべてⅣ層上面まで掘り下げて検出した。〔規模・形状〕5.2m×4.6mで、一部の検出のみであるが、楕円形の可能性が高い。〔埋土・堆積状況〕堆積土は自然堆積で、暗褐色シルトを主体とする。〔壁・床面〕壁はやや急角度に立ち上がり、床面はほぼ平坦である。〔炉〕炉は不整形な地床炉である。炉は中央からやや前側に片寄っている。〔柱穴〕主柱穴はPit 1・4～6の4本柱である。Pit 2・3・7は支柱穴または建替えと考える。〔付属施設〕検出しなかった。〔重複関係〕平面での観察から14号竪穴より古い。位置から9号竪穴と重複関係にあった可能性が高いが、周囲の西側を掘り下げてしまったため不明である。〔出土遺物〕縄文土器P335～337等が出土している。〔帰属時期〕遺構の重複関係と出土遺物から縄文時代前期中葉から前期前葉に帰属すると考えられる。

〔写真 編〕

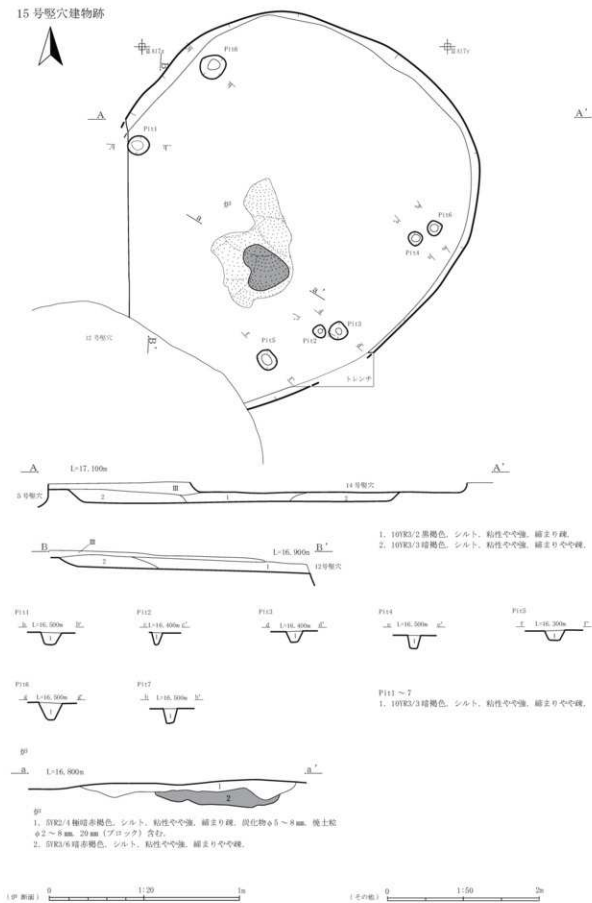
16号竪穴建物跡（第28図、写真図版20）

〔位置・検出状況〕II A15x付近に位置する。Ⅲ層下位を精査中に地床炉（炉1）を検出した。周囲に残っていた土層観察用のベルトを精査したところ、Ⅲ層下位からの暗褐色シルトの落ち込みと平坦な床面を検出した。掘り下げたところ、ベルト部分と北側で床面を確認した。床面では土坑（Pit 1）を検出した。柱穴は床面では検出できず、すべてⅣ層上面まで掘り下げて検出した。先に周囲を掘り下げてしまっていたことと、巨礫が点在していたため、壁は確認できなかった。〔規模・形状〕一部の検出のみで不明である。〔埋土・堆積状況〕堆積土は自然堆積で、暗褐色シルトを主体とする。〔壁・床面〕床面はほぼ平坦である。〔炉〕炉1は不整形な地床炉である。炉1は主柱穴の配置

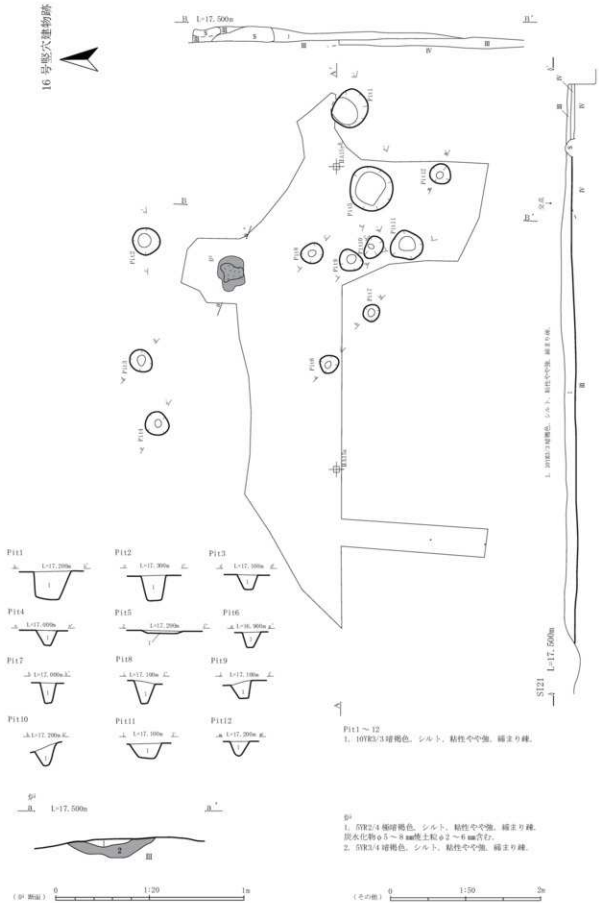
14号竪穴建物跡



第26図 14号竪穴建物跡(2)



第27図 15号竪穴建物跡



第28図 16号竪穴建物跡

に対して南東側に片寄っている。〔柱穴〕主柱穴はPit1～4・11の5本である。Pit11の南西側は、先にIV層まで掘り下げってしまったことと、微地形で南側に傾斜していることから、1本を検出できなかった6本柱と考える。Pit1・11は他と比較して大型のもので、周囲が微地形で傾斜していることから低い側に大型の柱を立てた可能性がある。南東側のPit5の周囲にPit6～10・12が不規則にまとまって分布する。Pit10・12は先端がやや尖るものである。〔付属施設〕Pit5は円形で浅い皿状の土坑である。埋土は自然堆積と考える。〔重複関係〕なし。〔出土遺物〕縄文土器P338・339・562等が出土している。〔帰属時期〕出土遺物から縄文時代前期中葉から後葉に帰属すると考えられる。

(佐藤 剛)

17号竪穴建物跡 (第29図、写真図版21)

〔位置・検出状況〕調査区南、II A22tに位置する。8号竪穴建物跡精査時に、重複する遺構の広がりを確認しサブトレンチを設定し土層断面で検出を行った。〔規模・形状〕およそ3.9×3.5mの円形を呈する。床面までの残存深度は59cm前後である。〔埋土・堆積状況〕埋土下位に厚く堆積するのは、土器を大量に包含するⅢa層に似る灰褐色シルトである。埋土上位の黒褐色シルトは草根を多量に残し、乾きやすい。〔壁・床面〕直立気味に外傾する。床面は、25号竪穴の埋土である黒褐色シルトが硬く締まり平坦である。〔炉〕北東よりに石囲炉を検出した。70×40cmほどの規模で石組は横長に配置される。石組は風化した花崗岩等を用いているが、一部抜けている部分が認められた。燃焼面は床面とほぼ同じ高さで、焼成の良い焼土が石組内に堆積していた。燃焼面上では、縄文土器深鉢の底部が出土している。掘りかたは、石組の規模とほぼ同じで、床面からの深さは12cmほどの浅鉢状のため石組みの重鎮が弱い。〔柱穴〕2個検出されたが、南側でこれらに対応する柱穴は検出されなかった。〔付属施設〕なし。〔重複遺構〕8号・10号・20号竪穴建物跡、沢跡を切る。4号竪穴建物跡に切られる。〔出土遺物〕石斧S220等が出土している。〔帰属時期〕遺構の重複関係から、縄文時代中葉に帰属すると考えられる。

(佐藤 あゆみ)

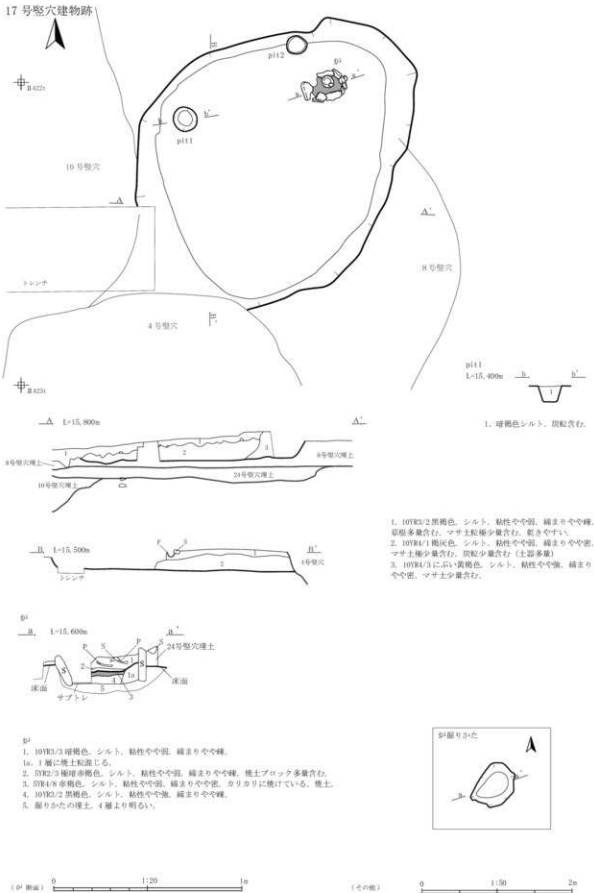
18号竪穴建物跡 (第30図、写真図版22)

〔位置・検出状況〕調査区北、II B13c～II B14cグリッドで、Ⅲ層下位からIV層を掘り下げ中、V層面で黒褐色土の広がりとして検出した。東側が調査区域外にかかる。遺構の多くの部分は、調査区域外の東側にあると推測される。竪穴建物跡全体の西端部のみを確認したにすぎない。〔規模・形状〕検出した範囲で、開口部4.6×0.6m以上、床面4.4×0.4m以上と推定される。確認された一辺は直線的であり、平面形は方形または長方形と推測される。残存する壁高は30cmである。〔埋土・堆積状況〕主に黒褐色土で構成される。〔壁・床面〕壁は直立して立ち上がる。床面はV層の黄褐色土層面を掘り込んでつくられており、ほぼ平坦である。西壁際の床面に不規則ながら周溝が巡るようである。周溝は上幅20～15cm、下幅10～8cm、深さ10～15cmである。〔炉〕検出した範囲では確認されなかった。〔柱穴〕確認されていない。配置は不明である。調査区域外にあるものと推測される。〔付属施設〕なし。〔重複遺構〕埋土中に2号焼土遺構が形成されていた。18号竪穴建物跡の埋没後に形成された焼土である。18号竪穴建物跡(旧)→2号焼土遺構(新)の関係がある。〔出土遺物〕西壁際の埋土中より敲磨器S280～282が出土した。なお、当該遺構の検出面で周辺から縄文時代前期の土器が出土した。〔帰属時期〕遺構の形状と出土遺物から、縄文時代前期前葉から中葉と推測される。

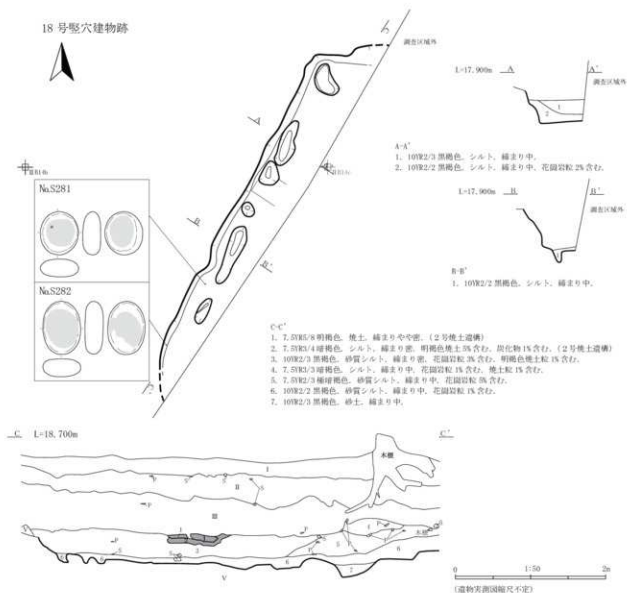
(河部 勝樹)

19号竪穴建物跡 (第31図、写真図版23)

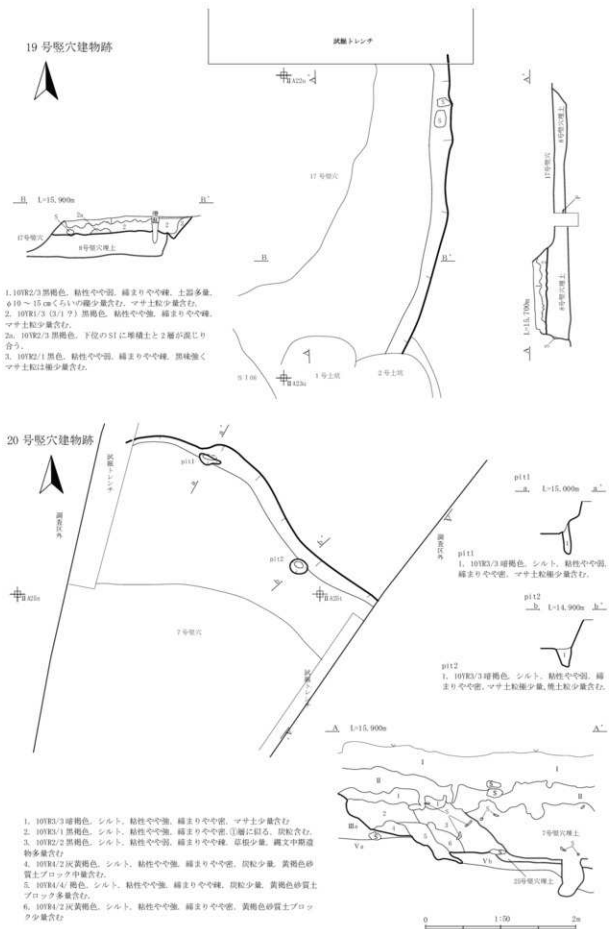
〔位置・検出状況〕調査区南、II A22uに位置する。8号竪穴建物跡精査時に、硬く締まる範囲を広



第29図 17号竪穴建物跡



第 30 図 18号竪穴建物跡



第31図 19号竪穴建物跡・20号竪穴建物跡

げたところ、床面の土色が大きく変化する部分を確認した。8号堅穴の埋土が硬く締まる範囲と水平に、地山のVb層に近い黄褐色シルトがしまる範囲を検出し、重複する遺構として検出した。〔規模・形状〕大半を、堅穴が重複しており全容は不明である。床面までの残存深度は33cm前後である。

〔埋土・堆積状況〕埋土上下位に堆積するのは、黒褐色シルトである。一部床面下の8号堅穴の埋土と混じる様相を示す。壁際の堆積土はより黒味を増す。埋土上位の黒褐色シルトには土器を多量に包含している。〔壁・床面〕外傾する。北側の壁から張り付くように礫が2個並んで出土している。床面は、硬く締まり平坦である。〔炉〕検出されなかった。重複する堅穴によって消失していると考えられる。〔柱穴〕検出されなかった。〔付属施設〕B断面において、壁際に落ち込みを確認している。しかし、平面的に床面から周溝のようなものは検出されなかった。〔重複遺構〕4号・20号堅穴建物跡、1号・2号土坑に切られる。1号堅穴建物跡を切る。〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。〔帰属時期〕遺構の重複関係から縄文時代中期中葉以前に帰属すると考えられる。

(佐藤 あゆみ)

20号堅穴建物跡 (第31図、写真図版24)

〔位置・検出状況〕調査区南、II A24sに位置する。7号堅穴同様に、調査区南端部では、中央部とは違う様相の堆積土が広がり、大量に縄文土器が包含されているのを表土掘削時に確認しており、調査区際をVb層まで掘り込み、調査区壁での土層断面において遺構の検出を行った。〔規模・形状〕大半を、7号堅穴に切られ全容は不明である。床面までの残存深度は49cm前後である。〔埋土・堆積状況〕埋土の主体となるのは、縄文時代中期の土器片を多量に包含する黒褐色シルトである。壁際には、明るい褐色シルトが堆積し、黄褐色砂質土がブロック状に含まれ、壁の崩落土の様相を示す。

〔壁・床面〕外傾する。床面は、一部地山のVb層が硬く締まり平坦である。〔炉〕検出されなかった。重複する7号堅穴によって消失していると考えられる。〔柱穴〕壁際に2個検出した。土層断面上でも、壁際に柱穴状の掘り込みを確認している。〔付属施設〕なし。〔重複遺構〕7号堅穴建物跡に切られる。25号堅穴建物跡を切る。〔出土遺物〕床面から、敲磨器S285・286等が出土している。〔帰属時期〕遺構の重複関係から、縄文時代中期前葉から中葉に帰属すると考えられる。

(佐藤 あゆみ)

21号堅穴建物跡 (第32図、写真図版25)

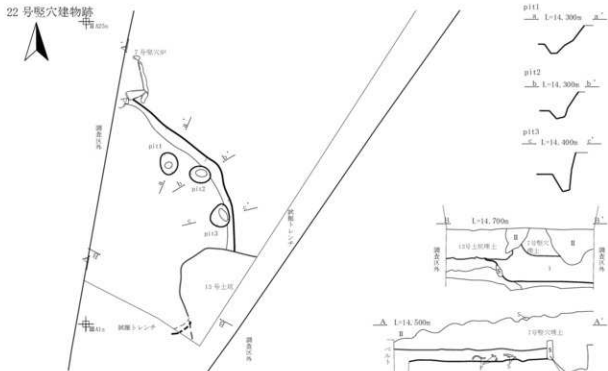
〔位置・検出状況〕調査区中央、II A18w付近に位置する。12号堅穴の東側を精査中に石囲炉を検出した。周囲に残っていた土層観察用のベルトを精査したところ、Ⅲ層下位からの掘り込みと暗褐色シルトの落ち込み、平坦な床面を検出した。北西側は12号堅穴を先行して調査したため、床面を掘り抜き消失させてしまった。柱穴は床面では検出できず、すべてⅣ層上面まで掘り下げて検出した。〔規模・形状〕一部の検出のみで全体像は不明であるが4.2mの幅をもつ円形もしくは楕円形の遺構と考えられる。〔埋土・堆積状況〕堆積土は自然堆積で、暗褐色シルトを主体とする。〔壁・床面〕床面はほぼ平坦である。〔炉〕石囲炉1は円形の石囲炉である。北東側の壁際に片寄っている。石組みは円形に溝を掘り込んだ部分に礫を8個配置し構築している。礫はすべて扁平な中角礫で、石質は風化花崗岩6点、砂岩1点等である。〔柱穴〕主柱穴はPit 1の1本柱である。〔付属施設〕検出しなかった。〔重複関係〕12号堅穴より新しい。〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。〔帰属時期〕遺構の重複関係から縄文時代中期前葉から中葉に帰属すると考えられる。

(佐藤 剛)

22号堅穴建物跡 (第33図、写真図版26)

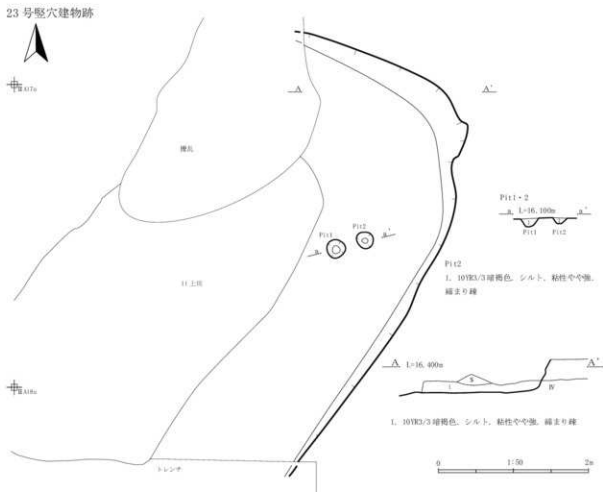
〔位置・検出状況〕調査区南、II A25sに位置する。7号堅穴の床面精査時に、暗褐色の弧状ブラン

22号竪穴建物跡



I. 10YR3/4 暗褐色。シルト、粘性やや強。縮まりやや疎。調査区西帯側に土器・竇中藏含む。砂混じり。

23号竪穴建物跡

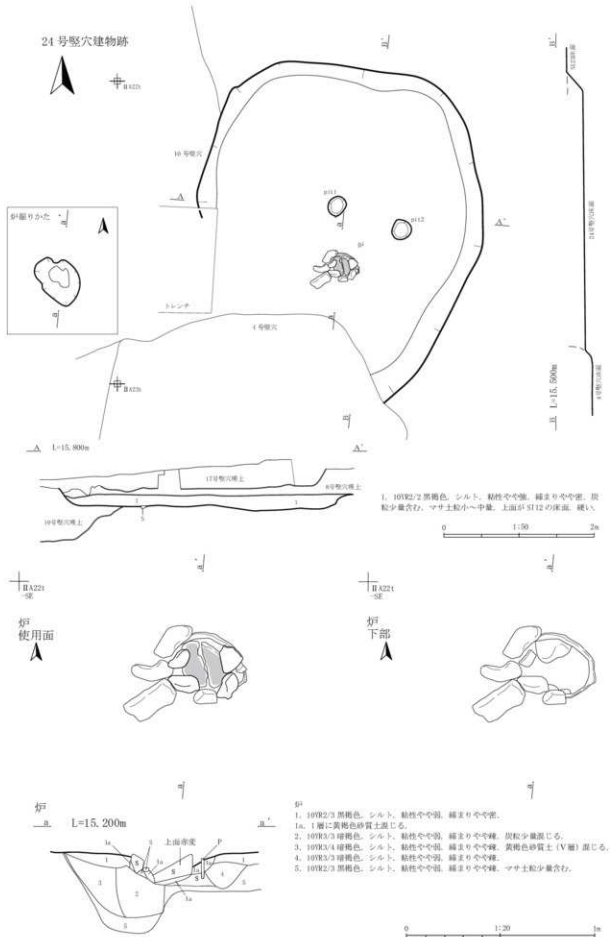


p11-2
I. 10YR3/3 暗褐色。シルト、粘性やや強。縮まり疎。

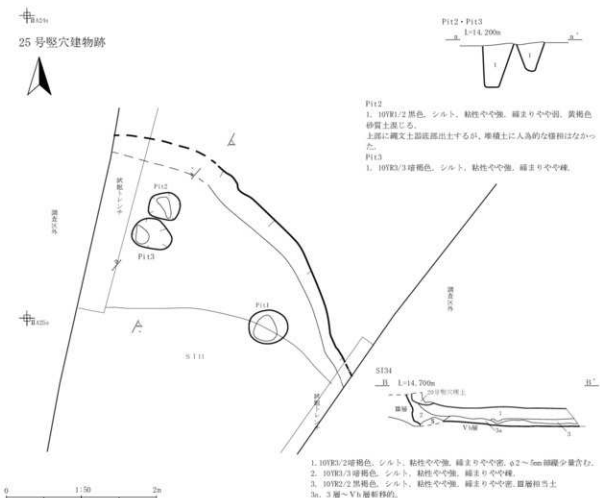
I. 10YR3/3 暗褐色。シルト、粘性やや強。縮まり疎。



第33図 22号竪穴建物跡・23号竪穴建物跡



第34図 24号竪穴建物跡



第35図 25号竪穴建物跡

として検出した。〔規模・形状〕大半が調査区外にかけり全容は不明である。床面までの残存深度は28cm前後である。〔埋土・堆積状況〕埋土の主体となるのは、縄文時代の前期の土器片が含まれる暗褐色シルトである。〔壁・床面〕外傾する。床面は、地山のVb層が平坦となる。〔炉〕検出されなかった。〔柱穴〕壁際に小柱穴を3個検出した。〔付属施設〕なし。〔重複遺構〕7号竪穴建物跡、14号土坑に切られる。〔出土遺物〕埋土から有孔石製品G014が出土している。〔帰属時期〕遺構の重複関係と出土遺物から縄文時代前期後葉から中期前葉に帰属すると考えられる。

(佐藤 あゆみ)

23号竪穴建物跡 (第33図、写真図版27)

〔位置・検出状況〕調査区中央、II A17v付近に位置する。Ⅲ層下位を精査中に暗褐色シルトの落ち込みを検出した。掘り下げたところ、平坦な床面と壁を確認した。さらに床面に柱穴を検出した。〔規模・形状〕一部の検出のみで不明であるが、11号土坑と攪乱の西側には拡がっていないため、楕円形または隅丸長方形の可能性がある。〔埋土・堆積状況〕堆積土は自然堆積で、暗褐色シルトを主体とする。〔壁・床面〕壁はやや急角度に立ち上がり、床面はほぼ平坦である。〔炉〕検出しなかったが、先に調査した1号焼土遺構は、位置とレベルを考慮し、本遺構に期属する可能性がある。〔柱穴〕主柱穴はPit1またはPit2で、他の一方は支柱穴または建替えと考える。周囲の11号土坑と攪乱の掘り込みのため、他の柱穴は消失している可能性がある。〔付属施設〕検出しなかった〔重複関係〕

平面での観察から3号竪穴と11号土坑より古い。〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。
〔帰属時期〕重複関係から縄文時代中期中葉以前と考えられる。

(佐藤 剛)

24号竪穴建物跡 (第34図、写真図版28)

〔位置・検出状況〕南部、ⅡA22aに位置する。17号竪穴同様、8号竪穴精査時、重複する遺構の広がりを確認しサブレンチを設定し土層断面で検出を行った。〔規模・形状〕4.4×3.8の円形を呈する。床面までの残存深度は34cm前後である。〔埋土・堆積状況〕埋土の主体となるのは、上面を8号竪穴によって削平されているため、床面直上に堆積する黒褐色シルトのみ確認できた。〔壁・床面〕緩やかに外傾する。床面は、地山のVb層が硬く締まり概ね平坦である。〔炉〕中央付近で土器埋設炉を検出した。床面精査時、不規則な配置の石組みを確認したが焼土は認められなかった為、掘り下げを行った所、綾線文が施された深鉢の体部が輪切りされたような状態で埋められていた。土器内には20~30cmほどの礫2個がすっぽりと収まり、平坦面が揃えられていた。平坦面上に焼土の堆積は認められなかったが、赤く被熱していた。周囲の礫を抜き取り掘り下げる際には、焼土ブロックが少量堆積しているのを確認している。掘りかたは、70×48cmの不整形な平面形で、深さも南側が深くなる不均一な坑である。〔柱穴〕中央付近に2個検出している。〔付属施設〕なし。〔重複遺構〕4号・8号竪穴建物跡に切られ、10号竪穴建物跡を切る。〔出土遺物〕炉からP272、P274。埋土下位から石鏃S058・059等が出土している。その他、石匙S123、スクレイパーS160等。P274は、埋設炉となっていた土器である。〔帰属時期〕遺構の重複関係と埋設炉の土器から縄文時代中期前葉に帰属すると考えられる。

(佐藤 あゆみ)

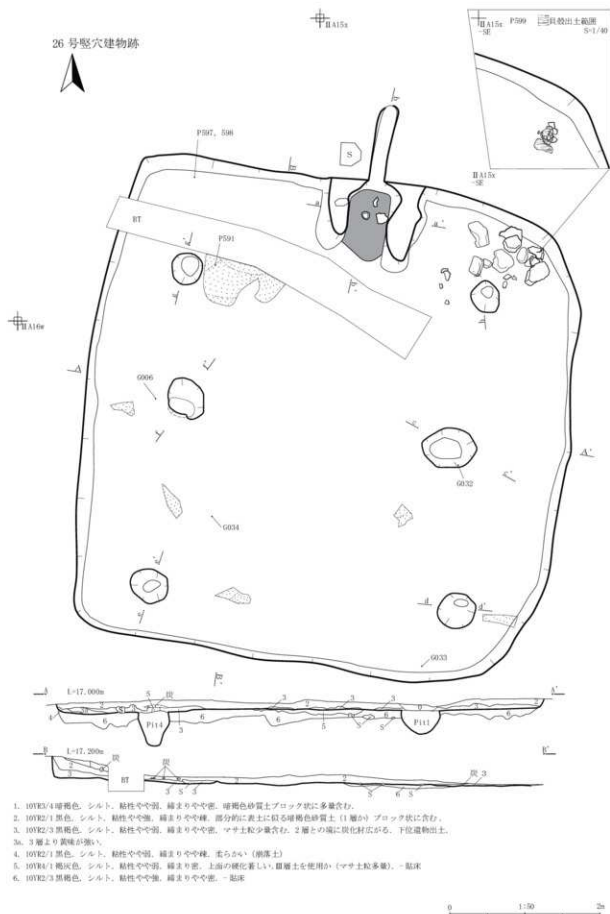
25号竪穴建物跡 SI34 (第35図、写真図版29)

〔位置・検出状況〕調査区南、ⅡA25sに位置する。7号竪穴同様、調査区南端部では、中央部とは違う様相の堆積土が広がり、大量に縄文土器が含まれているのを表土掘削時に確認しており、調査区際をVb層まで掘り込み、調査区壁での土層断面において遺構の検出を行った。〔規模・形状〕東西を調査区外にかかり、南側は7号竪穴で消失しているため形状は不明である。床面までの残存深度は49cm前後である。〔埋土・堆積状況〕床面直上に堆積するのは、Vb層に似る黄褐色シルトが混じった黒褐色シルトである。壁際には、締まりがやや疎い暗褐色シルトが堆積する。〔壁・床面〕壁は、直立気味に立ち上がる。床面は、Vb層が硬く締まり、平坦である。〔炉〕検出されなかった。重複する7号竪穴により消失していると考えられる。〔柱穴〕北側に2個並んで検出している。〔付属遺構〕なし。〔重複遺構〕7号・20号竪穴建物跡に切られる。〔出土遺物〕石鏃S060、敲磨器S287等。〔帰属時期〕遺構の重複関係から縄文時代中期中葉以前に帰属すると考えられる。

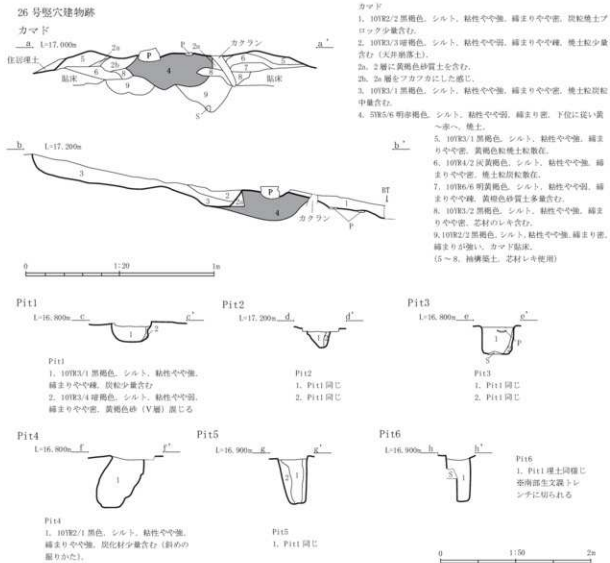
(佐藤 あゆみ)

26号竪穴建物跡 (第36図・37図、写真図版30・31)

〔位置・検出状況〕調査区中央、ⅡA16xに位置する。Ⅲ層上位で、Ⅲ層とは違う様相の黒色土の広がりを確認し、検出作業で方形のプランと、北側に黄褐色土ブロックを確認した。また、その際に土師器が出土している。〔埋土・堆積状況〕北側の床面直上には、粘性がやや弱い黒褐色シルトが薄く堆積する。その上に炭化材が一定の塊となって検出されたが、脆い炭で材の種類は特定できていない。埋土の主体となる黒色シルトはⅡ層土である。〔規模・形状〕6.5×6.4mの隅丸方形を呈する。〔壁・床面〕壁は、南側が消失しているが、北側で深さ約55cmを測る。床面は貼り床の黒褐色シルトの硬化が顕著で平坦である。〔カマド〕北側の壁、中央付近に検出した。カマド内には、非常に良く

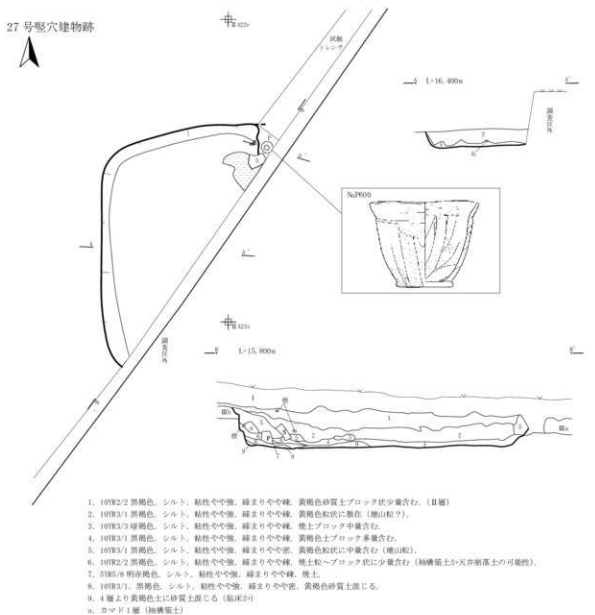


第36図 26号竪穴建物跡(1)



第37図 26号竪穴建物跡（2）

焼成された焼土が厚く堆積し、上位から下位に従い、黄色から赤色と変化する。燃焼面中央には、甕の底部が支脚として設置される。カマド袖は表面が黒褐色であるが、内部は黄褐色～灰黄褐色シルトで、Vb層と考えられる黄褐色砂質シルトを多く含む。袖の芯材には10～15cmほどの礫が複数使用される。表土除去中にカマド構築土と思われる黄褐色土ブロックや、焼土がすでに見られており、カマドの上部はほとんど削平されている。そのため、カマド袖は床面に近い部分しか残っていないため、カマドの全容は不明であり、これは、煙道部も同様で煙出し部の様相も不明である。〔柱穴〕床面精査時に主柱穴（PIT1～6）を検出し、PIT1～3・6、PIT4・5それぞれ堆積土が同じであった。直径は40～70cmほどで、深さ30～65cmを測る。〔付属施設〕北角壁際に、20～30cm大の礫が多数出土しその下に土師器甕が潰れた状態で複数出土している。その中から貝殻やウニの棘が出土している。これらの礫、土師器、貝殻はすべて混じりあって堆積しているというよりも、床面直上に土師器、その中に貝殻、その上に堆積土と併に礫が入り込んでいる状況であった。〔重複遺構〕なし。〔出土遺物〕床面から土師器P591・597・598敲磨器S233、紡錘車G006・008、鉄鎌G032～034、カマドからP585～590等が出土している。その他石鎌S001・002、敲磨器S232・234・349、砥石S352、紡



カマド(軸の一部)

1:15,000



カマド

1. 10TK3/3 暗褐色。シルト、粘性やや強、締まりやや硬、焼土粒少量含む(粘性ある黄褐色土と黒色土が混ざる(軸構築土)。土師器(小型甕)を芯材に使用している(中にφ15cm程度の穴あり)柱居埋土層)。
2. 10TK2/2 黒褐色。シルト、粘性やや強、締まりやや硬。
3. 地山 10TK6/6 明黄褐色。シルト。(Va層)

0 1:50 2m (平面、断面A-B)

0 1:20 3m (断面a) (遺物実測図解尺不定)

第38図 27号竪穴建物跡

鍾車G007、棒状の石製品G018・019、刀子G035等。〔帰属時期〕床面の出土遺物から7世紀末～8世紀前半に帰属すると考えられる。

(佐藤 あゆみ)

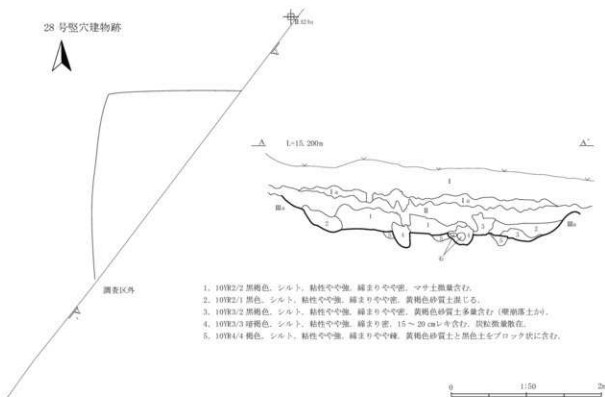
27号竪穴建物跡(第38図、写真図版32)

〔位置・検出状況〕調査区南、ⅡA22v調査区際位置する。当初、Ⅲa層下位で黒褐色の広がりを縄文の竪穴と認識したが、検出作業で方形の角を確認し、堆積土の様相から古代の竪穴として精査に着手した。〔埋土・堆積状況〕床面直上に堆積するのは、しまりがやや疎い黒褐色シルトであり、北側は黄褐色砂質土が混じる。主体となるのは、Ⅱ層土でVa層を少量含む。人為的な堆積は認められない。〔規模・形状〕遺構東側は調査区の外にかかり、全容は不明であるが、カマドの位置を壁の中心として考えた場合、 4×4 mの方形を呈すると考えられる。残存深度は、30cm前後である。〔壁・床面〕壁は外傾気味に直立する。床面はVa層が締まり概ね平坦である。〔カマド〕北側の壁で検出した。カマド東側および燃焼面、煙道は調査区外にかかり、左袖のみの検出である。袖内には、土師器の小甕が伏せて設置され芯材となっている。地山のVa層の上に、暗褐色～黒褐色土で構築されている。〔柱穴〕検出されなかった。〔付属施設〕なし。〔重複遺構〕なし。〔出土遺物〕カマド袖芯材としてP600が出土している。〔帰属時期〕カマド芯材の土師器から7世紀末～8世紀前半に帰属すると考えられる。

(佐藤 あゆみ)

28号竪穴建物跡(第39図、写真図版3)

〔位置・検出状況〕調査区南、ⅡA24t調査区際位置する。Va層まで掘り下げを行った際に調査区壁で遺構の存在を確認した。〔埋土・堆積状況〕床面直上に堆積する黒褐色シルトは、一部で黄褐色土を含む。主体となるのは、Ⅱ層土であり、この堆積状況で古代の遺構と認識した。〔規模・形状〕調査区外にかかるため全容は不明であるが、方形を呈すると考えられる。27号竪穴と角度が類似する。〔壁・床面〕断面からの観察で、壁は、外傾気味、床面は壁際が若干低くなるが概ね平坦と考え



第39図 28号竪穴建物跡

られる。〔カマド〕検出されなかった。調査区外に存在する可能性がある。〔柱穴〕検出されなかったが、土層断面で柱穴状に落ち込む4層を確認している。〔付属施設〕なし。〔重複遺構〕なし。〔出土遺物〕なし。〔帰属時期〕堆積土の様相から古代に属すると考えられる。

(佐藤 あゆみ)

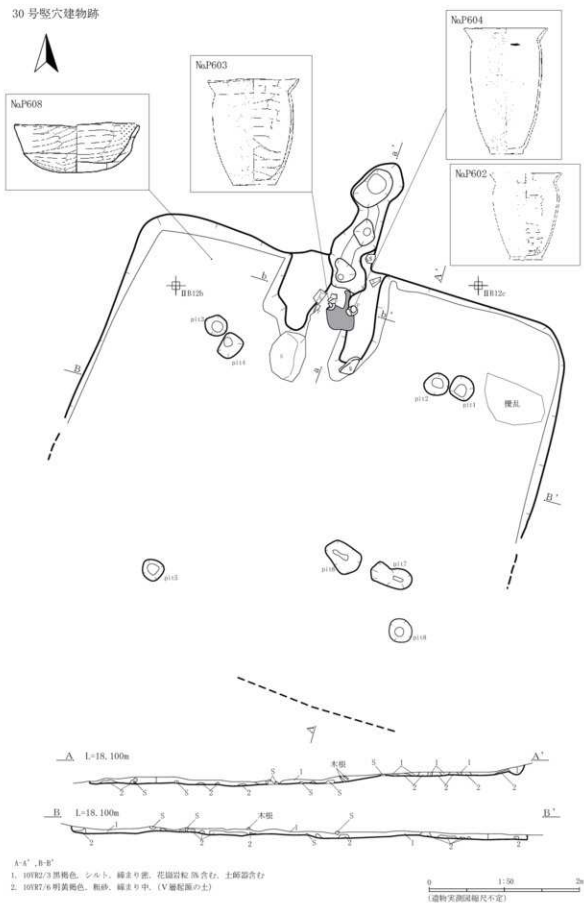
29号竪穴建物跡 (第40図、写真図版33)

〔位置・検出状況〕調査区北、ⅡB10d・10eグリッドを中心とした範囲で、花崗岩粒を含み締まりの強い黒褐色土のⅢ層中で、黒色土の方形基調の広がりとして検出した。東側は調査区域外にかかる。検出した範囲は、竪穴建物跡の西側と北壁に設けられたカマド及び北側にのびる煙道部分である。南西側は木根による擾乱を受けている。〔埋土・堆積状況〕主にⅡ層の締まりの弱い黒色土で構成され、下位に炭化物を含む層が薄く堆積する。煙道部分の埋土も同じである。〔規模・形状〕開口部3.2×1.9m以上、床面3.1×1.8m以上と推定される。残存する壁高は20cmである。平面形は隅丸方形を基調とするものと推測される。〔壁・床面〕壁はほぼ直立する。床はほぼ平坦である。いずれも花崗岩粒を含み、硬く締まる黒褐色土層のⅢ層を掘り込んでいる。貼床は施されていない。〔カマド〕建物の北側に設けられている。検出時点で、北側に延びる煙道と北壁に設けられたカマドの存在が推測される位置に並ぶ礎の存在と明黄褐色土の広がりを確認した。カマドは、両袖と天井部に石が組まれ、明黄褐色土と黒色土の混土を加えて構築されていた。袖部は、両袖に各3個の直角礎が芯材として組み込まれていた。それらの礎が全体に東側に傾いているのは、重機により西側から東側に表土掘削作業を行った際に傾いたものである。天井部の石組は、燃焼部に落下した状態で検出されたと推測される。カマドの規模は80×40cm。燃焼部の規模は30×26cmを測る。橙色の焼土の厚さは最大で6cmである。煙道部の規模は、長さ140cm、幅30cm、深さ17cmである。煙道の構造は不明であるが、煙道部先端の煙出し部に向かって傾斜するように掘り込まれている。煙出し部の規模は、径30cm、深さ40cmである。〔柱穴〕検出した範囲では確認されていない。〔付属施設〕なし。〔重複遺構〕なし。〔出土遺物〕床面から土師器・坏P601が伏せられた状態で出土した。〔帰属時期〕遺構の形状と出土遺物から、7世紀末～8世紀前半と推測される。

(阿部 善明)

30号竪穴建物跡 (第41図・42図、写真図版34)

〔位置・検出状況〕調査区北、ⅡB12bグリッドを中心とした範囲で、Ⅲ層下位からⅣ層を掘り下げ中に土師器片などが出土したことから、遺構の存在に留意して検出作業を行ったところ、Ⅴ層面で黒褐色土の方形基調の広がりを確認し、竪穴建物跡として調査した。〔規模・形状〕開口部6.0×3.0m以上、床面5.6×2.8m以上である。残存する北側の壁高は10cmである。南側の壁などは確認されていない。平面形は隅丸方形を基調とするものと推測される。〔埋土・堆積状況〕主に黒褐色土で構成される。〔壁・床面〕検出できた北壁及び東壁・西壁はほぼ直立する。床面はⅤ層の黄褐色土層面を掘り込んでつくられている。貼床は確認されていない。〔カマド〕北壁のほぼ中央に設置されている。上部は削られているが、燃焼部の両側に粘土を貼りつけて構築されたカマドの袖部が確認された。一部に礎を芯材として使用している。カマドの規模は、160×150cmである。燃焼部の範囲は、40×30cmで、橙色の焼土の厚さは5cmで、Ⅴ層面に形成されている。燃焼部の西側と東側に20cmほど間を空けて礎が伏せられて置かれおり、西側には礎1個(P603)、東側には礎2個(P602・604)があり、P604にP602が重ねられて伏せられた状態であった。支脚として使用されたものと推測される。他に燃焼部の直上からも土師器片が出土している。煙道部の規模は、長さ140cm、幅40～55cm、深さ10～15cmで、構造の詳細は不明である。残存する煙出部の規模は、径50cm、深さ20cmである。〔柱穴〕



第41図 30号竪穴建物跡(1)

30号竪穴建物跡

カマド

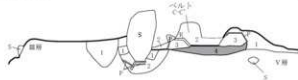
a. L=18, 200m



カマド a-a'

1. 10TR3/4 暗褐色 シルト、締まり密。
2. 10TR2/2 黒褐色 シルト、締まり中、土師器器人、花崗岩粒 2% 含む、下位に焼土混じりの暗褐色土混入。
3. 10TR2/2 黒褐色 シルト、締まり中、花崗岩粒 2% 含む。
4. 10TR2/2 黒褐色 砂質シルト、締まり中、花崗岩粒 0% 含む。

b. L=18, 300m



b-a'

カマド b-b'

1. 10TR1.7/1 黒色 シルト、締まり中、黄色土粒 5% 含む。
2. 10TR2/2 黒褐色 シルト、締まり中、土師器器人。
3. 10TR1/4 褐色 砂質シルト、締まり中。
4. 5TR6/8 褐色 焼土、V層が焼土化したもの。

第42図 30号竪穴建物跡(2)

Pit 1～8の8個を確認した。各柱穴の埋土は竪穴建物跡と同様に黒褐色土で構成される。規模・配置から、Pit 1・3・5・8が支柱穴の可能性のあるものと推測される。Pit 6・7の埋土からは土師器片が出土している。〔重複遺構〕なし。〔出土遺物〕床面から土師器P608・609、カマドから土師器P602～607等出土している。埋土下位から紡錘車G010が出土している。〔帰属時期〕遺構の形状と出土遺物から、7世紀末～8世紀前半と推測される。

(阿部 勝則)

(2) 土 坑

1号土坑(第43図、写真図版35)

〔位置・検出状況〕調査区南、ⅡA23u付近に位置する。重複する4号竪穴建物跡の精査時に4号竪穴建物跡の壁を切る遺構として検出した。〔規模・形状〕63.4×77.7cmの円形で、残存深度は41cmである。〔埋土・堆積状況〕底面直上には地山(Vb層)が混じる褐色シルトが堆積する。人為的な堆積は認められない。〔壁・底面〕壁は、外傾する。底面には、径40～50cmの巨礫が置かれている。

〔重複遺構〕4号竪穴建物跡を切る。〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。〔帰属時期〕遺構の重複関係から縄文時代中期後葉以降と考えられる。

(佐藤 あゆみ)

2号土坑(第43図、写真図版35)

〔位置・検出状況〕調査区南、ⅡA23u付近に位置する。重複する4号竪穴建物跡の精査時に4号竪穴建物跡の壁を切る遺構として検出した。〔規模・形状〕113×107cmの円形で、残存深度は38cmである。〔埋土・堆積状況〕底面直上には黒褐色シルトが堆積し、全体的に粘性が弱い。2層はIVb層に似る。〔壁・底面〕壁は、北側が若干抉れて内湾気味に立ち上がる。底面は概ね平坦である。〔重複遺構〕1号竪穴建物跡、4号竪穴建物跡に切られる。〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。〔帰属時期〕遺構の重複関係から縄文時代中期に属すると考えられる。

(佐藤 あゆみ)

3号土坑(第43図、写真図版35)

〔位置・検出状況〕ⅡA14yに位置する。Ⅲ層下位を精査中に暗褐色シルトの広がりを検出した。半

載したところ、埋土中から礫が出土し、底面と壁を確認した。4号土坑と近接する。〔規模・形状〕 $85 \times 80\text{cm}$ で、円形である。〔埋土・堆積状況〕堆積土は埋戻しで、1層は暗褐色土、2・3層は黒褐色土である。3層中の中角礫と石棒? (Na) は埋め戻しの際に同時に埋めたものと考えられる。堆積状況と礫類の出土状況は4号土坑に類似する。〔壁・底面〕壁は急角度に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。〔重複遺構〕なし。〔出土遺物〕埋土から台石? 片1点 (石器Na1)、石棒G012、すり石1点、中角礫5点? が出土した。〔帰属時期〕埋土中から出土した遺物 (土器片) から縄文時代中期中葉から後葉と考えられる。

(佐藤 剛)

4号土坑 (第43図、写真図版35)

〔位置・検出状況〕調査区中央、II A14xに位置する。III層下位を精査中に暗褐色シルトの広がりを検出した。半載したところ坑底から礫が出土し、底面と壁を確認した。3号土坑と近接する。〔規模・形状〕 $105 \times 85\text{cm}$ で、円形である。〔埋土・堆積状況〕堆積土は埋戻しで、1層は暗褐色土、2層は黒褐色土である。坑底の礫は埋め戻しの際に同時に埋めたものと考えられる。堆積状況と礫類の出土状況は3号土坑に類似する。〔壁・底面〕壁は急角度に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。〔重複遺構〕なし。〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。〔帰属時期〕埋土中から出土した遺物 (土器片) から縄文時代中期中葉から後葉と考えられる。

(佐藤 剛)

5号土坑 (第43図、写真図版36)

〔位置・検出状況〕調査区中央、II A19tに位置する。3号堅穴建物跡の2層を精査中に暗褐色シルトの広がりを検出した。検出の際に半分ほど掘り過ぎてしまった。半載したところ土器1個体が斜めに横倒しの状態で出土し、底面と壁を確認した。〔規模・形状〕 $130 \times 125\text{cm}$ で、半分を掘り過ぎているが、堆積状況から楕円形である。〔埋土・堆積状況〕堆積土は埋戻しで、1層は、2層はである。坑底に遺物を置き、埋め戻している。〔壁・底面〕壁はやや急角度に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。〔重複遺構〕2号堅穴建物跡より古く、3号堅穴建物跡より新しい。〔出土遺物〕坑底から大型の深鉢形P097等が出土した。大型の深鉢形土器は正立して置かれていたものが土庄により歪んだものと考えられる。〔帰属時期〕坑底から出土した遺物から縄文時代中期中葉から後葉と考えられる。

(佐藤 剛)

6号土坑 (第43図、写真図版36)

〔位置・検出状況〕調査区北、II B10dグリッド。III層下位からIV層面を掘り下げ中、東側をIII層下位からIV層面、西側をV層面で、黒色土の円形の広がりとして検出した。〔規模・形状〕規模は、開口部径 $90 \times 80\text{cm}$ 、底部径 $75 \times 62\text{cm}$ 、深さ 60cm である。平面形は円形を呈する。〔埋土・堆積状況〕黒色土層である。〔壁・底面〕壁は、IIIからIV層下位を掘り込んで、ほぼ直立する。底面は、V層を掘り込んで平坦につくられている。〔重複遺構〕なし。〔出土遺物〕なし。〔帰属時期〕時期を決定できる出土遺物はない。検出面から縄文時代の可能性がある。

(河部 善則)

7号土坑 (第43図、写真図版36)

〔位置・検出状況〕調査区南、II A23u付近に位置する。重複する1号堅穴建物跡の床面精査時に検出した。〔規模・形状〕 $107 \times 110\text{cm}$ の円形で、残存深度は 40cm である。〔埋土・堆積状況〕主体となるのは粘性がやや強い黒褐色シルトで、壁際には、崩落土と考えられる明黄褐色土が薄く堆積する。〔壁・底面〕壁は北側が若干抉れて直立気味に立ち上がる。底面は、概ね平坦で硬く締まる。〔重複

遺構) 1号竪穴建物跡を切る。〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。〔帰属時期〕遺構の重複関係から縄文時代中期以降に帰属すると考えられる。

(佐藤 あゆみ)

8号土坑 (第44図、写真図版36)

〔位置・検出状況〕調査区北、ⅡB13aグリッド。Ⅲ層下位からⅣ層面を掘り下げ中、Ⅴ層面で黒色土の円形の広がりとして検出した。〔規模・形状〕規模は、開口部径150×140cm、底部径95×90cm、深さ60cm、平面形は円形を呈する。〔埋土・堆積状況〕黒色土・暗褐色土・黒褐色土で構成される。黒褐色土が主体である。当土坑の上には検出時に木根があり、埋土上位が木根による攪乱を受けている。〔壁・底面〕壁は、Ⅴ層を掘り込んでほぼ直立する。底面は、Ⅴ層を掘り込んでほぼ平坦につくられている。底面のほぼ中央に開口部径35cm、底部径10cm、深さ10cmの小穴を伴う。〔重複遺構〕なし。〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。〔帰属時期〕出土遺物と検出面などから、縄文時代と推測される。

(河部 勝則)

9号土坑 (第44図、写真図版37)

〔位置・検出状況〕調査区北、ⅡB13bグリッド。Ⅲ層下位からⅣ層面を掘り下げ中、Ⅴ層面で黒褐色土の円形の広がりとして検出した。〔規模・形状〕規模は、開口部径110×110cm、底部径90×80cm、深さ42cm、平面形は円形を呈する。西側に張り出した部分は木根などにより攪乱を受けた痕跡である。〔埋土・堆積状況〕黒褐色土主体で構成される。〔壁・底面〕壁は、Ⅴ層を掘り込んでほぼ直立する。底面は、Ⅴ層を掘り込んで平坦につくられている。〔重複遺構〕なし。〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。〔帰属時期〕出土遺物と検出面などから、縄文時代と推測される。

(河部 勝則)

10号土坑 (第44図、写真図版37)

〔位置・検出状況〕調査区北、ⅡB15aグリッド。1号集石遺構の精査の段階で、Ⅲ層下位からⅣ層面を掘り下げ中、Ⅴ層面で黒褐色土の円形の広がりとして検出した。〔規模・形状〕規模は、開口部径65×60cm、底部径40×35cm、深さ70cm、平面形は円形を呈する。〔埋土・堆積状況〕締めりの弱い黒褐色土と黄褐色土混じりの黒褐色土で構成される。黒褐色土上位に径30cm大の垂角礫1個が含まれていた。1号集石遺構を構成する礫群と当該礫との間に黒褐色土層を挟むことから、1号集石遺構と当該礫に関連性はないものと考えられる。当該遺構の埋土の堆積状況は、全体として、柱当たりと掘り方と推測される堆積状況を呈している。〔壁・底面〕壁はⅤ層を掘り込んでほぼ直立する。底面はⅤ層下位の粘土層を掘り込んでほぼ平坦につくられている。〔重複遺構〕1号集石遺構の下位に位置する。10号土坑(旧)→1号集石遺構(新)の関係があるが、両者の間には黒色土の間層があり、機能した時期には隔たりがあると考えられ、直接の関連性はないと推測される。〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。〔帰属時期〕出土遺物と検出面から縄文時代以降と推測される。柱穴としての性格が考えられるが、周囲に対応する柱穴は確認されていない。調査区域外に関連する遺構が続く可能性がある。

(河部 勝則)

11号土坑 (第45図、写真図版37)

〔位置・検出状況〕調査区中央、ⅡA17uに位置する。Ⅲ層下位を精査中に暗褐色シルトの広がりを検出した。半裁したところ底面と壁を確認した。〔規模・形状〕5.4m×4.0mで、隅丸長方形である。〔埋土・堆積状況〕堆積土は自然堆積で、1層は黒褐色土、2層は暗褐色土である。〔壁・底

面] 壁は北西側ではやや急角度に立ち上がり、それ以外はなだらかに立ち上がる。底面はやや丸みがある。〔重複遺構〕3号竪穴建物跡より古く、23号竪穴建物跡より新しい。〔出土遺物〕出土しなかった。〔帰属時期〕重複関係から縄文時代中期中葉以前である。

〔図版 編〕

12号土坑 (第44図、写真図版37)

〔位置・検出状況〕調査区南、ⅡA25s付近に位置する。重複する7号竪穴建物跡床面精査時に検出した。〔規模・形状〕85×90cmの円形で、残存深度は底面まで43cmである。〔埋土・堆積状況〕埋土下位は、地山(Vb層)が混じるシルトや、締まりの疎いサクサクした褐色シルトが堆積し人為的な様相を示す。埋土上位は、径1cm以下の細礫が混じる。〔壁・底面〕壁は直立気味に立ち上がる。底面は平坦で中央に副穴をもつ。副穴は径15cm、深さ20cmの規模である。〔重複遺構〕7号竪穴建物跡と重複するが新旧関係は不明である。〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。〔帰属時期〕遺構の形状から縄文時代の陥し穴状土坑と考えられる。

〔図版 あゆみ〕

13号土坑 (第44図)

〔位置・検出状況〕調査区南、ⅢA1s付近に位置する。重複する7号竪穴建物跡精査時に土層観察用の調査区壁で検出した。調査区外に広がる遺構であり、遺構の種類を判断するのに困難であるが、ここでは土坑として報告する。〔規模・形状〕調査区外に広がるため全容は不明。〔埋土・堆積状況〕埋土下位は、黄褐色土を含む暗褐色土が堆積し、上位は、Ⅱ層に似る黒色土が堆積する。〔壁・底面〕壁は直立気味に外傾する。底面は平坦でVb層があらわれる。〔重複遺構〕7号竪穴建物跡・22号竪穴建物跡と重複し新しい。〔出土遺物〕なし。〔帰属時期〕遺構の重複関係や埋土の様相から古代に帰属する可能性もあるが不明である。

〔図版 あゆみ〕

(3) 焼土・炉跡

1号焼土遺構 (第46図、写真図版38)

〔位置・検出状況〕調査区中央、ⅡA17vに位置する。Ⅲ層上位で焼土の広がりを検出した。〔規模・形状〕40×34cmの不整形円形を呈する。〔被熱・堆積土状況〕燃焼面は良く焼けて硬い。掘りかたは認められない。〔重複遺構〕23号竪穴と重複するが、位置とレベルを考慮し本遺構が23号竪穴の炉として使用されていた可能性が考えられる。〔出土遺物〕なし。〔帰属時期〕検出状況から縄文時代に帰属すると考えられる。

〔図版 あゆみ〕

2号焼土遺構 (第46図、写真図版38)

〔位置・検出状況〕調査区北、ⅡB14bグリッド。Ⅲ層下位からⅣ層中で明黄褐色の焼土の広がりとして検出した。東側が調査区域にかかるため、西側だけの検出である。〔規模・形状〕検出した範囲は、90×25cm以上で、調査区域外に続く。不整であるが概ね円形基調と推測される。〔被熱・堆積土状況〕明黄褐色と褐色の焼土で、厚さ10cmほどである。被熱した面はほぼ平坦である。〔重複遺構〕下位に27号竪穴建物跡が位置する。2号焼土遺構は、27号竪穴建物跡の埋没後に形成された焼土遺構である。27号竪穴建物跡(旧)→2号焼土遺構(新)の関係がある。〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。〔帰属時期〕時期を決定できる出土遺物はないが、検出面から縄文時代の可能性がある。

(阿部 善樹)

3号焼土遺構 (第46図、写真図版38)

〔位置・検出状況〕調査区北、ⅡA13xグリッド。Ⅲ層下位からⅣ層中で明褐色の焼土の広がりとして検出した。西側が後世の切土で切られている。周辺から縄文土器片が出土している。〔規模・形状〕検出した範囲は、径30×20cmである。不整であるが概ね円形基調と推測される。〔被熱・堆積土状況〕明褐色の焼土で、厚さ6cmほどである。被熱した面はほぼ平坦である。Ⅲ層下位からⅣ層面に形成されている。〔重複遺構〕なし。〔出土遺物〕なし。〔帰属時期〕時期を決定できる出土遺物はない。検出面から縄文時代の可能性がある。

(阿部 善樹)

4号焼土遺構 (第46図、写真図版38)

〔位置・検出状況〕調査区南、ⅡA23tに位置する。4号堅穴精査終了後掘り下げを行い検出された。〔規模・形状〕57×41cmの不整形円形を呈する。〔被熱・堆積土状況〕赤褐色の焼土は、硬さが弱い。掘りかたは認められない。〔重複遺構〕4号堅穴に切られる。〔出土遺物〕なし。〔帰属時期〕遺構の重複関係から縄文時代中期以前に帰属すると考えられる。

(佐藤 あゆみ)

5号焼土遺構 (炉跡) (第47図、写真図版39)

〔位置・検出状況〕調査区中央、ⅡA20wグリッド。Ⅳ層を掘り下げているなかで、Ⅳ層中で石組及び褐色の焼土の広がりを検出した。周辺から縄文土器片が出土している。〔規模・形状〕北側に亜角礫で組まれた石組があり、南側に焼土が広がる。石組部の範囲は、40×40cmである。径30～15cm大の花崗岩の亜角礫5個が内側に斜位に埋め込まれている。石組内部に不明瞭ながら焼土が確認されており、石囲炉と推測される。〔被熱・堆積土状況〕焼土範囲は径10×28cmで、石組の南側に褐色の焼土が広がる。厚さ6cmである。被熱した面はほぼ平坦で、Ⅳ層面に形成されている。〔重複遺構〕なし。〔出土遺物〕焼土上位や周辺から出土した土器片P563等が出土している。焼土中からは焼骨片が出土した。〔帰属時期〕遺構の形状と出土遺物から、縄文時代中期後葉と推測される。

(阿部 善樹)

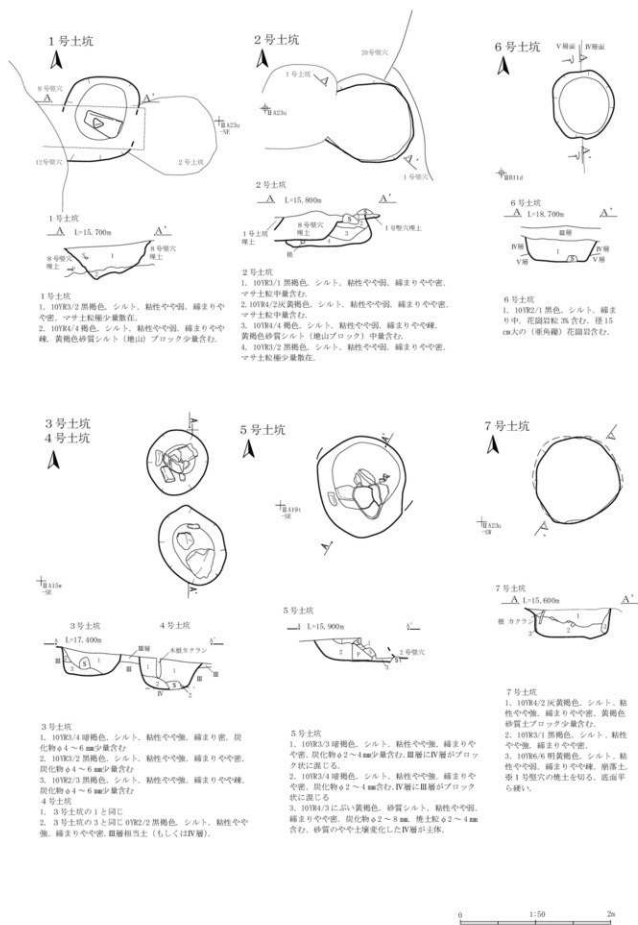
6号焼土遺構 (第47図、写真図版39)

〔位置・検出状況〕調査区北、ⅡB8fグリッド。Ⅲ層下位からⅣ層を掘り下げているなかで、Ⅲ層下位からⅣ層中で橙色の焼土の広がりを検出した。〔規模・形状〕径46～37cmの不整形形状を呈する。〔被熱・堆積土状況〕橙色の焼土で赤色の焼土ブロックが入る。厚さ5cmである。端部より中央部が厚くなっている。〔重複遺構〕なし。〔出土遺物〕なし。〔帰属時期〕遺構の検出状況から、古代の可能性がある。

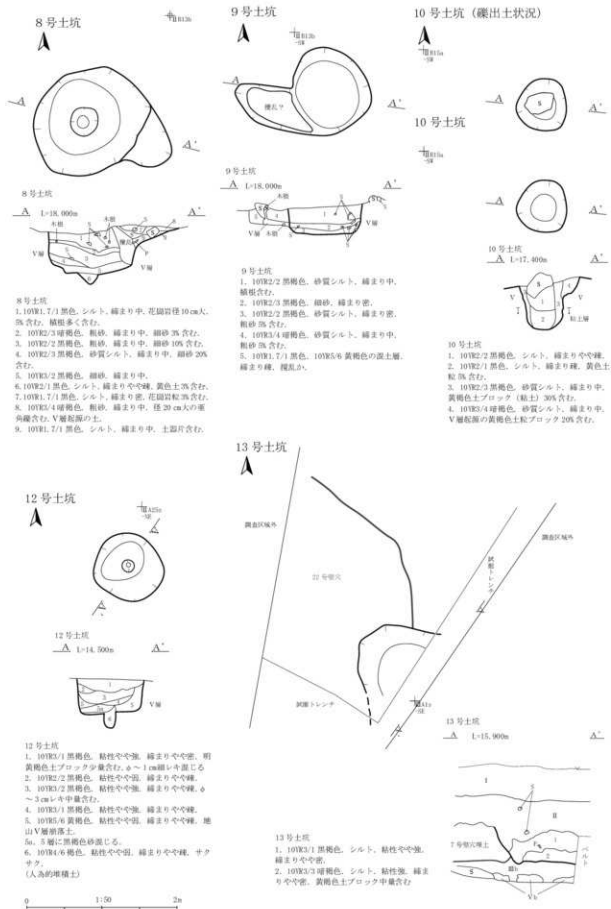
(阿部 善樹)

7号a・b・c・d焼土遺構 (第48図、写真図版39)

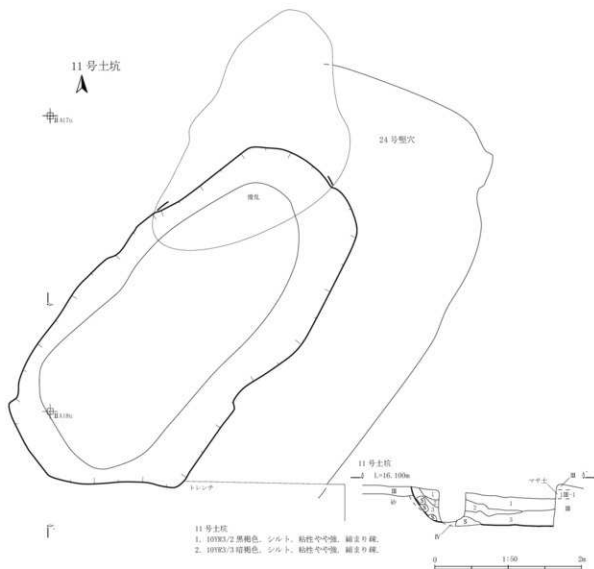
〔位置・検出状況〕調査区北、ⅡB7e・7fグリッドで、Ⅲ層面で褐色～橙色の焼土群を検出した。径2×1.5mの範囲に4つの焼土遺構(a・b・c・d)が分布する。〔規模・形状〕a焼土遺構は径50×28cmの不整形長楕円形である。b焼土遺構は径63×50cmの不整形円形で、褐灰色のブロックが焼土中及び周辺に散在する。c焼土遺構は径35×33cmの不整形円形である。d焼土遺構は径50×47cmの不整形円形で、焼土直上に径10cmほどの礫が2個含まれていた。〔被熱・堆積土状況〕a焼土遺構は橙色の焼土で、厚さは最大で5cmである。b焼土遺構は褐色の焼土で、灰白色土が混じる。焼土の厚さは最大で8cmである。c焼土遺構は褐色の焼土で、厚さは最大で7cmである。d焼土遺構は褐色の焼



第43図 1~7号土坑



第 44 図 8 ~ 10・12・13 号土坑



第45図 11号土坑

土で、厚さは最大で7cmである。〔重複遺構〕なし。〔出土遺物〕d焼土遺構の焼土直上から土師器P611が出土した。〔帰属時期〕遺構の検出状況と出土遺物から、古代の可能性はある。

(阿部 勝則)

8号焼土遺構 (第48図、写真図版40)

〔位置・検出状況〕調査区中央、II A21vに位置する。中央部の遺物包含層(Ⅲ層下位～Ⅳ層)掘り下げ時に検出した。〔規模・形状〕一部を掘り下げにより消失しているため全容は不明である。〔被熱・堆積土状況〕明赤褐色の焼土は、硬さの確認できる面はない。掘りかたは認められない。被熱により黒色土が還元しているのが確認できる。〔重複遺構〕なし。〔出土遺物〕なし。〔帰属時期〕検出状況から縄文時代に帰属すると考えられる。

(佐藤 あゆみ)

9号焼土遺構 (第48図、写真図版40)

〔位置・検出状況〕調査区南、II A22tに位置する。24号壙穴精査終了後掘り下げを行い検出した。〔規模・形状〕64×46cmの不整形を呈する。〔被熱・堆積土状況〕明赤褐色の焼土は、キメが細かく、きれいに焼成されている。2層は掘りかたの埋土と考えられ、径0.5～1cmの細礫が含まれる。

〔重複遺構〕24号堅穴に切られる。〔出土遺物〕なし。〔帰属時期〕遺構の重複関係から縄文時代中期以前に帰属すると考えられる。

(佐藤 あゆみ)

10号焼土遺構(炉跡)(第47図、写真図版41)

〔位置・検出状況〕調査区北、ⅡA13aグリッドを中心とした範囲で、Ⅲ層面で石囲炉と縄文土器片を確認したことから、堅穴建物跡の可能性のあるものとして調査を行ったが、検出した段階で炉跡の周辺はすでに掘り下がっており、床面は確認できなかった。検出時、炉内に径30×20×7cmの扁平な花崗岩の礫が置かれていたが、これは、炉内が黒褐色土で埋った後に置かれたものである。〔規模・形状〕石囲炉である。径70cmの円形基調で、11個の垂角礫を縦位にして、内側に向かって埋め込んで組まれている。石材は花崗岩である。〔被熱・堆積土状況〕石組内は、花崗岩粒を含む黒褐色土が堆積し、明瞭な焼土は確認できていない。〔出土遺物〕炉の埋土上位からP359や炉の周辺の北側からP356・361等が出土している。〔重複遺構〕なし。〔帰属時期〕出土遺物と遺構の検出面から、縄文時代中期後葉と推測される。

(阿部 勝則)

11号a・b焼土遺構(第49図、写真図版41)

〔位置・検出状況〕調査区北、ⅡB14a～ⅡB15aグリッドで、Ⅲ層下位からⅣ層で焼土の広がりを見出した。炉跡となる可能性を考え、調査を進めたところ、焼土遺構の周辺に硬化した床面と思われる範囲の広がりを確認したが、壁は確認できていない。掘り下げたⅤ層面で確認された柱穴(ⅡA14z-Pit2)から縄文時代前期の土器片が出土しており、焼土遺構周辺の柱穴が当該焼土遺構に伴い、堅穴建物跡を構成していた可能性がある。〔規模・形状〕a・b焼土遺構が確認された。平面形はいずれも不整形である。a焼土遺構の規模は径60×50cmを測る。b焼土遺構の規模は径70×60cmを測る。〔重複遺構〕なし。〔被熱・堆積土状況〕a焼土遺構の明赤褐色の焼土の厚さは最大で4cm。b焼土遺構の明赤褐色の焼土の厚さは最大で8cmである。〔出土遺物〕焼土の検出面と同じ層から、P364・365が出土している。〔帰属時期〕周辺から出土した遺物と遺構の検出状況から、縄文時代前期の可能性があると推測される。

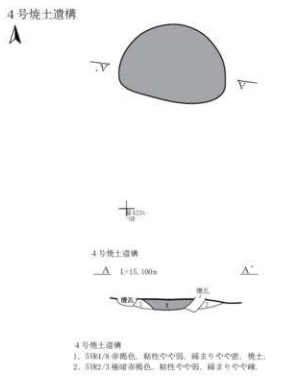
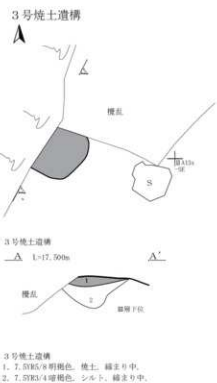
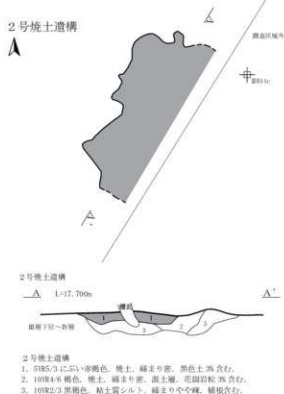
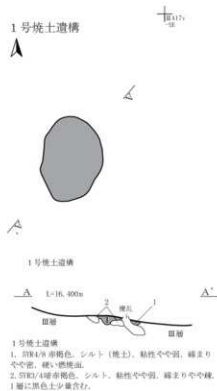
(阿部 勝則)

(4) 集石遺構

1号集石遺構(第49図、写真図版42)

〔位置・検出状況〕調査区北、ⅡB15aグリッド。Ⅲ層下位からⅣ層面の黒色土層を掘り下げ中に礫が集めた状態で検出された。周辺において同様の礫が集石された状態は確認されておらず、意図的に集められたものと推測された。〔規模・形状〕集石は、上下2段で確認された。上段の集石の規模は、径85×75cmの範囲に径30～40cm大の花崗岩の垂角礫20個ほどで構成される。下段の集石の規模は、径60×40cmの範囲に径20～30cm大の花崗岩の垂角礫4個ほどで構成される。〔埋土・堆積状況〕礫中及び礫の下位は主にⅣ層を起源とする黒褐色土が堆積する。〔その他の付属施設〕なし。〔重複遺構〕1号集石遺構の下位に10号土坑が位置する。〔出土状況〕掲載可能な遺物は出土しなかった。〔帰属時期〕出土遺物と検出面などから、縄文時代と推測される。

(阿部 勝則)



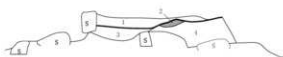
第46図 1～4号焼土遺構

5号焼土遺構(炉跡)



5号焼土遺構

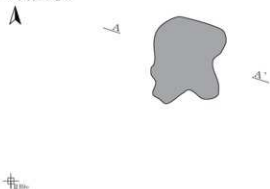
△ L=15,900m



5号焼土遺構

1. 10YR2/1 黒色、砂質シルト、締まり中、花崗岩粒 3% 含む。
 2. 7.5YR4/6 褐色、焼土、締まり中、黒色土ブロック 3% 含む。
 3. 10YR2/2 黒褐色、砂質シルト、締まり中、花崗岩粒 1% 含む。
 4. 10YR1.7/1 黒色、砂質シルト、締まり中、
- 骨髄の内側が単変しているように見える。

6号焼土遺構



6号焼土遺構

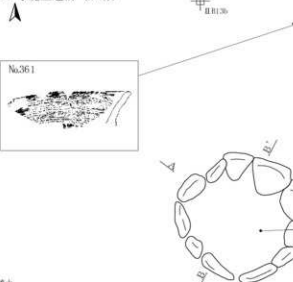
△ L=19,200m



6号焼土遺構

1. 7.5YR6/6 褐色、焼土、締まり中、7.5YR5/6 黄褐色 30%、5YR6/9 褐色焼土ブロック 5% 含む。
2. 10YR2/3、黒褐色、シルト、締まり中、炭化物 5% 含む。

10号焼土遺構(炉跡)



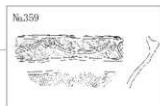
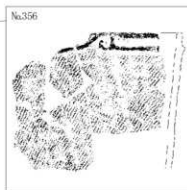
10号焼土

△ L=17,900m

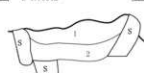


10号焼土遺構(炉跡) A-A'・B-B'

1. 10YR2/3 黒褐色、シルト、締まり中、花崗岩粒 1% 含む。
2. 10YR2/2 黒褐色、シルト、締まり中、本根含む。



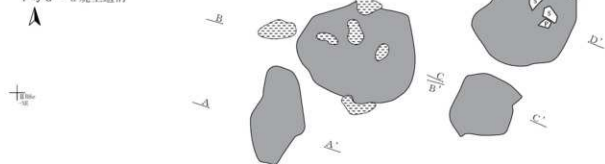
B L=17,900m



(遺物実測図縮尺不定)

第47図 5・6・10号焼土遺構

7号a～d焼土遺構



7号a焼土遺構

A L=19,900m A'



1. 7.5YR6/6 褐色。焼土。縮まり中。花崗岩粒含む2%含む。(汚れた焼土)
2. 10YR4/6 褐色。焼土。縮まり中。花崗岩粒含む3%含む。

7号b焼土遺構

B L=19,200m B'



1. 10YR4/6 褐色。焼土。縮まり中。花崗岩粒1%含む。(汚れた焼土)
2. 7.5YR6/8 褐色。焼土。縮まり中。花崗岩粒1%含む。

7号c焼土遺構

C L=19,900m C'



1. 10YR4/6 褐色。焼土。縮まり中。花崗岩粒1%含む。(汚れた焼土)
2. 7.5YR6/8 褐色。焼土。縮まり中。

7号d焼土遺構

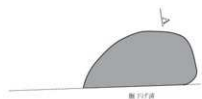
D L=19,900m D'



1. 10YR4/6 褐色。焼土。縮まり中。花崗岩粒1%含む。(汚れた焼土)
2. 7.5YR6/8 褐色。焼土。縮まり中。

8号焼土遺構

A 10m



8号焼土遺構

A L=15,800m A'

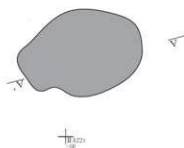


8号焼土遺構

- 1a. 5YR5/8 明赤褐色。シルト。粘性やや弱。縮まりやや密。キメ細かい焼土。
- 1b. 1a層がにごったような土。
2. 10Y2/3 黒褐色。シルト。粘性やや強。縮まりやや疎。微熱灰味。

9号焼土遺構

A 10m



9号焼土遺構

A L=15,000m A'



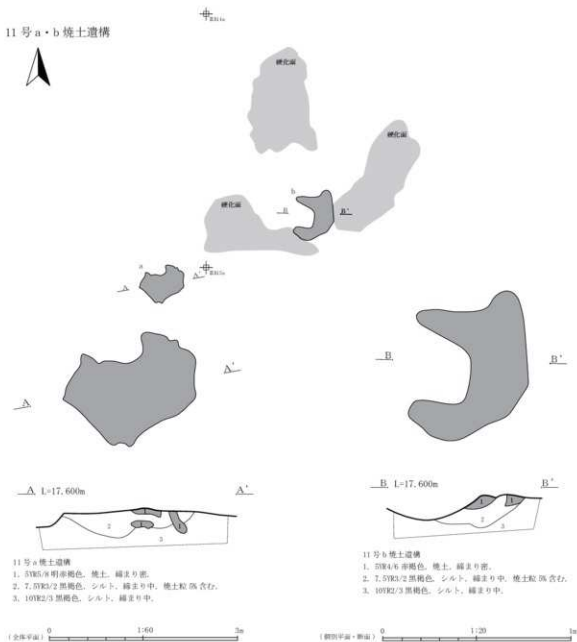
9号焼土遺構

1. 5YR5/8 明赤褐色。シルト。粘性やや弱。縮まりやや密。キメ細かい焼土。きれいに焼けている。
2. 10YR3/3 暗褐色。シルト。粘性やや強。縮まりやや密。0.5mm～1cm程度の量含む。

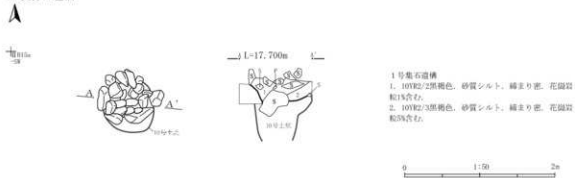


第48図 7～9号焼土遺構

11号a・b焼土遺構



1号集石遺構



第49図 11号焼土遺構、1号集石遺構

(5) 柱 穴 (第50図)

調査区全体から検出された柱穴は19個である。その中で掘立柱建物になるものは無かった。

PP1は、縄文時代の遺構が希薄になっている調査区北部で検出され、古代に帰属する7号a~d焼土遺構と関係する可能性がある。

PP2~17は、調査区北~中央部で検出した。堅穴建物跡や、掘立柱建物に付随する柱穴の可能性はあるが、調査区外の境に近く、明確な掘り込み等も検出しなかったため、単独の柱穴とした。

PP18・19は、調査区南の西側で検出した。付近では、縄文と古代の遺構を検出したが、それらの堅穴建物跡に付設されたものという位置付けができなかった。

PP2~19は、検出面から縄文時代に帰属すると考えられる。

(6) 沢 跡 (第51図、写真図版42)

縄文時代の遺物包含層であるⅢ層とⅣ層を掘り下げ、遺構最終確認面であるⅤ層を検出していく際、調査区西際を南北に縦断するように黒色土が厚く堆積する範囲を確認した。これは、表土掘削時にはまだ確認できていないものであった。

調査区北西部では、検出面から一段下がる範囲があり、試掘トレンチによる調査を行っている。この部分は黒色土の堆積が薄く、遺構遺物は確認されなかった。また、その際に、黒色土の下に砂礫層が見られたことから間木戸川の氾濫により、本調査区内も過去に流路が形成されていたことが判明していた。

そのため、現在の地形を観察し、調査区西際は間木戸川による段丘状に形成された沢跡と判断した。また、この部分に黒色土が厚く堆積していると想定し調査を進めた。

この範囲は、2・3・4・8・10・24号堅穴と重複する。調査区のほぼ中央を横断するように中央セクションを設定し、堆積土層断面図を作成した。断面図の1a層は、古代の遺構に確認できる主堆積土のⅡ層であり、断面の形状から調査区外にかかる遺構があった可能性が考えられる。それに切られている3a・3b層の灰黄褐色シルトは、10号堅穴の埋土でも確認しており、土器を特に多く含んでいた。この灰黄褐色シルトは、調査区内で西側の一部でしか確認できていない土であり、人為的な様相である。5・6層は炭を含む黒褐色シルトである。7・8a~c層は、Ⅲ層に相当するものであり、調査区全体に確認できる。その下は、自然堆積と考えられる粘土質シルトが確認できる。

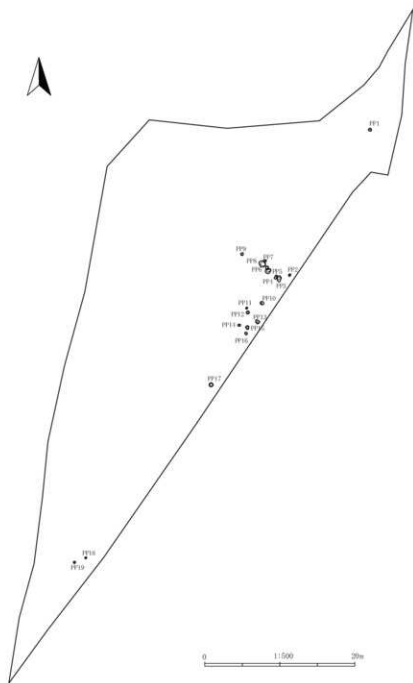
出土遺物は、堆積土下位から、G027・028の石製品が出土している。縄文土器は、P482・484・485・493・544・545・570~574等が出土しており、いずれの層からも多量に出土している。

3a・3b層である灰黄褐色シルトからは、P482・485・570等が出土している。また、7・8a~c層からは、P572・573が出土している。土器の特徴から大木6から8b式を含む7・8a~c層、大木8a・8b式を含む3a・3b層と捉まえることができる。7・8a~c層(Ⅲ層)は、大木6・7a式のみでなく中期後半の土器を多く包含しているため、大木6・7a式期と限定することが出来ない。しかし、その上に堆積する、3a・3b層は、人為的様相の灰黄褐色シルト内から多くの大木8a・8b式の土器が出土しており、一定の期間に廃棄された堆積土と考えられる。

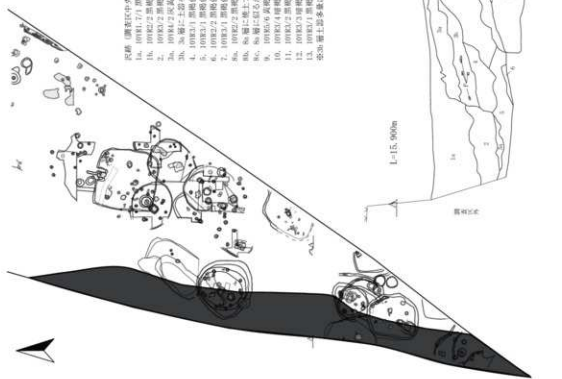
重複する10号堅穴の堆積土上位にも、同様の堆積が認められる。10号堅穴は縄文時代中期前葉から中葉に帰属すると考えられ、沢が埋没する途中に堅穴が構築され、その後廃絶し埋没していく過程で先述した縄文時代中期中葉の人々が、この窪地にも土器等の廃棄行為を行ったのではないかと考えられる。

(佐藤 あゆみ)

名前	グリッド	高低差
PP1	II B8e	26.4
PP2	II B13e	16
PP3	II B13b	51.6
PP4	II B13b	25
PP5	II B13b	35.4
PP6	II B13b	30
PP7	II B12b	25
PP8	II B13b	26
PP9	II B12a	63.6
PP10	II B14b	37
PP11	II B14a	24.6
PP12	II B14a	33.6
PP13	II B14a	32
PP14	II B15a	46
PP15	II B15a	45.6
PP16	II B15a	27
PP17	II A17y	29
PP18	II A22a	20.4
PP19	II A22a	22.6



第 50 号 柱穴



図例 (調査区中水でクッション)

- 1a. 10181.7 灰色、粘状や中硬、層まりや中硬、古代遺構土体上。(目録)
 1b. 10182.2 黒褐色、シルト、粘状や中硬、層まりや中硬。(目録遺構が通じた感じ)
 2. 10183.2 黒褐色、シルト、粘状や中硬、層まりや中硬。
 3. 10184.2 黒褐色、シルト、粘状や中硬、層まりや中硬。
 3b. 3b層に上部を多数に含む。
 4. 10183.1 黒褐色、シルト、粘状や中硬、層まりや中硬、灰状少量含む。
 5. 10183.1 黒褐色、シルト、粘状や中硬、層まりや中硬、灰状少量含む。
 6. 10183.2 黒褐色、シルト、粘状や中硬、層まりや中硬、灰状少量含む。
 7. 10183.1 黒褐色、シルト、粘状や中硬、層まりや中硬、マサ土状少量含む、8層よりマサ土状多め。(目録)
 8a. 10183.2 黒褐色、シルト、粘状や中硬、層まりや中硬、マサ土状少量含む、並田多い。(目録)
 8b. 8b層に相当するマサ土状はより少額になる。
 9. 10183.6 黒褐色、粘土質シルト、粘状強、層まりや中硬。
 10. 10183.4 黒褐色、シルト、粘状や中硬、層まりや中硬、マサ土少量含む、砂混じり。
 11. 10183.2 黒褐色、シルト、粘状や中硬、層まりや中硬、マサ土中量含む、灰状少量含む、シロリシヤラ風。
 12. 10183.2 黒褐色、シルト、粘状や中硬、層まりや中硬、マサ土中量含む、層より明るい。(目録)
 13. 10183.2 黒褐色、シルト、粘状や中硬、層まりや中硬、マサ土少量含む、マサ土多め。
 14. 10183.2 黒褐色、シルト、粘状や中硬、層まりや中硬、マサ土少量含む、マサ土多め。
 15. 10183.2 黒褐色、シルト、粘状や中硬、層まりや中硬、マサ土少量含む、マサ土多め。

第51図 沢跡

3 遺 物

(1) 縄文～弥生土器(第52～116図、写真図版55～96、観察表は図内)

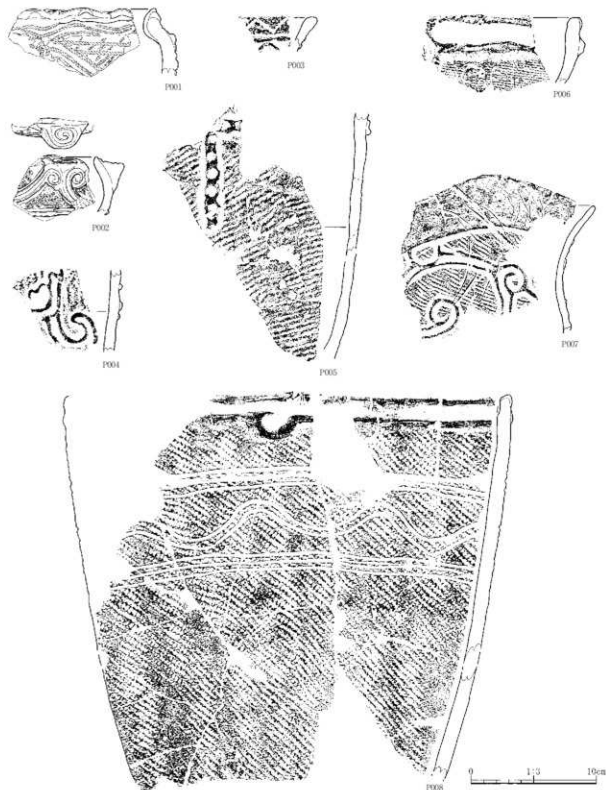
大コンテナ(32×42×30cm)約54箱(接合前)出土。大部分(2/3以上)を縄文時代中期中葉大木8 a～b式土器が占め、次いで縄文時代前期前葉大木1式～中期前葉大木7 b式、中期後葉大木9式古期で、その他は非常に少なく数片ずつである。その他には、縄文時代早期中葉貝紋土器(P450)、早期末表裏縄文土器があり(P439、P440)、P189は縄文時代中期初頭円筒上層a式、P519は弥生時代中期、P558は縄文時代後期初頭三十稲場式系土器と思われる。P312は縄文時代後期後葉、P396は縄文のみだが中期末大木10式、P556は後期前葉十腰内I式古期の可能性がある。P500は縄文前期末円筒下層d式の影響を受けているか。大木1～7 b式では、大木7 a式が比較的多く、次いで大木4～6式で、大木3、7 b式は少ない。大木1～2 b式では、明確に型式同定できるものは少ないが、一定量出土しているようである。大木9式古期は、大木3、7 b式より少し多い程度か。4号竪穴建物跡と17号竪穴建物跡で比較的多く出土した。その他の土器型式については、大木7 a式古期に21号竪穴建物跡等幾つかまとまった地点が認められる以外は、大木8 a～b式土器に混じって出土している。

掲載基準(原則)。出土量が多く、また遺構内出土品が多くを占めるので、遺構外については、遺構内で出土していない時期・型式以外は、概ね10×10cm以上の残りの良いものしか選ばなかった。遺構内についても、床面出土やNo.遺物等出土位置が明確なものを除いて、残りの良いものしか選んでいない。676点を選別したが、遺構外251点は図化が追いつかず、149点しか掲載できなかった。

整理を通して気づいた特徴。大木8 a～8 b式は、縄文を胴部タテ回転するのが通常だが、口縁部は別でヨコ回転するものが多い。底面はナデ調整している。P68は、東北地方南部系の球胴鉢か。興野義一氏は「大木4式と大木5式とで大きく異なる点は、5式では体部の粘土組貼付文が折目正しく、細かくちぎってつけられて、連続山形または鋸歯状になること」(興野 1996:p.219)と述べているが、今回調査で出土した大木5式とおぼしき土器は鋸歯状になるものがほとんどなく、大木4式との区別が難しい。大木4～5式では、外面のスス付着や内面のコゲ付着が顕著に見られ、内面のコゲは大木6～7 a式球胴鉢の下半部にも顕著である。

個々の記載は表に記したので、ここで表の見方を補足しておく。観察表の出土位置の欄の(分数)は、出土割合を示す。「→」は調整順序を示し、矢印左側の方が前で、右側が後。以下、表の補足。P46の出土位置は、表に記したほかに、「3号竪穴建物跡西・2層」、「3号竪穴建物跡西・3層」、「3号竪穴建物跡西・埋土上位」、「3号竪穴建物跡・埋土上位」、「3号竪穴建物跡・埋土中位」がある。P51は、このほか「II A20 v・IV層上位」で取り上げた破片も接合していて、その割合は、「3号竪穴」が3/6、「6号竪穴」が2/6、「II A20 v」が1/6。P274は、接合して1/4周以上残存しているが、上から見ると楕円形を呈す。これが本来の形か歪んでいるのか判断がつかないで径は復元しなかった。P273とも同一個体の可能性がある。P406の出土位置は、表に記したほかに、「II A21 t・II～III層」、「II A21 t・III層下位」がある。P460の絡条体圧痕は、軸部分の回転圧痕が認められる。P575の突起口唇部に縄文あり、原体は単軸絡条体第1類(L)のように見えるが、Lの側面圧痕かも知れない。帯状のスス、コゲは、胴部中央に幅4 cm程度に認められる。

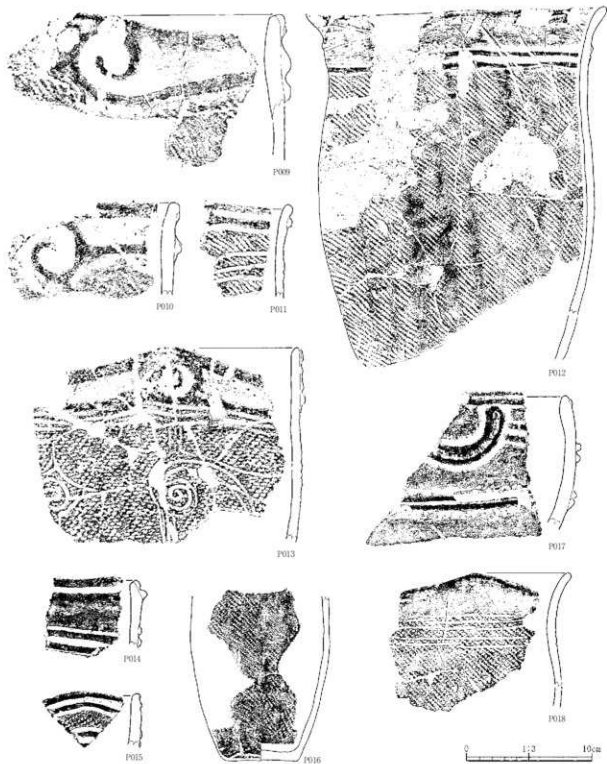
参考文献 興野義一 1996「山内清男先生供与の大木式土器写真セットについて」『画龍天晴』山内先生 没後25年記念論集刊行会 (金子 明彦)



第3表 間木戸Ⅱ遺跡縄文～弥生土器観察表

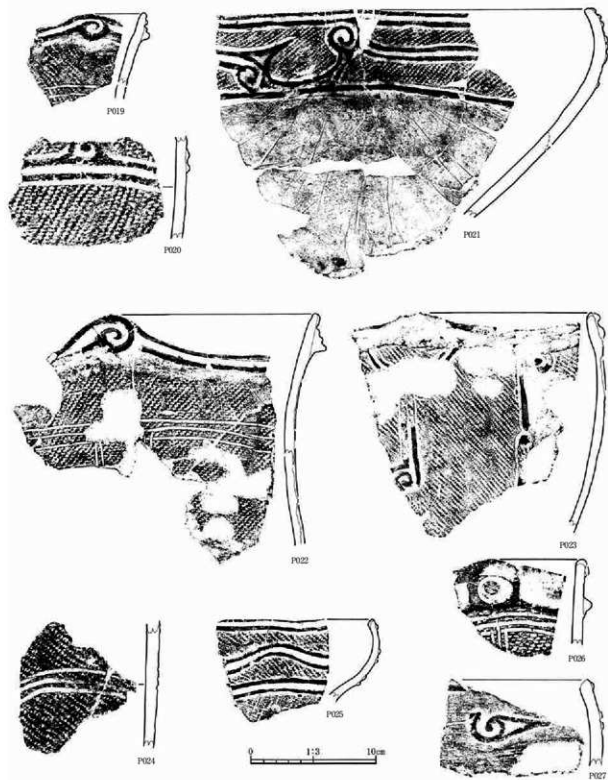
品名 No.	出土地点・層位	器種・部位	内 面 (調査部位)	内 面 (調査部位)	備 考	本文 記載	写 真
P001	26号竈穴遺物跡表(木箱)・埋土上～中位	漆鉢・口縁部	口縁部・胴部(底底・底面、縄文形跡など)	内面			32/50
P002	26号竈穴遺物跡表・埋土上～中位	漆鉢・口縁部	口縁部(器身・土、陶器片等)	内面			32/50
P003	26号竈穴遺物跡表・床面	口縁部	底底・口縁部	内面			32/50
P004	26号竈穴遺物跡 p02埋土	漆鉢・胴部	L.R. 100→100 状部	内面	内面全滅大付着		32/50
P005	26号竈穴遺物跡表、底面、底面、埋土上～中位、No. A15a・墓室下位	漆鉢・胴部	L.R. 100、ナナメ→器口上側	内面	器口部・内面大付着		32/50
P006	27号竈穴遺物跡表(木箱)・埋土上	漆鉢・口縁部	口縁部(L.R. 100)→器口上側	内面	内面大付着		32/50
P007	19号竈穴遺物跡・埋土上～底面、26号竈穴遺物跡・埋土上～中位	漆鉢(口縁部)	口縁部(L.R. 100)→器口上側	内面	内面全滅大付着		32/50
P008	26号竈穴遺物跡 土器埋土、埋土上位	漆鉢(口縁部)	口縁部(底底・底面、縄文形跡など)	内面	内面全滅大付着		32/50

第52図 縄文～弥生土器(1)



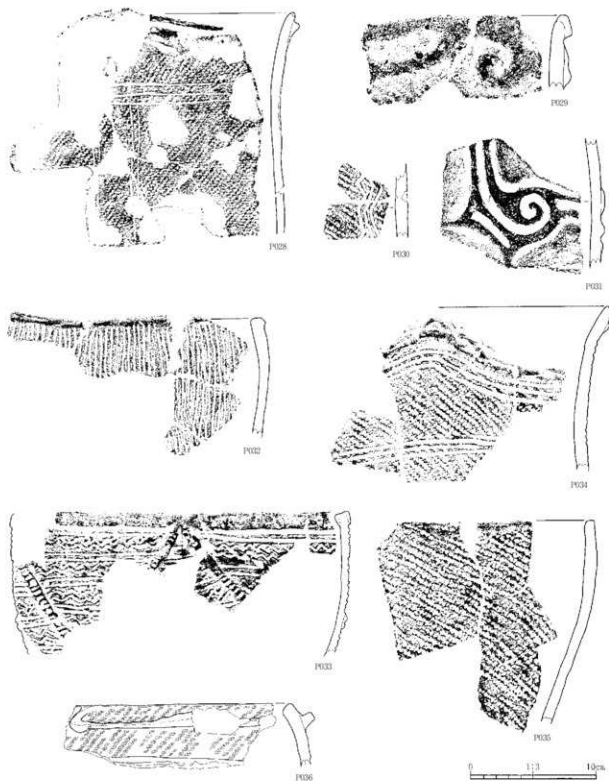
取組 No.	出土地点・層位	器種・部位	装 飾 (白陶器・黒土・赤土・灰土・灰黒・黄七土等使用)	内 面	備 考	本工 品別	号 数
P009	2号壺穴建物跡上段2床面	深鉢・1100部	上段ナナク→高の帯目	ナク	胎上石・外底ナナク付着・10上段→		53 55
P010	2号壺穴建物跡上段2床面	深鉢・1100部	上段ナナク(摩耗)	ナク	9段内→黄鉄?		53 55
P011	2号壺穴建物跡上段2床面	深鉢・1100部	上段ナナク→浅の沈線	ナク			53 55
P012	2号壺穴建物跡上段3床面, 2号壺穴建物跡西・埋上上位, 2号壺穴建物跡西	深鉢(胎中略一用)	上段ナナク→浅帯→5ナナク	ナク	胎上石, 下二次焼成, 内コテ		53 56
P013	2号壺穴建物跡上段2床面	深鉢	上段ナナク→浅の沈線	摩耗	内面摩耗		53 55
P014	2号壺穴建物跡東・1層	深鉢・1100部	—————	ナク			53 55
P015	2号壺穴建物跡東・1層	深鉢・1100部	上段ナナク→低の沈線に5ナナク	ナク			53 55
P016	2号壺穴建物跡西・埋上上位(1位), 主A18・古層上位	鉢(流のみ一用)	上段ナナク→浅帯→黄鉄ナク	ナク	胎上石, 内面20上コテ付着		53 56
P017	2号壺穴建物跡西・埋上上位	口縁部	(ナナク)	ナク	下の胎上石, 胎上段分面剥離		53 55
P018	2号壺穴建物跡西・埋上上位	鉢(1・4間以下)	黄鉄・上段ナナク→浅の沈線	ナク	胎上石, 内面ナナク付着		53 55

第53図 縄文～弥生土器(2)



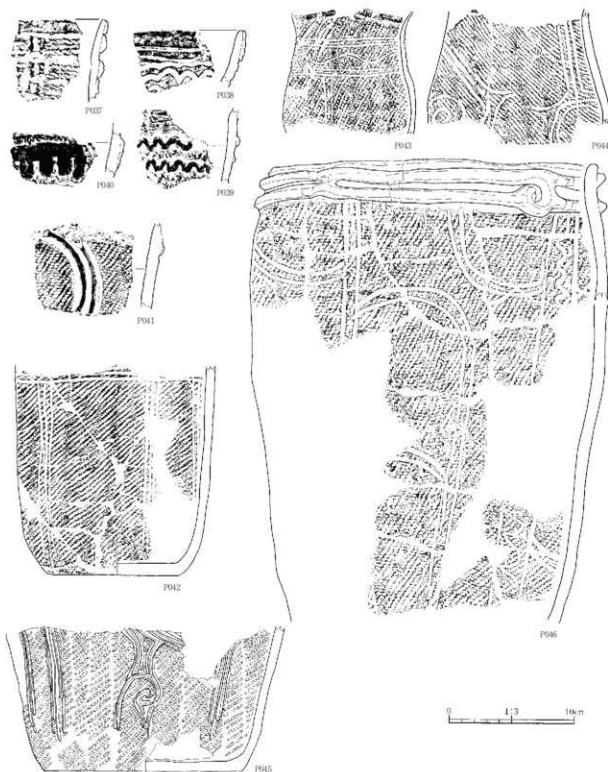
図版 No.	出土地点・層位	器種・部位	内 面 (裏面)	外 面 (外面)	備 考	本文 記載	図 No.
F019	2号壺穴建物跡西・棟上土段	漆鉢・口縁部	3号線部/銅瓦/漆部/底面、銅瓦取縁合口	ナナ			54 55
F020	2号壺穴建物跡西・棟上土段	漆鉢・胴部	銅瓦/ナナ→漆部/漆部	ナナ	外面二次焼成で磨耗		54 56
F021	2号壺穴建物跡西・棟上土段	漆鉢(1.5号未満)	1.5号ナナ→漆部/漆部/漆部	ナナ	内面磨耗		54 56
F022	2号壺穴建物跡西・棟上土段	漆鉢(1.5号以下)	銅瓦/ナナ→漆部	ナナ	外面磨耗		54 56
F023	2号壺穴建物跡南・棟上土段	漆鉢(1.5号以下)	4号線部/1.5号ナナ→漆部/漆部/漆部	ナナ	外面磨耗		54 56
F024	2号壺穴建物跡南・棟上土段	漆鉢・胴部	1.5号ナナ→漆部/漆部	ナナ	外面磨耗		54 56
F025	2号壺穴建物跡北・棟上土段(1.2号)・2号壺穴建物跡南・棟上土段	漆鉢・口縁部	銅瓦/1号線部、銅瓦/漆部→漆部合口	ナナ	外面二次付着		54 56
F026	2号壺穴建物跡北・棟上土段	漆鉢・口縁部	銅瓦/銅瓦/ナナ→漆部	ナナ			54 56
F027	2号壺穴建物跡北・棟上土段	胴部	漆部合口	ナナ			54 56

第54図 縄文~弥生土器(3)



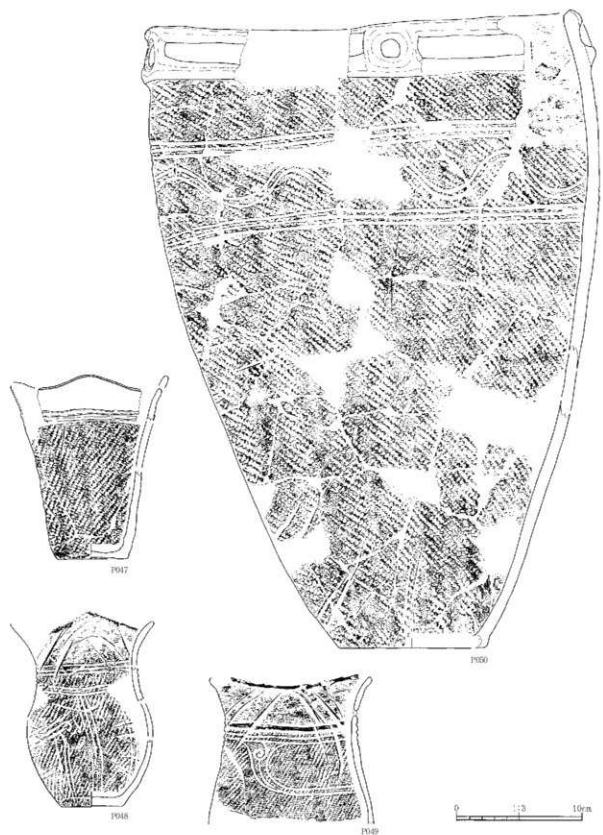
図録 No.	出土地点・層位	図解・部位	内 面 (装飾・文様)	外 面 (装飾・文様)	内 面 (形状・寸法)	考 考	本誌 図録	号 高
P029	2号惣穴建物跡北・埋上上位	漆線 (1.5cm以下)	江組紐・幾何・幾何・幾何・幾何(幾何)	波起・乱タテ→乱(波)起高	帯状	内面直線・帯状	55	56
P030	2号惣穴建物跡北・1層	漆線・口縁部			ナデ	胎土付・内面厚肌	55	56
P031	2号惣穴建物跡北・1層	漆線・胴部		乱タテ→乱(波)起高	ナデ	下の胎土付・胎土層分厚(剥離?)	55	57
P032	2号惣穴建物跡北・土器トレンチ・埋上1層	漆線・胴部		幾何なでこ?	ナデ了等		55	57
P033	2号惣穴建物跡北・土器トレンチ・埋上1層、ⅡA19・Ⅱ層上位	漆線・口縁部		乱タテ・乱(波)起高	ナデ		55	57
P034	ⅡA21a・Ⅱ層・5層	漆線 (1.5cm以下)		乱(波)起高・幾何・幾何・幾何・幾何(幾何)	ナデ	内面7線以下(7コ)付	55	57
P035	ⅡA21a・Ⅱ層・5層	漆線 (1.5cm未満)		乱タテ→乱(波)起高	ナデ		55	57
P036	ⅡA21a・Ⅱ層・5層	漆線・口縁部		乱タテ→乱(波)起高	ナデ		55	57
P036	ⅡA21a・Ⅱ層・5層	漆線・口縁 (1.5cm未満)		高い波帯・乱(波)起高・上層幾何(乱(波)起高・7層ナデ)	ナデ		55	57

第55図 縄文～弥生土器(4)



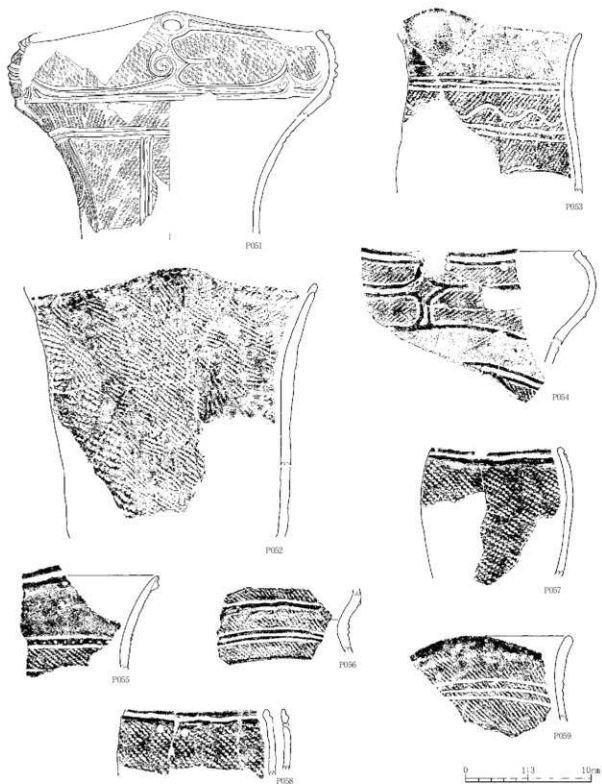
図番	出土地点・層位	器種・部位	内面	外面	備考	本文 記載	頁 高
P037	ⅡA21a・最上層	深鉢・口縁部	西の縁部→上段 斜め目立	ナナ	内面ナナ目立		56 57
P038	ⅡA21a・最上層	深鉢・口縁部	半截竹管状上段に上段目立	ナナ			56 57
P039	ⅡA21a・最上層	深鉢・口縁部	上段 口ナ→西の縁部	ナナ			56 57
P040	ⅡA21a・最上層	深鉢・胴部	太く西の縁部→西の縁部	ナナ	内面ナナ、内面コナ		56 57
P041	ⅡA21a・最上層	深鉢・胴部	西、ナナ→西の縁部→西の縁部	ナナ			56 57
P042	3号型(遺物群)・内面土器 No.1 (1号)・最上層、最上層	深鉢(胴部)一組	支那4号型・西、ナナ→西の縁部→西の縁部	ナナナナ			56 57
P043	3号型(遺物群)・内面土器 No.2 (1号2号)・最上層、最上層	鉢(口縁部)	西の縁部→西の縁部→西の縁部	ナナナ			56 57
P044	3号型(遺物群)・内面土器 No.4 (1号3号)	鉢(口縁部)	上段 口ナ→西の縁部	ナナナ	内面ナナ、内面コナ目立		56 57
P045	3号型(遺物群)・内面土器 No.5(1号4号)・最上層、最上層	深鉢(胴部)一組	西、ナナ→西の縁部→西の縁部	ナナ	内面ナナ、内面コナ目立、胴上段合面縞		56 57
P046	No.96-3号型(遺物群)・内面土器 No.5(1号5号)・最上層	深鉢(口縁部)	支那2号型・西、西、西、ナナ→西の縁部、ナナ	ナナ	内面ナナ、内面コナ、内面コナ	273	56 58

第56図 縄文～弥生土器(5)



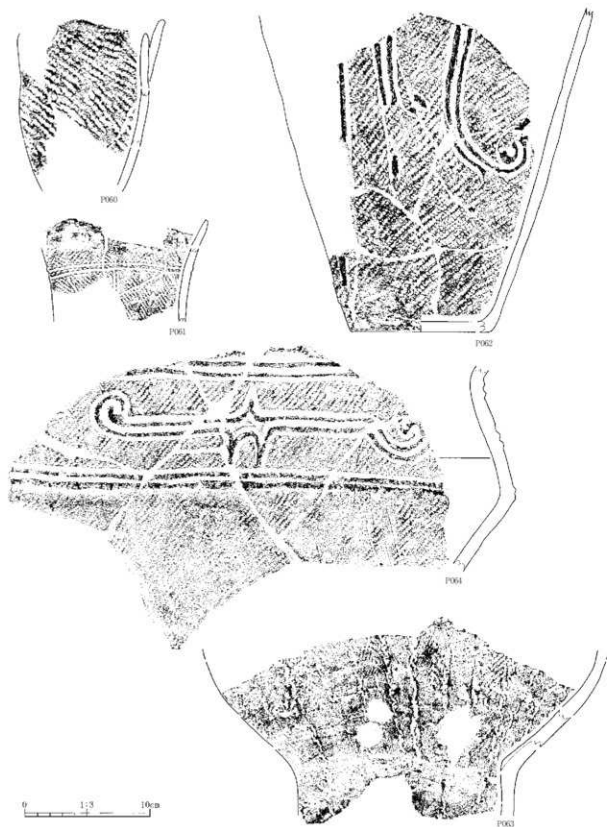
図番	出土地所・層位	器種・形状	内面	外面	文様	備考	本文 文様	図 番
P947	1号壺の建物跡上段 Ⅱa-Ⅱb段, 2号壺の建物跡裏面・埋土中位, Ⅲ上上段	鉢(浅一節)	口内面/胴部/肩部/底面/裏面, 縄文布巻付	内面 (裏面付)	平ナ	内口縁, 二次巻縄, 内底口内コナ		57
P948	1号壺の建物跡上段 Ⅱa,Ⅱb段, Ⅲ上中位, Ⅳ上中位, Ⅴ上中位	鉢(浅のふし一節)	二流紋口縁・底, ナナ→丸い底面, 裏面ナナ	ナナ	ナナ	内口縁, 内コナ		57
P949	1号壺の建物跡・埋土, Ⅳ上中位	鉢(浅一節)	二流紋口縁・文様2部付・裏文様・底, ナナ→丸い底面	ナナ	ナナ	内面不入付巻		57
P950	1号壺の建物跡裏面・埋土中位	深鉢(Ⅱa-Ⅱb段以下)	文様4部付・高(Ⅱa)段帯→L及ナナ→ナナ, 底め底面	ナナ	内面不入付巻			57

第57図 縄文~弥生土器(6)



図類 No.	出土地点・層位	図様・部数	内 面	内 面	備 考	本文 記載	写 真
P051	2号墓穴遺物断片・地上位。上段。6号墓穴遺物断片No.29断面。地上中位	波線・部数	(1)縦部・横部(縦部・横部・横部・横部など) (横部など)	ナナ	内面入り。内面口ナシ	P27	58
P052	2号墓穴遺物断片・地上上位	波線(2/3間本線)	文様不明(部数?)。縦・ナナ→去り残の波線	ナナ	内面入り。内面口ナシ		58
P053	2号墓穴遺物断片・3層。地上上位	線・上中	1横部・1上ナナ。ナナ	ナナ	内面入り。内面口ナシ		58
P054	2号墓穴遺物断片・地上上位	波線(1/3間本線)	2横部・1上。ナナ→去り残の波線	ナナ	内面入り付帯		58
P055	2号墓穴遺物断片・地上上位	波線(1/3間本線)	1上(1横部)コ。縦ナナ→縦部になでコ?	ナナ?	横部入り		58
P056	2号墓穴遺物断片・地上上位	波線・1上・横部	1上ナナ→縦部に行うナナ	ナナ	内面入り付帯		58
P057	2号墓穴遺物断片・地上上位	波線・横部	1上ナナ→縦部に行う縦・波線	ナナ	内面入り。内面口ナシ		58
P058	2号墓穴遺物断片・地上中位	線(1/3間本線)	1上ナナ	ナナ?	内面入り付帯。二次織物		58
P059	2号墓穴遺物断片・地上中位	波線・1横部	1上ナナ	ナナ?	内面入り付帯・横部入り		58
P059	2号墓穴遺物断片・地上中位	波線・1横部	1上(1横部)コ。縦ナナ→縦・波線	ナナ?	内面入り付帯		58

第58図 縄文~弥生土器(7)



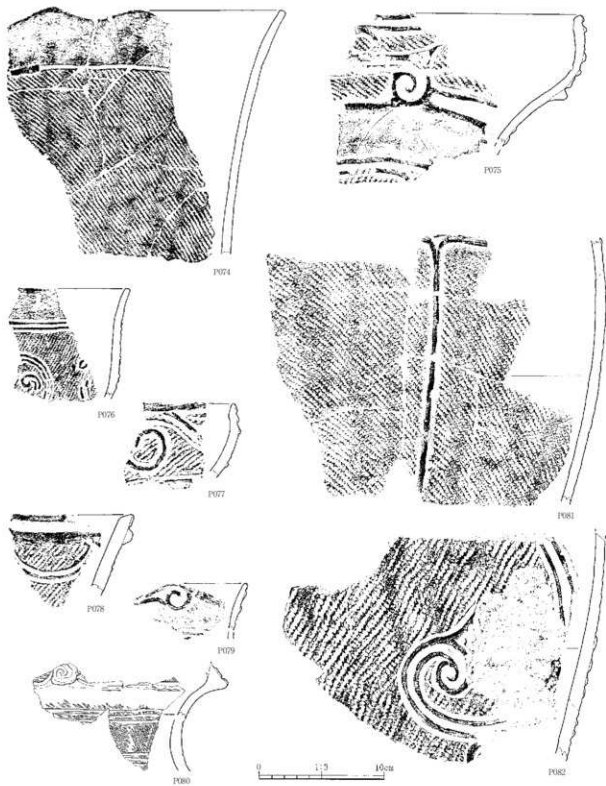
図版 No.	出土地点・層位	器種・部位	内 面 (口縁部/胴部/底部/底面, 縄文型体等)	外 面 (器壁など)	備 考	本文 記載	写 真 No.
P060	1号壺式建物跡東・埋土上段, 中位, 南・埋土上段	鉢 (1.2段以下)	内底・1段下ナ	ナナ	内面スス打毫		30/00
P061	1号壺式建物跡東・埋土中位	鉢 (1.2段未満)	口縁突出・1段下ナ→1段以下底面, 内・内底	ナナナ	内面スス打毫		30/00
P062	1号壺式建物跡・南1端, 2号壺式建物跡東・埋土中位層 (3-4)	深鉢 (2.5段未満)	内, ナナ→内・底面→内ナナ	ナナ	内面スス, 二次焼成・内1部ナナ		30/00
P063	1号壺式建物跡東・埋土中位 (1.2段), 2 A10a・埋土下段	深鉢鉢 (1.4段)	内・底面ナナ	ナナ	内二次焼成, スス, 内ナナ多		30/00
P064	1号壺式建物跡東・埋土上段	浅鉢 (1.5段以下)	内, ナナ→底面(内)内・内底	ナナ	内面スス・内外磨光		30/00

第59図 縄文～弥生土器(8)



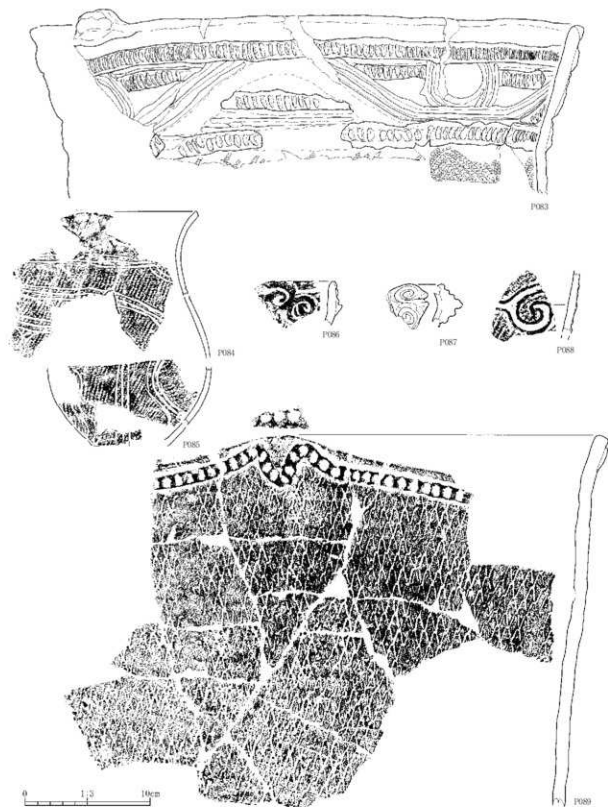
図番 No.	出土地点・層位	図種・部位	内 面 (口縁部/胴部/底部/底縁/底面/底縁部/底心)	外 面 (口縁部)	備 考	本文 図録	頁 No.
P065	2号窯穴遺物群東・塚土中位	漆線(口縁部以下)	LS+タテ・漆線女でつゞ	ナデ?案	内面スズ付着	60	61
P066	2号窯穴遺物群東・塚土中位	漆線(口縁部)	ヨコからの半儀竹管状土器による刺突	厚肌	内面磨製跡あり	60	61
P067	2号窯穴遺物群東・2層、塚土中位	漆線(口縁部)	胎行上、下から刺突	ナデ		60	61
P069	2号窯穴遺物群東・塚土中位	漆線(口縁部)	内面肥厚/縦かへ刺突、沈腐	ナデ	内面コブ	60	61
P070	2号窯穴遺物群東・塚土中位	漆(口縁部)	胎(口縁部)・LS+タテ→丸く浅い沈腐	ナデ?	内面スズ付着	60	61
P071	2号窯穴遺物群東・塚土中位	漆線(口縁部)	胎(口縁部)	ナデ	内面中々厚肌	60	61
P072	2号窯穴遺物群東・塚土中位	漆線(胎部)	LSヨコ→漆線ヨコヨコナデ	胎中?		60	61
P073	2号窯穴遺物群西・2層、2層	漆線(底のふみ部)	胎(口縁部)・LS+タテ→胎の浅い沈腐、底部一底面ナデ	ナデ	外上スズ、下二次沈腐、内面コブ	60	61

第60図 縄文～弥生土器(9)



図版 No.	出土地点・層位	図柄・部位	内 面		備 考	本文 図版	頁 No.
			文 様	装 飾			
P074	3号壺穴装物群西・2層	漆線 (1.5周未満)	直線状縦線・上段ナカ→直線の成層→直線・粘土線	ナナ	内面ナカ、内面コナ、下開口、柄縁	61	61
P075	3号壺穴装物群西・2層	漆線・口縁部	直線・漆線→直線ナカ、直線・ナカ	ナナ	内面ナカ、内面柄縁	61	61
P076	3号壺穴装物群西・2層	漆線・口・柄縁	直線・ナカ→直線・漆線に直線・直線	ナナ	内面ナカ付着	61	61
P077	3号壺穴装物群西・2層	漆線・口縁部	直線・ナカ→漆線に直線・直線 (粘土線ナカ)	ナナ	内面ナカ付着	61	61
P078	3号壺穴装物群西・2層	漆線・口縁部	直線・ナカ→直線・直線	ナナ		61	61
P079	3号壺穴装物群西・2層	漆線・口縁部	直線・漆線・直線に直線・直線	ナナ		61	61
P080	3号壺穴装物群西・2層	漆線 (1.5周未満)	直線・漆線・直線に直線・直線	ナナ		61	61
P081	3号壺穴装物群西・2層	漆線 (1.5周未満)	直線・ナカ→漆線にナカ	ナナ	内面ナカ付着	61	61
P082	3号壺穴装物群西・2層	漆線 (1.5周未満)	直線・ナカ→直線に直線・直線	ナナ	内面ナカ付着	61	61

第61図 縄文~弥生土器 (10)



図版 No.	出土地点・層位	図柄・部位	内 容 (図柄部/部部/底面/底面・縄文層部など)	内 容 (部部など)	備 考	本文 図版	写 真
P083	2号墓(遺物西側・西) ⅡA20・B-3層, 29・3層(2号・3号墓(遺物西側))	図柄(上・下両)	乱縄・部部	乱縄・部部		62	62
P084	2号墓(遺物西側・西)	部(上・下両)	乱縄・部部	乱縄・部部		62	62
P085	2号墓(遺物西側・西) 2層, 西上段	部(上・下両)	乱縄・部部	乱縄・部部		62	62
P086	2号墓(遺物西側・西)	部(上・下両)	乱縄・部部	乱縄・部部		62	62
P087	2号墓(遺物西側・西)	部(上・下両)	乱縄・部部	乱縄・部部		62	62
P088	2号墓(遺物西側・西)	部(上・下両)	乱縄・部部	乱縄・部部		62	62
P089	2号墓(遺物西側・西) ⅡA19, ⅡA20, ⅡA21, ⅡA22, ⅡA23, ⅡA24, ⅡA25, ⅡA26, ⅡA27, ⅡA28, ⅡA29, ⅡA30, ⅡA31, ⅡA32, ⅡA33, ⅡA34, ⅡA35, ⅡA36, ⅡA37, ⅡA38, ⅡA39, ⅡA40, ⅡA41, ⅡA42, ⅡA43, ⅡA44, ⅡA45, ⅡA46, ⅡA47, ⅡA48, ⅡA49, ⅡA50, ⅡA51, ⅡA52, ⅡA53, ⅡA54, ⅡA55, ⅡA56, ⅡA57, ⅡA58, ⅡA59, ⅡA60, ⅡA61, ⅡA62, ⅡA63, ⅡA64, ⅡA65, ⅡA66, ⅡA67, ⅡA68, ⅡA69, ⅡA70, ⅡA71, ⅡA72, ⅡA73, ⅡA74, ⅡA75, ⅡA76, ⅡA77, ⅡA78, ⅡA79, ⅡA80, ⅡA81, ⅡA82, ⅡA83, ⅡA84, ⅡA85, ⅡA86, ⅡA87, ⅡA88, ⅡA89, ⅡA90, ⅡA91, ⅡA92, ⅡA93, ⅡA94, ⅡA95, ⅡA96, ⅡA97, ⅡA98, ⅡA99, ⅡA100	部(上・下両)	乱縄・部部	乱縄・部部		62	62

第 62 図 縄文~弥生土器 (11)



図版 No.	出土地点・層位	器種・部位	内 面 (口縁部・胴部・底部・底面、縄文附体など)	内 面 (口縁部)	備 考	本文 記載	写 真
P090	3号窯穴遺物群西・編	深鉢・口縁部	乱・ナメ・縦帯・乱ナメ・底面ニシマツク	ナメ	内面大付着	63	62
P091	3号窯穴遺物群西・編	深鉢・口縁部	口縁部L乱 胴部印痕 / 胴L乱	ナメ	内面胴縁部	63	62
P092	3号窯穴遺物群西・編	深鉢・口縁部	乱・乱	ナメ	内面胴縁部	63	62
P093	3号窯穴遺物群西・編	深鉢・口縁部	乱・乱	ナメ	内面胴縁部	63	62
P094	3号窯穴遺物群西・編(3-11、西・2層、西・第1土室、東・2層(12))	深鉢(口縁部)	乱・乱	ナメ	内面大付着	63	62

第 63 図 縄文~弥生土器 (12)



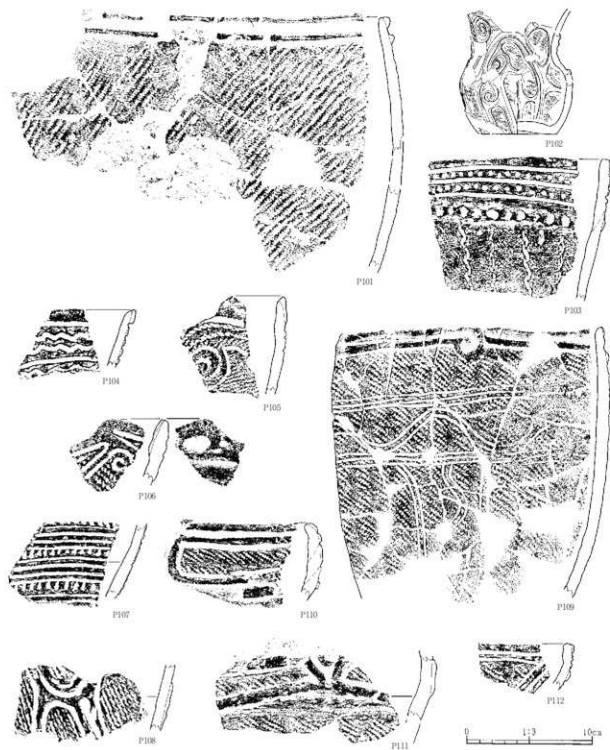
図版 No.	出土地点・層位	器種・部位	外 面 (口縁部・胎体・底面・裏面・縄文部等を示す)	内 面 (裏面を示す)	備 考	本文 図版	号 高
P005	3号墓六建物跡西-3層	鉢 (見欠)	二重絞-文様2層2段位。底、夕ナ→浅い波縞	2重ナ	内側裏面下、外縁スリ打痕	64	63
P006	3号墓六建物跡西-埋土上段	深鉢 (見欠) 周未識	1重、口縁ナリ。胎体ナリ(口縁部)にナリ浅い波縞	ナシ (見欠ナリ)	内スス、二次焼成	64	64

第 64 図 縄文~弥生土器 (13)



図版 No.	出土地点・層位	器種・部位	内面 (口縁部/胴部/底面/裏面、縄文組体など)	外面 (調整など)	備考	本文 記載	図 号
P097	3号壺状建物跡南・埋土上段。5号土坑土器No.1坑底	深鉢(胴-口)	1段、上コワ、フタテ→底面→裏面ナデ	ナデ	外土ニス、口二次焼成。内コガサ		45
P098	3号壺状建物跡南・埋土上段	深鉢・胴部	2段、ナデ→調整面までコワ	ナデ	内面コガサ付着		45
P099	3号壺状建物跡南・埋土上段。3号壺状建物跡南・埋土上段	鉢(2/3周未満)	1段、ナデ→底面、底面→裏面ナデ	ナデ	外二次焼成?。内面コガサ		45
P100	3号壺状建物跡南・埋土上段	鉢(1/2周未満)	底面コワ、胴い帯部、2段、コガサ調整に類似い底面	ナデ	内面ニス。内面コガサ付着		45

第65図 縄文~弥生土器(14)



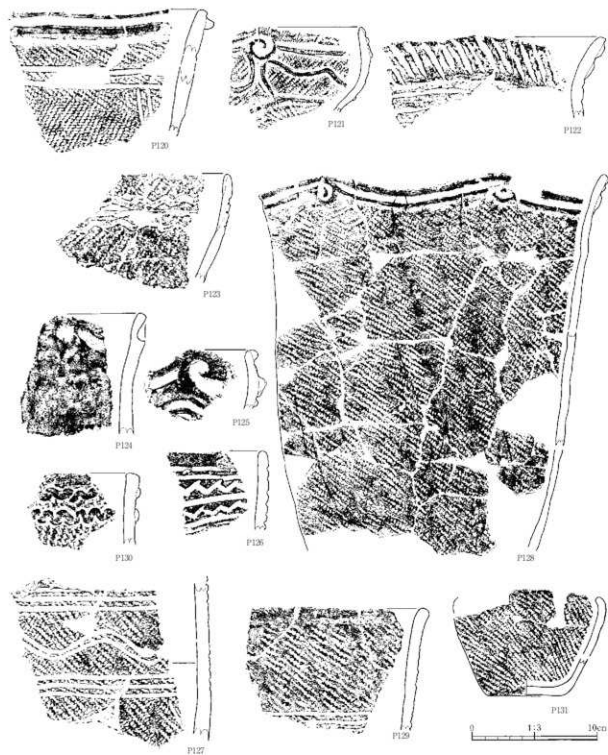
図版 No.	出土地点・層位	器種・部位	内 装 (付属品・類器/底面/裏面, 縄文取跡など)	内 装 (調査記)	備 考	本文 記載	附 属
P101	3号壺穴建物跡南・層上中部	漆鉢・口縁以下	底, ナメ→盛壺などにつ	ナメ	特殊穴文, 漆跡	66	64
P102	3号壺穴建物跡南・層上中部	鉢・立(口縁以下)	口縁ナメ→盛壺に付の取跡 / 底面ナメ	ナメ		66	62
P103	3号壺穴建物跡南・層上中部	漆鉢・口縁部	竹管状土器に土器製, 古い縄壺取跡の跡付・土器・粘土層ナメ	ナメ		66	62
P104	3号壺穴建物跡南・層上中部	漆鉢・口縁部	太刀取→底面	ナメ	特殊穴文付着	66	62
P105	3号壺穴建物跡南・層上中部	漆鉢・口縁部	口縁ナメ→土器製取跡	ナメナメ		66	62
P106	3号壺穴建物跡南・層上中部	漆鉢・口縁部	内面取付, 取跡取付→取跡	ナメ	内装取跡	66	62
P107	3号壺穴建物跡南・層上中部	漆鉢・口縁部	上からの取付・取跡	ナメ	上の取付口, 粘土接合面取跡→穴コナ	66	62
P108	3号壺穴建物跡南・層上中部	漆鉢・胴部	口縁ナメ→盛壺に付の取跡	ナメ		66	62
P109	3号壺穴建物跡南・2層	漆鉢・口縁部	口縁部のみ取付文層(取付)・土器ナメ→取跡	ナメ	特殊穴文, 二次焼成	66	64
P110	3号壺穴建物跡南・2層	漆鉢・口縁部	口縁部のみ取付口縁部の取跡	ナメ	特殊穴文付着	66	62
P111	3号壺穴建物跡南・2層	漆鉢・胴部?	口縁ナメ→盛壺などにつ	ナメ		66	62
P112	3号壺穴建物跡南・2層	漆鉢・口縁部	口縁ナメ・取跡取付→取跡	ナメ		66	62

第 66 図 縄文~弥生土器 (15)



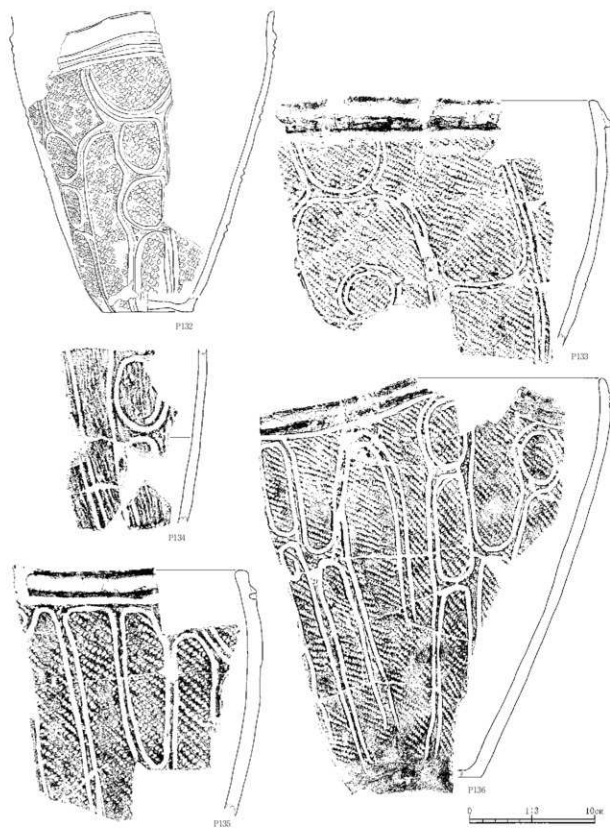
図版 No.	出土地点・層位	器種・部位	陶 器 (口縁部・胴部・底面・裏面、縄文形跡など)	内 容 (調査内容)	備 考	本文 図版 No.
P113	3号型六埴物跡西・4層	鉢・胴部	黒L.ナメ→洗い・沈着	ナメ	内面スス多。内面コナ。摩滅	67 65
P114	3号型六埴物跡西・埋土上段	深鉢 (1.5周半露)	黒L.ナメ→細く洗い・沈着	ナメ	内面スス付着	67 65
P115	3号型六埴物跡北・埋土上段	深鉢 (1周半露)	2周目・L.黒L.コナ。黒ナメ→摩滅までつけ、赤L.沈着	ナメ	内口スス。下二枚摩滅。内コナ多	67 65
P116	3号型六埴物跡北・埋土上段	深鉢 (1.2周以下)	L.黒ナメ→摩滅までつけ、L.黒L.ナメ	ナメ	内面摩滅。灰スス。二次焼成	67 66
P117	3号型六埴物跡北・埋土上段	深鉢 (1.3周半露)	赤L.細く洗い・沈着	ナメ	内面下部コナ	67 66
P118	3号型六埴物跡北・1層 (1.10)・3号型六埴物跡北・埋土中段・埋土上段	深鉢 (1.4周以下)	突起・黒L.ナメ→摩滅付→なでつけ、赤L.ナメ	ナメ	内面スス付着。下部二次焼成	67 66
P119	3号型六埴物跡北・埋土上段	深鉢・L.黒L.	L.黒L.ナメ	ナメ		67 66

第 67 図 縄文~弥生土器 (16)



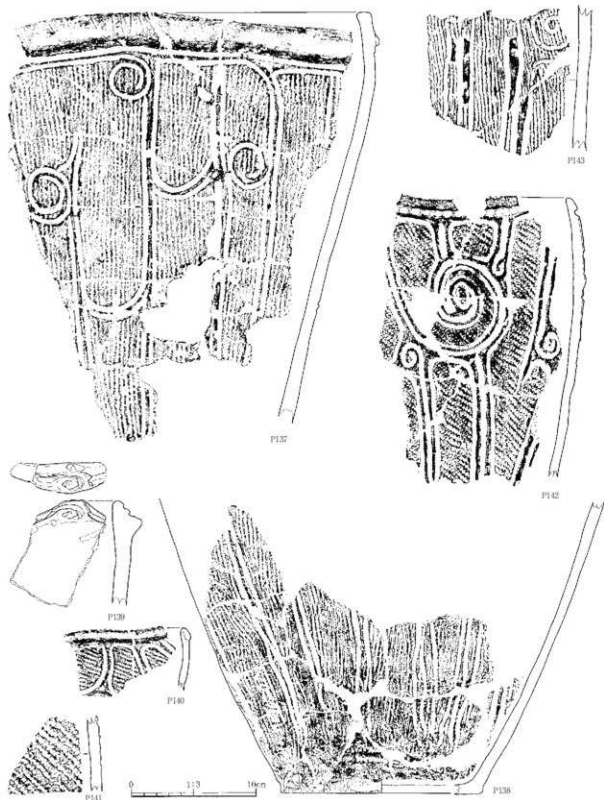
図録 No.	出土地点・層位	器種・部位	内 面 (口縁部・胴部・底部・底面・縄文取捨など)	内 面 (裏面など)	備 考	本文 記載	図 号
P120	3号壺穴建物跡北・層上上位	漆鉢・口縁部	乱L1縦ヨコ。割チター→乱い沈線	十字荒削			68-68
P121	3号壺穴建物跡北・層上上位	漆鉢・口縁部	L1, L2縦ヨコ。割チター→乱い沈線	十字	内面スリ目。内面コナ		68-69
P122	3号壺穴建物跡北・2層・3号壺穴建物跡北・層上上位 (3ヶ所)	漆鉢・口縁部	乱い沈線。割チター→乱い沈線	十字	内面スリ目。内面コナ		68-69
P123	3号壺穴建物跡北・層上中位	漆鉢・口縁部	L1, L2ヨコ→手組竹筒状土具による沈線	十字	内面スリ目		68-69
P124	3号壺穴建物跡北・層上中位	漆鉢・口縁部	割チター→内面押付 (縄文ナシ)	十字	内面スリ目		68-69
P125	3号壺穴建物跡北・層上中位	漆鉢・口縁部	変形・乱い沈線	十字	内面スリ目		68-69
P126	3号壺穴建物跡北・層上中位	漆鉢・口縁部	変形・乱い沈線	十字	内面スリ目		68-69
P127	3号壺穴建物跡北・層上中位	漆鉢・胴部	L1, L2チター→乱い沈線	十字	内面スリ目		68-69
P128	3号壺穴建物跡北・2層・3号壺穴建物跡北・2層	漆鉢 (3ヶ所用以下)	変形土押印付不明。L1, L2チター	十字	内面スリ目。二次焼成		68-69
P129	3号壺穴建物跡北・1層	漆鉢・口縁部	L1, L2チター→乱い沈線。口縁十字	十字	内面スリ目		68-69
P130	3号壺穴建物跡北・1層	漆鉢・口縁部	口縁部付組落しL1, L2チター→乱削	十字	内面スリ目		68-69
P131	3号壺穴建物跡跡付11号溝	底鉢 (底のみ一層)	L1, L2チター→乱削ナシ	十字			68-67

第 68 図 縄文~弥生土器 (17)



図版 No.	出土地点・層位	器種・部位	内 面 (口縁部・腹部・底面、縄文取付部)	外 面 (調整部)	備 考	本文 記載	写 真
P132	4号壺穴建物跡 p2	深鉢 (底のみ一部)	1. 点チ→丸い点線 / 底面十字	十字	内口縁のみ、内面十字	69	69
P133	4号壺穴建物跡 p2 深鉢	深鉢 (口縁部)	1. 点チ→点線	十字	口縁上・内面十字・丸い点線	69	67
P134	4号壺穴建物跡 p2 深鉢、4号壺穴建物跡南・残上下段 (3-5)	深鉢・胴部	点線(1) 空: 点チ→丸い点線	十字	内二次焼成、内下十字	69	67
P135	4号壺穴建物跡 p2 2-5、南・残上上・中段、北東・残上一括	深鉢・口縁部	1. 点チ→丸い点線 / 底面点線	十字		69	67
P136	4号壺穴建物跡 p2 2-5、北東・残上一括	深鉢 (口縁部)	点線(1) 丸い点線	点線(1) 点チ→丸い点線→口縁、腹部・底面十字	十字	69	67

第 69 図 縄文~弥生土器 (18)



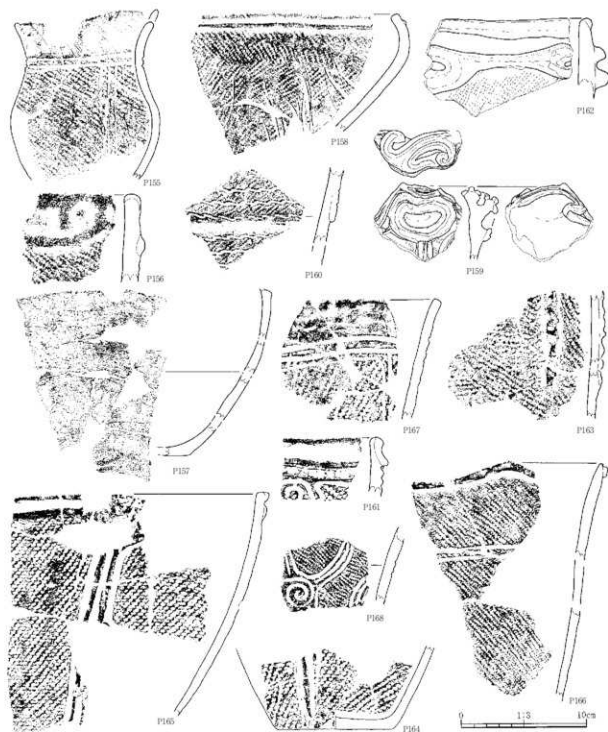
図録 No.	出土地点・層位	器種・部位	縄 目 紋 (1) 頸部・腹部 / 底部 / 肩部, 縄文彫刻的 (2) 頸部・腹部 / 底部 / 肩部, 縄文彫刻的	出 土 層 位 (調査地点)	備 考	本文 図録	写 真
P137	4号弥生建物跡跡・地上部	深鉢 (1/4周半部)	単納鉢 (L) 7ナテ→大い(沈)→10納ナテ	大(2)		70	68
P138	4号弥生建物跡・地上部, 層上1~中位	深鉢 (1/2周半部)	単納鉢 (L) 7ナテ→大(沈)→沈部→沈部ナテ	ナテ		70	68
P139	4号弥生建物跡中位部部・層上1~中位	深鉢・1周部	(ナテ)	ナテ		70	68
P140	4号弥生建物跡中位部部・層上1~中位	深鉢・1周部	L2 ナテ→大(沈)→沈部	ナテ	内面大付量	70	68
P141	4号弥生建物跡・地上1/2上~中位	深鉢・腹部	L2 ナテ	ナテ	内面大付量	70	68
P142	4号弥生建物跡/6号土人・層上1~中位	深鉢 (1/2周半部)	L2 ナテ→沈部に部分ナテ・横糸の刺突	ナテ	内面大付量	70	68
P143	4号弥生建物跡/6号土人・層上1~中位	深鉢・腹部	単納鉢 (L) 7ナテ→大(沈)→沈部	ナテ沈部	内面大付量	70	68

第70図 縄文~弥生土器 (19)



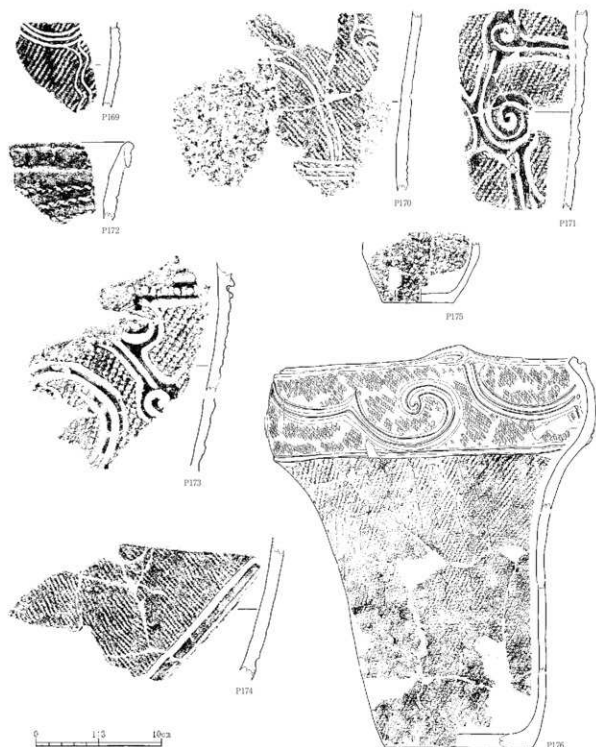
図版 No.	出土層位・層位	器種・部位	瓦 前	瓦 前	備 考	本文 記載	図 集
P144	IV層穴建物跡・埋土一層	漆鉢・口縁部	白磁質/黒部・黄部/黄部(黄部黄部白)	黄部(黄部白)			71. 66
P145	IV層穴建物跡・埋土一層	漆鉢・口縁部	白磁質/黒部・黄部/黄部(黄部黄部白)	黄部(黄部白)			71. 66
P146	IV層穴建物跡・埋土一層	漆鉢・口縁部	白磁質/黒部・黄部/黄部(黄部黄部白)	黄部(黄部白)			71. 66
P147	IV層穴建物跡・埋土一層	漆鉢・口縁部	白磁質/黒部・黄部/黄部(黄部黄部白)	黄部(黄部白)			71. 66
P148	IV層穴建物跡・埋土一層	漆鉢・口縁部	白磁質/黒部・黄部/黄部(黄部黄部白)	黄部(黄部白)			71. 66
P149	IV層穴建物跡・埋土一層	漆鉢・口縁部	白磁質/黒部・黄部/黄部(黄部黄部白)	黄部(黄部白)			71. 66
P150	IV層穴建物跡・埋土一層	漆鉢・口縁部	白磁質/黒部・黄部/黄部(黄部黄部白)	黄部(黄部白)			71. 66
P151	IV層穴建物跡・埋土一層	漆鉢・口縁部	白磁質/黒部・黄部/黄部(黄部黄部白)	黄部(黄部白)			71. 66
P152	IV層穴建物跡・埋土一層	漆鉢・口縁部	白磁質/黒部・黄部/黄部(黄部黄部白)	黄部(黄部白)			71. 66
P153	IV層穴建物跡・埋土一層	漆鉢・口縁部	白磁質/黒部・黄部/黄部(黄部黄部白)	黄部(黄部白)			71. 66
P154	IV層穴建物跡・埋土一層	漆鉢・口縁部	白磁質/黒部・黄部/黄部(黄部黄部白)	黄部(黄部白)			71. 66

第71図 縄文~弥生土器 (20)



図版 No.	出土地点・層位	器種・部位	母 形	内 容	備 考	本文 記載	頁 数
P155	3号型穴壇物跡南西(西側に意匠の可能性) 埋土一筋	鉢 (口周未図)	流紋口縁	口周部分(口縁部以下)	母土入。二次焼成。内全線コナ?	72	69
P156	3号型穴壇物跡南西(西側に意匠の可能性) 埋土一筋	漆鉢・口縁部	口周部分	口周部分	ナナ	72	69
P157	3号型穴壇物跡北東・埋土一筋	流紋口縁・胴部	胴部	胴部	ナナ	72	69
P158	3号型穴壇物跡北東・埋土一筋	流紋口縁	口縁部	口縁部	ナナ	72	69
P159	3号型穴壇物跡北東・埋土一筋	漆鉢・口縁部	口縁部	口縁部	ナナ	72	69
P160	3号型穴壇物跡北東・埋土一筋	漆鉢・口縁部	口縁部	口縁部	ナナ	72	69
P161	3号型穴壇物跡北東・埋土一筋	漆鉢・口縁部	口縁部	口縁部	ナナ	72	69
P162	3号型穴壇物跡北東・埋土一筋	漆鉢・口縁部	口縁部	口縁部	ナナ	72	69
P163	3号型穴壇物跡北東・埋土一筋	漆鉢・口縁部	口縁部	口縁部	ナナ	72	69
P164	3号型穴壇物跡北東・埋土一筋	漆鉢・口縁部	口縁部	口縁部	ナナ	72	69
P165	3号型穴壇物跡北東・埋土一筋	漆鉢・口縁部	口縁部	口縁部	ナナ	72	69
P166	3号型穴壇物跡北東・埋土一筋	漆鉢・口縁部	口縁部	口縁部	ナナ	72	69
P167	3号型穴壇物跡北東・埋土一筋	漆鉢・口縁部	口縁部	口縁部	ナナ	72	69
P168	3号型穴壇物跡北東・埋土一筋	漆鉢・口縁部	口縁部	口縁部	ナナ	72	69
P169	3号型穴壇物跡北東・埋土一筋	漆鉢・口縁部	口縁部	口縁部	ナナ	72	69

第72図 縄文~弥生土器(21)



図版 No.	出土地点・層位	図様・部位	内 面 (口縁部/胴部/底部/底面、編文関係など)	外 面 (図案など)	備 考	表-2 No.	頁 No.
P169	5号型I建物跡 pit-2層	深線・縦線	斜、ナナ→浅の波線	ナナ	内面スス付帯		73, 70
P170	5号型I建物跡・埋土上段	深線 (1/5周未満)	LRナナ→浅の波線	ナナ	内面縦線		73, 70
P171	5号型I建物跡前・埋土上段	深線・縦線	斜、LRナナ→浅帯、ナナ→斜、浅の波線	ナナ	内面全面スス、内面縦線		73, 70
P172	5号型I建物跡前・埋土上段	深線・口縁部	斜、浅の波線	ナナ			73, 70
P173	5号型I建物跡前・埋土上段、黄色土層直前段	深線・縦線	斜、LRナナ→浅帯→斜、ナナ、浅の波線、縦線	ナナ	内面スス、内面コゴ		73, 70
P174	5号型I建物跡前・埋土上段	深線 (1/5周未満)	斜、深線一部	ナナ			73, 70
P175	5号型I建物跡前・埋土上段	斜 (縦線一部)	斜、ナナ→ナナ→浅の波線	ナナ			73, 70
P176	5号型I建物跡上段集(上部No.)、2、4、6号層	深線 (一部欠損)	浅の波線、浅の波線一部、口縁部スス、胴部ナナ→ナナ (下部)	ナナ、ナナ	内面スス、1、2号層直前、内面コゴ		73, 71

第73図 縄文~弥生土器 (22)



図版 No.	出土地点・層位	器種・部位	片 の 面 積 (1/3増大)	内 面 の 装 飾 (1/3増大)	備 考	年代 区別	出 所
P177	6号惣穴建物跡上面土層 No.1 (2号、層上) Ⅰ層	深鉢 (1/4増大)	縦線 (1/3増大)	ナナメ→ナナメ	ナナメ	Ⅰ	71, 70
P178	6号惣穴建物跡 Ⅱ上土位	深鉢・口縁部	縦線 (1/3増大)	縦線 (1/3増大)	ナナメ	Ⅰ	71, 70
P179	6号惣穴建物跡Ⅰ (器身) (1層部、Ⅱ A20)・Ⅱ層下位 (15/16)	深鉢 (1/4増大)	縦線 (1/3増大)	ナナメ→ナナメ	横線	Ⅰ	71, 70
P180	6号惣穴建物跡Ⅰ (器身) Ⅱ層中	深鉢 (1/4増大)	縦線 (1/3増大)	縦線 (1/3増大)	ナナメ	Ⅰ	71, 70
P181	6号惣穴建物跡Ⅰ (器身) Ⅱ層中	深鉢・口縁部	縦線 (1/3増大)	ナナメ→横線 (1/3増大)	ナナメ	Ⅰ	71, 70
P182	6号惣穴建物跡Ⅰ (器身) Ⅱ層中	深鉢・口縁部	縦線 (1/3増大)	ナナメ→ナナメ	ナナメ	Ⅰ	71, 71
P183	6号惣穴建物跡Ⅰ (器身) Ⅱ層中	深鉢・腹部	縦線 (1/3増大)	ナナメ→ナナメ	ナナメ	Ⅰ	71, 71
P184	6号惣穴建物跡Ⅰ (器身) Ⅱ層中	深鉢・腹部	縦線 (1/3増大)	縦線 (1/3増大)	ナナメ	Ⅰ	71, 71
P185	6号惣穴建物跡Ⅰ (器身) Ⅱ層中	深鉢・腹部	縦線 (1/3増大)	縦線 (1/3増大)	ナナメ	Ⅰ	71, 71
P186	6号惣穴建物跡Ⅰ (器身) Ⅱ層中	深鉢・腹部	縦線 (1/3増大)	縦線 (1/3増大)	ナナメ	Ⅰ	71, 71

第 74 図 縄文~弥生土器 (23)



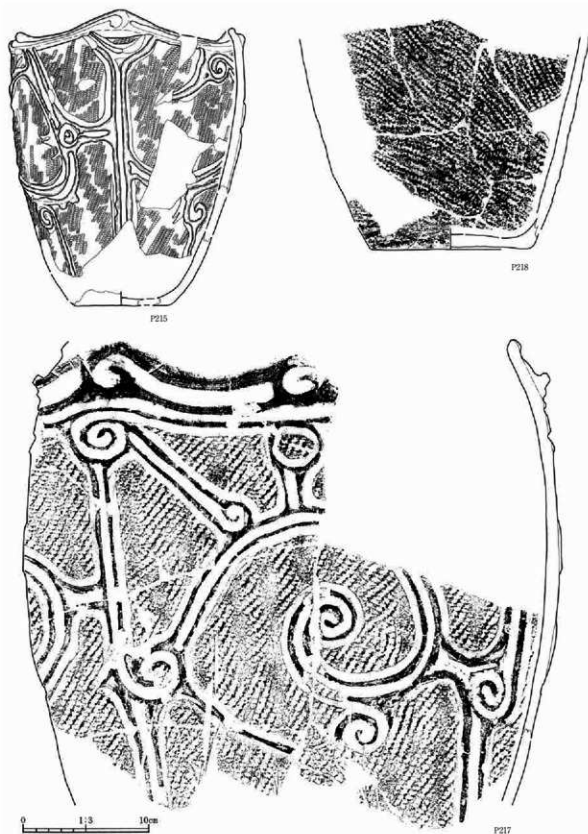
図版 No.	出土地点・層位	器種・部位	内 面 (口縁部・胴部・底面・流線、縄文脈絡など)	外 面 (流線など)	備 考	本文 記載	図 号
P185	6号壺穴建物跡・地上中位 (1号)・ⅡA20	甕 (口縁部)	肌, P字→横ひい・流線	ナ字	内面入付蓋		75 71
P186	6号壺穴建物跡・地上中位	漆器・口縁部	上, P字→横ひい・流線	ナ字	下の開口口, 粘土層分岐線		75 71
P188	6号壺穴建物跡・地上中位	漆器・口縁部	漆等上縁部, 肌面付蓋→上, P字	ナ字			75 71
P190	6号壺穴建物跡・地上一括	漆器 (口縁部)	肌, P字→横ひい・流線	ナ字	内面入付蓋		75 71
P191	6号壺穴建物跡・地上一括	漆器・口縁部	流線→上, P字→横ひい・流線	横肌			75 71
P192	6号壺穴建物跡・地上一括	漆器・口縁部	流線→上, P字	横肌			75 71
P193	6号壺穴建物跡・地上一括	漆器・口縁部	竹管状土器に上縁部付四脚架	ナ字	内面入付蓋		75 71
P194	6号壺穴建物跡・地上一括	漆器・口縁部	流線→横ひい・流線	ナ字	外縁部流線, 上縁部		75 71
P195	6号壺穴建物跡・地上一括	漆器	肌, 口縁部, 胴部→流線などナ字	ナ字			75 71
P196	6号壺穴建物跡・地上一括	漆器 (口縁部)	単縁部(上), P字→横ひい・流線	ナ字	内面入付蓋		75 71
P197	6号壺穴建物跡・地上一括	漆器・胴部	上, 口縁部, 胴部→流線に付ひい・流線	ナ字丁字	内面浮肌		75 72
P198	6号壺穴建物跡・地上一括	漆器・胴部	肌, 口縁部, 胴部→流線に付ひい・流線	ナ字丁字			75 72
P199	6号壺穴建物跡・地上一括	漆器・胴部	肌, P字→横ひい・流線	横肌	内面脈絡ひい		75 72
P200	6号壺穴建物跡・地上一括	漆器・胴部	流線→流線	ひいナ字			75 72
P201	6号壺穴建物跡・地上一括	漆器・胴部	肌, 口縁部, P字→流線に付ひい・流線	ナ字			75 72
P202	6号壺穴建物跡・地上一括	漆器・胴部	粘土層付蓋	ナ字	上の開口口, 粘土層分岐線		75 72
P203	6号壺穴建物跡北・2層	甕 (口縁部)	肌→流線→上, P字	ナ字			75 72
P204	6号壺穴建物跡北・2層	漆器・口縁部	内面段 (口縁部), 流線, 単縁部竹管状土器に上縁部付蓋	ナ字			75 72

第 75 図 縄文~弥生土器 (24)



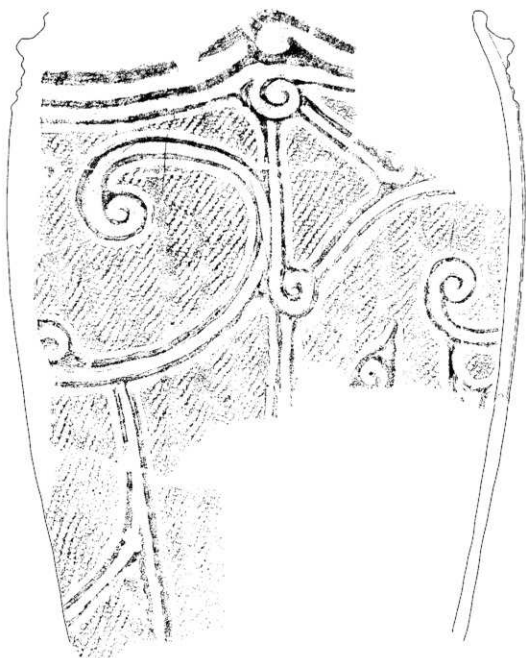
図番	出土地点・層位	器種・形状	内 面	外 面	備 考	本文	図 号
P206	Ⅱ A18、20・古層上位、Ⅱ A20・重層下段-古層	縁割鉢・口縁部	白陶質	高凸縁付・縁部縦溝 (縦、L形) + 縁部直交L字状	1967	内面コシ付帯・206上同一個体	76 72
P207	Ⅱ A18、20・古層上位、Ⅱ A20・古層上位	縁割鉢・口縁部	白陶質	高凸縁付・縁部縦溝 (縦、L形) + 縁部直交L字状	1967	内面コシ付帯・206上同一個体	76 72
P208	Ⅱ A18、20・古層上位、Ⅱ A20・古層上位	縁割鉢・口縁部	白陶質	高凸縁付・縁部縦溝 (縦、L形) + 縁部直交L字状	1967	内面コシ付帯・206上同一個体	76 72
P209	Ⅱ A18、20・古層上位、Ⅱ A20・古層上位	縁割鉢・口縁部	白陶質	高凸縁付・縁部縦溝 (縦、L形) + 縁部直交L字状	1967	内面コシ付帯・206上同一個体	76 72
P210	Ⅱ A18、20・古層上位、Ⅱ A20・古層上位	縁割鉢・口縁部	白陶質	高凸縁付・縁部縦溝 (縦、L形) + 縁部直交L字状	1967	内面コシ付帯・206上同一個体	76 72
P211	Ⅱ A18、20・古層上位、Ⅱ A20・古層上位	縁割鉢・口縁部	白陶質	高凸縁付・縁部縦溝 (縦、L形) + 縁部直交L字状	1967	内面コシ付帯・206上同一個体	76 72
P212	Ⅱ A18、20・古層上位、Ⅱ A20・古層上位	縁割鉢・口縁部	白陶質	高凸縁付・縁部縦溝 (縦、L形) + 縁部直交L字状	1967	内面コシ付帯・206上同一個体	76 72
P213	Ⅱ A18、20・古層上位、Ⅱ A20・古層上位	縁割鉢・口縁部	白陶質	高凸縁付・縁部縦溝 (縦、L形) + 縁部直交L字状	1967	内面コシ付帯・206上同一個体	76 72
P214	Ⅱ A18、20・古層上位、Ⅱ A20・古層上位	縁割鉢・口縁部	白陶質	高凸縁付・縁部縦溝 (縦、L形) + 縁部直交L字状	1967	内面コシ付帯・206上同一個体	76 72

第 76 図 縄文~弥生土器 (25)



図版 No.	出土地点・層位	器種・器形	内 面 IT76部 / 胴部 / 腹部 / 肩部 / 底面 / 縄文部(部分) (調製の上)	内 面 (調製の上)	備 考	本文 記載	図 式 No.
P215	25号壺之遺物群・層上1位	深鉢(一器文様)	筒形縁部・胴部(文様部)・底・IT76部→乳湾部(白泥注)		底平テ・底平テ・内上10テ		77-73
P217	25号壺之遺物群・層上1位	深鉢(白土周本底)			So216と同・備後		77-75
P218	25号壺之遺物群・層上1位	深鉢(高脚一器)	1段テテ・ナナ・高脚(縄文部)→底面(一器テテ)	準製	内・底焼成・内面コテがたれ		77-73

第 77 図 縄文~弥生土器 (26)



P216



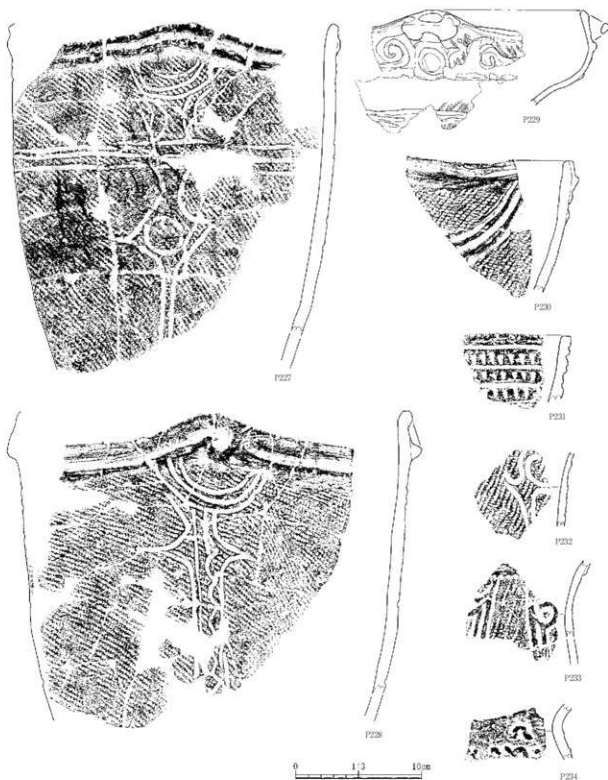
図版 No.	出土地点・層位	器種・部位	形・質 (土質等/製法/産地/装束・縄文要素など)	片 割 (調査など)	備 考	本文 記載	写 真
P216	7号墓穴(埴原遺集・出土下位)	漆鉢 (1/2 用木蓋)	図107 (35.7) F7F→埴原(2014.05.01)出土	ナツ丁家	発見地同・95-A3・No.217と同一		78 74

第78図 縄文~弥生土器 (27)



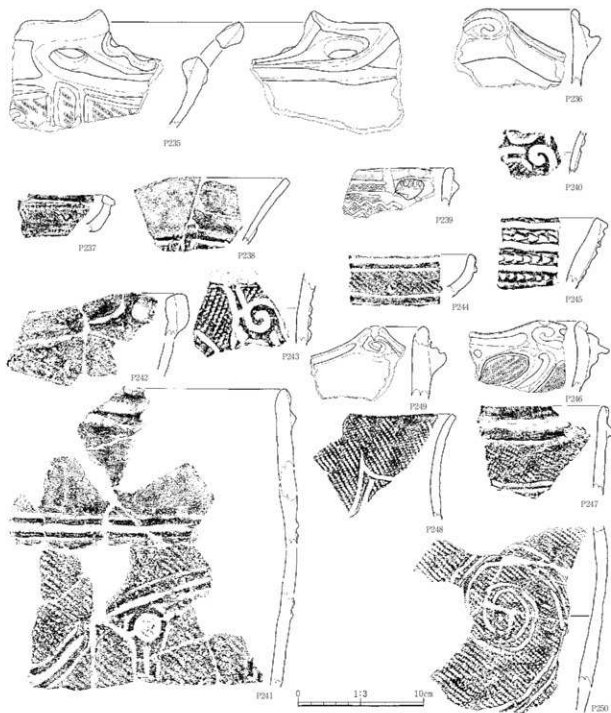
図版 No.	出土場所・層位	器種・部位	図 説 (注1編部・頸部/底部/底面、縄文部俵など)	内 面 (裏面など)	備 考	本誌 記載	出 典
P219	2号壺穴建物跡東・埋土下位	深鉢 (1/3 用未成)	図説二種・図説三ヶ所→大(赤帯)に浅い波線	ナシ			79, 73
P220	2号壺穴建物跡東 (2ヶ所・北東・埋土下位、並 A25a 以降・東壁面?)	鉢 (欠部)	2編部・1段ナメ→糸→波線 (1編部?) 底面ナシ	ナシ			79, 73
P221	2号壺穴建物跡東・埋土下位	鉢・13編部	図, ナメ→波帯などでつく。若干大の浅い波線、断交	ナシ			79, 73
P222	2号壺穴建物跡東・埋土下位	深鉢・頸部	図, ナメ→波帯に若干浅い波線	ナシ	深鉢部		79, 73
P223	2号壺穴建物跡西・埋土下位	深鉢 (1/3 用未成)	図, ナメ→波帯などでつく。若干浅い波線	ナシ	1の頸口、瓶土層分面跡部→序5A		79, 73
P224	2号壺穴建物跡西・埋土下位。並 A22a ~ 1 - 並一古層	深鉢・13編部	図, ナメ→波帯などでつく。若干ナシ	ナシ? 次第	特殊部?		79, 73
P225	2号壺穴建物跡西・埋土下位。並 A22a ~ 1 - 並一古層	深鉢 (1/3 用未成)	深鉢部? (1) 波? → 浅い波帯に若干ナシ	ナシ	内面帯具・225 (1) 同一編部?		79, 74
P226	2号壺穴建物跡西・埋土下位。2号壺穴建物跡東高・埋土中~下位	深鉢 (1/3 用未成)	深鉢部? (1) 波? → 浅い波帯に若干ナシ	ナシ	内面帯具部、帯具・225 (1) 同一編部?		79, 74

第 79 図 縄文~弥生土器 (28)



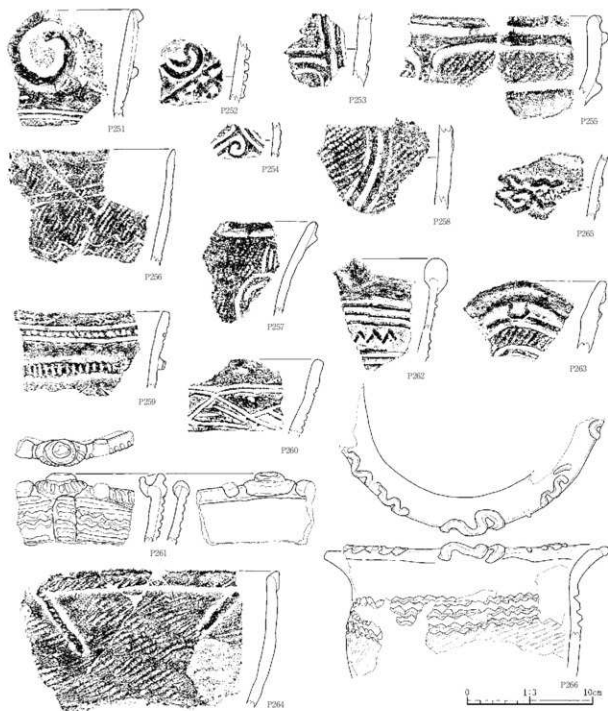
図版 No.	出土地点・層位	器種・部位	図 解 (口縁部/胴部/底底/蓋部、縄文形状など)	内 面 (口縁部)	備 考	表土 記載	図 号
P227	2号壺穴遺物群西・層上1下位	漆鉢 (1/3周以下)	流紋1周・L.R.P.P→丸(浅)の沈線	ナナ	内面磨粒		80 75
P228	2号壺穴遺物群西・層上1下位	漆鉢 (1/3周以下)	4流紋1周・L.R.P.P→丸(浅)の沈線	ナナ			80 76
P229	2号壺穴遺物群西・層上1下位	漆鉢 (1/3周以下)	安胎貫通・短、L.R.P.P、頸P.P→逆号、丸(浅)の沈線	逆号ナ	第二次焼成で磨粒、内面コナ多		80 73
P230	2号壺穴遺物群西・層上1下位	漆鉢 (1/3周)	頸L.P.P→後部に沿った沈線	ナナ			80 72
P231	2号壺穴遺物群西・層上1下位	漆鉢 (1/3周)	L.R.P.P、下2本の沈線	ナナ			80 74
P232	2号壺穴遺物群西・層上1下位	漆鉢・胴部	短L.P.P→丸(浅)の沈線	ナナ(部分)	内面スス付着		80 71
P233	2号壺穴遺物群西・層上1下位	漆鉢・胴部	短L.P.P→丸(浅)の沈線	ナナ	内面磨粒		80 71
P234	2号壺穴遺物群西・層上1下位	漆鉢・胴部		ナナ	内面スス、内面コナ		80 71

第80図 縄文~弥生土器 (29)



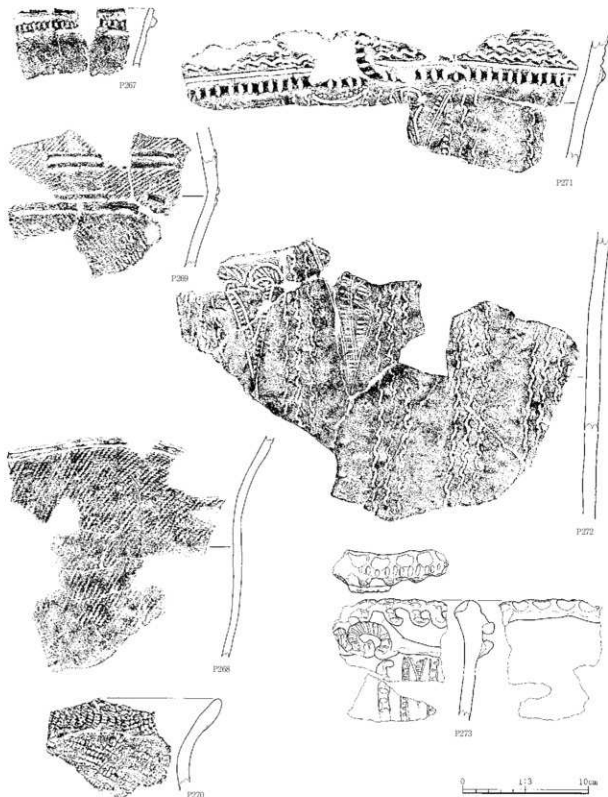
図番	出土地点・層位	器種・部位	内面図	外 面 図	特 徴	備 考	本文 記載	図 号	頁 号
P235	2号窯穴遺物群南西・埋土上～下位	漆鉢・底縁	①縦線・②縦線/横線・③縦線中心点	ナナ				81	71
P236	2号窯穴遺物群南西・埋土上～下位	漆鉢・口縁部	①縦線・②縦線	ナナ	内面スリ付帯?			81	74
P237	2号窯穴遺物群南西・埋土上～下位	漆鉢・口縁部	①縦線・②縦線	ナナ	内面スリ付帯?			81	74
P238	2号窯穴遺物群南西・埋土上～下位	漆鉢・口縁部	①縦線	ナナ	内面スリ付帯			81	71
P239	2号窯穴遺物群南西・埋土上～下位	口縁部	①縦線	ナナ	①ナナ→②縦線の成帯			81	74
P240	2号窯穴遺物群南西・埋土上～下位	漆鉢・胴部	①縦線	ナナ	内面磨耗			81	74
P241	2号窯穴遺物群北西・埋土上～中位	漆鉢・口縁部	①縦線・②縦線	ナナ	①縦線・②縦線	内面磨耗、下縁①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺		81	75
P242	2号窯穴遺物群北西・埋土上～中位	漆鉢・口縁部	①縦線・②縦線	ナナ	①ナナ→②縦線の成帯			81	75
P243	2号窯穴遺物群北西・埋土上～中位	漆鉢・口縁部	①縦線・②縦線	ナナ	①ナナ→②縦線の成帯			81	75
P244	2号窯穴遺物群北西・埋土上～中位	漆鉢・口縁部	①縦線・②縦線	ナナ	①ナナ→②縦線の成帯			81	75
P245	2号窯穴遺物群北西・埋土上～中位	漆鉢・口縁部	①縦線・②縦線	ナナ	①ナナ→②縦線の成帯			81	75
P246	2号窯穴遺物群北西・埋土上～中位	漆鉢・口縁部	①縦線・②縦線	ナナ	①ナナ→②縦線の成帯			81	75
P247	2号窯穴遺物群北西・埋土上～中位	漆鉢・口縁部	①縦線・②縦線	ナナ	①ナナ→②縦線の成帯			81	75
P248	2号窯穴遺物群北西・埋土上～中位	漆鉢・口縁部	①縦線・②縦線	ナナ	①ナナ→②縦線の成帯			81	75
P249	2号窯穴遺物群北西・埋土上～中位	漆鉢・口縁部	①縦線・②縦線	ナナ	①ナナ→②縦線の成帯			81	75
P250	2号窯穴遺物群北西・埋土上～中位	漆鉢・口縁部	①縦線・②縦線	ナナ	①ナナ→②縦線の成帯			81	75

第81図 縄文~弥生土器(30)



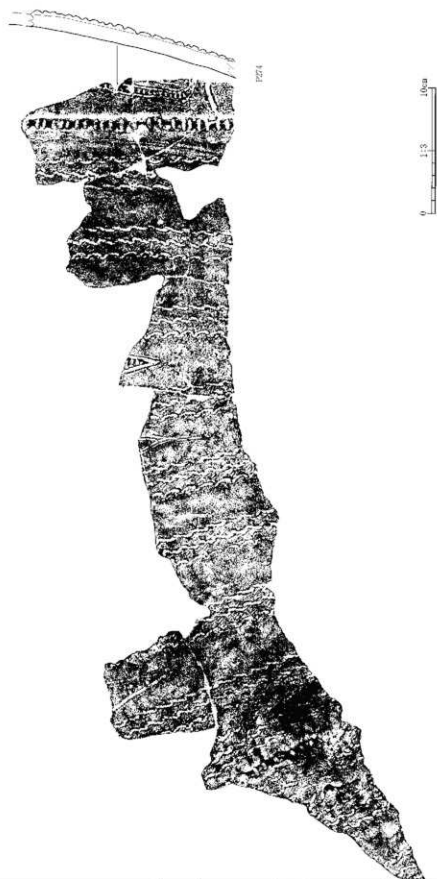
図版 No.	出土地点・層位	器種・部位	内 面 文様部・柄部 / 底面・底周、器文全体など	内 面 備考	本文 左欄	頁 右
P251	7号段大塚遺跡北西・層上上-中位	深鉢・口縁部	深鉢・柄部	ナナ	下の頸口付。粘土層合部細線	82 75
P252	7号段大塚遺跡北西・層上上-中位	深鉢・柄部	高い瓶付	ナナ	粘土白線混入	82 75
P253	7号段大塚遺跡北西・層上上-中位	深鉢・柄部	波帯などでナナ	ナナ		82 75
P254	7号段大塚遺跡北西・層上上-中位	深鉢・柄部	短。ナナ→波帯などでナナ	ナナ		82 75
P255	7号段大塚遺跡北西北東・層上中-下位	深鉢・口縁部	短。ナナ→波帯に波付ナナ	ナナ	内面中層混	82 76
P256	7号段大塚遺跡北西北東・層上中-下位	深鉢・柄部	短。ナナ→波帯に波付	ナナ	内面中層、中層混	82 76
P257	7号段大塚遺跡北西北東・層上中-下位	深鉢・口縁部	短。ナナ→波帯に波付	ナナ	内面中層混	82 76
P258	7号段大塚遺跡北西北東・層上中-下位	深鉢・柄部	短。ナナ→波帯に波付ナナ	ナナ	内面中層混	82 76
P259	8号段大塚遺跡・北面	深鉢・口縁部	口縁平。半直管状土器に波付線、波帯・高い波帯に波付	ナナ	内面入付混	82 76
P260	8号段大塚遺跡・北面	深鉢・口縁部	突起・波帯線粘土白線	ナナ	下の頸口付。粘土層合部細線	82 76
P261	8号段大塚遺跡・層上丁位深面	深鉢・口縁部	口の頸口付。粘土層合部細線	【器々?】	内面中層、内面ナナ混	82 76
P262	8号段大塚遺跡 8号段上	深鉢・口縁部	内面突起 / 高い突起 / ナナの波付	ナナ		82 76
P263	8号段大塚遺跡・層上上-中位	深鉢・口縁部	短。ナナ→波帯に波付。太い波付線	ナナ		82 76
P264	8号段大塚遺跡・層上丁位	深鉢・口縁部	短。ナナ→波帯	ナナ	内面中層、内面ナナ混	82 76
P265	8号段大塚遺跡・層上丁位	深鉢・柄部	短。ナナ→波帯	ナナ	内面中層、内面ナナ混	82 76
P266	8号段大塚遺跡 8号段上、E. A16a・8号段丁位、E. A17a・8号段丁位	深鉢・口縁部以下	口縁高い波帯・ナナ→太い波帯に波付	ナナ	内面中層混、内面ナナ?	82 76

第 82 図 縄文~弥生土器 (31)



図録 No.	出土地点・層位	器種・部位	丹 崖 印線部 / 頸部 / 底面 / 底面・胴文部(部分)	白 崖 (調整部分)	備 考	本文 図録	写 真
P267	8号壺穴建物跡・埋土下段	深鉢 (口縁未満)	高い印線に紐目・紐跡ナシ?	ナシ		83	76
P268	8号壺穴建物跡断面・埋土上～中位	深鉢 (口縁未満)	低・ナシ→低い深線	ナシ		83	76
P269	8号壺穴建物跡・埋土上～中位 (4点)	10号壺穴建物跡・埋土上～中位	深鉢・胴部 上段・胴部・胴部 上段・口縁部	ナシ ナシ ナシ	内面線?・内面筋	83	76
P270	8号壺穴建物跡断面・埋土上～中位	深鉢 (口縁部)	低・ナシ	ナシ	内面筋(付着)	83	76
P271	8号壺穴建物跡断面・埋土上～中位。至 A21a・量-5号層。至 A22b・量-5号層	深鉢 (口縁未満)	低・ナシ	ナシ	271, 271b同一個体?	83	76
P272	2号壺穴建物跡の1号。至 A21a・量-5号層。至 A22b・量-5号層	深鉢 (口縁未満)	低・ナシ	ナシ	内面筋(付着)	83	77
P273	8号壺穴建物跡・朝日古路上。中央セクション・壁部	深鉢 (口縁部)	口縁部・胴部。朝日・高い印線に紐目	ナシ		83	76

第 83 図 縄文～弥生土器 (32)



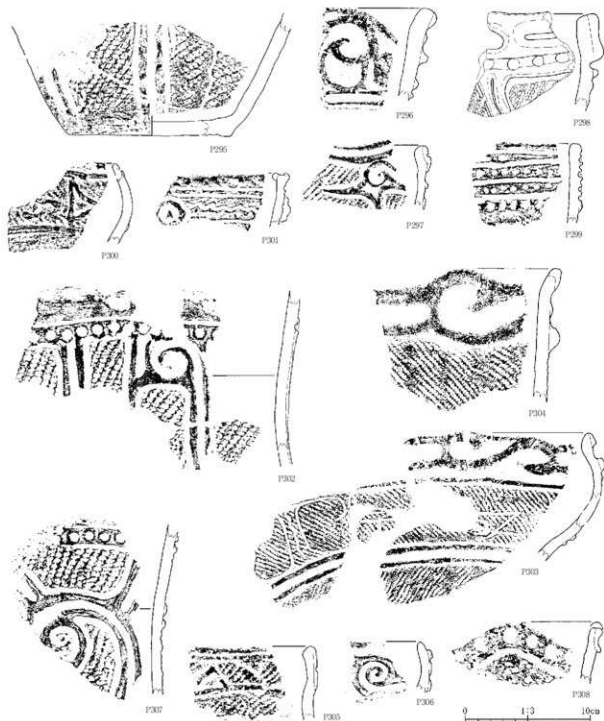
図録 No.	出土地点・層位	図録・図記	内 容 (1)編部 / 胴部 / 底部 / 流部, 縄文脈跡など	内 容 (2)調整など	備 考	本文 記載	図 版
P271	24号壺穴遺物群中の土器。ⅡA2b・Ⅱc-Ⅱ層, 中央セクション・Ⅱ層	深鉢・胴部	縦筋7本・浅い縦筋7本, 2723河一筋有り・段取に斜目				

第 84 図 縄文~弥生土器 (33)



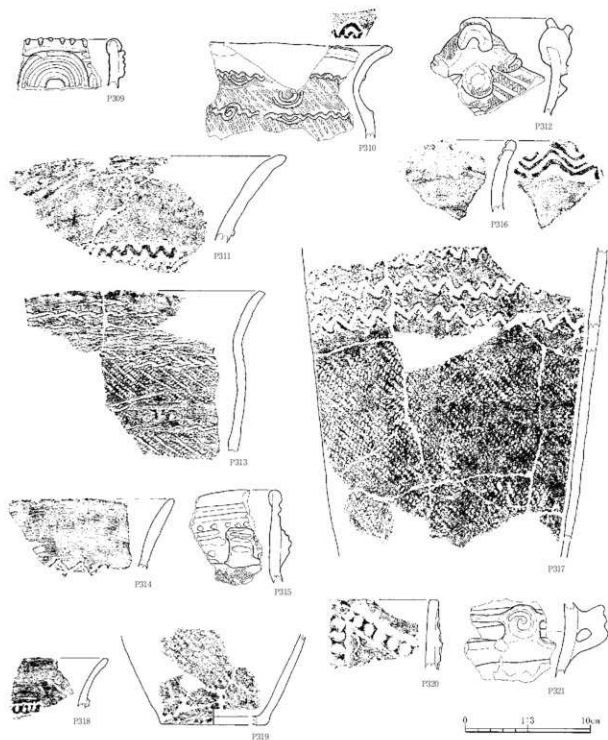
図版 No.	出土地点・層位	器種・部位	文様・面 (内面・外面・底面・縁部)	内面 (器底・口)	備考	本文 記載	図 No.
P275	9号型穴建物跡南東部西・層上上-中位	唐鉢・口縁部	口縁・口縁部付・胎付上半部竹管状土具に凸条状	ナデ	内西形?	85	77
P276	9号型穴建物跡北西隅層上上-中位、19号型穴建物跡層上上・1号土瓦層上上-中位	唐鉢(1-3段未満)	縁部口縁・L区口・胎部凸、胎部ナデ+ナデ、L区凸・L区溝	ナデ	ナデで縄文大分器と・277と同?	85	77
P277	9号型穴建物跡南東部上上・19号型穴建物跡層上上-中位、19号型穴建物跡層上	唐鉢(底一隅)	L区ナデ(筒縁部?) → 底面・底面ナデ	ナデ	内面ナデ・276と同一類物?	85	78
P278	9号型穴建物跡石割形1現道・床面	唐鉢・口縁部	L区ナデ・L区溝	ナデ	内面ナデ付着	85	77
P279	9号型穴建物跡面石割形1・1層	唐鉢・口縁部	突起	ナデ	内面ナデ付着	85	77
P280	9号型穴建物跡面石割形1・1層	唐鉢・口縁部?	L区凸・L区凸・L区溝	ナデナデ		85	77
P281	9号型穴建物跡2号土瓦(重瓦)・層上上位	唐鉢? (1.5段以上)	口縁突起・L区ナデ・縁部凸ナデ付	ナデ	内面ナデ、内面ナデ	85	77
P282	9号型穴建物跡2号土瓦(重瓦)・層上上位	唐鉢・胎部	L区ナデ・L区凸・L区溝	ナデ		85	77
P283	9号型穴建物跡2号土瓦(重瓦)・層上上位	唐鉢・胎部	L区凸・L区溝に凸付L区凸・L区溝	唐鉢	内面唐鉢付	85	77
P284	10号型穴建物跡・層面a1	唐鉢(1-4段未満)	縁部に細凹付・L区凸?	ナデ	内面ナデ多、二穴現成、内ナデナデ付	85	77
P285	10号型穴建物跡付・層上	唐鉢・口縁部	L区・縁部凸	ナデ	内面ナデ付着	85	77

第85図 縄文・弥生土器 (34)



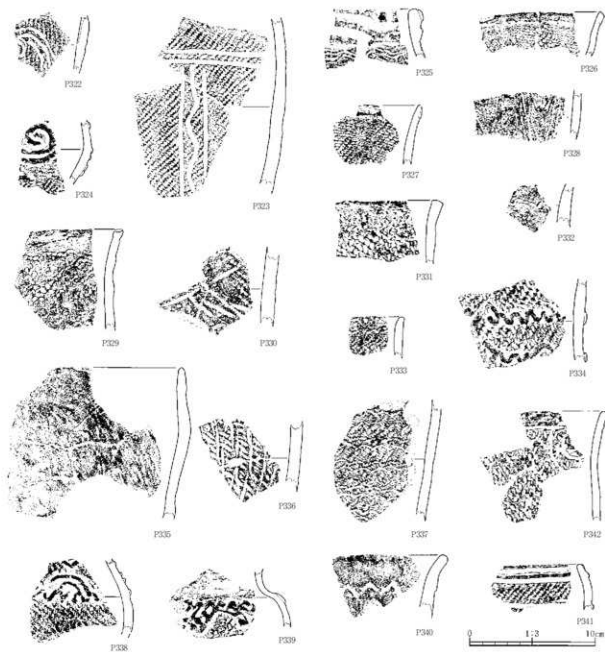
図版 No.	出土地点・層位	器種・部位	内 面	外 面	備 考	本文 記載	図 No.
P295	10号窯穴建物跡調査区(西側)・層上上~中位	漆鉢・底(口縁部)	縦線・底(口縁部)	縦線・底(口縁部)	縦線・底(口縁部)	縦線・底(口縁部)	87 78
P296	10号窯穴建物跡調査区(西側)・層上上~中位	漆鉢・口縁部	変形	変形	外二次焼成・内径約6.5cm以上1.5cm		87 78
P297	10号窯穴建物跡調査区(西側)・層上上~中位	漆鉢・口縁部	変形	変形	外二次焼成・内径約6.5cm以上1.5cm		87 78
P298	10号窯穴建物跡調査区(西側)・層上上~中位	漆鉢・口縁部	変形	変形	外二次焼成・内径約6.5cm以上1.5cm		87 78
P299	10号窯穴建物跡調査区(西側)・層上上~中位	漆鉢・口縁部	変形	変形	外二次焼成・内径約6.5cm以上1.5cm		87 78
P300	10号窯穴建物跡調査区(西側)・層上上~中位	漆鉢・口縁部	変形	変形	外二次焼成・内径約6.5cm以上1.5cm		87 78
P301	10号窯穴建物跡調査区(西側)・層上上~中位	漆鉢・口縁部	変形	変形	外二次焼成・内径約6.5cm以上1.5cm		87 78
P302	10号窯穴建物跡調査区(西側)・層上上~中位	漆鉢・口縁部	変形	変形	外二次焼成・内径約6.5cm以上1.5cm		87 78
P303	10号窯穴建物跡調査区(西側)・層上上~中位	漆鉢・口縁部	変形	変形	外二次焼成・内径約6.5cm以上1.5cm		87 78
P304	10号窯穴建物跡調査区(西側)・層上上~中位	漆鉢・口縁部	変形	変形	外二次焼成・内径約6.5cm以上1.5cm		87 78
P305	10号窯穴建物跡調査区(西側)・層上上~中位	漆鉢・口縁部	変形	変形	外二次焼成・内径約6.5cm以上1.5cm		87 78
P306	10号窯穴建物跡調査区(西側)・層上上~中位	漆鉢・口縁部	変形	変形	外二次焼成・内径約6.5cm以上1.5cm		87 78
P307	10号窯穴建物跡調査区(西側)・層上上~中位	漆鉢・口縁部	変形	変形	外二次焼成・内径約6.5cm以上1.5cm		87 78
P308	10号窯穴建物跡調査区(西側)・層上上~中位	漆鉢・口縁部	変形	変形	外二次焼成・内径約6.5cm以上1.5cm		87 78

第 87 図 縄文~弥生土器 (36)



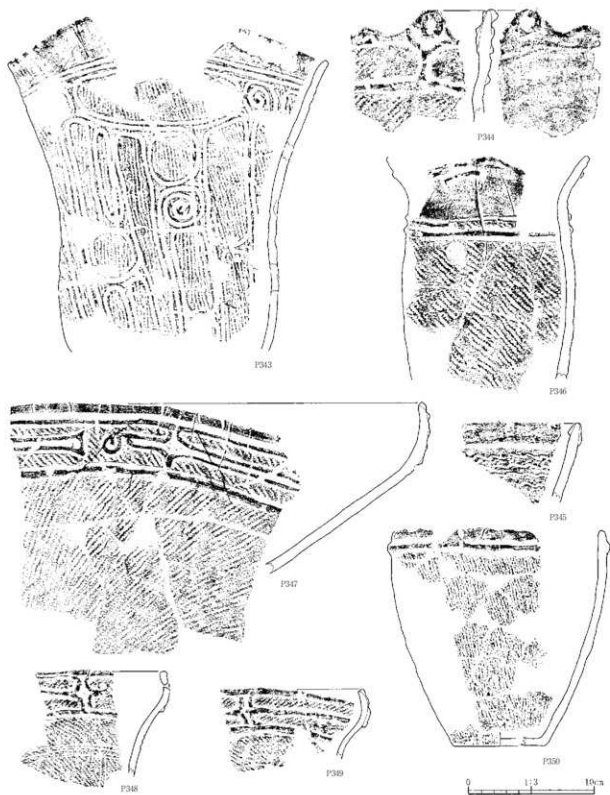
図録 No.	出土地所・層位	器種・部位	柄 文 類 型 名 義 文 形 体 等 の 注	出 所 調 査 記 号	備 考	本文 記載	等 取
P309	10号壺穴建物跡南・埋上下位	漆鉢・口縁部	白羽織譜巻状・口唇・ハム状貼付・漆の沈着	ナゲ丁字		86-79	
P310	10号壺穴建物跡表・埋上～中位	鉢 (1.4号未測)	内唇・ハム状貼付・肌・3コマ・ハム状貼付	ナゲ	柄文不詳、内面半面ナゲ	86-79	
P311	10号壺穴建物跡表・埋上～中位	漆鉢・口縁部	肌・2コマ・貼付	ナゲ		86-79	
P312	10号壺穴建物跡表・埋上～中位	漆鉢・口縁部	肌・2コマ・貼付	ナゲ	柄文不詳付着・内面ナゲナゲ付着	86-79	
P313	10号壺穴建物跡表・埋上～中位	漆鉢 (1.5号未測)	肌・縁部2コマ (7'下の器内口)、粘土層合部前縁部	ナゲ	粘土層部・柄文不詳、内下ナゲ	86-79	
P314	10号壺穴建物跡表・埋上～中位	鉢 (1.4号未測)	内唇・ハム状貼付・肌・3コマ・ハム状貼付	ナゲ	柄文不詳、内面半面ナゲ	86-79	
P315	10号壺穴建物跡・埋上中位	漆鉢・口縁部	白羽織譜巻貼付・肌・縁部ナゲナゲ	ナゲナゲ		86-79	
P316	10号壺穴建物跡表・埋上中位	漆鉢・口縁部	内唇貼付	ナゲ	柄文不詳、柄部	86-79	
P317	10号壺穴建物跡表・埋上～中位、並A2B 口縁部土	漆鉢 (1.2号未測)	肌・ナゲ・土沈着・肌部	ナゲ	柄文不詳、内面ナゲ	86-79	
P318	10号壺穴建物跡表・埋上	漆鉢 (1.2号未測)	漆巻部	ナゲ		86-79	
P319	11号壺穴建物跡上段 No.4 漆面	漆鉢・底 (1.3号以下)	肌・ナゲ・底唇・底唇ナゲ	ナゲ	柄部厚部・内面底唇上ナゲ付着	86-79	
P320	10号壺穴建物跡表・埋上	漆鉢・口縁部	突起部付着部・埋土層付着	ナゲ	柄部不詳付着	86-79	
P321	11号壺穴建物跡上段 No.5、11号壺穴建物跡表・3編	飯器	縁部把手	単取		86-79	

第 88 図 縄文～弥生土器 (37)



図版 No.	出土地点・層位	器種・部位	内 面	外 面	備 考	本文 記載	写 真
P322	11号壺穴建物跡上部 No.1床面	漆鉢・胴部	白(緑泥)・胴部 / 底面 / 底面, 縄文(斜線文?)	白(泥)	ナナ	内面緑泥, 内口ナ, 胴部	89-79
P327	11号壺穴建物跡東・理上1段	漆鉢・胴部	白, ナナ→白(泥)・底面	ナナ	ナナ	内面赤土付着	89-79
P329	11号壺穴建物跡東・理上1段	漆鉢・胴部	白, ナナ	ナナ	ナナ		89-79
P325	11号壺穴建物跡東・1層	漆鉢・口縁部	半截合面(上)・白(緑泥)	ナナ	ナナ	内面赤土付着	89-79
P328	12号壺穴建物跡西・1層	漆鉢・口縁部	白, ナナ→ナナ	ナナ	ナナ	内面赤土付着	89-79
P327	12号壺穴建物跡東・理上2段	漆鉢・口縁部	白, ナナ	ナナ	ナナ	内面赤土付着	89-79
P328	12号壺穴建物跡西・1層	漆鉢・胴部	半截合面(上) ナナ	ナナ	ナナ	内面赤土多, 内面口ナ多	89-79
P329	12号壺穴建物跡上部 No.1床面	漆鉢・口縁部	口内(緑泥)・底面(赤土)	ナナ(西)	ナナ(西)	内面赤土付着	89-79
P330	12号壺穴建物跡東・東面	漆鉢・胴部	縄文?・白(泥)・底面	ナナ	ナナ	内面赤土	89-79
P331	13号壺穴建物跡・理上1段	漆鉢・口縁部	白, ナナ	ナナ	ナナ	内面赤土付着	89-79
P322	13号壺穴建物跡・東面	漆鉢・口縁部	白(赤土)	ナナ	ナナ	内面赤土付着	89-79
P323	13号壺穴建物跡・理上1段	漆鉢・口縁部	白(赤土)	ナナ	ナナ	内面赤土付着	89-79
P324	14号壺穴建物跡上部 No.3	漆鉢・胴部	白(赤土)→白(泥)	ナナ	ナナ	内面赤土, 内口ナ	89-80
P335	15号壺穴建物跡西・1層	鉢(口内口下)	縄文?・赤土	ナナ	ナナ	内面赤土, 内口ナ, 二次焼成, 内面口ナ	89-80
P336	15号壺穴建物跡東・1層	漆鉢・胴部	白(赤土)・底面	ナナ	ナナ	内面赤土	89-80
P337	15号壺穴建物跡西・1層	漆鉢・胴部	白(赤土)	ナナ	ナナ	内面赤土	89-80
P338	16号壺穴建物跡西・1層	漆鉢・胴部	白(赤土)→白(赤土)	ナナ	ナナ	内面赤土, 内口ナ, 二次焼成, 内面口ナ	89-80
P326	16号壺穴建物跡西・1層	漆鉢・胴部	白(赤土)	ナナ	ナナ	内面赤土, 内口ナ	89-80
P324	16号壺穴建物跡西・理上1-2段	漆鉢・口縁部	白(赤土)	ナナ	ナナ	内面赤土, 内口ナ	89-80
P341	20号壺穴建物跡南西・理上1-2段	漆鉢・口縁部	白(赤土)→白(赤土)・先削	ナナ	ナナ	内面赤土	89-80
P342	20号壺穴建物跡南東・理上1-2段(白土)・理上1-中段	漆鉢・口縁部	白, ナナ(底面不明) →白(赤土)	ナナ	ナナ	内面口ナ	89-80

第 89 図 縄文～弥生土器 (38)



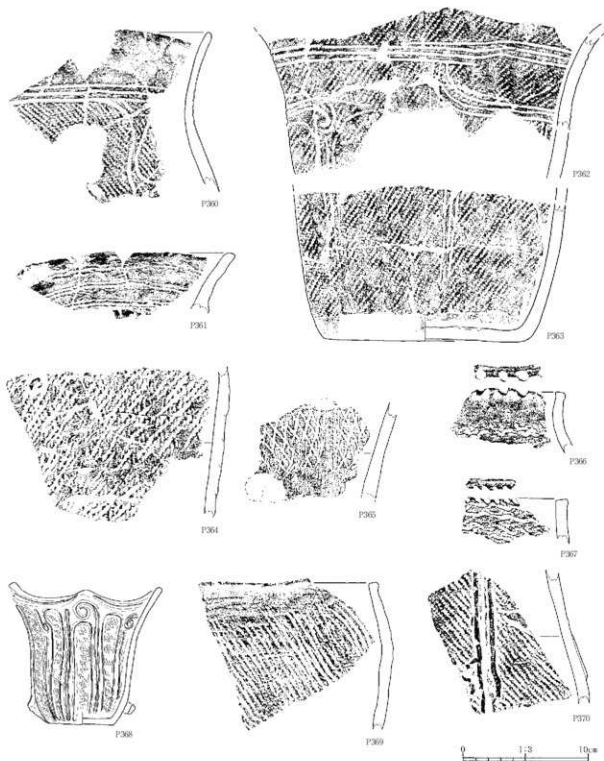
図版 No.	出土場所・層位	器種・部位	内 面 (注線部/捺部/底面/瓦面/縄文部全体)	外 面 (溝部全体)	備 考	本文 記載	写真 No.
P343	17号型穴建物跡北東・埋土上～中位、地ノ埋土一部、且A21・墓・瓦葺(23)	漆鉢(胴中位～頂)	二波状?・文様2単位?・草線結(空)ナメ→中心部の成箱	ナメ	内面二波状?、瓦葺?		90-80
P344	17号型穴建物跡・瓦面	漆鉢・口縁部	突起内面部分の状に付、丸底無面瓦面/額上区ナメ	ナメ	外側全面瓦葺		90-80
P345	17号型穴建物跡北東・埋土一部	漆鉢・口縁部	内面隆部/輪部ナメ	ナメ			90-80
P346	17号型穴建物跡南東・埋土上～中位	鉢(口内面)	底面1周部、内面隆部隆部・上区ナメ	ナメ	内面下部ナメ		90-80
P347	17号型穴建物跡南東・埋土上～中位	漆鉢(口内面)	底面1周部隆部、額ナメ→隆部中心ナメ	ナメ	ナメ		90-81
P348	瓦葺A22a、V層上段	漆鉢・口縁部	上区、口縁部ナメ、額ナメ→隆部中心ナメ、縁部瓦・瓦葺	ナメ	縁部瓦、瓦葺A、二波状底、内全面ナメ		90-80
P349	17号型穴建物跡南東・埋土上～中位	漆鉢・口縁部	*245同一個体	ナメ	瓦葺A、二波状底、内全面ナメ		90-83
P350	17号型穴建物跡北西・埋土上～中位	鉢(口内面)	草線結(空)ナメ?底面下部ナメ	ナメ			90-80

第90図 縄文～弥生土器(39)



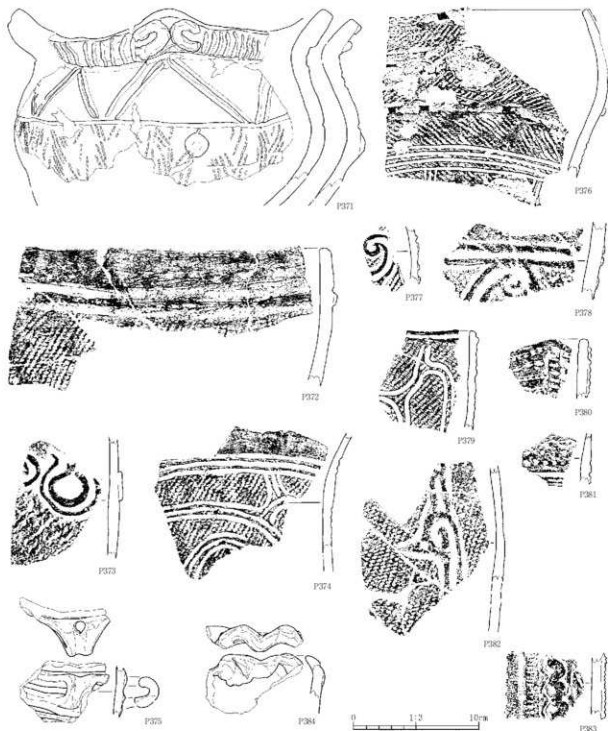
図版 No.	出土地点・層位	器種・形状	外 面	内 面	備 考	本文 図版	頁 次
P351	17号壺穴壇跡北東・地上上-中位	深鉢(底一隅)	乱チタテ→底面チタテ/底面斜代直	チタテ (深面直)	外二次焼成、土入、内たがひ、コサ	91	80
P352	17号壺穴壇跡北東・地上上-中位	鉢(底一隅)	早瀬織(直)チタテ→底の乱チテ/底面チタテ	チタテ	外二次焼成、内面底面以外コサ	91	81
P353	17号壺穴壇跡北東・地上上-中位	深鉢(1/4用半面)	乱チタテ→土の乱め乱織、沈着物からの斜織	チタテ	外土入、外二次焼成、内コサ	91	81
P354	17号壺穴壇跡北東・地上上-中位	深鉢・深部	乱チタテ→深部なでコサ、乱チタテ	チタテ チタテからの 内面斜織、内面コサ	内面コサ	91	81
P355	土入2区・壺跡下段-IV層	深鉢・深部	乱チタテ	チタテ	外二次焼成	91	81
P356	10号壺上蓋跡土部 No.1(地上上)・土入1区・壺跡下段-IV層	深鉢(1/2用半面)	乱チタテ→深部なでコサ	チタテ	内面2回コサ	91	81
P357	10号壺上蓋跡土部 No.1(地上上)・土入1区・壺跡下段-IV層	鉢(1/2用以下)	乱チタテ→乱め乱織(下の斜織は、斜土層内斜織)	チタテ	外二次焼成、土入	91	81
P358	10号壺上蓋跡土部 No.1(地上上)・土入1区	深鉢・深部	高い深部斜織(乱)→乱チタテ	チタテ	内面2回コサ	91	81
P359	10号壺上蓋跡土部 No.4(土割跡土上段)	深鉢(1/4用半面)	乱チテ→コサ、乱チテ→乱め乱織→コサ	チタテ	外二次焼成、内面底面	91	81

第91図 縄文~弥生土器(40)



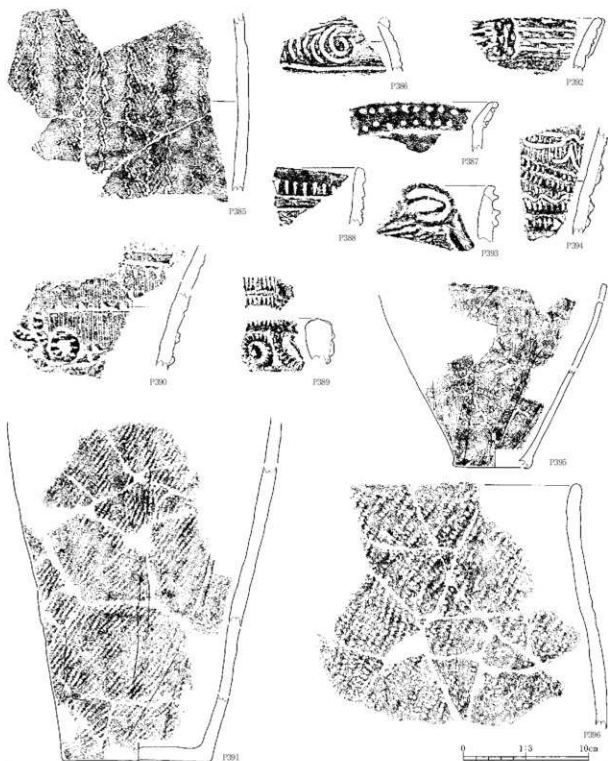
図録 No.	出土地点・層位	器種・部位	作 用	内 面	備 考	本文 記載	図 高
P360	10号地上遺物北東・埋上	漆鉢・17層部	LRタテ→太く丸い絞	絞部なし	残部なし、中心部なし		92-81
P361	10号地上遺物北東・埋上	漆鉢・17層部	半截竹管状・土による絞部?	ナテ			92-81
P362	5号地・墓室下段・古層	漆鉢 (古有明木炭)	支脚3単位?・丸・ナテ→丸(内)絞部・ナテで縁支一部消失	ナテ	No.363と同一体?・原形?		92-82
P363	10号地上遺物・埋上(1区)・E A13a・墓室下段 No.724	漆鉢(上一段)	丸・ナテ→絞部→底面ナテ(上の縁は白く、粘土層合面から剥離)	ナテ	No.362と同一体?		92-82
P364	11号地上遺物北東・埋上	漆鉢・胴部	LRタテナテ(原形不明)→取付	ナテ	残部縁部残る・内面2ナテ?		92-81
P365	11号地上遺物北東・埋上	漆鉢・胴部	草納品(丸)ナテ	ナテ	残部縁部残る		92-81
P366	10号地上遺物北東・埋上	漆鉢・17層部	口縁部なし・縁部なし	ナテ			92-81
P367	10号地上遺物北東・埋上	漆鉢・17層部	傾斜付・縁部なし	ナテ	残部全面欠け		92-81
P368	10号地上遺物北東・埋上上~中位	鉢(1/5部以下)	4段状・突起部凸凹状絞部・LRタテ→絞部・底面ナテ	10ナテ?	高さ低下下部縁部貫通孔突起		92-81
P369	10号地上遺物北東・埋上上~中位	漆鉢・17層部	口縁部なし・LRタテ?	ナテ	残部なし、内ナテなし、原形		92-81
P370	10号地上遺物北東・埋上上~中位	漆鉢・胴部	LRタテ→細い絞部でナテ	ナテ	残部なし		92-82

第92図 縄文~弥生土器(41)



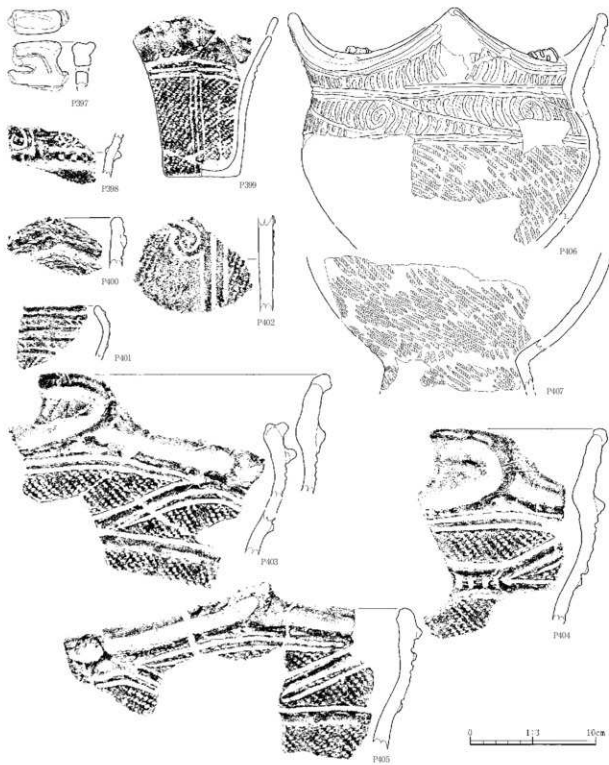
図版 No.	出土地点・層位	器種・部位	内 装 (内線部/頸部/底面/裏面、縄文層位交代)	内 装 (調査部位)	備 考	本文 記載	写 真
P371	20号壺穴建物跡・趾	壺胴縁(口内以下)	単線跡(A・B) P371→太い浅い沈線	十字	外周斜線部、内下十字	93	92
P372	20号壺穴建物跡・底部、層上・下位	漆線(口内周本縁)	単、P372	十字	外周全面太い沈線	93	82
P373	20号壺穴建物跡・底部	漆線・瓶底	(L) P373→短付(外周部)	十字		93	82
P374	20号壺穴建物跡・層上・中位	漆線(口内周本縁)	単、P374→太い浅い沈線	十字	内上入、下二次焼成、内全面十字	93	82
P375	20号壺穴建物跡・層上・中位	瓶底	短付・壺底丁寧	壺底		93	82
P376	20号壺穴建物跡・層上・中位	漆線(口内周本縁)	(L) 口縁本縁、瓶P376→太い浅い沈線	十字	内上入、縦糸、内十字	93	82
P377	20号壺穴建物跡・層上・中位	漆線・瓶底	短付P377→壺底に短付十字	十字		93	82
P378	20号壺穴建物跡・層上・中位	漆線・瓶底	壺底丁寧で十字	十字	外周部底	93	82
P379	21号壺穴建物跡・1層	漆線・口縁部	単、P379→太い浅い沈線	十字		93	82
P380	21号壺穴建物跡・1層	漆線・口縁部	半截片管状土器に太い沈線、内縁	十字		93	82
P381	21号壺穴建物跡・1層	漆線・瓶底	壺底丁寧	十字	外周全面太い、瓶底	93	82
P382	21号壺穴建物跡・1層	漆線・瓶底	単、P382→壺底に短付十字	十字	外周太い、瓶底	93	82
P383	21号壺穴建物跡・1層	漆線・瓶底	壺底丁寧	十字	内周部底	93	82
P384	21号壺穴建物跡・2層	漆線・口縁部	口内縁部打滑部	十字		93	82

第93図 縄文~弥生土器(42)



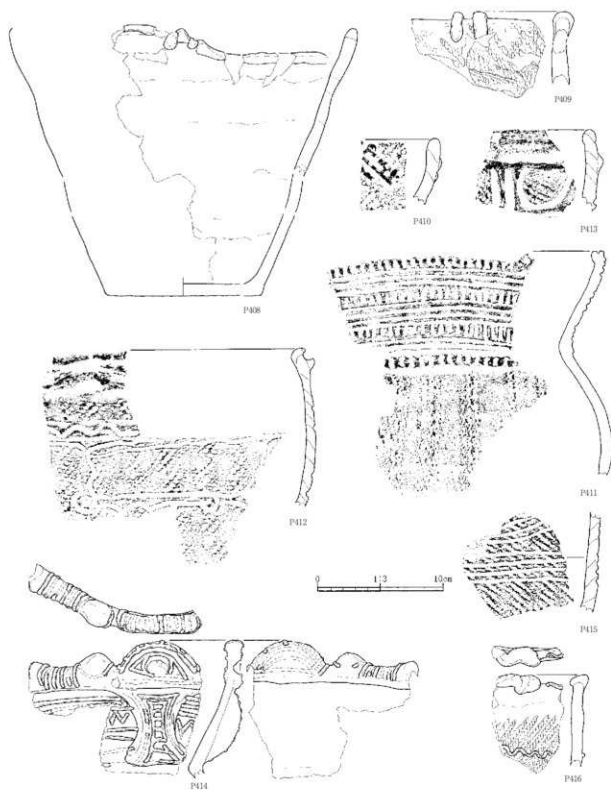
図版 No.	出土地点・層位	器種・部位	内 面 (口縁部・胴部・底面・肩部、縄文部等含む)	外 面 (胴部等含む)	備 考	本文 記載	図 号
P385	21号壺穴建物跡・埋土下位 Ⅱa、埋土一層 (Ⅱ-13)	漆鉢 - 下半	U字溝部、胴部 / 底面、肩部、縄文部等含む	口縁部			91-82
P386	22号壺穴建物跡・埋土下位 Ⅱa	漆鉢 - 胴部	U字溝部、胴部	口縁部	柄取穴、内面下位		91-82
P387	22号壺穴建物跡・埋土一層	漆鉢 - 口縁部	口縁部	口縁部	柄取穴付着		91-82
P388	22号壺穴建物跡・埋土一層	漆鉢 - 口縁部	口縁部	口縁部	柄取穴付着		91-82
P389	22号壺穴建物跡・埋土一層	漆鉢 - 口縁部	口縁部	口縁部	柄取穴付着		91-82
P390	22号壺穴建物跡・埋土一層	漆鉢 - 胴部	胴部	胴部	柄取穴付着		91-82
P391	21号壺穴建物跡・埋土一層、21号壺穴建物跡・北西埋土下位	漆鉢 - 下半	U字溝部、胴部 / 底面、肩部、縄文部等含む	口縁部	柄取穴、二枚付着		91-83
P392	21号壺穴建物跡 Ⅱa位	漆鉢 - 口縁部	口縁部	口縁部	柄取穴付着		91-83
P393	21号壺穴建物跡 Ⅱa位	漆鉢 - 口縁部	口縁部	口縁部	柄取穴付着		91-83
P394	21号壺穴建物跡 Ⅱa位	漆鉢 - 胴部	胴部	胴部	柄取穴付着		91-83
P395	22号壺穴建物跡・埋土上 - 中位	漆鉢 (1/4周以下)	口縁部	口縁部	柄取穴付着		91-83
P396	22号壺穴建物跡・埋土上 - 中位	漆鉢 (1/4周未満)	口縁部	口縁部	柄取穴付着、内面下位		91-83

第 94 図 縄文~弥生土器 (43)



図録 No.	出土地点・層位	器種・部位	装 飾	内 面 (内面含む)	備 考	本文 記載	図 録
P397	25号壺式建物跡・埋土上-中位	漆鉢・口縁部	口縁部：横線・波線/波線、横文(厚肉凸)	内面なし			95-83
P398	25号壺式建物跡・埋土上-中位	漆鉢・口縁部	口縁部：横線、内面波線	ナシ			95-83
P399	25号壺式建物跡・埋土上-位	漆鉢(一部欠損)	口縁部：波線/波線、横文(厚肉凸)	ナシ	内面コシ付着		95-83
P400	25号壺式建物跡・埋土上-位	漆鉢・口縁部	波線・口縁部付着	ナシ			95-83
P401	25号壺式建物跡・埋土上-位	漆鉢・口縁部	波線・口縁部	波線・口縁部			95-83
P402	25号壺式建物跡・埋土上-位	漆鉢・口縁部	波線・口縁部	波線・口縁部			95-83
P403	25号壺式建物跡・埋土上-位	漆鉢・口縁部	波線・口縁部	波線・口縁部			95-83
P404	25号壺式建物跡・埋土上-位	漆鉢・口縁部	波線・口縁部	波線・口縁部			95-83
P405	25号壺式建物跡・埋土上-位	漆鉢・口縁部	波線・口縁部	波線・口縁部			95-83
P406	Ⅱ A28・壺形土器(中-位)	漆鉢(中-位)	波線・口縁部	波線・口縁部			95-84
P407	Ⅱ A29・壺形土器(中-位)	漆鉢(中-位)	波線・口縁部	波線・口縁部			95-84

第95図 縄文~弥生土器(44)



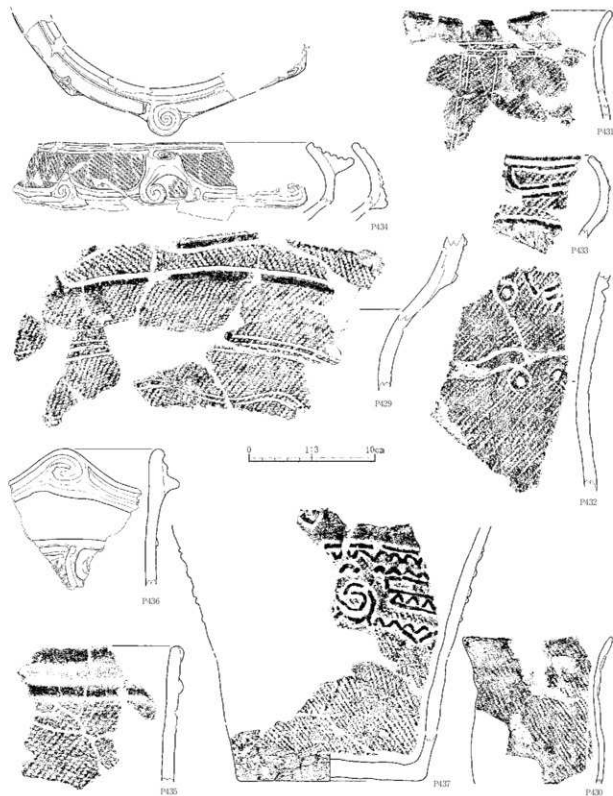
図録 No.	出土場所・層位	器種・部位	内 面 (口縁部 / 胴部 / 底面 / 底脚、縄文附体など)	内 面 (胴部など)	備 考	本文 記載	図 録 No.
P408	Ⅱ A20・墓室下段・5層	鉢 (口・取付口)	口縁部と胴部付・輪縁部	ナナ			96-81
P409	Ⅱ A20・墓室下段・5層	深鉢・口縁部	口縁部と胴部・底面・底脚 (口縁部コナ)	ナナ	器土繊維を含む		96-82
P410	Ⅱ A20・墓室下段・5層	深鉢・口縁部	縄文・フエノ形取付	ナナ	内面筋線		96-83
P411	Ⅱ A20・墓室下段・5層	深鉢	内面筋線・口縁部・底面・底脚。上から順に「口縁部コナ」	ナナ	内面コナ		96-84
P412	20号部穴建物跡・瓦上上・中段、瓦上一基 (3/5)、Ⅱ A20・Ⅰ西心ナ	深鉢 (口縁部未取)	高口・底面・口縁部コナ・底面・底脚	ナナ			96-84
P413	Ⅱ A20・墓室下段・5層	深鉢・口縁部	口縁部・底面・底脚・底脚付	ナナ			96-83
P414	Ⅱ A20・墓室下段・5層	深鉢・口縁部	フエノ形取付口	底面コナ	内面筋線		96-81
P415	Ⅱ A20・墓室下段・5層	深鉢・胴部	口縁部付・底面・底脚	ナナ	内面筋線		96-81
P416	Ⅱ A20・墓室下段・5層	深鉢・口縁部	口縁部付・口縁部コナ・底面・底脚	ナナ	内面筋線		96-81

第96図 縄文~弥生土器 (45)



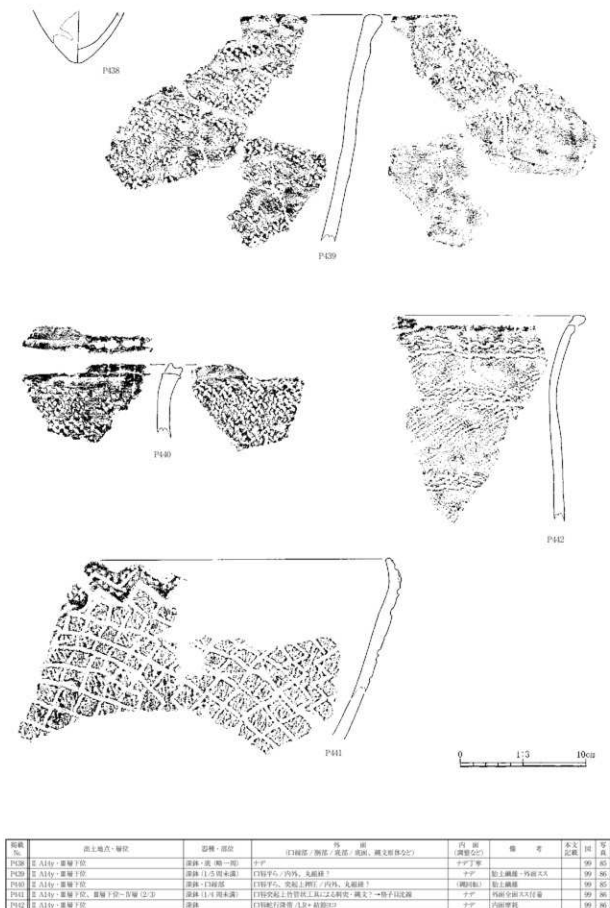
図版 No.	出土地点・層位	器種・部位	特徴 (口縁部/胴部/底部/底面、縄文装飾など)	内面 (装飾など)	備考	年代 記載	出 典
P417	Ⅱ A22b・墓層下段・古層	深鉢・口縁部	斜線文字	ナシ	片断欠片、内面ナシ	9C	84
P418	Ⅱ A22b・墓層下段・古層	深鉢・口縁部	垂直線・斜線・点字→縁部に沿った浅い波線	ナシ	内面ナシ付着	9C	84
P419	Ⅱ A22b・墓層下段・古層	深鉢・口縁部	L.R.点字+斜線・垂直線文字	ナシ	片断欠片付着	9C	84
P420	Ⅱ A22b・墓層下段・古層	深鉢・口縁部	口縁部上段に斜線・ナシ	ナシ		9C	84
P421	Ⅱ A22b・墓層下段・古層	鉢 (L/R) 両半部	L.R. (縦向き) ナシ・L/R浅い波線	ナシ		9C	84
P422	Ⅱ A22b・墓層下段・古層	深鉢・口縁部	口縁部上段に点字+斜線文字	ナシ	片断欠片、内面付着	9C	84
P423	Ⅱ A22b・墓層下段・古層	深鉢・胴部	L.R. ナシ→交互斜線文字、L/R浅い波線	ナシ		9C	84
P424	Ⅱ B12a (遺跡跡上段) Ⅱa Ⅱa前部、Ⅱ A18a・墓層下段、古層下段	深鉢 (2/3 両半部)	縁部・L.R. ナシ→口縁部ナシ (下内面のみ)、腹上段に斜線	ナシ	片断欠片、下段付着、内下段のみ	9C	84
P425	Ⅱ B12a (遺跡跡上段) Ⅱa Ⅱa前部、Ⅱ A18a・墓層下段、古層下段	鉢 (2/3 両半部)	口縁部上段・口縁部上段・縁部ナシ	ナシ	片断欠片付着	9C	84
P426	Ⅱ A12c・墓層下段・古層	深鉢・口縁部	口縁部内段に斜線・L.R.点字→L.R.の深めの波線・腹上段のみ	ナシ	内面付着	9C	84
P427	Ⅱ B12a・墓層下段・古層	深鉢・胴部	L.R.点字→L.R.交互斜線	ナシ		9C	84
P428	Ⅱ A13a・墓層下段・古層	深鉢・口縁部	L.R.点字・L.R.ナシ	ナシ		9C	84

第 97 図 縄文~弥生土器 (46)



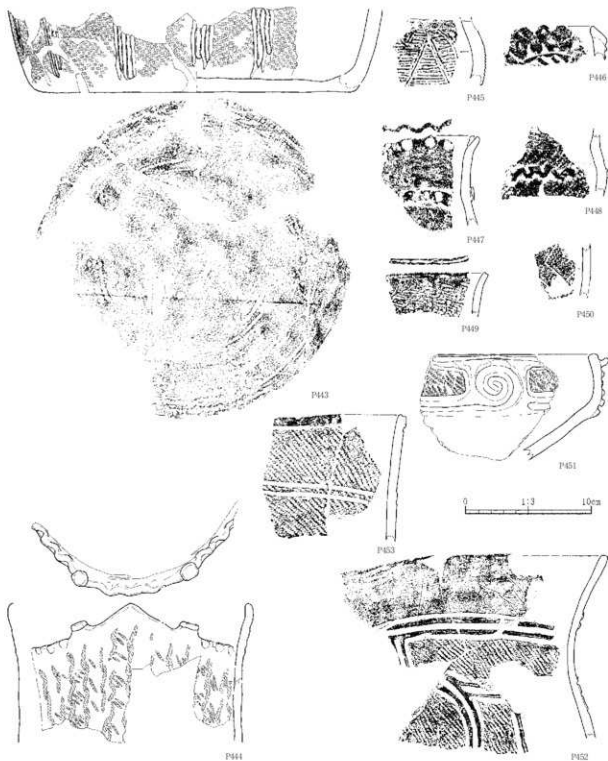
図番	出土地点・層位	図柄・部位	内 容	出 所	備 考	本文	頁 数
P429	Ⅱ A13a・墓層下段	漆線(1・4)両面調	口縁部・胎底・底面・底縁、縁支形残存等	1号台?	再スス、二次焼成、内面コゴ	96	85
P430	Ⅱ A13a・墓層下段・片層	漆・黒(一部)	底面口縁上縁コゴ	ナゾ		96	85
P431	Ⅱ A13a・墓層下段	漆線(1・4)両面調	胎底・胎底・胎底・胎底・胎底・胎底	ナゾ		96	85
P432	Ⅱ A13a・墓層下段	漆線・胎底	口縁部・胎底・胎底・胎底・胎底・胎底	ナゾ	再スス・再スス、内面コゴ	96	85
P433	Ⅱ A13a・墓層下段・片層	漆線・口縁部	口縁部	ナゾ	内面コゴ付	96	85
P434	Ⅱ A13a・墓層下段・片層	漆線(1・4)両面調	胎底・胎底・胎底・胎底・胎底・胎底	ナゾ?	内面コゴ付	96	85
P435	Ⅱ A13a・墓層下段・片層	漆線・口縁部	口縁部	ナゾ	内面口縁部	96	85
P436	Ⅱ A13a・墓層下段・片層	漆線・口縁部	口縁部	ナゾ	内面口縁部	96	85
P437	Ⅱ A13a・墓層下段・片層	漆線(漆黒)一部	口縁部・胎底・胎底・胎底・胎底・胎底	ナゾ	再スス、二次焼成、内面コゴ	96	85

第 98 図 縄文~弥生土器 (47)



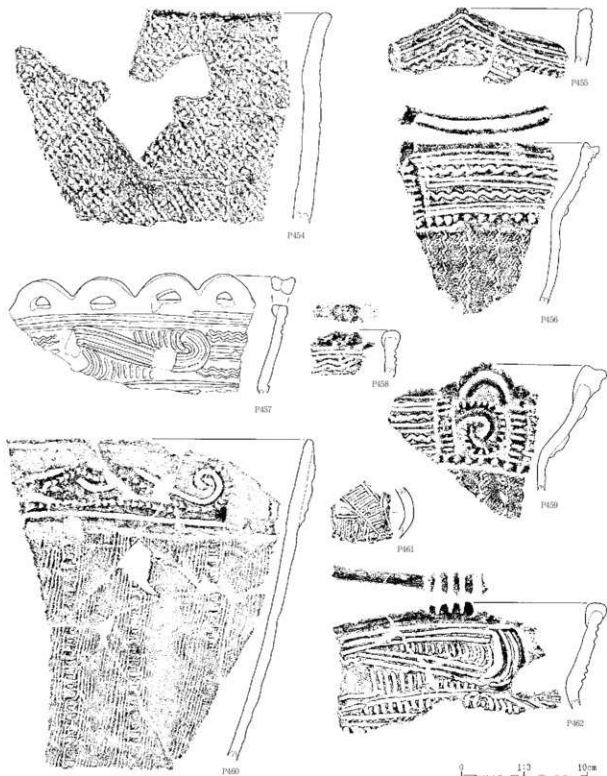
第99図 縄文~弥生土器 (48)

図版 No.	出土地点・層位	器種・部位	内 面 (口縁部/胴部/底面・底面、縄文附存など)	外 面 (表裏など)	備 考	本文 記載	写 真
P438	Ⅱ A1h・墓層下段	漆鉢・底(脚一列)	ナデ	(口縁部)		99-85	99-85
P439	Ⅱ A1h・墓層下段	漆鉢(口縁部)	口唇平ら、内外、丸縁?	ナデ		99-86	99-86
P440	Ⅱ A1h・墓層下段	漆鉢(口縁部)	口唇平ら、突起上唇? / 内外、丸縁?	(陶器)		99-87	99-87
P441	Ⅱ A1h・墓層下段、墓層下段~古層(2)上	漆鉢(口縁部)	口唇突起上唇に丸縁付、縁支? → 唇子以成縁	ナデ	内面全周スズ付着	99-88	99-88
P442	Ⅱ A1h・墓層下段	漆鉢	口縁部行漆着(丸縁・粘着ナデ)	ナデ	内面厚肌	99-89	99-89



図番	出土地点・層位	器種・部位	内 面	外 面	備 考	本文	図
P445	② A15a・宮城上段、② A15c・重層上段	漆鉢・底辺3用	①内面底・側壁/底面、②底面、③底面外心?	①内面(側面心?)		100	88
P446	② A15c・重層下段	漆鉢(1/5用木漆)	①内面(外心)・底面/底面外心に溝の凹面?	ナシ	上の頸口の、粘土層外面に縞	100	88
P447	② A15c・重層下段	漆鉢(1/5用木漆)	①内面(外心)・底面/底面外心に溝の凹面?	ナシ	ナシ	100	88
P448	② A15c・重層下段	漆鉢(1/5用木漆)	①内面(外心)・底面/底面外心に溝の凹面?	ナシ	上の頸口の、粘土層外面に縞	100	88
P449	② A15c・重層下段	漆鉢(1/5用木漆)	①内面(外心)・底面/底面外心に溝の凹面?	ナシ	ナシ	100	88
P450	② A15c・重層下段	漆鉢(1/5用木漆)	①内面(外心)・底面/底面外心に溝の凹面?	ナシ	ナシ	100	88
P451	② A15c・重層下段	漆鉢(1/5用木漆)	①内面(外心)・底面/底面外心に溝の凹面?	ナシ	ナシ	100	88
P452	② A15c・重層上段	漆鉢(1/5用木漆)	①内面(外心)・底面/底面外心に溝の凹面?	ナシ	ナシ	100	88
P453	② A15c・重層上段	漆鉢(1/5用木漆)	①内面(外心)・底面/底面外心に溝の凹面?	ナシ	ナシ	100	88

第 100 図 縄文～弥生土器 (49)



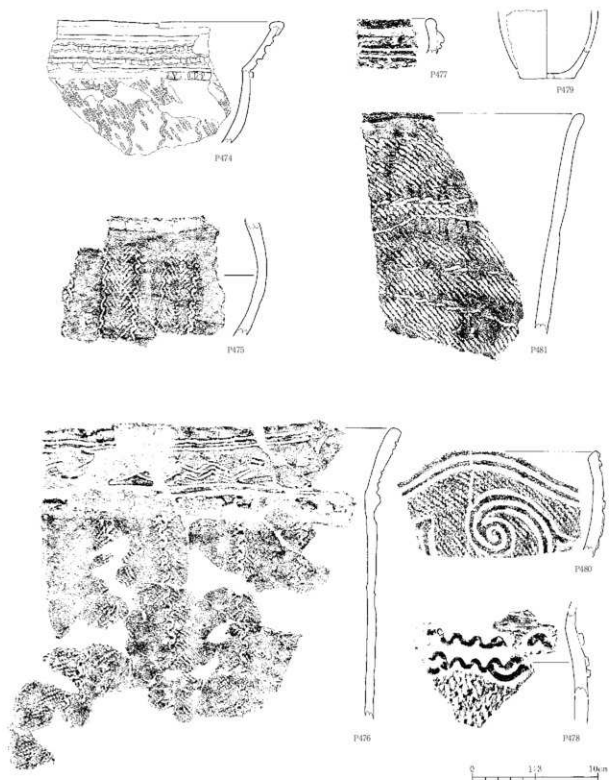
図録 No.	出土地点・層位	器種・形状	文 様 記 述 (口縁部/胎体/底面/裏面/底面縁部等)	片 取 寸 法 (縦横×高さ)	備 考	本文 図録	頁 No.
P454	Ⅱ A19c・重層?位-7層, Ⅱ A19a・重層?位-5層	深鉢 (1.5両未満)	行加糸? (底面段石部?)	ナナ			101 87
P455	Ⅱ A19c・重層?位-	深鉢鉢-白陶器	突起, 平直竹管状土丸に2点沈線, 刻み, 刻	ナナ			101 87
P456	Ⅱ A19c・重層?位-3層?	深鉢・白陶器	口縁沈線, 突起, 刻み, 刻	ナナ	内面未だ付着		101 87
P457	Ⅱ A19c・重層?位-5層	深鉢 (1.5両未満)	貫通突起, 深い沈線	ナナナ	内面未だ付着		101 87
P458	Ⅱ A19c・重層?位-5層	深鉢・白陶器	突起, 刻み	ナナ			101 87
P459	Ⅱ A19c・重層?位-3層	深鉢・白陶器	突起, 刻み, 刻	ナナナ	内面未だ付着		101 87
P460	Ⅱ A19c・重層?位-5層	深鉢 (1.5両未満)	平直竹管状土丸による突起, 丸く深い沈線, 平直線) 刻み	ナナ	内面未だ付着, 刻み	673	101 87
P461	Ⅱ A19c・重層?位-5層	深鉢鉢? - 紀子?	浅く刻み	ナナ			101 87
P462	Ⅱ A19c・重層?位-5層	深鉢・白陶器	内面突起, 口縁突起, 刻み	ナナ	下の製法は, 粘土層合面付		101 87

第 101 図 縄文~弥生土器 (50)



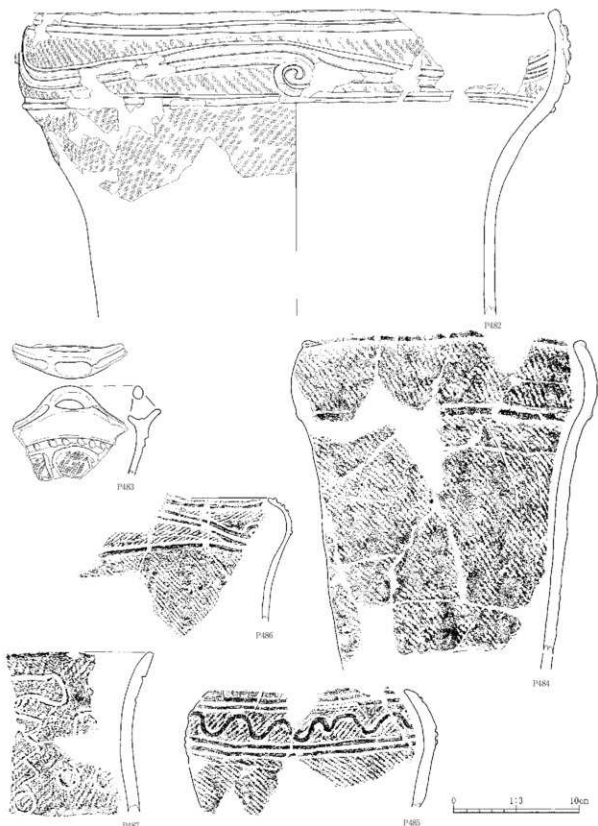
図録 No.	出土地点・層位	器種・部位	内 面 (装飾部)	外 面 (装飾部)	備 考	本文 記載	図 No.
P463	▲ A19a・墓層下段-3層?	漆鉢・口縁部	波型(縦線並列)・半条(点)・雲(点)・波型並列(横)	ナシ	片断大分量		102-85
P464	▲ A19c・墓層下段-3層?	漆鉢・口縁部	斜上(縦線)・縦(点)・縦(点)	ナシ			102-85
P465	▲ A19c・墓層下段-3層?	漆鉢・胴部	段帯(斜上)・L形・斜線、短・縦線ナシ	ナシ	片断大分量		102-87
P466	▲ A19c・墓層下段(点)・▲ A19a・墓層下-1層	漆鉢・口縁部	白(点)・波型(点)・波型(点)	ナシ	片断大分、口縁部は、粘土層表面に露		102-85
P467	▲ A19c・墓層下段-3層?	漆鉢・口縁部	半条並列(L)・ナシ・波型並列・斜上	ナシ	片断大分、ナシ(波型、点)ナシ		102-85
P468	▲ A19c・古層上段	漆鉢・口縁部	突起(波型)並列・半条竹管状(上)と波型(引込)	ナシ			102-87
P469	▲ A19c・古層上段	漆鉢・胴部	短・ナシ	短・ナシ	片断大分、内面ナシ		102-87
P470	▲ A19c・古層上段	漆鉢・胴部	短・波型	短・波型(点)・半条(点)・波型(点)	ナシ		102-87
P471	▲ A19c・古層上段	漆鉢・口縁部	白(点)・波型(点)・波型(点)	ナシ	片断大分量		102-85
P472	▲ A19a・墓層下段-1層(点)・古層上段	漆鉢・胴部	波型並列(1/4周以下)	内面段帯/波型(縦)	ナシ		102-85
P473	▲ A19a・古層上段	漆鉢・胴部	L形(波型)・波型(点)	ナシ	片断大分、内面ナシ		102-87

第 102 図 縄文～弥生土器 (51)



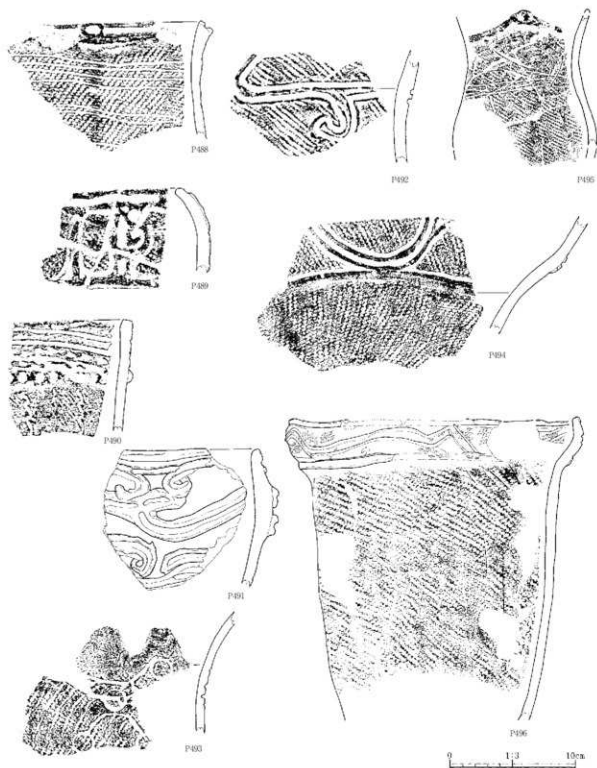
図版 No.	出土地点・層位	器種・部位	内 面 (134部/胴部/底面/流注、流注痕跡など)	外 面 (流注など)	備 考	本文 記載	頁 数
P474	E A19a・墓塚下位-IV層	深鉢・134部	半横竹管状土具による押し引き、LSL+粘粉ミナチ	ナチ	外面スス付着、内面黒塗	103	85
P475	E A19a・墓塚下-IV層	浅鉢鉢・胴部	粘粉土管 (L.S. 泥) + 粘粉ミナチ・流注前線	ナチ	外面スス、内面黒塗	103	86
P476	E A19a・墓塚下位-IV層	深鉢 (1.5周未満)	半横竹管状土具による流注、粘粉泥 (L.S. 泥) ナチ	ナチ	内口黒塗、外面黒塗	103	86
P477	E A19a・墓塚下位	深鉢・134部	流注・流注 (無流注)	ナチ	内スス、内口ナチ	103	86
P478	E A20・墓塚南側土上	深鉢 (1.5周以下)	流注・流注 (無流注)	ナチ	外面スス、内口ナチ	103	86
P479	E A20・墓塚	深鉢・134部	流注・流注 (無流注)	ナチ	下の腹口は、粘土層台無流注	103	86
P480	E A20・墓塚	深鉢・134部	流注・流注 (無流注)	ナチ	粘土層台無流注	103	86
P481	E A20・墓塚	深鉢・134部	流注・流注 (無流注)	ナチ	粘土層台無流注	103	86

第 103 図 縄文～弥生土器 (52)



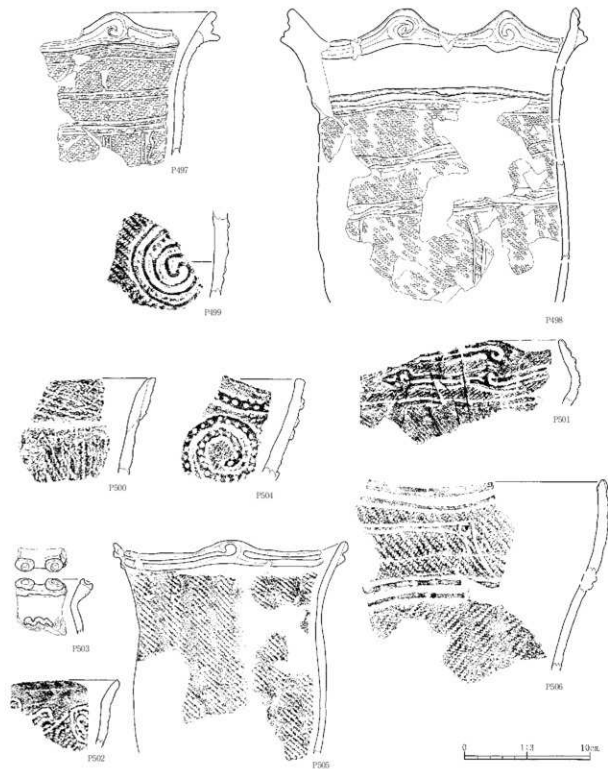
図番	出土地点・層位	容積・形状	内 面 (付属部・断面・底面・縄文取巻など)	内 面 (取巻など)	備 考	本文 記載	図 番
P482	Ⅱ A20a・重層、中央セクション・灰青褐色土、対照層土	深鉢(2) 筒本調	外底口縁部は、胴口部→高い段帯に付分ア	ナデ	内面取巻?		101
P483	Ⅱ A20a・重層	深鉢(1) 短足	口部→高い段帯に付分ア(取巻)	取分ア			101
P484	Ⅱ A20a・重層下位～重層、中央セクション・対照層土	深鉢(1) 短足(ア)	底面取巻(上段) 胴口部、胴口部	ナデ	内面取巻、二次取巻、内全面コナ		101
P485	Ⅱ A20a・重層下位～重層、中央セクション・灰青褐色土	深鉢(1) 短足(ア)	上段、口縁部、胴口部→高い段帯	ナデ	内面取巻(内面)、二次取巻、内コナ		101
P486	Ⅱ A20a・重層下位～重層	深鉢(1) 5筒本調	上段、口縁部、胴口部→段帯に付分ア	ナデ	内面取巻付巻		101
P487	Ⅱ A20a・重層下位～重層	深鉢(1) 短足	上段コナ→取巻(取巻部は取巻) 下の胴口部、底上段付取巻	ナデ	内面取巻、内面下コナ		101

第 104 図 縄文～弥生土器 (53)



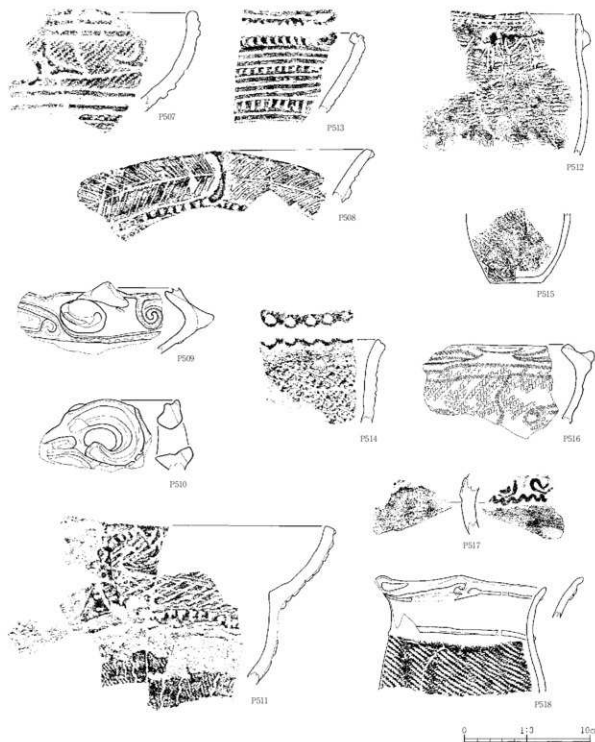
図版 No.	出土地点・層位	器種・部位	内 面	外 面	備 考	本文 図版	号 高
P488	ⅡA20・墓層下段-5層	漆鉢・口縁部	口縁部・胴部・底面・蓋面、継ぎ足部分に凸	口縁部(縦線)			105.89
P489	ⅡA20・墓層下段-5層	漆鉢・口縁部	口縁部(縦線、刺突・丸形・凸→横の突起)	口縁部(縦線)			105.89
P490	ⅡA20・墓層下段-5層	漆鉢・口縁部	口縁部(縦線)	口縁部(縦線)			105.89
P491	ⅡA20・墓層下段-5層	鉢・口縁部	口縁部(縦線)	口縁部(縦線)			105.89
P492	ⅡA20・墓層下段-5層	漆鉢・胴部	胴部(縦線)	胴部(縦線)			105.89
P493	ⅡA20・墓層下段-5層、中央セクション(遺跡・出土)	漆鉢・胴部	胴部(縦線)	胴部(縦線)			105.89
P494	ⅡA20・墓層下段-5層	漆鉢・口縁部	口縁部(縦線)	口縁部(縦線)			105.89
P495	ⅡA20・墓層下段-5層、5層	漆鉢(1/2以下)	口縁部(縦線)	口縁部(縦線)			105.89
P496	ⅡA20・墓層下段-5層、5層	漆鉢(胴部一欠)	胴部(縦線)	胴部(縦線)			105.89

第 105 図 縄文～弥生土器 (54)



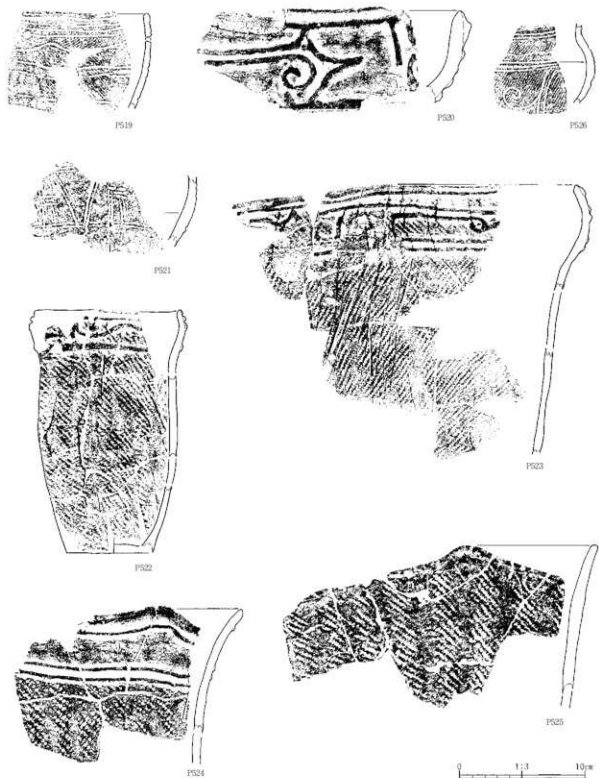
図番	出土地点・層位	器種・形状	内面 (口縁部/縁部/底面/裏面、裏面全体を記)	外面 (縁部を記)	備考	本文 記載	頁 数
P87	2 A20・古層	深鉢 (1.5周未満)	縦リナデ→縦リナデ面 (下の縁部は、粘土層分厚部)	滑面	内径大、内径深ナデ	106	80
P88	2 A20・古層	深鉢 (1.2周以下)	口縁突起単位不明・低い段帯→L.Nナデ→縞めで内面	ナデ		106	90
P89	2 A20・古層	深鉢・胴部	L.Nナデ→ゾーン状突起のみ	ナデ	内径大付着?	106	80
P90	2 A20・古層	深鉢・口縁部	斜め直リ口縁→縁部(1.5周)、口縁ナデ、縦リナデ	ナデ	内径突起付着・内径深ナデ?	106	80
P91	2 A20・古層	深鉢 (1.4周以下)	突起・L.N、口縁部、縦リナデ→縁部のみ、斜め直リ内面	ナデ	内径大、内径深ナデ	106	80
P92	2 A20・古層下部	深鉢・口縁部	縦リナデ、L.N→縁部のみ→ナデ	ナデ	内径大、内径深ナデ	106	80
P93	2 A20・古層下部	深鉢・口縁部	口縁突起・L.N直リ→ゾーン状突起	ナデ	内径大、内径深ナデ付着	106	80
P94	2 A20・古層下部・古層	深鉢・口縁部	突起付着・縦リナデ→縁部上突起	ナデ	内径大、内径深ナデ付着に多い	106	80
P95	2 A20・古層上部	深鉢 (1.5周以下)	4単位・L.N直リ→縁部→L.Nナデ	ナデ		106	90
P96	2 A20・古層上部	深鉢 (1.5周未満)	突起付着・口縁部、縦リナデ→縁部のみ、内面	ナデ		106	90

第 106 図 縄文～弥生土器 (55)



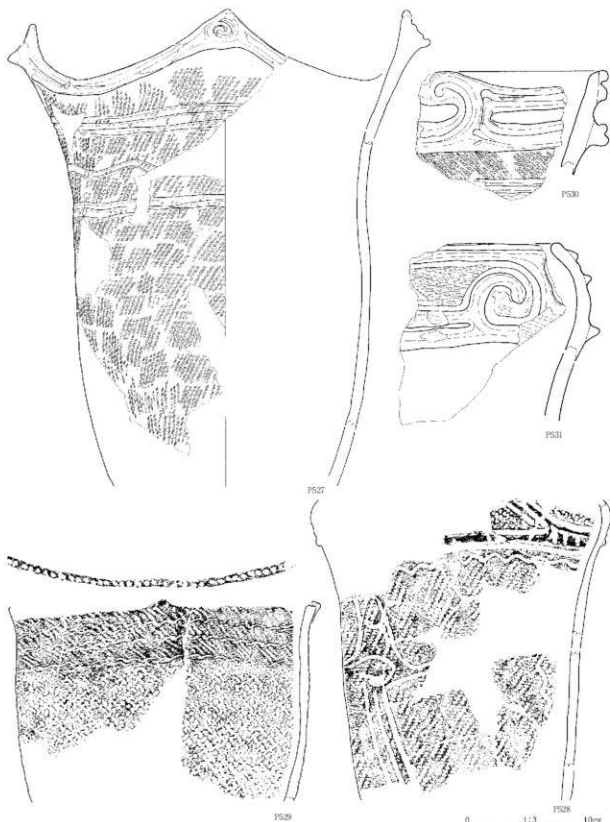
図版 No.	出土地層・層位	器種・部位	内面	外面	備考	本文 記載	図 号
PS07	E A20a・古輪上段	漆鉢・口縁部	口縁部・胴部	口縁部・胴部 / 高部 / 底面, 縄文彫刻など			107-89
PS08	E A20a・墓層下段・古輪上段(1/2)	漆鉢・口縁部	口縁部	口縁部→高部など			107-90
PS09	E A20a・古輪上段	漆鉢・口縁部	口縁部	口縁部			107-91
PS10	E A20a・墓層	漆鉢・口縁部	口縁部	口縁部			107-92
PS11	E A20a・墓層下段・古輪	漆鉢・口縁部	口縁部	口縁部 / 口縁部 / 口縁部			107-93
PS12	E A20a・墓層下段・古輪	漆鉢・口縁部	口縁部	口縁部			107-94
PS13	E A20a・墓層下段・古輪	漆鉢・口縁部	口縁部	口縁部			107-95
PS14	E A20a・墓層下段・古輪	漆鉢・口縁部	口縁部	口縁部			107-96
PS15	E A20a・墓層下段・古輪	漆鉢・口縁部	口縁部	口縁部			107-97
PS16	E A20a・墓層下段・古輪	漆鉢・口縁部	口縁部	口縁部			107-98
PS17	E A20a・墓層下段・古輪	漆鉢・口縁部	口縁部	口縁部			107-99
PS18	E A20a・墓層下段・古輪	漆鉢・口縁部	口縁部	口縁部			107-100

第 107 図 縄文～弥生土器 (56)



図録 No.	出土地点・層位	器種・部位	内 面 (口縁部/胴部/底部/底面、縄文附存部位)	外 面 (胴部/口)	備 考	本文 記載	図 表
P519	Ⅱ A20a・壺塚下位	鉢? (口縁未満)	LR・O・O2・底いじり	十字	内面スス・縞模孔		108-90
P520	Ⅱ A20a・壺塚下位	深鉢 (口縁未満)	十字	十字(底心)			108-90
P521	Ⅱ A20a・壺塚上位	鉢?・胴部	手裏持管状工具による底いじり	十字	内スス、内口フ多		108-90
P522	Ⅱ A20a・壺塚	鉢 (胴中略一層)	LR・F・F→底の透管、底面一底面十字	十字	内面スス、内面上部のみ付着		108-91
P523	Ⅱ A20a・壺塚 底有管状透物跡下	深鉢 (口縁以下)	底、口縁部?、底フキ→底面のみ付	十字	内スス、二底模孔、内口フ		108-91
P524	Ⅱ A20a・壺塚 底有管状透物跡下	深鉢 (口縁以下)	底面(底・LR・F)	十字			108-91
P525	Ⅱ A20a・壺塚 底有管状透物跡下	深鉢 (口縁以下)	底面・LR・F→十字	十字	内面スス付着		108-91
P526	Ⅱ A20・壺塚上位	鉢・胴部	底、F・F→底いじり	十字	内スス、内面全面十字		108-91

第 108 図 縄文～弥生土器 (57)



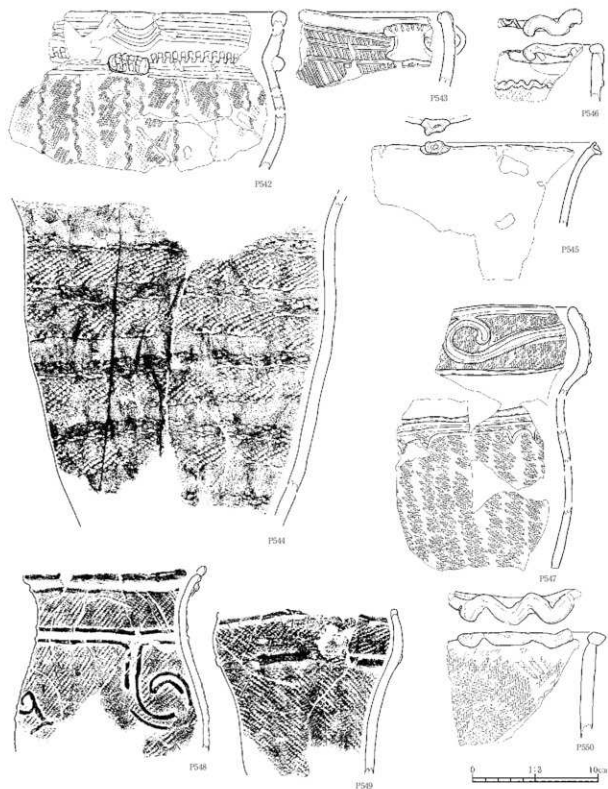
図版 No.	出土場所・層位	器種・部位	瓦 紋 (口縁部/胴部/肩部/底面、横文並列など)	瓦 面 (裏面など)	備 考	本文 記載	出 典
F527	Ⅱ A20・基層下段・西層、Ⅱ A20・Ⅱ-基層下段	深鉢 (口・足間口)	口縁部・胴部→底面	口縁部	Ⅱ A20、二次焼成、内下口		109 91
F528	Ⅱ A20・Ⅱ-基層下段	深鉢 (口・足間口)	口縁部・胴部→底面(口下付、浅い底面)	口下付	Ⅱ A20、二次焼成、内下口		109 92
F529	Ⅱ A20・基層、Ⅱ-基層下段	深鉢 (口・足間口)	口縁部・口唇部(口唇部)・胴部(口下付)・胴部(口下付)	口下付	Ⅱ A20、二次焼成、内下口		109 91
F530	Ⅱ A20・基層(赤褐色土)	深鉢・口縁部	口下付・口唇部	口唇部	Ⅱ A20、二次焼成、内下口		109 91
F531	Ⅱ A20・基層(赤褐色土)	深鉢・口縁部	口下付・口唇部(口下付)→口下付(口唇部)→口下付(口唇部)	口唇部	Ⅱ A20、二次焼成、内下口		109 91

第 109 図 縄文～弥生土器 (58)



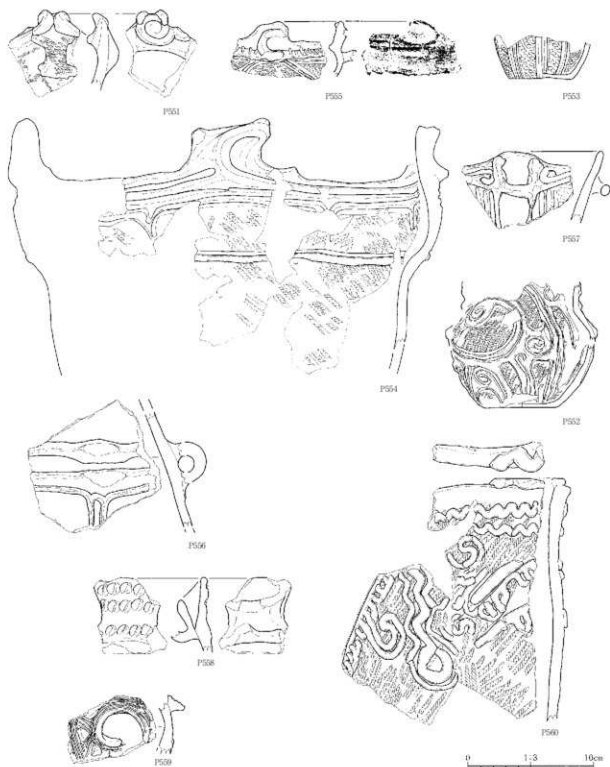
図番 No.	出土地点・層位	器種・部位	特 徴 (口縁部・胴部・底部・取手・底文等様式等)	内 容 (内装品等)	備 考	本文 記載	図 番
PS32	Ⅱ A21・黒曜黒褐色土	深鉢 (口内周縁)	内面釉引縁部縮落、口縁突起貼付	ナシ	外上二次焼成、下スス、内下全面ナシ		110 91
PS33	Ⅱ A21・黒曜黒褐色土	深鉢・口縁部突起	口縁ナシ	ナシ			110 91
PS34	Ⅱ A21・黒曜ナシ	深鉢・口縁部		ナシ			110 91
PS35	Ⅱ A21・黒・白層	深鉢・口縁部	胎付上刺突付	ナシ	内面スス付着		110 91
PS36	Ⅱ A21・黒・白層	深鉢・口縁部	手裏竹管状土具による刺突 (下の頸口、粘土層分断模様)	ナシ?下層	外下スス、内面コウ多		110 91
PS37	Ⅱ A21・黒・白層	鉢 (口内周縁ナシ)	口縁前後部・口縁ナシ、ナシナシ・底面一面ナシ	手裏竹管状土具	外スス、二次焼成、内下コウ		110 92
PS38	Ⅱ A21・Ⅱ・黒層下段、黒・白層	深鉢 (口内周縁ナシ)	内面引縁突起、底の底面 (口縁縮落の跡)	ナシ	外上スス、下二次焼成、内下コウ全面		110 92
PS39	Ⅱ A21・黒・白層	深鉢 (口内周縁)	口縁ナシ	ナシ			110 92
PS40	Ⅱ A21・白層上位	浅鉢 (口内周縁)	手裏粘土 (口縁部)	手裏粘土 (口縁部)	手裏粘土 (口縁部)		110 91
PS41	Ⅱ A21・白層上位	浅?口縁部	機軸取手 (厚肉)	ナシ			110 92

第 110 図 縄文～弥生土器 (59)



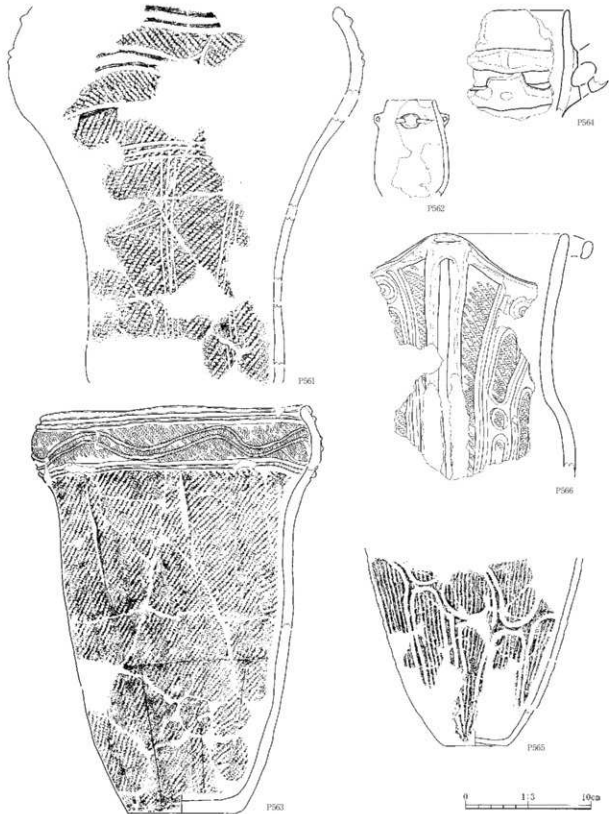
図番	遺土地点・層位	器種・部位	内 面	外 面	特 考	本文	図
P542	Ⅱ A21a・墓室下段、墓一方向	埴輪鉢 (1.1 用木炭)	底・前後フチへ△(底・底縁)	口縁部、胴部、肩部、底縁、前後縁(縁心)	横線文		111 102
P543	Ⅱ A21b・墓室上段	口縁部	口内縁部(粘付・手触り管状土塊による凸線)		十字		111 93
P544	Ⅱ A21b・手触り管状土塊部、Ⅱ A22・堀、正副坑	口縁 (1.2 用木炭)	口内・前後フチへ△(縁フチ) (上下縁)、粘土層(台面直縁)		十字		111 94
P545	Ⅱ A22a・正副坑土	底縁 (1.4 用炭)	口縁部(粘付、平ら・十字)		十字		111 92
P546	Ⅱ A23a・調査坑(西壁)・Ⅱ一層層	底縁・口縁部	口縁部(粘付・LR 20? → 粘付)		十字		111 92
P547	Ⅱ A23a・Ⅱ一層・3層層	底縁 (1.1 用木炭)	口内縁部、前後フチへ△(底・底縁) (台面フチ、浅い凸線)		十字		111 92
P548	Ⅱ A24a・Ⅱ一層・5層層	底縁 (1.1 用炭)	二重底・支脚(用木炭?)、底フチへ△(粘付・袋底形)		十字		111 91
P549	Ⅱ A24a・Ⅱ一層・5層層	底縁 (1.3 用炭?)	太丸底(袋底)・LR 口縁部△、前後フチ		十字		111 91
P549	Ⅱ A24a・Ⅱ一層・5層層	底縁・口縁部	口内縁部(袋底形)・LR 凸線		十字		111 92

第 111 図 縄文～弥生土器 (60)



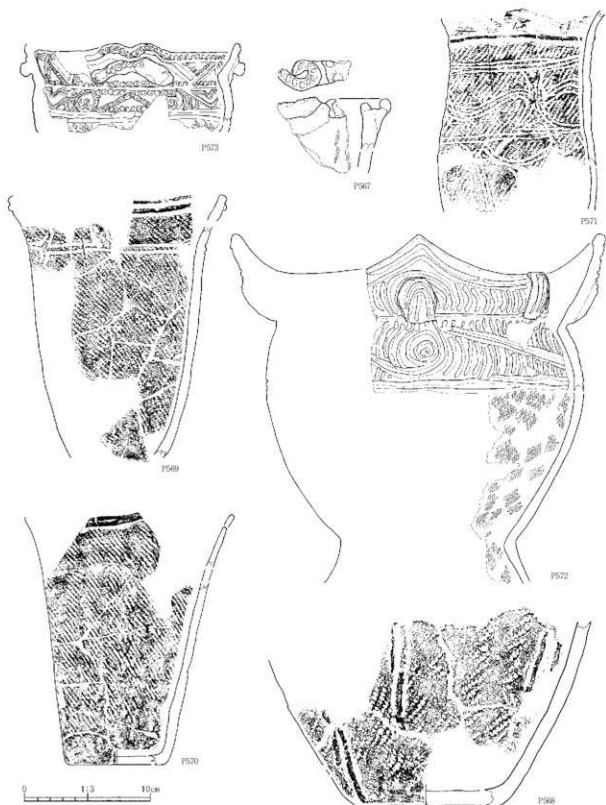
編年 No.	出土地点・層位	器種・形状	内 面	外 面	備 考	本文 記載	図 高
P551	Ⅱ A23a - 1 層-V層	深鉢 (口縁部)	口縁部 / 割出、底面 / 底面、縄文室体心付 (溝状心付)	口縁部			112 93
P552	Ⅱ A23a - Ⅱ 層-V層	鉢 (底一部)	横切面手は直線心付・L.R.ナテ・L.R.割出心付	口縁部			112 93
P553	Ⅱ A23a - Ⅱ 層-V層	底一部	L.R.ナテ→底の縁部に沿う浅い穴縁 / 底面ナテ	ナテ			112 93
P554	Ⅱ A25a - a 南トレンチ7777 層上	深鉢 (口縁以下)	L.R.口縁心付、ナテ、割ナテ→底面→△穴縁	ナテ縁	内面ナテ・底面ナテ付番		112 93
P555	Ⅱ A25c - a 南トレンチ7777 層上	深鉢 (口縁未満)	口内面直線縁部・L.R.ナテ	ナテ	内面ナテ、内面ナテ付番		112 93
P556	Ⅱ A25c - 25aリンドー層	底・胸部	横切面手は割出・浅い溝部	ナテナテ			112 93
P557	Ⅱ A25a - Ⅱ 層 A1a 直線縁輪郭上	深鉢・口縁部	横切面手は割出・△穴縁部・縄文室体不詳	ナテナテ			112 93
P558	Ⅱ A25a - Ⅱ 層 A1a 直線縁輪郭上	口縁部	割ナテ・横切面の割出・△穴縁・底面ナテ	ナテ			112 93
P559	Ⅱ A25a - Ⅱ 層 A1a 直線縁輪郭上	深鉢縁・口縁部	割出・△穴縁部・横切面・穴縁	ナテナテ			112 93
P560	Ⅱ A23a - Ⅱ 層-V層、Ⅱ A25a - Ⅱ 層 A1a - 直線縁輪郭上	深鉢 (口縁未満)	口縁部付・L.R.ナテ、ナテナテ→底面	厚縁	Ⅱ A23a) 割ナテ・内面ナテ		112 93

第 112 図 縄文～弥生土器 (61)



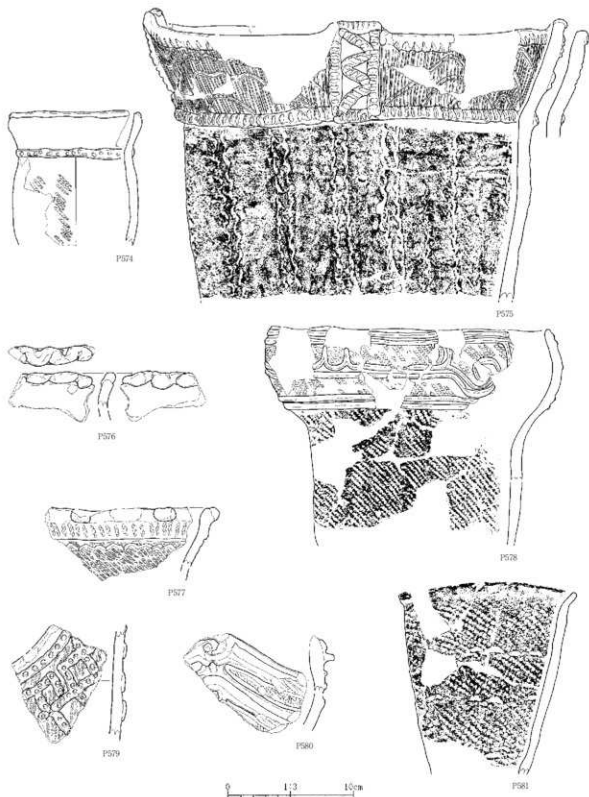
図版 No.	出土地点・層位	器種・形状	内 面 装 飾	外 面 装 飾	備 考	表寸 高	径 高
P561	2号壺穴建物跡西一層上土位、3号壺穴建物跡西一2層、埋土中位、埋土上土位	深鉢 (深略一形)	口縁部、胴部、底面、底面、隅文部無装飾	口縁部、胴部、底面、隅文部無装飾	ナデ	113	91
P562	16号壺穴建物跡西一1層	深鉢 (口縁部以下)	口縁部	口縁部	ナデ	113	91
P563	2号壺穴建物跡西一1層、2号壺穴建物跡西一2層、埋土中位、埋土上土位	深鉢 (口縁部以下)	口縁部	口縁部	ナデ	113	91
P564	B 16層・方層 (3号壺穴建物跡西)	深鉢 (口縁部以下)	口縁部	口縁部	ナデ	113	91
P565	B 16層・方層上土位	深鉢 (口縁部以下)	口縁部	口縁部	ナデ	113	91
P566	埋土上層部 (2号壺穴建物跡西)	深鉢 (口縁部以下)	口縁部	口縁部	ナデ	113	91
P567	埋土上層部 (2号壺穴建物跡西)	深鉢 (口縁部以下)	口縁部	口縁部	ナデ	113	91

第 113 図 縄文～弥生土器 (62)



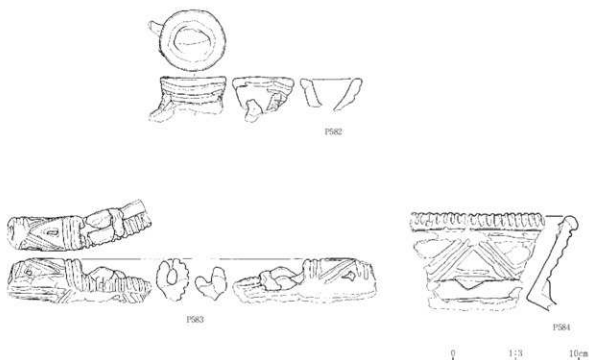
図録 No.	出土地点・層位	器種・部位	内 面 (口縁部/胴部/底部/裏面, 縄文取付など)	内 面 (裏面など)	備 考	本文 図録	写 真
P563	赤色土層遺跡部	深鉢・口縁部	口縁部取付・粘着土ナシ	ナシ		114	91
P564	赤色土層遺跡部	深鉢(1/2筒未満)	底, ナシ→底・縁部ナシ→底面ナシ	ナシ		114	92
P565	赤色土層遺跡部	鉢(1/2筒未満)	口縁部・胴部・上底ナシ→口縁部・底面ナシ	ナシ	内面欠損部	114	93
P566	中央オカサコ・古墳層上, 灰青褐色土	鉢(第一層)	底面・口縁部・胴部・上底ナシ→底面・底面ナシ	ナシ	内土欠, 下二枚焼成, 内コナ	114	95
P567	中央オカサコ・古墳層上	鉢(中央一層)	口縁部→底・縁部・胴部ナシ, 底・底面・底面ナシ	内面ナ	内土欠, 二次焼成, 内土面ナシ?	114	94
P568	中央オカサコ・墓層	深鉢鉢(1/4筒以下)	口内面取付欠損・取付下底付・口縁部の底面・上底ナシ	内面ナ	内土欠多, 内コナ多	114	95
P569	中央オカサコ・墓層	深鉢鉢(1/2筒未満)	取付下底付・竹管状工具跡, 引込, 刺突・底, コナ→底の底面	ナシ	内土欠, 内コナ多	114	93

第 114 図 縄文～弥生土器 (63)



図版 No.	出土地点・層位	器種・部位	外 形	内 面 (調査状況)	備 考	本文 記載	図 号
P574	ⅡA20a, v・遺跡, 中央セクション・灰青褐色土	鉢(口縁未満)	口縁以上縁下の刺突・土灰ナシ	ナシ? 丁寧	片欠, 二次焼成, 内コブ		115_91
P575	Ⅱ中層(遺跡)東土一層, Ⅱ中層(遺跡)東土上・中層, 東土中層	深鉢(胴一側)	口縁突出, 縁部上縁・縁部・口内縁上縁突出・口・縁部ナシ	ナシ	片欠, 二次焼成, 片欠, 内コブ	p27	115_90
P576	本層2・表土一灰色砂土層	深鉢・口縁部	口縁に刺行状帯	ナシ			115_94
P577	本層2・表土一灰色砂土層	深鉢・口縁部	口縁突出・上縁・縁部行状, L.R.ナシ→沈線	口内ナシ	片欠欠入付帯		115_91
P578	遺跡(Ⅱ中層以下)	深鉢・口縁部	縁部突出・L.R.ナシ→口内の沈帯	口内ナシ	片欠, 片欠		115_90
P579	遺跡(Ⅱ中層)	深鉢・口縁部	口縁ナシ→口内→刺突	ナシ(口内)	片欠(口縁部), 片欠(口内)		115_89
P580	遺跡(Ⅱ中層)・層位以下(暗褐色土)	深鉢・口縁部突出	口縁ナシ→縁部に口内沈線	口内ナシ	片欠欠入, 内面コブ付帯		115_91
P581	遺跡(Ⅱ中層)	深鉢・口縁部	L.R.ナシ	ナシ	片欠, 二次焼成, 内コブ		115_90

第115図 縄文~弥生土器(64)



図載 No.	出土地点・層位	器種・部位	形 式 (口縁部・胴部・底部・底脚、縄文装飾など)	内 面 (装飾など)	備 考	本文 記号	写真
P582	T77・黒色土層	鉢類・口縁部突起	太口縁の浅鉢	ナシ	西館大付着	116.95	
P583	黒色土・灰土層	埴輪類・口縁部	口縁部から半蓋まで突起・凸部・底脚	ナシ	下の層P131、粘土層合面破壊	116.96	
P584	T77a・黒色土層	埴輪類・口縁部	内面無装飾部・口縁部付・太口縁・浅鉢	ナシ		116.95	

第116図 縄文~弥生土器 (65)

第4表 竪穴建物跡別縄文土器出土一覧表

遺構名	図載 No.	遺構名	図載 No.
1号竪穴建物跡	P007	16号竪穴建物跡	P338,339,502
2号竪穴建物跡	P008 ~ 002,P062,P118,P128,P561	17号竪穴建物跡	P343 ~ 347,349 ~ 354
3号竪穴建物跡	P042 ~ 117,P119 ~ 126,P129,P130,P175	18号竪穴建物跡	P366,367
4号竪穴建物跡	P127,P131 ~ 163,P276,P302,P575	19号竪穴建物跡	P368 ~ 370
5号竪穴建物跡	P164 ~ 174	20号竪穴建物跡	P371 ~ 378
6号竪穴建物跡	P176 ~ 304,P307 ~ 213,P518,P523 ~ 525	21号竪穴建物跡	P379 ~ 384
7号竪穴建物跡	P214,P216 ~ 238	22号竪穴建物跡	P385 ~ 390
8号竪穴建物跡	P259 ~ 273,P275,P277,P391,P425	23号竪穴建物跡	
9号竪穴建物跡	P278 ~ 283	24号竪穴建物跡	P272,P4390 ~ 394
10号竪穴建物跡	P284 ~ 317	25号竪穴建物跡	P215,P296 ~ 405,P412
11号竪穴建物跡	P319 ~ 234,P424	26号竪穴建物跡	P001 ~ 005
12号竪穴建物跡	P325 ~ 330	27号竪穴建物跡	P006
13号竪穴建物跡	P331 ~ 333	28号竪穴建物跡	
14号竪穴建物跡	P334	29号竪穴建物跡	P318
15号竪穴建物跡	P335 ~ 337	30号竪穴建物跡	P340 ~ 342

(2) 土師器・須恵器(第117~120図、写真図版96~100)

土師器・須恵器は、出土遺物のうち、遺構出土資料を優先して掲載した。遺構出土資料の中では、遺構の時期決定が可能な出土状況のもので、かつ図化が可能なものを優先した。585~598・600~613は土師器、599は須恵器である。出土総量は、土師器が17,098.7g、須恵器が5,053.1gである。

1) 26号竪穴建物跡 (P585~599) 総量土師器 8,825.2g、須恵器 4,257.8g

585~589・591はカマド埋土から出土したもの。

585~589は甕で、長胴のものである。585は口縁部から底部。外面はヘラナデ後ミガキ、内面はヘラナデである。586は口縁部から胴部。外面はハケ後ミガキ、内面はハケ後ヘラナデである。587は頸部

有段のもので、口縁部から底部である。段は1段で、輪積みと一致する。外面はハケ後ミガキ、内面はハケである。588は胴部から底部。外面は内外面ともにハケである。591は頸部から底部。内外面ともにハケである。

589は鉢の口縁部である。内外面ともにミガキで、内面黒色処理である。

590は床面から出土したもの。

590は壺の口縁部から胴部である。外面はナデ後ミガキ、内面はヘラナデ後ミガキである。

591～593は埋土下位から出土したもの。

591・592は甕で、長胴のものである。591は頸部から底部。内外面ともにハケである。592は口縁部から底部。外面はハケ後ミガキ、内面はヘラナデである。

593は有段の坏の口縁から底部である。段は1段で、内面にも段があり。輪積みと一致する。内外面ともにミガキで、内面黒色処理である。

594～599は埋土中位から主体的に出土したもの。

594～596は甕で、長胴のものである。594・595は頸部有段のものである。594は完形品である。段は2段で、沈線状に見える。内外面ともにハケである。外面のハケは一部で線状の痕跡に見える部分があり、ミガキの可能性もある。595はほぼ完形品である。段は1段で、沈線状に見える。外面はハケ後ミガキ、内面はハケである。596は小型のもので、ほぼ完形品である。外面がハケ、内面はハケである。底部外面はハケ後ナデである。

597は鉢である。有段のもので、口縁部から胴部。段は1段で、輪積みと一致する。外面はハケ後ミガキ、内面はミガキで、内面黒色処理である。

598は碗である。有段のもので、口縁部から底部。段は1段で、内面にも段があり、輪積みと一致する。内外面ともにミガキで、内面黒色処理である。

599は埋土中位から出土した須恵器の中甕で、口縁部と肩部から底部である。胴部の外面は並行タタキ、内面には円礫による当て具痕がみられる。口縁部の外面はロクロナデである。

2) 27号竪穴建物跡 (P600) 総量土師器 32.1g

600はカマドの袖から出土したもの。

600は甕で、小型のものである。口縁部から底部で、ほぼ完形品である。外面はハケ後ミガキ、内面はミガキである。外面のミガキは線状の痕跡に見えるものである。

3) 29号竪穴建物跡 (P601) 総量土師器 221.1g

601は床上から出土したもの。

601は坏の口縁部から底部である。段は1段で、内面にも段があり、輪積みと一致する。外面はハケ後ミガキ、内面はミガキで、内外面黒色処理である。

4) 30号竪穴建物跡 (P602～P610) 総量土師器 3,926.6g

602～613はカマド埋土から出土したもの。

602～605は甕である。602はやや肩の張るもの、604・605は長胴のもの。602は口縁から底部。口唇は摘み上げている。二次焼成による赤化が顕著に見られる。外面はハケ後ミガキ、内面はヘラナデ後ミガキである。外面のミガキは線状の痕跡に見えるものである。603は口縁から底部。外面はハケ後ミガキ、内面はハケである。604は口縁から底部。外面はハケ後ミガキ、内面はミガキである。外面のミ

ガキは線状の痕跡に見えるものである。605は頸部有段の甕の口縁から底部である。段は1段で、輪積みと一致する。主な調整は外面がハケ後ミガキ、内面はナデ後ハケである。

606・607は坏である。606は小型のもので、口縁から底部。底部は平底で厚い。輪積みで成形している。内外面ともにミガキで内面黒色処理である。輪積みで製作している。607は有段のもので、口縁から底部。段は1段で、内面はやや段状になり輪積みと一致する。内外面ともにミガキで内面黒色処理である。

608・609は床面直上から出土したもの。

608・609は有段の坏である。段は1段で、内面は輪積みと一致する。608は口縁から底部。段はミガキにより稜線状となる。内外面ともにミガキで内面黒色処理である。609は口縁から底部。内外面ともにミガキで内面黒色処理である。

610はカマド付近の埋土下位から出土したもの。

610は甕の口縁から胴部である。外面はハケ後ミガキ、内面はナデである。

5) 7号a～d焼土遺構 (P611) 総量土師器33.4g

611は周辺の遺物包含層から出土したもの。

611は甕の底部である。外面はナデ後ハケ、内面はハケである。

他に焼土の覆土からも土師器が出土したが小片のため図化できなかった。

6) 遺物包含層 (P612・P613) 総量土師器2,373.4g、須恵器795.3g

612はⅢ層の検出面から出土したもの。

612は坏の口縁から底部である。内外面ともにミガキで内面黒色処理である。

613は出土地点が不明なものであるが、取り上げを行った同じ袋のものが30号竪穴のカマドのもの多く接合していることから、30号竪穴のカマドから出土した遺物の可能性が高い。

613は坏の口縁から底部である。内外面ともにハケ後ミガキで、内面黒色処理である。

(佐藤 剛)

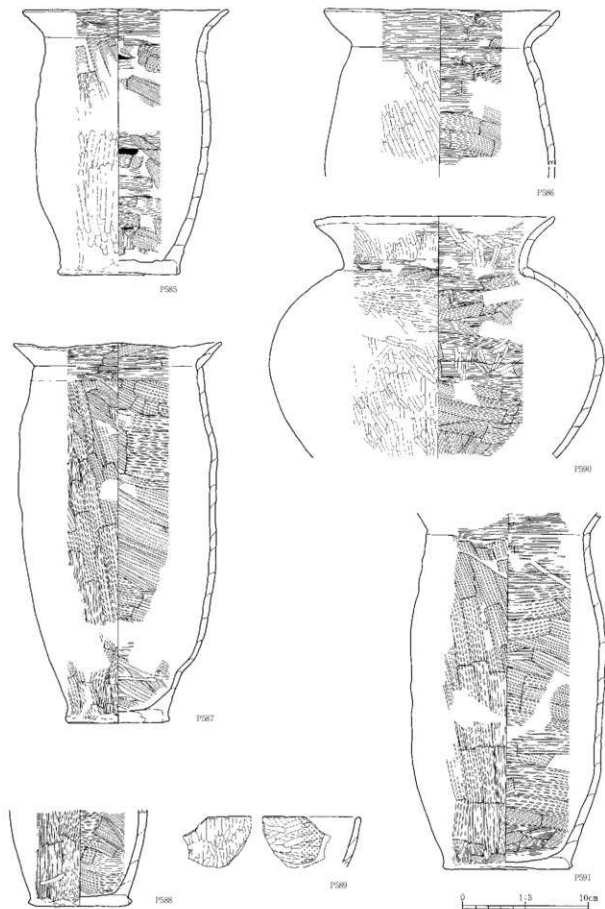
(3) 土 製 品 (第121図、写真図版101)

縄文時代に属する資料としては、装飾品が出土している。G002は、ボタン状で、中央には直径1.5mmの穿孔が見られる。G003は、欠損しているが、管状になっているのが確認できる。G004は、中期中葉に帰属する7号竪穴建物跡から出土した斧状土製品である。G005は縄文土器片を円盤状に加工したもので、穿孔は認められない。

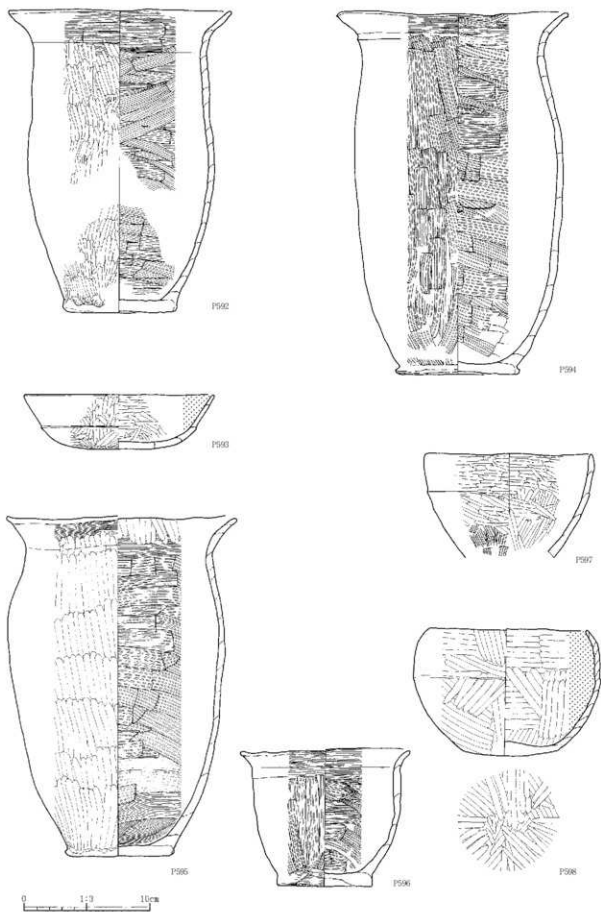
古代に属する資料は、紡錘車が4点出土した。26号竪穴建物跡から出土したG006は、全面をミガキ調整され光沢を放つ。G008も同じく26号竪穴建物跡の床面資料であるが、側面に紐状の圧痕が2カ所確認できる。制作時に使用した道具痕であろうか。G010は30号竪穴建物跡から出土した。26号竪穴建物跡から出土している紡錘車と比較すると薄手である。

(4) 石器・石製品 (第122～133図、写真図版101～108)

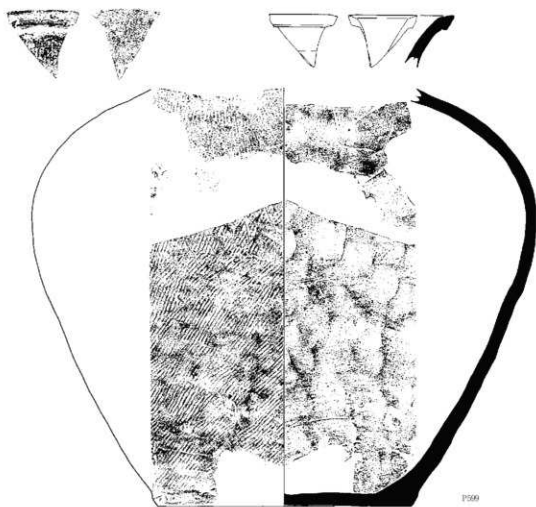
本調査で出土した石器・石製品は、種類ごとに下記の通り分類し、全て観察表に記載している。整理期間の都合上全てを図化することは困難であったため、写真にその解釈を頼るものも少なくない。なお、形状が類似するもの出土地点が同遺構のもの等は観察表のみにとどめていることをご承知願



第117図 土師器・須恵器(1)



第118図 土師器・須恵器(2)



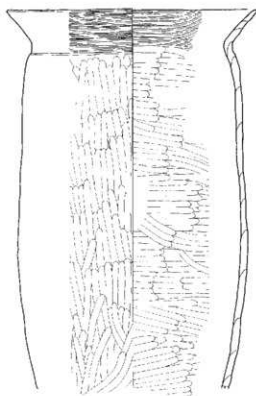
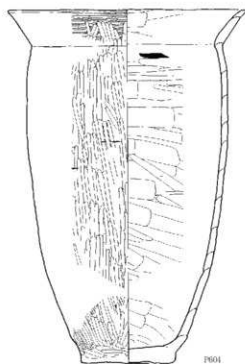
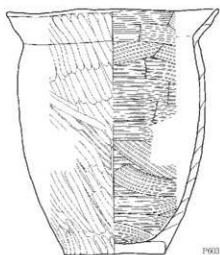
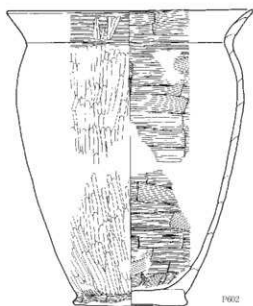
1900



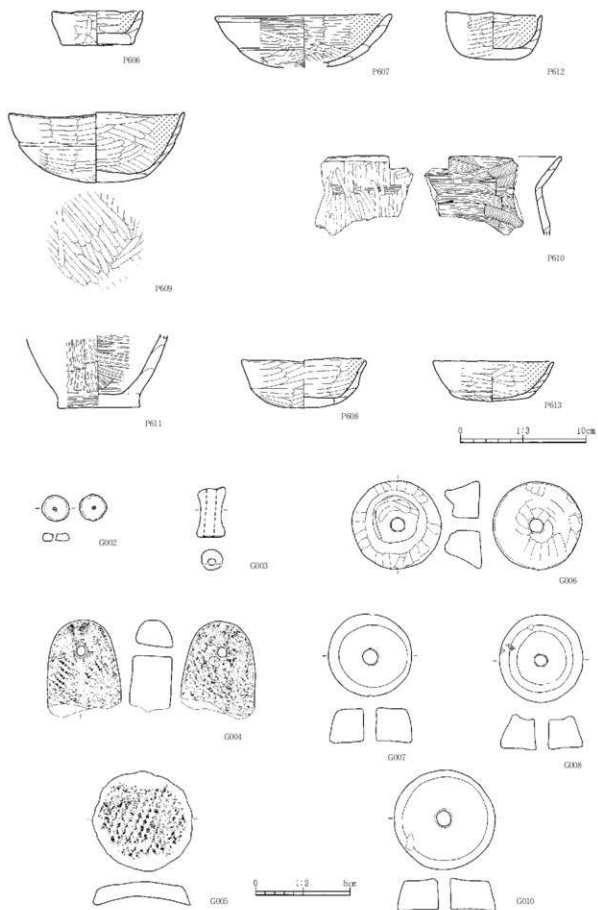
1901

0 1:3 10cm

第119図 土師器・須恵器(3)



第120図 土師器・須恵器(4)



第121図 土師器・須恵器(5)・土製品

たい。石質は代表的な資料を抜き出し、肉眼鑑定を花崗岩研究会に委託した。その他、調査者の肉眼で識別可能なものは観察表に記入している。

石鏃

118点出土。45点を図化と写真掲載、5点は写真掲載のみにした。分類・細分は以下の通り行った。

1. 無茎のもの
 - a 基部が深く扶られる
 - b 基部が平坦
2. 有茎のもの
3. 基部全体が出っ張るもの
 - a 棒状
 - b 基部が丸味をおびる（円茎）
4. 異形石鏃
5. 未成品

全体のおよそ72%が無茎である。8号堅穴建物跡から出土したS037は、先端部が小さく扶られ、基部がΩ字状に加工される。

石匙

25点出土。12点を図化と写真掲載にした。分類は以下の通り行った。つまみ部を上にした時の刃部の位置が

1. 側面に確認できるもの（縦型）
2. 下面に確認できるもの（横型）

縦型と横型に大きな偏りはない。つまみ部は全て両面調整により加工されている。S133は、大形の石匙である。つまみ部は両面から加工されているが、刃部は片面のみの調整である。

尖頭器

8点出土し、5点を図化と写真掲載、1点を写真掲載のみとした。

全体的に細かな調整が施されている。S151は、基部に丸味をもたせたつまみのような形状をしている。山形県押出遺跡で出土した押出ポイントと類似するものと考えられる。先端は欠損している。

スクレイパー

19点出土し、4点図化と写真掲載、2点は写真掲載のみにした。分類は以下の通り行った。

1. 搔器 刃部が局部的にのみ作り出され、急な角度に調整されたもの。皮なめしに使えそうなもの。
2. 削器 刃部が連続的に作り出され、直線的に調整されたもの。物を切ったり、削ったり出来るようなもの。

S158は、搔器で、下部にのみ加工調整が確認できる。親指と人差し指に収まるサイズである。

石錐

5点出土し、2点図化と写真掲載、3点は写真掲載のみにした。

縦長の一部を加工し、その断面が菱形になるものである。石鏃と区別が困難なものがあるが前述の点を選別の基準とした。

SI72 は、つまみあり。寸胴である剥片の一端を加工調整して錐部を作り出している。

石篋

7点出土し、3点図化と写真掲載、2点を写真掲載のみとした。

刃部が丸いもの、直線的なもので厚みがある。スクレイパーよりずっしりするもの。

SI77 は、楕円形気味の形で両面加工が施される。

楔形石器

1点出土し、写真掲載のみとした。

SI83 は、両側縁に階段状剥離が認められる。

不定形剥片石器

微細加工のある剥片（UF）は13点、加工痕のある剥片（RF）は11点出土しており、5点写真掲載のみとした。

石核

9点出土し、2点を写真掲載のみにした。

全て、北上山地中生代前期の頁岩である。青灰色を呈するこれらは、本調査で出土している石鏃にも、同じ石質のものが散見でき、この場で製作されていたことが考えられる。

石斧

15点出土し、8点図化と写真掲載、7点写真掲載のみとした。

磨製11点と打製3点である。S231は小形で鑿状であるが、使用痕は認められず実用性を目的としていないと考えられる。

敲磨器

120点出土し33点図化と写真掲載をした。分類／細分は以下の通り行った。

はじめに、形状で3分類し

1. 円形
2. カマボコ形・断面が多角形
3. 棒状

次に、痕跡別で細分した。

- a. 磨った範囲が表面もしくは裏面にあるもの。
- b. 磨った範囲が表裏両面もしくは、2面以上あるもの。
- c. 磨った範囲が側面にあるもの。（特殊磨り石）
- d. 敲石。敲打痕があるもの。
- e. 凹石。凹みがあるもの。

痕跡が複合的に観察できるものは、「1ad」といったように表記している。

側面を使用する、いわゆる特殊磨り石が全体のおよそ37%を占める。特殊磨り石の中には、下部を平らに打ち割っているものがあり、大人の掌におさまる大きさである。また、2号堅穴建物跡床面資料のS235のように側面を平らに作り出し、使用しているものがある。特殊磨り石と捉まえて資料を観察したとき、この2点が認められる蓋然性が高く、側面で磨るという利用方法に固執している様子がかがえる。

砥石

3点出土し、1点図化と写真掲載、1点を写真掲載のみとした。

S352は古代の堅穴26号堅穴建物跡埋土下位から出土した砂岩製の砥石である。長方形の板状で片面のみが平滑となっている。一方S354は、縄文の堅穴4号堅穴建物跡から出土した砥石である。同じく砂岩製で自然礫の形状が生かされ使用痕が数珠の溝としてあらわれている。

台石

15点出土し、3点写真掲載のみにした。

石棒

3点出土し、2点を図化と写真掲載、1点を写真掲載のみとした。

G011は、6号堅穴建物跡床面から出土した大形の石棒である。表面中央部が凹み、研磨痕が顕著である。下部は平らに打ち割られ整形が施される。裏面は自然面を残し、側面の研磨も荒々しい。

有孔石製品

1点出土し写真掲載のみとした。

G014、砂岩製の自然礫を使用した有孔石製品が22号堅穴建物跡から出土している。正面からの穿孔による貫通と見られ、裏面の孔は小さい。その他の加工は認められない。

円形・半円形石製品

3点出土し、全点写真掲載のみとした。

7号堅穴建物跡埋土下位から出土しているG015は、円形状に縁辺を加工してから、半円形になるように打ち割ったものと考えられる。G016は、礫の丸味部分を活かし一部打ち割っている縁が連続する。

棒状石製品

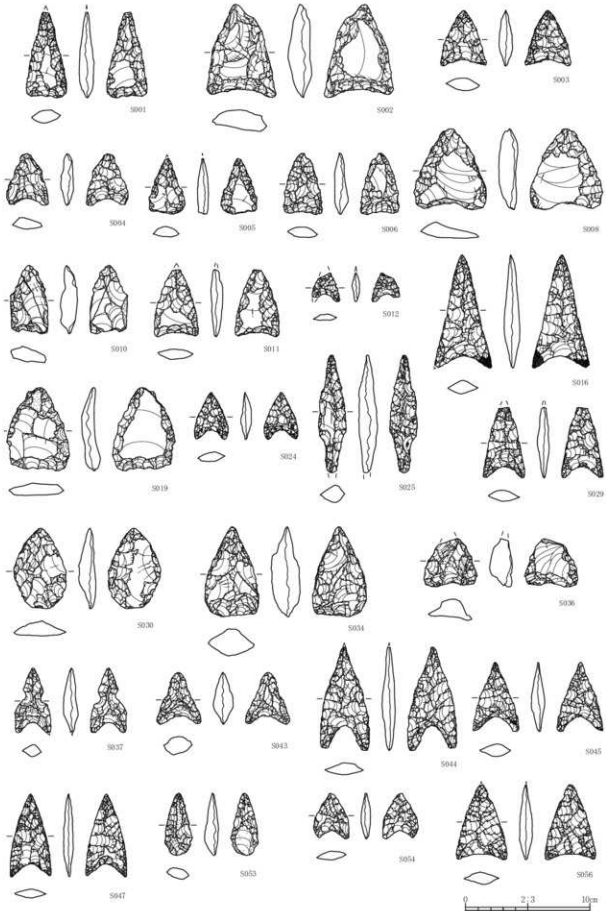
3点出土し、全点写真掲載のみとした。

G020は、3号堅穴建物跡から出土した頁岩の棒状の石製品で全面に削痕が認められる。26号堅穴建物跡埋土下位から出土したG018は、断面が台形で平滑面が確認でき、砥石の可能性もある資料である。

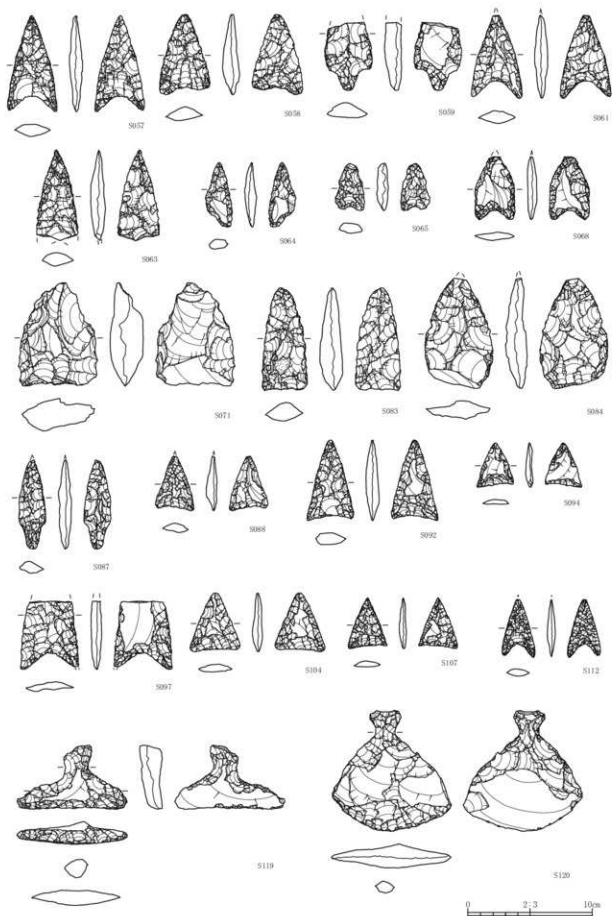
塊状耳飾り

2点出土し、全点図化と写真掲載をした。

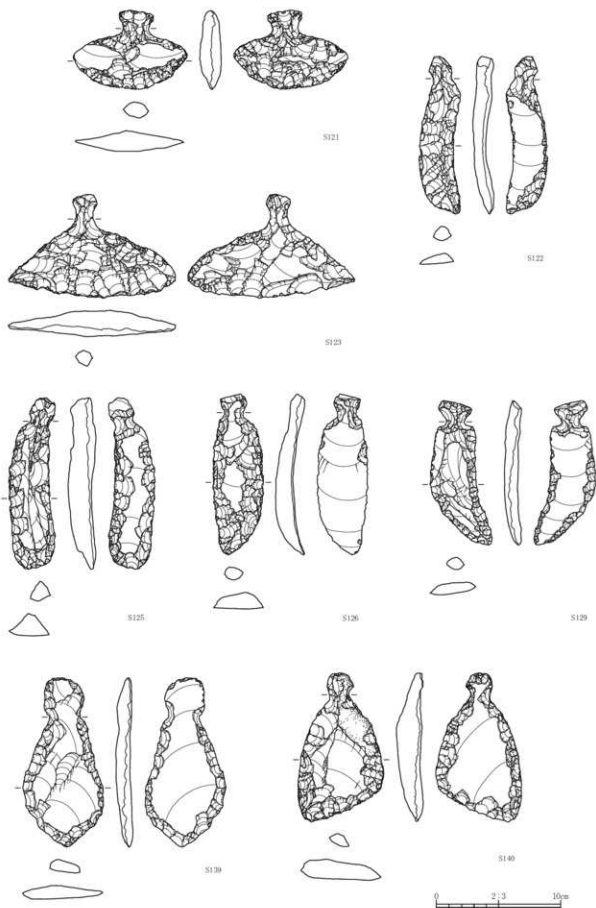
いずれも欠損している。G027は、沢跡から出土した蛇紋岩製の塊状耳飾りである。孔が1カ所認め



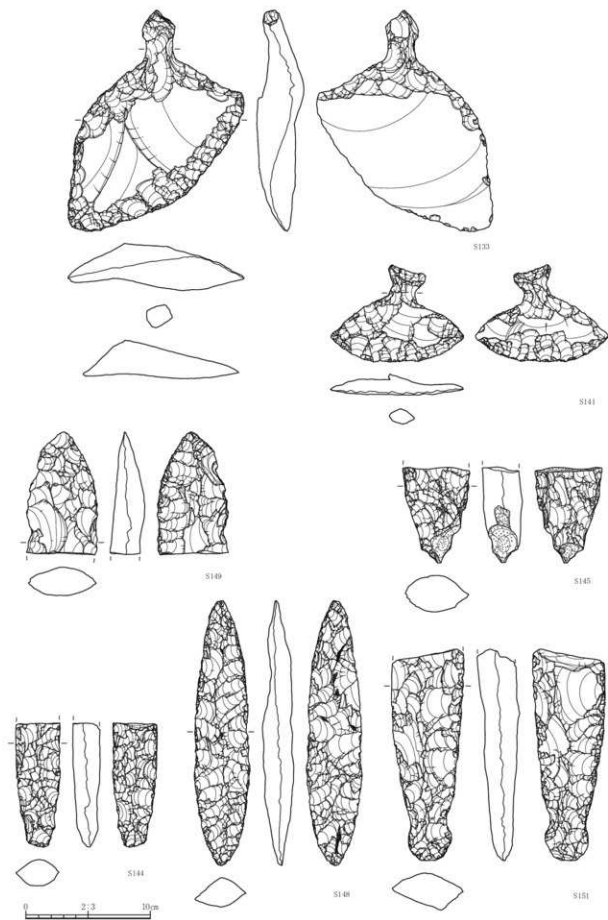
第122図 石器(1)



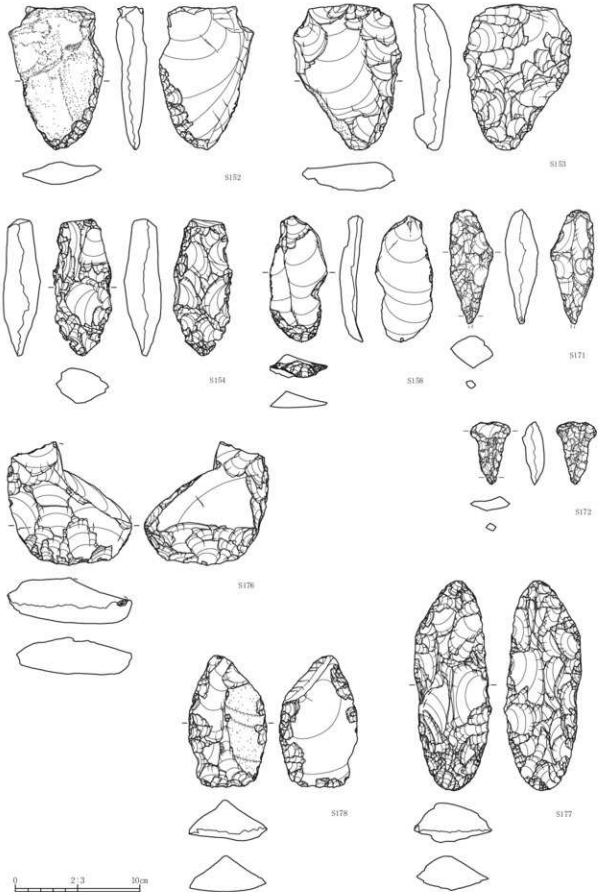
第123図 石器(2)



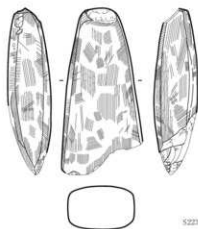
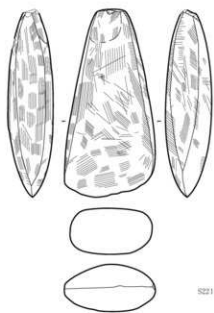
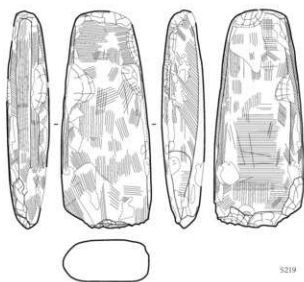
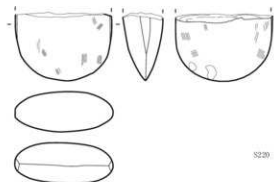
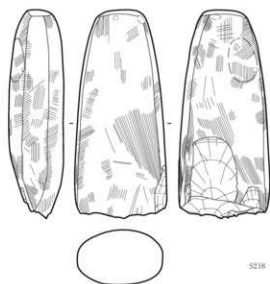
第124図 石器(3)



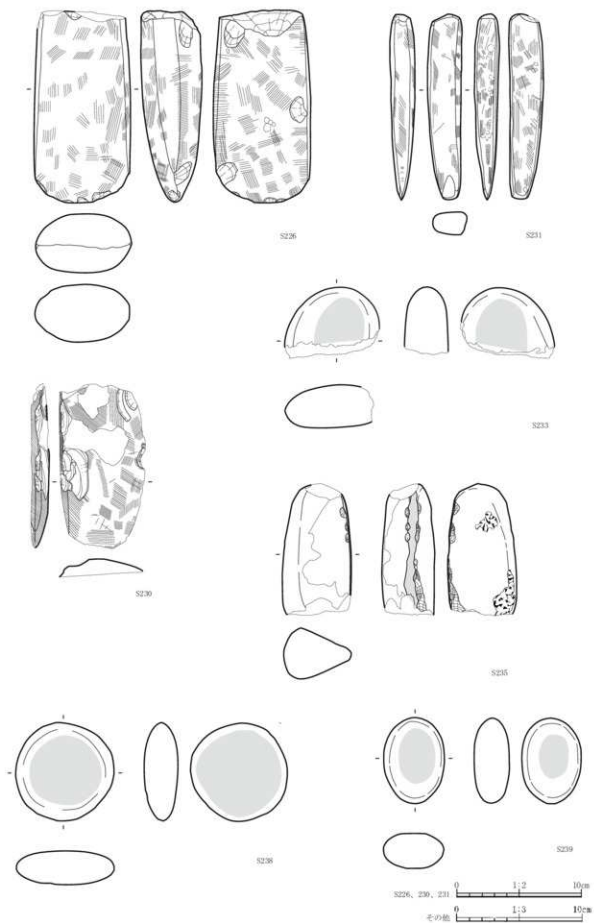
第125図 石器(4)



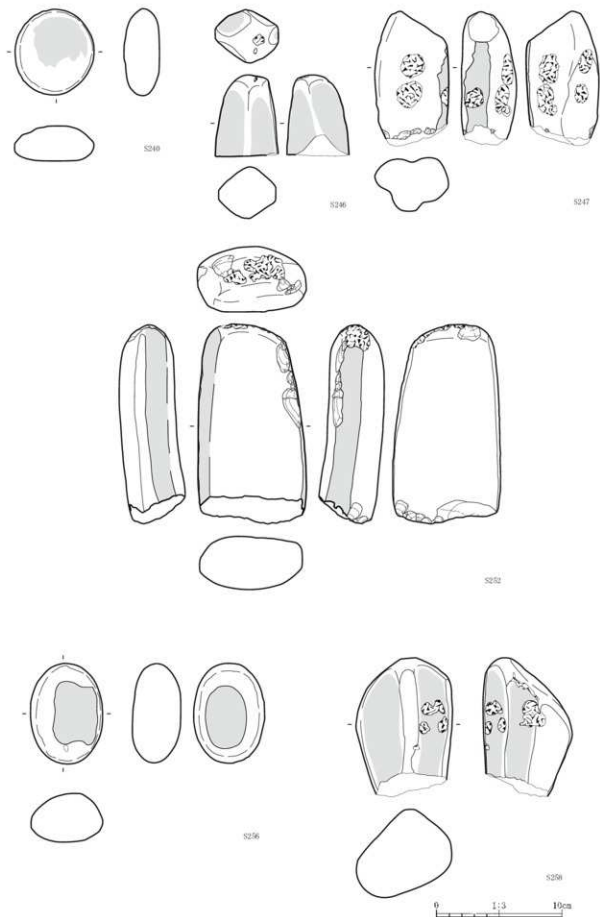
第126図 石器(5)



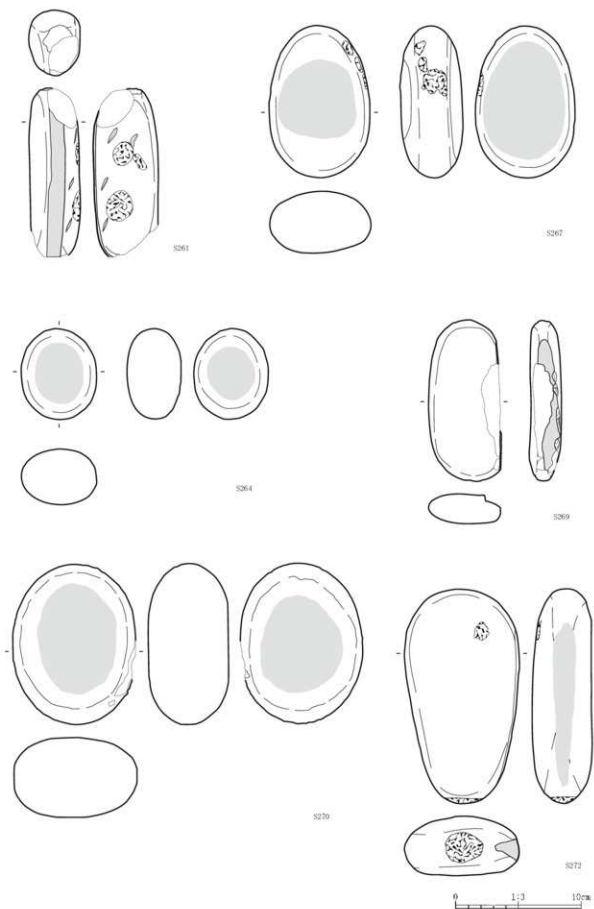
第127図 石器(6)



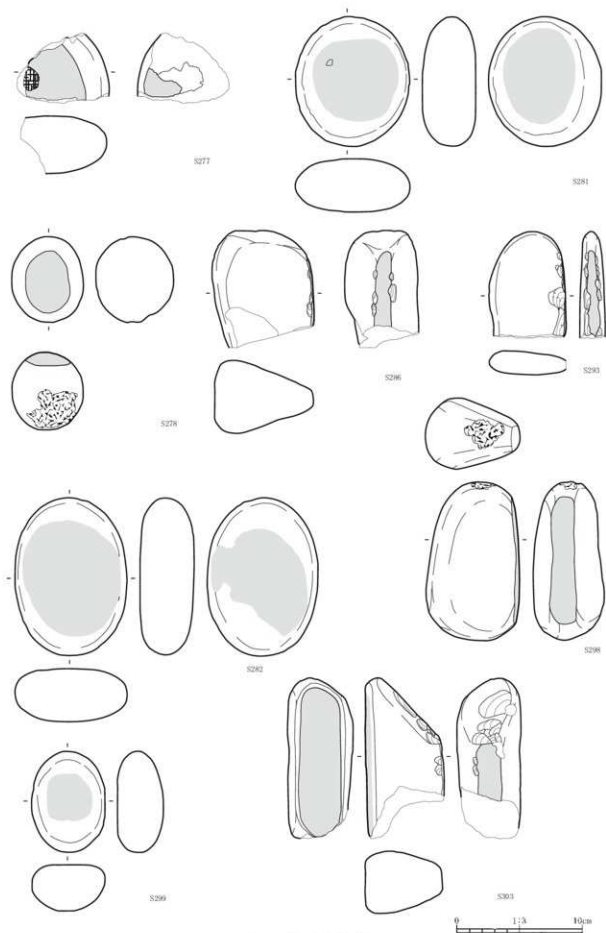
第128図 石器(7)



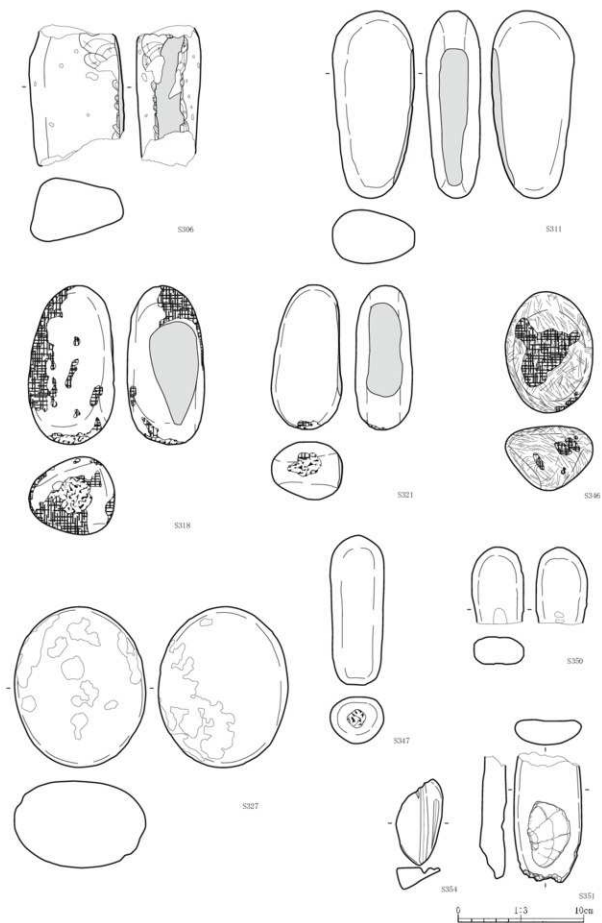
第129図 石器(8)



第130図 石器(9)



第131図 石器 (10)



第132図 石器 (11)

られ、両面からの穿孔による貫通と考えられる。G030は頁岩製である。

その他石製品

3点出土し、全点図化と写真掲載をした。

G029は華着な作りの輪と考えられるが、半部欠損しており全容が不明である。また、これに関しては鑑定の結果、石質が不明とのことで、石ではない可能性も考えられる。G029は、欠損部分が多いが頁岩の垂飾りと思われる。1個の孔は、両面から石錐のようなもので穿孔したと思われる痕跡が認められる。G031は、近隣での採取が不可能な軽石製の石製品である。中央上部に穿孔が認めら浮子と考えられる。軽石のため非常に軽く脆い。

(5) 鉄製品(第133図、写真図版101)

G032~G034、G038は鉄鍔で、G032は、茎部が欠けているがほぼ完形のものである。鍔身部が正三角形に近い形状である。G033は、茎部が欠けているがほぼ完形のものである。鍔身部が正三角形に近い形状であるが、G032に比して小さい。G034は頸部と茎部からなる柄部のみである。G035は刀子の柄部。G037は鉄鐔である。斜めの合わせ目が確認できる。鉄板の両端を合わせる方法ではなく、丸めて閉じ合わせたものと考えられる。舌は無い。(詳細は後述のⅦ総括)

(6) 鉄滓類

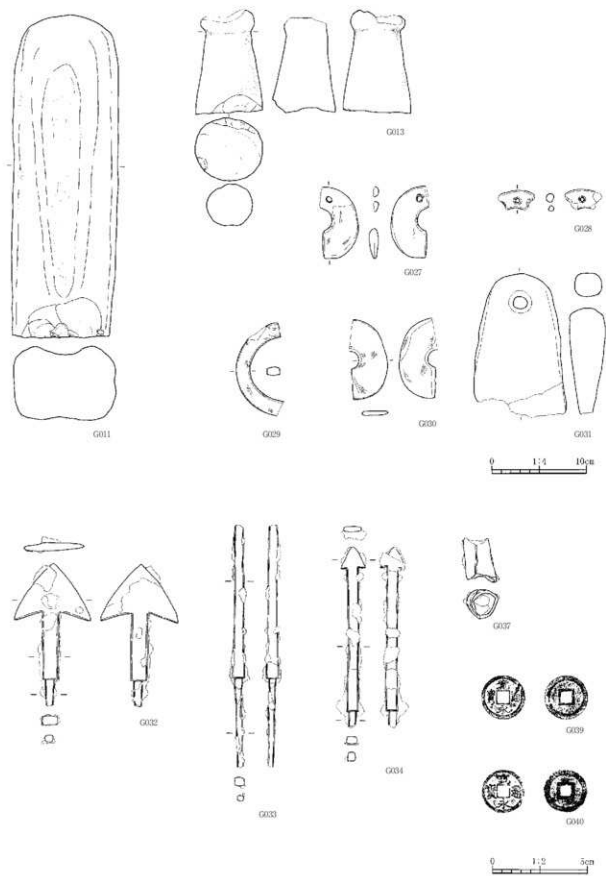
分類方法や分類基準等については、後述の「間木戸V遺跡 3 遺物 (8) 鉄滓類」で記されている手順になった。調査区域内から総重量3598.4gの鉄滓が出土している。本調査では、製鉄に関する遺構が検出されておらず、ほとんどが遺構外からの出土である。遺構内からの出土資料は26号堅穴建物跡や30号堅穴建物跡などであり古代の堅穴からの出土である。総重量の約3分の1を占めたのは、磁着反応の弱い流動滓(A'-2)1184.0gであった。

(7) 銭貨(第133図、写真図版101)

寛永通宝が遺構外から2点出土した。2点のうち、G040は「寶」の字の特徴から古寛永通宝である。2点とも表面は無刻である。

(8) 動物遺存体

26号堅穴建物跡床面および、北東壁際から出土した甕の内部から貝類やウニの棘が出土した。なお、青森県教育委員会斎藤靖史氏に分析・鑑定を賜った。(Ⅵ-4)



第133図 石製品・鉄製品・銭貨

第5表 間戸工遺跡土器器・須恵器観察表

期相	出土地点	種類	形状	残存部位	残存率 (%)	色調	外観 (断面、口部形状等)	陶器目録 (陶器目録、数量)	口徑	底径	容積	備考	図号
P1955	36号穴区建物跡 イノ上 57号 須恵器出所	土師器	土師器	土師器	80	灰青褐色	ハナテ→1号ホ, ココナテ	ナテ	115(2)	9.7	250		117 96
P1956	36号穴区建物跡	土師器	土師器	土師器	30	灰青褐色, にこい青褐色	ハナテ→1号ホ, ココナテ	ナテ	18.4	—	(13.1)		117 96
P1957	36号穴区建物跡 土師器	土師器	土師器	土師器	80	にこい青褐色	ハナテ→1号ホ, ココナテ	本器類	16.4	8.3	(20.2)	須恵器段1段	117 96
P1958	36号穴区建物跡 土師器	土師器	土師器	土師器	10	灰青褐色	ハナテ	ナテ	—	8.2	7.6	小型	117 96
P1959	36号穴区建物跡 土師器	土師器	土師器	土師器	40	にこい青褐色	ハナテ→1号ホ, ココナテ	ナテ	(18.0)	—	(19.1)		117 96
P1961	36号穴区建物跡 土師器	土師器	土師器	土師器	80	灰青褐色	ハナテ→1号ホ, ココナテ	本器類	—	10.3	(28)		117 97
P1962	36号穴区建物跡 土師器	土師器	土師器	土師器	40	にこい青褐色	ハナテ→1号ホ, ココナテ	本器類	117.6	9.1	(23.8)		118 98
P1963	36号穴区建物跡 土師器	土師器	土師器	土師器	30	にこい青褐色	ハナテ→1号ホ, ココナテ	ナテ	14.0	—	4.4	有段1段(須恵器)	118 97
P1964	36号穴区建物跡 土師器	土師器	土師器	土師器	100	にこい青褐色	ハナテ→1号ホ, ココナテ	本器類	18.4	9.8	28.9	須恵器段1段(須恵器)	118 97
P1965	36号穴区建物跡 土師器	土師器	土師器	土師器	90	にこい青褐色	ハナテ→1号ホ, ココナテ	本器類	18.1	8.2	29.0	有段1段(須恵器)	118 98
P1967	36号穴区建物跡 土師器	土師器	土師器	土師器	90	灰青褐色	ハナテ→1号ホ, ココナテ	ナテ	13.4	17.0	10	小型 須恵器(ハナテ)	118 97
P1968	36号穴区建物跡 土師器	土師器	土師器	土師器	70	にこい青褐色	ハナテ→1号ホ, ココナテ	ナテ	13	—	39	有段1段(須恵器)	118 97
P1969	36号穴区建物跡 土師器	土師器	土師器	土師器	60	暗赤灰	ハナテ→1号ホ, ココナテ	ナテ	12.3	—	30	有段1段(須恵器) 平直 須恵器(須恵器)	118 97
P1970	36号穴区建物跡 土師器	土師器	土師器	土師器	60	暗赤灰	ハナテ→1号ホ, ココナテ	ナテ	—	9.2	(20.9)		119 99
P1971	36号穴区建物跡 土師器	土師器	土師器	土師器	90	灰青褐色, にこい青褐色	ハナテ→1号ホ, ココナテ	ナテ	12.6	6.9	10.1	有段1段(須恵器)	119 97
P1972	36号穴区建物跡 土師器	土師器	土師器	土師器	25	にこい青褐色, 灰褐色	ハナテ→1号ホ, ココナテ	ナテ	13.8	—	3.2	有段1段(須恵器)	119 97
P1973	36号穴区建物跡 土師器	土師器	土師器	土師器	60	にこい青褐色	ハナテ→1号ホ, ココナテ	ナテ	(19.3)	9.1	(23.3)	二次須恵器による単位	120 100
P1974	36号穴区建物跡 土師器	土師器	土師器	土師器	60	にこい青褐色	ハナテ→1号ホ, ココナテ	ナテ	16.8	8	19.2		120 97
P1975	36号穴区建物跡 土師器	土師器	土師器	土師器	70	にこい青褐色, にこい青褐色	ハナテ→1号ホ, ココナテ	ナテ	(18.7)	7.6	(27.9)		120 100
P1976	36号穴区建物跡 土師器	土師器	土師器	土師器	60	にこい青褐色, 灰褐色	ハナテ→1号ホ, ココナテ	ナテ	19.8	9.2	(30.3) × (4.2)	須恵器段1段(須恵器) による単位	120 100
P1977	36号穴区建物跡 土師器	土師器	土師器	土師器	60	にこい青褐色, 灰褐色	ハナテ→1号ホ, ココナテ	ナテ	(7.0)	3.9	2.8	有段1段	121 97
P1978	36号穴区建物跡 土師器	土師器	土師器	土師器	10	にこい青褐色, 灰褐色	ハナテ→1号ホ, ココナテ	ナテ	—	(4.2)	—	有段1段(須恵器)	121 99
P1979	36号穴区建物跡 土師器	土師器	土師器	土師器	70	にこい青褐色	ハナテ→1号ホ, ココナテ	ナテ	13.7	—	1.6	有段1段(須恵器)	121 99
P1980	36号穴区建物跡 土師器	土師器	土師器	土師器	10	灰青褐色	ハナテ→1号ホ, ココナテ	ナテ	—	—	(6.2)		121 99
P1981	36号穴区建物跡 土師器	土師器	土師器	土師器	10	灰青褐色	ハナテ→1号ホ, ココナテ	ナテ	—	6.4	3.8	平直	121 96
P1982	36号穴区建物跡 土師器	土師器	土師器	土師器	10	にこい青褐色	ハナテ→1号ホ, ココナテ	ナテ	17.0	—	1.2	有段1段	121 96
P1983	36号穴区建物跡 土師器	土師器	土師器	土師器	80	灰青褐色, にこい青褐色	ハナテ→1号ホ, ココナテ	ナテ	9.3	—	3.2	有段1段(須恵器)	121 99

第6表 間木戸Ⅱ遺跡土製品観察表

調査番号	検体番号	出土地点	層位	分類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	形状 (形状)	備考	図	形式
G001	土01	26号室穴建跡跡北(本相)	棟上~中位	縄文土	21	0.6	0.4	0.1	石質	土師の胎付か?		
G002	土02	2号室穴建跡跡北	棟上下位	縄文土	14	1.4	0.4	0.1	石質	中央部に穿孔	1/2	121
G003	土03	6号室穴建跡跡北	床面	縄文土	26	1.5	0.5	3.8	石質	上部欠損、管状	1/2	121
G004	土04	7号室穴建跡跡南西	床面	縄文土	(52)	3.9	2.1	46.9	石質	下部欠損	1/2	121
G005	土05	II A2江	跡無関係土	縄文土	53	5.2	0.8	28.8	石質	上段口	1/2	121
G006	土06	2号室穴建跡跡北	床面	縄文土	47	4.7	1.9	26.9	石質	底、表面と分子断面、断面より下	1/2	121
G007	土07	26号室穴建跡跡北	床面	縄文土	4.6	4.5	1.8	37.8	石質	底、表面と分子断面、断面より下	1/2	121
G008	土08	26号室穴建跡跡西	床面	縄文土	4.5	4.4	1.9	26.7	石質	底、表面と分子断面、断面より下	1/2	121
G009	土09	CG07土層上/たぐい穴	床面	縄文土	53	5.3	1.1	55.1	石質	底、表面に紐状の欠損?	1/2	121
G010	土10	30号室穴建跡跡南西	床上下位	縄文土					石質	底		101

第7表 間木戸Ⅱ遺跡石器観察表

1 間木戸Ⅱ石器観察表

調査番号	検体番号	出土地点	層位	分類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	形状 (形状)	備考	図	形式
S001	土01	38号室穴建跡跡東	棟上~中位	1b	3.4	1.6	0.6	2.5	石質			
S002	土06	38号室穴建跡跡東	床面	1a	3.7	2.7	0.9	8.2	石質			
S003	土02	1号室穴建跡跡	床面	1a	2.2	1.8	0.5	1.5	球磨片	北上山塊 中年代遺跡	2/3	125
S004	土03	II A2江	床面	1a	2.9	1.7	0.5	1.4	石質			
S005	土04	II A2江	床面	1b	2.4	1.5	0.5	1.8	石質			
S006	土05	3号室穴建跡跡北	床面	1b	3.1	1.8	0.3	2.1	石質			
S007	土06	3号室穴建跡跡北	棟上~中位	1a	3.2	2.9	0.8	2.1	石質			
S008	土07	3号室穴建跡跡西	棟上~中位	1a	2.3	1.6	0.4	1.1	石質	縁り痕?	2/3	125
S009	土08	4号室穴建跡跡西	棟上~中位	1a	2.7	1.5	0.7	2.1	石質	縁り痕?	2/3	125
S010	土09	4号室穴建跡跡西	床面	1a	2.6	1.7	0.5	2	石質			
S011	土10	4号室穴建跡跡西	床面	1a	1.1	0.3	0.2		燧石			
S012	土011	4号室穴建跡跡北付足	床面	1a	2.1	1.6	0.4	1	石質	北上山塊 中年代遺跡	2/3	125
S013	土012	4号室穴建跡跡北	床面	1a	3.1	2.5	1.2	8.5	石質	北上山塊 中年代遺跡	2/3	125
S014	土013	4号室穴建跡跡北	床面	1b	2.6	1.7	0.2	1.2	石質	北上山塊 中年代遺跡	2/3	125
S015	土014	4号室穴建跡跡北	床面	1b	4.5	2.2	0.6	3.4	石質	黒部川面発付者	2/3	123
S016	土015	5号室穴建跡跡南東	1層、石壁%1	1a	(11)	1.6	0.2	0.5	石質	黒部川面発付者	2/3	123
S017	土097	5号室穴建跡跡石壁%1	1層	1a	3.9	1.7	0.5	4.8	石質	黒部川面発付者	2/3	123
S018	土114	5号室穴建跡跡南	棟上~中位	1b	3.3	2.5	0.7	4.9	石質	黒部川面発付者	2/3	123
S019	土016	6号室穴建跡跡	床面	1a	3.4	2	0.7	3.6	石質			
S020	土017	6号室穴建跡跡	床面	1a	2.5	1.6	0.6	1.7	石質			
S021	土018	6号室穴建跡跡	床面	1a	2.5	1.6	0.6	1.7	石質			
S022	土115	6号室穴建跡跡	床面	1b	2.3	1.3	0.3	1.2	石質			
S023	土019	7号室穴建跡跡北付足	床面	1b	2.9	1.3	0.3	0.7	石質			
S024	土020	7号室穴建跡跡北付足	床面	1a	1.8	1.3	0.1	1.7	石質	黒部川面発付者	2/3	125
S025	土021	7号室穴建跡跡北付足	床面	1a	2.2	1.7	0.2	2.4	石質	黒部川面発付者	2/3	125
S026	土022	7号室穴建跡跡北付足	床面	1a	(11)	1.2	0.5	0.4	石質			
S027	土023	7号室穴建跡跡北付足	床面	1a	1.6	1.3	0.2	0.4	石質			
S028	土024	7号室穴建跡跡北付足	床面	1a	2	(11)	0.4	1.3	石質			
S029	土025	8号室穴建跡跡	床面	1a	2.8	1.6	0.5	3.6	石質	北上山塊 中年代遺跡	2/3	125
S030	土026	8号室穴建跡跡	床面	1a	3.2	2.1	0.7	1.5	石質			
S031	土027	8号室穴建跡跡	床面	1a	1.5	1.2	0.1	0.2	石質			
S032	土027	8号室穴建跡跡	床面	1b	3.7	2.2	0.7	6.1	石質			
S033	土028	8号室穴建跡跡北西	床面	1b	(26)	2.3	0.5	4.2	石質	黒部川面発付者	2/3	125

掲載番号	採集番号	出土地点	部位	分類	欠損	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	材質	産地	備考	掲載順	頁	字
S834	♀029	8号墓穴建物跡北西	礎土下位	1b	欠	3.6	2.1	1.1	7.2	瓦質	北上山塊		2/3	125	102
S835	♀030	8号墓穴建物跡北西	礎土下位	1a	欠	3.2	1.9	0.7	3.1	瓦質	北上山塊		2/3	125	102
S836	♀099	8号墓穴建物跡北西	礎土上～中位	1a	先施	1.9	2.1	0.9	2.6	赤土	北上山塊	分析試料№2	2/3	125	102
S837	♀031	8号墓穴建物跡北西	礎土上～中位	4	欠	2.5	1.7	0.6	1.3	瓦質	北上山塊		2/3	125	102
S838	♀032	8号墓穴建物跡北西	礎土上～中位	1a	先施	2.5	1.7	0.8	2.6	瓦質	北上山塊	中年代遺物			
S839	♀033	8号墓穴建物跡北西	礎土上～中位	1a	先施	2.9	1.5	0.4	1.5	瓦質	北上山塊				
S840	♀034	8号墓穴建物跡北西	礎土上～中位	1a	先施	3.1	1.7	0.4	1.9	瓦質	北上山塊				
S841	♀035	8号墓穴建物跡北西	礎土上～中位	1a	先施	3.1	1.7	0.5	1.5	瓦質	北上山塊				
S842	♀037	8号墓穴建物跡北西	礎土上～中位	1a	欠	3.4	2.1	1.1	4.4	瓦質	北上山塊				
S843	♀037	8号墓穴建物跡北西	礎土上～中位	1a	欠	2.6	1.7	0.8	1.6	瓦質	北上山塊				
S844	♀038	10号墓穴建物跡北西	礎土下位	1a	欠	4.1	1.9	0.5	2.6	瓦質	北上山塊		2/3	123	102
S845	♀039	10号墓穴建物跡北西	礎土下位	1a	欠	3.7	1.8	0.5	1.1	瓦質	北上山塊		2/3	123	102
S846	♀040	10号墓穴建物跡北西	礎土下位	1a	欠	3.2	1.0	0.3	1.1	瓦質	北上山塊		2/3	123	102
S847	♀041	10号墓穴建物跡北西	礎土下位	1a	欠	3.3	1.6	0.4	1.5	瓦質	北上山塊	赤土			
S848	♀100	10号墓穴建物跡北西	礎土上～中位	5	1.9	1.1	0.4	1		瓦質	北上山塊				
S849	♀116	10号墓穴建物跡北西	礎土上～中位	5	1.7	2.0	0.4	1		瓦質	北上山塊				
S850	♀042	10号墓穴建物跡北西	礎土上～中位	5	2.7	2	0.3	2.4		瓦質	北上山塊				
S851	♀043	10号墓穴建物跡北西	礎土上～中位	2b	欠	4.4	2.2	1.1	11.4	瓦質	北上山塊	基礎瓦片、溝瓦片			
S852	♀117	11号墓穴建物跡石垣中2段目	床面	2b	欠	4.2	2.6	0.8	7.8	砂岩	北上山塊	基礎瓦片、溝瓦片	2/3	123	102
S853	♀044	11号墓穴建物跡北西	1層	2b	欠	2.4	1.1	0.5	1	瓦質	北上山塊		2/3	123	102
S854	♀045	12号墓穴建物跡北西	1層	2a	欠	1.8	1.4	0.4	0.8	瓦質	北上山塊		2/3	123	102
S855	♀101	12号墓穴建物跡北西	3層	2	先施	2.6	1.3	0.4	1.3	瓦質	北上山塊		2/3	123	102
S856	♀046	14号墓穴建物跡北西	礎土下位	1a	先施	3.0	2.0	0.5	1.8	瓦質	北上山塊		2/3	123	102
S857	♀047	14号墓穴建物跡北西	礎土下位	1a	欠	3.2	2.0	0.7	2.9	瓦質	北上山塊		2/3	123	102
S858	♀048	24号墓穴建物跡南西	礎土下位	1a	欠	3.8	1.9	0.5	2.5	埴輪瓦質	北上山塊		2/3	124	102
S859	♀049	24号墓穴建物跡南西	礎土下位	2	先施	2.7	2.9	0.7	3.3	瓦質	北上山塊		2/3	124	102
S860	♀102	24号墓穴建物跡南西	礎土上～中位	1a	先施	1.6	1.8	0.1	0.9	瓦質	北上山塊		2/3	124	102
S861	♀103	24号墓穴建物跡南西	礎土上～中位	1a	先施	3.2	1.9	0.5	2.2	瓦質	北上山塊		2/3	124	102
S862	♀103	24号墓穴建物跡南西	礎土上～中位	1a	欠	2.2	1.8	0.5	1.2	瓦質	北上山塊		2/3	124	102
S863	♀051	II A30n	溝壁土下～中位	1a	欠	3.6	1.5	0.6	3.7	瓦質	北上山塊		2/3	124	102
S864	♀052	5号土壇	坑壁・石壇壁3	1a	欠	2.5	1.1	0.5	0.9	瓦質	北上山塊		2/3	124	102
S865	♀052	1号土壇	礎土下位	1a	欠	1.9	1.1	0.4	0.9	瓦質	北上山塊		2/3	124	102
S866	♀104	9号墓土遺物	溝壁面	1a	先施・川瀬瓦片	0.4	1.0	0.5	1.9	瓦質	北上山塊		2/3	124	102
S867	♀054	II A25n-p03	礎土上～面位上	1a	先施	0.3	1.8	0.2	2.1	瓦質	北上山塊		2/3	124	102
S868	♀055	T3	瓦色土	1a	先施	2.5	1.6	0.4	2.1	瓦質	北上山塊	五角形瓦片	2/3	124	102
S869	♀056	T3	瓦色土	2b	欠?	3.2	2.3	0.9	6.4	瓦質	北上山塊	本製品? 溝壁残片?			
S870	♀105	T401	溝壁	1b	欠	2.9	2.8	0.3	1	瓦質	北上山塊				
S871	♀059	中世サシモノ	溝壁	1b	欠	4.1	3.1	1.3	14	瓦質	北上山塊		2/3	124	102
S872	♀062	II A2n	溝壁	2b	欠	3	2.2	1	6	赤色瓦質	北上山塊				
S873	♀106	II A12y	溝壁土下～中位	2b	欠	5.2	3	0.6	9.5	瓦質	北上山塊				
S874	♀107	II A13a	溝壁土下～中位	1b	先施	2.6	1.4	0.3	1.3	瓦質	北上山塊				
S875	♀063	II A13a	溝壁土下～中位	1a	欠	3.7	1.8	0.5	2.3	瓦質	北上山塊				
S876	♀064	II A13y	溝壁土下～中位	5	欠	3.3	1.8	0.1	3.1	瓦質	北上山塊				
S877	♀065	II A13y	溝壁土下～中位	1b	欠	3.4	2.3	0.8	9.1	瓦質	北上山塊	本製品			
S878	♀066	II A13y	溝壁土下～中位	1b	溝壁・面位	2.6	1.3	0.3	1.1	瓦質	北上山塊				
S879	♀067	II A14a	溝壁土下～中位	1a	先施	2.6	1.5	0.4	1.2	瓦質	北上山塊				
S880	♀068	II A14a	溝壁土下～中位	5	欠	3.3	1.9	0.6	3.4	瓦質	北上山塊				
S881	♀069	II A14a	溝壁土下～中位	1b	溝壁	2.2	1.7	0.3	1.3	瓦質	北上山塊	本製品			
S882	♀070	II A14a	溝壁土下～中位	1a	欠	2.1	1.8	0.4	1.4	瓦質	北上山塊				

調査番号	調査名	出土地点	層位	分層	欠陥	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	石質	産地	備考	調査層位	図	号	
S883	♀ 071	II A.15y	埋跡下位	1b	交	4.1	1.8	0.9	5.7	頁岩				2/3	124	102
S884	♀ 072	II A.15y	埋跡下位	2b	片断	4.4	2.7	0.9	8.1	頁岩				2/3	124	102
S885	♀ 073	II A.16w	埋跡下位	1a	片断	2.3	1.6	0.4	1.5	頁岩						
S886	♀ 074	II A.16w	埋跡下位	2	片断	2.4	1.6	0.5	1.8	頁岩						
S887	♀ 094	II A.17w	埋跡下位	2	片断	3.5	1.1	0.5	1.6	頁岩						
S888	♀ 075	II A.17x	埋跡下位	1b	片断	2.1	1.5	0.4	1	頁岩						
S889	♀ 076	II A.18x	埋跡下位	1a	片断	2.4	1.3	0.4	1.7	頁岩						
S890	♀ 077	II A.18x	埋跡下位	1a	片断	3.5	1.1	0.5	2.6	頁岩						
S891	♀ 079	II A.19x	埋跡下位	1a	片断	3.5	1.4	0.6	3.9	頁岩						
S892	♀ 079	II A.19x	埋跡下位	1b	交	3.2	1.8	0.5	2.2	頁岩						
S893	♀ 078x	II A.20x	埋跡下位	1a	片断	2.9	1.6	0.4	1.5	頁岩				2/3	124	102
S894	♀ 079y	II A.20x	埋跡下位	1b	交	1.7	1.4	0.3	0.5	頁岩				2/3	124	102
S895	♀ 080	II A.20x	埋跡下位	1a	片断	0.25	1.6	0.6	1.5	頁岩						
S896	♀ 081	II A.20x	埋跡下位	1a	片断	2.5	1.5	0.5	0.9	頁岩						
S897	♀ 082	II A.20x	埋跡下位	1a	片断・片断	2.7	2.3	0.4	2.4	頁岩				2/3	124	102
S898	♀ 109	II A.20x	埋跡下位	2	交	2.3	1.3	0.5	1.6	頁岩				2/3	124	102
S899	♀ 110	II A.20x	埋跡下位	2a	交	2.3	1	0.3	0.9	頁岩						
S900	♀ 083	II A.20x ~ 21a	埋跡下位	1a	片断	3.4	1.6	0.3	1.8	頁岩						
S901	♀ 084	II A.21x	埋跡下位	2b	交	3.5	2.5	0.9	3.4	頁岩						
S902	♀ 085	II A.21x	埋跡下位	1a	片断・片断	0.31	0.21	0.4	1.8	頁岩						
S903	♀ 086	II A.21x	埋跡下位	1a	交	2.1	1.9	0.3	0.9	頁岩						
S904	♀ 087	II A.21x	埋跡下位	1b	交	2.3	2.0	0.4	1.5	頁岩						
S905	♀ 111	II A.21x	埋跡下位	1b	片断	1.9	1.6	0.3	0.8	頁岩						
S906	♀ 057	II A.22x	埋跡下位	2b	交?	2.8	1.6	0.6	2	頁岩						
S907	♀ 058	II A.22x	埋跡下位	1b	交	2.0	1.5	0.3	0.6	頁岩						
S908	♀ 112	II A.22x (調査区西側)	埋跡下位	1a	片断	0.22	1.8	0.3	1.4	頁岩						
S909	♀ 086	II A.22x	埋跡下位	1b	片断	0.41	1.8	0.3	1.5	頁岩						
S910	♀ 089	II A.23x	埋跡下位	2b	片断	0.24	1.7	0.3	2.9	頁岩						
S911	♀ 090	II A.25x ~ 25a (西トレンチ)	埋跡下位	1a	片断	0.26	1.7	0.3	1.9	頁岩						
S912	♀ 090	II A.25x ~ 25a	埋跡下位	1a	片断	2.2	1.5	0.3	0.6	頁岩						
S913	♀ 091	木組上	埋跡下位	2	片断	0.25	1.7	0.6	2.7	頁岩						
S914	♀ 090	調査区一帯	表土	1a	交	3.2	2.4	0.5	2	頁岩						
S915	♀ 091	調査区一帯	埋跡下位	1b	片断・片断	0.10	1.8	0.3	2	頁岩						
S916	♀ 092	調査区一帯	埋跡下位	1b	片断・片断	0.22	1.6	0.3	1	頁岩						
S917	♀ 113	調査区一帯	埋跡下位	1a	交	3.1	2	0.4	1.9	頁岩						
S918	♀ 118	表土	埋跡下位	—	片断	0.21	1.8	0.4	1.5	頁岩						
S918	♀ 118	表土	埋跡下位	—	片断	0.21	1.8	0.4	1.5	頁岩						

2 岡木戸川石室観察表

調査番号	調査名	出土地点	層位	分層	形状	用途	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	石質	産地	備考	調査層位	図	号
SS19	♀ 001	3号房外壁跡西側	埋跡下位	交	片断	扉部・つまみ部	2.5	4.4	0.9	5.4	頁岩			2/3	125	103
S200	♀ 002	8号房外壁跡西側	埋跡下位	交	片断	扉部・つまみ部	4.8	4.7	0.9	13.7	頁岩			2/3	125	103
S201	♀ 003	8号房外壁跡西側	埋跡下位	交	片断	扉部・つまみ部	3.1	4.5	0.9	8.4	頁岩			2/3	124	103
S202	♀ 004	10号房外壁跡西側	埋跡下位	交	片断	扉部・つまみ部	4.2	1.6	0.6	6	頁岩			2/3	124	103
S203	♀ 005	14号房外壁跡跡 part1	埋跡下位	交	片断	扉部・つまみ部	4.1	6.6	1.0	16.6	頁岩			2/3	124	103
S204	♀ 006	T 2	埋跡下位	交	片断	扉部・つまみ部	(5.8)	2	0.6	4.6	頁岩					
S205	♀ 007	II A.2x	埋跡下位	交	片断	扉部・つまみ部	6.8	1.9	1.1	10.7	頁岩			2/3	124	103
S206	♀ 008	II A.25x ~ 25a (西トレンチ)	埋跡下位	交	片断	扉部・つまみ部	6.4	2.0	1.1	10.4	頁岩			2/3	124	103
S207	♀ 009	II A.24x	埋跡下位	交	片断	扉部・つまみ部	3.1	4.4	0.6	5.4	頁岩			2/3	124	103

調査番号	発見号	出土地点	層位	欠損	分類	調査	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	材質	産地	備考	図	写
3	S128	Ⅱ A16a	表土→黒色土層面	欠	瓦	瓦片	5.6	1.8	0.5	6.1	瓦質			2/3	124
	S129	Ⅱ A13b	黒層下位→B層	欠	瓦	瓦片	3.7	2.4	0.7	6	瓦質			2/3	100
	S130	Ⅱ A13b	黒層上位	欠	瓦	瓦片	2.8	2.2	0.4	2.2	瓦質		欠番		
	S131														
	S132	Ⅱ A13b	黒層上位	欠	瓦	瓦片	2.5	(4.1)	0.6	3.7	瓦質				
	S133	Ⅱ A13b	黒層	欠	瓦	瓦片	8.7	7.0	1.6	60.6	瓦質				
	S134	Ⅱ A13b	黒層	欠	瓦	瓦片	3.5	0.9	0.2		瓦質				
	S135	Ⅱ A13b→2b	黒層	欠	瓦	瓦片	(3.3)	2.5	0.5	9.3	瓦質				
	S136	Ⅱ A13b	黒層	欠	瓦	瓦片	(4.0)	2.5	0.5	9.3	瓦質				
	S137	Ⅱ A14	黒層上位	欠	瓦	瓦片	(2.8)	2.0	0.6	4.9	瓦質				
	S138	Ⅱ A13	黒層上位	欠	瓦	瓦片	6.7	2.3	0.7	8.2	瓦質				
	S139	Ⅱ A13	黒層上位	欠	瓦	瓦片	6.7	3.2	0.7	11.7	瓦質				
S140	Ⅱ A13	黒層上位	欠	瓦	瓦片	3.6	3.4	1.1	16.5	瓦質					
S141	Ⅱ A13	黒層上位	欠	瓦	瓦片	5.8	5.3	0.8	8.6	瓦質					
S142	Ⅱ A14	Ⅱ A13→中位	欠	瓦	瓦片	5	3.2	0.4	6.6	瓦質	北上山地 中年代遺跡				
S143	Ⅱ A13a	黒層上位	未成品	-	-	4.3	3.8	0.3	5.3	赤色瓦質	北上山地 中年代遺跡				

3 簡木戸口全測線観察表

調査番号	発見号	出土地点	層位	欠損	分類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	材質	産地	備考	図	写
3	S144	Ⅱ A13a	黒層上位	欠	瓦	4.9	1.8	1.1	10.8	瓦質				
	S145	Ⅱ A13a	黒層	欠	瓦	3.9	2.7	1.6	15.9	瓦質				
	S146	Ⅱ A13a	黒層	欠	瓦	4.2	2.9	1.3	13.4	瓦質				
	S147	Ⅱ A21a	黒層	欠	瓦	3.3	2.8	0.9	7.9	瓦質				
	S148	Ⅱ A13	黒層	欠	瓦	10.5	2.2	1.2	29.7	瓦質				
	S149	Ⅱ A13	黒層	欠	瓦	4.9	2.8	1.4	16.5	瓦質				
	S150	Ⅱ A13	黒層	欠	瓦	8.0	3.1	1.4	41.4	瓦質	北上山地 中年代遺跡			
	S151	Ⅱ A23a	黒層	欠	瓦	8.4	2.9	1.7	31.7	瓦質	北上山地 中年代遺跡			

4 簡木戸口スケレハール観察表

調査番号	発見号	出土地点	層位	欠損	分類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	材質	産地	備考	図	写
4	S152	Ⅱ A13	黒層上位	欠	瓦	1	5.7	3.8	1.2	22.6	瓦質			
	S153	Ⅱ A13	黒層	欠	瓦	4.9	1.8	1.1	10.8	瓦質				
	S154	Ⅱ A13	黒層	欠	瓦	3.9	2.7	1.6	15.9	瓦質				
	S155	Ⅱ A13	黒層	欠	瓦	4.2	2.9	1.3	13.4	瓦質				
	S156	Ⅱ A13	黒層	欠	瓦	3.3	2.8	0.9	7.9	瓦質				
	S157	Ⅱ A13	黒層	欠	瓦	10.5	2.2	1.2	29.7	瓦質				
	S158	Ⅱ A13	黒層	欠	瓦	4.9	2.8	1.4	16.5	瓦質				
	S159	Ⅱ A13	黒層	欠	瓦	8.0	3.1	1.4	41.4	瓦質	北上山地 中年代遺跡			
	S160	Ⅱ A13	黒層	欠	瓦	8.4	2.9	1.7	31.7	瓦質	北上山地 中年代遺跡			
	S161	Ⅱ A21	黒層	欠	瓦	3.6	2.2	1.4	6.1	瓦質				
	S162	Ⅱ A13	黒層	欠	瓦	4.1	1.9	0.6	5.8	瓦質				
	S163	Ⅱ A13	黒層	欠	瓦	3.9	3.3	0.9	12.6	瓦質				
	S164	Ⅱ A13	黒層	欠	瓦	5.5	3.2	1.5	26.7	瓦質				
	S165	Ⅱ A14	黒層	欠	瓦	5.1	4.5	0.8	16.6	瓦質	戸倉			
	S166	Ⅱ A14	黒層	欠	瓦	3.2	3.3	1.1	11.7	瓦質				
	S167	Ⅱ A14	黒層	欠	瓦	4.4	3.3	0.7	8.9	瓦質				
	S168	Ⅱ A14	黒層	欠	瓦	4.5	3.8	0.9	20.1	瓦質				
	S169	Ⅱ A14	黒層	欠	瓦	3.9	5.9	0.7	10.2	瓦質				
	S170	Ⅱ A21	黒層	欠	瓦	3.1	2.1	0.7	3.2	瓦質				
	S171	Ⅱ A21	黒層	欠	瓦	3.5	2.6	0.6	6.4	瓦質				

5 岡木戸Ⅱ石室観察表

観察番号	仮番号	出土地点	部位	長さ(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石室	備考	観察部位	図	号
SI71	B-001	10号室穴建物跡	扉上～中位	4.5	1.7	1.3	7.5	頁岩		2.3	136	104
SI72	B-002	10号室穴建物跡	扉上～中位	2.5	1.6	0.9	2.1	頁岩	つよみ有	2.3	136	104
SI73	B-003	8号室穴建物跡南東	扉上～中位	2.4	1.3	0.5	1.2	頁岩	確認済	2.3	136	104
SI74	B-004	11号室穴建物跡	扉上	3.1	1.3	0.3	1.9	頁岩	確認済	2.3	136	104
SI75	B-005	11号室穴建物跡	扉上	3.8	1.4	0.4	2.3	頁岩		2.3	136	104

6 岡木戸Ⅱ石室観察表

観察番号	仮番号	出土地点	部位	長さ(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石室	備考	観察部位	図	号	
SI76	A-001	2号室穴建物跡西	扉上上位	4.9	4.9	1.8	32.9	頁岩				104	
SI77	A-002	3号室穴建物跡西	扉上中位	8.3	3.1	1.6	32.7	頁岩	北上山端 中央代遺跡の頁岩が中央代石室壁に使用		2.3	136	104
SI78	A-003	6号室穴建物跡	扉上～中位	5.2	3.1	1.6	21.1	頁岩			2.3	136	104
SI79	A-004	11号室穴建物跡	扉上～中位	6.2	3.6	1	26.6	頁岩			確認済	104	
SI80	A-005	8号室穴建物跡東	扉上上位	5.3	2	1.3	16	頁岩	北上山端 中央代遺跡			104	
SI81	A-006	8号室穴建物跡東	扉上～中位	6.4	4.5	1.4	41.6	頁岩	北上山端 中央代遺跡			104	
SI82	A-007	11号室穴建物跡東	扉上～中位	4.8	2.5	0.9	13.8	頁岩	北上山端 中央代遺跡			104	

7 岡木戸Ⅱ土器形石器観察表

観察番号	仮番号	出土地点	部位	長さ(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石室	備考	観察部位	図	号
SI83	C-0-1	10号室穴建物跡	扉上上位	2.4	2.6	0.8	7.1	頁岩	黒色付着物	2.3		104

8 岡木戸Ⅱ不定形石器観察表

観察番号	仮番号	出土地点	部位	長さ(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石室	備考	観察部位	図	号
SI84	A-001	3号室穴建物跡東	扉上中位	4.3	2	0.4	4.4	頁岩				104
SI85	A-002	4号室穴建物跡東	扉上	2.6	1.5	0.4	1.8	頁岩				104
SI86	A-003	8号室穴建物跡東	扉上～中位	2.7	3	0.9	4.7	頁岩				104
SI87	A-004	10号室穴建物跡(調査区南側)	扉上～中位	2.4	1.8	0.5	2.9	頁岩				104
SI88	A-005	12号室穴建物跡東	扉上上位	2.6	2.9	0.3	3.2	頁岩	北上山端中央代遺跡			104
SI89	A-006	24号室穴建物跡東	扉上上位	2.5	1.9	0.3	2.3	頁岩				104
SI90	A-007	11号室穴建物跡東	扉上～中位	4.9	3.5	0.8	11.7	頁岩				104
SI91	A-008	8号室穴建物跡東	扉上	4.5	2.4	0.7	8.3	頁岩				104
SI92	A-009	3号土坑	扉上上位	3.4	2.5	0.7	6.9	頁岩				104
SI93	A-010	5号土坑	1層	3.1	2.8	0.4	2.3	頁岩				104
SI94	A-011	4号室穴建物跡西の高麗	表裏面黄土?	3.3	1.5	0.7	3.3	頁岩				104
SI95	A-012	中央土坑ナシ	表裏面黄土?	4.8	2.1	0.6	4.4	頁岩				104
SI96	A-013	T1	黄土層	2.9	2.9	0.7	8.6	頁岩				104
SI97	A-014	T7 転倒	黄土層	5.3	4.8	1.4	25.7	頁岩				104
SI98	A-015	A3H	1層	2.7	1.7	0.7	3.2	頁岩				104
SI99	A-016	A30a	黄土層	3.4	2.8	1.3	11.8	頁岩				104
SI00	A-017	A16a	扉上上位	5.6	2.1	0.8	11.3	頁岩				104
SI01	A-018	A16b	扉上上位	3.6	2.6	0.9	7.8	頁岩				104
SI02	A-019	A16c	扉上上位	2.1	1.5	0.5	3.3	頁岩				104
SI03	A-020	A16d	扉上上位	2.1	1.5	0.5	3.3	頁岩				104
SI04	A-021	A16e	扉上上位	4	2.6	0.9	8.2	頁岩				104
SI05	A-022	A16f	扉上上位	1.8	1.8	0.8	1.6	頁岩				104
SI06	A-023	A30a	扉上上位	2.3	2.5	0.8	2.7	頁岩				104
SI07	A-024	A20a	扉上上位	3.9	2.4	0.5	5	頁岩				104

9 間木戸口石格線表

担取番号	担取番号	取方	部位	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	欠隅	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	石質	産地	担取層	尺	寸	容
S206	RA03	西	黒土上段	6.6	7	1.5		10.4	5.1	2.9	75.8	頁岩	北上山塊 中年代頁岩	2.3		104	
S209	RA06	西	埋土中層	3.4	4.6	1.6		11	4.8	2.9	175.9	硬砂岩質頁岩	北上山塊 中年代頁岩	1.2	1.27	165	
S210	RA07	西	埋土下段	3.9	3.9	2.8		11.5	4.3	2.2	219.5	硬砂岩	北上山塊 早部砂山一宮守	1.2	1.27	166	
S211	RA04	西	黒土上段	6.4	5.5	2.1		3.6	3.1	2.1	54.4	硬砂岩	北上山塊 早部砂山一宮守	1.2	1.27	166	
S212	RA05	西	埋土上段	6.2	6.3	2.9		9.9	4.8	2.4	179.8	硬砂岩	北上山塊 早部砂山一宮守	1.2	1.27	166	
S213	RA08	西	埋土中層	6.4	5.5	2.5		10.2	5.1	3.1	289.9	硬砂岩	北上山塊 中年代頁岩	1.2	1.28	165	
S214	RA07	西	埋土下段	3.9	2.7	3.1		7.3	2.1	2.1	85.5	頁岩	北上山塊 中年代頁岩	1.2	1.27	165	
S215	RA08	西	埋土上段	4.2	5.6	2.7		5.2	3.6	1.1	21.7	頁岩	北上山塊 中年代頁岩	1.2	1.27	165	
S216	RA09	西	埋土下段	3.2	8.1	4.8		8.1	2.2	2.9	198.2	頁岩	北上山塊 中年代頁岩	1.2	1.28	165	
S217	RA09	西	埋土上段	3.2	8.1	4.8		8.1	2.2	2.9	198.2	頁岩	北上山塊 中年代頁岩	1.2	1.28	165	

10 間木戸口石格線表

担取番号	担取番号	取方	部位	空面	積	方眼	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	石質	産地	担取層	尺	寸	容
S217	AO01	西	埋土上段	1	なし	欠け										
S218	AO02	西	埋土中層	積	あり	欠け										
S219	AO03	西	埋土下段	積	あり	欠け										
S220	AO04	西	埋土上段	積	あり	なし										
S221	AO05	西	埋土中層	積	あり	なし										
S222	AO06	西	埋土下段	積	あり	なし										
S223	AO07	西	埋土上段	積	あり	なし										
S224	AO08	西	埋土中層	積	あり	なし										
S225	AO09	西	埋土下段	積	あり	なし										
S226	AO10	西	埋土上段	積	あり	なし										
S227	AO11	西	埋土中層	積	あり	なし										
S228	AO12	西	埋土下段	積	あり	なし										
S229	AO13	西	埋土上段	積	あり	なし										
S230	AO14	西	埋土中層	積	あり	なし										
S231	AO15	西	埋土下段	積	あり	なし										

11 間木戸口土器器線表

担取番号	担取番号	取方	部位	形状	形	高 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	石質	産地	担取層	尺	寸	容
S232	B001	西	埋土下段	1	円	16	8.1	7.6	3.6	320.8	硬砂岩質頁岩	北上山塊 中年代頁岩			
S233	B002	西	埋土中層	1	円	16	5.7	7.6	3.1	224.5	硬砂岩質頁岩	北上山塊 中年代頁岩			
S234	B003	西	埋土上段	1	円	16	9.1	9.2	5.7	272.5	硬砂岩	北上山塊 中年代頁岩			
S235	B004	西	埋土中層	3	扁平丸	26	10.6	5.6	4.3	339.1	砂岩	北上山塊 中年代頁岩			
S236	B005	西	埋土下段	2	扁平丸	26	17.6	3.7	6.3	363.7	花崗岩	北上山塊 中年代頁岩			
S237	B006	西	埋土上段	2	扁平丸	19	6	6	4.2	366.6	花崗岩	北上山塊 中年代頁岩			
S238	B007	西	埋土中層	2	扁平丸	19	6	6	4.2	366.6	花崗岩	北上山塊 中年代頁岩			
S239	B008	西	埋土下段	1	円	16	6.9	4.8	2.8	135.2	花崗岩	北上山塊 中年代頁岩			
S240	B009	西	埋土上段	1	円	16	6.9	4.8	2.8	135.2	花崗岩	北上山塊 中年代頁岩			
S241	B010	西	埋土中層	1	円	16	15.2	13.5	8.9	291.3	硬砂岩	北上山塊 中年代頁岩			
S242	B011	西	埋土下段	2	円	16	10.5	7.8	6.5	838.1	硬砂岩	北上山塊 中年代頁岩			
S243	B012	西	埋土上段	1	扁平丸	16	15.1	8.2	6.1	1314.1	硬砂岩	北上山塊 中年代頁岩			
S244	B013	西	埋土中層	4	扁平丸	26	9.4	4.3	6.8	370.2	花崗岩質頁岩	北上山塊 中年代頁岩			
S245	B014	西	埋土下段	3	扁平丸	26	15.5	2.2	4.4	87	砂岩	北上山塊 中年代頁岩			

図録番号	図号	品名	形状	器	分期	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	石質	産地	備考	図録版尺	尺	写真	
S246	1015	3分型穴建物跡-北	3層	多周	3rd	65	5.1	4.1	190.3	細粒花崗閃緑岩	北上山塊 中年代片岩	磨り多周	1.7	129	106	
S247	1016	3分型穴建物跡-北	3層	多周	3rd	11.8	6	4.2	206.3	細粒花崗閃緑岩	北上山塊 中年代片岩	磨り多周	1.7	129	106	
S248	1017	3分型穴建物跡-北	3層	不明	—	—	—	—	—	細粒花崗閃緑岩	北上山塊 中年代片岩	磨り多周 はば丸磨	1.7	129	106	
S249	1018	3分型穴建物跡-東	理上中下	表	1a	6.4	3.8	4.4	238.6	花崗岩	北上山塊 中年代片岩					
S250	1019	3分型穴建物跡-東	理上中下	裏	2c	18.7	6.9	6.3	506.8	花崗岩	北上山塊 中年代片岩					
S251	1020	4分型穴建物跡-北	3層平次	表	2cd	14.1	6.5	7.7	84.2	花崗閃緑岩	北上山塊 中年代片岩					
S252	1021	4分型穴建物跡-北	3層平次	裏側	2cd	16	8.7	5.3	197.6	砂岩	北上山塊 中年代片岩	磨面(磨り跡)一部平磨 磨加工されている	1.7	129	106	
S253	1022	4分型穴建物跡-南	理上上~中下	2.内次	表	1ae	5.7	3	206.6	花崗岩	北上山塊 中年代片岩					
S254	1023	4分型穴建物跡-南	理上上~中下	表	1ae	9.9	10.1	4	476.5	砂岩	北上山塊 中年代片岩					
S255	1024	4分型穴建物跡-南	理上上~中下	裏	2ce	0.9	5.2	6.8	677.8	砂岩	北上山塊 中年代片岩					
S256	1025	5分型穴建物跡-石室0.1	石室0.1	3層平次	裏	1b	8	5.7	292.6	砂岩	北上山塊 中年代片岩					
S257	1026	5分型穴建物跡-石室0.1	石室0.1	1層上面	3	11.3	8.3	4.3	691.4	砂岩	北上山塊 中年代片岩					
S258	1027	6分型穴建物跡-北	理上	表	2bc	11.1	7.7	7	684.9	花崗岩	北上山塊 中年代片岩					
S259	1028	6分型穴建物跡-北	理上中下	裏	3c	0.4	6.5	6.3	807.7	砂岩	北上山塊 中年代片岩					
S260	1029	6分型穴建物跡-東	理上中下	3層平次	裏	3c	0.4	6.5	807.7	砂岩	北上山塊 中年代片岩					
S261	1030	6分型穴建物跡-西	理上上	3層平次	裏	3c	1.3	4.1	4.2	611.3	砂岩	北上山塊 中年代片岩	スズ付	1.7	130	106
S262	1031	7分型穴建物跡-西	理上上	3層平次	裏	3c	1.3	4.1	4.2	611.3	砂岩	北上山塊 中年代片岩				
S263	1032	7分型穴建物跡-西	理上上	2.内	1be	7.7	6.3	3.3	322.6	花崗岩	北上山塊 中年代片岩					
S264	1033	7分型穴建物跡-西	理上上	2.内	1be	7.3	6	4.4	286.1	花崗岩	北上山塊 中年代片岩					
S265	1034	7分型穴建物跡-北西	理上上~中下	3層平次	裏	3cd	0.8	4.9	3.0	300	花崗岩	北上山塊 中年代片岩				
S266	1035	7分型穴建物跡-南西	理上上~中下	3層平次	裏	3cd	0.7	3.8	5.3	171.8	砂岩	北上山塊 中年代片岩				
S267	1036	8分型穴建物跡-北西	理上上	2.内	1bd	12.2	8	3	724.1	花崗岩	北上山塊 中年代片岩					
S268	1037	8分型穴建物跡-北西	理上上	2.内	1bd	11.4	7.4	2.1	611.3	砂岩	北上山塊 中年代片岩	磨面(磨り跡)	1.7	130	106	
S269	1038	8分型穴建物跡-北西	理上上	3層平次	裏	3c	1.2	4.4	2.1	611.3	砂岩	北上山塊 中年代片岩				
S270	1039	8分型穴建物跡-北西	理上上	3層平次	裏	3c	1.2	5.8	2.4	313.7	砂岩	北上山塊 中年代片岩	磨面(磨り跡)	1.7	130	106
S271	1040	8分型穴建物跡-南東	理上上	不明	1bd	15.9	9.8	6.4	1320.7	砂岩	北上山塊 中年代片岩	磨面(磨り跡)加工溝磨 はば丸磨	1.7	130	106	
S272	1041	10分型穴建物跡-北	理上上	不明	3cd	12.2	9.3	4.8	1590.3	砂岩	北上山塊 中年代片岩					
S273	1042	10分型穴建物跡(溝名任意西側)	理上上	3層平次	裏	3c	1.7	6.7	7.6	1262.7	花崗閃緑岩	北上山塊 中年代片岩				
S274	1043	10分型穴建物跡(溝名任意西側)	理上上	3層平次	裏	3c	1.7	6.7	7.6	1262.7	花崗閃緑岩	北上山塊 中年代片岩				
S275	1044	10分型穴建物跡(溝名任意西側)	理上上~中下	2.内	1bc	10.3	7.4	3.9	491.4	砂岩	北上山塊 中年代片岩					
S276	1045	10分型穴建物跡-北	理上上~中下	2.内	1bc	4.0	9.2	4.8	236.4	砂岩	北上山塊 中年代片岩					
S277	1046	11分型穴建物跡-石室0.1周辺	理上上	2.内	1bd	8.3	5.4	4.6	294.4	花崗岩	北上山塊 中年代片岩					
S278	1047	12分型穴建物跡-東	理上上	2.内	1bd	6.9	5.7	6.2	384.5	砂岩	北上山塊 中年代片岩	スズ付	1.7	131	106	
S279	1048	14分型穴建物跡-北	2層	1.内	1b	12.1	7.7	4.1	651.1	砂岩	北上山塊 中年代片岩					
S280	1049	18分型穴建物跡(佐部0.1)	理上上	1.内	1b	8.9	7.9	4.9	554.2	砂岩	北上山塊 中年代片岩					
S281	1050	18分型穴建物跡(佐部0.1)	理上上	1.内	1b	10.4	9.1	4.3	670.4	砂岩	北上山塊 中年代片岩					
S282	1051	18分型穴建物跡(佐部0.3)	理上上	1.内	1bd	9.6	7.6	4.4	803.8	花崗岩	北上山塊 中年代片岩					
S283	1052	19分型穴建物跡-東	理上上~中下	2.内	1bd	9.6	7.6	2.7	313.7	花崗岩	北上山塊 中年代片岩					
S284	1053	20分型穴建物跡-東	理上上~中下	1.内	1b	7.4	7.3	5.7	464.2	砂岩	北上山塊 中年代片岩					
S285	1054	20分型穴建物跡-東	理上上~中下	1.内	1b	7.9	6.4	2.6	277	砂岩	北上山塊 中年代片岩					
S286	1055	20分型穴建物跡-東	理上上~中下	3層平次	裏	3a	9.4	8.2	6	1021.5	細粒花崗閃緑岩	北上山塊 中年代片岩	磨面(磨り跡)加工溝磨	1.7	131	106
S287	1056	25分型穴建物跡	理上上	3層平次	裏	2ce	0.8	1.3	6.8	288.2	砂岩	北上山塊 中年代片岩	磨面			
S288	1057	25分型穴建物跡	理上上	3層平次	裏	2ce	0.8	1.3	6.8	288.2	砂岩	北上山塊 中年代片岩	磨面			
S289	1058	25分型穴建物跡	理上上	3層平次	裏	2ce	0.8	1.3	6.8	288.2	砂岩	北上山塊 中年代片岩	磨面			
S290	1059	目 A21	目 A21	3層平次	裏	1ce	11.8	7.6	4.3	685.9	砂岩	北上山塊 中年代片岩	磨面(磨り跡)加工溝磨			
S291	1060	目 A21	目 A21	3層平次	裏	1ce	9.1	3.1	7	410.3	砂岩	北上山塊 中年代片岩				
S292	1061	目 A26	目 A26	3層平次	裏	1b	11.7	7.9	5.3	832.9	砂岩	北上山塊 中年代片岩	磨面(磨り跡)加工溝磨			
S293	1062	目 A26b	目 A26b	3層平次	裏	3c	8.6	6.2	2.1	367.2	細粒花崗閃緑岩	北上山塊 中年代片岩	磨面(磨り跡)加工溝磨	1.7	131	106
S294	1063	目 A26b	目 A26b	3層平次	裏	3c	7.3	3.9	6.6	220.9	砂岩	北上山塊 中年代片岩	磨面(磨り跡)加工溝磨			

埋藏番号	図番	出土地点	部位	形状	番号	分類	長 (cm)	幅 (cm)	重量 (g)	石目	産地	備考	図録紙の区
S295	B064	II A14x	器蓋下空	3 扁平片	表	2c	0.63	2.4	1.861				
S296	B065	II A15ow	器蓋下空	3 扁平片	裏	2c	(10.1)	2.2	8.2	314.3		前面 (磨り部) 加工調整 下部の高部加工されていない	
S297	B066	II A21	器蓋下空	3 扁平片	裏	2c	(11.2)	3.8	7.5	467.1			
S298	B067	II A21	器蓋下空	3 扁平片	裏	2c	12.7	5.5	57	83.3	陶磁器		
S299	B068	II A14x	器蓋下空	1 片	表	1a	8.1	5.8	37	262.8	陶磁器	北上山 中年代行書記	1/3
S300	B069	II A15ow	器蓋下空	2 片	裏	1b	8.7	6.9	5.8	547.1	陶磁器	北上山 中年代行書記	1/3
S301	B070	II A20	器蓋下空	1 片	裏	1b	12	4.7	3.1	173.6	陶磁器	北上山 中年代行書記	
S302	B071	II A20	器蓋下空	3 扁平片	裏	2c	10.9	4.6	5.8	57.8	陶磁器	北上山 中年代行書記	
S303	B072	II A20	器蓋下空	3 扁平片	裏	2c	15.9	6.5	143.3	陶磁器	北上山 中年代行書記		
S304	B073	II A20	器蓋下空	1 片	裏	1b	14.4	5.6	4.2	236.3	陶磁器	北上山 中年代行書記	1/3
S305	B074	II A20	器蓋下空	3 扁平片	裏	1b	10.3	10	5.2	885.2	陶磁器	北上山 中年代行書記	
S306	B075	II A21	器蓋下空	3 扁平片	裏	2c	11.3	7.1	5.3	907.6	細粒花崗閃緑岩	北上山 中年代行書記	1/3
S307	B076	II A20	器蓋下空	3 扁平片	裏	2c	9.6	5.3	6.6	607.7	細粒花崗閃緑岩	北上山 中年代行書記	1/3
S308	B077	II A20	器蓋下空	1 片	裏	1b	10.8	8.5	4.2	554	陶磁器		
S309	B078	II A19x	器蓋下空	3 扁平片	裏	2c	(5.9)	4.8	7.8	340	陶磁器		
S310	B079	II A19x	器蓋下空	3 扁平片	裏	2c	(7.7)	3.3	(4.5)	187.3	陶磁器		
S311	B080	II A18ow	器蓋下空	3 扁平片	裏	2c	15	6.6	4.3	86.3	陶磁器	北上山 中年代行書記	1/3
S312	B081	II A21	器蓋下空	1 片	裏	1b	11.7	4.8	6.7	458.7	陶磁器		
S313	B082	II A21	器蓋下空	1 片	裏	1b	9.5	7.9	3.5	650.9	陶磁器		
S314	B083	II A21	器蓋下空	1 片	裏	1b	11.9	8.7	6.1	163	陶磁器		
S315	B084	II A19x	器蓋下空	3 扁平片	裏	2c	(7.1)	2.6	5.1	177.3	陶磁器		
S316	B085	II A19x	器蓋下空	3 扁平片	裏	2c	15.4	6.3	8.1	1038.2	陶磁器		
S317	B086	II A20	器蓋下空	1 片	裏	1b	8.1	6.5	5	392.9	陶磁器		
S318	B087	II A19x	器蓋下空	3 扁平片	裏	2c	12.8	6.9	6.2	1461.6	細粒花崗閃緑岩	北上山 中年代行書記	1/3
S319	B088	II A19x	器蓋下空	1 片	裏	1b	9.7	8.4	5.1	660.9	陶磁器		
S320	B089	II A19x	器蓋下空	3 扁平片	裏	2c	(10.5)	4.8	7.5	604.9	陶磁器		
S321	B090	II A20	器蓋下空	3 扁平片	裏	2c	11.8	1.7	5.1	145.6	陶磁器		
S322	B091	II A20	器蓋下空	3 扁平片	裏	2c	(10.9)	5.1	6.6	453.1	陶磁器		
S323	B092	II A20	器蓋下空	1 片	裏	1b	10.9	9.1	6.2	83.2	陶磁器		
S324	B093	II A19x	器蓋下空	1 片	裏	1b	(11.4)	(7.4)	5.8	646.5	陶磁器		
S325	B094	T1	器蓋下空	1 片	裏	1b	8.9	7.9	5.5	599.5	陶磁器		
S326	B095	63	器蓋下空	1 片	裏	1b	15.3	12.8	5.7	1701.7	陶磁器		
S327	B096	47	器蓋下空	2 片	裏	1b	14.9	10.5	7	1403.3	細粒花崗閃緑岩	北上山 中年代行書記	1/3
S328	B097	II A21u	器蓋下空	1 片	裏	1b	11.7	8.3	6.1	896.8	陶磁器		
S329	B098	II A23a (溝谷区)	器蓋下空	2 片	裏	2c	(7.5)	3.7	6.6	260.8	陶磁器		
S330	B099	II A23a (溝谷区)	器蓋下空	3 扁平片	裏	2c	(7.8)	5.4	7.5	654.7	陶磁器		
S331	B100	II A21	器蓋下空	1 片	裏	1b	10	6.5	4	400.9	陶磁器		
S332	B101	II A13x	器蓋下空	3 扁平片	裏	2c	(9.8)	8.5	3.3	499.9	陶磁器		
S333	B102	II A13x	器蓋下空	3 扁平片	裏	2c	10.6	11.7	8.5	4.3	606.6	陶磁器	
S334	B103	II A13x	器蓋下空	2 片	裏	1b	7.5	7	3.5	285.1	陶磁器		
S335	B104	II A13x	器蓋下空	1 片	裏	1b	10.7	8.8	4.8	698.8	陶磁器		
S336	B105	II A23a	器蓋下空	1 片	裏	1b	—	—	—	—	陶磁器		
S337	B106	II B13a	器蓋下空	1 片	裏	1b	8	6	4.3	306.1	陶磁器		
S338	B107	II B14a	器蓋下空	2 片	裏	1b	8.4	2.9	6.4	107.6	陶磁器		
S339	B108	II A13x	器蓋下空	3 扁平片	裏	2c	(7.9)	6.3	4.7	302.1	陶磁器		
S340	B109	II A23a,211	器蓋下空	3 扁平片	裏	2c	(10.1)	6.4	6	866.3	陶磁器		
S341	B110	II A13x	器蓋下空	3 扁平片	裏	2c	(11.7)	8.1	5.8	3014	陶磁器		
S342	B111	II A13x	器蓋下空	3 扁平片	裏	2c	10.9	11.1	4.4	44.2	陶磁器		
S343	B112	II A13x	器蓋下空	1 片	裏	1b	8.2	8	2.7	256.3	陶磁器		
S344	B113	II A13x	器蓋下空	1 片	裏	1b	8.3	6.9	5.2	459.7	陶磁器		

埋藏番号	仮番号	市上地点	単位	形状	形	槽子	分類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	材質	石質	産地	備考	面積 (㎡)	区
SS45	B114	溝底区一括		1. 円			1b	6.7	4.7	3.4	1333				スス付着、黒変りしている。	1.3	132
SS36	B115	溝底区一括		1. 円			1b	9.7	7	5.2	4337			北上山場 中年代遺物		1.3	107
SS47	C001	B A201	遺物	2. 丸			2L	30	12	4.3	37	2979		北上山場 中年代遺物		1.3	107
SS48	C002	B A114	遺物	2. 丸			2L	36	12.5	5.2	41	4381					
SS49	D001	26号形穴建物跡・溝・東		棟状穴				6.2	4.1	2.2	875			北上山場 中年代遺物		1.3	107
SS50	D002	B A306	遺物	2. 丸			2L	36	12.4	5.2	41	4381					
SS51	A001	11号形穴建物跡	溝上一括	1. 棟状穴			2L	30	10.4	3.4	2	1792		北上山場 中年代遺物	北壁と正面に埋込	1.3	107

12 岡木戸Ⅱ磁石輪郭表

埋藏番号	仮番号	市上地点	単位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	材質	石質	産地	備考	面積 (㎡)	区
SS52	F001	26号形穴建物跡・溝・東	埋土下段	18.5	6.8	3.1	78.1			北上山場 中年代遺物	片面平滑	1.3	107
SS53	F002	3号形穴建物跡・東	埋土上段	8.1	5.0	2.8	111.3			北上山場 中年代遺物	片面平滑	1.3	107
SS54	F003	14号形穴建物跡・溝東側付石	埋土一括	6.9	3.7	1.7	33			北上山場 中年代遺物	溝の底	1.3	107

13 岡木戸Ⅱ石輪郭表

埋藏番号	仮番号	市上地点	単位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	材質	石質	産地	備考	面積 (㎡)	区
SS55	E 001	26号形穴建物跡・北	3層	—	—	—	2996			片面平滑、欠けまくり			
SS56	E 002	3号形穴建物跡・西	2層	53.7	53.1	5.7	3339			両面平滑、黒石色。			
SS57	E 003	3号形穴建物跡・西	2層	21.4	13.4	13.4	790			2面平滑			
SS58	E 004	26号形穴建物跡・北	埋土中位	14.8	5.6	2598.8				片面平滑			
SS59	E 005	5号形穴建物跡・石溝*1	石溝 No. 1	17.7	6	2256.6				片面平滑			
SS60	E 006	7号形穴建物跡・西	埋土下段	9.3	9.2	5.3	786.8			両面平滑			
SS61	E 007	7号形穴建物跡・西	埋土下段	11.0	9.9	4.6	840.8			片面平滑			
SS62	E 008	7号形穴建物跡・溝西	埋土中～下段	—	—	—	667.6			片面平滑、欠けまくり			
SS63	E 009	8号形穴建物跡	埋土下段	—	—	—	4.4	365.5		両面平滑			
SS64	E 010	3号形穴 (石溝 No. 1)	1層	17.5	7.5	4025.3				片面平滑			
SS65	E 011	3号形穴 (石溝 No. 3)	2層	20.1	3.9	4933				両面平滑	裏面は欠けている	1.8	108
SS66	E 012	12号形穴建物跡	2層	26.7	25.2	9.4	1100			片面平滑、黒石色、黒点あり		1.4	108
SS67	E 013	12号形穴建物跡 (石溝 No. 2)	2層	—	—	—	—			両面平滑			
SS68	E 014	3号形穴建物跡・溝	1層	28.2	34.2	3.9	4902.8			両面平滑			

第11表 鉄滓出土一覽表

遺跡名	個数	A				B				C				計
	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4		
36号窑炉遺跡出土・埋土上-中位	1												307	
27号窑炉遺跡出土・1層-3層	2				198								198	
30号窑炉遺跡の遺棄・埋土上-中位	3				60.3								60.3	
17号窑炉遺跡跡之西・埋土上-中位	4												11.9	
11・埋土層	5				7.2				44.0				182.4	
19・埋土・黑色土	6				60.1								340.0	
19・埋土・黒色土	7	194			3296								36.3	
19・埋土(下)・黒色土	8	36.3											10.2	
19・埋土層上部	9							45.3					21.9	
19・埋土・埋土上	10												21.8	
19・埋土・埋土上以下	11				21.9								7.5	
145区・埋土	12				7.5								10.3	
19・埋土	13												107.6	
19・埋土層	14				28.8								30.0	
18・埋土	15												17.0	
II A31・遺跡-右層	16				66.3				18.2				157.8	
II A31・遺跡-右層	17				60.3				107.6				557.2	
II A24・遺跡-右層	18				167.0				30.0				88.0	
II A25・遺跡-右層	19	112.9											161.0	
II A26・遺跡-右層	20				17.0								112.9	
II A27・遺跡-右層	21			157.8									17.0	
II A231・遺跡-右層	22				91.6								137.8	
II A231・遺跡-右層	23				67.2			6.8					557.2	
II A214・遺跡-右層	24								14.1				4.5	
II A214・遺跡-右層	25	88.0							4.5				4.5	
II A194・遺跡-右層	26	28.5			63.5					5.6			60.1	
II A194・遺跡-右層	27				44.4				10.9				185.0	
II A157・遺跡-右層	28									12.1			55.3	
II A184・遺跡-右層	29							138.7					147.8	
II A185・遺跡-右層	30									1.5			1.5	
II B125・遺跡下位	31								34.5				56.1	
II B134・遺跡下位	32				56.3								90.6	
II B134・遺跡下位	33				36.6								56.3	
II A137・遺跡下位-右層	34				91.0								63.3	
II A137・遺跡下位-右層	35				17.9								89.9	
II A144・遺跡下位	36												91.0	
II A144・遺跡下位	37												17.9	
II A157・遺跡下位	38												3.4	
II A157・遺跡下位	39				41.1				34.6				3.2	
II A316・遺跡-右層	40												41.8	
II A320・遺跡-右層	41	58.4			37.7				5.1				54.1	
II A214・遺跡-右層	42				11.2								37.7	
II A225・遺跡上位	43	5.5			25.9								66.6	
II A225・遺跡上位	44				22.4								25.9	
II A225・22t・遺-右層	45				49.2								27.9	
II A225・遺跡上位	46				9.9				3.9				49.2	
調査区北面・埋土-黒色土 埋土上層 → 調査区一層	47								115.5				115.5	
									32.1				32.1	

V 問木戸V遺跡の調査

1 概 要

(1) 遺構数・遺物数

問木戸V遺跡は沢を挟んで問木戸II遺跡の北側に隣接する遺跡である。確認された遺構は縄文時代の堅穴建物跡2棟、焼土遺構1基、埋設土器1基、古代の堅穴建物跡1棟、土坑3基、焼土遺構3基、工房跡2基、製鉄炉5基、炭置き場跡2基、柱穴2個、排滓場1箇所、包含層1箇所、時代不明の土坑2基、不明遺構1基、柱穴6個、遺物は縄文土器大コンテナ1箱、石鏃、敲磨器等の石器25点、土師器大コンテナ1と1/3箱、土製紡錘車2点、鉄鏃等の鉄製品4点、羽口中コンテナ1箱、炉壁中コンテナ2箱、鉄滓中コンテナ33.5箱である。

基本的な調査方法は問木戸II遺跡と同じであるので、第III章を参照して頂きたい。

(2) 遺 構 名 称 (第12表)

野外調査で使用した仮名称は、報告書掲載にあたり、SIOを○号堅穴建物跡、SK△を△号土坑といったように変更している。詳細は、第12表で対比していただきたい。

(3) 層 序 (第134図)

層序は岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課が行った試掘の際の層序観察を基本としながら、以下の通り分層した。

I層：10YR3/2黒褐色シルト層。粘性無し、締まりやや無し。表土層。暗褐色シルトがブロック状（7～10%）で混入する。植物の根の影響が大きい。層高が地点によって異なるが最大で60cmである。

II層：10YR2/1～2/2黒～黒褐色シルト層。粘性無し、締まり中。風化した花崗岩を起源とする堆積層である。北側の斜面ではしまりがある。主に古代以降の遺物を包含する。層高は10～20cmである。

III層：10YR3/3暗褐色シルト層。粘性無し、締まりやや有り。

III a層：10YR3/3～4/3暗褐～にぶい黄褐色砂層。粘性・締まり無し。調査区の南半（標高24.5m周辺）で確認される。

III b層：10YR3/3暗褐色砂層。粘性・締まり無し。炭化物を多く含む。調査区の南半（標高24.5m周辺）で確認される。

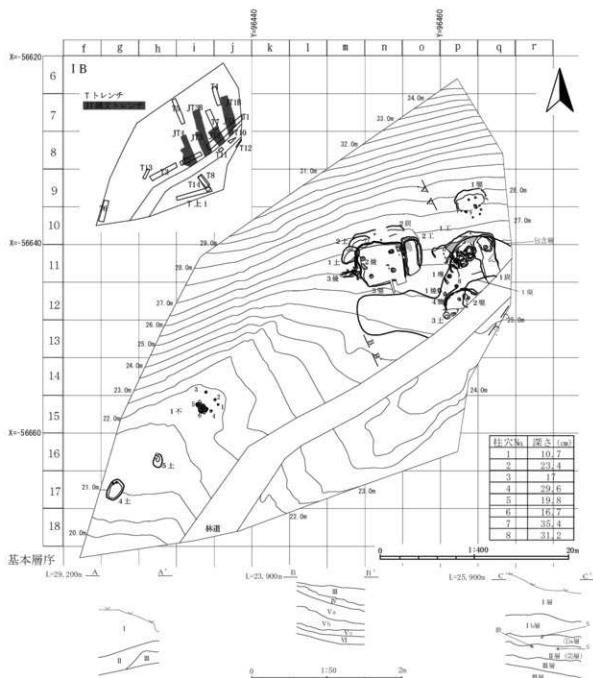
IV層：10YR2/3黒褐色シルト層。粘性無し、締まりやや有り。

V層：10YR3/4～4/4暗褐～褐色シルト層。粘性無し、締まりやや有り。花崗岩を多く含む。場所によっては人頭大の礫を含む。

V b層：10YR2/3黒褐色シルト層。粘性無し、締まりやや有り。拳大の礫を含む。花崗岩粒はV層よりも多い。

V c層：10YR3/3暗褐色シルト層。粘性無し、締まりやや有り。花崗岩粒を含む。漸移層。

VI層：10YR4/6～5/6褐～黄褐色シルト層。粘性無し、締まり有り。地山層。



第134図 間木戸V遺跡調査区全体図・基本層序

第12表 新旧遺構名対応表

報告書掲載名	現場使用名	報告書掲載名	現場使用名	報告書掲載名	現場使用名
1号壑穴建物跡	SI05	1号焼土遺構	SN07	3号製鉄炉	炉6
2号壑穴建物跡	SI07	2号焼土遺構	SN02	2号工房跡	SI06
3号壑穴建物跡	SI01	3号焼土遺構	SN04	4号製鉄炉	炉1
1号土坑	SK03	4号焼土遺構	SN05	5号製鉄炉	炉2
2号土坑	SK06	1号埋設土器	1号埋設土器	1号炭置き場跡	SI02
3号土坑	SK07	1号工房跡	SI03	2号炭置き場跡	SK04
4号土坑	SK01	1号製鉄炉	炉3	1号排滓場	排滓場
5号土坑	SK02	2号製鉄炉	炉2	1号不明遺構	SX01

2 遺 構

(1) 竪穴建物跡

1号竪穴建物跡（第135図、写真図版44）

〔位置・検出状況〕I B 9 p 付近、調査区北東側の斜面裾周辺に位置する。当初、本遺構周辺で縄文土器がまとまって確認され、遺構の存在を想定していたが、プランが確認できなかった。その後、Ⅲ層上面まで面的に掘り下げを行ったところ、一部に規則的な配置となる礎を確認した。そのため、ベルトを設定して掘り下げを行い、石囲炉を検出した。さらに、竪穴の存在を想定してセクションを観察したところ、斜面上方で平坦な面と壁が立ち上がったため、竪穴建物跡と判断した。〔規模・形状〕斜面下方が残存していないため、詳細な規模は不明であるが、柱穴の配置と残存する壁から判断すると、4 m前後の円形もしくは隅丸方形を呈するものと考えられる。〔埋土・堆積状況〕地山ブロックを含む黒褐色砂質シルトの単層である。〔壁・床面〕残存する床面は概ね平坦である。特別に硬化している部分は確認できなかった。壁は外傾気味に立ち上がる。〔炉〕本来の遺構の中央部分と考えられる位置に石囲炉を検出した。西側半分は試掘の際に掘り上げてしまっており、残存していない。残存する範囲から判断すると、炉の規模は長辺約50cm、短辺約40cmで、焼成深度は最大で8cmである。〔柱穴〕炉を中心に本遺構に伴うと考えられる柱穴を8個検出した。いずれも堆積土はⅢ層土に相当する黒褐色シルトの単層である。炉を中心にP1～P4・P6・P7が六角形に配置されており、これらが主柱穴の可能性が想定される。〔付属施設〕なし。〔重複遺構〕なし。〔出土遺物〕炉周辺から土器片が出土しているが、掲載可能なものはなかった。〔帰属時期〕出土遺物から縄文時代中期に帰属する可能性が高いが、遺構の残存状態・遺物量の少なさから断定はできない。

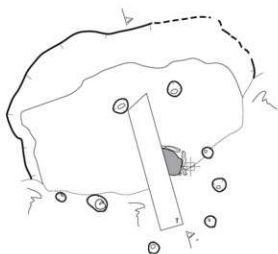
2号竪穴建物跡（第135図、写真図版45）

〔位置・検出状況〕I B12p 付近、調査区東側の林道に面した比較的平坦な部分に位置する。南東側は林道構築により消失している。Ⅵ層上面で、暗褐色シルトのプランを検出した。〔規模・形状〕南半分が残存していないため、詳細な規模は不明であるが、残存する部分から判断すると、4 m前後の円形を呈するものと考えられる。〔埋土・堆積状況〕Ⅴ層起源の暗褐色シルトを主体とする。壁際から周溝にかけては同じⅤ層起源の褐色シルト層が遺構のプラン外より一連で堆積しており、自然堆積の可能性が高いと考えられる。〔壁・床面〕残存する床面は概ね平坦である。特別に硬化している部分は確認できなかった。壁は外傾気味に立ち上がる。〔炉〕現在の作業道内に構築されていたと考えられるが、床面より深く掘削が及んでおり、確認できなかった。〔柱穴〕本遺構に伴うと考えられる柱穴を3個検出した。いずれも堆積土はⅤ層起源の暗褐色シルトの単層である。南側を大きく壊されているため、配置は不明である。〔付属施設〕なし。〔重複遺構〕同時期の遺構との重複関係はない。〔出土遺物〕埋土から大木8b～9時期と考えられる土器片が出土していたが、掲載はしていない。〔帰属時期〕出土遺物から縄文時代中期後葉の大木8b～9時期に帰属する。

3号竪穴建物跡（第136・137図、写真図版46・47）

〔位置・検出状況〕I B11n 付近、調査区北側の斜面裾周辺に位置する。Ⅲ層上面で黒褐色シルトの明瞭なプランを検出した。当初から本遺構とSN03（現場遺構名）は一体のものと想定して調査を行っていたが、竪穴部の床面で、燃焼部が確認できなかったため、一度別遺構とした。しかし、SN

1号竪穴建物跡

1号竪穴建物跡

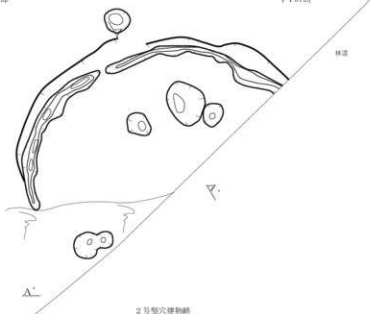
L=28,300m



1号竪穴建物跡

1. 10B2/4 黄褐色、砂質シルト、粘性なし、締まりややあり、地山層よりは締まりない、花崗岩粒20～25%、黄褐色土ブロック2%含む。
2. 10B6/4 に近い黄褐色、粘性なし、締まりややあり、花崗岩粒3～5%炭化物1～2%含む。

2号竪穴建物跡

2号竪穴建物跡

L=25,400m



2号竪穴建物跡

1. 10B3/4 暗褐色、シルト、粘性なし、締まりややなし、黄褐色土ブロック2%含む、花崗岩粒1%含む。
2. 10B4/4 褐色、シルト、粘性なし、締まりややなし、花崗岩粒3～5%、暗褐色土ブロック7%含む。



第135図 1・2号竪穴建物跡

03の焼成面が本遺構の張り出し部分の底面に沿って確認されたため、本遺構のカマドと判断した。

〔規模・形状〕斜面裾にあるため、斜面下方の形状が判然としにくいことと、斜面上方にテラス状の張り出しが確認できるが、その張り出しが北側でしか確認できないことのため、張り出しを含めた正確な規模は不明であるが、竪穴下部の規模は、東西522cm、南北464cm、張り出しを含めた確認できた規模は東西約580cm、南北約600cm、深さは最大で104cmである。〔埋土・堆積状況〕10層に細分した。残存状態の良い北側壁付近や張り出し部分にはⅢ層起源と考えられる堆積土が見られるが、大部分は黒色～黒褐色シルトを主体とする堆積土である。竪穴下部（6～10層）の堆積は花崗岩粒を含む黒色シルトと黒褐色シルトがほぼ交互に厚さ10～15cmでレンズ状もしくは三角形状に堆積しており、自然堆積の可能性が高いと考えられるが、上部（5層）の堆積は鉄滓や礫を含み、重複する2号炭置き場跡と同時に埋まっており、人為堆積の可能性を否定できない。〔壁・床面〕床面は概ね平坦である。特に硬化している部分は確認できなかった。壁は、カマドのある西壁以外の下部は直立気味に立ち上がり、張り出しまで緩やかになり、最後は外傾気味に立ち上がる。〔カマド〕西壁の中央南寄りに確認した。床面では燃焼部・袖が確認できず、カマドを持たない竪穴と考えていたが、西壁に隣接して直線上に配置される礫と焼土層を確認していた。この部分にベルトを設定して掘り下げを行ったところ、竪穴内側のプランと接する部分に床面とほぼ同レベルの焼成面が確認できたため、本遺構のカマドと判断した。焼成深度は最大で6cmである。燃焼部からW8.5° Sの方向に浅い煙道が約1.5m延びており、にぶい褐色～明褐色の汚れた焼土層で埋没している。煙道部の北壁には部分的に細長い礫が配置されており、カマド構築に伴う礫と考えられる。検出時に確認された礫は、煙道部を構築していたこれらの礫の一部と考えられる。燃焼部の両脇には浅黄褐色の範囲が確認でき、袖の一部と考えられる。この他に明瞭な袖は確認できなかった。〔柱穴〕方形に配置される主柱穴と考えられる柱穴を4個検出した。いずれも黒褐色シルトを主体とする堆積土の単層である。〔付属施設〕施設ではないが、Pit4の東側に礫が集中する部分を確認した。褐色シルトを主体とした裏込めが確認できたが、詳細な機能は不明である。〔重複遺構〕1号土坑、2号土坑、2号焼土遺構、3号焼土遺構、2号炭置き場跡と重複し、本遺構が最も古い。ただし、2号炭置き場跡とは同時に存在した可能性がある。〔出土遺物〕縄文土器VP001～005、土師器VP030～038、石畿VS008・010、敲磨器類VS016～019、台石VS024、刀VG005、座金VG006、鉄滓類等が出土している。〔帰属時期〕出土遺物から8世紀代に帰属するものと考えられる。

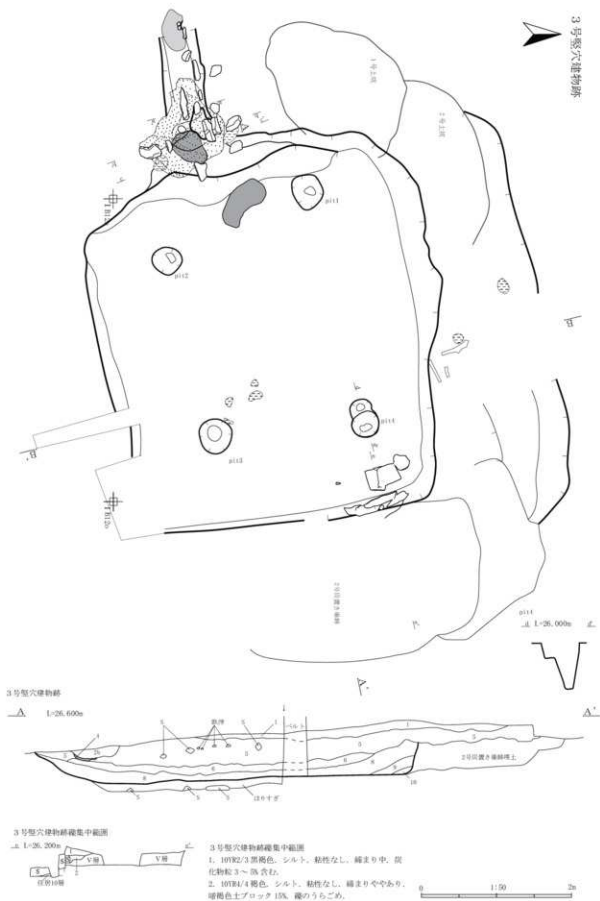
（2）土 坑

1号土坑（第138図、写真図版47）

〔位置・検出状況〕I B11m、調査区北側の斜面裾周辺に位置し、Ⅲ層上面で炭化物主体の黒色土のプランを検出した。〔規模・形状〕218×152cmの不整楕円形を呈する。南東側は斜面下方にあたり、削平もしくは崩落している可能性が考えられる。深さは最大で40cmである。〔埋土・堆積状況〕3層に分層した。中間部に鉄滓を含む黒褐色シルト層があるため、3層に分層したが、全体的に炭化物主体の人為堆積土と考えられる。〔壁・底面〕底面は概ね平坦で、壁は底面からなだらかに立ち上がる。〔重複遺構〕3号竪穴建物跡、2号土坑と重複し、本遺構が最も新しい。〔出土遺物〕土器類は伴わず、堆積土から鉄滓類が出土している。〔帰属時期〕堆積土の様相から古代に帰属する可能性が高い。

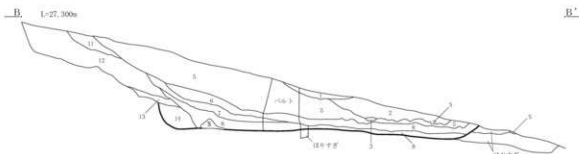
2号土坑（第138図、写真図版47）

〔位置・検出状況〕I B10m付近、調査区北側の斜面裾周辺に位置する。1号土坑の精査終了後、3



第 136 図 3号竪穴建物跡(1)

3号竪穴建物跡



3号竪穴建物跡 A-A'・B-B'

1. 10YR3/1 黒褐色。シルト、粘性なし。締まり中、花崗岩小粒3～5%含む。植物根の影響大。
2. 10YR3/2 黒褐色。シルト、粘性なし。締まり中、花崗岩小粒5～7%、灰白色砂ブロック7%含む。
- 2b. 10YR2/2 黒褐色。シルト、粘性なし。締まり中、花崗岩小粒1～2%含む。
3. 10YR5/6 黄褐色。シルト、粘性なし。締まりややあり、ブロックでみられる。
4. 7.5YR4/6 褐色。シルト、粘性なし。締まり中、べっとりした堆土層、非常にうすくあまり残っていない。(2号堆土遺構)
5. 10YR2/2 黒褐色。シルト、粘性なし。締まり中～ややなし。花崗岩小粒3～5%、黒色土ブロック7%、暗褐色砂ブロック2～3%、動物骨を含む。
6. 10YR2/1 黒色。シルト、粘性なし。締まり中、灰白色砂粒～1%含む。
7. 10YR2/2 黒褐色。シルト、粘性なし。締まりややなし。花崗岩小粒10～15%含む。
8. 10YR2/2.5 黒褐色。シルト、粘性なし。締まりややなし。花崗岩小粒10～15%、垂直レキ中量(人頭大)を含む。
9. 10YR2/1 黒色。シルト、粘性なし。締まりややなし。砂粒1～2%含む。東壁端のみに見られる。
10. 10YR2/3 黒褐色。シルト、粘性なし。締まり中。
11. 10YR3/1 黒褐色。シルト、粘性なし。締まりややなし。花崗岩小粒7～10%含む。
12. 10YR3/2～3/3 黒褐色～暗褐色。シルト、粘性なし。締まりなし。壁面に土が締まりがなくなる。にぶい黄褐色土ブロック5%、こぶし大の垂直レキ含む。
13. 10YR2/2 黒褐色。シルト、粘性なし。締まり中。炭化物を層状に含む。
14. 10YR2/2 黒褐色。シルト、粘性なし。締まりややなし。新鮮な状態で暗褐色を有する時間がたつと黒くなる。花崗岩小粒7～10%含む。

3号竪穴建物跡カマドa-a'



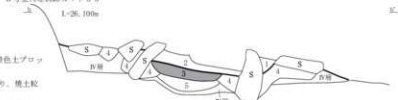
3号竪穴建物跡カマドa-a'

1. 7.5YR5/4～5/6 にぶい褐色～明褐色。粘性なし。締まりややあり～中。断面にはないが、部分的に赤褐色や褐色も見られる。
2. 7.5YR3/3 暗褐色。粘性なし。締まり中。黒褐色シルトで覆われている。

3号竪穴建物跡カマドb-b'

1. 10YR3/3 暗褐色。シルト、粘性なし。締まり中。浅黄褐色土ブロック1～2%含む。
2. 10YR5/6 黄褐色。シルト、粘性なし。締まりややあり。堆土粒2～3%。花崗岩小粒1～2%含む。
3. 5YR6/3 褐色。粘性なし。締まりあり。堆土層。花崗岩小粒2～3%含む。
4. 10YR4/3～4/4 にぶい黄褐色～褐色。シルト、粘性なし。締まりややあり。黄褐色土ブロック2～3%。石の崩りかたの埋土。
5. 10YR3/3～3/4 暗褐色。シルト、粘性なし。非常に硬く締まる。

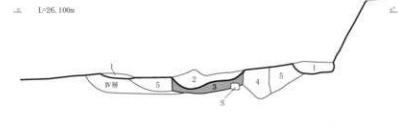
3号竪穴建物跡カマドb-b'



3号竪穴建物跡カマドc-c'

1. 10YR8/4 浅黄褐色。粘性なし。締まり中。軸の残存？
2. 10YR5/6 黄褐色。シルト、粘性なし。締まりあり。
3. B-B' の3層
4. 10YR4/6 褐色。シルト、粘性なし。締まりややなし。(石の崩りかた)
5. B-B' の5層。

3号竪穴建物跡カマドc-c'



(カマド断面) 0 1:20 1m

(竪穴断面) 0 1:30 2m

第137図 3号竪穴建物跡(2)

号堅穴建物跡として精査していたが、炭化物主体の堆積土が確認された。ベルトを設定して掘り下げを行ったところ、平坦な底面と斜面上方で壁を確認したため、土坑として登録した。本遺構の南側はベルト設定以前に掘り上げてしまっており、残存していない。〔規模・形状〕前述の通り、半円しか確認できなかったため、正確な形状や規模は不明である。平面形は残存する部分から判断すると、楕円形を呈するものと考えられる。〔埋土・堆積状況〕3層に分層した。最下部には10cm程の炭化物主体の堆積土が確認でき、その上部は地山の崩落土と考えられる暗褐色シルトや黒褐色シルトで埋没している。〔壁・底面〕残存する底面は概ね平坦である。壁は底面から外傾気味に立ち上がる。〔重複遺構〕3号堅穴建物跡、1号土坑と重複し、本遺構が3号堅穴建物跡より新しく、1号土坑より古い。〔出土遺物〕土器類は伴わず、堆積土から鉄滓類が出土している。〔帰属時期〕堆積土の様相から古代に帰属する可能性が高い。

3号土坑（第138図、写真図版48）

〔位置・検出状況〕I B12p、調査区東側の林道に面した比較的平坦な部分に位置し、Ⅲ層上面で黒褐色シルトのプランを検出した。〔規模・形状〕77×66cmの楕円形状を呈する。深さは最大で15cmである。〔埋土・堆積状況〕地山ブロックを含む黒褐色シルトの単層である。層高がないため、人為か自然かの判断はできなかった。〔壁・底面〕底面は掘り鉢状を呈し、壁は底面からなだらかに立ち上がる。〔重複遺構〕同時代の遺構との重複関係はない。〔出土遺物〕なし。〔帰属時期〕検出状況から古代に帰属する可能性が高い。

4号土坑（第138図、写真図版48）

〔位置・検出状況〕I B17g、調査区南西側の沢に面した緩斜面周辺に位置する。Ⅲ層上面で明瞭な黒褐色シルトのプランで検出した。〔規模・形状〕225×150cmの楕円形を呈する。深さは最大で30cmである。〔埋土・堆積状況〕2層に細分した。下部には炭化物を多量に含む黒色シルト（2層）が10cm程の厚さで堆積し、その上部に絡まりのない黒褐色シルト（1層）が堆積している。下部には少量ではあるが、鉄滓が出土している。〔壁・底面〕底面は概ね平坦で、壁は底面からなだらかに立ち上がる。南側は斜面下方にあたり、残存状態が悪く、わずかな立ち上がりしか確認できない。〔その他〕北西隅で2個の柱穴を確認した。いずれも黒褐色シルトの単層である。〔重複遺構〕なし。〔出土遺物〕土器類は伴わず、堆積土から鉄滓類が出土している。〔帰属時期〕不明。

5号土坑（第139図、写真図版48）

〔位置・検出状況〕I B16h、調査区南西側の沢に面した緩斜面周辺に位置する。Ⅲ層上面で明瞭な黒褐色シルトのプランで検出した。〔規模・形状〕139×97cmの不整楕円形を呈する。深さは最大で35cmである。〔埋土・堆積状況〕3層に細分した。Ⅱ層起源の黒色シルトもしくは黒褐色シルトを主体とする。堆積土中に礫が混入しているが、人為的な堆積は確認できなかった。〔壁・底面〕底面は掘り鉢状を呈し、壁は底面からなだらかに立ち上がる。〔重複遺構〕なし。〔出土遺物〕土器類は伴わず、堆積土から鉄滓類が出土している。〔帰属時期〕不明。

(3) 焼土遺構

1号焼土遺構 (第139図、写真図版45)

〔位置・検出状況〕 I B12o 周辺、調査区東側の林道に面した比較的平坦な部分に位置し、V層面が赤変している。〔規模・形状〕 47×34cmの楕円形を呈する。焼成深度は最大6cmである。〔被熱・堆積状況〕 暗赤褐色の焼土が確認できるが、掘り込みは認められない。〔重複遺構〕 なし。〔出土遺物〕 なし。〔帰属時期〕 検出状況から縄文時代に帰属する可能性が高い。

2号焼土遺構 (第139図、写真図版48)

〔位置・検出状況〕 I B11m 付近、調査区北側の斜面裾周辺に位置する。3号竪穴建物跡の5層中で検出した。〔規模・形状〕 71×38cmの不整形である。焼成深度は最大3cmである。〔被熱・堆積状況〕 3号竪穴建物跡の2b層直下で褐色の焼土層が確認できる。掘り込みは認められない。〔重複遺構〕 3号竪穴建物跡より新しい。〔出土遺物〕 土器類は伴わず、堆積土から鉄滓類が出土している。〔帰属時期〕 検出状況から古代に帰属する可能性が高い。

3号焼土遺構 (第139図、写真図版49)

〔位置・検出状況〕 I B11m、調査区北側の斜面裾周辺に位置する。3号竪穴建物跡の煙道西端で検出した。〔規模・形状〕 56×30cmの楕円形状を呈する。焼成深度は最大4cmである。〔被熱・堆積状況〕 掘り込みがあり、地山ブロックを含むⅢ層起源の暗褐色シルトで埋没した上面が赤変しているが、不明瞭である。〔重複遺構〕 3号竪穴建物跡より新しい。〔出土遺物〕 土器器VP040が出土している。〔帰属時期〕 出土遺物から奈良時代に帰属する。

4号焼土遺構 (第140図、写真図版49)

〔位置・検出状況〕 I B12p、調査区東側の林道に面した比較的平坦な部分に位置し、Ⅱ層面が赤変している。廃滓場形成時の初期段階に形成された焼土遺構である。〔規模・形状〕 43×31cmの菱形を呈する。焼成深度は最大5cmである。〔被熱・堆積状況〕 黄橙色の焼土が確認できるが、掘り込みは認められない。〔重複遺構〕 なし。〔出土遺物〕 なし。〔帰属時期〕 検出状況から古代に帰属する可能性が高い。

(4) 埋設土器

1号埋設土器 (第140図、写真図版49)

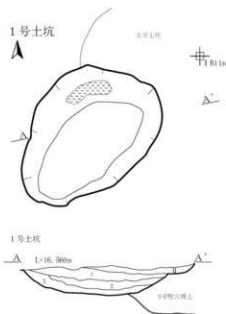
〔位置・検出状況〕 I B12p、調査区東側の林道に面した比較的平坦な部分に位置し、V a層上面で検出した。〔規模・形状〕 46×43cmの円形の掘り方の中央部に小形の浅鉢を、V層起源の暗褐色シルトを掘り方埋土として埋設している。〔埋土・堆積状況〕 V層起源の暗褐色シルトを掘り方埋土とし、土器内部には黒褐色シルトが確認された。〔重複遺構〕 なし。〔出土遺物〕 縄文土器VP027が出土している。〔帰属時期〕 縄文時代中期後葉に帰属する。

(5) 工房跡

1号工房跡 (第141・142図、写真図版50・51)

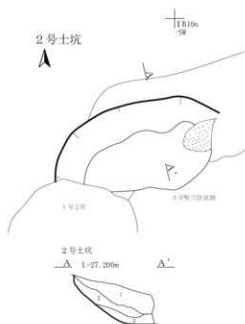
〔位置・検出状況〕 I B11p 付近、調査区東側の林道に面した比較的平坦な部分に位置し、Ⅲ層上面

2 遺構



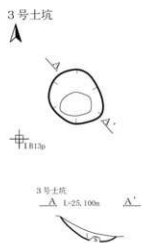
1号土坑

1. 10YR1.7/1 黒色、シルト、粘性なし。締まりなし。炭化物 (1cm~5cmまでのものがいろいろある) 主体の層。花崗岩粒 2~3% 含む。
2. 10YR3/1 黒褐色。砂質シルト。粘性なし。締まりなし。花崗岩小粒 5~7%、炭化物 2% 含む。最下部に砂層 (※) がみられる。
3. 1層と同じ。締まり中。炭化物の大ききものはほぼ同じ。花崗岩の含有量が少ない。



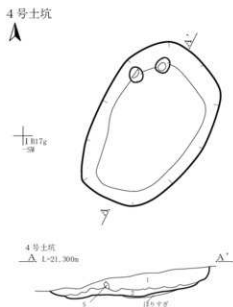
2号土坑

1. 10YR2/3 黒褐色。シルト。粘性なし。締まり中。花崗岩粒 15~20% 含む。
2. 10YR3/3 暗褐色。シルト。粘性なし。締まり中。花崗岩粒 15~20% 含む。
3. 10YR1.7/1 黒色。シルト。粘性中。締まり中。炭化物主体層。



3号土坑

1. 10YR2/2 黒褐色。シルト。粘性なし。締まりややなし。黄褐色土小ブロック 2~3% 含む。

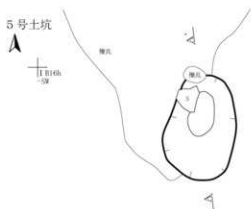


4号土坑

1. 10 YR3/2 黒褐色。シルト。粘性なし。締まりなし。非常にキョボシしており直角シキを含む。
2. 10YR1.7/1 黒色。シルト。粘性なし。締まりややなし。炭を多量に含む。堆山 (編織) 砂層を互層で含む。



第 138 図 1~4号土坑

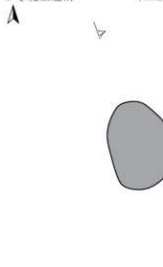


5号土坑

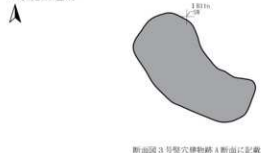
1. 赤クラン
2. 10YR2/1 黒褐色 シルト、粘性中、締まりややなし、花崗岩粒2~3%含む。
3. 10YR1.7/1 黒色~10YR2/1 黒色 シルト、粘性中、締まり中、花崗岩粒1~2%含む。
4. 10YR2/2 黒褐色 シルト、粘性なし、締まりややなし、花崗岩粒7~10%含む。



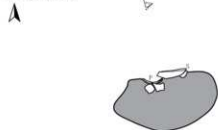
1号焼土遺構



2号焼土遺構



3号焼土遺構



1号焼土遺構



1号焼土遺構

1. 5YR3/3 暗赤褐色、粘性なし、締まり中、花崗岩粒7~10%含む。

3号焼土遺構

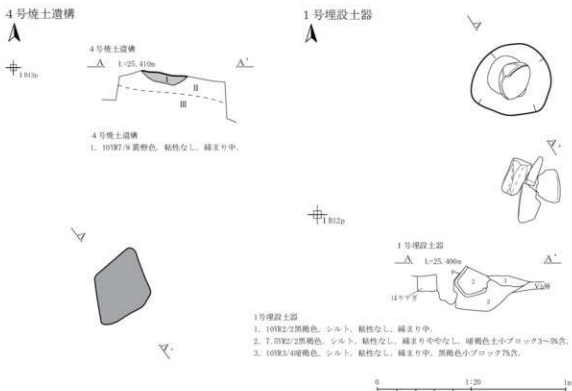


3号焼土遺構

1. 10YR7/6 明黄褐色、粘性なし、締まりややあり。
2. 10YR3/3 暗褐色、シルト、粘性なし、締まり中、黄褐色土1~2%含む。



第139図 5号土坑、1~3号焼土遺構



第140図 4号焼土遺構、1号埋設土器

で黒褐色シルトの明瞭なプランを検出した。斜面下方にあたる南東側は崩落や削平等により確認できなかった。本遺構は1号～3号製鉄炉、Pit 1、柱穴 2個で構成される。〔規模・形状〕北西壁以外の部分では明瞭な壁を確認することができなかった。そのため、詳細な規模は不明であるが、残存する北西壁や製鉄炉、製鉄炉を被覆している炉壁混じりのブロック焼土範囲から判断すると、一辺4m前後の隅丸方形を呈するものと考えられる。〔埋土・堆積状況〕7層に細分した。黒色・黒褐色シルトを主体とする。2号製鉄炉の直上には炉構築材を含む褐色シルト層（7層）が確認できる。北西壁際には壁崩落土と考えられる黒褐色シルト層（6層）が三角形に堆積し、その上部に黒色シルト層（5層）がほぼ水平に堆積している。この層の最上には部分的に黄褐色粘土質シルトが薄く堆積している。また、5層上面が1号製鉄炉の構築面となっており、1号工房最新段階の作業面（床面）であったと考えられる。黒色シルト（3層）、黒褐色シルト（2層）と斜面上方から堆積した状況を呈しており、最終的には自然に埋没したものと考えられる。〔壁・床面〕床面は概ね平坦である。1号製鉄炉の北側、北隅周辺と2号製鉄炉の北西側の床面が硬化している。製鉄炉の斜面上方にあたり、フイゴが置かれた場所が想定される。壁は北西のみで確認できた。床面から直立気味に立ち上がり、上半で強く開くように立ち上がる。〔柱穴〕本遺構に伴うと考えられる柱穴を2個検出した。2号製鉄炉を挟んで対になる位置に構築されている。Pit 3は1号製鉄炉に被覆されており、1号製鉄炉に伴う可能性は低い。また、Pit 2は3号製鉄炉と近接しており、3号製鉄炉に伴う可能性は低いと考えられる。2個とも焼土ブロックを含む黒褐色シルトの単層である。〔付属施設〕2号製鉄炉と3号製鉄炉の間に円形のPitを検出している。両遺構よりも新しいもので、1号製鉄炉に伴う可能性が高い。直径0.53mの円形基調のものである。炉と考えて精査を行ったが、還元層や赤変層、鍛造剥片等の微細な鉄滓類が確認できなかったため、炉とは判断しなかった。色調や混入物の違いにより2層に

分層したが、炉壁や焼土ブロック、炭化物を含む黒色シルトで人為的に埋められている。〔その他〕上記の他に1号製鉄炉の北側と2号製鉄炉の北西側で床面が硬化している範囲を確認した。どちらも不整形で、前者は長辺1.37m、短辺0.66m、後者は長辺1.6m、短辺1.05mの規模で、いずれも対応する製鉄炉の長辺と硬化範囲の長辺が直交している。斜面上方の炉の背面に位置する場所にあり、フイゴが設置された場所が想定される。〔重複遺構〕2号工房跡、1号炭置き場跡と重複し、本遺構が新しい。〔出土遺物〕1号製鉄炉の炉面から鉄鏝VG003、埋土から羽口VG018、Pit 1から羽口VG019・020、鉄滓類等が出土している。〔帰属時期〕出土遺物や検出状況から古代に帰属すると考えられる。

（製鉄炉）

1号製鉄炉（第141図、写真図版50・51）

〔位置〕1号工房跡にある3基の製鉄炉のうち、最も北東側に位置する。構築面は5層上面で3基ある製鉄炉のうち、レベル的に最も高く、最も新しい製鉄炉である。〔規模・形状〕炉の平面形は楕円形で、長辺1.32m、短辺0.75mである。炉の構築面から炉底面までの深さは18cmで、断面形は逆台形状を呈する。長辺を主軸とするとN12°Wとなる。〔埋土・堆積状況〕炉内の堆積土は大きく2層に細分でき、下部は炉壁を含む鉄滓主体の層で、上部は炭化物・鉄滓を含む焼土・炉壁の混合層で、人為堆積である。〔壁・底面〕古い製鉄炉の炉体を利用して作業床面とし、その床面を長辺1.33m、短辺0.89mの楕円形に掘り窪め、炉を構築している。底面は広範囲にわたって還元しており、炉の判断の根拠となっている。上部は部分的に赤変した炉体が残存している。〔重複遺構〕2号製鉄炉より新しい。

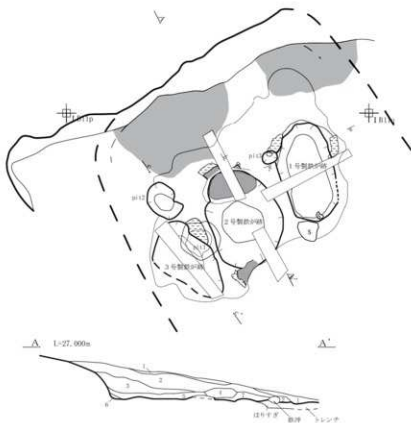
2号製鉄炉（第142図、写真図版51）

〔位置〕1号工房跡のほぼ中央に位置する。締まりのある暗褐色シルト（b断面6層）上面を構築面としている。〔規模・形状〕炉の平面形は楕円形で、長辺1.35m、短辺0.97mである。炉の構築面から炉底面までの深さは28cmで、断面形は皿状を呈する。長辺を主軸とするとN18°Wとなる。〔埋土・堆積状況〕3層に細分した。大部分は鉄滓と炉壁の混合層（3層）で、その上部に炉壁を含む黄褐色シルト層（2層）、炉壁を含む暗褐色シルト層（1層）が堆積している。全体的に混入物が多く人為堆積と考えられる。〔壁・底面〕床面を長辺1.5m、短辺0.98mの楕円形に掘り窪め、炉を構築している。底面は斜面下方に傾斜している。南側の一部で炉体の残存と考えられる部分が確認できたが、広範囲にわたって鉄滓があり、南側は不明瞭である。斜面上方にあたる北側では底面から壁面にかけて還元層、残存する炉壁、赤変した炉壁が確認できた。〔重複遺構〕3号製鉄炉より新しく、1号製鉄炉より古い。

3号製鉄炉（第142図、写真図版51）

〔位置〕1号工房跡の南西側に位置する。1号工房跡床面施設の最終確認段階で検出し、2号製鉄炉の構築面とは15cm程の高低差がある、1号工房跡で最も古い製鉄炉である。〔規模・形状〕残存状態が悪く、詳細な規模は不明であるが、確認できた範囲から判断すると、長辺12m前後、短辺0.7m前後の楕円形を呈するものと考えられる。確認面から炉底面までの深さは15cmである。長軸は他の2基より西に傾いている。〔埋土・堆積状況〕色調の違いにより2層に細分したが、炉体を主体とした人為的な埋め戻し土で埋没している。〔壁・底面〕3号製鉄炉も他の製鉄炉と同様に、楕円形に掘り窪

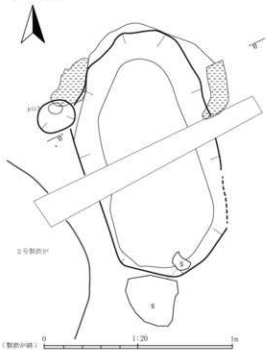
1号工房跡



1号工房跡

- 101R3/2 黒褐色。シルト。粘性なし。締まりややあり。風化花崗岩小粒2~3%含む
- 101R2/2 黒褐色。シルト。粘性なし。締まり中。風化花崗岩小粒3~5%含む。3層との境はやや明確化している
- 101R2/1 黒色。シルト。粘性なし。締まりややあり。風化花崗岩小粒3~5%含む。
- 101R2/2.5 黒褐色。シルト。粘性なし。締まりややなし。焼土粒1~2%含む。
- 101R2/1 黒色。シルト。粘性なし。締まりややあり。花崗岩小粒2~3%。焼土粒1%。
- 101R2/3 黒褐色。シルト。粘性なし。締まり中。花崗岩小粒2~3%
- 7.101R4/6 褐色。シルト。粘性なし。締まり中。

1号製鉄炉



(製鉄炉跡) 0 1:20 1m



1号製鉄炉



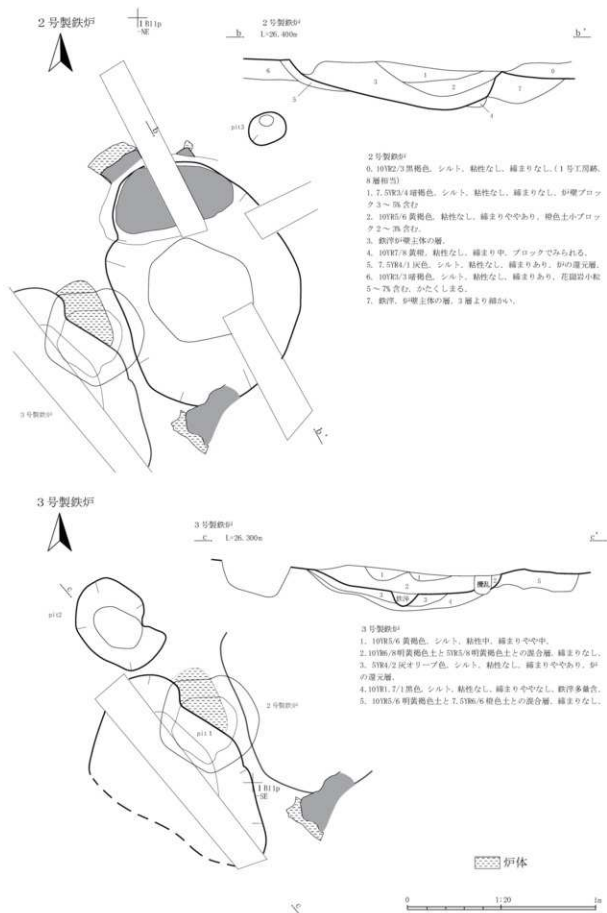
1号製鉄炉

- 101R7/6 明黄褐色土ブロックや 0107/8 棕色土ブロック (9層) の混合層。炭化物7~10%。鉄滓含む。粘性なし。締まりあり。
- 鉄滓主体の層。砂礫等のブロックが15~20%含む。
- 0107/8 棕色。粘性なし。締まりあり。砂体。
- 7.514/1 灰。粘性なし。締まりあり。
- 101R1, 7/1 黒色。粘性なし。締まりあり。焼土ブロック2~3%含む。非常にかたくなる。

(工房跡) 0 1:50 2m

炉体

第141図 1号工房跡(1)



第142図 1号工房跡(2)

め、炉を構築しているが、前述の通り詳細な規模は不明である。底面は広範囲にわたって還元している。〔重複遺構〕2号製鉄炉より古い。

2号工房跡（第143図、写真図版52・53）

〔位置・検出状況〕I B11p付近、調査区東側の林道に面した比較的平坦な部分に位置する。1号工房跡の3号製鉄炉周辺を掘り下げたところ、平坦な面とわずかに立ち上がる壁、2基の製鉄炉を確認したため、工房跡とした。1号工房跡と同様に、斜面下方にあたる南東側は確認できなかった。本遺構は4号製鉄炉、5号製鉄炉で構成される。〔規模・形状〕北西壁の一部しか確認できなかったため、詳細な規模は不明である。残存する壁や製鉄炉の位置から判断すると4m前後と考えられる。

〔埋土・堆積状況〕色調や混入物の違いにより6層に細分した。南東側の下部に廃滓場の②層下部に相当する黒褐色～暗褐色シルト層（4層）が堆積するが、大部分は黒褐色シルト層で埋没している。堆積土にはあまり多くはないが、鉄滓や焼土ブロック、炭化物の混入が見られ、他遺構との重複を想定すると、人為堆積の可能性が高いと考えられる。〔壁・床面〕床面は概ね平坦である。壁は一部のみで確認されたにとどまる。〔重複遺構〕1号工房跡、1号炭置き場跡と重複し、本遺構が最も古い。また、排滓場と近接しているが、新旧関係は不明である。〔出土遺物〕縄文土器VP006・007、土師器VP039、羽口、鉄滓類等が出土している。〔帰属時期〕出土遺物や検出状況から古代に帰属すると考えられる。

〈製鉄炉〉

4号製鉄炉（第143図、写真図版52・53）

〔位置〕2号工房跡の南西側に位置する。全体的に残存状態が悪いため、5号製鉄炉との新旧関係は不明である。〔規模・形状〕南東側は確認できなかったため、詳細な規模・形状は不明と言わざるをえないが、確認できた範囲から判断すると、長辺1.5m前後の楕円形基調を呈すると考えられる。確認面から炉底面までの深さは最大で33cmである。長軸方向は北北西である。〔埋土・堆積状況〕底部周辺に黒色シルト（3層）が堆積し、大部分が焼土ブロックや鉄滓・炉壁を多量に含む黒褐色シルトで埋没している。人為堆積と考えられる。〔壁・底面〕炉底は南東側に向かって傾斜し、わずかに立ち上がる。壁は北西の一部のみ確認でき、熱を受けて赤変している。〔重複遺構〕5号製鉄炉との新旧関係は不明。

5号製鉄炉（第143図、写真図版53）

〔位置〕2号工房跡の北東側に位置する。〔規模・形状〕残存状態は悪いが、確認できた規模は、北西-南東方向0.85m、北東-南西方向0.79mで、平面形は隅丸方形を呈する。確認面から炉底面までの深さは最大で10cmである。〔埋土・堆積状況〕鉄滓・焼土ブロック・炭化物を含む黒色シルトの単層である。〔壁・底面〕底面は北西側がやや窪むが南東側に向かって平坦になり、そのまま床面となっている。北側の底面から壁面の一部が還元している。〔重複遺構〕4号製鉄炉との新旧関係は不明。

（6）炭置き場跡

1号炭置き場跡（第146図、写真図版53）

〔位置・検出状況〕I B11p付近、調査区東側の林道に面した部分に位置する。南側は林道構築時に

削平されている。Ⅲ層上面で黒褐色シルトのプランを検出した。〔規模・形状〕南側が削平されているため、詳細な規模は不明であるが、確認できた部分では長辺4.7m、短辺2.48mの不整長楕円形を呈する。確認面から底面までの最大の深さは58cmである。長辺を主軸とすると、N15°Wである。〔埋土・堆積状況〕黒褐色シルトを主体とし、7層に細分した。最下部には黒褐色シルト（5層・6層）が堆積し、その上部に炭化物を多く含む黒色シルト層が全体的に水平に堆積している。この層より上位では黒褐色シルト主体で埋没しているが、南側（4層）では黒みが強く、炭化物・鉄滓を含み、北側（2層）では焼土粒を含む。混入物が多く、上部は人為堆積の可能性が高いと考えられる。

〔壁・底面〕底面は概ね平坦であるが、北側が浅く窪んでおり、その中央にPitを1個確認した。北壁と東壁、西壁南側は残存状態が良好で、底面から直立気味に立ち上がる。断面観察箇所の西壁は立ち上がりが不明瞭で、なだらかに立ち上がる。〔重複遺構〕1号工房跡、2号工房跡と重複し、1号工房跡より古く、2号工房跡より新しい。〔出土遺物〕羽口VG007～017、鉄滓類等が出土している。〔帰属時期〕検出状況や重複関係から古代に帰属すると考えられる。

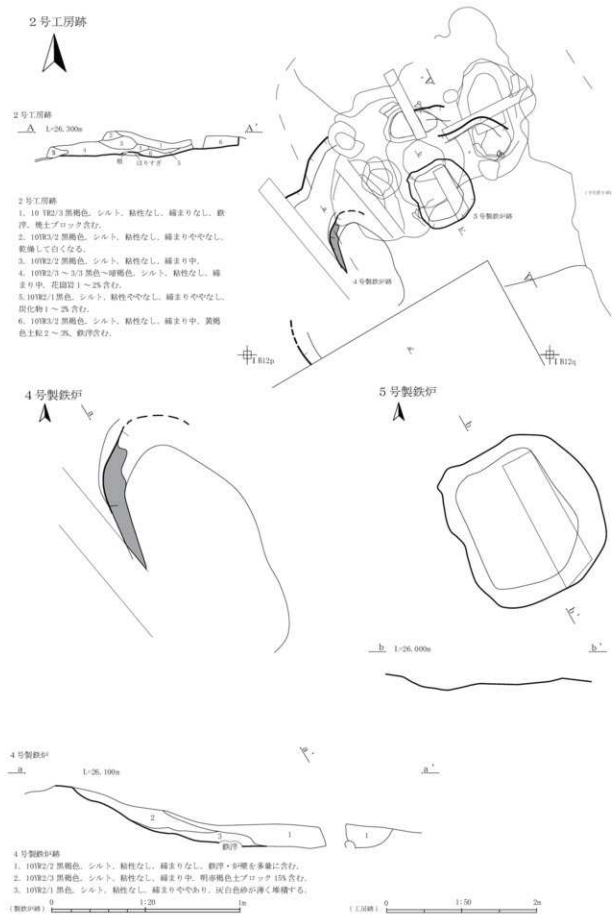
2号炭置き場跡（第146図、写真図版54）

〔位置・検出状況〕I B11 o 付近、調査区北側の斜面裾周辺に位置する。3号竪穴建物跡と同じ面で検出した。〔規模・形状〕確認できた規模は長辺4.08m、短辺2.02mの不整長楕円形を呈する。確認面から底面までの最大の深さは33cmである。長辺を主軸とすると、N5°Wである。〔埋土・堆積状況〕4層に細分した。黒褐色砂もしくは黒褐色～暗褐色砂質シルトと炭化物主体層との互層で、最下部には7～8cmの炭化物主体層が水平に堆積している。〔壁・底面〕底面は南側に傾斜しているが、概ね平坦である。壁は、北側では直線的に立ち上がり、東側ではなだらかに立ち上がる。〔重複遺構〕3号竪穴建物跡と重複するが、断面観察箇所では、新旧関係を捉えられず、判断できなかった。最終的には3号竪穴建物跡ともに埋没している。〔出土遺物〕台石VS025、鉄滓類等が出土している。〔帰属時期〕検出状況や重複関係から古代に帰属し、3号竪穴建物跡と大きな時間差はないものと考えられる。

（7）廃 滓 場

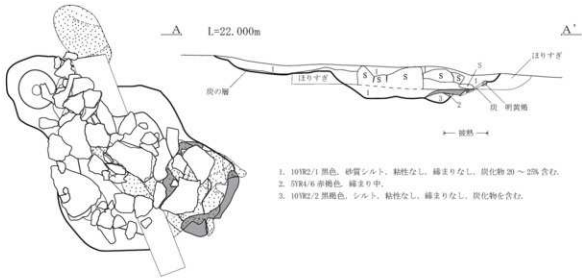
1号廃滓場（第147図、写真図版49）

〔位置・検出状況〕I B12 p 付近、調査区東側の林道に面した部分に位置する。南半は林道構築時に削平を受けて消失している。工房の南側に位置し、Ⅲ層上面に形成されている。〔規模・形状〕林道構築時に削平を受けているため、正確な規模や形状は不明であるが、確認できた部分では6.2×2.35mの範囲にわたる。〔埋土・堆積状況〕3層に分層し、Ⅱ層を基本とする。鉄滓等を多く含む層は①層の下半から②層の上半である。〔重複遺構〕後述する包含層内に位置する。鉄滓と伴に土師器等も出土しており、包含層との分離は困難である。そのため、鉄滓類の分布が非常に密な部分を廃滓場として認識し、廃滓場を含めた、土師器類が出土する部分を包含層と認識した。廃滓場と包含層は前述のとおり、鉄滓の出土量によるものであるため、完全に分離できるものではなく、一連の堆積過程で生じたものと捉えている。また、本来は1号工房跡や2号工房跡と重複していると考えられるが、削平や堆積土の流出により重複箇所が残存しておらず、新旧関係は不明と言わざるをえない。〔出土遺物〕土師器VP030・035・043～045・051・052・054・055・057、羽口VG021・022・024、鉄滓類等が出土している。〔帰属時期〕出土遺物や検出状況から古代に帰属すると考えられる。



第143図 2号工房跡

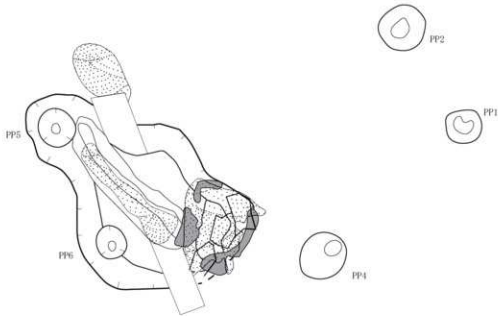
1号不明遺構



1. 103R2/1 黒色、砂質シルト、粘性なし、締まりなし、炭化物20～25%含む。
2. 55R1/6 赤褐色、締まり中。
3. 103R2/2 黒褐色、シルト、粘性なし、締まりなし、炭化物を含む。

第144図 1号不明遺構 (1)

1号不明遺構 (碳除去後・周辺の柱穴検出)



第145図 1号不明遺構 (2)、柱穴

(8) 不明遺構

1号不明遺構（第144・145図、写真図版54）

〔位置・検出状況〕 I B 15 i 付近、調査区南西側の比較的平坦面に位置し、Ⅲ層上面で花崗岩と炭化物が密集していることで確認した。〔規模・形状〕 276 × 179cmの不整形を呈する。〔埋土・堆積状況〕 2層に分層した。溝状に窪んだ部分では炭化物を含む黒褐色シルトが堆積し、大部分は黒色砂質シルトで埋没している。炭化物や礫の混入が見られ、人為堆積と考えられる。〔壁・底面〕 底面中央が溝状に窪んでおり、その周囲は比較的平坦である。壁は底面からならだかに立ち上がる。〔重複遺構〕 なし。〔出土遺物〕 鉄滓類等が出土している。〔帰属時期〕 時期の特定できる遺物が伴わず、帰属時期を判断することはできなかった。

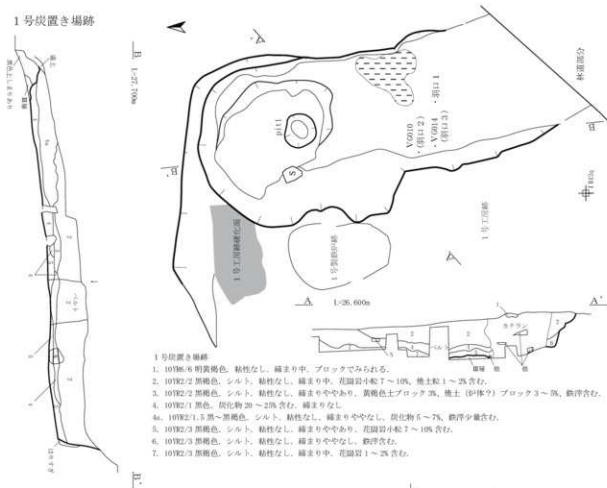
(9) 柱 穴（第145図）

柱穴は8個検出した。規模等は第134図中に表で示した。PP 7・8は古代に帰属すると考えられる柱穴で、4号焼土遺構周辺で検出した。2個とも黒褐色シルトを主体としている。検出位置から4号焼土遺構に伴う柱穴の可能性が想定される。PP 1～6は1号不明遺構に隣接して円形状に配置されるように検出された。堆積土は1号不明遺構と類似する黒色土主体としており、1号不明遺構に関連する柱穴の可能性が高い。帰属する時期は1号不明遺構と同様、特定には至らなかった。

(10) 包含層

調査区東側の中央部分、I B 11～13 l～q（林道より北側）で古代の遺物がまとめて出土しており、包含層として報告する。当初、1号・2号工房跡が確認された I B 12・13 n o p 付近は、堅穴建物跡や工房跡等の遺構が複数重複しているものと考えており、一連で堆積土の観察をできるよう、北東-南西ベルト（プランの長辺を通るベルト）とそれに直交するベルトをプラン毎に設定して、掘削を行った。また、I B 12・13 l m 付近でも不整形のプランがあり、遺構の存在を想定し、十字のベルトを設定して掘削を行った。しかし、遺物は出土するものの、明瞭な遺構が確認できないため、包含層として取り上げを行った。前者は北東-南西ベルトを挟んで、南側は東から西へ①～⑦、北側は東から西へ⑧～⑩の番号を付し、包含層出土遺物として、取り上げを行った。なお、⑩は遺構が重複していることが明らかであったため、EとWに細分して取り上げた。後者は東側②を、南側を③、北側を④、西側を⑤として取り上げを行った。遺物出土層位は①a層・②層・②層下で、Ⅱ層に対比可能な②層からの出土が多い。1号廃滓場と包含層の関係は、1号廃滓場でも記載したとおりである。出土した遺物のうち、土師器V P030・035・038・039・041～058、石鍬V S002～007・009、石匙V S012、スクレイパーV S014、石斧V S015、敲磨器類V S021、羽口V G023を掲載した。

1号炭置き場跡



2号炭置き場跡

2号炭置き場跡

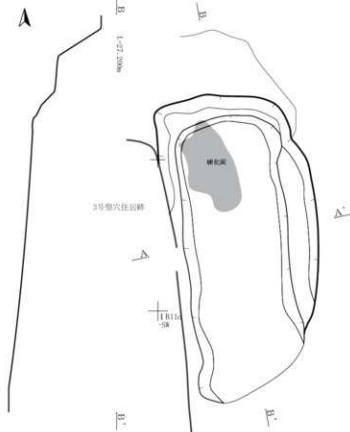
1:25,000



2号炭置き場跡

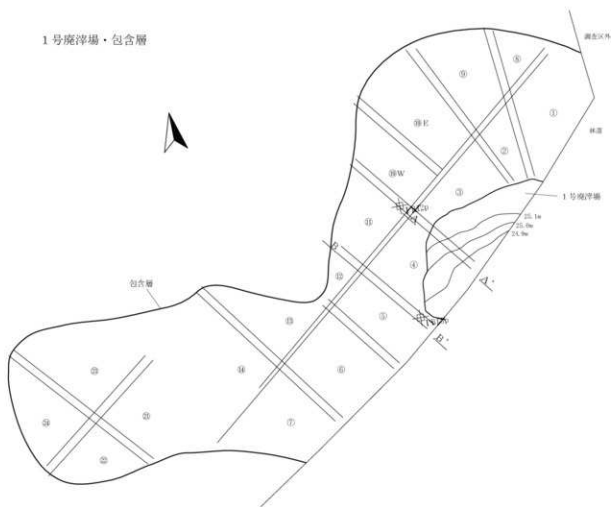
2. 1013-2 黒褐色、砂、粘性なし、締まりややなし、灰白色砂ブロック3~5%、炭2~3%含む。
- 101W1.7/1 黒、炭化物主体の層、3cm~5cmのものが多い。
- 101W3-2~3 黒褐色~暗褐色、砂質シルト層、花崗岩小粒2~3%。
- 101W2-1 黒色、粘性なし、締まり中~ややなし、炭化物主体の層。
- 101W5-6 黄褐色、シルト、粘性なし、締まりややあり、黒褐色しみ状にみられる。
- 101W3-3 暗褐色、シルト、粘性なし、締まりややあり、黒褐色土10~15%、花崗岩粒15~20%含む。

0 1:50 2m



第146図 1・2号炭置き場跡

1号廃洋場・包含層



廃洋場 A

①a層 10YR3/1～2/2 黒褐色。シルト、粘性なし。締まり中～ややあり。羽口片、鉄滓・砂礫ブロック多量含む。

②層 10YR2/1～2/2 黒～黒褐色。シルト、粘性なし。締まり中、砂礫ブロック 2～3%、花崗岩粒 2～3% 含む。(II層)

②層下、10YR2/2～2/3 黒褐色。シルト、粘性ややなし。締まり中～ややなし。暗褐色ブロック 10～15%、遺物少量含む。

包含層 B

①a層 10YR3/1～2/2 黒褐色。シルト、粘性なし。締まり中～ややなし。花崗岩粒 7～10% 含む。鉄滓ほとんど含まない。

②層 A の②と似るが 10YR2/2 が強い。土砂片含む。

V層 10YR3/4～4/4 暗褐色～褐色。シルト、粘性なし。締まりややあり。花崗岩を多く含む。場所によっては人頭大の礫含む。

①～②、⑤～⑥には、本層の上にもみられる厚いIV層土や薄いIV層が確認できない。そのため、II層もしくはII層底面の②層の下に本層が確認できる。(工区-S101の北半では、花崗岩底面の砂層がみられ、本層を確認するにはいたらなかった。)

VI層 10YR2/3 黒褐色。シルト、粘性なし。締まりややあり。こぶし大の礫含む。花崗岩粒はV層より多い。V層と比べると暗い色調。

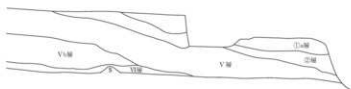
VI層 10YR4/6～5/6 褐色～黄褐色。シルト、粘性なし。締まりあり。

—A— L=25,300m



A'

—B— L=26,000m



B'

(平面図) 0 1:100 4m

(断面図) 0 1:50 2m

第 147 図 廃洋場・包含層

3 遺 物

(1) 縄文～弥生土器 (第148・149図、写真図版109)

大コンテナ (32×42×30cm) 約1箱 (接合前) 出土した。縄文時代中期後葉がほとんどを占める。大木8b式を中心にその前後を含むのは、岡木戸Ⅱ遺跡と同様であるが、大木8a-1式以前は出土していないようである。当該期以外では、弥生時代後期の土器が出土している (VP018、VP020、VP029)。観察表の“→”は調整順序を示し、矢印左側の方が前で、右側が後である。

(金子 昭彦)

(2) 土師器・須恵器 (第150～152図、写真図版110・111)

土師器・須恵器は、出土遺物のうち、遺構出土資料を優先して掲載した。遺構出土資料の中では、遺構の時期決定が可能な出土状況のもので、かつ図化が可能なものを優先した。また、岡木戸V遺跡の製鉄関連遺構の性格や時期を検討するため、別に丸数字の区画を設定して取り上げた包含層出土資料に関しても、可能な限り掲載した。VP001～VP028はすべて土師器である。須恵器は3号竪穴建物跡の埋土から小片が1点出土したのみである。小片のため図化できなかった。出土総量は、土師器が27,539.3g、須恵器が6gである。

1) 3号竪穴建物跡 (VP001～VP009) 総量土師器 3,863.5g、須恵器 6g

VP001・VP002は床面直上から出土したもの。

VP001は壺の口縁部から肩部である。内外面ともにハケ後ミガキである。

VP002は坏の口縁部から底部である。外面はハケ後ミガキ、内面はミガキで内面黒色処理である。

VP003・VP004は埋土最下層から出土したもの。

VP003・VP004は坏の口縁部から底部である。VP003は外面がハケ後ミガキ、内面はミガキで黒色処理である。VP004は外面がハケ後ミガキ、内面はヘラナデ後ミガキで黒色処理である。口縁部の上面観が一部で波状に見えることから、花卉状口縁の可能性もある。

VP005・VP006は壁際の三角堆積から出土したもの。

VP005は壺の口縁部から肩部である。外面はミガキ、内面はハケ後ミガキである。口唇部は摘み上げている。

VP006は壺である。外面はミガキ、内面はハケ後ミガキである。

VP007・VP009は埋土下位から出土したもの。

VP007は坏の口縁部から底部である。外面はハケ後ミガキ、内面はミガキで黒色処理である。

VP009は壺の口縁部から肩部である。肩部は段になる。内外面ともにミガキである。内面のミガキは幅の広いものである。

VP008は埋土上位から出土したもの。

VP008は有段の坏の口縁から底部である。段は2段で、内面は輪済みと一致する。ミガキにより沈線状に見える。底部は角に厚みのある平底である。内外面ともにミガキで内面黒色処理である。

2) 2号工房跡 (VP010) 土師器62.1g

VP010は2号工房跡の下から出土したもの。遺構に直接伴う資料ではなく、包含層出土資料であ

る。しかし、遺構の上限を示す可能性があり、かつ類例が少ないため掲載した。

VP010は赤彩壺の口縁部の小破片である。赤彩は縦の直線状に口縁部の内外面に施文する。内外面ともにヨコナデである。

3) 3号焼土遺構 (VP011) 総量土師器116.7g

VP011は3号焼土遺構から出土したもの。

VP011は壺の口縁部から胴部である。内外面ともにハケである。

4) 包含層 (VP012～VP029) 総量土師器22,409.1g

VP012～VP017は甕である。VP012～VP015は口縁部から胴部。VP012は口縁部が受け口状に内湾する。内外面ともにハケ後ミガキである。VP013は肩部が段になる。外面がハケ後ミガキ、内面はハケである。外面のミガキは線状の痕跡に見える。VP014は外面がハケ、内面はハケで、頸部のみその後ナデである。VP015は内外面ともにハケである。VP016・VP017は胴部から底部。VP016の外面はハケ後ミガキ、内面はハケである。VP017は内外面ともにハケである。

VP018は甕である。肩部は段になる。内外面ともにハケ後ミガキである。

VP019～VP023は壺である。VP019は口縁部から肩部と胴部から底部の同一個体。内外面ともにミガキである。VP020は口縁部から胴部。内外面ともにハケ後ミガキである。VP021は肩部から胴部。外面はミガキ、内面はヘラナデ後ミガキである。VP022は胴部。内外面ともにハケ後ミガキである。VP023は大型の底部。内外面ともにミガキである。VP024は四脚付きの小型壺である。底部外面はやや丸みがあり、そこに丸みのある脚がつく。外面はミガキ、内面はナデ後ミガキである。

VP025～VP029は坏である。VP025～VP027・VP029は有段のもの。VP025は口縁部から胴部。段は1段で、内面の段も明瞭で、輪積みと一致する。口縁はやや内湾する。内外面ともにミガキである。VP026は碗形の口縁部から底部。段は沈線で表現するもので、2条あり、輪積みと一致しない。VP027は口縁部から底部。段は1段で、輪積みと一致する。内外面ともにミガキである。VP028は底部。内外面ともにミガキである。VP029は口縁部から胴部。段は1段で、輪積みと一致する。

(佐藤 剛)

(3) 土 製 品 (第154図、写真図版110・113)

紡錘車が2点出土し、全点を図化した。いずれも遺構外からの出土で欠損部が目立つ。ミガキ調整は認められない。

(佐藤 あゆみ)

(4) 石 器 (第153図、写真図版112)

本調査で出土した石器は、前述した間木戸Ⅱ遺跡の分類になら以下記に記載する。

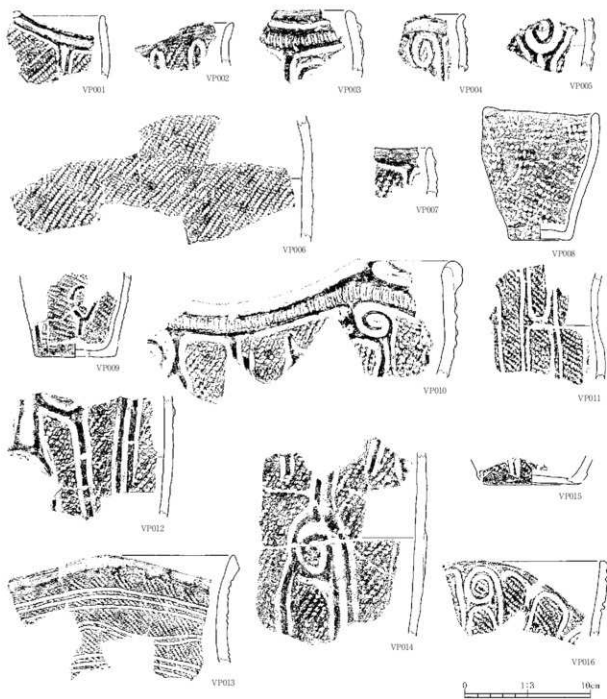
石鏃

11点出土。7点を図化と写真掲載をした。

1a類は、VS001、VS002、VS004、VS005、VS008、VS009、VS011である。VS005はアスファルト様の黒色物が付着する。

1b類は、VS003、VS006、VS010である。VS006は厚みがあり石鏃の可能性もある。

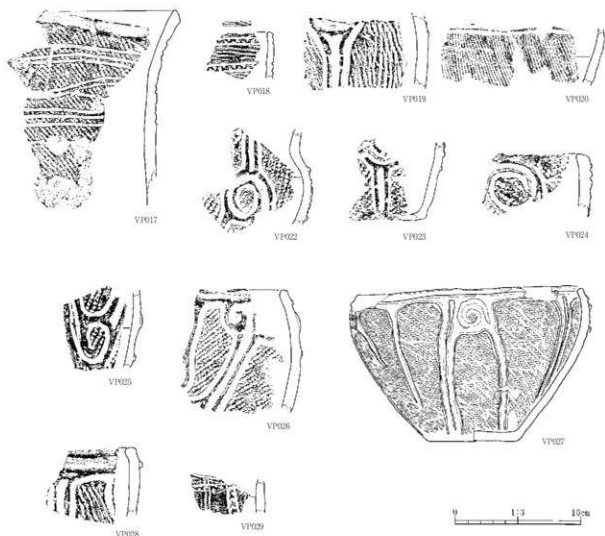
2類は、VS007のみである。



第148図 縄文～弥生土器(1)

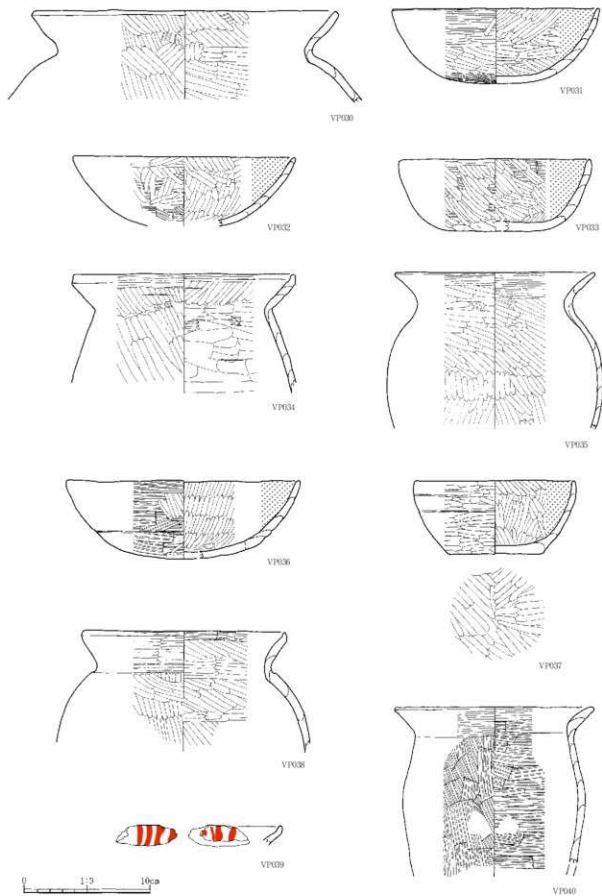
第13表 間木戸V遺跡縄文～弥生土器観察表

観測No.	出土地点・方位	器種・部位	内面	外面	備考	土器 志数	出	写真
VP001	3号壺の口縁部 SW 14 W/E-6/5	漆跡・口縁部	紅・タテ→横帯に点ナナデ	ナデ光沢			148	109
VP002	3号壺の口縁部 E-6/5	漆跡・口縁部	紅・タテ→点の点線	ナデ			148	108
VP003	3号壺の口縁部 NE	漆跡・口縁部	黒い縦目帯・漆帯に点ナナデ	ナデ			148	109
VP004	3号壺の口縁部 NE	漆跡・口縁部	紅・タテ→漆帯に点ナナデ	ナデ光沢			148	109
VP005	3号壺の口縁部 NE	漆跡・口縁部	漆帯に点ナナデ	ナデ	横筋の点線		148	109
VP006	1号長頸瓶の胴部・2号土器の口縁部・縄文レンガ1-2間、3号	漆跡・胴部 (1号用未測)	紅・タテ	ナデ	横筋の点線		148	109
VP007	2号土器	漆跡・口縁部	紅点ナナデ→漆帯に点ナナデ	ナデ			148	109
VP008	縄文レンガ1-2間	小型鉢(輪文型)	1.8.タテ・ナナメ/横筋ナデ	ナデ	再入火、二次焼成・内ナナデ		148	109
VP009	縄文レンガ1-2間	小型鉢(1.3号用未測)	1.8.タテ→横筋に点の点線/点線/横筋/点線	ナデ	再焼成の跡、内面ナナデ		148	109
VP010	1.7.縄文レンガ3号	漆跡・口縁部(1.4号用未測)	紅点ナナデ→漆帯に点ナナデ	ナデ	横筋の点線		148	109
VP011	縄文レンガ3-4間	漆跡・胴部	紅点ナナデ→漆帯に点ナナデ	ナデ			148	109
VP012	縄文レンガ3-4間	漆跡・胴部	紅点ナナデ→漆帯に点ナナデ	ナデ	横筋の点線・内面横筋に点の点線		148	109
VP013	縄文レンガ3-4間	漆跡・胴部	1.8.タテ→漆の点線	ナデ	内面全面ナナデ		148	109
VP014	縄文レンガ3-4間	漆跡(1.3号用未測)	1.8.タテ→点の点線/横筋ナデ	ナデ			148	109
VP015	縄文レンガ3-4間	漆跡・口縁部	1.8.タテ→点の点線/点線	ナデ	再焼成の跡		148	109
VP016	縄文レンガ3-4間、1.6号	漆跡(1.4号用未測)	1.8.タテ→点の点線	ナデ	再焼成の跡、横筋(1.7号用未測)		148	109

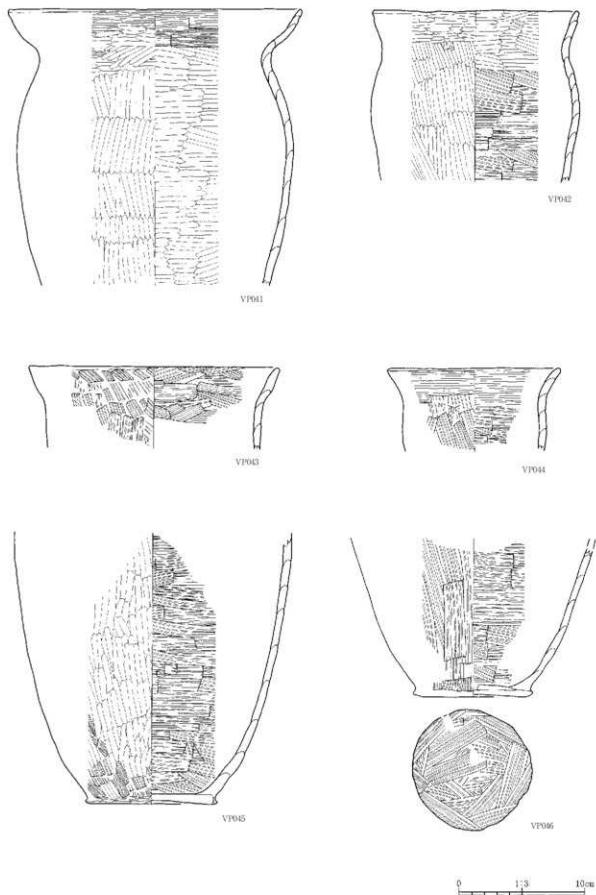


第 149 図 縄文~弥生土器 (2)

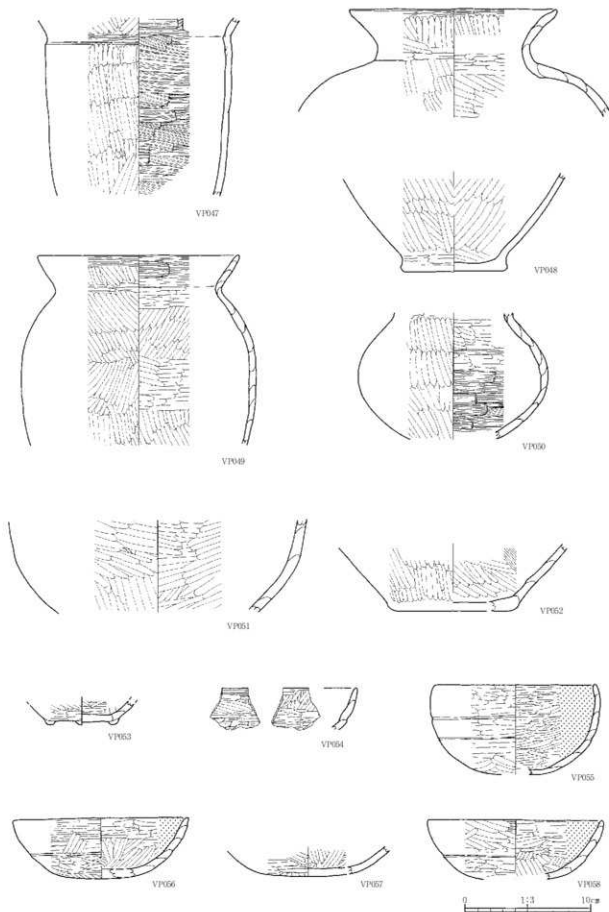
図録No.	出土地点・層位	器種・部位	内 面 (口縁部・胴部・底面・流注、縄文並存など)	外 面 (調整など)	備 考	本文 記載	出 典	写真
VP017	縄文レンヂコ-群, 50w	漆鉢・口・胴部	LRナナメ→浅い沈線	ナナメ	器と同一個体?		149	100
VP018	図12 m	漆鉢・口縁部	口縁部, ナナメ/流注, ナナメ, 浅い沈線・下からの交互斜交文	ナナメ			149	100
VP019	遺物の中心	流注	流注線1 部) ナナメ→流注に沿うナナメ	ナナメ	上の腹の口, 粘土接合面跡		149	100
VP020	遺物の中心	底・口	漆鉢・口縁部?	流注, ナナメ→腹面直直	ナナメ		149	100
VP021	遺物の中心	口	漆鉢・口縁部		口に接合			
VP022	遺物の中心	口, 口	漆・胴部	LRナナメ→流注に沿う浅い沈線	ナナメ流注		149	100
VP023	遺物の中心	口, 口上(口)	漆・胴部	LRナナメ→流注に沿うナナメ	ナナメ流注	外底研削による調整?	149	100
VP024	遺物の中心	口	漆鉢・口縁部	LRナナメ→太さの沈線	ナナメ	外底スリ目帯	149	100
VP025	遺物の中心	口	漆・胴部	LRナナメ→流注に沿うナナメ	ナナメ	内ス入, 内コナメ	149	100
VP026	遺物の中心	図14レンヂコ-群	漆鉢・口縁部	LRナナメ→流注に沿う浅い沈線	ナナメ丁寧		149	100
VP027	1号塚出土部	流注(一部欠損)	漆鉢(一部欠損)	LRナナメ→流注に沿う浅い沈線・流注に調整/流注ナナメ	ナナメ		149	100
VP028	図11 - 12 p-e	漆鉢・口縁部	内面調整/ LRナナメ→流注に沿う沈線	ナナメ			149	100
VP029	図13 m-a	漆鉢・胴部	流注, ナナメ・交互斜交	ナナメ			149	100



第150図 土師器(1)



第 151 図 土師器 (2)



第152図 土師器(3)

石匙

1点出土。図化と写真掲載をした。

横型の頁岩製石匙である。つまみ部は両面調整、刃部は欠損している。

スクレイパー

2点出土。1点図化と写真掲載をした。

いずれも、2類の削器と考えられる。VS013は、両辺に連続的な刃部を作り出している。

石斧

1点出土。図化と写真掲載をした。

VS015は花崗閃緑岩の磨製石斧である。稜線が認められ、刃部は欠損している。

敲磨器

8点出土。1点図化と写真掲載をし、1点を写真掲載のみとした。

VS020は、掌におさまる円盤で下面が平坦になる。下面には敲打痕、裏面には黒色物の付着が認められる。

台石

2点出土。観察表の記載のみとした。

(佐藤 あゆみ)

(5) 鉄 製 品

4点出土して、3点を図化した。VG003は、鉄族の頸部のみで、1号製鉄炉の炉面から出土した。VG004は楔状鉄製品で近代のものと思われる。VG006は蕨手刀の座金部である。VG005はVG003と同じ3号型穴建物跡から出土した鉄製品で刀片と思われる。(詳細は後述のVII総括)

(佐藤 あゆみ)

(6) 羽 口

中コンテナ1箱出土し、3点を図化と写真掲載をし、15点を写真掲載のみとした。全体的に欠損が多く、掲載基準は、外・内径の測定が可能か否か、羽口の制作手法が観察出来るもので判断している。内径の平均値は約3.3cm、外径は8.1cmであった。外径の大きさはその残存部によっても違いがあるが、内径については、概ね3～4cmほどに統一されている。装着部は鉄滓の付着が著しいが、VG009のように、羽口が溶解して滓化しているのも見受けられた。輪側の末端部は滓の付着は認められず、ヘラ状工具痕や指の圧痕と思われる凹部、内面には芯棒の痕跡が観察された。なお、前述の通り出土資料は欠損部が多かったため、装着角度の算出は統計として特徴を数字的に示すことが不可能であると判断し計測は行っていない。

(佐藤 あゆみ)

(7) 炉 壁

中コンテナ2箱出土し、5点を写真掲載のみとした。羽口同様に、全体の形状が分かる資料が少ない。VG025・VG026は、炉壁の芯棒痕と思われる痕跡が認められる。これは木舞孔と呼ばれるものと考えられる。炉体を構築する際に木舞を造りそこに材料である粘土を貼り付けていった痕跡と思われる。表面は、指の圧痕と思われる凸凹が認められる。当初は、通風口と考えたが、滓の付着部や炉壁の角の位置等から通風口では装着角度が不釣り合いと認識したものである。

炉壁の特徴は、分類中に外観を観察した内容を下記に列記する。

・1号炭置き場出土炉壁

2～5cmに砕けたものがほとんど。10YR8/6黄橙色のものは軟質で、ササ少なめ。10YR5/1褐灰色のものは、軽い。5YR6/8橙色のものは、鉄滓の付着が目立つ。いずれも細礫を多く含んでいた。熱の伝わりが場所によって違うからだろうか。

・1号工房跡出土炉壁

7.5YR8/8黄橙色のものは軟質で、ササ少なめ。5YR7/8橙色のものは1号炭置き場跡より多く見られササが混じる。

・2号工房跡出土炉壁

炉1からは、10YR5/1褐灰色のものが目立つ。1号工房跡下として取り上げている物に5YR6/8橙色で鉄滓の付着が顕著な物多い。

・排滓場から出土した炉壁

10YR6/2灰黄褐色で脆いものが多い。

5YR6/8橙色で鉄滓の付着が顕著な物は、炉の下部に使用された炉壁と考えられる。粘土質でササの混じりが少なく、補強の役目で貼られたものであろうか。

(図録 あり)

(8) 鉄 滓 類

鉄滓は、鉄原料となる砂鉄の中に含まれる不純物が高温で熱せられることで熔融し、排出したもので、工房跡や廃滓場から出土している。分類については、遺跡間でのデータ比較を有効なものとするために、同じ機器で行うことが望まれるが、当センターで使用してきたメタルチェッカー（MR-50B）がほとんど使用できない状態であるため、今回の分類では金属探知機「下地センサーEX（シンワ測定株式会社製）」と強力磁石「ハンドマグネット着脱式A-2（シンワ測定株式会社製）」を使用した。今回の調査では鍛冶炉が検出されていないことと、椀形滓や鍛造剥片、粒状滓等鍛冶に伴う鉄滓が見られないことから、製鉄に関係する鉄滓と判断して、分類を行っている。鉄滓の分類は、まず、強力磁石を使用した磁着の有無を検査し、磁着した鉄滓を磁着遺物としてさらに金属探知機を使用した検査を行った。磁着のしない鉄滓は非磁着遺物（鉄滓C）とした。金属探知機を使用した検査は、反応により鉄塊系遺物、含鉄（大）遺物（鉄滓A）、含鉄（小）遺物（鉄滓A'）、磁化遺物（鉄滓B）とした。これらを色調や形状により以下のように分類した。

鉄塊系遺物

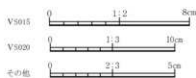
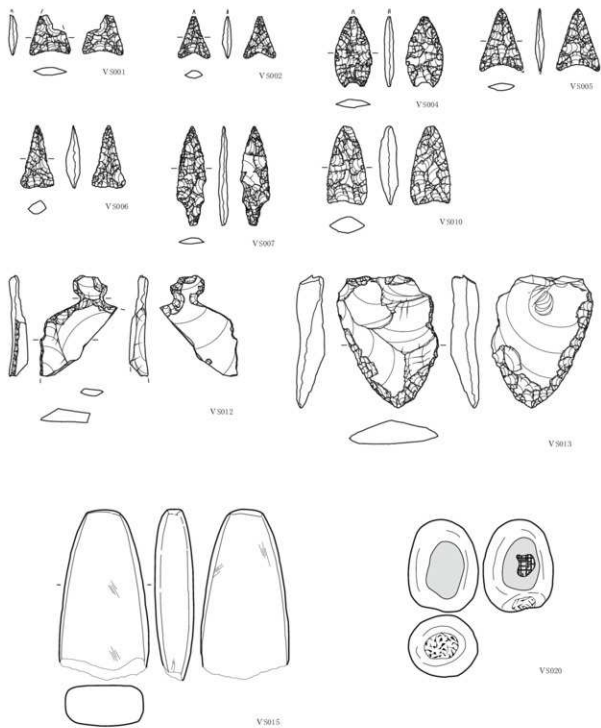
表面は錆等によりデコボコしており、色調は赤褐色を呈する。鉄が多く残留し、磁着性が強く、金属探知機で緑色のランプが連続点灯するほどに非常に強く反応する。

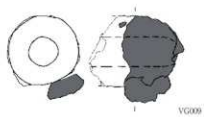
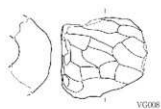
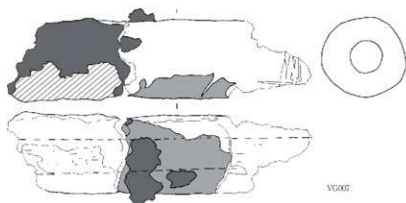
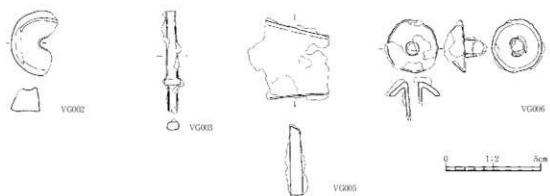
流出滓A 1類

炉外へ流れ出た鉄滓が急速に冷えて固まった流動状の滓で、表面は平滑で、流れた痕跡が認められる。色調は青黒色や青灰色を呈する。磁着性が強く、金属探知機での反応は、緑色のランプが点灯したり、赤色から緑色のランプの間を行き来したりする反応を示す。

流出滓A' 1類

炉外へ流れ出た鉄滓が急速に冷えて固まった流動状の滓で、表面は平滑で、流れた痕跡が認められる。色調は青黒色や青灰色を呈する。磁着性が強いが、金属探知機にはかすかに反応し、赤ランプが1つ点灯する程度である。





第154図 土製品、鉄製品、羽口、炉壁

流出滓B1類

炉外へ流れ出た鉄滓が急速に冷えて固まった流動状の滓で、表面は平滑で、流れた痕跡が認められる。色調は青黒色や青灰色を呈する。磁着性が強いが、金属探知機には反応しない。

流出滓C1類

炉外へ流れ出た鉄滓が急速に冷えて固まった流動状の滓で、表面は平滑で、流れた痕跡が認められる。色調は青黒色や青灰色を呈する。磁着性がなく、金属探知機にも反応しない。

炉内滓A2類

炉内に生成された滓全般である。表面は気泡が弾けたようにデコボコした状態を呈しているものや、燃料の木炭等が食い込んだ状態のもの等がある。色調は全体的に赤褐色を呈する。磁着性が強く、金属探知機での反応は、緑色のランプが点灯したり、赤色から緑色のランプの間を行き来したりする反応を示す。

炉内滓A2'類

炉内に生成された滓全般である。表面は気泡が弾けたようにデコボコした状態を呈しているものや、燃料の木炭等が食い込んだ状態のもの等がある。色調は青黒色を呈する。磁着性が強く、金属探知機での反応は、緑色のランプが点灯したり、赤色から緑色のランプの間を行き来したりする反応を示す。

炉内滓A'2類

炉内に生成された滓全般である。表面は気泡が弾けたようにデコボコした状態を呈しているものや、燃料の木炭等が食い込んだ状態のもの等がある。色調は全体的に赤褐色を呈する。磁着性が強いが、金属探知機にはかすかに反応し、赤ランプが1つ点灯する程度である。

炉内滓A'2'類

炉内に生成された滓全般である。表面は気泡が弾けたようにデコボコした状態を呈しているものや、燃料の木炭等が食い込んだ状態のもの等がある。色調は青黒色を呈する。磁着性が強いが、金属探知機にはかすかに反応し、赤ランプが1つ点灯する程度である。

炉内滓B2類

炉内に生成された滓全般である。表面は気泡が弾けたようにデコボコした状態を呈しているものや、燃料の木炭等が食い込んだ状態のもの等がある。色調は全体的に赤褐色を呈する。磁着性が強いが、金属探知機には反応しない。

炉内滓B2'類

炉内に生成された滓全般である。表面は気泡が弾けたようにデコボコした状態を呈しているものや、燃料の木炭等が食い込んだ状態のもの等がある。色調は青黒色を呈する。磁着性が強いが、金属探知機には反応しない。

炉内滓C2類

炉内に生成された滓全般である。表面は気泡が弾けたようにデコボコした状態を呈しているものや、燃料の木炭等が食い込んだ状態のもの等がある。色調は全体的に赤褐色を呈する。磁着性がなく、金属探知機にも反応しない。

炉内滓C2'類

炉内に生成された滓全般である。表面は気泡が弾けたようにデコボコした状態を呈しているものや、燃料の木炭等が食い込んだ状態のもの等がある。色調は全体的に赤褐色を呈する。磁着性がなく、金属探知機にも反応しない。

炉底滓A3類

製鉄炉の炉底に生成された滓で、裏面に青灰色の砂が付着している。表面は平滑で青黒色を呈するものと、デコボコしており赤褐色を呈するものがある。工具で掻いたような痕跡が見られるものもある。磁着性が強いが、金属探知機にはかすかに反応し、赤ランプが1つ点灯する程度である。

炉底滓A' 3類

製鉄炉の炉底に生成された滓で、裏面に青灰色の砂が付着している。表面は平滑で青黒色を呈するものと、デコボコしており赤褐色を呈するものがある。磁着性が強いが、金属探知機にはかすかに反応し、赤ランプが1つ点灯する程度である。

炉底滓B 3類

製鉄炉の炉底に生成された滓で、裏面に青灰色の砂が付着している。表面は平滑で青黒色を呈するものと、デコボコしており赤褐色を呈するものがある。磁着性が強いが、金属探知機には反応しない。

炉底滓C 3類

製鉄炉の炉底に生成された滓で、裏面に青灰色の砂が付着している。表面は平滑で青黒色を呈するものと、デコボコしており赤褐色を呈するものがある。工具で掻いたような痕跡が見られるものもある。磁着性がなく、金属探知機にも反応しない。

炉壁付着滓A 4類

炉壁が付着した滓である。磁着性が強いが、金属探知機にはかすかに反応し、赤ランプが1つ点灯する程度である。

炉壁付着滓A' 4類

炉壁が付着した滓である。磁着性が強いが、金属探知機にはかすかに反応し、赤ランプが1つ点灯する程度である。

炉壁付着滓B 4類

炉壁が付着した滓である。磁着性が強いが、金属探知機には反応しない。

炉壁付着滓C 4類

炉壁が付着した滓である。磁着性がなく、金属探知機にも反応しない。

第14表 鉄滓出土量一覧(1)

	鉄塊系 遺物	流出滓				炉内滓				
		A1	A' 1	B1	C1	A2	A' 2	A' 2	A' 2'	B2
3号堅穴建物跡	3601	38.7	0.0	21.3	11653.0	909.9	0.0	154.1	0.0	29.4
	1.8	0.2	0.0	0.1	58.9	4.6	0.0	0.8	0.0	0.1
3号堅穴建物跡・ 2号炭置き場	0.0	0.0	85.0	0.0	6.7	0.0	0.0	12.7	0.0	0.0
	0.0	0.0	76.6	0.0	6.0	0.0	0.0	11.5	0.0	0.0
1号工房跡1号製鉄炉	0.0	0.0	0.0	0.0	2733.0	386.0	0.0	1589.0	20.2	166.9
	0.0	0.0	0.0	0.0	16.0	2.3	0.0	9.3	0.1	1.0
1号工房跡2号製鉄炉	0.0	0.0	104.1	0.0	598.0	1107.7	0.0	1488.5	63.4	239.8
	0.0	0.0	0.8	0.0	4.4	8.1	0.0	10.9	0.5	1.8
1号工房跡3号製鉄炉	0.0	0.0	0.0	0.0	213.8	0.0	0.0	132.9	0.0	13.7
	0.0	0.0	0.0	0.0	46.6	0.0	0.0	28.9	0.0	3.0
1号工房跡製鉄炉以外	0.0	0.0	16.9	20.3	7736.2	799.4	54.9	2108.0	67.6	590.3
	0.0	0.0	0.1	0.1	33.1	3.4	0.2	9.0	0.3	2.5
2号工房跡4号製鉄炉	0.0	0.0	7.1	1.7	3803.5	112.4	92.9	842.0	12.2	354.6
	0.0	0.0	0.1	0.0	29.5	0.9	0.7	6.5	0.1	2.7
2号工房跡5号製鉄炉	0.0	0.0	54.2	4.2	2847.9	56.9	0.0	156.4	0.0	44.9
	0.0	0.0	1.5	0.1	79.6	1.6	0.0	4.4	0.0	1.3
2号工房跡製鉄炉以外	0.0	0.0	2377.0	472.7	21292.6	1864.7	91.1	2774.3	158.2	2130.0
	0.0	0.0	4.3	0.9	39.0	3.4	0.2	5.1	0.3	3.9
1号炭置き場跡	0.0	0.0	415.8	78.4	35083.6	6603.8	260.8	2785.9	1297.5	323.3
	0.0	0.0	0.7	0.1	57.1	10.8	0.4	4.5	2.1	0.5
2号炭置き場跡	0.0	0.0	0.0	67.1	284.7	2116.4	0.0	115.5	0.0	48.0
	0.0	0.0	0.0	1.8	7.5	55.5	0.0	3.0	0.0	1.3
1号塵置場	0.0	0.0	2614.9	109.8	184100.5	4900.4	17.3	3352.4	274.5	1426.7
	0.0	0.0	1.1	0.0	80.9	2.2	0.0	1.5	0.1	0.6
包含層①～③	0.0	180.8	156.9	0.0	38238.1	963.7	7.4	893.8	60.3	104.0
	0.0	0.4	0.4	0.0	86.0	2.2	0.0	2.0	0.1	0.2
包含層④～⑥	0.0	0.0	0.0	0.0	184.5	36.1	0.0	0.0	0.0	0.0
	0.0	0.0	0.0	0.0	83.6	16.4	0.0	0.0	0.0	0.0
1号土坑	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	3.6	0.0	28.0	0.0	17.2
	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	7.4	0.0	57.4	0.0	35.2
2号土坑	0.0	0.0	0.0	0.0	73.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
4号土坑	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	85.2	0.0	172.7	0.0	16.9
	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	18.5	0.0	37.4	0.0	3.7
5号土坑	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	18.6	0.0	10.4	0.0	0.0
	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	16.5	0.0	9.2	0.0	0.0
2号焼土遺構	0.0	0.0	0.0	0.0	57.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
1号不明遺構	0.0	0.0	0.0	0.0	174.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	0.0	0.0	0.0	0.0	67.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
遺構外	0.0	85.4	533.4	20.9	43917.1	1416.7	0.0	1292.8	505.5	157.2
	0.0	0.2	1.0	0.0	85.3	2.8	0.0	2.5	1.0	0.3
排土一括	0.0	0.0	0.0	0.0	446.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
合計	3601	304.9	6365.3	796.4	353445.9	21381.5	524.4	17909.4	2459.4	5662.9
	0.1	0.1	1.2	0.1	65.9	4.0	0.1	3.3	0.5	1.1

上段：重量（g） 下段：遺構毎毎に占める鉄滓類の比率（％）

炉内滓			炉底滓				炉壁附着滓				重量合計
BZ'	C2	C2'	A3	A' 3	B3	C3	A4	A' 4	B4	C4	
0.0	1337.5	1649.7	0.0	19.6	0.0	3577.4	0.0	0.0	0.0	30.1	19780.8
0.0	6.8	8.3	0.0	0.1	0.0	18.1	0.0	0.0	0.0	0.2	100%
0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	6.5	0.0	0.0	0.0	0.0	110.9
0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	5.9	0.0	0.0	0.0	0.0	100%
1.8	1971.5	495.6	0.0	0.0	5.1	9651.8	0.0	0.0	0.0	11.7	17032.6
0.0	11.6	2.9	0.0	0.0	0.0	56.7	0.0	0.0	0.0	0.1	100%
16.4	2772.9	1776.7	0.0	0.0	0.0	2840.9	0.0	205.3	150.4	2283.3	13647.4
0.1	20.3	13.0	0.0	0.0	0.0	20.8	0.0	1.5	1.1	16.7	100%
0.0	31.3	39.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	27.8	459.1
0.0	6.8	8.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	6.1	100%
16.2	4595.0	1559.1	0.0	0.0	0.0	5295.2	144.9	282.3	0.0	87.3	23373.6
0.1	19.7	6.7	0.0	0.0	0.0	22.7	0.6	1.2	0.0	0.4	100%
9.9	3537.6	2962.2	0.0	0.0	0.0	1162.4	0.0	0.0	0.0	0.0	12898.5
0.1	27.4	23.0	0.0	0.0	0.0	9.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100%
1.1	363.9	47.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	3576.5
0.0	10.2	1.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100%
250.2	13143.4	2510.8	488.7	0.0	0.0	4298.7	8.0	889.7	33.8	1866.6	54650.5
0.5	24.0	4.6	0.9	0.0	0.0	7.9	0.0	1.6	0.1	3.4	100%
15.2	6399.6	768.8	0.0	0.0	0.0	5345.7	420.6	0.0	0.0	1610.7	61409.7
0.0	10.4	1.3	0.0	0.0	0.0	8.7	0.7	0.0	0.0	2.6	100%
0.0	18.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1163.0	3813.0
0.0	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	30.5	100%
70.6	11469.5	2266.8	835.8	5.6	1.9	6106.9	806.1	239.9	2403.7	6647.8	227651.1
0.0	5.0	1.0	0.4	0.0	0.0	2.7	0.4	0.1	1.1	2.9	100%
24.1	2057.7	914.2	0.0	0.0	0.0	606.1	0.0	0.0	3.6	245.5	44456.2
0.1	4.6	2.1	0.0	0.0	0.0	1.4	0.0	0.0	0.0	0.6	100%
0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	220.6
0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100%
0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	48.8
0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100%
0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	73.6
0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100%
0.0	186.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	461.4
0.0	40.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100%
0.0	83.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	112.5
0.0	74.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100%
0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	57.9
0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100%
0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	83.7	258.0
0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	32.4	100%
67.3	1120.5	355.6	181.1	35.3	0.0	1148.7	283.2	0.0	173.1	220.5	51514.3
0.1	2.2	0.7	0.4	0.1	0.0	2.2	0.5	0.0	0.3	0.4	100%
0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	446.9
0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100%
472.8	49088.8	15346.1	1505.6	60.5	7.0	40040.3	1662.8	1617.2	2764.6	14278.0	536053.9
0.1	9.2	2.9	0.3	0.0	0.0	7.5	0.3	0.3	0.5	2.7	100%

■は各遺構毎で最も比率の高い資料を示す

第14表 鉄滓出土量一覧(2)

	鉄塊系 遺物	流出洋				炉内洋				
		A1	A' 1	B1	C1	A2	A' 2	A' 2	A' 2	B2
1号工房跡	0.0	0.0	16.9	20.3	7736.2	799.4	54.9	2108.0	67.6	588.6
1号工房跡1号製鉄炉	0.0	0.0	0.0	0.0	2733.0	386.0	0.0	1589.0	20.2	166.9
1号工房跡2号製鉄炉	0.0	0.0	104.1	0.0	598.0	1107.7	0.0	1488.5	63.4	239.8
1号工房跡3号製鉄炉	0.0	0.0	0.0	0.0	213.8	0.0	0.0	132.9	0.0	13.7
1号工房跡 Pit1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.7
1号工房跡 合計	0.0	0.0	121.0	20.3	11281.0	2293.1	54.9	5318.4	151.2	1010.7
1号工房跡 重量比	0.0	0.0	0.2	0.0	20.7	4.2	0.1	9.8	0.3	1.9
2号工房跡	0.0	0.0	2377.0	472.7	21292.6	1864.7	91.1	2774.3	158.2	2130.0
2号工房跡4号製鉄炉	0.0	0.0	7.1	1.7	3803.5	112.4	92.9	842.0	12.2	354.6
2号工房跡5号製鉄炉	0.0	0.0	54.2	4.2	2847.9	56.9	0.0	156.4	0.0	44.9
2号工房跡 合計	0.0	0.0	2438.3	478.6	27944.0	2034.0	184.0	3772.7	170.4	2529.5
2号工房跡 重量比	0.0	0.0	3.4	0.7	39.3	2.9	0.3	5.3	0.2	3.6
1号廃洋場 ①b層	0.0	0.0	195.7	9.8	32720.4	1116.7	0.0	477.4	33.1	137.0
	0.0	0.0	0.5	0.0	78.0	2.7	0.0	1.1	0.1	0.3
1号廃洋場 ①b～②層上部	0.0	0.0	1390.7	25.4	9078.4	992.8	0.0	790.7	15.9	173.4
	0.0	0.0	7.3	0.1	47.6	5.2	0.0	4.1	0.1	0.9
1号廃洋場 ②層	0.0	0.0	573.3	68.2	74524.6	1829.0	0.0	978.9	90.8	948.8
	0.0	0.0	0.7	0.1	86.6	2.1	0.0	1.1	0.1	1.1
1号廃洋場 ①b～②層	0.0	0.0	389.8	3.7	45291.4	493.7	17.3	719.2	84.8	136.2
	0.0	0.0	0.7	0.0	83.1	0.9	0.0	1.3	0.2	0.2
1号廃洋場 ②層下	0.0	0.0	0.0	0.0	16117.2	6.8	0.0	149.8	0.0	31.3
	0.0	0.0	0.0	0.0	98.0	0.0	0.0	0.9	0.0	0.2
1号廃洋場 その他	0.0	0.0	65.4	2.7	6368.5	461.4	0.0	236.4	49.9	0.0
	0.0	0.0	0.7	0.0	66.0	4.8	0.0	2.5	0.5	0.0
1号廃洋場 合計	0.0	0.0	2614.9	109.8	184100.5	4900.4	17.3	3352.4	274.5	1426.7
1号廃洋場 重量比	0.0	0.0	1.1	0.0	80.9	2.2	0.0	1.5	0.1	0.6
包含層①～④ ①a層	0.0	0.0	27.9	0.0	1853.3	0.0	0.0	41.9	0.0	12.8
	0.0	0.0	1.4	0.0	93.2	0.0	0.0	2.1	0.0	0.6
包含層①～④ ①a～②層	0.0	180.8	129.0	0.0	34080.2	883.2	7.4	827.4	60.3	91.2
	0.0	0.5	0.3	0.0	86.5	2.2	0.0	2.1	0.2	0.2
包含層①～④ ②層	0.0	0.0	0.0	0.0	2304.6	80.5	0.0	24.5	0.0	0.0
	0.0	0.0	0.0	0.0	75.1	2.6	0.0	0.8	0.0	0.0
包含層①～④ 合計	0.0	180.8	156.9	0.0	38238.1	963.7	7.4	893.8	60.3	104.0
包含層①～④ 重量比	0.0	0.4	0.4	0.0	86.0	2.2	0.0	2.0	0.1	0.2

上段：重量（g） 下段：遺構等毎に占める鉄滓類の比率（％）

炉内滓			炉底滓				炉壁付着滓				重量 合計
B2'	C2	C2'	A3	A' 3	B3	C3	A4	A' 4	B4	C4	
16.2	4595.0	1559.1	0.0	0.0	0.0	5295.2	144.9	282.3	0.0	87.3	23371.9
1.8	1971.5	495.6	0.0	0.0	5.1	9651.8	0.0	0.0	0.0	11.7	17032.6
16.4	2772.9	1776.7	0.0	0.0	0.0	2840.9	0.0	205.3	150.4	2283.3	13647.4
0.0	31.3	39.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	27.8	45.1
0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.7
34.4	9370.7	3871.0	0.0	0.0	5.1	17787.9	144.9	487.6	150.4	2410.1	54512.7
0.1	17.2	7.1	0.0	0.0	0.0	32.6	0.3	0.9	0.3	4.4	100%
250.2	13143.4	2510.8	488.7	0.0	0.0	4298.7	8.0	889.7	33.8	1866.6	54650.5
9.9	3537.6	2962.2	0.0	0.0	0.0	1162.4	0.0	0.0	0.0	0.0	12898.5
1.1	363.9	47.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	3576.5
261.2	17044.9	5520.0	488.7	0.0	0.0	5461.1	8.0	889.7	33.8	1866.6	71125.5
0.4	24.0	7.8	0.7	0.0	0.0	7.7	0.0	1.3	0.0	2.6	100%
12.1	2116.1	197.5	810.6	0.0	0.0	2223.0	10.0	65.9	29.6	1774.0	41928.9
0.0	5.0	0.5	1.9	0.0	0.0	5.3	0.0	0.2	0.1	4.2	100%
12.2	3304.0	24.0	0.0	5.6	1.9	1715.3	559.9	0.0	0.0	972.2	19062.4
0.1	17.3	0.1	0.0	0.0	0.0	9.0	2.9	0.0	0.0	5.1	100%
38.8	2613.7	855.2	25.2	0.0	0.0	644.6	199.0	143.4	15.5	2506.3	86055.3
0.0	3.0	1.0	0.0	0.0	0.0	0.7	0.2	0.2	0.0	2.9	100%
4.6	2560.1	983.3	0.0	0.0	0.0	109.9	0.0	9.0	2358.6	1349.8	54511.4
0.0	4.7	1.8	0.0	0.0	0.0	0.2	0.0	0.0	4.3	2.5	100%
0.0	111.7	11.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	18.6	16446.4
0.0	0.7	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	100%
2.9	763.9	195.8	0.0	0.0	0.0	1414.1	37.2	21.6	0.0	26.9	9646.7
0.0	7.9	2.0	0.0	0.0	0.0	14.7	0.4	0.2	0.0	0.3	100%
70.6	11469.5	2266.8	835.8	5.6	1.9	6106.9	806.1	239.9	2403.7	6647.8	227651.1
0.0	5.0	1.0	0.4	0.0	0.0	2.7	0.4	0.1	1.1	2.9	100%
13.7	22.8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	3.6	12.9	1988.9
0.7	1.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.2	0.6	100%
10.4	1903.3	914.2	0.0	0.0	0.0	133.8	0.0	0.0	0.0	179.0	39400.2
0.0	4.8	2.3	0.0	0.0	0.0	0.3	0.0	0.0	0.0	0.5	100%
0.0	131.6	0.0	0.0	0.0	0.0	472.3	0.0	0.0	0.0	53.6	3067.1
0.0	4.3	0.0	0.0	0.0	0.0	15.4	0.0	0.0	0.0	1.7	100%
24.1	2057.7	914.2	0.0	0.0	0.0	606.1	0.0	0.0	3.6	245.5	44456.2
0.1	4.6	2.1	0.0	0.0	0.0	1.4	0.0	0.0	0.0	0.6	100%

■ は各遺構毎で最も比率の高い資料を示す

第15表 間木戸V遺跡土師器観察表

掲載No.	出土地点	器種	残存部位	残存率(%)	色調
VP030	3号壑穴建物跡 南西床直・南西埋土・T10一括・③南②層・④南北 トレンチ②層・⑤②層上～中位・⑤③トレンチ一括	壺	口縁～肩部	10	にぶい橙、褐灰
VP031	3号壑穴建物跡 南西床直・ベルト5層・北西埋土	坏	口縁～底部	30	にぶい黄橙
VP032	3号壑穴建物跡 北東埋土最下位・北東(2号戻置き地跡重複付近) 埋土中位	坏	口縁～底部	20	明黄褐
VP033	3号壑穴建物跡 北東埋土最下位・北東(SK04重複付近)埋土中位・ ベルト6層・北西埋土下位・北東埋土上～中位	坏	口縁～底部	70	にぶい黄橙
VP034	3号壑穴建物跡 ベルト5、7、8、13、14層・南西埋土	甕	口縁～肩部	5	にぶい黄橙
VP035	3号壑穴建物跡 10層・1号戻置き地跡4a～4層・T1南II層・③南 西トレンチ一括・③西②層・①b～②層・③西サブ トレンチ②層中～下位・④トレンチ②層・④ベルト ②層・排Aベルト②層	壺	口縁～胴部	20	にぶい橙、灰褐色
VP036	3号壑穴建物跡 ベルト(中央)8層・北東埋土・北西埋土	坏	口縁～底部	20	明黄褐
VP037	3号壑穴建物跡 ベルト5層・北東埋土	坏	口縁～底部	60	明褐
VP038	3号壑穴建物跡 北西埋土下位・⑤②層・生文課トレンチ埋め戻し土・ I B14 Ⅰ層・⑥②層下位	壺	口縁～肩部	17	明赤褐色、にぶい橙
VP039	③ ②層	壺	口縁	小破片	浅黄橙
VP040	3号焼土遺構 P1・P2・焼土層・Ⅱ層	甕	口縁～胴部	20	
VP041	④ ②層中～下位・②～Ⅲ層上位	甕	口縁～胴部	50 (非接合含)	灰黄褐
VP042	④ ②層中位・⑤②層上～中位・⑤③層上位	甕	口縁～胴部	25	灰黄褐
VP043	③ ②層・④②層上位・⑤・⑥間ベルト①a層・⑥②層 中～下位・⑥トレンチ②層	壺	口縁～肩部	5	にぶい黄橙
VP044	④ ②層上位	甕	口縁～肩部	5	褐灰
VP045	④ ②層・②層下・②層上位・⑥②層中～下位・⑦・⑧ 間ベルト②層上位・T1 1層	甕	胴部～底部	40 (非接合含)	にぶい褐
VP046	⑥ ②層・②層中～下位	甕	胴部～底部	25	褐灰、にぶい黄橙
VP047	⑥ ②層中～下位	甕	頸部～胴部	10	にぶい黄橙、灰黄褐
VP048	④ ②層中位・⑤②層上位	壺	口縁～肩部	30	にぶい黄橙、灰黄褐
VP049	⑥ ②層・②層中～下位・⑥・⑦間ベルト②層	壺	口縁～胴部	33	灰黄褐
VP050	④ ②層上面・I B13a Ⅲ～Ⅳ層	壺	肩～胴部	20	にぶい赤褐色、褐灰
VP051	④ ②層下・②層中位	壺	胴部	5	にぶい黄褐
VP052	④ ②層	壺	胴部～底部	5	にぶい黄橙
VP053	④ ②層上位	壺	底部	5	灰黄褐
VP054	③ ①b～②層	坏	口縁～胴部	小破片	にぶい黄橙
VP055	④ ②層下位・②層中～下位	坏	口縁～底部	40	灰黄褐、にぶい黄褐
VP056	⑥ ②層中～下位・⑥・⑦間ベルト②層	坏	口縁～底部	20	にぶい黄橙、灰黄褐
VP057	③ ②層・⑤②層下位・②層中～下位・⑤・⑥間ベルト ②層・⑥②層上位	坏	胴部～底部	20	にぶい黄橙
VP058	⑥ ①a～②層	坏	口縁～底部	40	にぶい橙

外面 (胴部、口縁部周辺)	調整技法		法量 (cm) (復元) (残存)			備考	図	写真
	内面 (同)	底部 (外面調整、特徴)	口径	底径	器高			
ハケ→ミガキ、ハケ→ミガキ	ハケ→ミガキ、ハケ→ミガキ	—	[243]	—	(7)		150	110
ハケ→ミガキ、ミガキ→ヨコナデ	ミガキ、黒色処理	ハケ、平底風丸底	[162]	—	5.9		150	110
ハケ→ミガキ、ハケ→ミガキ	ミガキ、黒色処理	ハケ、平底風丸底	[176]	—	5.4		150	110
ハケ→ミガキ、ハケ→ヨコナデ→ミガキ	ヘラナデ→ミガキ	ハケ、平底風丸底 (平坦)	15.2	—	5.8	花卉状口縁の可能性	150	110
ミガキ、ヨコナデ	ハケ→ミガキ、ヨコナデ	—	[174]	—	—	口唇積み上げ	150	110
ハケ→ミガキ、ハケ→ミガキ→ヨコナデ	ハケ→ミガキ、ハケ→ヨコナデ	—	[156]	—	(12.5)		150	110
ハケ→ミガキ、ハケ→ミガキ→ヨコナデ	ミガキ、黒色処理	ケズリ、平底風丸底	[184]	—	6.2		150	110
ミガキ、ミガキ	ミガキ、黒色処理	ケズリ→ミガキ、厚角平底	[128]	—	5.8	沈線状段2段	150	110
ミガキ、ヨコナデ→ミガキ→ヨコナデ (口唇)	ミガキ (幅広)、ミガキ→ヨコナデ	—	[162]	—	(9.5)	口唇積み上げ 唇部段赤色意識の可能性	150	110
ヨコナデ、赤彩 (縦線)	ヨコナデ、赤彩 (縦線)	—	—	—	(1.7)	口唇積み上げ 縦線3本単位の可能性	150	110
ハケ	ハケ、ハケ→ヨコナデ	—	[156]	—	(13.3)		150	110
ハケ→ミガキ、ハケ→ヨコナデ→ミガキ	ハケ→ミガキ、ミガキ→ヨコナデ	—	[231]	—	(21.8)	受け口状	151	111
ハケ→ミガキ (線状)、ヨコナデ	ハケ、ハケ→ミガキ	—	[16]	—	(13.4)	唇部段 (輪積み一致)	151	111
ハケ、ハケ→ヨコナデ (胴部)	ハケ	—	[198]	—	(6.5)		151	111
ハケ、ヨコナデ	ハケ、ハケ→ヨコナデ	—	[136]	—	(6.5)	小壘	151	111
ハケ→ミガキ	ハケ	木葉痕	—	10.4	(21.5)		151	111
ハケ	ハケ	ハケ	—	9.4	(12.5)	底部外面ハケ	151	111
ハケ→ミガキ、ヨコナデ→ミガキ	ナデ→ハケ、ハケ→ヨコナデ	—	—	—	(14.2)	唇部段	152	110
ミガキ、ヨコナデ (口唇)→ミガキ	ミガキ、ヨコナデ (口唇)→ミガキ	木葉痕	[161]	8.5	(8.6) + (7.9)	口唇積み上げ	152	111
ハケ→ミガキ、ハケ→ミガキ→ヨコナデ	ハケ→ミガキ、ヨコナデ	—	15.8	—	(15.1)		152	110
ミガキ	ヘラナデ→ミガキ	—	—	—	(10)	赤色意識の可能性	152	111
ハケ→ミガキ	ハケ→ミガキ	—	—	—	(7.3)		152	111
ミガキ	ナデ→ミガキ	砂痕の可能性	—	[103]	(5.3)		152	111
ミガキ	ミガキ	四脚付き 丸底	—	—	(2)	四脚付小形壺 (小壺の可能性)	152	111
ヨコナデ→ミガキ	ミガキ	—	—	—	(3.5)	有段1段 (輪積み一致、内面段明瞭)	152	111
ミガキ、ハケ→ミガキ	ミガキ、黒色処理	ケズリ、平底風丸底	[128]	—	7.1	沈線状段2段 (輪積み一致)	152	111
ハケ→ミガキ、ヨコナデ	ミガキ、黒色処理	ハケ、平底風丸底	[138]	—	4.8	有段1段 (輪積み一致) 内面ハジケ	152	111
ミガキ	ミガキ、黒色処理	ハケ、平底風丸底 (平坦)	—	—	—		152	111
ミガキ、ヨコナデ→ミガキ	ミガキ、黒色処理	ケズリ、平底風丸底 (丸底)	14	—	4.7	有段1段	152	111

第 16 表 間木戸V遺跡土製品観察表

掲載番号	取番号	出土地点	層位	分類	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	備考	図	号
VG001	V-特01	T1 深掘(南)	II層	紡錘車	(3.7)	(3.1)	(0.9)	8.4	表面割傷		113
VG002	V-特02	T1 浅掘	II層	紡錘車	3.4	(2.4)	1.2	10.5	半分欠損		113

第 17 表 間木戸V遺跡石器観察表

掲載番号	取番号	場所	出土地点	層位	欠損	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	材質	産地	備考	図	号
VS001	V-特001	石核	T7	II層	先端	1.6	1.6	0.3	0.6	頁岩	北山塊		2-3	153 112
VS002	V-特002	石核		II層中位	先端	1.6	1.2	0.3	0.4	頁岩			2-3	153 112
VS003	V-特003	石核	③E-W間	II層中上~中	先端	(25)	19	0.6	2.8	頁岩				
VS004	V-特004	石核	③NSトレンチ	II層	先端	2.8	1.5	0.4	1.4	緑頁岩	北山塊 中年代遺物		2-3	153 112
VS005	V-特005	石核	跡貫	II層~拵	尖	2.5	1.7	3.0	0.8	頁岩		黒色割付着	2-3	153 112
VS006	V-特006	石核		II層	尖	2.5	1.3	0.5	0.9	頁岩		石痕あり	2-3	153 112
VS007	V-特007	石核		II層~拵	尖	4.0	1.2	0.4	1.2	頁岩			2-3	153 112
VS008	V-特008	石核		III層	先端	2.8	1.6	0.4	1.1	頁岩			2-3	153 112
VS009	V-特009	石核	③一拵(南ベト)	II層~拵	片削端部	1.6	(1.3)	0.3	1.6	頁岩				
VS010	V-特010	石核	3号型穴遺物跡 Wベト	5層	尖	3.1	1.6	0.4	3.1	頁岩	北山塊 中年代遺物		2-3	153 112
VS011	V-特011	石核	III1m	II層	先端	(22)	17	0.3	1.2	頁岩	北山塊 中年代遺物			
VS012	V-特012	石核	拵	II~III層上部	刃部	4.0	3.0	7.2	4.9	頁岩			2-3	153 112
VS013	V-1001	3号型穴遺物跡 Wベト	竪文トレンチ目~目間	II~III層	尖	5.3	4.0	1.1	20.7	頁岩		割付着	2-3	153 112
VS014	V-1002	3号型穴遺物跡 Wベト	③Sトレンチ	II層~拵	尖	4.8	3.5	0.9	16.6	頁岩	北山塊 中年代遺物			
VS015	V-A-1	石芥	22	II層~拵	刃部	(90)	4.7	2.1	153.4	花崗閃緑岩	北山塊古岩体 中年代遺物			
VS016	V-B-1	緑帘閃緑	3号型穴遺物跡 Wベト	5層	-	(43)	5.9	1.6	58.1	砂岩	北山塊 中年代遺物		1-2	153 112
VS017	V-B-2	緑帘閃緑	3号型穴遺物跡 Wベト	5層	-	(56)	(76)	3.1	138.7	アズライト	北山塊古岩体 中年代遺物		1-3	112
VS018	V-B-3	緑帘閃緑	3号型穴遺物跡 NS	II層下部	尖	5.3	5	2.3	90.6	アズライト	北山塊古岩体 中年代遺物			
VS019	V-A-4	緑帘閃緑	3号型穴遺物跡 NS-2号遺物跡 跡部東縁	II層中位	尖	7.5	4.8	3.3	178.1	粗灰岩	北山塊 中年代遺物	緑き		
VS020	V-B-5	緑帘閃緑	3号型穴遺物跡より南	II層	尖	7.4	5.7	4.9	353.7	花崗閃緑岩	北山塊古岩体 中年代遺物	7層に緑、黒色割付着。	1-3	153 112
VS021	V-B-6	緑帘閃緑	③W	II層下部	-	10.6	7.6	4.1	69.4	灰岩	北山塊 中年代遺物			
VS022	V-B-7	緑帘閃緑	23号棟(竪文トレンチ 34層)	II~III層	-	(63)	6.7	5.4	333.5	パツヤク石	北山塊古岩体 中年代遺物			
VS023	V-B-8	緑帘閃緑	跡部区~拵	-	-	9.2	6	4.7	621.4	花崗閃緑岩	北山塊古岩体 中年代遺物			
VS024	V-E-1	行石	3号型穴遺物跡 Nベト要路	層位不明	-	(50)	(94)	7	699.5	花崗閃緑岩	北山塊古岩体 中年代遺物	跡部より行石(金床行)2層中層		
VS025	V-E-2	台石	2号遺物跡跡部	2層	-	(66)	(72)	7	791.7	花崗閃緑岩	北山塊古岩体 中年代遺物	スズ目着、3層中層		

第18表 間木戸V遺跡鉄製品観察表

掲載番号	取番号	種類	出土地点	層位	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	備考	図	写
VG003	鉄06	鉄鍔・マチ部	1号鉄鍔跡	炉面	(5.5)	0.6	0.7	5.6	マチあるか？	1/3	154
VG004	鉄07	くさびぎ	I B14・15qr	1～II層	13.6	1.7	0.9	54.2	近世～近代	1/3	154
VG005	鉄10	刀	3号部穴建物跡	埋土	(4.3)	4.4	0.7	37.1	鍔手刀の刀身？	1/3	154
VG006	鉄11	短剣	3号部穴建物跡	埋土	2.8	2.7	(1.8)	29.4	鍔手刀の金具	1/3	154

第19表 間木戸V遺跡羽刃観察表

掲載番号	取番号	器名	産地名	地点	層位	残存部分	残存長さ(cm)	残存幅(cm)	内径(cm)	重量(g)	発見	図	写
VG007	4-0 0 1	357.627543	1号灰窯&地跡	河口1層位	3層	体部	(32.1)	9	3.5	127.49	伊勢産。可成る厚さの少ない付着。修状工片断。根下溝？圧痕。内面に沁み跡。先頭部は鋭い。	1/3	154
VG008	4-0 0 2	471	1号灰窯&地跡	SE	埋土下部	木部部	(10.1)	7.4	3.2	26.33	今少し厚みでのけずりと、部(四部)の調整痕？粘土の細層少量。	1/3	154
VG009	4-0 0 3	526	1号灰窯&地跡	NE	4層 上面	先頭部～体部	9.2	(9.4)	(3.8)	44.05	鋭意たる鉄片付着。先頭部細層。	1/3	154
VG010	4-0 0 4	544	1号灰窯&地跡	Sベ&ト	3層	先頭部～体部	7.1	7.4	2.2	26.33	鉄片付着。粘土風い。細層含む。	1/3	113
VG011	4-0 0 5	967	1号灰窯&地跡	SE	埋土一拵	先頭部～体部	11.4	7.7	3.2	5.41	鋭意たる鉄片付着。一部ガラス質付着。粘土風い。細層含む。	1/3	113
VG012	4-0 0 6	303.668	1号灰窯&地跡	Eベ&ト	2層	体部	5.6	(7.4)	(2.9)	169.7	鋭意たる鉄片付着。ガラス質付着。粘土風い。	1/3	113
VG013	4-0 0 7	547.262468	1号灰窯&地跡	Eベ&ト	2～3層	木部部	13.8	8.3	4.1	27.51	細層を含む鉄片付着。粘土風い。	1/3	113
VG014	4-0 0 8	465.297	1号灰窯&地跡	Sベ&ト	3層	先頭部～体部	10.7	(7.1)	(3.2)	175.2	鋭意たる鉄片付着。非変層。一部ガラス質付着。	1/3	113
VG015	4-0 0 9	472.674	1号灰窯&地跡	Eベ&ト	埋土下部	先頭部～体部	9.4	(9.8)	(4.2)	152.8	修状工片断。根下溝？圧痕。粘土細層含む。	1/3	113
VG016	4-0 1 0	302	1号灰窯&地跡	Eベ&ト	3～5層	先頭部～体部	8.9	-	(3.2)	253.9	鋭意たる鉄片付着。一部ガラス質付着。粘土細層含む。	1/3	113
VG017	4-0 1 1	478.322	1号灰窯&地跡	S102埋土層内、S103砂層	埋土下部	先頭部～体部	13.4	7.3	3.1	369.6	鉄片付着。一部ガラス質付着。粘土風い。細層含む。	1/3	113
VG018	4-0 1 2	577	1号工房跡	S103 E	埋土下部	先頭部～体部	10.5	8.1	3.4	353.3	鉄片付着。非変層。先頭部細層。粘土細層含む。	1/3	113
VG019	4-0 1 3	487	S103 P14W	2層	先頭部～体部	12.1	7.8	3	269.2	鉄片付着。非変層。粘土細層。スチール層付着。	1/3	114	
VG020	4-0 1 4	480.323	S103 P14E	2～3層	先頭部～体部	10.5	9.7	3.3	350	鉄片付着。非変層。根部分に粘土層付着。根下溝？圧痕。一部ガラス質付着。	1/3	114	
VG021	4-0 1 5	519	埋洋場	北側部分	1b～2層	先頭部～体部	10.3	7.3	2.3	370.6	鉄片付着。根部分の細層。粘土細層少量含む。	1/3	114
VG022	4-0 1 6	368	埋洋場	北一宮前	1b層	先頭部～体部	10.2	8.2	2.2	369.7	鉄片付着。根部分の細層。粘土細層少量含む。	1/3	114
VG023	4-0 1 7	330	埋洋場	北一宮前	1a層	先頭部～体部	11.5	7.7	3.5	315.7	鉄片付着。根部分の細層。先頭部細層。粘土細層含む。	1/3	114
VG024	4-0 1 8	368	埋洋場	2～3E区	1b層	先頭部～体部	6.2	-	71	ヘラ状の工具部。V字断面の鋭い部。	1/3	114	

第20表 間木戸V遺跡炉壁観察表

掲載番号	産地名	地点	層位	色調	所見	掲載図尺	図	写
VG025	1号灰窯&地跡	河口1層位	3層	5YR7/8 藍色	黒漆・発色欠けた部分付着。スチ・細層多量含む。芯棒？根→木柱孔の痕か(染みして)。一部溶解。	1/3	154	114
VG026	1号工房跡	2号灰鉄炉	炉内	5YR7/8 藍色	黒漆・発色欠けた部分付着。スチ・細層多量含む。芯棒？根→木柱孔の痕か(染みして)。一部溶解。	1/3	114	114
VG027	2号工房跡	埋土一拵	埋土一拵	7.5YR7/6 棕色	鋭い。細層少量含む。スチ未見入。	1/3	114	114
VG028	2号工房跡	埋土一拵	埋土一拵	5YR7/8 藍色	黒漆・ガラス質薄片部多量付着。スチ・細層多量含む。	1/4	114	114
VG029	2号工房跡	埋土一拵	埋土一拵	10YR5/1 褐色色	黒漆・ガラス質薄片部多量付着。スチ・細層多量含む。	1/4	114	114

VI 分析・鑑定

1 間木戸V遺跡、間木戸II遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）

（株）加速器分析研究所

1 測定対象試料

間木戸V遺跡、間木戸II遺跡は、岩手県下閉伊郡山田町山田第3地割56に所在する。測定対象試料は、間木戸V遺跡の遺構から出土した木炭等13点と、間木戸II遺跡の遺構から出土した木炭4点の合計17点である（表1）。

2 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1 mol/ℓ（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO₂）を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

3 測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度（¹³C/¹²C）、¹⁴C濃度（¹⁴C/¹²C）の測定を行う。測定では、米国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxII）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

4 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の¹³C濃度（¹³C/¹²C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表1）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) ¹⁴C年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。¹⁴C年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。¹⁴C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、¹⁴C年代の誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、試料の¹⁴C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

- (3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の¹⁴C濃度の割合である。pMCが小さい(¹⁴Cが少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上(¹⁴Cの量が標準現代炭素と同等以上)の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。
- (4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の¹⁴C濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の¹⁴C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、¹⁴C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差(1 σ =68.2%)あるいは2標準偏差(2 σ =95.4%)で表示される。グラフの縦軸が¹⁴C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない¹⁴C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal3データベース(Reimer et al. 2013)を用い、OxCalv4.2較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。暦年較正年代は、¹⁴C年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」)という単位で表される。

5 測定結果

測定結果を表1、2に示す。

岡木戸V遺跡出土試料の¹⁴C年代は、試料01~06のうち試料03と試料06の値が誤差($\pm 1\sigma$)の範囲で一致する。他の試料の間には年代差が認められる。

暦年較正年代(1 σ)は、古い方から順に試料02が縄文時代中期中葉から後葉頃、試料01が弥生時代後期頃に相当し、試料03~06が古代から中世に含まれる年代値となっている(小林2009、小林編2008、佐原2005)。

なお、試料01が含まれる1~3世紀頃の暦年較正に関しては、北半球で広く用いられる較正曲線IntCalに対して日本産樹木年輪試料の測定値が系統的に異なるとの指摘がある(尾畷2009、坂本2010など)。その日本版較正曲線を用いて試料01の測定結果を暦年較正した場合、ここで報告する較正年代値よりも新しくなる可能性がある。

岡木戸V遺跡出土試料の¹⁴C年代は、4点のうち試料08と試料09の値が誤差($\pm 1\sigma$)の範囲で一致し、試料10もかなり近い値である。これら3点と試料07の間には明瞭な年代差が認められる。

暦年較正年代(1 σ)は、試料07が古代頃、試料08~10が縄文時代中期前葉から中葉頃に相当する(小林編2008、佐原2005)。

試料11~17の¹⁴C年代は、1120 \pm 20yrBP(試料15)から910 \pm 20yrBP(試料11)の間にあり、特に1120~1050yrBPの狭い範囲に6点が集中する。暦年較正年代(1 σ)は、最も古い15が895~969cal ADの間に2つの範囲、最も新しい11が1046~1164cal ADの間に3つの範囲で示され、全体でおおよそ古代ないし古代から中世初頭頃に相当する(佐原2005)。

試料の炭素含有率を確認すると、木炭9点はすべて60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。試料01は、土に含まれた黒色の物質で、通常の炭化物よりもやや明るい色調を呈していた。できるだけ黒い部分を採取したが、炭素含有率が5%というかなり低い値を示してい

る。試料形態は炭化物としたが、試料中の炭素の由来について注意する必要がある。

表1 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-131444	試料 01	間木戸V遺跡 3号塹土遺構 礎土下位	炭化物	AaA	-24.33 ± 0.63	1930 ± 30	78.67 ± 0.25
IAAA-131445	試料 02	間木戸V遺跡 3号塹穴建物跡 北壁	木炭	AAA	-26.99 ± 0.79	4,100 ± 30	60.02 ± 0.22
IAAA-131446	試料 03	間木戸V遺跡 1号設置基場跡 Nベルト4層	木炭	AaA	-24.09 ± 0.7	1,100 ± 30	87.21 ± 0.27
IAAA-131447	試料 04	間木戸V遺跡 1号工房跡 Pit1 3層	木炭	AAA	-25.08 ± 0.77	910 ± 20	89.32 ± 0.22
IAAA-131448	試料 05	間木戸V遺跡 1号不明遺構 C6	木炭	AAA	-27.31 ± 0.65	810 ± 20	90.37 ± 0.27
IAAA-131449	試料 06	間木戸V遺跡 2号工房跡5号製鉄炉	木炭	AAA	-25.9 ± 0.55	1,140 ± 30	86.72 ± 0.24
IAAA-131450	試料 07	間木戸II遺跡 26号塹穴建物跡西 埋土中位~下位	木炭	AAA	-23.5 ± 0.36	1,290 ± 20	85.22 ± 0.24
IAAA-131451	試料 08	間木戸II遺跡 2号塹穴建物跡如1 1層	木炭	AAA	-25.6 ± 0.73	4,460 ± 30	57.42 ± 0.21
IAAA-131452	試料 09	間木戸II遺跡 10号塹穴建物跡如 覆土	木炭	AAA	-23.4 ± 0.97	4,440 ± 30	57.54 ± 0.22
IAAA-131453	試料 10	間木戸II遺跡 24号塹穴建物跡 覆土中~下位	木炭	AAA	-25.63 ± 0.58	4,560 ± 30	56.68 ± 0.21
IAAA-133113	試料 11	間木戸V遺跡 3号塹穴建物跡 埋土下部	炭化物	AAA	-25.84 ± 0.58	910 ± 20	89.32 ± 0.26
IAAA-133114	試料 12	間木戸V遺跡 1号工房跡 Pit1 E 2層3層	炭化物	AAA	-26.47 ± 0.6	1,050 ± 20	87.77 ± 0.25
IAAA-133115	試料 13	間木戸V遺跡 1号工房跡3号製鉄炉 4層	炭化物	AAA	-27.26 ± 0.5	1,080 ± 20	87.38 ± 0.24
IAAA-133116	試料 14	間木戸V遺跡 2号設置基場跡 9層	炭化物	AAA	-26.11 ± 0.36	1,090 ± 20	87.27 ± 0.24
IAAA-133117	試料 15	間木戸V遺跡1号廃洋場 ③ E ②層	炭化物	AAA	-25.53 ± 0.66	1,120 ± 20	87 ± 0.25
IAAA-133118	試料 16	間木戸V遺跡1号廃洋場 ③ W ①b~②層	炭化物	AAA	-24.19 ± 0.28	1,060 ± 20	87.68 ± 0.24
IAAA-133119	試料 17	間木戸V遺跡1号廃洋場 ③ W ①b~②層	炭化物	AaA	-27.62 ± 0.29	1,080 ± 20	87.38 ± 0.27

[#6052.6053]

表2 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代) (1)

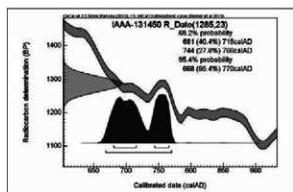
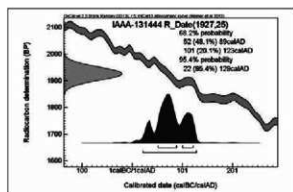
測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1σ 暦年較正範囲	2σ 暦年較正範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-131444	1930 ± 30	78.78 ± 0.22	1,927 ± 25	52calAD - 89calAD (48.1%) 101calAD - 123calAD (30.1%)	22calAD - 129calAD (95.4%)
IAAA-131445	4,130 ± 30	59.77 ± 0.19	4,100 ± 28	2839calBC - 2815calBC (14.2%) 2675calBC - 2580calBC (54.0%)	2861calBC - 2807calBC (22.1%) 2757calBC - 2719calBC (9.1%) 2705calBC - 2572calBC (63.6%) 2512calBC - 2505calBC (0.7%)
IAAA-131446	1,080 ± 20	87.37 ± 0.24	1,099 ± 25	899calAD - 923calAD (27.7%) 947calAD - 983calAD (40.5%)	889calAD - 965calAD (95.4%)
IAAA-131447	910 ± 20	89.3 ± 0.22	907 ± 23	1046calAD - 1093calAD (40.4%) 1121calAD - 1140calAD (14.4%) 1147calAD - 1164calAD (13.5%)	1038calAD - 1188calAD (95.4%)
IAAA-131448	850 ± 20	89.94 ± 0.25	813 ± 24	1216calAD - 1257calAD (68.2%)	1182calAD - 1267calAD (95.4%)
IAAA-131449	1,160 ± 20	86.56 ± 0.25	1,144 ± 25	782calAD - 787calAD (2.2%) 877calAD - 906calAD (23.1%) 916calAD - 968calAD (42.9%)	777calAD - 793calAD (5.8%) 802calAD - 840calAD (11.1%) 855calAD - 975calAD (78.5%)
IAAA-131450	1,260 ± 20	85.48 ± 0.24	1,285 ± 23	681calAD - 715calAD (40.4%) 744calAD - 766calAD (27.8%)	668calAD - 770calAD (95.4%)
IAAA-131451	4,470 ± 30	57.35 ± 0.19	4,456 ± 29	3322calBC - 3235calBC (36.3%) 3171calBC - 3163calBC (2.7%) 3116calBC - 3084calBC (13.7%) 3065calBC - 3028calBC (15.5%)	3336calBC - 3211calBC (46.3%) 3193calBC - 3151calBC (9.2%) 3139calBC - 3019calBC (39.9%)
IAAA-131452	4,410 ± 30	57.73 ± 0.19	4,440 ± 30	3311calBC - 3296calBC (4.9%) 3286calBC - 3275calBC (3.4%) 3265calBC - 3239calBC (12.4%) 3107calBC - 3020calBC (47.5%)	3331calBC - 3215calBC (31.9%) 3186calBC - 3156calBC (4.6%) 3127calBC - 3007calBC (52.6%) 2988calBC - 2801calBC (6.4%)
IAAA-131453	4,570 ± 30	56.6 ± 0.19	4,561 ± 29	3396calBC - 3333calBC (36.4%) 3213calBC - 3189calBC (17.8%) 3154calBC - 3133calBC (14.0%)	3487calBC - 3473calBC (2.0%) 3372calBC - 3316calBC (41.3%) 3293calBC - 3288calBC (0.4%) 3274calBC - 3266calBC (0.9%)

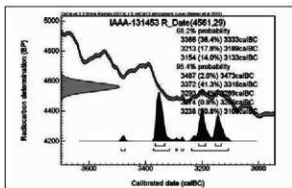
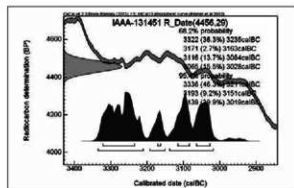
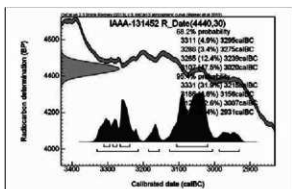
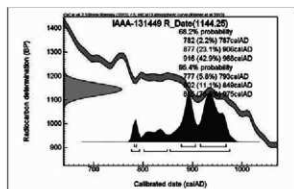
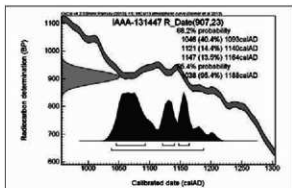
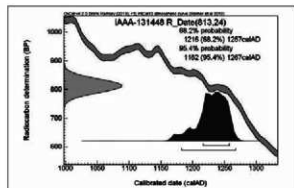
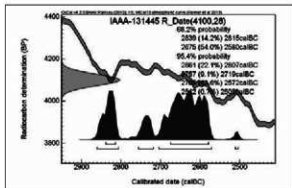
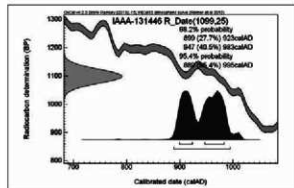
IAAA-13313	920 ± 20	89.17 ± 0.23	907 ± 23	1046calAD - 1093calAD (40.4%) 1121calAD - 1140calAD (14.4%) 1147calAD - 1164calAD (13.5%)	328calBC - 3108calBC (50.8%) 1038calAD - 1188calAD (95.4%)
IAAA-13314	1,070 ± 20	87.5 ± 0.22	1,048 ± 22	989calAD - 1016calAD (68.2%)	906calAD - 916calAD (2.1%) 967calAD - 1025calAD (93.3%)
IAAA-13315	1,120 ± 20	86.98 ± 0.22	1,083 ± 22	901calAD - 921calAD (20.7%) 953calAD - 993calAD (47.5%)	896calAD - 928calAD (28.0%) 940calAD - 1016calAD (67.4%)
IAAA-13316	1,110 ± 20	87.08 ± 0.23	1,093 ± 22	901calAD - 921calAD (25.1%) 951calAD - 987calAD (43.1%)	892calAD - 995calAD (95.4%)
IAAA-13317	1,130 ± 20	86.91 ± 0.22	1,118 ± 22	895calAD - 929calAD (35.2%) 940calAD - 969calAD (33.0%)	886calAD - 985calAD (95.4%)
IAAA-13318	1,040 ± 20	87.83 ± 0.23	1,056 ± 22	984calAD - 1016calAD (68.2%)	901calAD - 921calAD (6.2%) 962calAD - 1024calAD (89.2%)
IAAA-13319	1,130 ± 20	86.91 ± 0.26	1,083 ± 24	901calAD - 921calAD (20.9%) 951calAD - 993calAD (47.3%)	895calAD - 929calAD (28.3%) 940calAD - 1016calAD (67.1%)

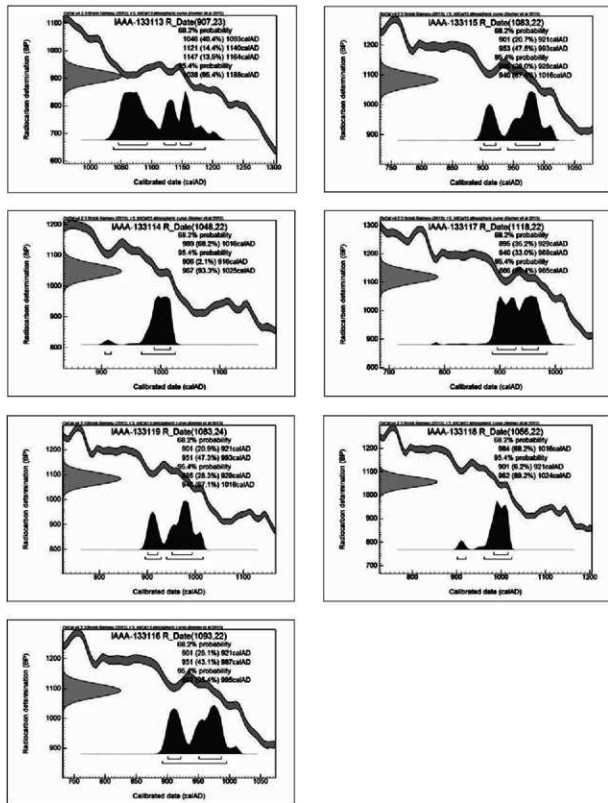
【参考値】

文献

- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51 (1), 337-360
- 小林謙一 2009 近畿地方以東の地域への拡散, 西本豊弘編, 新弥生時代のはじまり 第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代, 雄山閣, 55-82
- 小林達雄編 2008 総覧縄文土器, 総覧縄文土器刊行委員会, アム・プロモーション
- 尾碇大真 2009 日本産樹木年輪試料の炭素14年代からみた弥生時代の実年代, 設楽博己, 藤尾慎一郎, 松木武彦編 弥生時代の考古学1 弥生文化の輪郭, 同成社, 225-235
- Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 55 (4), 1869-1887
- 佐原 渡 2005 日本考古学・日本歴史学の時代区分, ウェルナー・シュタインハウス監修, 奈良文化財研究所編集, 日本の考古学 上, ドイツ展記念概説, 学生社, 14-19
- 坂本 稔 2010 校正曲線と日本産樹木-弥生から古墳へ-, 第5回年代測定と日本文化研究シンポジウム予稿集, (株) 加速器分析研究所, 85-90
- Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data, Radiocarbon 19 (3), 355-363







[図版] 暦年較正年代グラフ (参考)

2 間木戸Ⅱ・V遺跡出土黒曜石の産地同定

パリオ・サーヴェイ株式会社

はじめに

岩手県山田町間木戸Ⅱ遺跡では、縄文時代中期とされる竪穴建物跡が確認され、それらの遺構からは土器や石器などの遺物が出土している。また間木戸Ⅴ遺跡では、古代の製鉄に関連する遺構や遺物が出土しているが、調査区内の黒色土層からはおそらく縄文時代とされる石器が出土している。今回の分析調査では、間木戸Ⅱ遺跡の建物跡内から出土した黒曜石製石器と間木戸Ⅴ遺跡の黒色土層から出土した黒曜石製石器について元素分析を行い、原産地の同定を行う。

1. 試料

試料は、間木戸Ⅱ遺跡の建物跡内から出土した黒曜石製石器4点（ただし、1点は無色透明な色調を呈する外観から黒曜石ではない可能性もあるとされている）と間木戸Ⅴ遺跡の②層から出土した黒曜石製石器1点の合計5点である。試料には、試料№1～5が付されている。各試料の出土遺構または出土位置、出土層位などは、一覧にして表1に示す。また、試料の外観を図版1、2に示す。

表1. 黒曜石試料一覧

試料№	仮番号	遺跡	出土地点	層位	重さ(g)	分析番号
1	ぞ011	間木戸Ⅱ	4号竪穴建物跡北壁付近	埋土中位	0.2	120570
2	ぞ099	間木戸Ⅱ	8号竪穴建物跡	埋土中位	2.6	120571
3	黒2	間木戸Ⅱ	4号竪穴建物跡南西	埋土一括	0.9	120572
4	黒1	間木戸Ⅱ	9号竪穴建物跡	床面(石器№2)	2.5	120573
5	—	間木戸Ⅴ	1号廃洋場③W	②層	0.9	120574

2. 分析方法

(1) 試料の測定

本分析では、エネルギー分散型蛍光X線分析装置（セイコーインスツルメンツ社製SEA2110Lシリーズ卓上型蛍光X線分析計）を用いて元素分析を行なう。分析元素はAl、Si、K、Ca、Ti、Mn、Fe、Rb、Sr、Y、Zr、Nbの12元素である。試料の形状差による分析値への影響を打ち消すために元素量の比を取り、それらを産地の特定のための指標とした。ここでは、Ca/K、Ti/K、Mn/Zr、Fe/Zr、Rb/Zr、Sr/Zr、Y/Zr、Nb/Zr、Al/K、Si/Kの値を求め、産地を区別する指標として用いる。

なお、黒曜石製遺物の蛍光X線分析においては、試料の表面の風化程度、試料の厚さおよび試料の形状によって分析値に影響が及ぶ。表面が曇っているほどの風化がある場合は、カリウムの分析値が大きくなるため、Ca/K、Ti/Kの両軽元素比を除いて産地判定をする。試料の厚さが1.5mm以下の場合、重い元素は小さく測定されるため、分析値に実験で求めた厚さ補正値を乗じて産地判定をする。厚さ0.3mm以下の試料については補正困難なため、産地判定はできない。試料の形状については、厚さの薄い部分を含んでいたり、極端な曲面しかないものなどを測定した場合に、分析値は変動し、産地判定結果は一定しない。そのような場合には、分析場所を変えて多数の分析値により産地判定をし、最

も多く判定された産地を選択する。

(2) 産地判定

a) 黒曜石原石の分析

黒曜石の原産地は、北海道、東北、北陸、東関東、中信高原、伊豆箱根、伊豆七島の神津島、山陰、九州の各地に分布している。調査を終えている原産地の一部を図1に示す。これら原石について、上述した測定を行い、上記の元素比を求め、分類した。ここでは分類の単位を「群」とよび、例えばその地名を付して「和田峠第1群」などとする。現時点では、日本および近隣国(ロシア、北朝鮮、台湾など)の原石群と、原産地が不明の遺物で作った遺物群を加えると、合計331個の原石群・遺物群を得ている。産地判定は、試料の元素比とこれら331群の元素比とを比較し、必要条件と十分条件を求めて行う。

b) 産地の判定

上述した各元素比を変量とし、それらの相関を考慮した多変量統計の手法であるマハラノビスの距離を求めて行なうホテリングのT²乗検定を、試料と331個の原石群・遺物群との間で行い、各群に帰属する確率を求めて産地を判定する(東村,1976:1990)。ただし、低い確率(0.1%未満)で帰属された原産地の推定確率は紙面の都合上記を省略する。なお本分析法では、低い確率の原産地も確認しているということが重要である。すなわち、低い確率とされた原産地の原石が使用された可能性を考える必要がないという結果でもあるからである。

次に、ホテリングのT²乗検定の定量的な同定結果から、石材の成分組成以外の各産地特有の原石の特徴を考慮して、遺物の原産地を判定する。石材の成分組成以外の特徴としては、肉眼観察においてキラキラ光る鉱物が多いか少ないか、また光る鉱物は輝石か雲母か、さらに表面の光沢の状況や角稜あるいは円稜の特徴が認められるなどがあげられる。

なお本分析は、遺物材料研究所の協力を得て行ったものである。

3. 結 果

各試料の元素比分析結果を表2に示し、ホテリングのT²乗検定結果による原産地とその帰属確率および検定結果に成分組成以外の特徴などを加えて判定した産地を、表3に示す。

試料No1は、原石群の中に帰属確率が信頼限界の0.1%を超えるものが認められず、原産地は不明であるが、遺跡から出土した遺物で構成される遺物群のなかでみると、HY遺物群に34%の確率で帰属する。HY遺物群は、青森県日山遺跡で使用されている産地未発見の原石で作られた遺物の成分組成で作られた遺物群で、三内丸山遺跡でもその使用が確認されている。今回の分析結果により、HY遺物群は広い範囲で使用されている黒曜石の可能性が推測された。

試料No2については、その無色透明な色調から黒曜石ではない可能性が指摘されていたが、本分析で同時に測定した化学組成では、SiO₂の含有量が約94%と非常に高く(黒曜石は78%程度)、比重は2.648を示し、劈開面のような面も認められることから、水晶の破片であると判断される。

試料No3～5までの3点については、岩手郡雫石町の小赤沢地区の礫層から採取される雫石群、水沢市真城の折居地区の礫層より採取された小円礫からなる折居-1群、西磐井郡花泉町の払田および金沢の両地区の礫層より採取された小円礫の原石で作られた花泉群という3群に同定された。これら3群の元素組成は相互に似ており、元素組成のみでは明確に区別することはできない。したがって、本分析結果による産地判定では、これら複数の産地を併記することとした。

表2. 黒曜石試料の元素比分析結果

試料No.	分析番号	元 素 比									
		Ca/ K	Ti/ K	Mn/ Zr	Fe/ Zr	Rb/ Zr	Sr/ Zr	Y/ Zr	Nb/ Zr	Al/ K	Si/ K
1	120570	0.221	0.134	0.054	1.785	0.445	0.145	0.520	0.030	0.022	0.517
2	120571	0.000	0.000	0.004	0.034	0.134	1.180	0.010	0.000	0.864	47.595
3	120572	0.669	0.207	0.054	1.821	0.306	0.439	0.202	0.039	0.043	0.598
4	120573	0.623	0.183	0.052	1.742	0.289	0.407	0.204	0.051	0.041	0.592
5	120574	0.674	0.203	0.050	1.778	0.305	0.429	0.197	0.044	0.041	0.595
JG-1		0.780	0.208	0.072	4.113	0.969	1.260	0.310	0.047	0.031	0.317

JG-1: 標準試料 - Ando, A., Kurawawa, I., Ohmori, T. & Takeda, E. 1974 compilation of data on the GJS geochemical reference samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt. *Geochemical Journal*, Vol.8 175-192 (1974)

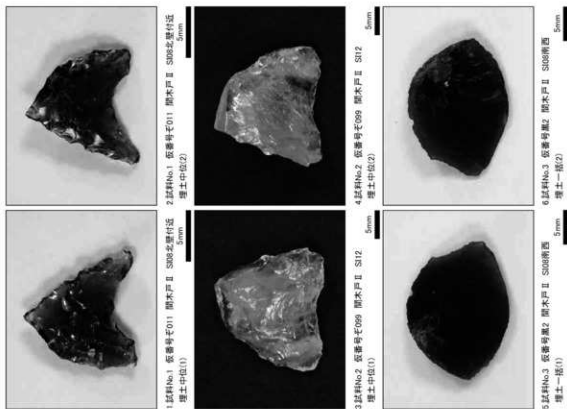
表3. 黒曜石試料の産地分析結果

試料No.	遺跡	出土地点	分析番号	ホテリングのT ² 検定結果	判定	備考
1	間木戸Ⅱ	4号竪穴建物跡北壁付近	120570	HY遺物群 (34%)	HY遺物群	
2	間木戸Ⅱ	8号竪穴建物跡	120571		水晶	比重2.648
3	間木戸Ⅱ	4号竪穴建物跡南西	120572	隼石 (95%), 花泉 (67%), 折居-1 (47%)	隼石、花泉、折居	
4	間木戸Ⅱ	9号竪穴建物跡	120573	折居-1 (98%), 隼石 (97%), 花泉 (95%)	隼石、花泉、折居	
5	間木戸Ⅴ	1号廃坪場③W	120574	隼石 (95%), 折居-1 (89%), 花泉 (77%)	隼石、花泉、折居	

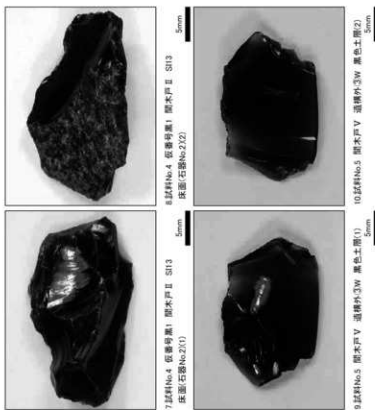
引用文献

- 東村武信, 1976. 産地推定における統計的手法. *考古学と自然科学* 9, 77-90.
 東村武信, 1990. *考古学と物理化学*. 学生社, 212p.

図版1: 黒曜石試料(1)



図版2: 黒曜石試料(2)



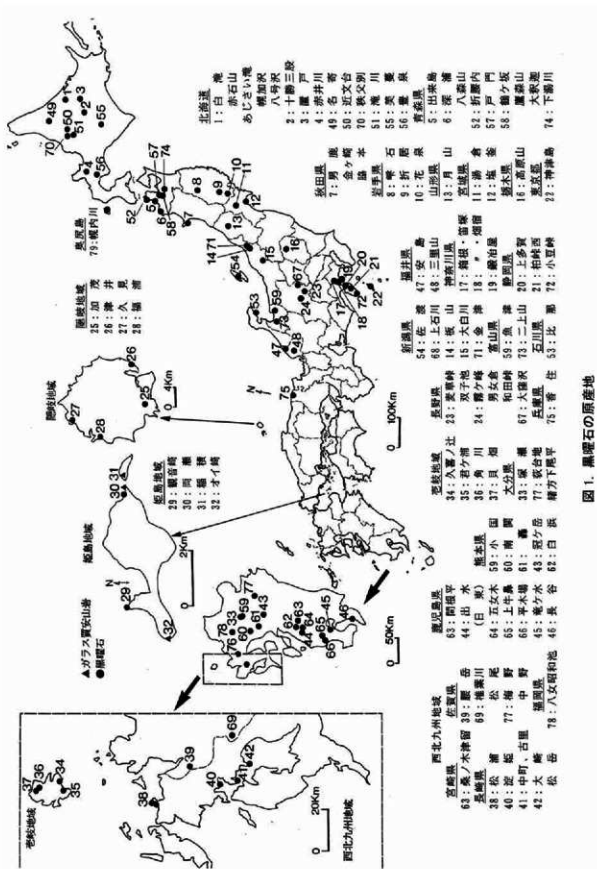


図 1. 黒曜石の原産地

3 間木戸Ⅱ・V遺跡出土鉄滓類の成分分析

JFE テクノリサーチ株式会社
ソリューション本部（千葉）
理蔵文化財調査研究室

1. はじめに

三陸沿岸道路の建設事業に伴い、岩手県下閉伊郡山田町に所在する間木戸Ⅱ・V遺跡から出土した製鉄遺物について、学術的な記録と今後の調査のための一環として化学成分分析・顕微鏡組織観察を含む自然科学的観点での調査を依頼された。鉄滓、及び砂鉄等について化学成分分析、顕微鏡組織観察、X線回折測定等を行い、その結果にもとづき材質、始発原料、及び製造工程上の位置づけなどを中心に調査した。その結果について報告する。

2. 調査項目および試験・観察方法

(1) 調査項目

調査試料の記号、出土遺構・注記および調査項目を表1に示す。

(2) 調査方法

(i) 重量計測、外観観察および金属探知調査

試料重量の計量は電子天秤を使用して行い、少数点2位以下で四捨五入した。各種試験用試料を採取する前に、試料の外観をmm単位まであるスケールを同時に写し込みで撮影した。試料の出土位置や試料の種別等は提供された資料に準拠した。

着磁力調査については、直径30mmのリング状フェライト磁石を使用し、6mmを1単位として35cmの高さから吊した磁石が動きは始める位置を着磁度として数値で示した。遺物内の残存金属の有無は金属探知機（MC：metal checker）を用いて調査した。金属検知にあたっては参照標準として直径と高さを等しくした金属鉄円柱（1.5mmφx1.5mmH、2.0mmφx2.0mmH、5mmφx5mmH、10mmφx10mmH、16mmφx16mmH、20mmφx20mmH、30mmφx30mmH）を使用し、これとの対比で金属鉄の大きさを判断した。

(ii) 化学成分分析

化学成分分析は鉄鋼に関するJIS分析法に準じて行っている。

- ・全鉄（T.Fe）：三塩化チタン還元-ニクロム酸カリウム滴定法。
- ・金属鉄（M.Fe）：臭素メタノール分解-EDTA滴定法。
- ・酸化第一鉄（FeO）：ニクロム酸カリウム滴定法。
- ・酸化第二鉄（Fe₂O₃）：計算。・化合物（C.W.）：カールフィッシャー法。
- ・炭素（C）、イオウ（S）：燃焼-赤外線吸収法。
- ・ライム（CaO）、酸化マグネシウム（MgO）、酸化マンガン（MnO）、酸化ナトリウム（Na₂O）、珪素（Si）、マンガン（Mn）、リン（P）、銅（Cu）、ニッケル（Ni）、コバルト（Co）、アルミニウム（Al）、ヴァナジウム（V）、チタン（Ti）：ICP発光分光分析法。

・シリカ (SiO₂)、アルミナ (Al₂O₃)、酸化カルシウム (CaO)、酸化マグネシウム (MgO)、二酸化チタン (TiO₂)、酸化リン (P₂O₅)、酸化カリウム (K₂O)：ガラスビード蛍光X線分析法。但しCaO、MgO、MnOは含有量に応じてICP分析法またはガラスビード蛍光X線分析法を選択。

・酸化ナトリウム (Na₂O)：原子吸光法。

なお、鉄滓中成分は、18成分(全鉄T.Fe、金属鉄M.Fe、酸化第一鉄FeO、酸化第二鉄Fe₂O₃、シリカSiO₂、アルミナAl₂O₃、ライムCaO、マグネシアMgO、酸化ナトリウムNa₂O、酸化カリウムK₂O、二酸化チタンTiO₂、酸化マンガンMnO、酸化リンP₂O₅、化合水C.W.、炭素C、ヴァナジウムV、銅Cu、ジルコニウムZr)を化学分析している。分析は各元素について分析し、酸化物に換算して表示している。

胎土成分は、17成分(全鉄T.Fe、酸化鉄FeO、シリカSiO₂、アルミナAl₂O₃、ライムCaO、マグネシアMgO、化合水C.W.、二酸化チタンTiO₂、酸化マンガンMnO、酸化ナトリウムNa₂O、酸化カリウムK₂O、炭素C、ルビジウムRb、ストロンチウムSr)を化学分析している。

鉄製品中成分の化学分析は、13成分(炭素C、シリコンSi、マンガンMn、リンP、イオウS、銅Cu、ニッケルNi、コバルトCo、アルミニウムAl、ヴァナジウムV、チタンTi、カルシウムCa、マグネシウムMg)を化学分析している。

(iii) 顕微鏡組織観察

試料の一部を切り出し樹脂に埋め込み、細かい研磨剤などで研磨(鏡面仕上げ)する。炉壁・羽口・粘土などの鉱物性試料については顕微鏡で観察しながら代表的な鉱物組織などを観察し、その特徴から材質、用途、熟履歴などを判断する。滓関連資料も炉壁・羽口などと同様の観察を行うが特徴的鉱物組織から成分的な特徴に結びつけ製・精錬工程の判別、使用原料なども検討する。金属鉄はナイタール(5%硝酸アルコール液)で腐食後、顕微鏡で観察しながら代表的な断面組織を拡大して写真撮影し、顕微鏡組織および介在物(不純物、非金属鉱物)の存在状態等から製鉄・鍛冶工程の加工状況や材質を判断する。原則として100倍および400倍で撮影を行う。必要に応じて実体顕微鏡(5倍~20倍)による観察もする。

(iv) X線回折測定

試料を粉砕して板状に成形し、X線を照射すると、試料に含まれている化合物の結晶の種類に応じて、それぞれに固有な反射(回折)された特性X線を検出(回折)できることを利用して、試料中の未知の化合物を同定することができる。多くの種類の結晶についての標準データが整備されており、ほとんどの化合物が同定される。

測定装置 理学電気株式会社製 ロータフレックス (RU-300型)	
測定条件	
① 使用X線	Cu-K α (波長 = 1.54178Å)
② K β 線の除去	グラファイト単結晶モノクロメーター
③ 管電圧・管電流	55kV・250mA
④ スキャンング・スピード	4.0°/min
⑤ サンプリング・インターバル	0.020°
⑥ D.S. スリット	1°
⑦ R.S. スリット	0.15mm
⑧ S.S. スリット	1°
⑨ 検出器	シンチレーション・カウンター

3. 調査結果および考察

分析調査結果を図表にまとめて249～253頁に示す。表1に調査試料と調査項目をまとめた。表2～7に試料の化学成分分析結果を、表8にX線回折結果を、表9に調査結果のまとめをそれぞれ示した。全試料の外観写真を256～264頁に、マクロ写真を264頁に、鉄滓等の顕微鏡組織を265～282頁に、金属組織の顕微鏡組織写真を283頁に、X線回折チャートを284～300頁にそれぞれ示す。

以下、試料の番号順に述べる。

試料 No. 1 鉄塊系遺物、着磁度：4、金属探知機反応：16mm以上

外観観察：外観写真を256頁に示す。重量87.0g、長さ61.8mm、幅39.4mm、厚さ27.8mm。X字のような形をした鉄塊系遺物で着磁度4、金属探知機反応が16mm以上を示すことから棒状の鉄塊が滓で結合したものと見られる。酸化土砂に覆われて茶褐色を呈しているが局所的に内部から染み出た錆汁の暗紫色で斑模様を呈している。ゴツゴツとした凹凸のある面で小さいがずっしりと重量感がある。上面側には粘土が付着し、下面側には3～5mm大の小石が付着している。滓は採取できないのでメタルを分析する。

マクロ観察：10倍の断面写真を264頁に示す。鉄塊の遺存状態は良好で白色のセメント組織と黒色のパーライト組織と見られる金属組織が観察される。

顕微鏡組織：メタルの顕微鏡組織写真を283頁に示す。ほぼ全域が灰黒色のパーライト組織に白色のセメント組織が析出した過共析鋼組織である。

化学成分：メタルの化学成分分析結果を表6～7に示す。Cは1.95%で過共析鋼組織の領域にあり顕微鏡で観察された結果と一致する。Siは0.059%、Alは0.027%、Tiは0.006%、Vは0.002%と少なく滓などの混入はほとんどない。Mnは0.002%、Cuは0.007%である。Pは0.087%、Sは0.040%である。

以上から本試料はCが1.95%の過共析鋼組織の鉄塊を含む鉄塊系遺物と見られる。

試料 No.2 鉄滓、着磁度：なし、金属探知機反応：なし

外観観察：外観写真を256頁に示す。重量16.4g、長さ46.6mm、幅28.8mm、厚さ17.2mm。不斉三角形を呈した扁平で軽量感のある鉄滓。内部から染み出た錆汁で暗紫色の斑模様を呈している。上面側には3～5mm大の小石が付着し、木炭痕も観察される。

顕微鏡組織：顕微鏡組織写真を265頁に示す。ウスタイト (Wustite:FeO) 組織、ファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織、及びウルボスピネル (Ulvo-spinel:2FeO·TiO₂) 組織等が観察される。

X線回折：結果を表8に示す。ウスタイト (Wustite:FeO) 組織の回折線が中強度に、ファイヤライ

ト (Fayalite: $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$) 組織、及びウルボスピネル (Ulvospinel: $2\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$) 組織の回折線が弱強度にそれぞれ認められる。

化学成分: 化学成分分析結果を表2～3に示す。全鉄51.9%に対して金属鉄は0.20%とわずかである。FeOは57.1%、 Fe_2O_3 は10.5%、 SiO_2 は19.2%、 Al_2O_3 は5.04%、 TiO_2 は2.07%で始発原料は砂鉄である。FeO- SiO_2 - TiO_2 の3成分系に換算するとFeOは76.1%、 SiO_2 は21.6%、 TiO_2 は2.3%となる。28頁のFeO- SiO_2 - TiO_2 系の平衡状態図ではウスタイト組織とファイヤライト組織の境界領域にあり平衡状態図上の位置は顕微鏡観察とほぼ一致する。図2～3は滓の成分的特徴から製鉄工程の生成位置等を検討する図である。図2～3で見ると本試料は砂鉄系製鉄の位置にある。以上から本試料は砂鉄を始発原料とする製鉄工程で生成した鉄滓と見られる。

試料No.3 鉄滓、着磁度：なし、金属探知機反応：なし

外観観察: 外観写真を256頁に示す。重量70.5g、長さ58.4mm、幅40.7mm、厚さ33.5mm。ずんぐりとした小山のような形状をした鉄滓。酸化土砂に覆われて茶褐色を呈しているが滓は黒色。上面側は滓が溶融した滑らかな曲面で発泡出生じた破孔がある。下面側は1～2mm大の気泡が点在したブツブツとした表面である。

顕微鏡組織: 顕微鏡写真を265頁に示す。ガラス質組織が主体でこの中に微細なメタル粒が観察される。

X線回折: 結果を表8に示す。クリストバライト (QuartzSiO_2) 組織の回折線が高強度に、ファイヤライト (Fayalite: $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$) 組織、及びマグネタイト (Magnetite: Fe_3O_4) 組織の回折線が弱強度にそれぞれ認められる。

化学成分: 化学成分分析結果を表2～3に示す。全鉄13.0%に対して金属鉄は0.09%とわずかである。FeOは2.90%、 Fe_2O_3 は15.3%、 SiO_2 は52.6%、 Al_2O_3 は21.0%、 TiO_2 は1.59%で始発原料は砂鉄である。FeO- SiO_2 - TiO_2 の3成分系に換算するとFeOは25.1%、 SiO_2 は72.7%、 TiO_2 は2.2%となる。28頁のFeO- SiO_2 - TiO_2 系の平衡状態図ではクリストバライト組織の領域にあり平衡状態図上の位置は顕微鏡観察とほぼ一致する。図2～3は滓の成分的特徴から製鉄工程の生成位置等を検討する図である。図2～3で見ると本試料は炉壁附着滓の位置にある。

以上から本試料は砂鉄を始発原料とする製鉄工程で生成した炉壁附着滓と見られる。

試料No.4 鉄滓、着磁度：1、金属探知機反応：2mm

外観観察: 外観写真を256頁に示す。重量28.5g、長さ54.2mm、幅37.7mm、厚さ26.6mm。不斉五角形状の軽量感のある鉄滓。上面側は滓であるが下面側は胎土であることから滓が付着した炉壁片と見られる。上面側は比較的平坦で1mm大の気泡が点在する厚さ5mm程度の滓が付着した面である。下面側は胎土面で亀裂が走り、表面には筋痕が点在し、6mm大の鉱物粒が散見される。

顕微鏡組織: 顕微鏡写真を266頁に示す。錆化鉄組織が主体で錆化で生じた粗大な気泡も多い。

X線回折: 結果を表8に示す。錆化鉄に由来するマグネタイト (Magnetite: Fe_3O_4) 組織やヘマタイト (Hematite: Fe_2O_3) の回折線が高強度にそれぞれ認められる。

化学成分: 化学成分分析結果を表2～3に示す。全鉄63.5%に対して金属鉄は0.22%とわずかである。FeOは21.5%、 Fe_2O_3 は66.6%、 SiO_2 は5.15%、 Al_2O_3 は1.35%、 TiO_2 は1.09%で始発原料は砂鉄である。FeO- SiO_2 - TiO_2 の3成分系に換算するとFeOは93.4%、 SiO_2 は5.5%、 TiO_2 は1.2%となる。図1のFeO- SiO_2 - TiO_2 系の平衡状態図ではマグネタイト組織の領域にあり平衡状態図上の位置は顕微鏡観

察とはほぼ一致する。図2～3は滓の成分的特徴から製鉄工程の生成位置等を検討する図であるが、本試料は錆化鉄が多く含まれ鉄滓による生成工程の位置付けは困難と判断。

以上から本試料は砂鉄を始発原料とする錆化鉄が多い鉄滓と見られる。

試料 No. 5 鉄滓、着磁度：なし、金属探知機反応：なし

外観観察：外観写真を257頁に示す。重量30.0g、長さ46.9mm、幅50.5mm、厚さ18.6mm。不斉台形状を呈した扁平で軽量感のある鉄滓。酸化土砂に覆われて茶褐色を呈している。上面側は滓が流動した緩やかな凹凸面で1mm大の気泡が点在している。下面側は比較的平坦で小石や砂が一面に付着している。

顕微鏡組織：顕微鏡組織写真を266頁に示す。ガラス質組織が主体で鉄滓組織は確認されない。

X線回折：結果を表8に示す。クリストバライト (Quartz:SiO₂) 組織やアノーサイト (Anorthite:CaOAl₂O₂SiO₂) の回折線が高強度にそれぞれ認められる。

化学成分：化学成分分析結果を表2～3に示す。全鉄9.34%に対して金属鉄は0.07%とわずかである。FeOは5.30%、Fe₂O₃は7.40%、SiO₂は60.4%、Al₂O₃は16.6%、TiO₂は0.78%で始発原料は砂鉄である。

FeO-SiO₂-TiO₂の3成分系に換算するとFeOは17.1%、SiO₂は81.8%、TiO₂は1.1%となる。図1のFeO-SiO₂-TiO₂系の平衡状態図ではクリストバライト組織の領域にあり平衡状態図上の位置は顕微鏡観察とはほぼ一致する。図2～3は滓の成分的特徴から製鉄工程の生成位置等を検討する図である。図2～3で見ると本試料は炉壁付着滓の位置にある。

以上から本試料は砂鉄を始発原料とする製錬工程で生成した炉壁付着滓と見られる。

試料 No. 6 鉄滓、着磁度：なし、金属探知機反応：なし

外観観察：外観写真を257頁に示す。重量14.6g、長さ67.1mm、幅19.2mm、厚さ10.6mm。螺旋形の棒状を呈した鉄滓。薄すらすらと粘土に覆われて灰黒色を呈しているが滓は黒色。上面側には発泡で生じた1mm大の気泡が点在し、下面側には3～5mm大の小石が巻き込まれている。

顕微鏡組織：顕微鏡組織写真を267頁に示す。ファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織、ウスタイト (Wustite:FeO) 組織、及びウルボスピネル (Ulvospinel:2FeO·TiO₂) 組織がそれぞれ観察される。

X線回折：結果を表8に示す。ファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織の回折線、及びウスタイト (Wustite:FeO) 組織の回折線が中強度に、ウルボスピネル (Ulvospinel:2FeO·TiO₂) 組織の回折線が弱強度にそれぞれ認められる。

化学成分：化学成分分析結果を表2～3に示す。全鉄47.1%に対して金属鉄は0.10%とわずかである。FeOは51.9%、Fe₂O₃は9.50%、SiO₂は23.0%、Al₂O₃は6.70%、TiO₂は2.10%で始発原料は砂鉄である。

FeO-SiO₂-TiO₂の3成分系に換算するとFeOは71.0%、SiO₂は26.6%、TiO₂は2.4%となる。図1のFeO-SiO₂-TiO₂系の平衡状態図ではウスタイト組織とファイヤライト組織の境界領域にあり平衡状態図上の位置は顕微鏡観察とはほぼ一致する。図2～3は滓の成分的特徴から製鉄工程の生成位置等を検討する図である。図2～3で見ると本試料は砂鉄系製錬滓の位置にある。

以上から本試料は砂鉄を始発原料とする製錬工程で生成した鉄滓と見られる。

試料 No. 7 鉄滓、着磁度：2、金属探知機反応：2mm

外観観察：外観写真を257頁に示す。重量10.4g、長さ31.6mm、幅30.0mm、厚さ16.7mm。上部に突起があ

る果のような形をした鉄滓。上面側は中央部が凸面で錆化で生じた錆汁の暗紫色で覆われ、3～5mm大の小石が付着している。下面側は比較的平坦で木炭痕が散見される。

顕微鏡組織：顕微鏡写真を267頁に示す。錆化鉄組織が主体で錆化で生じた粗大な気泡も多い。鉄滓組織は観察されない。

X線回折：結果を表8に示す。錆化鉄に由来するマグネタイト (Magnetite: Fe_3O_4) 組織の回折線が高強度に、ウスタイト (Wustite: FeO) 組織の回折線が弱強度にそれぞれ認められる。

化学成分：化学成分分析結果を表2～3に示す。全鉄59.4%に対して金属鉄は0.17%とわずかである。 FeO は23.0%、 Fe_2O_3 は59.1%、 SiO_2 は7.10%、 Al_2O_3 は1.84%、 TiO_2 は1.57%で始発原料は砂鉄である。 $\text{FeO}-\text{SiO}_2-\text{TiO}_2$ の3成分系に換算すると FeO は90.5%、 SiO_2 は7.8%、 TiO_2 は1.7%となる。図1の $\text{FeO}-\text{SiO}_2-\text{TiO}_2$ 系の平衡状態図ではマグネタイト組織の領域にあり平衡状態図上の位置は顕微鏡観察とほぼ一致する。図2～3は滓の成分的特徴から製鉄工程の生成位置等を検討する図である。図2～3で見ると本試料は砂鉄系製錬滓の位置にある。

以上から本試料は砂鉄を始発原料とする製錬工程で生成した鉄滓と見られる。

試料No.8 鉄滓、着磁度：1、金属探知機反応：なし

外観観察：外観写真を257頁に示す。重量1434.1g、長さ222.0mm、幅91.0mm、厚さ77.5mm。短冊状を呈したずっしりと重量感のある鉄滓。下面側は胎土であることから炉壁に付着した鉄滓と見られる。上面側は炉内側で滓が流動、発泡した凹凸の激しいゴツゴツとした面を呈している。酸化土砂に覆われて茶褐色を呈しているが局所的には錆汁の暗紫色を呈している。下面側は炉壁の胎土面で亀裂が走り、5～10mm大の鉱物粒が点在している。

顕微鏡組織：顕微鏡写真を268頁に示す。ガラス質組織と錆化鉄組織が主体であるが僅かにファイヤライト (Fayalite: $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$) 組織が観察される。

X線回折：結果を表8に示す。ガラス質組織のクリストバライト ($\text{Quartz}:\text{SiO}_2$) 組織の回折線が高強度に、錆化鉄に由来するマグネタイト (Magnetite: Fe_3O_4) 組織の回折線が中強度に、ファイヤライト (Fayalite: $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$) 組織の回折線が弱強度にそれぞれ認められる。

化学成分：化学成分分析結果を表2～3に示す。全鉄31.2%に対して金属鉄は0.11%とわずかである。 FeO は9.08%、 Fe_2O_3 は34.4%、 SiO_2 は35.1%、 Al_2O_3 は13.5%、 TiO_2 は0.95%で始発原料は砂鉄である。 $\text{FeO}-\text{SiO}_2-\text{TiO}_2$ の3成分系に換算すると FeO は54.6%、 SiO_2 は44.2%、 TiO_2 は1.2%となる。28頁の $\text{FeO}-\text{SiO}_2-\text{TiO}_2$ 系の平衡状態図ではクリストバライト組織の領域にあり平衡状態図上の位置は顕微鏡観察とほぼ一致する。図2～3は滓の成分的特徴から製鉄工程の生成位置等を検討する図である。図2～3で見ると本試料は砂鉄系製錬滓の位置にある。

以上から本試料は砂鉄を始発原料とする製錬工程で生じた鉄滓と見られる。

試料No.9 鉄滓、着磁度：なし、金属探知機反応：なし

外観観察：外観写真を258頁に示す。重量57.1g、長さ77.2mm、幅37.2mm、厚さ31.0mm。不斉台形状を呈した鉄滓。酸化土砂に覆われて茶褐色を呈しているが滓は黒色。上面側は比較的平坦で亀裂や1mm大の気泡が点在している。下面側には木炭痕があり表面は薄っすらと粘土で覆われている。

顕微鏡組織：顕微鏡写真を268頁に示す。ガラス質組織が主体であるが僅かにファイヤライト (Fayalite: $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$) 組織、ウルボスピネル (Ulvo-spinel: $2\text{FeO}\cdot\text{TiO}_2$) 組織等が観察される。

X線回折：結果を表8に示す。ガラス質組織のクリストバライト ($\text{Quartz}:\text{SiO}_2$) 組織の回折線が高強

度に、ファイヤライト (Fayalite: $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$) 組織の回折線が弱強度にそれぞれ認められる。

化学成分: 化学成分分析結果を表2～3に示す。全鉄19.2%に対して金属鉄は0.08%とわずかである。FeOは4.81%、 Fe_2O_3 は22.0%、 SiO_2 は45.9%、 Al_2O_3 は19.2%、 TiO_2 は1.33%で始発原料は砂鉄である。FeOn- SiO_2 - TiO_2 の3成分系に換算するとFeOnは36.2%、 SiO_2 は62.0%、 TiO_2 は1.8%となる。28頁のFeO- SiO_2 - TiO_2 系の平衡状態図ではクリストバライト組織の領域にあり平衡状態図上の位置は顕微鏡観察とはほぼ一致する。図2～3は滓の成分的特徴から製鉄工程の生成位置等を検討する図である。図2～3で見ると本試料は砂鉄系製鉄滓の位置にある。

以上から本試料は砂鉄を始発原料とする製鉄工程で生じた鉄滓と見られる。

試料No.10 鉄塊系遺物、着磁度：4、金属探知機反応：12mm

外観観察: 外観写真を258頁に示す。重量66.8g、長さ58.9mm、幅34.4mm、厚さ22.3mm。長円上のゴツゴツとした形状でずっしりと重量感があり、着磁度4、金属探知機反応が12mmを示すことから内部に鉄塊が存在すると見られる。上面側は内部から染み出た錆汁で覆われ暗紫色を呈している。3～5mm大の小石が付着している。下面側も錆汁で覆われ、中央部には錆化で膨張して生じたと思われる20mm大の瘤がある。

マクロ観察: 10倍の断面写真を264頁に示す。鉄塊の遺存状態は良好で白色のセメント組織と黒色のパーライト組織と見られる金属組織が観察される。

顕微鏡組織: メタルの顕微鏡組織写真を283頁に示す。ほぼ全域が灰黒色のパーライト組織に白色のセメント組織が析出した亜共晶鉄組織である。滓の顕微鏡組織写真を269頁に示す。錆化鉄組織が主体であるが僅かにファイヤライト (Fayalite: $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$) 組織が観察される。

X線回折: 結果を表8に示す。錆化鉄に由来するマグネタイト (Magnetite: Fe_3O_4) 組織の回折線が中強度に、ファイヤライト (Fayalite: $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$) 組織の回折線が弱強度にそれぞれ認められる。

化学成分: 滓の化学成分分析結果を表2～3に示す。全鉄46.9%に対して金属鉄は0.98%である。FeOは40.7%、 Fe_2O_3 は20.4%、 SiO_2 は20.9%、 Al_2O_3 は5.68%、 TiO_2 は3.06%で始発原料は砂鉄である。FeOn- SiO_2 - TiO_2 の3成分系に換算するとFeOnは71.8%、 SiO_2 は24.6%、 TiO_2 は3.6%となる。図1のFeO- SiO_2 - TiO_2 系の平衡状態図ではウスタイト組織とファイヤライト組織の境界領域にあり平衡状態図上の位置は顕微鏡観察とはほぼ一致する。図2～3は滓の成分的特徴から製鉄工程の生成位置等を検討する図であるが、本試料は錆化鉄が多く含まれ鉄滓による生成工程の位置付けは困難と判断。メタルの化学成分分析結果を表6～7に示す。Cは2.68%で亜共晶鉄組織の領域にあり顕微鏡で観察された結果と一致する。Siは0.003%、Alは0.002%、Tiは0.001%、Vは0.001%と少なく滓などの混入はほとんどない。Mnは<0.001%、Cuは0.003%である。Pは0.017%、Sは0.072%である。滓の化学成分分析結果を表2～3に示す。

以上から本試料は砂鉄を始発原料とするCが2.68%の亜共晶鉄組織の鉄塊を含む鉄塊系遺物と見られる。

試料No.11 鉄滓、着磁度：1、金属探知機反応：なし

外観観察: 外観写真を258頁に示す。重量984.8g、長さ148.2mm、幅137.3mm、厚さ38.6mm。不斉三角形の扁平な形状のずっしりと重量感のある鉄滓。上面側は酸化土砂に覆われて茶褐色を呈しているが滓は黒色で滓が溶融して発泡した凹凸の激しい曲面で構成されている。下面側は平坦で亀裂が走り3～5mm大の小石が一面に付着している。

顕微鏡組織：顕微鏡組織写真を269頁に示す。ファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織、ウスタイト (Wustite:FeO) 組織、及びウルボスピネル (Ulvospinel:2FeO·TiO₂) 組織がそれぞれ観察される。

X線回折：結果を表8に示す。ファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織の回折線が高強度に、ウスタイト (Wustite:FeO) 組織、及びウルボスピネル (Ulvospinel:2FeO·TiO₂) 組織の回折線が中強度にそれぞれ認められる。

化学成分：化学成分分析結果を表2～3に示す。全鉄49.8%に対して金属鉄は0.10%と僅かである。FeOは55.9%、Fe₂O₃は8.9%、SiO₂は19.9%、Al₂O₃は5.21%、TiO₂は3.10%で始発原料は砂鉄である。FeO- SiO_2 - TiO_2 の3成分系に換算するとFeOは73.8%、SiO₂は22.7%、TiO₂は3.5%となる。図1のFeO- SiO_2 - TiO_2 系の平衡状態図ではウスタイト組織とファイヤライト組織の境界領域にあり平衡状態図上の位置は顕微鏡観察とはほぼ一致する。図2～3は滓の成分的特徴から製鉄工程の生成位置等を検討する図である。図2～3で見ると本試料は砂鉄系製錬滓の位置にある。

以上から本試料は砂鉄を始発原料とする製錬工程で生成した鉄滓と見られる。

試料No.12 鉄滓、着磁度：3、金属探知機反応：8 mm

外観観察：外観写真を258頁に示す。重量23.5g、長さ29.4mm、幅26.9mm、厚さ15.8mm。不斉四角形状の小さいがずっしりと重量感がある鉄滓。着磁度3、金属探知機反応が8mmを示すことから滓の中に大きな粒鉄が存在すると見られる。上面側は酸化土砂に覆われて茶褐色を呈しているが滓は黒色。下面側は錆化で生じた錆汁の暗紫色に覆われ、錆化の膨張で生じたと思われる亀裂が走っている。

顕微鏡組織：顕微鏡組織写真を270頁に示す。ファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織、ウスタイト (Wustite:FeO) 組織、及びマグネタイト (Magnetite: Fe₃O₄) 組織がそれぞれ観察され、多くのメタルが点在している。

X線回折：結果を表8に示す。ファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織の回折線が高強度に、ウスタイト (Wustite:FeO) 組織、及びマグネタイト (Magnetite: Fe₃O₄) 組織の回折線が中強度にそれぞれ認められる。

化学成分：化学成分分析結果を表2～3に示す。全鉄57.8%に対して金属鉄は4.16%で微細なメタルが混入している。FeOは42.3%、Fe₂O₃は29.7%、SiO₂は14.3%、Al₂O₃は4.24%、TiO₂は0.79%で始発原料は砂鉄である。FeO- SiO_2 - TiO_2 の3成分系に換算するとFeOは82.7%、SiO₂は16.4%、TiO₂は0.9%となる。28頁のFeO- SiO_2 - TiO_2 系の平衡状態図ではウスタイト組織の領域にあり平衡状態図上の位置は顕微鏡観察とはほぼ一致する。図2～3は滓の成分的特徴から製鉄工程の生成位置等を検討する図である。図2～3で見ると本試料は砂鉄系製錬滓の位置にある。

以上から本試料は砂鉄を始発原料とする製錬工程で生成した鉄滓と見られる。

試料No.13 鉄滓、着磁度：なし、金属探知機反応：なし

外観観察：外観写真を259頁に示す。重量137.8g、長さ83.3mm、幅57.7mm、厚さ45.1mm。不斉三角形のサザエ工具のような形をした鉄滓。粘土で薄っすらと覆われ灰黒色を呈しているが滓は黒色。上面側は滓の溶融、発泡で生じた激しい凹凸面で13×17mm大の木炭痕がある。下面側は左端部がやや丸みを帯びた滓の流動面で大半は上面側と同様な発泡で生じた激しい凹凸面である。

顕微鏡組織：顕微鏡組織写真を270頁に示す。ファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織、及びウスタイト (Wustite:FeO) 組織がそれぞれ観察される。

X線回折: 結果を表8に示す。ファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織の回折線が中強度に、ウスタイト (Wustite:FeO) 組織の回折線が弱強度にそれぞれ認められる。

化学成分: 化学成分分析結果を表2～3に示す。全鉄37.6%に対して金属鉄は0.07%と僅かである。FeOは21.8%、Fe₂O₃は29.4%、SiO₂は29.9%、Al₂O₃は9.86%、TiO₂は1.55%で始発原料は砂鉄である。FeO_n-SiO₂-TiO₂の3成分系に換算するとFeOnは62.0%、SiO₂は36.2%、TiO₂は1.9%となる。28頁のFeO-SiO₂-TiO₂系の平衡状態図ではガラス質スラグの影響でファイヤライト組織とクリストバライト組織の境界領域にあり平衡状態図上の位置は顕微鏡観察と一致しない。図2～3は滓の成分的特徴から製鉄工程の生成位置等を検討する図である。図2～3で見ると本試料は砂鉄系製錬滓の位置にある。

以上から本試料は砂鉄を始発原料とする製錬工程で生じた鉄滓と見られる。

試料No.14 鉄滓、着磁度：なし、金属探知機反応：なし

外観観察: 外観写真を259頁に示す。重量98.2g、長さ83.0mm、幅52.5mm、厚さ16.6mm。不斉長方形を呈した比較的軽量感のある鉄滓。粘土で薄っすらと覆われて灰黒色を呈しているが滓は黒色である。上面側は比較的平坦で木炭灰があり上部は破面で3mm大の小石が多数付着している。下面側はゴツゴツとした形状の破孔面で構成され1mm大の気泡が点在している。

顕微鏡組織: 顕微鏡組織写真を271頁に示す。ほぼ全面がファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織で、微細なウルボスピネル (Ulvospinel:2FeO·TiO₂) 組織が点在して観察される。

X線回折: 結果を表8に示す。ファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織の回折線が高強度に認められる。

化学成分: 化学成分分析結果を表2～3に示す。全鉄37.4%に対して金属鉄は0.10と僅かである。FeOは26.2%、Fe₂O₃は24.2%、SiO₂は30.2%、Al₂O₃は10.2%、TiO₂は1.58%で始発原料は砂鉄である。FeO_n-SiO₂-TiO₂の3成分系に換算するとFeOnは61.3%、SiO₂は36.7%、TiO₂は1.9%となる。図1のFeO-SiO₂-TiO₂系の平衡状態図ではガラス質スラグの影響でクリストバライト組織の境界領域にあり平衡状態図上の位置は顕微鏡観察と一致しない。図2～3は滓の成分的特徴から製鉄工程の生成位置等を検討する図である。図2～3で見ると本試料は砂鉄系製錬滓の位置にある。

以上から本試料は砂鉄を始発原料とする製錬工程で生じた鉄滓と見られる。

試料No.15 鉄滓、着磁度：4、金属探知機反応：3mm

外観観察: 外観写真を259頁に示す。重量26.9g、長さ47.4mm、幅30.1mm、厚さ22.4mm。不斉菱形のような形をした鉄滓。上面側はゴツゴツとした粗野な面で内部から染み出た錆汁の暗紫色で覆われている。下面側は酸化土砂に覆われた茶褐色の部分と黒色の滓の部分とほぼ半々である。滓側には1～3mm大の気泡が点在している。

顕微鏡組織: 顕微鏡組織写真を271頁に示す。錆化鉄組織が主体で鉄滓は観察されない。

X線回折: 結果を表8に示す。錆化鉄に由来するマグネタイト (Magnetite: Fe₃O₄) 組織の回折線が高強度に、ウスタイト (Wustite:FeO) 組織の回折線が弱強度にそれぞれ認められる。

化学成分: 化学成分分析結果を表2～3に示す。全鉄69.2%に対して金属鉄は0.18%とわずかである。FeOは49.2%、Fe₂O₃は44.0%、SiO₂は3.45%、Al₂O₃は0.74%、TiO₂は0.58%で始発原料は砂鉄と見られる。FeO_n-SiO₂-TiO₂の3成分系に換算するとFeOnは95.9%、SiO₂は3.5%、TiO₂は0.6%となる。図1のFeO-SiO₂-TiO₂系の平衡状態図ではマグネタイト組織の領域にあり平衡状態図上の位置

は顕微鏡観察とはほぼ一致する。図2～3は滓の成分的特徴から製鉄工程の生成位置等を検討する図であるが、本試料は錆化鉄が多く含まれ鉄滓による生成工程の位置付けは困難と判断。

以上から本試料は砂鉄を始発原料とする錆化鉄が多い鉄滓と見られる。

試料No.16 鉄滓、着磁度：1、金属探知機反応：なし

外観観察：外観写真を259頁に示す。重量88.6g、長さ53.8mm、幅40.7mm、厚さ26.4mm。粘土が薄っすらと付着して灰黒色を呈した楕円状でずっしりと重量感のある鉄滓。上面側は1mm大の気泡が点在し中央部が丸みを帯びて窪んでいる。下面側は比較的平坦で1～3mm大の小石が付着している。

顕微鏡組織：顕微鏡組織写真を272頁に示す。ファイヤライト (Fayalite: $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$) 組織、マグネタイト (Magnetite: Fe_3O_4) 組織、及びウスタイト (Wustite: FeO) 組織がそれぞれ観察される。

X線回折：結果を表8に示す。ファイヤライト (Fayalite: $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$) 組織の回折線が中強度に、ウスタイト (Wustite: FeO) 組織、及びマグネタイト (Magnetite: Fe_3O_4) 組織の回折線が弱強度にそれぞれ認められる。

化学成分：化学成分分析結果を表2～3に示す。全鉄50.3%に対して金属鉄は0.04%と僅かである。 FeO は52.4%、 Fe_2O_3 は13.6%、 SiO_2 は21.6%、 Al_2O_3 は6.32%、 TiO_2 は1.15%で始発原料は砂鉄である。 FeO - SiO_2 - TiO_2 の3成分系に換算すると FeO は74.4%、 SiO_2 は24.3%、 TiO_2 は1.3%となる。図1の FeO - SiO_2 - TiO_2 系の平衡状態図ではファイヤライト組織の領域にあり平衡状態図上の位置は顕微鏡観察とはほぼ一致する。図2～3は滓の成分的特徴から製鉄工程の生成位置等を検討する図である。図2～3で見ると本試料は砂鉄系製錬滓の位置にある。

以上から本試料は砂鉄を始発原料とする製錬工程で生成した鉄滓と見られる。

試料No.17 鉄滓、着磁度：2、金属探知機反応：3mm

外観観察：外観写真を260頁に示す。重量34.2g、長さ51.6mm、幅32.3mm、厚さ13.0mm。不斉三角形の小山のような形状で軽量感のある鉄滓。錆汁で覆われて暗紫色の斑模様を呈している。上面側には錆化による膨張で生じた瘤や木炭痕が観察される。下面側は中央部が窪んだ形状で3～5mm大の小石が多数巻き込まれている。底部には8×10mm大の比較的大きな木炭痕がある。

顕微鏡組織：顕微鏡組織写真を272頁に示す。写真には記載していない錆化鉄組織に混じり凝集したウスタイト (Wustite: FeO) 組織が観察される。

X線回折：結果を表8に示す。錆化鉄に由来するマグネタイト (Magnetite: Fe_3O_4) 組織の回折線が高強度に、ウスタイト (Wustite: FeO) 組織の回折線が弱強度にそれぞれ認められる。

化学成分：化学成分分析結果を表2～3に示す。全鉄50.5%に対して金属鉄は0.17%と僅かである。 FeO は30.5%、 Fe_2O_3 は38.1%、 SiO_2 は22.7%、 Al_2O_3 は1.85%、 TiO_2 は1.12%で始発原料は砂鉄である。 FeO - SiO_2 - TiO_2 の3成分系に換算すると FeO は74.2%、 SiO_2 は24.6%、 TiO_2 は1.2%となる。図1の FeO - SiO_2 - TiO_2 系の平衡状態図ではファイヤライト組織の領域にあり平衡状態図上の位置は顕微鏡観察とはほぼ一致する。図2～3は滓の成分的特徴から製鉄工程の生成位置等を検討する図である。図2～3で見ると本試料は砂鉄系製錬滓の位置にある。

以上から本試料は砂鉄を始発原料とする製錬工程で生成した鉄滓と見られる。

試料No.18 鉄滓、着磁度：なし、金属探知機反応：なし

外観観察：外観写真を260頁に示す。重量244.6g、長さ115.1mm、幅74.3mm、厚さ40.5mm。不斉菱形のよ

うな形状の扁平な鉄滓。粘土で薄っすらと覆われて灰黒色を呈しているが滓は黒色。上面側は滓が流動して生じた丸みを帯びた曲面で1～5mm大の気泡が点在している。下面側は比較的平坦で小石や礫が多数巻き込まれている。

顕微鏡組織：顕微鏡組織写真を273頁に示す。ファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織、及びウスタイト (Wustite:FeO) 組織、メタル粒等がそれぞれ観察される。

X線回折：結果を表8に示す。ファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織、及びウスタイト (Wustite:FeO) 組織の回折線が中強度にそれぞれ認められる。

化学成分：化学成分分析結果を表2～3に示す。全鉄51.9%に対して金属鉄は0.09%と僅かである。FeOは57.3%、Fe₂O₃は10.4%、SiO₂は19.9%、Al₂O₃は6.25%、TiO₂は1.15%で始発原料は砂鉄である。

FeOn-SiO₂-TiO₂の3成分系に換算するとFeOnは76.3%、SiO₂は22.4%、TiO₂は1.3%となる。図1のFeO-SiO₂-TiO₂系の平衡状態図ではファイヤライト組織の領域にあり平衡状態図上の位置は顕微鏡観察とはほぼ一致する。図2～3は滓の成分的特徴から製鉄工程の生成位置等を検討する図である。図2～3で見ると本試料は砂鉄系製錬滓の位置にある。

以上から本試料は砂鉄を始発原料とする製錬工程で生成した鉄滓と見られる。

試料No.19 鉄滓、着磁度：1、金属探知機反応：なし

外観観察：外観写真260頁に示す。重量46.2g、長さ50.7mm、幅36.1mm、厚さ23.6mm。酸化土砂に覆われて茶褐色を呈しているが滓は黒色。上面側は中央部が窪んだ形をし木炭痕が点在している。下面側は凸面で1～5mm大の小石が多数付着している。

顕微鏡組織：顕微鏡組織写真を273頁に示す。凝集したウスタイト (Wustite:FeO) 組織、ファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織、及び微細なウルボスピネル (Ulvospinel:2FeO·TiO₂) 組織等がそれぞれ観察される。

X線回折：結果を表8に示す。ウスタイト (Wustite:FeO) 組織、及びファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織の回折線が中強度に、ウルボスピネル (Ulvospinel:2FeO·TiO₂) 組織の回折線が弱強度にそれぞれ認められる。

化学成分：化学成分分析結果を表2～3に示す。全鉄53.1%に対して金属鉄は8.68%とメタルが混入している。FeOは47.9%、Fe₂O₃は10.3%、SiO₂は20.1%、Al₂O₃は4.53%、TiO₂は1.83%で始発原料は砂鉄である。FeOn-SiO₂-TiO₂の3成分系に換算するとFeOnは72.6%、SiO₂は25.1%、TiO₂は2.3%となる。図1のFeO-SiO₂-TiO₂系の平衡状態図ではファイヤライト組織の領域にあり平衡状態図上の位置は顕微鏡観察とはほぼ一致する。図2～3は滓の成分的特徴から製鉄工程の生成位置等を検討する図である。図2～3で見ると本試料は砂鉄系製錬滓の位置にある。

以上から本試料は砂鉄を始発原料とする製錬工程で生成した鉄滓と見られる。

試料No.20 鉄滓、着磁度：なし、金属探知機反応：なし

外観観察：外観写真を260頁に示す。重量120.5g、長さ70.4mm、幅55.4mm、厚さ24.7mm。ずっしりと重量感のある鉄滓。上面側は粘土で薄っすらと覆われて灰黒色を呈し、ブツブツとした形状の凹凸のある面と比較的平坦な褶曲面で構成され、1～5mm大の気泡が点在している。下面側は酸化土砂に覆われて茶褐色を呈し中央部がやや窪んだ形状である。

顕微鏡組織：顕微鏡組織写真を274頁に示す。ファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織、ウスタイト (Wustite:FeO) 組織等がそれぞれ観察される。

X線回折: 結果を表8に示す。ファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織の回折線が高強度に、ウスタイト (Wustite:FeO) 組織の回折線が中強度にそれぞれ認められる。

化学成分: 化学成分分析結果を表2～3に示す。全鉄47.3%に対して金属鉄は2.11%とメタルが混入している。FeOは48.4%、Fe₂O₃は10.8%、SiO₂は26.1%、Al₂O₃は6.49%、TiO₂は0.97%で始発原料は砂鉄である。FeO- SiO_2 -TiO₂の3成分系に換算するとFeOは68.6%、SiO₂は30.2%、TiO₂は1.1%となる。図1のFeO-SiO₂-TiO₂系の平衡状態図ではファイヤライト組織の領域にあり平衡状態図上の位置は顕微鏡観察とはほぼ一致する。図2～3は滓の成分的特徴から製鉄工程の生成位置等を検討する図である。図2～3で見ると本試料は砂鉄系製鉄滓の位置にある。

以上から本試料は砂鉄を始発原料とする製鉄工程で生成した鉄滓と見られる。

試料No.21 鉄滓、着磁度：なし、金属探知機反応：なし

外観観察: 外観写真を261頁に示す。重量87.0g、長さ107.3mm、幅22.0mm、厚さ19.3mm。粘土で薄つすらと覆われて灰黒色を呈したずっしりと重量感のある棒状の鉄滓。上面側は凸面で構成され5～7mm大の白色の小石が点在して付着している。下面側は中央部が線状に窪んだ形状で1mm大の気泡が点在している。

顕微鏡組織: 顕微鏡組織写真を274頁に示す。ファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織、ウスタイト (Wustite:FeO) 組織等がそれぞれ観察される。メタル粒も観察される。

X線回折: 結果を表8に示す。ファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織、及びウスタイト (Wustite:FeO) 組織の回折線が中強度にそれぞれ認められる。

化学成分: 化学成分分析結果を表2～3に示す。全鉄53.0%に対して金属鉄は0.28%と僅かである。FeOは60.1%、Fe₂O₃は8.6%、SiO₂は19.9%、Al₂O₃は5.35%、TiO₂は1.11%で始発原料は砂鉄である。FeO- SiO_2 -TiO₂の3成分系に換算するとFeOは76.6%、SiO₂は22.2%、TiO₂は1.2%となる。図1のFeO-SiO₂-TiO₂系の平衡状態図ではファイヤライト組織の領域にあり平衡状態図上の位置は顕微鏡観察とはほぼ一致する。図2～3は滓の成分的特徴から製鉄工程の生成位置等を検討する図である。図2～3で見ると本試料は砂鉄系製鉄滓の位置にある。

以上から本試料は砂鉄を始発原料とする製鉄工程で生成した鉄滓と見られる。

試料No.22 鉄滓、着磁度：1、金属探知機反応：なし

外観観察: 外観写真を261頁に示す。重量1162.4g、長さ152.9mm、幅96.5mm、厚さ48.7mm。粘土と錆汁で覆われたずっしりと重量感のある鉄滓。上面側は滓が流動して生じた丸みのある凹凸面で1mm大の気泡が点在している。下面側は泥で覆われた平坦な面で3～5mm大の小石が一面に付着している。

顕微鏡組織: 顕微鏡組織写真を275頁に示す。ファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織、ウスタイト (Wustite:FeO) 組織等がそれぞれ観察される。

X線回折: 結果を表8に示す。ファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織の回折線が高強度に、ウスタイト (Wustite:FeO) 組織の回折線が弱強度にそれぞれ認められる。

化学成分: 化学成分分析結果を表2～3に示す。全鉄39.3%に対して金属鉄は0.14%と僅かである。FeOは39.2%、Fe₂O₃は12.4%、SiO₂は30.4%、Al₂O₃は9.05%、TiO₂は1.20%で始発原料は砂鉄である。FeO- SiO_2 -TiO₂の3成分系に換算するとFeOは62.0%、SiO₂は36.5%、TiO₂は1.4%となる。図1のFeO-SiO₂-TiO₂系の平衡状態図ではファイヤライト組織とクリストバライト組織の境界領域にあり平衡状態図上の位置は顕微鏡観察とはほぼ一致する。図2～3は滓の成分的特徴から製鉄工程の

生成位置等を検討する図である。図2～3で見ると本試料は砂鉄系製錬滓の位置にある。

以上から本試料は砂鉄を始発原料とする製錬工程で生成した鉄滓と見られる。

試料No.23 鉄滓、着磁度：なし、金属探知機反応：なし

外観観察：外観写真を261頁に示す。重量305.3g、長さ82.2mm、幅74.7mm、厚さ26.6mm。ずっしりと重量感がある扁平な鉄滓。上面側は滓が流動した緩やかな曲面で構成される。下面側は比較的凹凸がある面で構成されており、5～7mm大の木炭痕や5～10mm大の小石が点在している。破面は2、破面で見ると緻密な組織で1mm大の気泡は観察されない。

顕微鏡組織：顕微鏡組織写真を275頁に示す。ファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織、ウスタイト (Wustite:FeO) 組織等がそれぞれ観察され金属粒も多数存在する。

X線回折：結果を表8に示す。ファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織の回折線が高强度に、ウスタイト (Wustite:FeO) 組織の回折線が中強度にそれぞれ認められる。

化学成分：化学成分分析結果を表2～3に示す。全鉄49.0%に対して金属鉄は0.21%と僅かである。FeOは56.4%、Fe₂O₃は7.1%、SiO₂は22.6%、Al₂O₃は6.86%、TiO₂は1.32%で始発原料は砂鉄である。FeO_n-SiO₂-TiO₂の3成分系に換算するとFeOnは72.6%、SiO₂は25.9%、TiO₂は1.5%となる。図1のFeO-SiO₂-TiO₂系の平衡状態図ではファイヤライト組織の領域にあり平衡状態図上の位置は顕微鏡観察とはほぼ一致する。図2～3は滓の成分的特徴から製鉄工程の生成位置等を検討する図である。図2～3で見ると本試料は砂鉄系製錬滓の位置にある。

以上から本試料は砂鉄を始発原料とする製錬工程で生成した鉄滓と見られる。

試料No.24 鉄滓、着磁度：4、金属探知機反応：16mm

外観観察：外観写真を261頁に示す。重量92.2g、長さ52.2mm、幅42.8mm、厚さ33.2mm。酸化土砂に覆われて茶褐色を呈したずっしりと重量感のある鉄滓。着磁度4、金属探知機反応が16mmを示していることから鉄塊に滓が付着した鉄塊系遺物と見られる。上面側は丸みのある凸面が多いことから鉄塊に滓が付着した面と見られる。下面側は鉄塊と見られ内部から染み出た錆汁で覆われている。

顕微鏡組織：顕微鏡写真を276頁に示す。写真には記載していないが錆化鉄組織が多い中でファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織、及びウスタイト (Wustite:FeO) 組織等がそれぞれ観察される。

X線回折：結果を表8に示す。錆化鉄に由来するマグネタイト (Magnetite: Fe₃O₄) 組織、ファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織、及びウスタイト (Wustite:FeO) 組織の回折線が中強度にそれぞれ認められる。

化学成分：化学成分分析結果を表2～3に示す。全鉄56.2%に対して金属鉄は0.94%である。FeOは43.5%、Fe₂O₃は30.7%、SiO₂は14.5%、Al₂O₃は4.50%、TiO₂は0.69%で始発原料は砂鉄と見られる。FeO_n-SiO₂-TiO₂の3成分系に換算するとFeOnは83.0%、SiO₂は16.2%、TiO₂は0.8%となる。図1のFeO-SiO₂-TiO₂系の平衡状態図ではマグネタイト組織の領域にあり平衡状態図上の位置は顕微鏡観察とはほぼ一致する。図2～3は滓の成分的特徴から製鉄工程の生成位置等を検討する図であるが、本試料は錆化鉄が多く含まれ鉄滓による生成工程の位置付けは困難と判断。

以上から本試料は砂鉄を始発原料とする錆化鉄が多い鉄滓と見られる。

試料No.25 鉄滓、着磁度：2、金属探知機反応：なし

外観観察: 外観写真を262頁に示す。重量58.4g、長さ54.3mm、幅49.1mm、厚さ35.0mm。中央部に突起がある不斉三角形のずんぐりとした重量感のある鉄滓。上面側には1mm大の気泡が点在し、内部から滲み出た錆汁で生じた暗紫色の斑模様がある。下面側は中央部が凸面で構成され1mm大の小石が付着している。

顕微鏡組織: 顕微鏡組織写真を276頁に示す。写真には記載していないが錆化鉄組織やガラス質組織が多い中でファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織、及び微細なマグネタイト (Magnetite: Fe₃O₄) 組織等がそれぞれ観察される。

X線回折: 結果を表8に示す。クリストバライト (Quartz:SiO₂) 組織、及び錆化で生じたマグネタイト (Magnetite: Fe₃O₄) 組織の回折線が中強度に、錆化で生じたゲーサイト (Goethite:Fe (OOH) 3) 組織やファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織の回折線が弱強度にそれぞれ認められる。

化学成分: 化学成分分析結果を表2～3に示す。全鉄28.4%に対して金属鉄は0.37%とわずかである。FeOは16.8%、Fe₂O₃は21.4%、SiO₂は40.8%、Al₂O₃は12.2%、TiO₂は0.76%で始発原料は砂鉄と見られる。FeO_n-SiO₂-TiO₂の3成分系に換算するとFeO_nは47.9%、SiO₂は51.2%、TiO₂は1.0%となる。図1のFeO-SiO₂-TiO₂系の平衡状態図ではクリストバライト組織の領域にあり平衡状態図上の位置は顕微鏡観察とほぼ一致する。図2～3は滓の成分的特徴から製鉄工程の生成位置等を検討する図である。図2～3で見ると本試料は砂鉄系製錬滓の位置にある。

以上から本試料は砂鉄を始発原料とする製錬工程で生じた鉄滓と見られる。

試料No.26 鉄滓、着磁度：1、金属探知機反応：なし

外観観察: 外観写真を262頁に示す。重量17.8、長さ40.6mm、幅21.1mm、厚さ18.1mm。軽量感のある鉄滓で酸化土砂に覆われて茶褐色を呈している。上面側の下部は内部から染み出た錆汁で暗紫色の斑状を呈し、下面側は比較的ゴツゴツとした質感。

顕微鏡組織: 顕微鏡写真を277頁に示す。錆化鉄組織、凝集ウスタイト (Wustite:FeO) 組織、及びファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織等がそれぞれ観察される。

X線回折: 結果を表8に示す。錆化鉄に由来するマグネタイト (Magnetite: Fe₃O₄) 組織、及びウスタイト (Wustite:FeO) 組織の回折線が中強度に、ゲーサイト (Goethite:Fe(OOH)₃)、及びファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織の回折線が弱強度にそれぞれ認められる。

化学成分: 化学成分分析結果を表2～3に示す。全鉄66.8%に対して金属鉄は0.10%と僅かである。FeOは59.4%、Fe₂O₃は29.3%、SiO₂は6.24%、Al₂O₃は1.32%、TiO₂は0.62%で始発原料は砂鉄と見られる。FeO_n-SiO₂-TiO₂の3成分系に換算するとFeO_nは92.8%、SiO₂は6.5%、TiO₂は0.6%となる。図1のFeO-SiO₂-TiO₂系の平衡状態図ではマグネタイト組織の領域にあり平衡状態図上の位置は顕微鏡観察とほぼ一致する。図2～3は滓の成分的特徴から製鉄工程の生成位置等を検討する図であるが、本試料は錆化鉄が多く含まれ鉄滓による生成工程の位置付けは困難と判断。

以上から本試料は砂鉄を始発原料とする錆化鉄が多い鉄滓と見られる。

試料No.27 鉄滓、着磁度：なし、金属探知機反応：なし

外観観察: 外観写真を262頁に示す。重量294.1g、長さ109.8mm、幅63.4mm、厚さ60.10mm。不斉長方形の形状を呈した炉壁に付着した鉄滓。酸化土砂に覆われてやや赤味を帯びた暗紫色を呈しているが滓は黒色。上面側は滓が溶融して生じた凹凸のある曲面で10mm大の破孔や3mm大の気泡が点在している。下面側は胎土で木炭痕が多数観察される。

顕微鏡組織：顕微鏡写真を277頁に示す。ガラス質組織が主体であるが僅かにウスタイト (Wustite:FeO) 組織が観察される。

X線回折：結果を表8に示す。ガラス質組織のクリストバライト (Quartz:SiO₂) 組織の回折線が高強度に、ウスタイト (Wustite:FeO) 組織の回折線が弱強度にそれぞれ認められる。

化学成分：化学成分分析結果を表2～3に示す。全鉄15.5%に対して金属鉄は0.06%とわずかである。FeOは3.95%、Fe₂O₃は17.7%、SiO₂は52.5%、Al₂O₃は18.6%、TiO₂は0.78%で始発原料は砂鉄である。FeO_n-SiO₂-TiO₂の3成分系に換算するとFeO_nは28.9%、SiO₂は70.1%、TiO₂は1.0%となる。図1のFeO-SiO₂-TiO₂系の平衡状態図ではクリストバライト組織の領域にあり平衡状態図上の位置は顕微鏡観察とほぼ一致する。図2～3は滓の成分的特徴から製鉄工程の生成位置等を検討する図である。図2～3で見ると本試料は炉壁付着滓の位置にある。

以上から本試料は砂鉄を始発原料とする製錬工程で生成した炉壁付着滓と見られる。

試料No.28 鉄滓、着磁度：2、金属探知機反応：3mm

外観観察：外観写真を262頁に示す。重量53.4、長さ57.0mm、幅42.5mm、厚さ25.7mm。ゴツゴツとした岩山のような鉄滓。酸化土砂と内部から染み出た錆汁に覆われて暗赤紫色を呈しているが滓は黒色。鉄滓の薄片が結合したと見られるようにゴツゴツとした複雑な形状を呈している。

顕微鏡組織：顕微鏡写真を278頁に示す。錆化鉄組織、凝集ウスタイト (Wustite:FeO) 組織、及びファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織等がそれぞれ観察される。

X線回折：結果を表8に示す。ウスタイト (Wustite:FeO) 組織、及び錆化鉄に由来するマグネタイト (Magnetite: Fe₃O₄) 組織の回折線が高強度に、ファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織の回折線が中強度に、ゲーサイト (Goethite:Fe(OOH)₃) 組織の回折線が弱強度にそれぞれ認められる。

化学成分：化学成分分析結果を表2～3に示す。全鉄61.8%に対して金属鉄は0.20%と僅かである。FeOは45.8%、Fe₂O₃は37.2%、SiO₂は9.36%、Al₂O₃は2.71%、TiO₂は0.60%で始発原料は砂鉄と見られる。FeO_n-SiO₂-TiO₂の3成分系に換算するとFeO_nは89.3%、SiO₂は10.1%、TiO₂は0.6%となる。図1のFeO-SiO₂-TiO₂系の平衡状態図ではマグネタイト組織の領域にあり平衡状態図上の位置は顕微鏡観察とほぼ一致する。図2～3は滓の成分的特徴から製鉄工程の生成位置等を検討する図であるが、本試料は錆化鉄が多く含まれ鉄滓による生成工程の位置付けは困難と判断。

以上から本試料は砂鉄を始発原料とする錆化鉄が多い鉄滓と見られる。

試料No.29 鉄滓、着磁度：なし、金属探知機反応：なし

外観観察：外観写真を263頁に示す。重量218.2、長さ54.3mm、幅55.9mm、厚さ54.1mm。板状でずっしりと重量感のある鉄滓。薄っすらと酸化土砂に覆われて暗赤紫色を呈しているが滓は黒色。上面側は比較的平坦で滓が流動した筋状の模様を観察される。下面側は破面で、緻密な組織で小気泡はほとんどなく集合した20～30mm大の粗大な気泡が観察される。

顕微鏡組織：顕微鏡写真を278頁に示す。ウスタイト (Wustite:FeO) 組織、ファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織、及びメタル粒等がそれぞれ観察される。

X線回折：結果を表8に示す。ファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織、及びウスタイト (Wustite:FeO) 組織の回折線が中強度にそれぞれ認められる。

化学成分：化学成分分析結果を表2～3に示す。全鉄49.6%に対して金属鉄は0.17%と僅かである。FeOは56.8%、Fe₂O₃は7.5%、SiO₂は22.8%、Al₂O₃は6.75%、TiO₂は1.03%で始発原料は砂鉄である。

FeO_n-SiO₂-TiO₂の3成分系に換算するとFeO_nは73.0%、SiO₂は25.9%、TiO₂は1.2%となる。図1のFeO-SiO₂-TiO₂系の平衡状態図ではファイヤライト組織の領域にあり平衡状態図上の位置は顕微鏡観察とはほぼ一致する。図2～3は滓の成分的特徴から製鉄工程の生成位置等を検討する図である。図2～3で見ると本試料は砂鉄系製煉滓の位置にある。

以上から本試料は砂鉄を始発原料とする製煉工程で生成した鉄滓と見られる。

試料No.30 鉄滓、着磁度：なし、金属探知機反応：なし

外観観察：外観写真を263頁に示す。重量427.0、長さ116.6mm、幅83.5mm、厚さ26.4mm。不斉五角形状を呈した扁平でずっしりと重量感のある鉄滓。酸化土砂に覆われて茶褐色を呈しているが滓は黒色。上面側は中央部が窪み、下面側は緩やかな凸面で3～5mm大の小石が巻き込まれている。碗形滓の破片と見られる。

顕微鏡組織：顕微鏡写真を279頁に示す。ファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織、及びウスタイト (Wustite:FeO) 組織等がそれぞれ観察される。

X線回折：結果を表8に示す。ファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織、及びウスタイト (Wustite:FeO) 組織の回折線が中強度にそれぞれ認められる。

化学成分：化学成分分析結果を表2～3に示す。全鉄49.0%に対して金属鉄は0.10%と僅かである。FeOは53.1%、Fe₂O₃は10.9%、SiO₂は23.7%、Al₂O₃は6.77%、TiO₂は0.88%で始発原料は砂鉄と見られる。FeO_n-SiO₂-TiO₂の3成分系に換算するとFeO_nは72.3%、SiO₂は26.8%、TiO₂は1.0%となる。図1のFeO-SiO₂-TiO₂系の平衡状態図ではファイヤライト組織の領域にあり平衡状態図上の位置は顕微鏡観察とはほぼ一致する。図2～3は滓の成分的特徴から製鉄工程の生成位置等を検討する図である。図2～3で見ると本試料は砂鉄系製煉滓の位置にある。

以上から本試料は砂鉄を始発原料とする製煉工程で生成した鉄滓と見られる。

試料No.31 鉄塊系遺物、着磁度：2、金属探知機反応：3mm

外観観察：外観写真を263頁に示す。重量38.5、長さ51.2mm、幅32.2mm、厚さ28.9mm。不斉三角形状でゴツゴツとした小山のような鉄滓。内部から染み出た錆汁で暗紫色を呈している。上面側の上部には10×13mm大の木炭痕がある。鉄塊に滓が付着した鉄塊系遺物と見られる。

顕微鏡組織：顕微鏡写真を279頁に示す。錆化鉄組織が主体で僅かながら、ファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織、及びウスタイト (Wustite:FeO) 組織等が観察される。

X線回折：結果を表8に示す。錆化鉄に由来するマグネタイト (Magnetite: Fe₃O₄) 組織の回折線が高強度に、ウスタイト (Wustite:FeO) 組織、ファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織、及びゲーサイト (Goethite:Fe(OOH)₃) 組織の回折線が弱強度にそれぞれ認められる。

化学成分：化学成分分析結果を表2～3に示す。全鉄57.5%に対して金属鉄は0.18%と僅かである。FeOは18.3%、Fe₂O₃は61.6%、SiO₂は9.23%、Al₂O₃は2.68%、TiO₂は0.32%で始発原料は砂鉄か否かは判断できない。FeO_n-SiO₂-TiO₂の3成分系に換算するとFeO_nは89.3%、SiO₂は10.3%、TiO₂は0.4%となる。図1のFeO-SiO₂-TiO₂系の平衡状態図ではマグネタイト組織の領域にあり平衡状態図上の位置は顕微鏡観察とはほぼ一致する。図2～3は滓の成分的特徴から製鉄工程の生成位置等を検討する図であるが、本試料は錆化鉄が多く含まれ鉄滓による生成工程の位置付けは困難と判断。

以上から本試料は砂鉄を始発原料とする錆化鉄が多い鉄滓と見られる。

試料No.32 鉄滓、着磁度：4、金属探知機反応：6～8mm

外観観察：外観写真を263頁に示す。重量128.1、長さ80.2mm、幅53.6mm、厚さ23.7mm。長円状で中央部がやや窪んだ扁平でずっしりと重量感のある鉄塊系遺物。着磁度4、金属探知機反応が6～8mmを示すことから内部に鉄塊の存在が伺われる。上面側の窪んだ部分は錆汁で暗紫色を呈し、下面側はやや黒ずんだ滓の色彩で1mm大の気泡が点在している。

顕微鏡組織：顕微鏡写真を280頁に示す。写真は記載していないが錆化鉄組織が主体でこの中に僅かながら、ファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織、及びウスタイト (Wustite:FeO) 組織等が観察される。

X線回折：結果を表8に示す。錆化鉄に由来するマグネタイト (Magnetite: Fe₃O₄) 組織の回折線が中強度に、ウスタイト (Wustite:FeO) 組織、ファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織、及びゲーサイト (Goethite:Fe(OOH)₃) 組織の回折線が弱強度にそれぞれ認められる。

化学成分：化学成分分析結果を表2～3に示す。全鉄60.6%に対して金属鉄は0.22%と僅かである。FeOは53.6%、Fe₂O₃は26.3%、SiO₂は11.6%、Al₂O₃は2.50%、TiO₂は0.63%で始発原料は砂鉄か否かは判断できない。FeO- SiO₂- TiO₂の3成分系に換算するとFeOは86.8%、SiO₂は12.5%、TiO₂は0.7%となる。図1のFeO-SiO₂-TiO₂系の平衡状態図ではマグネタイト組織の領域にあり平衡状態図上の位置は顕微鏡観察とはほぼ一致する。図2～3は滓の成分的特徴から製鉄工程の生成位置等を検討する図であるが、本試料は錆化鉄が多く含まれ鉄滓による生成工程の位置付けは困難と判断。

以上から本試料は砂鉄を始発原料とする錆化鉄が多い鉄滓と見られる。

試料No.33 鉄滓、着磁度：1、金属探知機反応：なし

外観観察：外観写真を264頁に示す。重量620.7、長さ135.4mm、幅79.6mm、厚さ47.8mm。長辺状の板状を呈したずっしりと重量感のある鉄滓。薄っすらと酸化土砂に覆われて暗黒紫色を呈しているが滓は黒色。上面側の中央部には滓が流動して生じたと思われる筋状の模様が見える。下面側には泥や小石が多数付着している。破面は2、破面で見ると緻密な組織であり小さな気泡は観察されない。

顕微鏡組織：顕微鏡写真を280頁に示す。マグネタイト (Magnetite: Fe₃O₄) 組織、ウスタイト (Wustite:FeO) 組織、ファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織等が観察される。

X線回折：結果を表8に示す。マグネタイト (Magnetite: Fe₃O₄) 組織の回折線が中強度に、ファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂) 組織、及びウスタイト (Wustite:FeO) 組織の回折線が弱強度にそれぞれ認められる。

化学成分：化学成分分析結果を表2～3に示す。全鉄53.2%に対して金属鉄は0.44%と僅かである。FeOは61.1%、Fe₂O₃は7.5%、SiO₂は19.5%、Al₂O₃は5.50%、TiO₂は1.13%で始発原料は砂鉄である。FeO- SiO₂- TiO₂の3成分系に換算するとFeOは76.9%、SiO₂は21.8%、TiO₂は1.3%となる。図1のFeO-SiO₂-TiO₂系の平衡状態図ではマグネタイト組織とファイヤライト組織の境界領域にあり平衡状態図上の位置は顕微鏡観察とはほぼ一致する。図2～3は滓の成分的特徴から製鉄工程の生成位置等を検討する図である。図2～3で見ると本試料は砂鉄系製錬滓の位置にある。

以上から本試料は砂鉄を始発原料とする製錬工程で生成した鉄滓と見られる。

試料No.34 砂鉄

外観観察：外観写真を264頁に示す。やや茶褐色を帯びた砂鉄で粒径範囲は広い。+1400μmが38%と多く、1400～500μmが27%、500～250μmが17%、-250μmは18%である。平均粒径は算術平均

で616 μm 。

顕微鏡組織：顕微鏡組織写真を281頁に示す。粒子内には気孔や亀裂が観察される。チタン鉄鉱と磁鉄鉱とが固溶体になり格子状の微細な模様を呈するウィッドマンステッテン組織 (Widmanstätten Structure) を有する粒子も観察される。400倍の写真はウィッドマンステッテン型組織が一部見られる粒子である。

化学成分：分析結果を表4～5に示した。全鉄は27.3%で、FeOは12.1%、 Fe_2O_3 は25.4%で Fe_2O_3 とFeOの比率は68：32である。代表的な不純物である SiO_2 は13.1%と多い。 TiO_2 の含有量は1.19%で低い。

試料No.35 砂鉄

外観観察：外観写真を264頁に示す。茶褐色を呈した砂鉄で磁着は半分程度。試料重量が0.3gであったため粒度分析は実施せず。

顕微鏡組織：顕微鏡組織写真を281頁に示す。粒子内には気孔や亀裂が観察される。チタン鉄鉱と磁鉄鉱とが固溶体になり格子状の微細な模様を呈するウィッドマンステッテン組織 (Widmanstätten Structure) を有する粒子も観察される。400倍の写真はウィッドマンステッテン型組織が一部見られる粒子である。

化学成分：分析結果を表4～5に示した。全鉄は19.8%で、FeOは12.1%、 Fe_2O_3 は14.7%で Fe_2O_3 とFeOの比率は55：45である。代表的な不純物である SiO_2 は11.4%と多い。 TiO_2 の含有量は1.50%で低い。

試料No.36 鉄滓、着磁度：なし、金属探知機反応：なし

外観観察：外観写真を264頁に示す。重量39.7、長さ42.0mm、幅31.3mm、厚さ23.8mm。薄っすらと酸化土砂に覆われて暗赤紫色を呈しているが滓は黒色。上面側中央部の凹部は破孔と見られ内部には小さな木炭痕が観察される。下面側には13×15mm大の木炭痕がある。

顕微鏡組織：顕微鏡写真を282頁に示す。マグネタイト (Magnetite: Fe_3O_4) 組織、ウスタイト (Wustite: FeO) 組織、ファイヤライト (Fayalite: $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$) 組織等が観察される。

X線回折：結果を表8に示す。ウスタイト (Wustite: FeO) 組織の回折線が中強度に、ファイヤライト (Fayalite: $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$) 組織、及びマグネタイト (Magnetite: Fe_3O_4) 組織の回折線が弱強度にそれぞれ認められる。

化学成分：化学成分分析結果を表2～3に示す。全鉄57.4%に対して金属鉄は0.17%と僅かである。FeOは61.3%、 Fe_2O_3 は13.7%、 SiO_2 は13.8%、 Al_2O_3 は4.10%、 TiO_2 は2.43%で始発原料は砂鉄である。FeO- SiO_2 - TiO_2 の3成分系に換算するとFeOは82.2%、 SiO_2 は15.1%、 TiO_2 は2.7%となる。図1のFeO- SiO_2 - TiO_2 系の平衡状態図ではウスタイト組織の領域にあり平衡状態図上の位置は顕微鏡観察とほぼ一致する。図2～3は滓の成分的特徴から製鉄工程の生成位置等を検討する図である。図2～3で見ると本試料は砂鉄系製鉄滓の位置にある。

以上から本試料は砂鉄を始発原料とする製鉄工程で生成した鉄滓と見られる。

4. ま と め

(1) 遺 跡 の 性 格

本調査で得られた試料は、鉄滓34試料、砂鉄2試料の合計36試料である。鉄滓の出所を製造工程別に分類した結果、不明な8試料をのぞく26試料全てが製鉄工程であり、本遺跡は製鉄炉により鉄素材を生産し、消費地に近い鍛冶炉へ鉄素材を供給していたと見られる。

(2) 始 発 原 料

本調査で得られた鉄滓4試料から、TiO₂ 鉱物のウルボスピネル組織が観察されていることや、鉄滓試料の全てからTiO₂ が1～3%検出されたこと等から、本遺跡の始発原料は砂鉄と判断された。遺構内で採取された砂鉄のTiO₂ 濃度が1.19%と1.50%であったこと等から低濃度Tiの砂鉄が始発原料であったと考えられる。

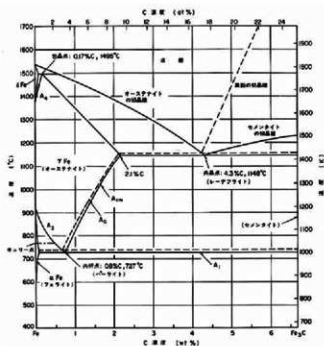
5. 参 考

(1) 鉄滓の顕微鏡組織について：鉄滓を構成する化合物結晶には、一般的に表A1のような鉱物組織がある。酸化鉄(Fe₂O₃、Fe₃O₄、FeO)、二酸化ケイ素(シリカ: SiO₂)、アルミナ(Al₂O₃)および二酸化チタン(TiO₂)を組み合わせた化合物(固溶体)が多く、これら鉱物結晶は含有量にも依存するが、X線回折により検出され確認できる。鉄滓中の低融点化合物がガラス相(非晶質)を形成することがあり、X線回折では検出されない。

表 A 1 鉄滓の顕微鏡鉱物組織とその観察状況

鉱物組織名(和)	鉱物名(英)	化学式	偏光顕微鏡観察状況
ヘマタイト	Hematite	α -Fe ₂ O ₃	赤褐色～赤紫色
マーゲマイト	Maghemite	γ -Fe ₂ O ₃	赤紫色～黒紫色
マグネタイト	Magnetite	Fe ₃ O ₄	白青色、四角または多角盤状
ウスタイト	Wustite	FeO	灰白色、蘭玉状または樹枝状
ファイヤライト	Fayalite	2FeO·SiO ₂	薄い青灰色、短冊状の長い結晶
ウルボスピネル	Ulvospinel	2FeO·TiO ₂	白色、四角～角形板状結晶
イルメナイト	Ilmenite	FeO·TiO ₂	白色、針状・棒状の長い結晶
シュードブルツカイト	Pseudobrookite	FeO·2TiO ₂	白色、針状の結晶
ハロイサイト	Halloysite	Al ₂ O ₃ ·2SiO ₂ ·2H ₂ O	X線で同定できたが組織は不明
ハーシナイト	Hercynite	FeO·Al ₂ O ₃	ウスタイト中に析出、ごま粒状。
アカゲナイト	Akagenite	β -FeOOH	X線で同定できたが組織は不明
ゲーサイト	Goethite	α -FeOOH	白～黄色、リング状が多い。

(2) 鉄-炭素系平衡状態図



(3) ゼーゲルコーン 溶割温度比較表

註：コーンは正確な温度を測定するものではない。

耐火度の数値を概略の温度で示す場合にのみ上の温度表が使われる。

この表は JIS R0305 付表による。コーン番号 = SK 番号

温度 (°C)	SK コーン番号	温度 (°C)	SK コーン番号	温度 (°C)	SK コーン番号	温度 (°C)	SK コーン番号
600	22	960	07a	1280	9	1650	29
650	21	980	06a	1300	10	1670	30
670	20	1000	05a	1320	11	1690	31
690	19	1020	04a	1350	12	1710	32
710	18	1040	03a	1380	13	1730	33
730	17	1060	02a	1410	14	1750	34
750	16	1080	01a	1435	15	1770	35
790	015a	1100	1a	1460	16	1790	36
815	014a	1120	2a	1480	17	1825	37
835	013a	1140	3a	1500	18	1850	38
855	012a	1160	4a	1520	19	1880	39
880	011a	1180	5a	1530	20	1920	40
900	010a	1200	6a	1580	25	1960	41
920	09a	1230	7	1610	27	2000	42
940	08a	1250	8	1630	28		

6. 図表・写真

表1 調査試料と調査項目

試料番号	遺構名	出土場所	出土層位	種類	①化学成分分析	②顕微鏡組織観察	③X線回折測定	④着磁力調査	⑤金属探知機反応	⑥外観写真	⑦マクロ写真
No.1	1号工房跡	2号製鉄炉	炉内	鉄滓	○	○		○	○	○	○
No.2	1号工房跡	2号製鉄炉	炉内	鉄滓	○	○	○	○	○	○	
No.3	1号工房跡	2号製鉄炉	炉内	鉄滓	○	○	○	○	○	○	
No.4	1号工房跡	2号製鉄炉	炉内	鉄滓	○	○	○	○	○	○	
No.5	1号工房跡	2号製鉄炉	炉内	鉄滓	○	○	○	○	○	○	
No.6	1号工房跡	2号製鉄炉	炉内	鉄滓	○	○	○	○	○	○	
No.7	1号工房跡	2号製鉄炉	炉内	鉄滓	○	○	○	○	○	○	
No.8	1号工房跡	2号製鉄炉	炉内	鉄滓	○	○	○	○	○	○	
No.9	1号工房跡	1号製鉄炉	炉内	鉄滓	○	○	○	○	○	○	
No.10	1号工房跡	1号製鉄炉	ベルト炉内	鉄滓	○2	○2	○	○	○	○	○
No.11	1号工房跡	1号製鉄炉	炉内2	鉄滓	○	○	○	○	○	○	
No.12	1号工房跡	3号製鉄炉	炉内	鉄滓	○	○	○	○	○	○	
No.13	1号工房跡	3号製鉄炉	炉内	鉄滓	○	○	○	○	○	○	
No.14	1号工房跡	3号製鉄炉	炉内	鉄滓	○	○	○	○	○	○	
No.15	2号工房跡	4号製鉄炉	記載なし	鉄滓	○	○	○	○	○	○	
No.16	2号工房跡	4号製鉄炉	記載なし	鉄滓	○	○	○	○	○	○	
No.17	2号工房跡	4号製鉄炉	炉内	鉄滓	○	○	○	○	○	○	
No.18	2号工房跡	4号製鉄炉	記載なし	鉄滓	○	○	○	○	○	○	
No.19	2号工房跡	5号製鉄炉	炉内	鉄滓	○	○	○	○	○	○	
No.20	2号工房跡	5号製鉄炉	炉内	鉄滓	○	○	○	○	○	○	
No.21	2号工房跡	5号製鉄炉	炉内	鉄滓	○	○	○	○	○	○	
No.22	2号工房跡	5号製鉄炉	炉内	鉄滓	○	○	○	○	○	○	
No.23	1号廃洋場	③ E	②層下位	鉄滓	○	○	○	○	○	○	
No.24	1号廃洋場	③ EW 間	① b 層	鉄滓	○	○	○	○	○	○	
No.25	1号廃洋場	③ E	②層下位	鉄滓	○	○	○	○	○	○	
No.26	1号廃洋場	③ W	① b ~ ③層上位	鉄滓	○	○	○	○	○	○	
No.27	1号廃洋場	③ W	① b ~ ②層上位	鉄滓	○	○	○	○	○	○	
No.28	1号廃洋場	③ W	① b ~ ②層	鉄滓	○	○	○	○	○	○	
No.29	1号廃洋場	③ W	① b ~ ②層	鉄滓	○	○	○	○	○	○	
No.30	1号廃洋場	③ W	① b ~ ②層	鉄滓	○	○	○	○	○	○	
No.31	1号廃洋場	③ W	②層中位	鉄滓	○	○	○	○	○	○	
No.32	1号廃洋場	④	②層中位	鉄滓	○	○	○	○	○	○	
No.33	1号廃洋場	③ W	②層下	鉄滓	○	○	○	○	○	○	
No.34	1号工房跡	3号製鉄炉	炉内	砂鉄	○	○	○	○	○	○	
No.35	深堀トレンチ	基本層序B	砂	砂鉄	○	○	○	○	○	○	
No.36	Ⅱ遺跡27号 聖穴建物跡	北	埋土上~中位	鉄滓	○	○	○	○	○	○	
分析数					37	37	33	36	36	36	2

表2 鉄滓の化学組成分析結果 (%)

試料 No.	T. Fe	M. Fe	FeO	Fe ₂ O ₃	SiO ₂	Al ₂ O ₃	CaO	MgO	K ₂ O	Na ₂ O	比率	
											FeO	Fe ₂ O ₃
No.2	51.9	0.2	57.1	10.5	19.2	5.04	2.22	0.57	0.3	0.45	84.5	15.5
No.3	13	0.09	2.9	15.3	52.6	21	1.44	1.23	1.9	1.31	15.8	84.2
No.4	63.5	0.22	21.5	66.6	5.15	1.35	0.71	0.22	0.06	0.11	24.4	75.6
No.5	9.34	0.07	5.3	7.4	60.4	16.6	2.85	1.26	1.35	3.05	41.9	58.1
No.6	47.1	0.1	51.9	9.5	23	6.7	3	0.67	0.51	0.73	84.5	15.5
No.7	59.4	0.17	23	59.1	7.1	1.84	1.67	0.22	0.1	0.29	28	72
No.8	31.2	0.11	9.08	34.4	35.1	13.5	0.96	0.75	1.71	1.05	20.9	79.1
No.9	19.2	0.08	4.81	22	45.9	19.2	1.6	1.08	1.83	1.27	17.9	82.1
No.10	46.9	0.98	40.7	20.4	20.9	5.68	3.05	0.58	0.43	0.48	66.6	33.4
No.11	49.8	0.1	55.9	8.9	19.9	5.21	3.24	0.66	0.48	0.69	86.2	13.8
No.12	57.8	4.16	42.3	29.7	14.3	4.24	0.81	0.42	0.43	0.45	58.8	41.2
No.13	37.6	0.07	21.8	29.4	29.9	9.86	2.36	0.88	0.98	0.93	42.6	57.4
No.14	37.4	0.1	26.2	24.2	30.2	10.2	2.49	0.9	1.03	0.98	52	48
No.15	69.2	0.18	49.2	44	3.45	0.74	0.27	0.1	0.03	0.05	52.8	47.2
No.16	50.3	0.04	52.4	13.6	21.6	6.32	1.59	0.61	0.43	0.6	79.4	20.6
No.17	50.5	0.17	30.5	38.1	22.7	1.85	0.48	0.16	0.06	0.1	44.5	55.5
No.18	51.9	0.09	57.3	10.4	19.9	6.25	1.6	0.54	0.58	0.69	84.6	15.4
No.19	53.1	8.68	47.9	10.3	20.1	4.53	2.39	0.52	0.4	0.56	82.3	17.7
No.20	47.3	2.11	48.4	10.8	26.1	6.49	1.55	0.83	0.44	0.53	81.7	18.3
No.21	53	0.28	60.1	8.06	19.9	5.35	1.57	0.46	0.52	0.54	87.5	12.5
No.22	39.3	0.14	39.2	12.4	30.4	9.05	2.96	0.4	1.06	1.67	75.9	24.1
No.23	49	0.21	56.4	7.1	22.6	6.86	2.13	0.61	0.66	0.77	88.9	11.1
No.24	56.2	0.94	43.5	30.7	14.5	4.5	0.76	0.37	0.28	0.39	58.7	41.3
No.25	28.4	0.37	16.8	21.4	40.8	12.2	1.81	0.89	1.13	1.41	44	56
No.26	66.8	0.1	59.4	29.3	6.24	1.32	0.17	0.14	0.06	0.06	66.9	33.1
No.27	15.5	0.06	3.95	17.7	52.5	18.6	1.08	1.06	2.04	1.58	18.3	81.7
No.28	61.8	0.2	45.8	37.2	9.36	2.71	0.27	0.24	0.14	0.07	55.2	44.8
No.29	49.6	0.17	56.8	7.5	22.8	6.75	1.55	0.56	0.65	0.78	88.3	11.7
No.30	49	0.1	53.1	10.9	23.7	6.77	1.32	0.55	0.52	0.68	83	17
No.31	57.5	0.18	18.3	61.6	9.23	2.68	0.4	0.15	0.17	0.2	22.9	77.1
No.32	60.6	0.22	53.6	26.8	11.6	2.5	0.24	0.21	0.06	0.06	66.7	33.3
No.33	53.2	0.44	61.1	7.5	19.5	5.5	1.7	0.45	0.61	0.66	89	11
No.36	57.4	0.17	61.3	13.7	13.8	4.1	1.61	0.46	0.32	0.33	81.7	18.3

表3 鉄滓の化学組成分析結果(続き) (%)

試料 No.	TiO ₂	MnO	P ₂ O ₅	C	化合水	V	Cu	Zr	TiO ₂ /T.Fe	MnO/TiO ₂	渣滓成分
No.2	2.07	0.35	0.79	0.07	0.95	0.19	0.002	0.014	0.04	0.169	27.8
No.3	1.59	0.18	0.29	0.02	0.17	0.048	0.002	0.061	0.122	0.113	79.5
No.4	1.09	0.28	0.487	0.07	2.02	0.18	0.004	0.058	0.017	0.257	7.6
No.5	0.78	0.11	0.31	0.08	0.43	0.027	< 0.001	0.015	0.084	0.141	85.5
No.6	2.1	0.32	0.947	0.04	0.35	0.15	0.001	0.12	0.045	0.152	34.6
No.7	1.57	0.31	0.769	0.23	3.48	0.15	0.002	0.009	0.026	0.197	11.2
No.8	0.95	0.14	0.494	0.07	1.68	0.07	0.004	0.045	0.03	0.147	53.1
No.9	1.33	0.15	0.48	0.01	0.19	0.055	0.002	0.037	0.069	0.113	70.9
No.10	3.06	0.28	0.801	0.61	1.89	0.11	0.002	0.17	0.065	0.092	31.1
No.11	3.1	0.34	0.971	0.01	0.28	0.22	0.001	0.17	0.062	0.11	30.2
No.12	0.79	0.28	0.23	0.11	1.59	0.24	0.001	0.39	0.014	0.354	20.7
No.13	1.55	0.79	0.323	0.04	0.74	0.34	0.001	1.42	0.041	0.51	44.9
No.14	1.58	0.81	0.329	0.04	0.55	0.35	0.001	1.48	0.042	0.513	45.8
No.15	0.58	0.35	0.227	0.07	0.61	0.18	0.001	0.075	0.008	0.603	4.6
No.16	1.15	0.63	0.345	0.04	0.49	0.18	0.001	0.69	0.023	0.548	31.2
No.17	1.12	0.45	0.383	0.27	3.46	0.28	0.001	0.53	0.022	0.402	25.4
No.18	1.15	0.5	0.33	0.02	0.34	0.3	0.001	0.62	0.022	0.435	29.6
No.19	1.83	0.3	0.825	0.1	1.44	0.18	0.004	0.11	0.034	0.164	28.5
No.20	0.97	0.69	0.325	0.02	0.59	0.11	0.001	0.67	0.021	0.711	35.9
No.21	1.11	0.57	0.356	0.02	0.39	0.23	0.001	0.86	0.021	0.514	28.3
No.22	1.2	0.43	0.527	0.04	0.43	0.084	0.001	0.8	0.031	0.358	45.5
No.23	1.32	0.55	0.406	0.02	0.19	0.23	0.001	0.48	0.027	0.417	33.6
No.24	0.69	0.26	0.194	0.28	2.43	0.22	0.002	0.4	0.012	0.377	20.8
No.25	0.76	0.22	0.302	0.25	1.57	0.12	0.001	0.25	0.027	0.289	58.2
No.26	0.62	0.32	0.299	0.18	1.57	0.15	0.001	0.48	0.009	0.516	8
No.27	0.78	0.13	0.173	0.06	0.22	0.033	0.001	0.087	0.05	0.167	76.9
No.28	0.6	0.3	0.284	0.15	2.49	0.26	0.001	0.39	0.01	0.5	12.8
No.29	1.03	0.49	0.314	0.07	0.26	0.23	0.001	0.76	0.021	0.476	33.1
No.30	0.88	0.42	0.264	0.06	0.54	0.19	0.001	0.65	0.018	0.477	33.5
No.31	0.32	0.11	0.154	1.4	5.05	0.047	0.001	0.18	0.006	0.344	12.8
No.32	0.63	0.3	0.305	0.17	3.2	0.16	0.001	0.39	0.01	0.476	14.7
No.33	1.13	0.57	0.369	0.03	0.26	0.22	0.001	0.81	0.021	0.504	28.4
No.36	2.43	0.25	0.367	0.12	0.81	0.29	0.002	0.2	0.042	0.103	20.6

渣滓成分 = SiO₂+ Al₂O₃+ CaO+ MgO+ Na₂O+ K₂O

表4 砂鉄の化学組成分析結果 (%)

試料 No.	T. Fe	M. Fe	FeO	Fe ₂ O ₃	SiO ₂	Al ₂ O ₃	CaO	MgO	K ₂ O	Na ₂ O
No.34	27.3	0.14	12.1	25.4	39.4	13.1	2.34	1.02	0.89	1.64
No.35	19.8	0.14	12.1	14.7	49.2	11.4	3.47	1.99	1.26	1.64

表5 砂鉄の化学組成分析結果(続き) (%)

試料 No.	TiO ₂	MnO	P ₂ O ₅	C	化合水	V
No.34	1.19	0.18	0.362	1.53	2.27	0.074
No.35	1.5	0.16	0.128	1.53	2.27 -	0.060 -

表6 メタルの化学成分分析結果 (%)

試料 No.	C	Si	Mn	P	S	Cu	Ni	Co	Al	V
No.1	1.95	0.059	0.002	0.087	0.04	0.007	0.008	0.016	0.027	0.002
No.10	2.68	0.003	<0.001	0.017	0.072	0.003	0.005	0.012	0.002	0.001

表7 メタルの化学成分分析結果 (続き) (%)

試料 No.	Ti	Ca	Mg
No.1	0.006	0.013	0.003
No.10	0.001	0.002	<0.001

表8 X線回折測定結果

試料 No	同定鉱物種と回折強度
No.2	W 中, F 弱, U 弱
No.3	Q 強, F 弱, M 弱
No.4	M 強, H 強
No.5	Q 強, An 強
No.6	F 中, W 中, U 弱
No.7	M 強, W 弱
No.8	Q 強, M 中, F 弱
No.9	Q 強, F 弱
No.10	M 中, F 弱
No.11	F 強, W 中, U 中
No.12	F 強, W 中, M 中
No.13	F 中, W 弱
No.14	F 強
No.15	M 強, W 弱
No.16	F 中, W 弱, M 弱
No.17	M 強, W 弱
No.18	F 中, W 中
No.19	F 中, W 中, U 弱
No.20	F 強, W 中
No.21	F 中, W 中
No.22	F 強, W 弱
No.23	F 強, W 中
No.24	M 中, F 中, W 中
No.25	Q 中, M 中, Go 弱, F 弱
No.26	M 中, W 中, F 弱, Go 弱
No.27	Q 強, W 弱
No.28	W 強, M 強, F 中, Go 弱
No.29	F 中, W 中
No.30	F 中, W 中
No.31	M 強, W 弱, F 弱, Go 弱
No.32	M 中, W 弱, F 弱, Go 弱
No.33	M 中, F 弱, W 弱
No.36	W 中, F 弱, M 弱

鉱物記号:

W (ウスタイト: Wustite-FeO), M (マグネタイト: Magnetite-Fe₃O₄),
 F (ファイヤイト: Fayalite-FeSiO₃), Go (ゲーサイト: Goethite- α FeOOH),
 H (ヘマタイト: Hematite-Fe₂O₃), U (ウルボスピネル: Ulvöspinel-2FeO · TiO₂),
 Il (イルメナイト: Ilmenite-FeO · TiO₂), Ps (シュードブルッカイト: Pseudobrookite-FeO · TiO₂),
 An (アノーサイト: Anorthite-CaOAl₂O₇·2SiO₂), Q, Ch (シリカ, クワースト/クワート: Quartz-SiO₂),
 Fs (フェロシヤーマカイト: Ferroschermakite-Ca₂FeAl₂(Si₂Al₂)O₁₀(OH)₂),
 Ag (アウガイト: Augite-Ca (Fe,Mg) Si₂O₆), Mu (ムライト: Mullite-3Al₂O₃ · 2SiO₂)

表9 個別試料のまとめ

試料番号	遺構名	出土場所	出土層位	種類	始発原料	鉄滓の生成工程
No.1	1号工房跡	2号製鉄炉	炉内	鉄塊系遺物	Cが195%の鉄を含む	
No.2	1号工房跡	2号製鉄炉	炉内	鉄滓	砂鉄	製錬
No.3	1号工房跡	2号製鉄炉	炉内	鉄滓	砂鉄	製錬
No.4	1号工房跡	2号製鉄炉	炉内	鉄滓	砂鉄	-
No.5	1号工房跡	2号製鉄炉	炉内	鉄滓	砂鉄	製錬
No.6	1号工房跡	2号製鉄炉	炉内	鉄滓	砂鉄	製錬
No.7	1号工房跡	2号製鉄炉	炉内	鉄滓	砂鉄	製錬
No.8	1号工房跡	2号製鉄炉	炉内	鉄滓	砂鉄	製錬
No.9	1号工房跡	1号製鉄炉	炉内	鉄滓	砂鉄	製錬
No.10	1号工房跡	1号製鉄炉	ベルト炉内	鉄塊系遺物	砂鉄	-
No.11	1号工房跡	1号製鉄炉	炉内2	鉄滓	砂鉄	製錬
No.12	1号工房跡	3号製鉄炉	炉内	鉄滓	砂鉄	製錬
No.13	1号工房跡	3号製鉄炉	炉内	鉄滓	砂鉄	製錬
No.14	1号工房跡	3号製鉄炉	炉内	鉄滓	砂鉄	製錬
No.15	2号工房跡	4号製鉄炉	記載なし	鉄滓	砂鉄	-
No.16	2号工房跡	4号製鉄炉	記載なし	鉄滓	砂鉄	製錬
No.17	2号工房跡	4号製鉄炉	炉内	鉄滓	砂鉄	製錬
No.18	2号工房跡	4号製鉄炉	記載なし	鉄滓	砂鉄	製錬
No.19	2号工房跡	5号製鉄炉	炉内	鉄滓	砂鉄	製錬
No.20	2号工房跡	5号製鉄炉	炉内	鉄滓	砂鉄	製錬
No.21	2号工房跡	5号製鉄炉	炉内	鉄滓	砂鉄	製錬
No.22	2号工房跡	5号製鉄炉	炉内	鉄滓	砂鉄	製錬
No.23	1号廃洋場	③ E	②層下位	鉄滓	砂鉄	製錬
No.24	1号廃洋場	③ EW間	① b層	鉄滓	砂鉄	-
No.25	1号廃洋場	③ E	②層下位	鉄滓	砂鉄	製錬
No.26	1号廃洋場	③ W	① b～②層上位	鉄滓	砂鉄	-
No.27	1号廃洋場	③ W	① b～②層上位	鉄滓	砂鉄	製錬
No.28	1号廃洋場	③ W	① b～②層	鉄滓	砂鉄	-
No.29	1号廃洋場	③ W	① b～②層	鉄滓	砂鉄	製錬
No.30	1号廃洋場	③ W	① b～②層	鉄滓	砂鉄	製錬
No.31	1号廃洋場	③ W	②層中位	鉄滓	砂鉄	-
No.32	1号廃洋場	④	②層中位	鉄滓	砂鉄	-
No.33	1号廃洋場	③ W	②層下	鉄滓	砂鉄	製錬
No.34	1号工房跡	3号製鉄炉	炉内	砂鉄	TiO ₂ が1.19%の砂鉄	
No.35	深堀トレンチ	基本層序B	砂	砂鉄	TiO ₂ が1.50%の砂鉄	
No.36	Ⅱ遺跡Z7号型穴建物跡	北	埋土上～中位	鉄滓	砂鉄	製錬

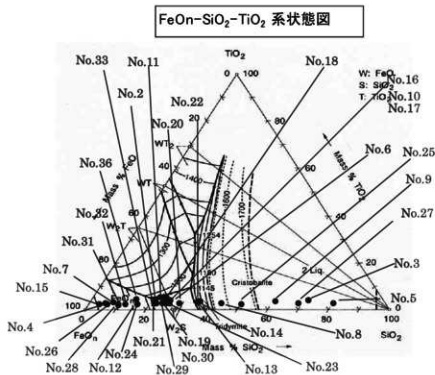


図1 間木戸Ⅱ・V遺跡鉄滓のFeO-SiO₂-TiO₂系鉄滓の平衡状態図

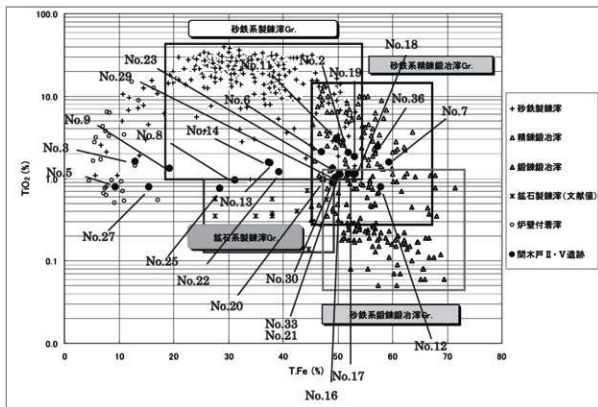


図2 間木戸Ⅱ・V鉄滓の製鉄滓、精錬滓、及び鍛鉄滓の分類

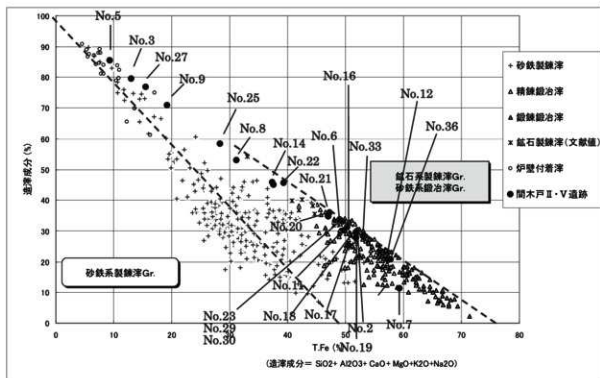
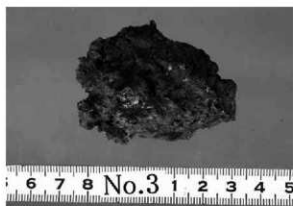
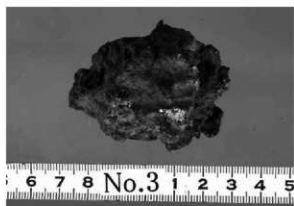
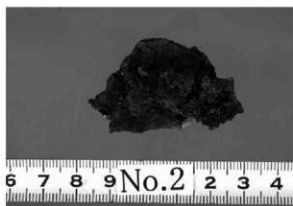
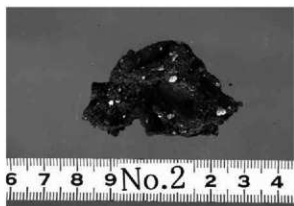
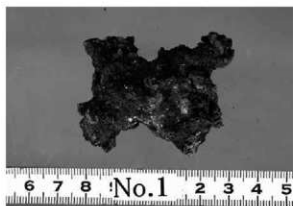
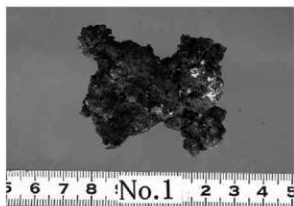
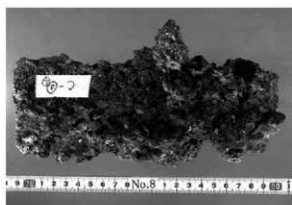
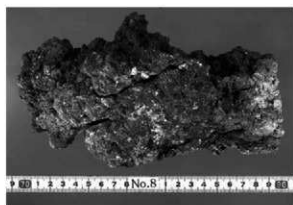
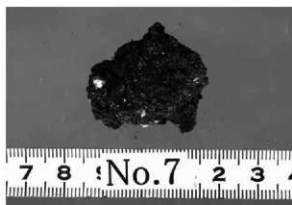
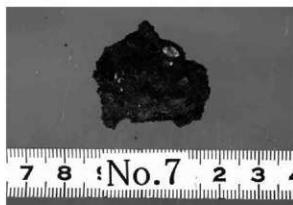
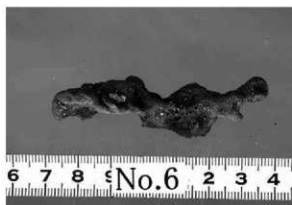
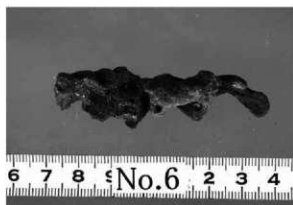
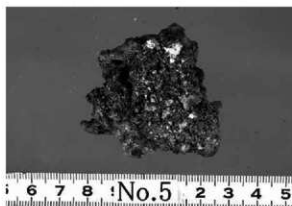
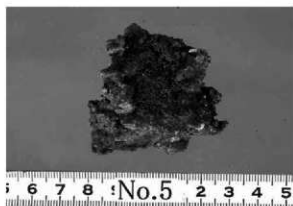
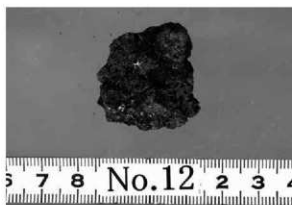
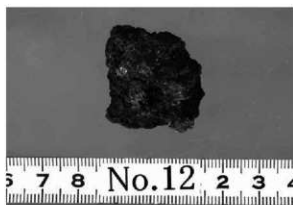
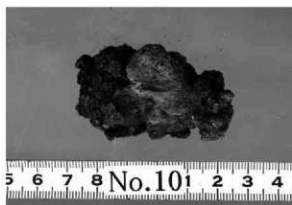
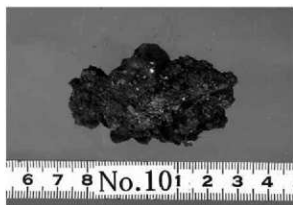
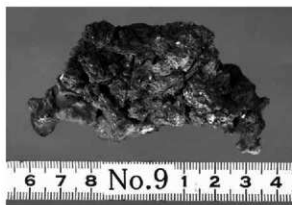
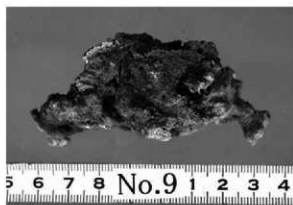


図3 間木戸Ⅱ・Ⅴ鉄滓の製鉄滓と製鉄滓の分類

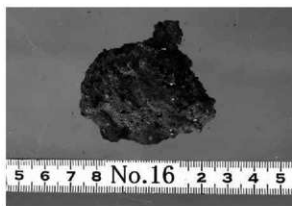
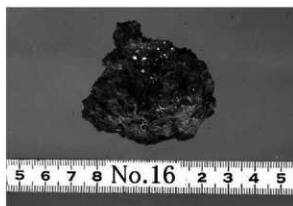
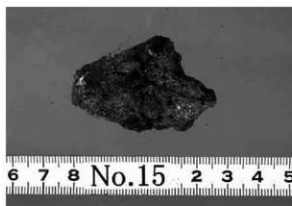
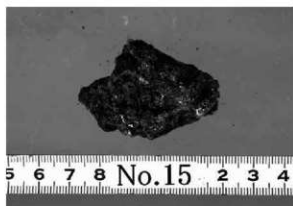
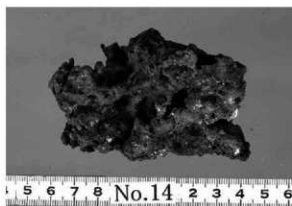
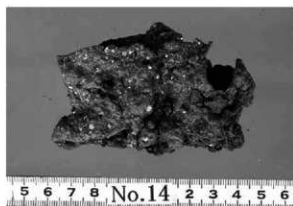
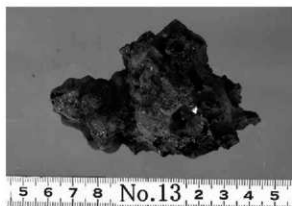
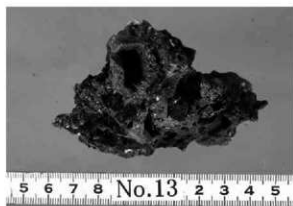


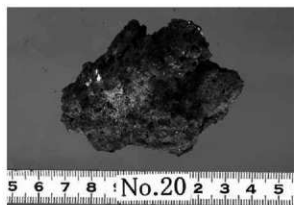
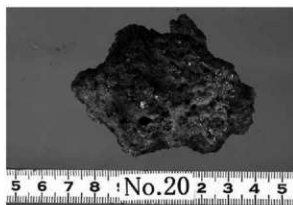
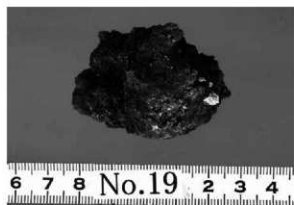
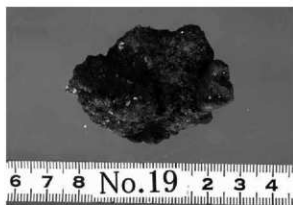
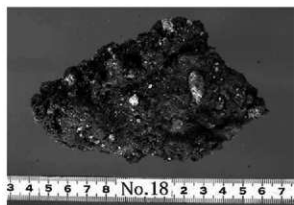
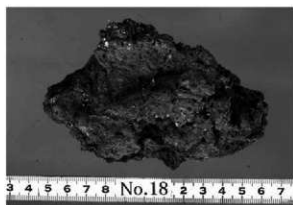
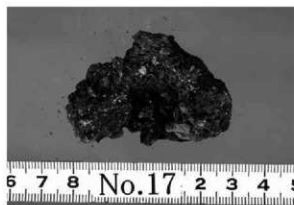
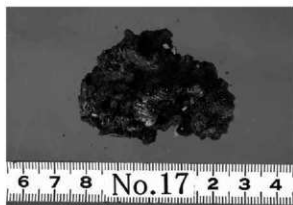
外觀写真1



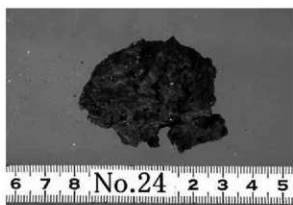
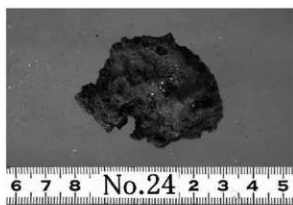
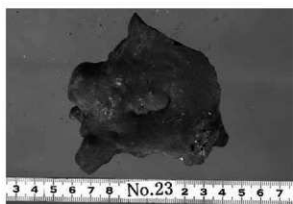
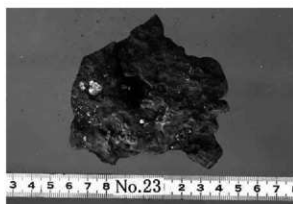
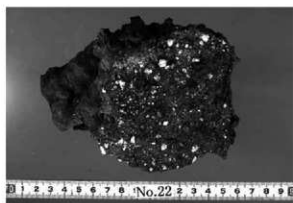
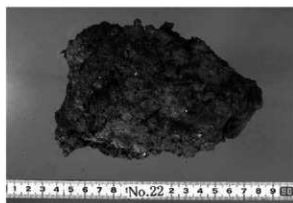
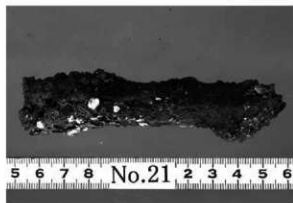


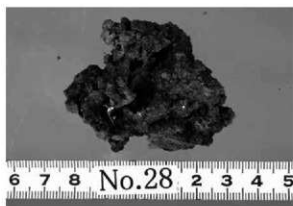
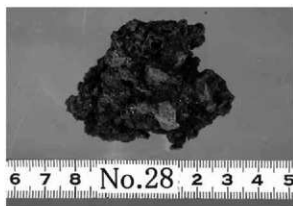
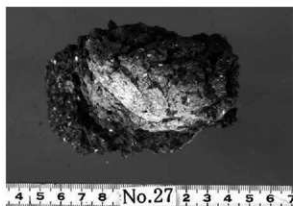
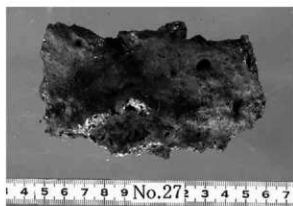
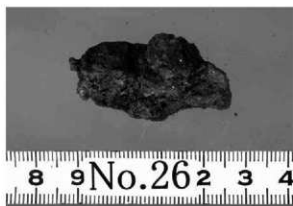
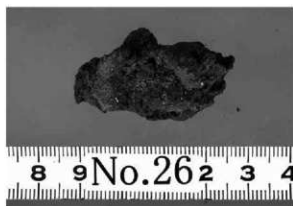
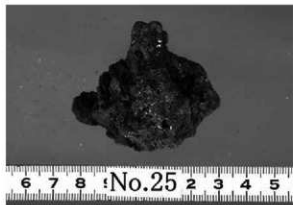
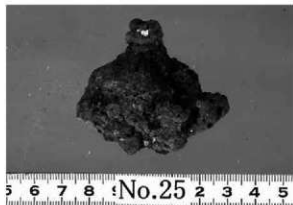
外觀写真3



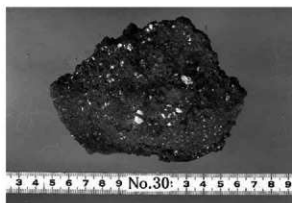
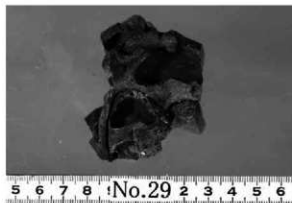
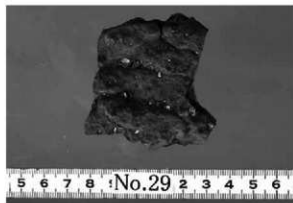


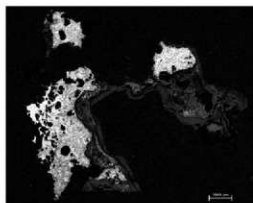
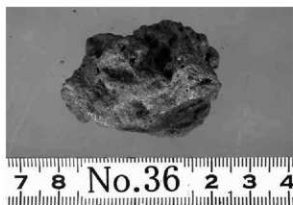
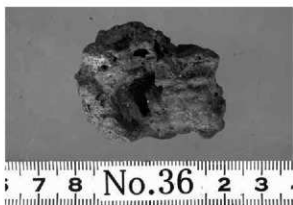
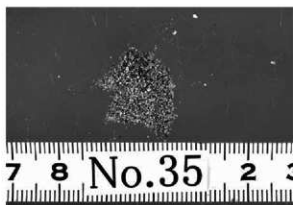
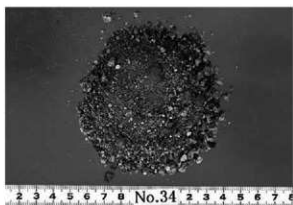
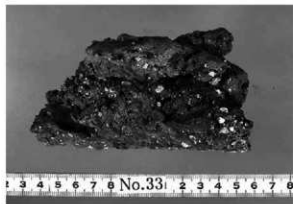
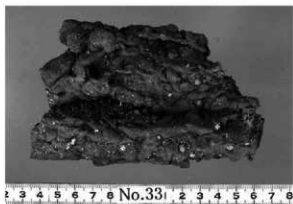
外觀写真5



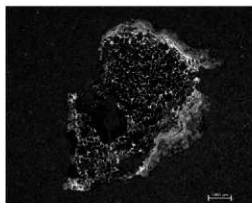


外觀写真7

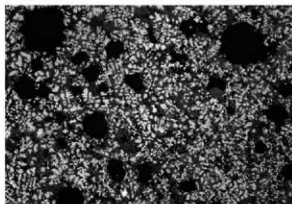




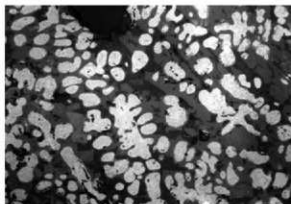
全金属マクロ組織写真 No.1 × 10



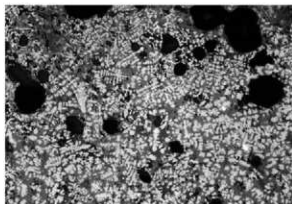
全金属マクロ組織写真 No.10-2 × 10



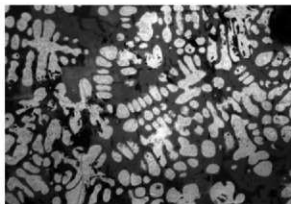
鉄滓顕微鏡組織写真 No.2-1 × 100



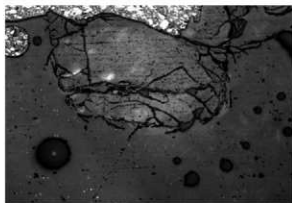
鉄滓顕微鏡組織写真 No.2-1 × 400



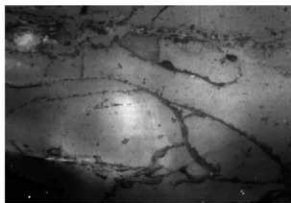
鉄滓顕微鏡組織写真 No.2-2 × 100



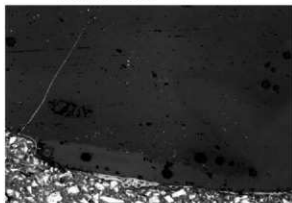
鉄滓顕微鏡組織写真 No.2-2 × 400



鉄滓顕微鏡組織写真 No.3-1 × 100



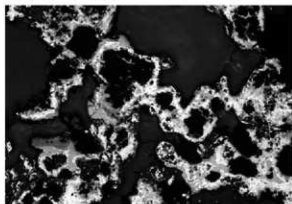
鉄滓顕微鏡組織写真 No.3-1 × 400



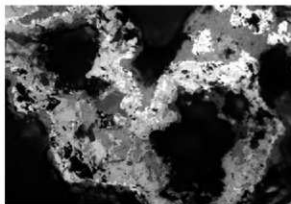
鉄滓顕微鏡組織写真 No.3-2 × 100



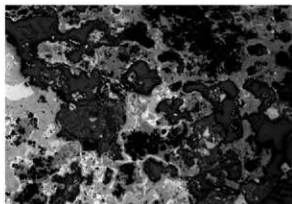
鉄滓顕微鏡組織写真 No.3-2 × 400



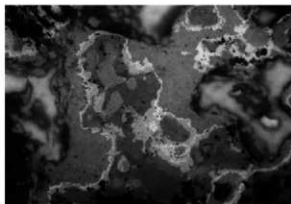
鉄滓顕微鏡組織写真 No.4-1 × 100



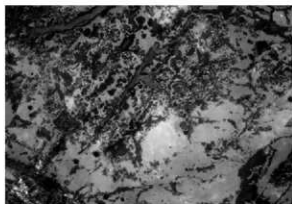
鉄滓顕微鏡組織写真 No.4-1 × 400



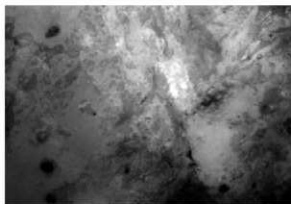
鉄滓顕微鏡組織写真 No.4-2 × 100



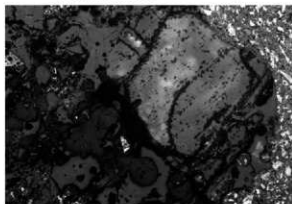
鉄滓顕微鏡組織写真 No.4-2 × 400



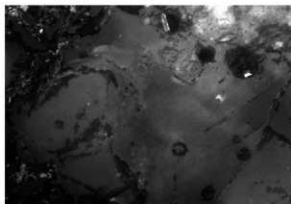
鉄滓顕微鏡組織写真 No.5-1 × 100



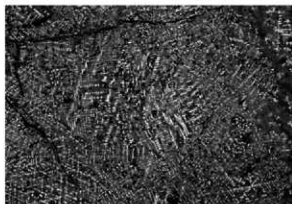
鉄滓顕微鏡組織写真 No.5-1 × 400



鉄滓顕微鏡組織写真 No.5-2 × 100



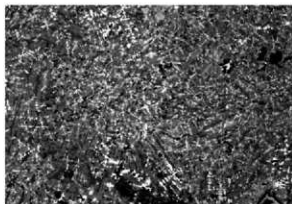
鉄滓顕微鏡組織写真 No.5-2 × 400



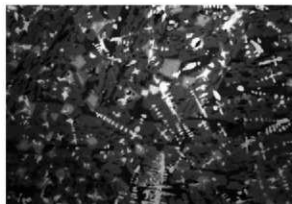
鉄滓顕微鏡組織写真 No.6-1 × 100



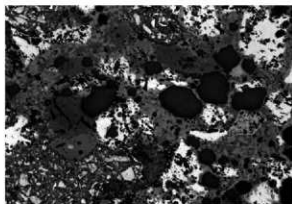
鉄滓顕微鏡組織写真 No.6-1 × 400



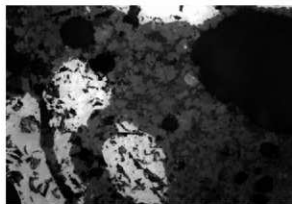
鉄滓顕微鏡組織写真 No.6-2 × 100



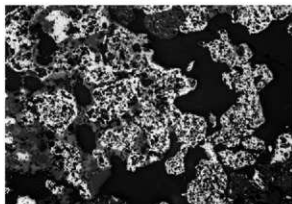
鉄滓顕微鏡組織写真 No.6-2 × 400



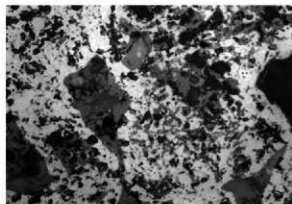
鉄滓顕微鏡組織写真 No.7-1 × 100



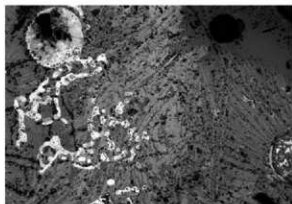
鉄滓顕微鏡組織写真 No.7-1 × 400



鉄滓顕微鏡組織写真 No.7-2 × 100



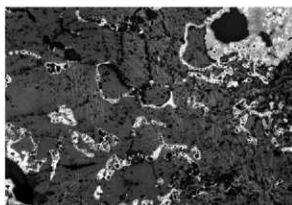
鉄滓顕微鏡組織写真 No.7-2 × 400



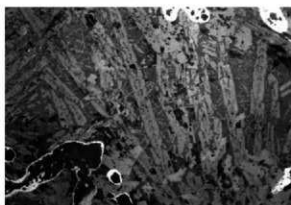
鉄滓顕微鏡組織写真 No.8-1 × 100



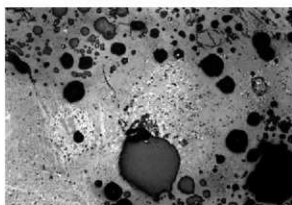
鉄滓顕微鏡組織写真 No.8-1 × 400



鉄滓顕微鏡組織写真 No.8-2 × 100



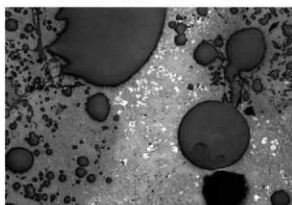
鉄滓顕微鏡組織写真 No.8-2 × 400



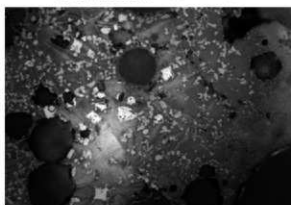
鉄滓顕微鏡組織写真 No.9-1 × 100



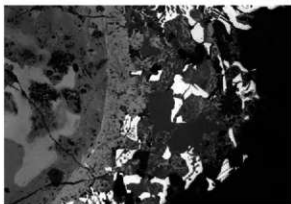
鉄滓顕微鏡組織写真 No.9-1 × 400



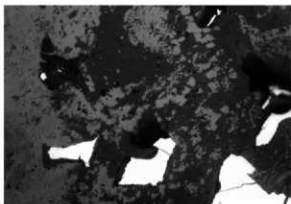
鉄滓顕微鏡組織写真 No.9-2 × 100



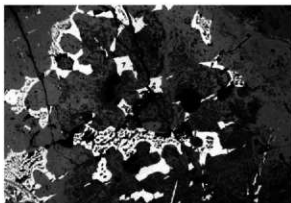
鉄滓顕微鏡組織写真 No.9-2 × 400



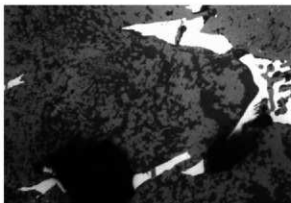
鉄滓顕微鏡組織写真 No.10-1 × 100



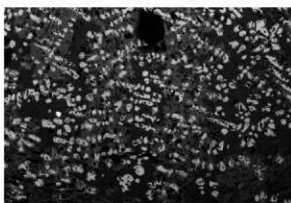
鉄滓顕微鏡組織写真 No.10-1 × 400



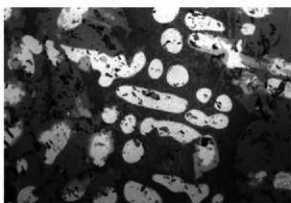
鉄滓顕微鏡組織写真 No.10-2 × 100



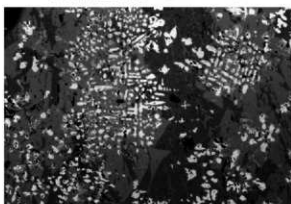
鉄滓顕微鏡組織写真 No.10-2 × 400



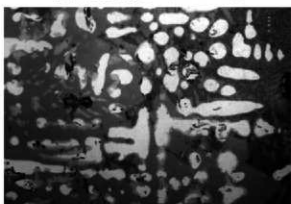
鉄滓顕微鏡組織写真 No.11-1 × 100



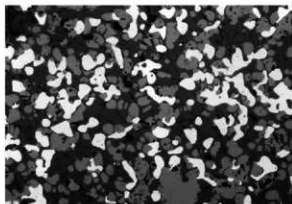
鉄滓顕微鏡組織写真 No.11-1 × 400



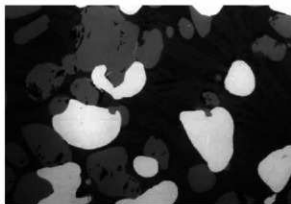
鉄滓顕微鏡組織写真 No.11-2 × 100



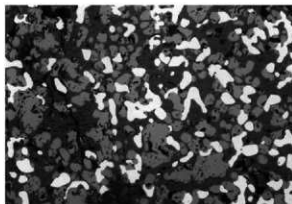
鉄滓顕微鏡組織写真 No.11-2 × 400



鉄滓顕微鏡組織写真 No.12-1 × 100



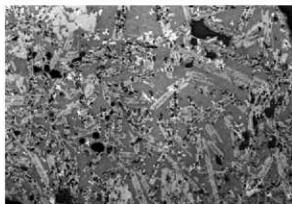
鉄滓顕微鏡組織写真 No.12-1 × 400



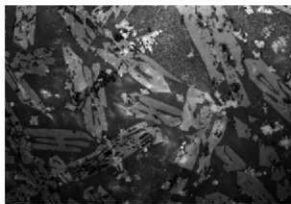
鉄滓顕微鏡組織写真 No.12-2 × 100



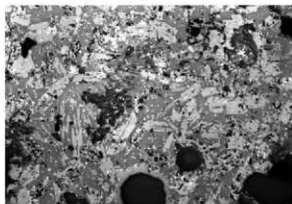
鉄滓顕微鏡組織写真 No.12-2 × 400



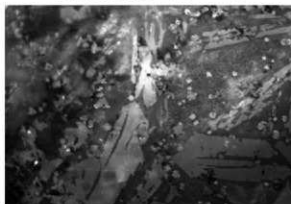
鉄滓顕微鏡組織写真 No.13-1 × 100



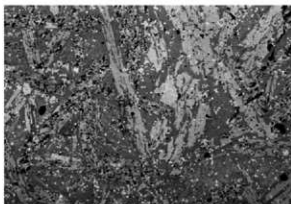
鉄滓顕微鏡組織写真 No.13-1 × 400



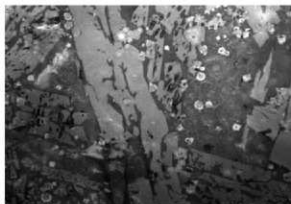
鉄滓顕微鏡組織写真 No.13-2 × 100



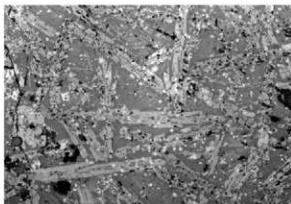
鉄滓顕微鏡組織写真 No.13-2 × 400



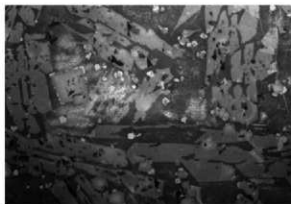
鉄滓顕微鏡組織写真 No.14-1 × 100



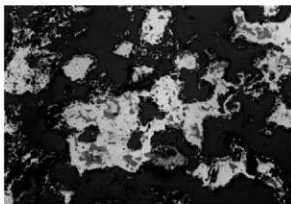
鉄滓顕微鏡組織写真 No.14-1 × 400



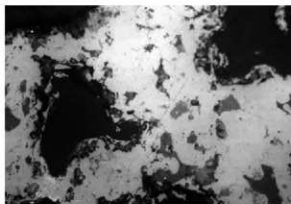
鉄滓顕微鏡組織写真 No.14-2 × 100



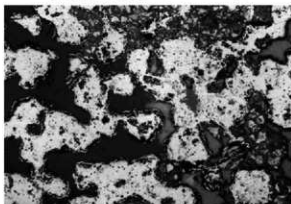
鉄滓顕微鏡組織写真 No.14-2 × 400



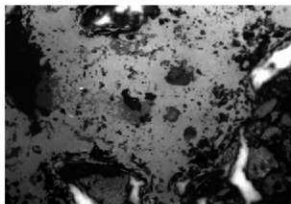
鉄滓顕微鏡組織写真 No.15-1 × 100



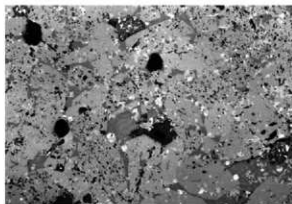
鉄滓顕微鏡組織写真 No.15-1 × 400



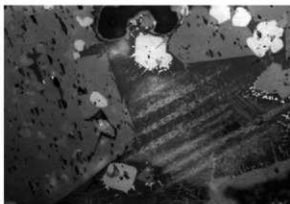
鉄滓顕微鏡組織写真 No.15-2 × 100



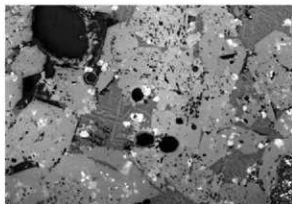
鉄滓顕微鏡組織写真 No.15-2 × 400



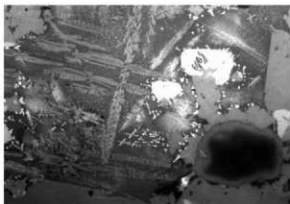
鉄滓顕微鏡組織写真 No.16-1 × 100



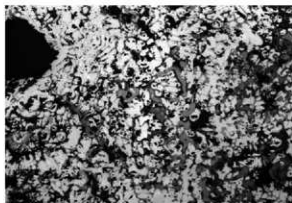
鉄滓顕微鏡組織写真 No.16-1 × 400



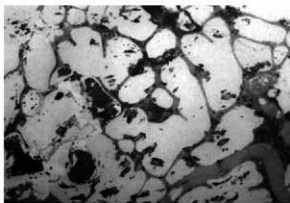
鉄滓顕微鏡組織写真 No.16-2 × 100



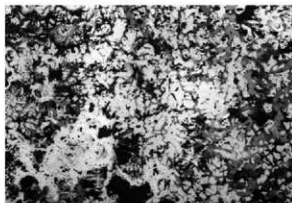
鉄滓顕微鏡組織写真 No.16-2 × 400



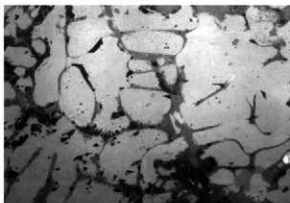
鉄滓顕微鏡組織写真 No.17-1 × 100



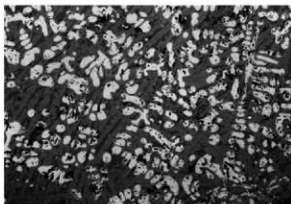
鉄滓顕微鏡組織写真 No.17-1 × 400



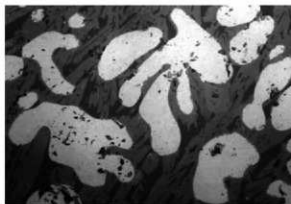
鉄滓顕微鏡組織写真 No.17-2 × 100



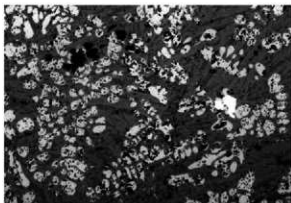
鉄滓顕微鏡組織写真 No.17-2 × 400



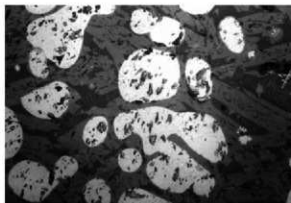
鉄滓顕微鏡組織写真 No.18-1 × 100



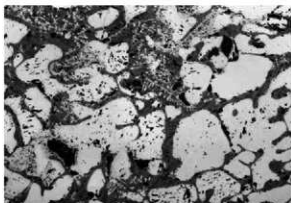
鉄滓顕微鏡組織写真 No.18-1 × 400



鉄滓顕微鏡組織写真 No.18-2 × 100



鉄滓顕微鏡組織写真 No.18-2 × 400



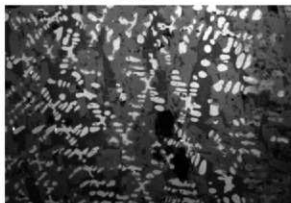
鉄滓顕微鏡組織写真 No.19-1 × 100



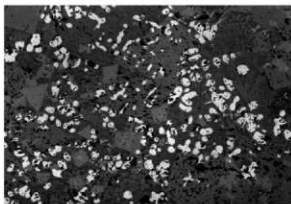
鉄滓顕微鏡組織写真 No.19-1 × 400



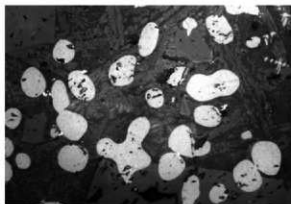
鉄滓顕微鏡組織写真 No.19-2 × 100



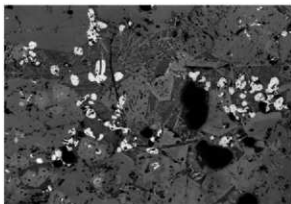
鉄滓顕微鏡組織写真 No.19-2 × 400



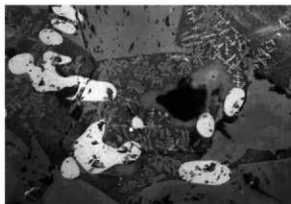
鉄滓顕微鏡組織写真 No.20-1 × 100



鉄滓顕微鏡組織写真 No.20-1 × 400



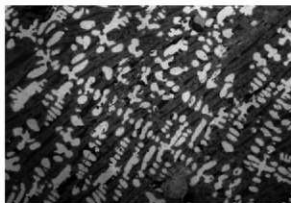
鉄滓顕微鏡組織写真 No.20-2 × 100



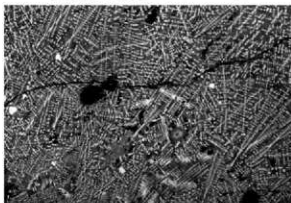
鉄滓顕微鏡組織写真 No.20-2 × 400



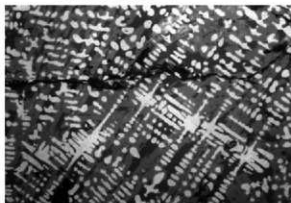
鉄滓顕微鏡組織写真 No.21-1 × 100



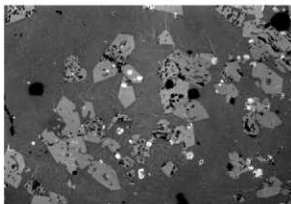
鉄滓顕微鏡組織写真 No.21-1 × 400



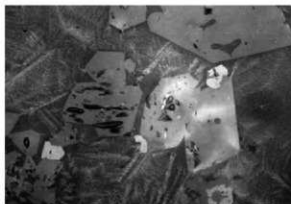
鉄滓顕微鏡組織写真 No.21-2 × 100



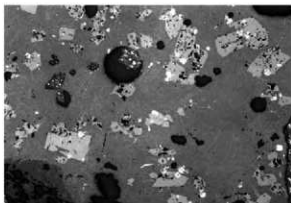
鉄滓顕微鏡組織写真 No.21-2 × 400



鉄滓顕微鏡組織写真 No.22-1 × 100



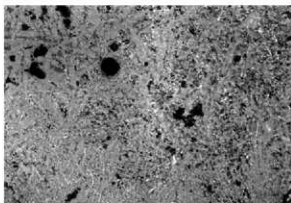
鉄滓顕微鏡組織写真 No.22-1 × 400



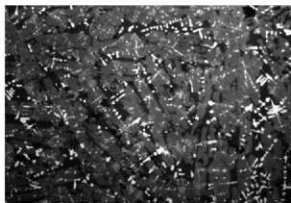
鉄滓顕微鏡組織写真 No.22-2 × 100



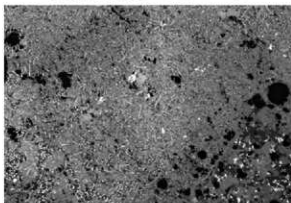
鉄滓顕微鏡組織写真 No.22-2 × 400



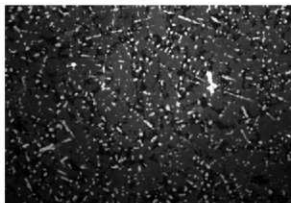
鉄滓顕微鏡組織写真 No.23-1 × 100



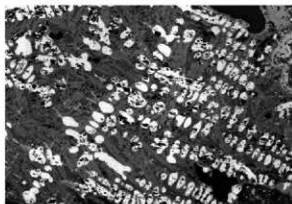
鉄滓顕微鏡組織写真 No.23-1 × 400



鉄滓顕微鏡組織写真 No.23-2 × 100



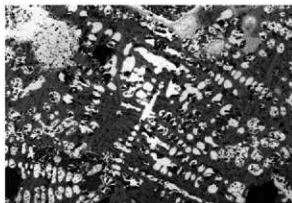
鉄滓顕微鏡組織写真 No.23-2 × 400



鉄滓顕微鏡組織写真 No.24-1 × 100



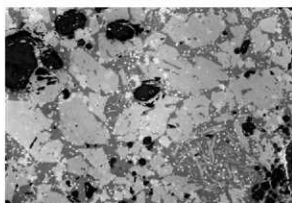
鉄滓顕微鏡組織写真 No.24-1 × 400



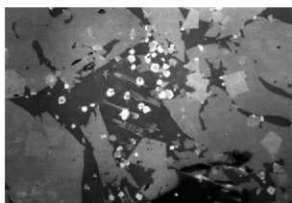
鉄滓顕微鏡組織写真 No.24-2 × 100



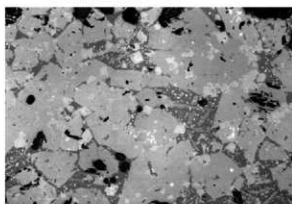
鉄滓顕微鏡組織写真 No.24-2 × 400



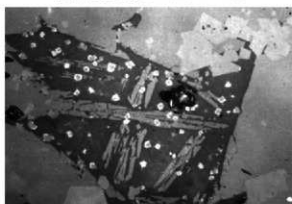
鉄滓顕微鏡組織写真 No.25-1 × 100



鉄滓顕微鏡組織写真 No.25-1 × 400



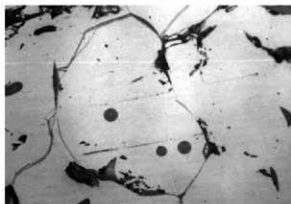
鉄滓顕微鏡組織写真 No.25-2 × 100



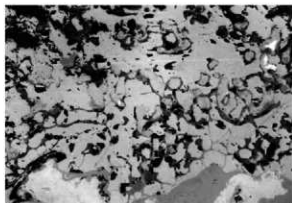
鉄滓顕微鏡組織写真 No.25-2 × 400



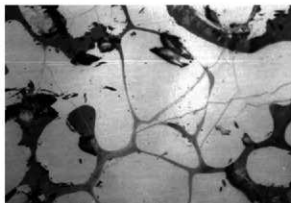
鉄滓顕微鏡組織写真 No.26-1 × 100



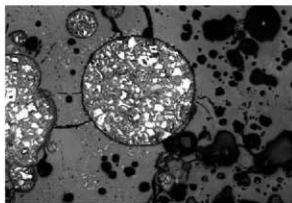
鉄滓顕微鏡組織写真 No.26-1 × 400



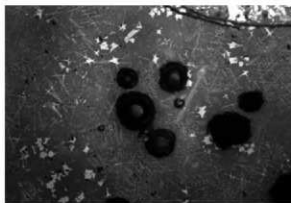
鉄滓顕微鏡組織写真 No.26-2 × 100



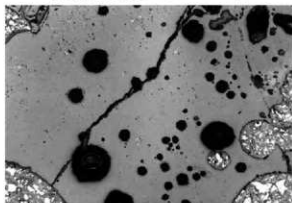
鉄滓顕微鏡組織写真 No.26-2 × 400



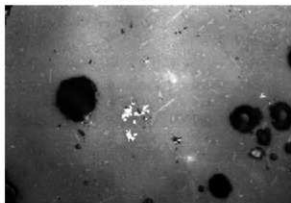
鉄滓顕微鏡組織写真 No.27-1 × 100



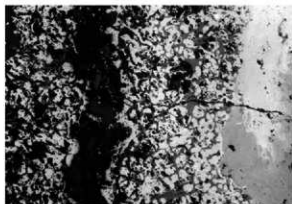
鉄滓顕微鏡組織写真 No.27-1 × 400



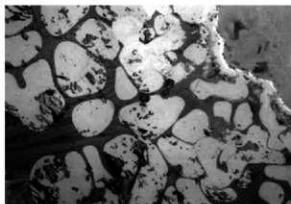
鉄滓顕微鏡組織写真 No.27-2 × 100



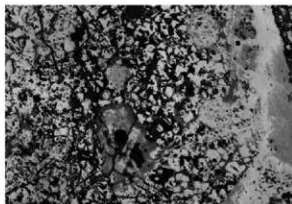
鉄滓顕微鏡組織写真 No.27-2 × 400



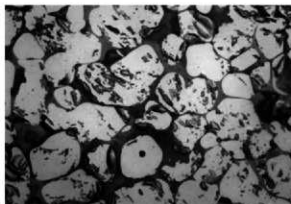
鉄滓顕微鏡組織写真 No.28-1 × 100



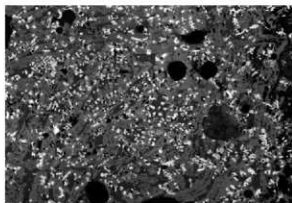
鉄滓顕微鏡組織写真 No.28-1 × 400



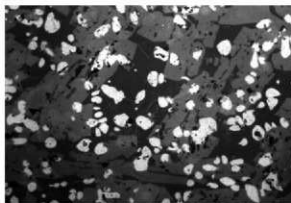
鉄滓顕微鏡組織写真 No.28-2 × 100



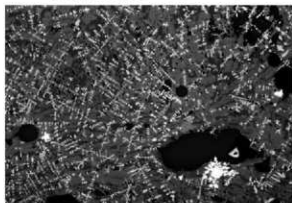
鉄滓顕微鏡組織写真 No.28-2 × 400



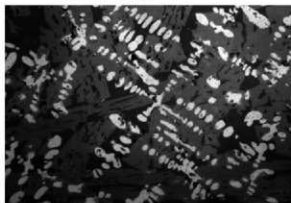
鉄滓顕微鏡組織写真 No.29-1 × 100



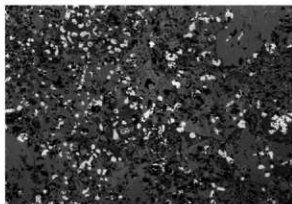
鉄滓顕微鏡組織写真 No.29-1 × 400



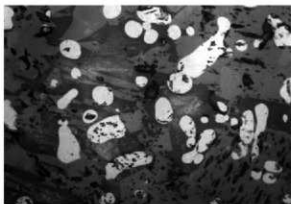
鉄滓顕微鏡組織写真 No.29-2 × 100



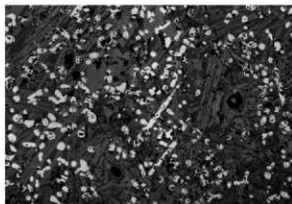
鉄滓顕微鏡組織写真 No.29-2 × 400



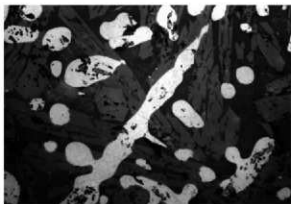
鉄滓顕微鏡組織写真 No.30-1 × 100



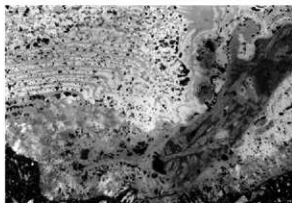
鉄滓顕微鏡組織写真 No.30-1 × 400



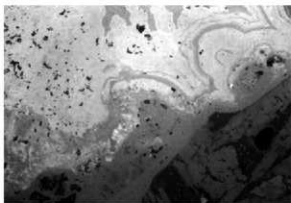
鉄滓顕微鏡組織写真 No.30-2 × 100



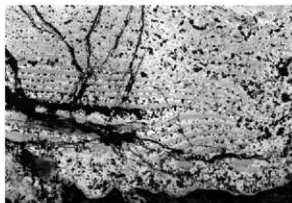
鉄滓顕微鏡組織写真 No.30-2 × 400



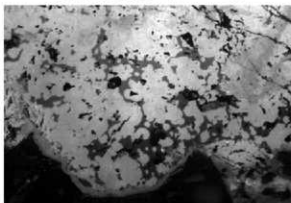
鉄滓顕微鏡組織写真 No.31-1 × 100



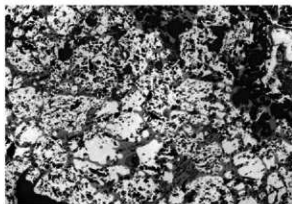
鉄滓顕微鏡組織写真 No.31-1 × 400



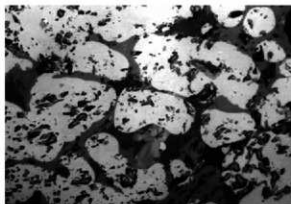
鉄滓顕微鏡組織写真 No.31-2 × 100



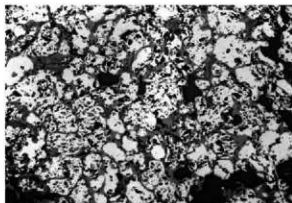
鉄滓顕微鏡組織写真 No.31-2 × 400



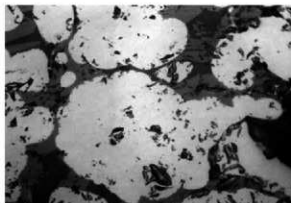
鉄滓顕微鏡組織写真 No.32-1 × 100



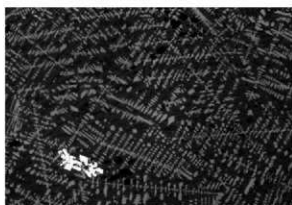
鉄滓顕微鏡組織写真 No.32-1 × 400



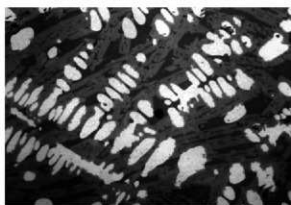
鉄滓顕微鏡組織写真 No.32-2 × 100



鉄滓顕微鏡組織写真 No.32-2 × 400



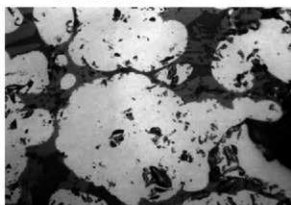
鉄滓顕微鏡組織写真 No.33-1 × 100



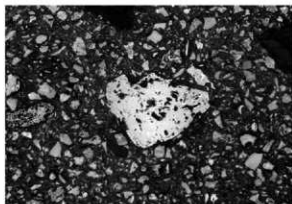
鉄滓顕微鏡組織写真 No.33-1 × 400



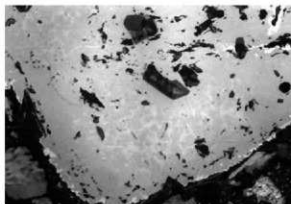
鉄滓顕微鏡組織写真 No.33-2 × 100



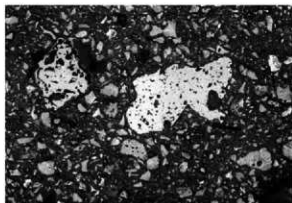
鉄滓顕微鏡組織写真 No.33-2 × 400



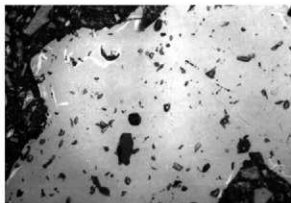
砂鉄顕微鏡組織写真 No.34-1 × 100



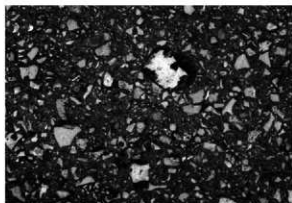
砂鉄顕微鏡組織写真 No.34-1 × 400



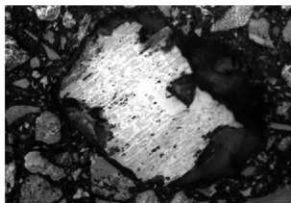
砂鉄顕微鏡組織写真 No.34-2 × 100



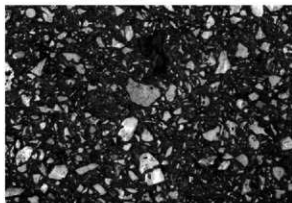
砂鉄顕微鏡組織写真 No.34-2 × 400



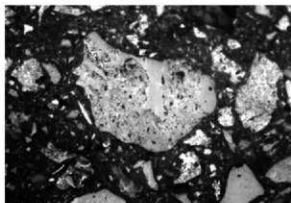
砂鉄顕微鏡組織写真 No.35-1 × 100



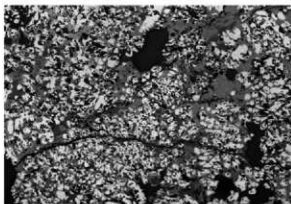
砂鉄顕微鏡組織写真 No.35-1 × 400



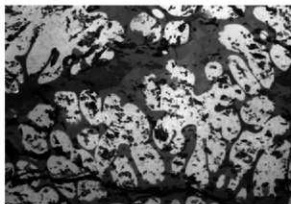
砂鉄顕微鏡組織写真 No.35-2 × 100



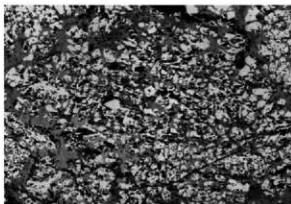
砂鉄顕微鏡組織写真 No.35-2 × 400



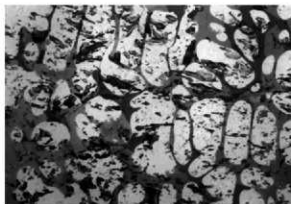
鉄滓顕微鏡組織写真 No.36-1 × 100



鉄滓顕微鏡組織写真 No.36-1 × 400



鉄滓顕微鏡組織写真 No.36-2 × 100



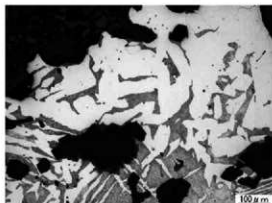
鉄滓顕微鏡組織写真 No.36-2 × 400



金属組織顕微鏡写真 No1-1_100



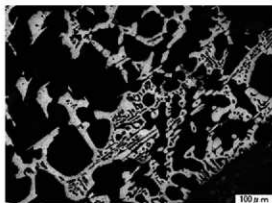
金属組織顕微鏡写真 No1-1_400



金属組織顕微鏡写真 No1-2_100



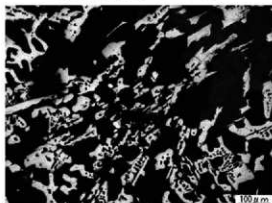
金属組織顕微鏡写真 No1-2_400



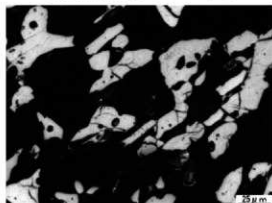
金属組織顕微鏡写真 No10-2-1_100



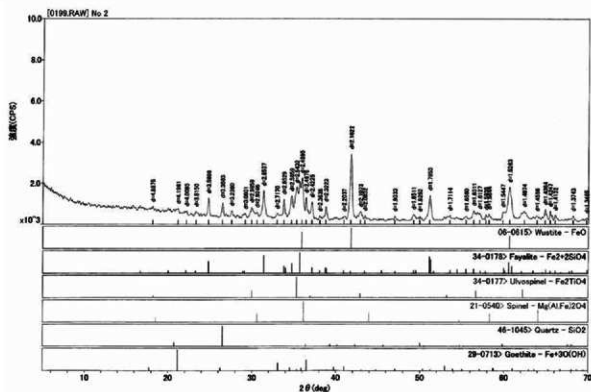
金属組織顕微鏡写真 No10-2-1_400



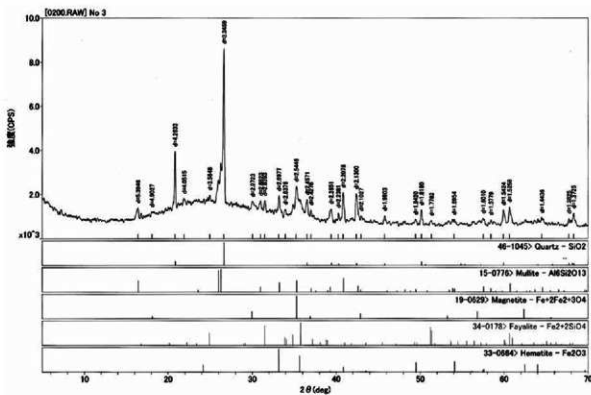
金属組織顕微鏡写真 No10-2-2_100



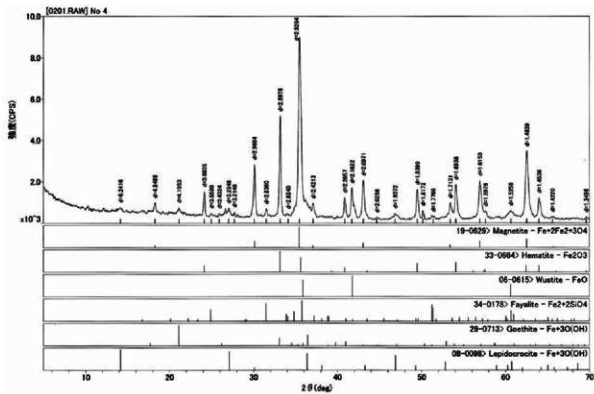
金属組織顕微鏡写真 No10-2-2_400



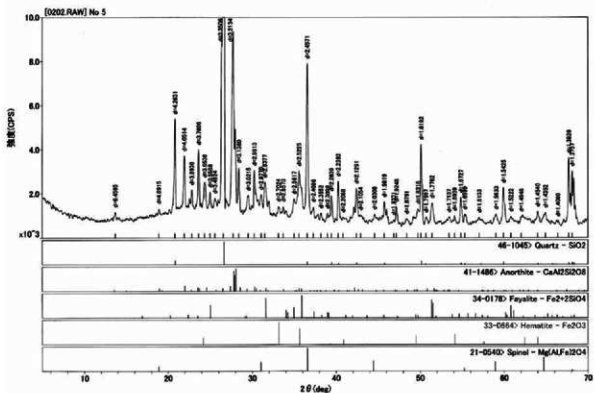
X線解析チャート1



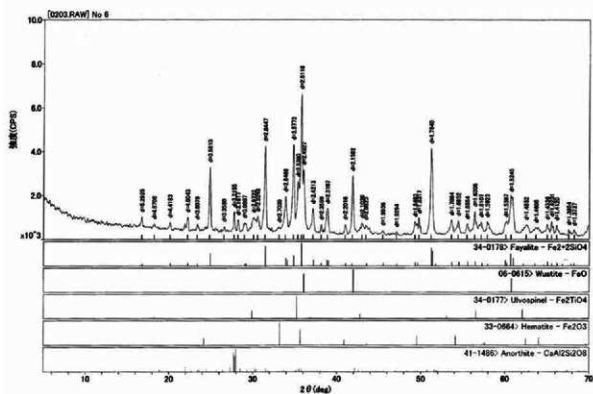
X線解析チャート2



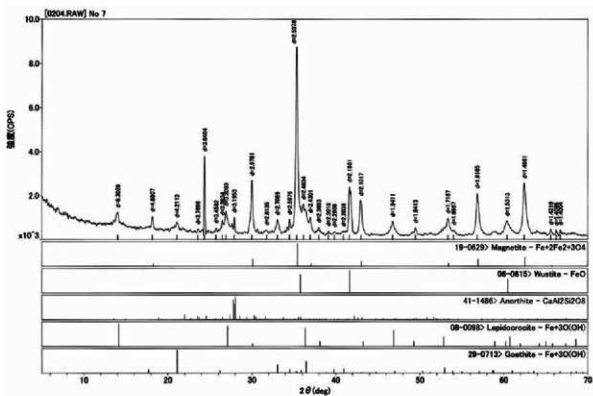
X線回折チャート3



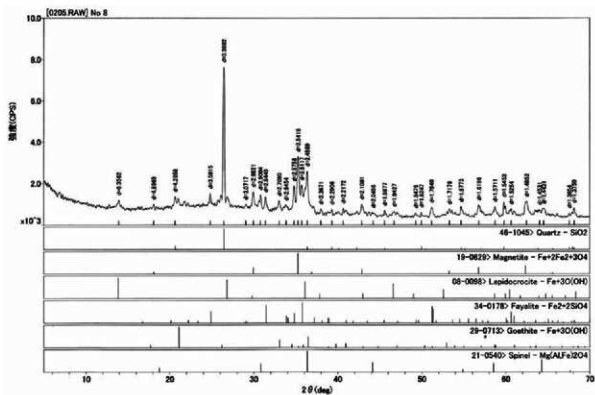
X線回折チャート4



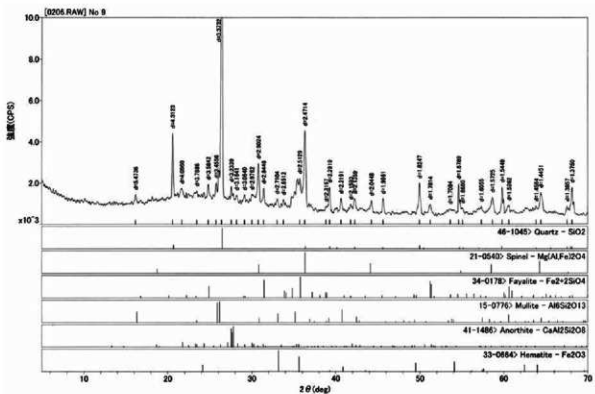
X線回折チャート5



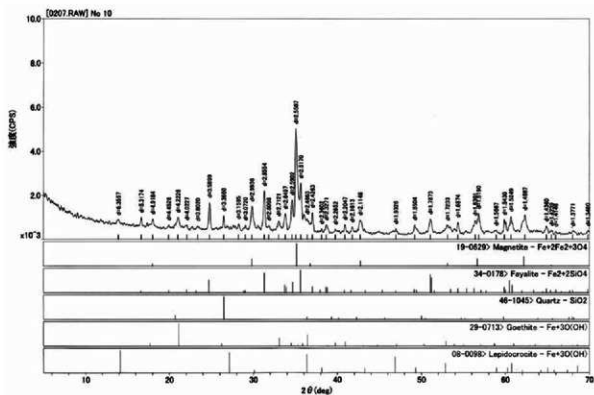
X線回折チャート6



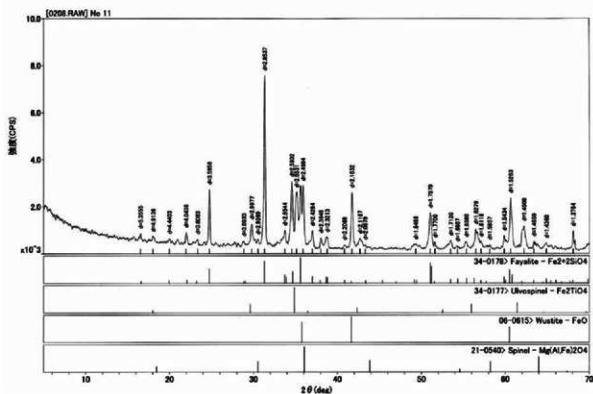
X線回折チャート7



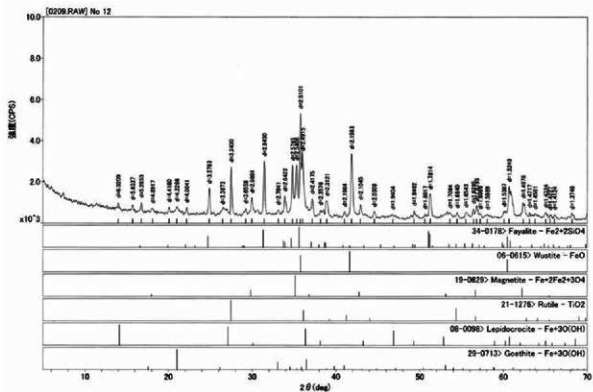
X線回折チャート8



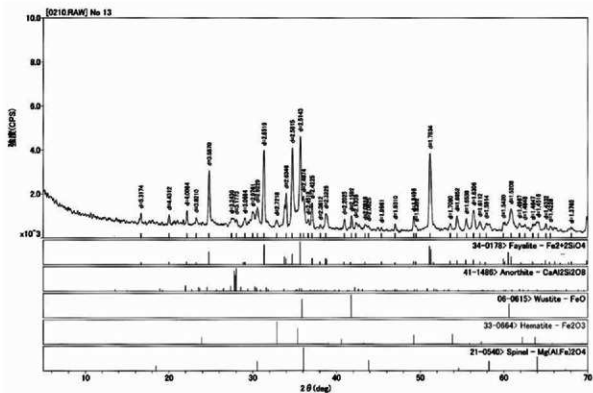
X線回折チャート9



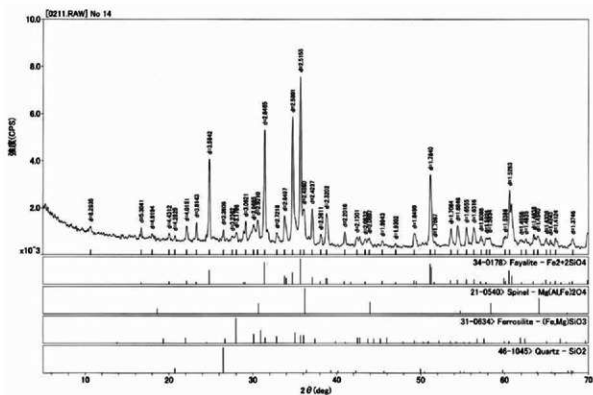
X線回折チャート10



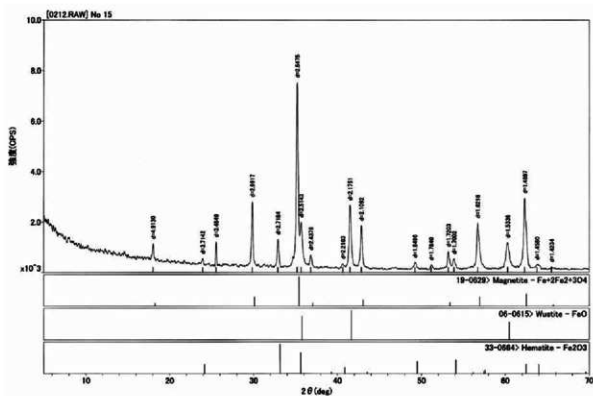
X線回折チャート 11



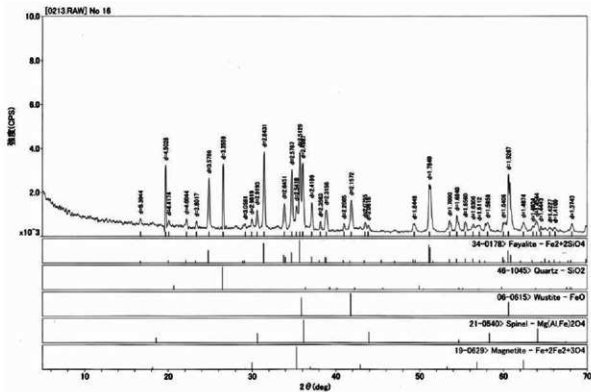
X線回折チャート 12



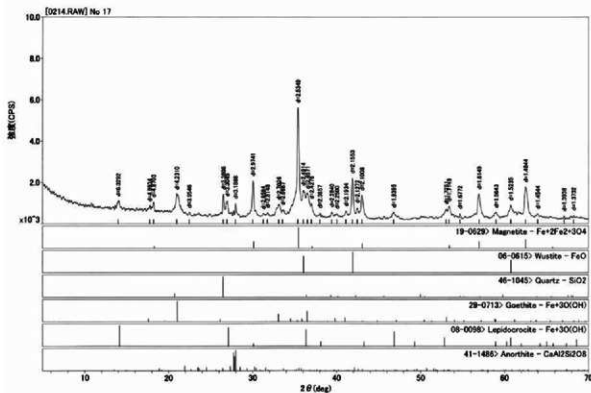
X線回折チャート13



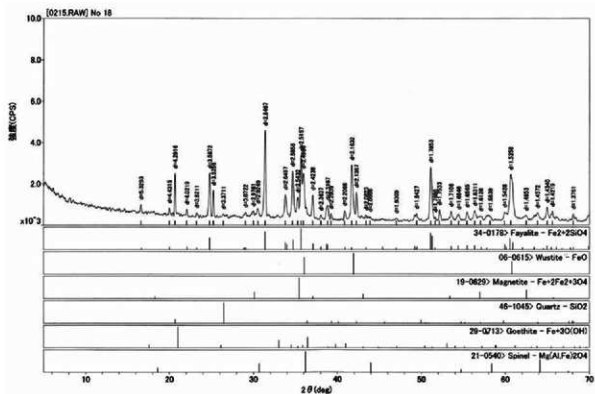
X線回折チャート14



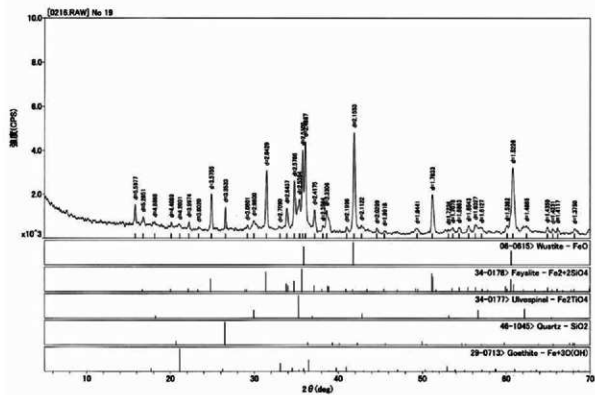
X線回折チャート15



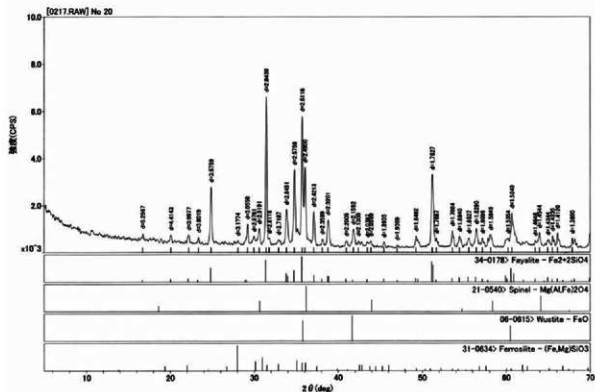
X線回折チャート16



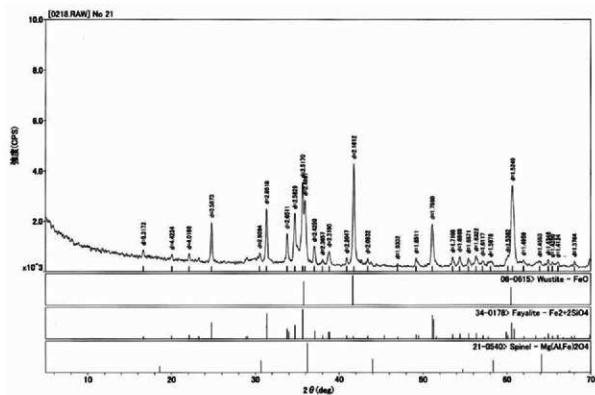
X線回折チャート17



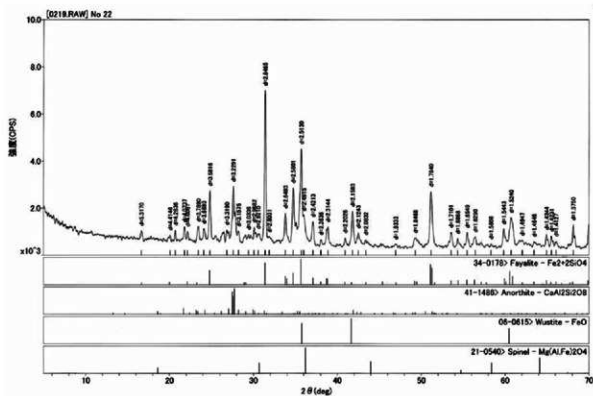
X線回折チャート18



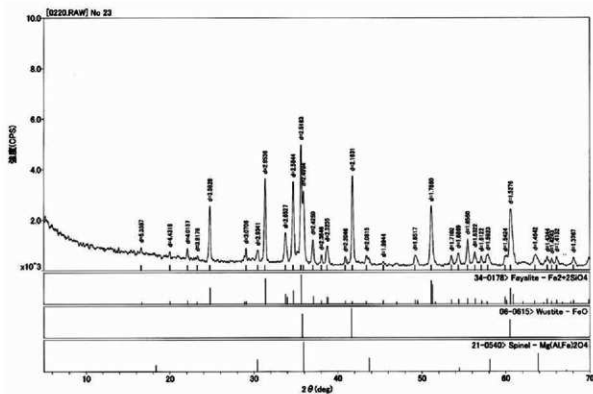
X線回折チャート 19



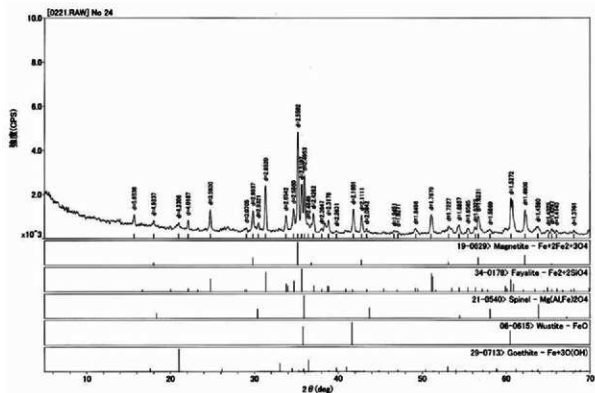
X線回折チャート 20



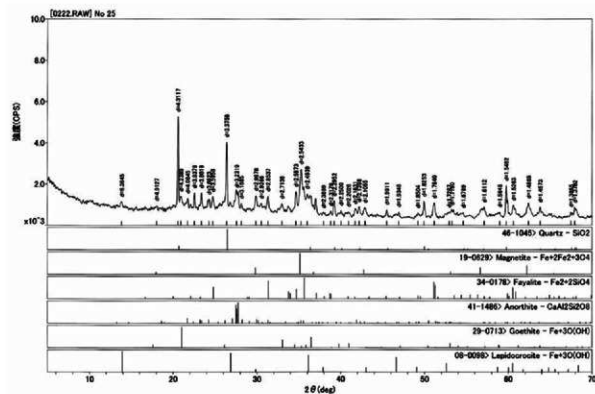
X線回折チャート21



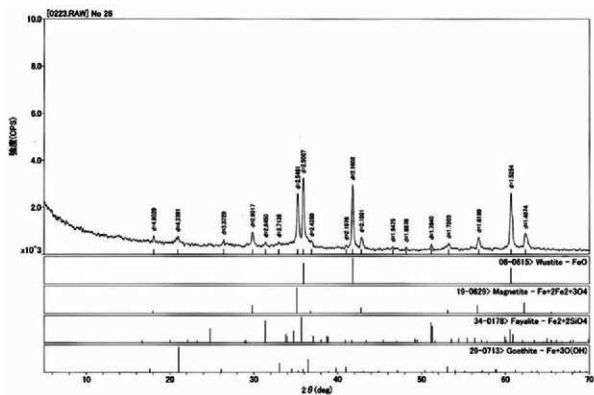
X線回折チャート22



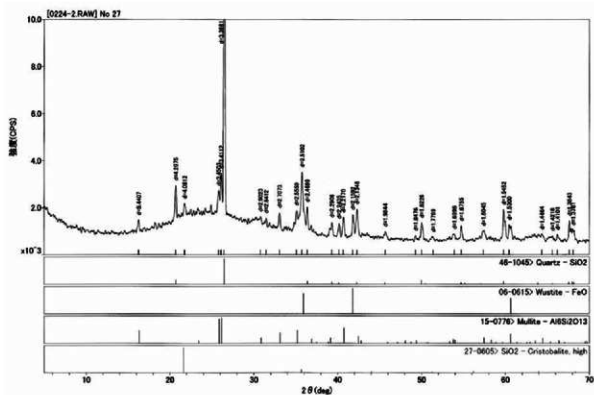
X線回折チャート23



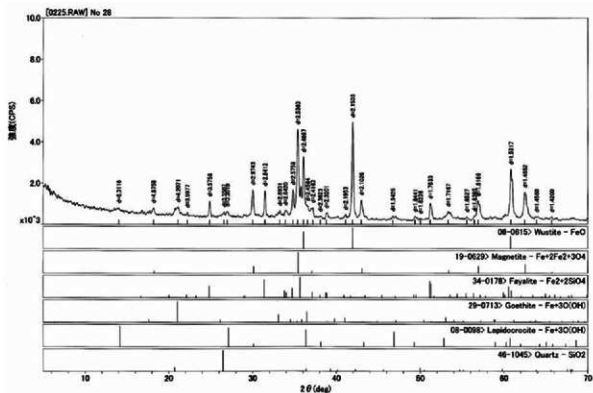
X線回折チャート24



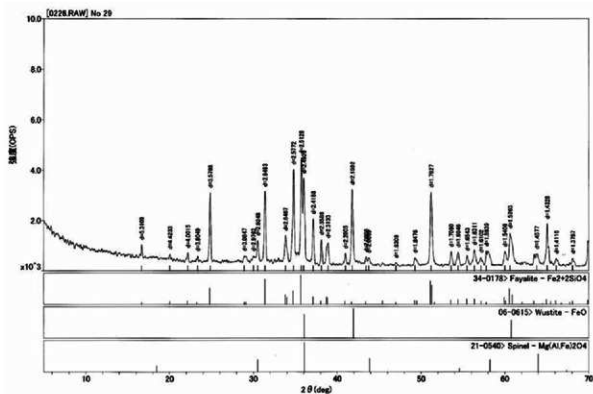
X線回折チャート25



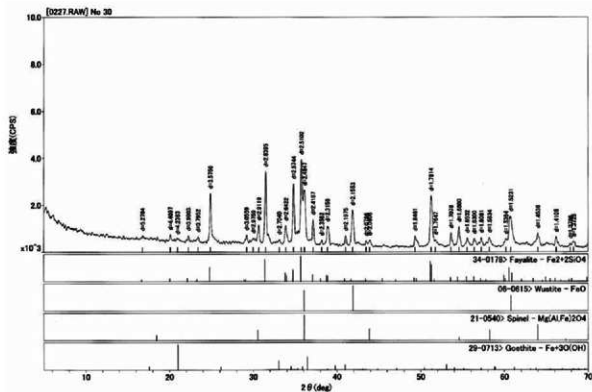
X線回折チャート26



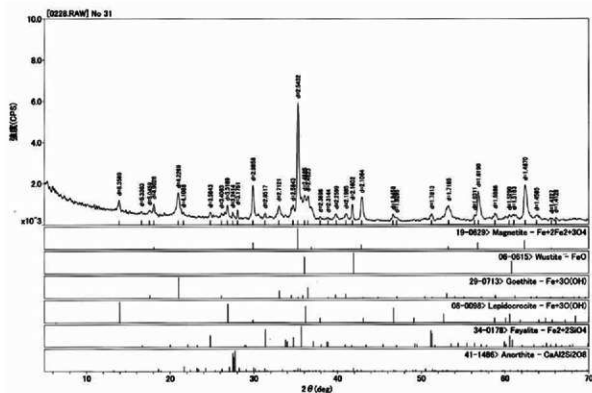
X線回折チャート27



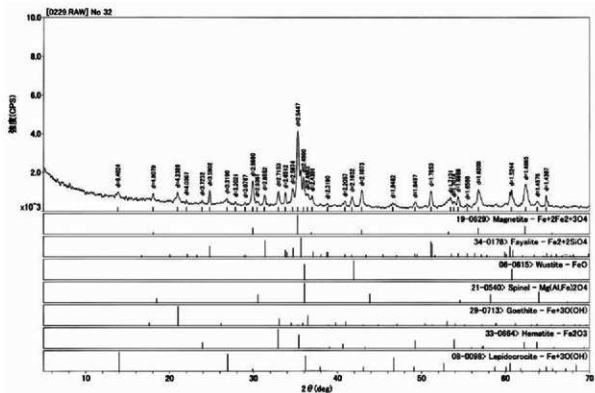
X線回折チャート28



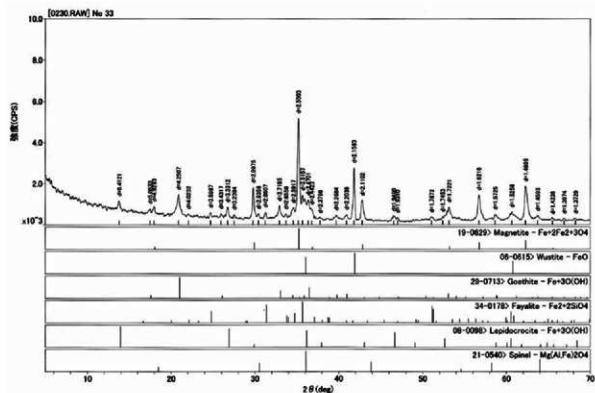
X線回折チャート29



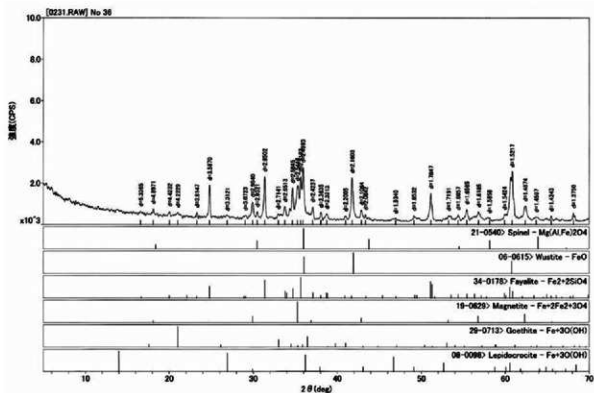
X線回折チャート30



X線回折チャート 31



X線回折チャート 32



X線回折チャート33

4 間木戸Ⅱ遺跡出土動物遺存体の同定

— 間木戸Ⅱ遺跡 26号竪穴建物跡から出土した動物遺存体について —

齊藤慶史（青森県教育庁文化財保護課）

はじめに

山田町間木戸Ⅱ遺跡では、26号竪穴建物跡から出土した7世紀末頃とみられる土師器甕の内部から動物遺存体が検出されている。ここでは、その内容に関する調査結果をまとめ、当遺跡における生業活動を概観する。

1. 資料回収方法

土師器甕の内部に検出された動物遺存体は、土壌ごと回収を行い、自然乾燥させた後に篩かけを実施した。使用した篩の目の開きは4mmで、篩上に分離された動物遺存体については、殻頂および1/2以上残存するもの全てを同定対象とした。一方、篩を通過した資料については、ウニの棘が多数含まれることを確認しているが、今回の分析資料に含めていない。

2. 出土動物遺存体の内容

腹足綱1種、二枚貝綱3種、蔓脚亜綱3種、海胆綱1種が確認された（表1）。河口域の潮間帯に生息する生物で占められ、貝類とウニ・フジツボで構成される。

貝類で最も多く検出されたのは二枚貝綱のイソシジミで、イガイがこれに次ぐ。これらの他にマテガイや巻貝綱のチヂミボラもみられるが、いずれもごく少量混じる程度であった（表2）。イソシジミのサイズは、殻長37.5～45.9mm、殻高28.3～33.8mmで、套線湾入が深く、近縁種のエゾイソシジミとは区別される（表5）。いずれも、山田湾奥部の関口川河口付近の干潟や岩礁で採集された可能性が高い。

ウニは、殻板の碎片、棘、歯、顎骨が出土している（表3）。現在、三陸沿岸ではエゾバフンウニ、バフンウニ、キタムラサキウニの3種がみられるが、種の特定が困難であったため、オオバフンウニ科に留めた。但し、長さ5mm以上の棘が多く、殻板大突起のサイズの特徴がキタムラサキウニに近似するものが多くみられた。

フジツボは、周殻の直径が3cmに満たないチシマフジツボやアカフジツボが多い（表4）。うま味成分を煮出すことの出来る調味食材としても知られるが、本遺跡で出土しているのは小型のサイズが多く、意図的に採集されたことを示す証拠は得られなかった。イガイの殻などに着生していたものが混入した可能性を考慮する必要がある。

おわりに

26号竪穴建物跡出土の土師器甕内部より検出された動物遺存体の内容は、魚骨や鳥獣骨が一切含まれず、貝類とウニ・フジツボを中心とするものであった。これらは、二枚貝の左右殻の数もほぼ同率で、極めて一括性の高い資料と認められるが、廃棄以前の調理・採集時にも、その組成が維持されていたのかどうかについては、より厳密な検討を加える必要がある。山田湾周辺では、沢田Ⅱ遺跡にお

いて、8世紀代の貝層が検出されており、ここでの出土貝類は、砂泥底及び干潟に生息する種が多く、岩礁性の種群がやや少ないという傾向がみられた（佐藤・熊谷1997）。本遺跡においても、イソシジミが最多であることから海岸部の状況は、ほぼ同様であったと予想される。

間木戸Ⅱ遺跡から出土した動物遺存体は、限られた分量ではあるものの、7世紀末の生業復元に資する一括性の高い貴重な資料である。今後も同時代の資料の蓄積を行い、古代三陸沿岸地域の海産物利用に関する議論が深められることを期待したい。

謝辞

本報告をまとめるにあたり、(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの佐藤あゆみ氏、佐藤剛氏、中村隼人氏、宮古市教育委員会の高橋憲太郎氏には、大変お世話になりました。記して、感謝申し上げます。

引用・参考文献

- 奥谷喬司編 2000 『日本近海産貝類図鑑』 東海大学出版会
 佐藤正彦・熊谷賢 1997 『沢田Ⅱ遺跡出土の動物遺存体』 『沢田Ⅱ遺跡発掘調査報告書』
 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第268集
 日本付着生物学会編 2006 『フジツボ類の最新学』 恒星社厚生閣

表1 間木戸Ⅱ遺跡出土動物遺存体学名表

巻貝綱 GASTROPODA	
チヂミボウ <i>Nucella lima</i>	
二枚貝綱 BIVALVIA	
イガイ <i>Mytilus coruscus</i>	
イソシジミ <i>Nuttallia japonica</i>	
マテガイ <i>Solen strictus</i>	
蔓脚亜綱 CIRRIPIEDIA	
アカフジツボ <i>Megabalanus rosa</i>	
チシマフジツボ <i>Semibalanus cariosus</i>	
イワフジツボ <i>Chthamalus challengeri</i>	
海胆綱 ECHINOIDEA	
オオバファンニ科の一種 <i>Strongylocentrotidae</i> gen. et sp. indet.	
キタムラサキウニ <i>Strongylocentrotus nudus</i>	

表2 巻貝・二枚貝出土量表

種	左右	数
チヂミボウ	—	3
イソシジミ	L	33
	R	28
イガイ	L	11
	R	19
イガイ(幼貝)	L	1
	R	1
マテガイ	L	1
	R	1

表3 海胆綱出土量表

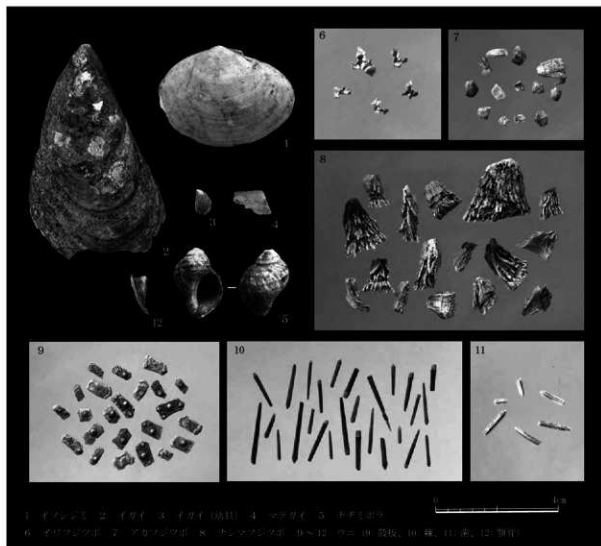
種	部位	数
オオバファンニ科の一種	殻板	19
オオバファンニ科の一種 (キタムラサキウニ近似)	殻板	37
オオバファンニ科の一種	顎骨	14
オオバファンニ科の一種	歯	6
オオバファンニ科の一種	棘	125

表4 蔓脚亜綱出土量表

種	部位	数
チシマフジツボ	周殻片	48
アカフジツボ	周殻片	16
イワフジツボ	周殻片	5
蔓脚亜綱の一種 (シロスジフジツボ近似)	周殻片	6
蔓脚亜綱の一種	周殻片	21

表5 イソシジミ計測値 (mm)

	0-5	5-10	10-15	15-20	20-25	25-30	30-35	35-40	40-45	45-50	50-55
殻長	0	0	0	0	0	0	0	2	8	1	0
殻高	0	0	0	0	0	2	12	0	0	0	0



Ⅶ 総 括

本書では、間木戸Ⅱ遺跡、間木戸Ⅴ遺跡の調査成果を別記載で報告してきたが、両遺跡の立地状況や遺跡の性格を鑑み、総括をまとめている。調査時は複数の重複関係により、検出遺構を総合的に検討し、その全体像を把握する作業が困難であった。室内整理の中で判明した、遺跡の様相を透視するのに必要な資料の検討を下記に記載する。

1 縄文時代

出土遺物の中でも縄文土器が圧倒的な量を占めている。間木戸Ⅱ遺跡では大コンテナ 54 箱、間木戸Ⅴ遺跡は大コンテナ 1 箱出土した。これまでの周辺における調査成果から、縄文時代中期後半の竪穴建物跡を多数検出しているのに反して、出土遺物数の少ない傾向が指摘されていた(岩文理 2000「沢田Ⅰ遺跡」)。しかし、今回の調査では、間木戸Ⅱ遺跡で調査区全体を覆う包含層が検出され、これまでの周辺遺跡における調査例の中でも遺物出土状況が濃密であることは確然である。調査区西側では、間木戸川により形成された段丘状の低地部に大量の遺物が出土したことから、一体が捨て場として使われていたことも想定したが、土器の破片資料が多いことや、一部を除き堆積土が調査区の基本層と類似する点等から捨て場ではなく自然堆積と判断した。

時期は一部早期の土器片も出土しているが、遺構内からの出土は概ね縄文時代中期のもので、その中でも大木 8a～8b 式が中心、次いで 6～7b 式が続く。前期の土器片も大木 1 式から途切れず見受けられるが、全体的に破片資料が多く土器の全体形状がわかる資料が少ない。器種は、深鉢が主で、大木 6 式にみられる球形深鉢も散見されるが、浅鉢と明確にわかる資料は間木戸Ⅴ遺跡出土の V P027 (大木 8b 式) のみである。

石器は、遺構内から石鏃と敲磨器類の出土が多い。石核がいずれも北上山地中生代前期の青灰色の頁岩で、同じ石質のものが石鏃等にも使用されている。また、十和田火山に由来する可能性のある軽石や、零石・折居産の黒曜石は他地域との交流を窺わせる資料である。

石製品は、球状耳飾り(沢跡 G027、II A21v の IV 層 G030) や、縄文時代中期中葉(大木 8b 式期)に帰属する 6 号竪穴建物跡から石棒(G011)が出土している。また、土製品も同時期の斧状土製品(G004)が中期中葉(大木 8b 式期)に帰属する 7 号竪穴建物跡から出土している。

縄文時代に帰属する遺構は、間木戸Ⅱ遺跡で竪穴建物跡 25 棟、土坑 13 基、焼土遺構 10 基、集石遺構 1 基、間木戸Ⅴ遺跡で竪穴建物跡 2 棟、焼土遺構 1 基、埋設土器 1 基を検出した。出土した縄文土器と遺構の重複関係から推定できる竪穴建物跡の時期は第 21 表の通りである。概ね中期前葉から中葉に帰属される。検出した炉は、地床炉、石囲炉(円形・方形・楕円形)、複式炉、土器埋設炉と様々な形状であった。地床炉は床面中央に設けられているが、石囲炉は壁際に寄るものが多い。間木戸Ⅱ遺跡内で検出した竪穴建物跡には周溝や柱穴の検出が少なく、規則性は認められない。一方、間木戸Ⅴ遺跡内で検出した竪穴建物跡 2 棟については、規則性のある柱穴や一部で周溝が認められる。同時期に存在していた集落の中で違いがあることは、両者の立地条件による可能性がある。つまり、平坦部と斜面部の違いによるものなのかということであるが、間木戸Ⅴ遺跡からの検出数は 2 棟のみであるため今後周辺の調査に期待したい。

土坑は、プラスチック状や、陥し穴状遺構と考えられる土坑を検出した。貯蔵穴域や墓域といった機能

面でのまとまりは確認できず、調査範囲外に居住域以外の集落構造が検出される可能性が考えられる。

焼土遺構・炉跡は、石囲炉についても単独で遺構名を付したものが2基ある。これは、屋外炉の存在を示すというよりは、これに伴う竪穴の壁が重複する遺構に壊され竪穴建物跡として確認することが出来なかったものという認識である。

(佐藤 あゆみ)

第21表 縄文時代竪穴建物跡一覧表

遺跡	号	帰属時期	炉の種類	炉の位置	備考
Ⅱ	1号竪穴建物跡	中期中葉以前	不明	-	
	2号竪穴建物跡	中期中葉	地床炉	北西壁に寄る	AMS 測定 4,456 ± 29
	3号竪穴建物跡	中期中葉	石囲炉 (円形)	南西壁に寄る	古期炉 (石囲)
	4号竪穴建物跡	中期中葉～後葉古	複式炉	南西壁際	床面焼土2
	5号竪穴建物跡	中期中葉	複式炉	中央	床面焼土1
	6号竪穴建物跡	中期中葉	地床炉	中央	炉は断面のみ確認
	7号竪穴建物跡	中期中葉	石囲炉 (方形)	北壁に寄る	
	8号竪穴建物跡	前期後葉～中期前葉	石囲炉 (楕円形)	北壁に寄る	
	9号竪穴建物跡	中期中葉	石囲炉 (方形)	南西壁に寄る	
	10号竪穴建物跡	中期前葉～中葉	石囲炉 (円形)	南壁に寄る	AMS 測定 4,440 ± 30
	11号竪穴建物跡	中期中葉	石囲炉 (円形)	中央	古期炉 (石囲)
	12号竪穴建物跡	中期中葉	石囲炉 (円形)	南西壁に寄る	床面焼土1
	13号竪穴建物跡	前期	地床炉	中央	床面焼土1
	14号竪穴建物跡	前期中葉～中期前葉	地床炉	中央	床面焼土2
	15号竪穴建物跡	前期中葉～中期前葉	地床炉	中央	
	16号竪穴建物跡	前期中葉～後葉	地床炉	北に寄るか	
	17号竪穴建物跡	中期中葉	石囲炉 (楕円形)	北東壁に寄る	
	18号竪穴建物跡	前期前葉～中葉	不明	-	
	19号竪穴建物跡	中期中葉以前	不明	-	
	20号竪穴建物跡	中期前葉～中葉	不明	-	
	21号竪穴建物跡	中期前葉～中葉	石囲炉 (円形)	北東壁に寄る	
	22号竪穴建物跡	前期後葉～中期前葉	不明	-	
	23号竪穴建物跡	中期中葉以前	不明	-	
	24号竪穴建物跡	中期前葉	土器埋設炉	中央	AMS 測定 4,561 ± 29
	25号竪穴建物跡	中期中葉以前	不明	-	
Ⅴ	1号竪穴建物跡	中期	石囲炉 (円形)	中央	
	2号竪穴建物跡	中期中葉	不明	-	

2 古 代

(1) 土 師 器 (第155図)

間木戸Ⅱ遺跡と間木戸Ⅴ遺跡では古代の遺構として、間木戸Ⅱ遺跡から竪穴建物跡群、間木戸Ⅴ遺跡では竪穴建物跡と製鉄工房、炭置き場という製鉄関連遺構が出土した。これらの遺構のうち、特に製鉄関連遺構については、岩手県沿岸地域の中央部において近年調査例が増加しているものの、詳細な時期を検討できる出土例に恵まれていなかった。今回の調査では所属時期の決定に普遍的に用いられる土器がまとめて出土したことから、これらの遺構群の所属時期を検討できる資料が得られた。

そのため、間木戸Ⅱ遺跡と間木戸Ⅴ遺跡の各遺構とそれに関連する遺物包含層から出土した土器を検討し、各遺構の所属時期を明らかにすることで、古代における人々の時期ごとの遺跡の利用状況を想定する。なお、掲載した資料は細別器種の異なるものについてはすべて、調整の異なるものについては可能な限り抽出した。

・ 間木戸Ⅱ遺跡

30号竪穴建物跡に伴うものでは、土師器の甕、坏がある。甕は中型の肩の張るものと中型から大型の長胴のものである。肩の張るものはやや肩が張る程度で、外面調整はミガキである。長胴のものは胴部中央に最大径があり、外面調整はミガキである。坏は内面黒色処理の小型から大型の有段のものと小型の段を持たない平底のものである。有段のものは、段は1段で輪積みと一致する。小型のものは平底である。底部は厚く、角にも厚みがあることから、栗園式の坏の底部を成形する前の状態の平底と考えられる。

26号竪穴建物跡に伴うものでは、土師器の甕、壺、坏、鉢（碗）と須恵器の甕がある。これらは床面及びカマド出土のものと同様に土から出土したものであるが、埋土の厚さが10cm程度であることと、遺物のまとまりや磨滅、残存率といった出土状況において著しい違いが見られないことから、すべて遺構に伴うものと判断した。

土師器では、甕は中型から大型の長胴のものと小型の寸胴のものである。長胴のものは胴部中央に最大径があり、外面調整はミガキとハケの両者がある。壺は中型の丸みのある胴部で、口縁はやや直立気味に立ち上がった後に外傾して開く。坏は内面黒色処理の小型から大型の有段のもので、段は1段で輪積みと一致し、内面にも段が見られる。鉢は内面黒色処理で、やや丸みを持ちながら直線的に開くものと口縁部が内湾する丸みのあるものである。須恵器は中型の甕で平底である。

27号竪穴建物跡に伴うものでは土師器の甕があり、小型の寸胴のものである。

29号竪穴建物跡に伴うものでは土師器の坏があり、内面黒色処理の有段のもので、段は1段で輪積みと一致する。

SN07～10に伴うものでは近接して出土した土師器の甕があり、小型のものである。外面調整はハケである。

遺物包含層からは土師器の坏が出土した。小型の有段のもので、段は1段で輪積みと一致する。

・ 間木戸Ⅴ遺跡

2号工房跡の下の遺物包含層からは土師器の壺の小片が出土した。壺は赤彩壺で、口縁部の内外面に縦線を3本ないし4本単位で施文している。

3号竪穴建物跡に伴うものでは、土師器の甕、壺、坏がある。これらのうち、上段が床面及び埋土最下層出土のもので遺構に伴うもので、下段が埋土から出土したものである。遺構が斜面に構築され

ていることから短期間に埋まった可能性が高く、あまり大きな時間差は想定できない。

甕は中型の長胴のもので、外面調整はミガキとハケの両者がある。頸部の屈曲が緩やかなものである。壺は中型の丸みのある胴部で、口縁はやや直立気味に立ち上がった後に外傾して開くものと頸部からならだかに外傾して開くものがある。坏は内面黒色処理の中型と大型の有段のもの、中型の段のないものである。有段のものうち、大型のものでは段は1段で輪積みと一致する。中型のものでは段は2段で沈線状のものである。中型のものは平底である。底部の外面は丁寧なミガキであり、底部は厚く、角にも厚みがあることから、栗開式の坏の底部を成形する前の状態の平底と考えられる。段のないものでは底部から口縁まで丸みを持って開くものとなりに平底に近いものがある。

遺物包含層からは甕、壺、坏、鉢（碗）が出土した。これらはすべて製鉄関連遺構よりも上位の層からまとまって出土したものであることから、製鉄関連遺構の時間的な下限を示す資料と考えられる。甕は中型の長胴のもの、頸部の屈曲が緩やかなものである。外面調整はミガキとハケの両者がある。壺は中型から大型の丸みのあるものと小型のやや下膨らみになるもの、小型の四脚付きのものである。坏は内面黒色処理の中型の有段のもの、大型のものである。有段のものでは段は1段で内面にも段のあるものと輪積みと一致するものである。鉢は内面黒色処理で、口縁部が内湾する丸みのあるものである。中型のものでは段は2段で沈線状のものである。

・各遺跡の遺構の構築時期と遺跡の利用状況について

問木戸Ⅱ遺跡と問木戸Ⅴ遺跡から出土した土師器資料は、栗開式から国分寺下層式に位置付けられる。

問木戸Ⅱ遺跡では、30号堅穴と26号堅穴では、30号堅穴は甕にやや肩の張るものを含み、外面調整がすべてミガキであることから相対的に古い傾向があり、長胴のもののみで構成され、外面調整にミガキとハケの両者が見られる26号堅穴が新しい傾向があると考えられる。

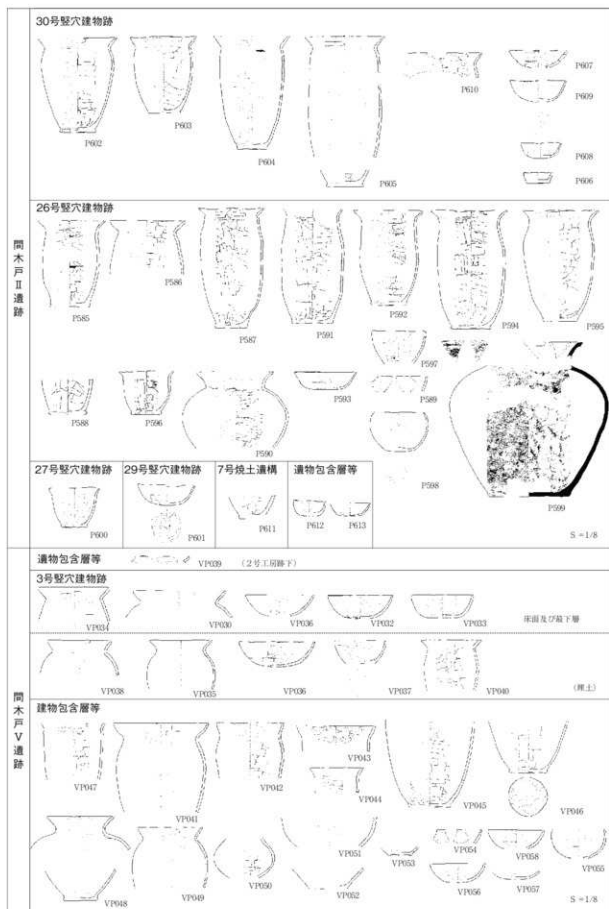
問木戸Ⅴ遺跡では、3号堅穴建物跡と製鉄関連遺構の上位の層からまとまって出土したものは総体としての特徴は共通することから、大きな時間差は想定できない。その中で、24の坏は有段で内面にも段のあるもので相対的に古い傾向を示すものである。しかし、かなり平底に近い丸底の坏や頸部の屈曲が緩やかな甕という国分寺下層式の特徴のあるものもみられる。ただし、破片資料も含めてロクロ土師器や須恵器の坏類は出土していない。

これらのことから、問木戸Ⅱ遺跡の集落は7世紀末から8世紀の前半には営まれ、それに関連して問木戸Ⅴ遺跡の利用が開始され、製鉄関連遺構は遅くとも8世紀の中葉から後半に操業を始めたものと考えられる。

(佐藤 剛)

(2) 鉄製品

問木戸Ⅱ遺跡では、鉄鎌が4点、刀子が1点、鉄鐙が1点、問木戸Ⅴ遺跡では、鉄鎌が1点、蕨手刀の破片2点が出土している。(鉄鎌の形状に関しては、第157図の分類図にある名称を使用する。)鉄族は、問木戸Ⅱ遺跡の26号堅穴建物跡床面からG032~034が出土した。G032は、茎部の下を欠損しているが、ほぼ完形と考えられる。鎌身外形は三角形を呈し平造の断面形をもつ。鎌身関節部は、腸袂気味である。頸部は棒状の角間で、断面は方形である。G033は、頸部のみでG032と同じく棒状の頸部に角間をもつが長身である。G034は、茎部下を欠損しているがほぼ完形と考えられる。鎌身外形は、三角形を呈し平造の断面形をもつ。鎌身関節部は、段のない角間である。頸部は棒状の角間で、断面は方形である。問木戸Ⅴ遺跡から出土したVG003は、鎌身部が欠損し茎部も下を欠損しているた



第155図 土師器

め、頸部の一部のみであるが、円形関が確認できる。断面は長方形である。5点とも、頸部関などの特徴から8世紀前半より古いものであると考えられ、特に間木戸V遺跡出土のVG003は、頸部の関が間木戸II遺跡出土のものより異なり円形関を呈するため、7世紀まで遡る可能性が考えられる。しかしながら、VG003は1号製鉄炉の炉面からの出土であり、素材として持ち込まれた可能性があり、ここでは遺構帰属時期の上限としておきたい。

このように、古代の集落から鉄鏝があとまわって確認されたわけであるが、特に1棟の竪穴建物跡から鉄鏝(G032-034)があとまわって出土した事例は少ない。近隣の遺跡の中で鉄鏝があとまわって出土している房の沢古墳では、古墳内から埋葬品として数点出土している。山田町内で調査された遺跡の中では大畑II遺跡の10世紀前半に帰属する竪穴建物跡から1点、沢田II遺跡の奈良時代に帰属する竪穴建物跡から1点の出土のみである。

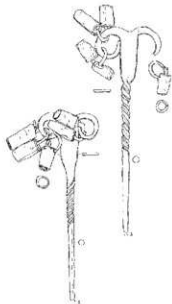
G037は、鉄鏝である。全体の形状は、若干下部が広がるが円錐にはほど遠い。近接する沢田II遺跡から出土した錫杖鉄製品に付属している鉄鏝と規模・形状ともに同様のものと考えられる(第156図)。鉄輪を通した穿孔の有無は、頂部が欠損しているため確認できない。錫杖鉄製品と鉄鏝一式は、沢田II遺跡での出土資料のように「神仏習合の要素もった雑密系の祭祀具」(井上2002)と考えられている。しかし、本資料は遺構外から単独の出土であるため、この場で本来の用途として使われていたか明確ではない。

間木戸V遺跡3号竪穴建物跡から出土したVG006は、蕨手刀の座金部である。座金の表面には、菊座のようなはっきりとした模様は確認できない。VG005は、VG006と同遺構から出土した。刀身の一部と考えられるが、重量感と厚みがあり反りはなく刃部が明確でないことから、蕨手刀の柄部の可能性が考えられる。蕨手刀は、7世紀後半から9世紀前半まで確認され、その分類や編年がなされているが、今回の資料は、刀の全体像がわからないため詳細な時期は不明である。しかしながら、同遺構は、共存する土器器の特徴から8世紀代の遺構と位置づけられており、間木戸V遺跡内で検出された製鉄関連遺構に関連し素材として持ち込まれた可能性を踏まえたとしても7世紀後半から8世紀代の蕨手刀と考えられる。ちなみに、房の沢V遺跡から出土した蕨手刀(※1)は8世紀前半から中葉とされている(大道1998「房の沢IV遺跡」)。

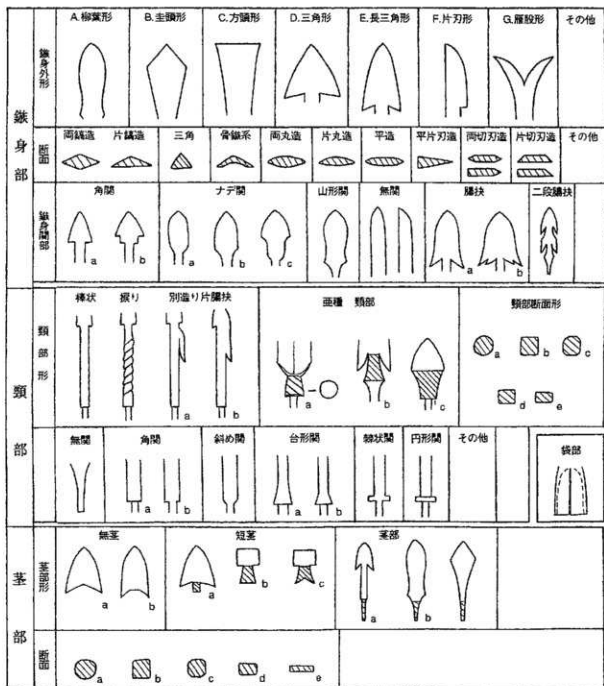
これらの鉄製品は、7世紀から8世紀代のものと考えられる。間木戸II遺跡の竪穴から出土した資料は8世紀前半以前、間木戸V遺跡から出土した資料は、鉄生産遺構の存在から素材として持ち込まれた可能性があるが、7世紀～8世紀代に帰属する資料といえる。

※1 1次調査で出土した蕨手刀は、足金具等の一部のものも含め8点。その中から分類基準と比較できる4点について考察されている。

(左欄 あゆみ)



第156図
沢田II遺跡 RA505 出土錫杖鉄製品

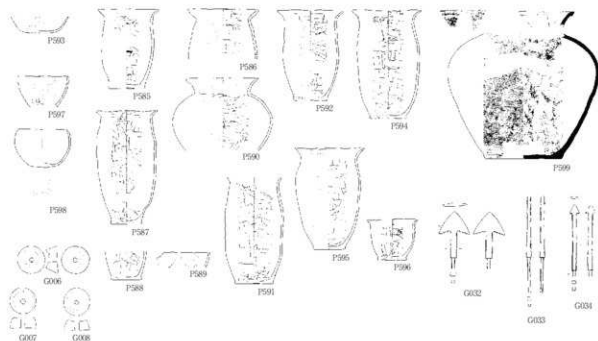


第157図 鉄鍬基礎分類図

水野2003「古墳時代中期における鉄鍬の分類と編年」より転載

(3) 堅穴建物跡について (26号堅穴建物跡を中心に)

古代の堅穴建物跡は、間木戸Ⅱ遺跡で5棟(26~30号堅穴建物跡)、間木戸Ⅴ遺跡で1棟(3号堅穴建物跡)検出している。規模は、調査区外にかかるものは残存部から推定しているが、一辺3~4mの小型のもと、同じく6~6.5mの大型のもの2通りに分けられる。小型のものは、間木戸Ⅱ27・28・29号堅穴建物跡、大型のものは間木戸Ⅱ25・30号堅穴建物跡、間木戸Ⅴ3号堅穴建物跡である。カマドは、検出できなかった28号堅穴建物跡以外は間木戸Ⅱ25・26・27・29・30号が北~北東、間木



第158図 26号竪穴建物跡出土遺物一覧

戸V 3号竪穴建物跡が西に設置されていた。間木戸II遺跡の竪穴建物跡は7世紀末から8世紀前半、間木戸V遺跡の竪穴建物跡は8世紀代に帰属する。カマドの位置の違いは、時期差によるものと斜面地による立地条件の制約といった可能性が考えられる。柱穴は、検出したもので間木戸II 25号6本、30号4本、間木戸V 3号4本が主柱穴として配されていた。なお、周溝を検出した竪穴は無かった。

出土遺物について、各竪穴建物跡別に計測した土師器の重量は下記の通りである。

間木戸II - 26号竪穴8,825.2g、27号竪穴32.1g、29号竪穴221.1g、30号竪穴3,926.6gg

間木戸V - 3号竪穴3,863.5g

26号竪穴建物跡からは、前項まで上述してきた通りまとまった資料が出土している。土師器の他に須恵器4,258g、鉄製品4点、土製紡錘車2点が出土している。出土遺物は、床面までの残存状況(IV-2竪穴建物跡参照)があまり良くなかったものの床面やカマド付近から多く出土した。北東壁際からは、土師器と須恵器の甕が出土し、土師器の甕内部からイソシジミ、ウニ、フジツボ等が出土している。鉄鏃3点・刀子1点は、いずれも床面からの出土である。同時期と考えられる他の間木戸II遺跡内の竪穴建物跡と比較すると、調査区外にかかるものも含め鉄製品が出土した竪穴建物跡は無い。もとより、鉄鏃は、竪穴建物跡からまとめて出土する例が少ない。ここに居住していた人々だけが武器としてもしくは古墳内の埋葬品として複数の鉄鏃を所有し、優越的な立場におかれていたのではないかと考える。

同じく床面からは、ほぼ完形の土製紡錘車2点を確認している。土製紡錘車は26号竪穴建物跡と規模が近似する1辺5.6mの30号竪穴で1個出土しているのみである。

第158図は、26号竪穴から出土した資料を一括で提示したものである。出土遺物の検討に加え、埋土下位から出土した炭化材を放射性炭素年代測定に出し、その結果が665年(±23)であったことから、26号竪穴建物跡は7世紀末～8世紀前半に帰属すると判断した。一辺6.5mの規模をもつ竪穴建物跡は、近接する沢田I遺跡で数棟検出されているが、このように資料がまとめて出土していない

ことと、該期の遺構から多種多様な資料が出土したため参考例になるものとして本項でまとめた。26号竪穴建物跡の事例は今後、周辺における古代遺跡の調査成果と共に検討されるものと期待される。

(佐藤あゆみ)

(4) 製鉄関連遺構群について

今回の岡木戸V遺跡の発掘調査では、製鉄に関連する遺構として、製鉄炉5基を含む工房跡2棟、炭置き場跡2基、廃滓場1箇所が確認された。これらの遺構は鉄生産に関わる遺構として一連の遺構群として存在していたものである。以下、これらの遺構を概観する。

製鉄関連遺構群が確認された部分は、北東から南西に流れる沢(小川)を挟んで急斜面が対面しており、その沢の北西側に狭い緩斜面が確認できる。斜面の一部では基盤となる花崗岩の巨礫が露出しており、花崗岩が風化して細粒化したいわゆる「マサ土」がいたるところで確認できる。また、沢筋でも容易に原料となる砂鉄の採取が可能である。原料、燃料が容易に獲得でき、水利の便も良く、遺跡周辺では比較的日照条件も良好な南東向きの緩斜面地に遺構群は立地していると言える。

工房跡は2棟あり、古い工房跡は斜面下方に構築されている2号工房跡である。2基の製鉄炉で構成されるが、近接しており、同時に存在していたとは考えにくい。1基ずつ構築され、鉄生産が終了すると、壊され、位置を少し変えて新しい製鉄炉を構築するという行為を行っていたと考えられる。鉄生産の際に大量にできる鉄滓を斜面下方へ廃棄している。1つの工房が機能を果たさなくなると、その工房を利用しつつ、斜面上方に平坦な部分を構築し、新規の工房としている。これが、新しい工房の1号工房跡である。製鉄炉3基で構成される。3基は同時に存在しておらず、1基ずつ構築され、位置を北東へ少しずつ変えながら新しい炉を構築している。また、炉を構築する床面も少しずつ嵩上げをしており、古い炉がレベル的に低く、新しい炉が高くなる。

つまり工房跡と製鉄炉の新旧関係は、

(旧)	(新)
2号工房跡	1号工房跡
4号製鉄炉・5号製鉄炉	3号製鉄炉→2号製鉄炉→1号製鉄炉

となる。このようなことから、初期段階では、沢筋に近い斜面下方に製鉄炉を含む工房を構築するが、その工房が機能なくなると、古い工房跡を利用しながら、斜面上方へと新しい工房を構築する特徴が見られる。また、炉についても、機能しなくなった古い炉の上に炉を新しく構築するため、新しい炉はどれレベル的に高くなる傾向が見られる。

製鉄炉の形態は5号製鉄炉を除き、楕円形基調である。残存状態はいずれも良好とは言えないが、最も新しい1号製鉄炉から判断すると、1.5×1.0m前後の掘り方を持ち、1.3×0.8m前後の規模と想定される。古い段階の炉を利用していることも考えられるが、炭化物を充填するような重厚な下部構造は確認できない。1号製鉄炉と2号製鉄炉に対応するように、炉の長軸線上に硬化した範囲が確認され、フイゴが設置された場所と想定される。

工房の他に、長楕円形基調の炭置き場跡を2基確認した。2基とも類似した形状をしており、4.5～5mの規模を呈する。底面や壁面に被熱による赤色変化した部分が認められないため、炭窯とはなかった。県内では類似する遺構例がほとんどなく、類例の増加を期待したい。

これらの製鉄関連遺構群の年代観であるが、工房や製鉄炉から年代を決定しうる遺物がほとんど出土していないため、出土遺物から直接的に遺構の年代を決定することはできなかったが、遺構群を構成する廃滓場と関連する包含層から出土した土器類の年代観から判断すると、本遺構群は8世紀代後半に帰属する可能性が高い。なお、1号工房跡のPit 1と2号工房跡の5号製鉄炉から採取した炭化物を選び、炭素年代測定（AMS測定法）を行った。詳細な内容は「VI 分析・鑑定」を参照して頂きたいが、1号工房跡の試料は10～12世紀代後半、2号工房跡の試料は8世紀後半の可能性を含みつつ、9～10世紀代後半のものとの結果が出ている。8世紀代後半となると、本遺跡の製鉄関連遺構群は沿岸部における初期段階のものとの可能性がある。

間木戸V遺跡が所在する山田町やその周辺でも古代の製鉄関連遺構が確認されている遺跡があるので、簡単に触れておきたい。主な遺跡を第21表に示した。当然のことと考えられるが、これらの遺跡は、鉄生産の原料となる砂鉄が採取できる花崗岩地帯上に立地している。山田町の大畑Ⅱ遺跡や宮古市の鳥田Ⅱ遺跡・松山館跡は尾根上の平坦地や斜面地に占地している遺跡もあれば、沢筋や谷間の水利の便が良好な緩斜面に占地している遺跡も見られる。遺跡の周囲には燃料の材料となる樹木もあったと考えられ、鉄生産に向けた場所にあると言えよう。ただ、炉体や羽口などに利用される粘土をどこで採取しているかの問題がある。県内の遺跡の中で、粘土採掘坑のように遺構として確認できる例はなく、採取場所、採取方法など今後の課題である。

表で示した遺跡の大半は平安時代の遺跡で、奈良時代もしくは奈良時代の可能性が高い遺跡は沢田Ⅱ遺跡や上村遺跡など限られており、沿岸部における初期の製鉄がどのようなものであるか、資料数も少なく、現状では明らかになったとは言えないが、間木戸V遺跡の資料は、これらの様相を解明する上で一助となる貴重な資料と言えよう。

(北村 忠明)

第22表 古代の製鉄関連遺構検出遺跡一覧表

遺跡名	所在地	鉄生産関連検出遺構	参考文献
沢田Ⅰ遺跡	下閉伊郡山田町山田	鍛冶遺構	* 1
沢田Ⅱ遺跡	下閉伊郡山田町山田	製鉄炉、鍛冶炉、廃滓場	* 2
沢田Ⅲ遺跡	下閉伊郡山田町山田	鉄生産に関連する炉跡、炭窯跡	* 3
大畑Ⅱ遺跡	下閉伊郡山田町飯岡	工房跡、鍛冶炉、炭窯	* 4
後山Ⅰ遺跡	下閉伊郡山田町織笠	製鉄工房跡、製鉄炉、鍛冶炉、炭窯跡	* 5
上村遺跡	下閉伊郡山田町織笠	鍛冶場跡、製鉄炉、炭窯跡、堅穴状遺構、土坑	* 6
湧台Ⅲ遺跡	下閉伊郡山田町織笠	鉄生産関連炉、堅穴状遺構	* 7
山ノ内Ⅱ遺跡	下閉伊郡山田町船越	製鉄炉、鍛冶炉、炭窯跡、廃滓場、堅穴状遺構	* 8
山ノ内Ⅲ遺跡	下閉伊郡山田町船越	製鉄炉、炭窯跡、炭置き場	* 9
田の浜館跡	下閉伊郡山田町船越	製鉄炉、廃滓場、炭窯跡	* 3
焼山遺跡	下閉伊郡山田町船越	製鉄炉、鍛冶工房跡、炭窯跡、堅穴住居跡	* 3
弘川Ⅲ遺跡	宮古市津軽石	鍛冶工房跡	* 3
松山館跡	宮古市松山	鍛冶工房跡、鍛冶炉	* 10
鳥田Ⅱ遺跡	宮古市八木沢	工房跡、製鉄炉、鍛冶炉、炭窯	* 11
青嵐Ⅰ遺跡	宮古市千徳	堅穴遺構、製鉄炉、廃滓場	* 12
夏本遺跡	上閉伊郡大畑町第24地割	工房跡、鍛冶炉	* 13

* 1 (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2000 『沢田Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第318集

* 2 (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1997 『沢田Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第268集

- * 3 (公財) 岩手県文化振興事業団 2014 『平成 25 年度発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 630 集
- * 4 (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1995 『大畑Ⅰ遺跡・大畑Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 218 集
- * 5 山田町教育委員会 2002 『細碓Ⅴ・後山Ⅰ遺跡発掘調査報告書』山田町教育委員会埋蔵文化財調査報告書第 9 集
- * 6 (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1994 『上村遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 202 集
- * 7 (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1993 『湧台Ⅱ遺跡・湧台Ⅲ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 186 集
- * 8 (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1996 『山ノ内Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 249 集
- * 9 (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1997 『山ノ内Ⅲ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 250 集
- * 10 岩手県沿岸広域振興局土木部宮古土木センター / (公財) 岩手県文化振興事業団 2014 『松山館跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 625 集
- * 11 (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2004 『島田Ⅱ遺跡第 2～4 次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 450 集
- * 12 宮古市教育委員会 1988 『青嶽Ⅰ遺跡・下在家Ⅱ遺跡・千徳城遺跡群(組合館)一昭和 62 年度発掘調査報告書一』宮古市埋蔵文化財調査報告書 14
- * 13 (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1989 『夏本遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 134 集

3 近隣遺跡の中における間木戸Ⅱ・V遺跡

間木戸Ⅱ・V両遺跡の近隣には、同様の縄文遺跡や古代遺跡、製鉄関連遺跡が所在する。特に、間木戸遺跡の南西には沢田遺跡・房の沢遺跡が続きこれにあてはまる。これまでの調査によりこれらの遺跡では、縄文時代前期前葉から中期後葉の集落、弥生時代の集落、奈良、平安時代の集落、奈良時代の製鉄関連遺構、7・8世紀の古墳群の存在が明らかになっている。

間木戸Ⅱ・V遺跡も縄文時代中期前葉～中葉を中心とした集落、7世紀末～8世紀代の集落・8世紀代の製鉄関連遺跡であることが今回の調査で判明した。縄文時代の時期差によって居住域の変遷は認められないが、縄文時代の集落と古代の集落・製鉄関連遺構では、その占地に違いがある。(第159図)

縄文時代は、出土した土器から早期中葉の集落が付近にあったものと考慮されるが、遺跡内における集落の存在は、早くとも前期以降であると考えられる。一定量の土器が確認されているのは大木6式～8b式であるため、遺跡内に集落が形成されていた時期は縄文時代前期後葉～中期中葉と考える。遺跡の主体となる時期は、帰属時期の明確な竪穴建物跡が中期中葉のものが多いため、中期前葉から中葉にかけて集落の全盛期を経て大木9式への移行期である4号竪穴建物跡の廃絶で集落の終焉を迎えたものと推察される。居住域は、調査区南側で竪穴建物跡の重複が途切れることがなかった為、西を流れる間木戸川に沿って標高が低くなる南側へまだ続く可能性が高い。間木戸V遺跡に関しては、間木戸Ⅱ遺跡と同様の縄文時代中期中葉の竪穴建物跡が検出されていることから、同時期に共存した集落の居住域を地形から検討すると、沢沿いに山奥の北東へ展開している可能性がある。

古代は、7世紀末以降、平坦部のある間木戸Ⅱ遺跡に再び集落が形成され北側にカマドをもつ竪穴建物跡が建てられた。8世紀になり、間木戸V遺跡の南向き斜面地では工房が設けられ、製鉄が営まれたと考える。これらの存続時期は、7世紀末から8世紀代と推察される。古代の居住域は、間木戸Ⅱ遺跡調査区東際にかかる竪穴が多いため、山裾に向かって標高が高くなる北東側へ拡がりそうである。間木戸V遺跡の鉄生産遺構は、地表面で見られる鉄滓の存在からも、山奥の北東側でまだ検出されるであろう。今回の調査で確認された沿岸部初期に営まれた鉄作りの集落(※1)と、7世紀末から8世紀代に該当するまとまった出土資料は、古代の近隣遺跡の中で中心的である房の沢遺跡から検出された古墳の被葬者や古墳造立に関わった集落について手筈となる可能性がある。これまで房の沢

古墳築造に関する詳細が不明であった中、沢田Ⅰ遺跡(※2)に関する見解もあったが、間木戸Ⅱ・Ⅴ遺跡も加えて検討されることが期待される。

以上、両遺跡で縄文と古代の人々がどのように生活をしてきたのか若干の考察を行ってきたが「局部的な発掘成果をもとに、集落の規模や形態、集落構造や住居内の住み分けなどを論じてみても、それはあまり意味をなさない」(後藤1982)ことを念頭において、近隣の遺跡についても触れておきたい。間木戸川を挟んだ対岸には間木戸Ⅰ遺跡が拡がり、その南西には沢田Ⅲ遺跡が所在する。両遺跡は今回の三陸沿岸道路建設事業関連調査が行われており、今後報告書が刊行されるものである。筆者は、両遺跡の調査に関わり、両遺跡に縄文と古代の集落が途切れることなく存在しているのを目の当たりにした。そして、その検出遺構数・出土遺物量は膨大なものであった。それらは、間木戸Ⅱ・Ⅴ遺跡と同時期のものも多く含まれている(※3)。綿々と構築された堅穴建物跡や貯蔵穴群等の存在は、同時期に一定の期間人々が共存していた痕跡である。東北地方における縄文時代の集落規模が中期に最大となる(鈴木2009)様相が、間木戸遺跡周辺でもあてはまるとすれば、この地域に住んだ当時の人々の人物像や生活環境を様々な視点から見いだすことができると考える。

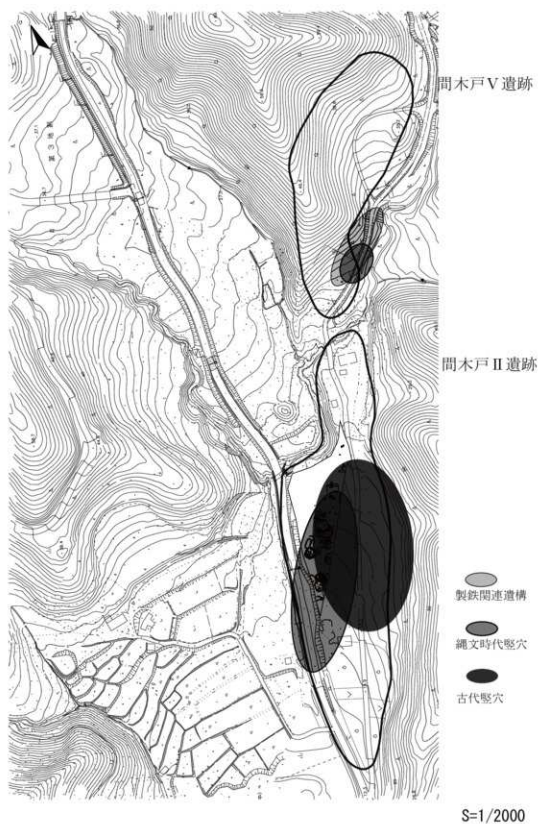
周辺では、前期から中期後葉にかけて発展した大規模な集落が中期末葉で姿を消し、その後弥生時代になるまで集落は確認されていない。本書は、ある一定の期間に、この地に集落を形成した人々の存在を顕示したにすぎない。そのため、これから周辺の遺跡の様相が解明された際、再び比較と検討が必要な遺跡であると考えられる。

- ※1 沢田Ⅱ遺跡で検出された鍛冶工房や製鉄炉について、共存遺物や熱残留磁気による年代測定等から8世紀代と推察している。
- ※2 2000『沢田Ⅰ遺跡発掘調査報告書』内で、沢田Ⅰ遺跡が「古墳群を築いた集団と何らかの関連のある集落の一つだった」としている。
- ※3 間木戸Ⅰ遺跡、沢田Ⅲ遺跡の調査成果については報告書発刊前のため、(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターホームページ上の情報と現地説明会資料等にある内容に留めている。

(佐藤あゆみ)

参考文献

- 井上雅孝2002『錫杖鉄製品の研究-北東北における古代祭祀具の一形態』【岩手考古学第14号】(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 1995『大畑Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第218集
- 1997『沢田Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第268集
- 1998『房の沢Ⅳ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第287集
- 2000『沢田Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第318集
- 2010『金浜Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第553集
- 岩手考古学会2014『北三陸の蝦夷・蔵手刀』岩手考古学会第46回研究大会
- 後藤和民1982『縄文文化の研究第8巻』【縄文集落の概念】
- 小林達雄編2008『総覧縄文土器』
- 鈴木克彦2009『集落の変遷と地域性』【東北地方の縄文集落の社会組織と村落】
- 辻 秀人編 2007『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』平成15年度～平成18年度科学研究費補助金(基礎研究B)研究成果報告書 東北学院大学文学部
- 水野敏典2003『古墳時代中期における鉄鏡の分類と編年』【権原考古学研究所論集第14号】
- 水野敏典2009『古墳時代鉄鏡の変遷にみる儀仗的武装の基礎的研究』
- 八木光昭2010『古代蝦夷社会の成立』



第159図 遺構の分布範囲

写真図版



遺跡遠景 北から山田湾を俯瞰する



遺跡遠景南から



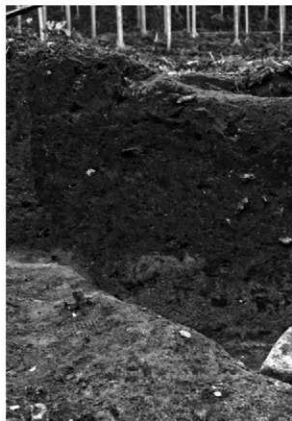
調査区直上上が間木戸Ⅱ遺跡下が間木戸V遺跡



調査前の状況 北から



基本層序 A (調査区中央)



基本層序 B (調査区南側)

写真図版 2 調査区全景・基本層序



全景南西→



断面西→



断面西→



全景南西→



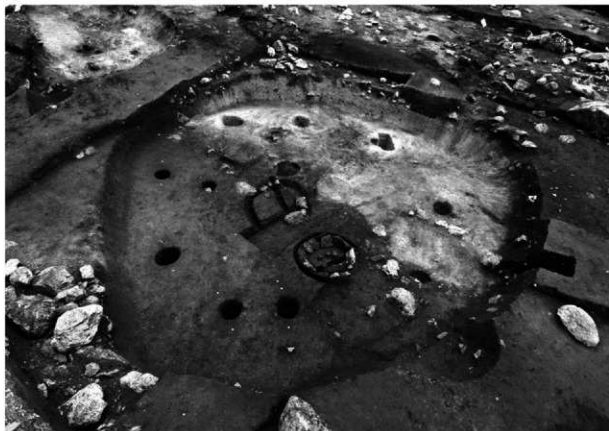
断面南→



炉 全景東→



出土状況東→



全景南西→



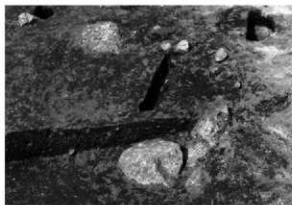
断面南→



断面西→



炉1 横出東→



炉2 断面南→



炉1 断面南→



炉2 全景南→



炉1 全景南→



pit1 断面南東→



埋土中土器出土状況→



精査風景南西→



全景南西→



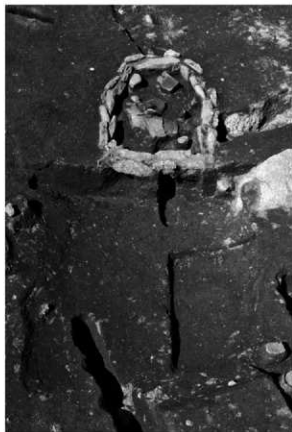
C断面南東→



A断面南→



B断面南東→



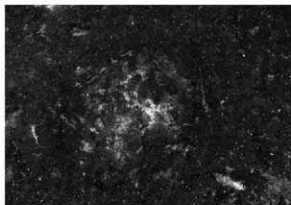
炉全景南東→



周溝全景南東→



炉燃焼部断面南東→



焼土1棧出東→



前庭部断面南東→



土器出土状況北→



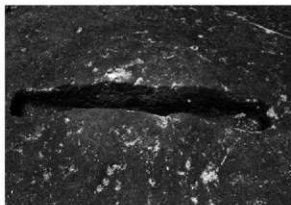
全景・遺物出土状況南東→



断面北→



複式伊断面南→



炉1断面南東→



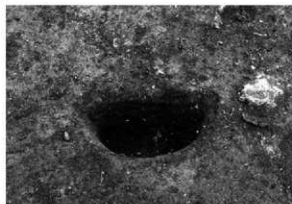
全景南西→



断面南西→



断面南東→



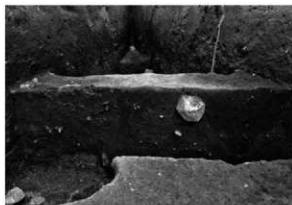
pit2 断面南→



全景南西→



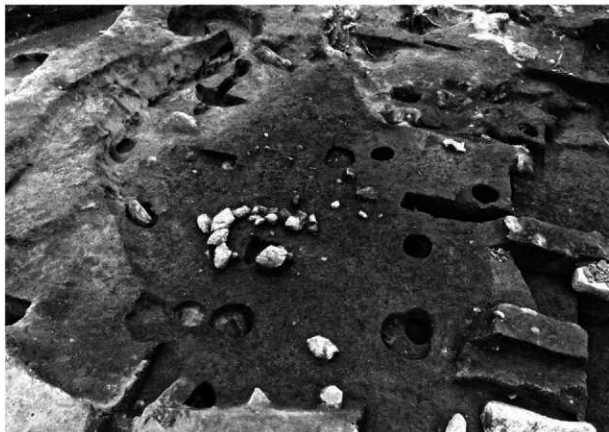
A断面南東→



B断面北→



炉全景東→



全景北東→



断面南→



炉全景西→



周溝南→



全景南→



断面東→



炉断面東→



pit2 断面東→



全景南→



断面南東→



炉全景・断面東→



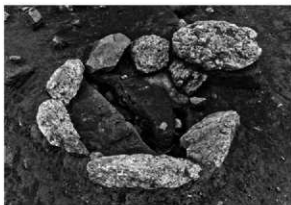
作業風景南東→



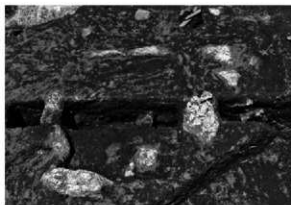
全景東→



断面南→



炉1全景・断面南東→



炉2全景・断面南東→



全景東→



断面東→



炉全景・断面南東→



Pit1 断面南→



全景南→



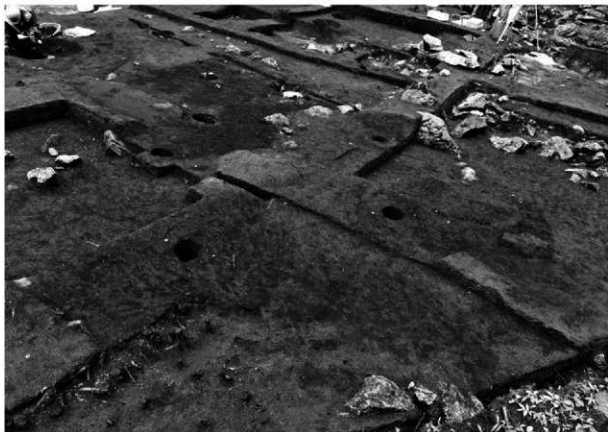
断面西→



炉全景・断面南→



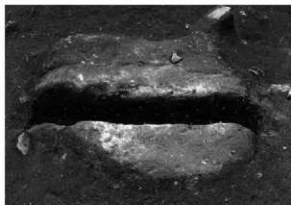
包含層掘下げ途中中北西→



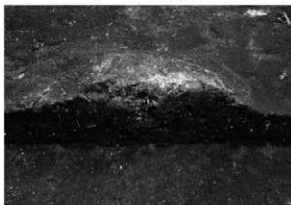
全景南東→



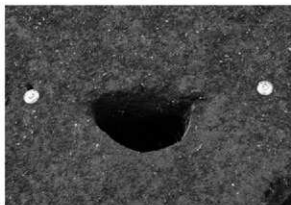
炉1 全景・断面南東→



炉2 全景・断面東→



焼土断面西→



pit3 断面南東→



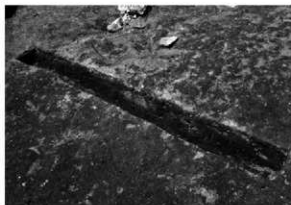
全景東→



断面南東→



南壁 S 断面南→



炉断面南東→



全景南東→



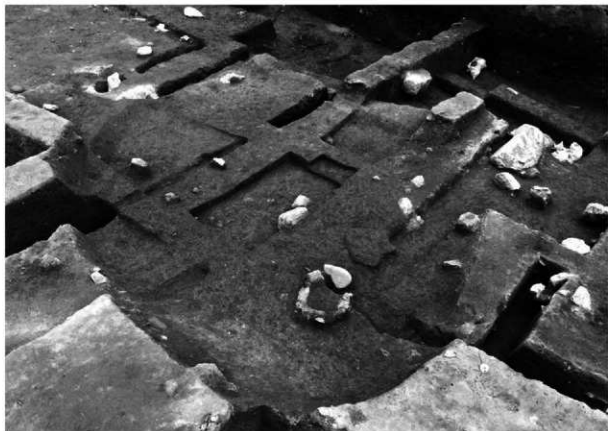
A断面南→



B断面西→



炉断面平面南→



全景北東→



断面南→



炉全景南→



炉断面南→



全景北西→



C断面北西→



A断面南→



出土状況南→



全景北東→



断面南東→



表土掘削作業南東→



作業風景



全景南東→



断面西→



出土状況南→



調査区南側垂視する遺構南→



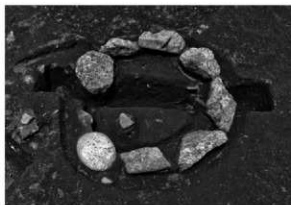
全景東→



断面西→



炉断面北西→



炉掘りかた南東→



全景南西→



断面東→



全景南東→



断面南→



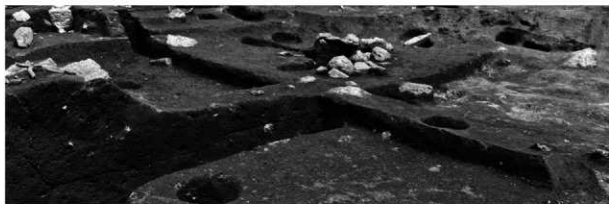
pit1・2断面南→



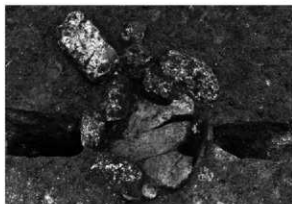
電子平板を使った実測作業



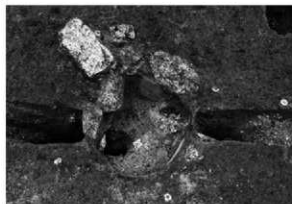
全景南西→



断面南西→



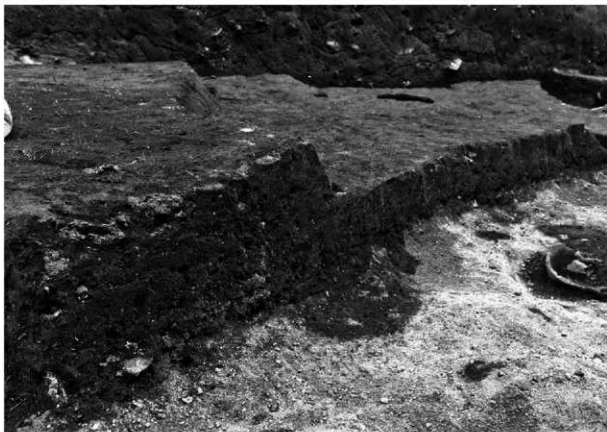
炉使用時東→



炉土器埋設部東→



全景南→



断面北西→



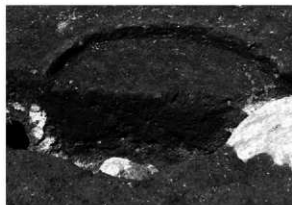
全景南→



断面南西→



北東角出土状況南→



pit1 断面南→



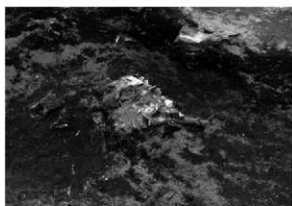
カマド全景南→



カマド袖断面南→



煙道断面北西→



貝殻出土状況西→



紡錘車 G008 出土状況南→



鉄鏝 G032 出土状況南東→



土器出土状況精査風景南→



全景南→



断面西→



断面南→



カマド断面・袖芯材出土状況西→



全景南→



断面西→



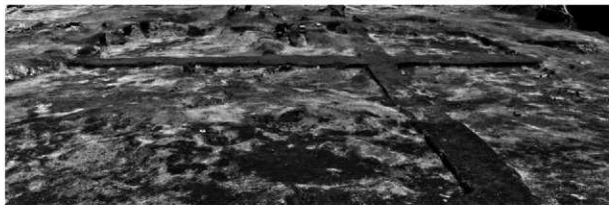
カマド断面南→



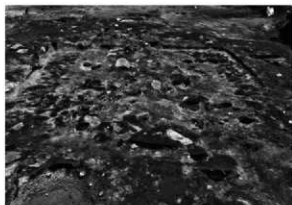
遺物出土状況西→



全景南→



断面南→



カマド全景南→

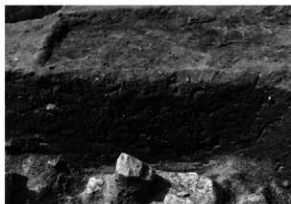


カマド断面東→

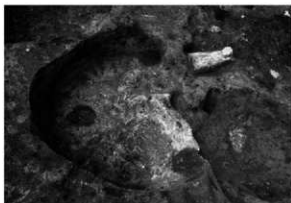
写真図版 34 30号竪穴建物跡



SK01 全景南→



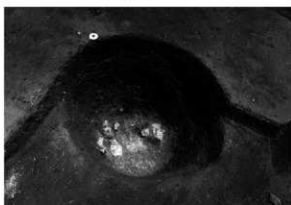
SK01 断面南→



2号土坑全景北→



2号土坑断面南→



3号土坑全景南西→



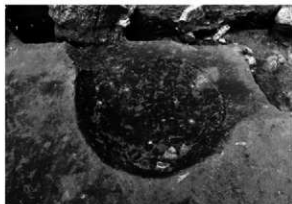
3号土坑断面西→



4号土坑全景南→



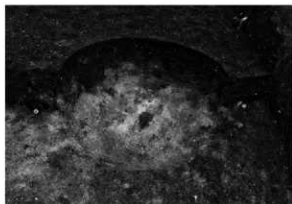
4号土坑断面西→



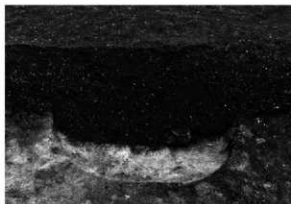
5号土坑全景東→



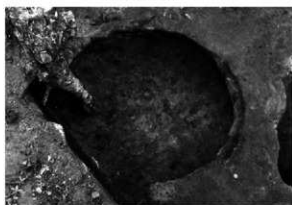
5号土坑断面南東→



6号土坑全景西→



6号土坑断面西→



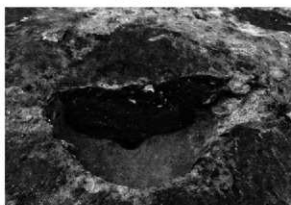
7号土坑全景東→



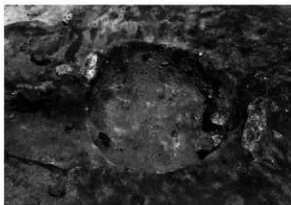
7号土坑断面西→



8号土坑全景東→



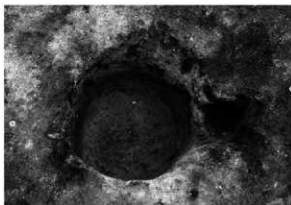
8号土坑断面南→



9号土坑全景南→



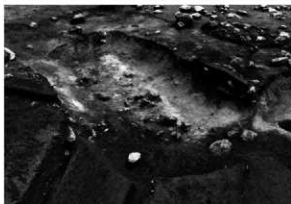
9号土坑断面南→



10号土坑全景南→



10号土坑断面南→



11号土坑全景南西→



11号土坑断面南西→



12号土坑全景南西→



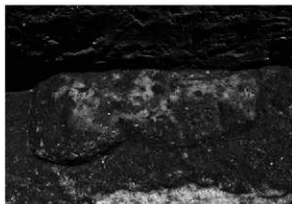
12号土坑断面南西→



1号焼土遺構全景北→



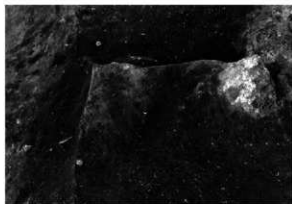
1号焼土遺構断面西→



2号焼土遺構全景西→



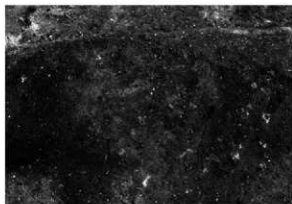
2号焼土遺構断面西→



3号焼土遺構全景南→



3号焼土遺構断面西→



4号焼土遺構全景北→



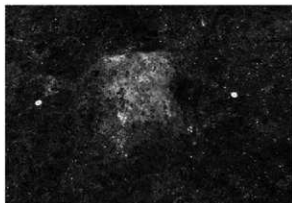
4号焼土遺構断面北→



5号焼土遺構全景西→



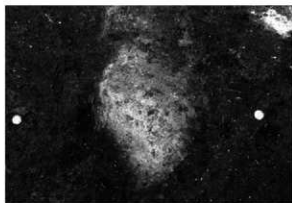
5号焼土遺構断面西→



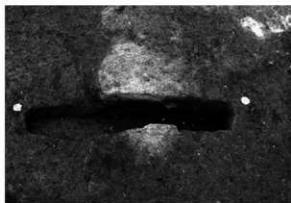
6号焼土遺構全景南→



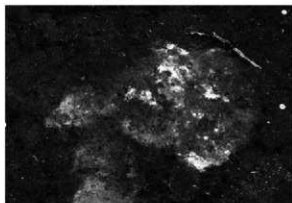
6号焼土遺構断面南→



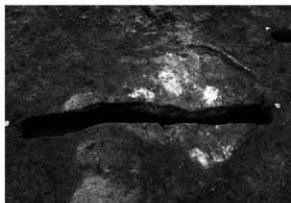
7号a焼土遺構全景南→



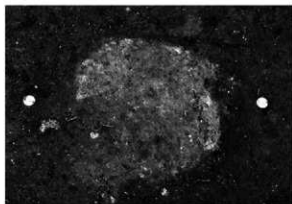
7号a焼土遺構断面南→



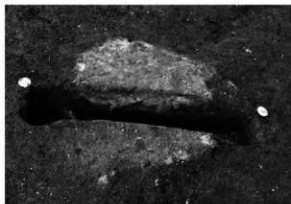
7号b焼土遺構全景南→



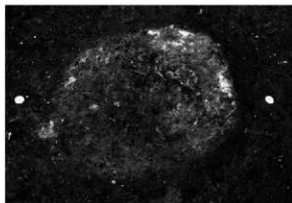
7号b焼土遺構断面南→



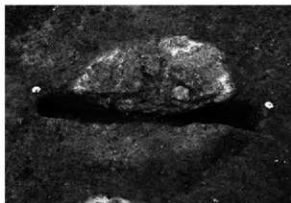
7号c焼土遺構全景南→



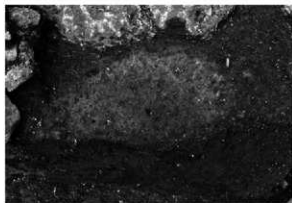
7号c焼土遺構断面南→



7号d焼土遺構全景南→



7号d焼土遺構断面南→



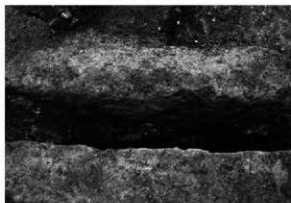
8号焼土遺構全景南→



8号焼土遺構断面西→



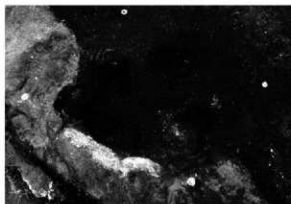
9号焼土遺構全景東→



9号焼土遺構断面北→



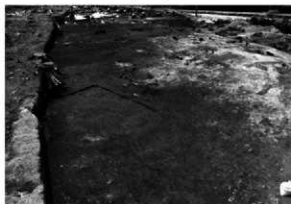
10号焼土遺構断面東→



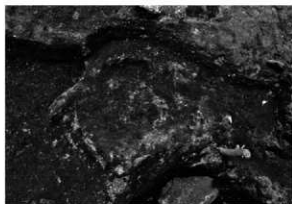
10号焼土遺構(炉跡)掘りかた南→



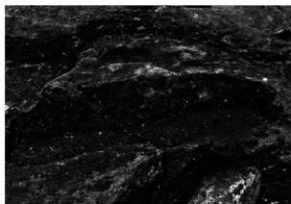
11号焼土遺構全景南西→



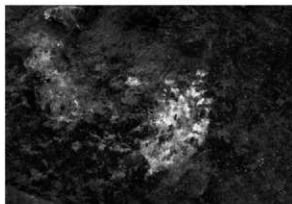
グリッドⅡ B15以北Ⅲ層検出面北→



11号a焼土遺構全景南西→



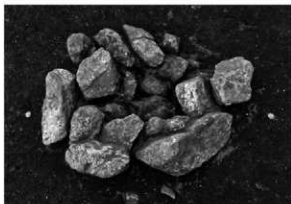
11号a焼土遺構断面南西→



11号b焼土遺構全景南西→



11号b焼土遺構断面南→



1号集石遺構全景南→



1号集石遺構断面南→



沢跡全景南→



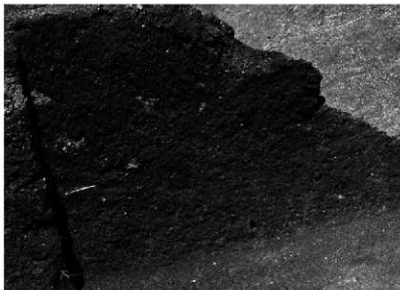
調査区西側遺物包含層（沢跡）断面南西→



調査区全景北→



基本層序 A 北→



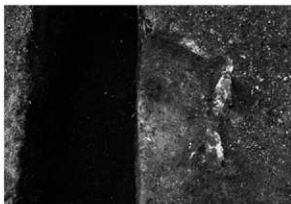
基本層序 B 東→



全景南→



断面西→



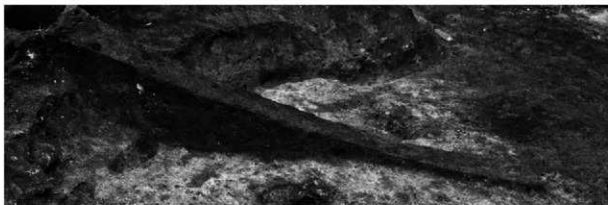
炉全景南→



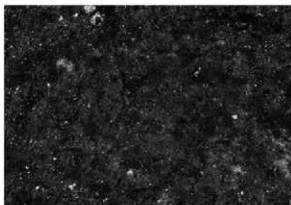
炉断面西→



2号竪穴建物跡全景南→



2号竪穴建物跡断面西→



1号焼土遺構全景南→



1号焼土遺構断面西→



3号竪穴建物跡全景北→



3号竪穴建物跡断面南→



3号竪穴建物跡断面西→



3号竪穴住居跡カマド検出南→



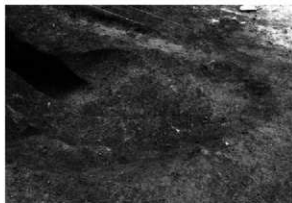
3号竪穴住居跡カマド断面A西→



3号竪穴住居跡カマド断面B西→



3号竪穴住居跡出土状況南西→



1号土坑全景北西→



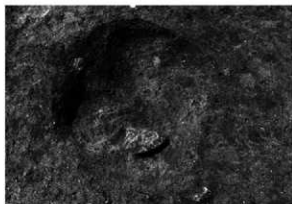
1号土坑断面南→



2号土坑全景南→



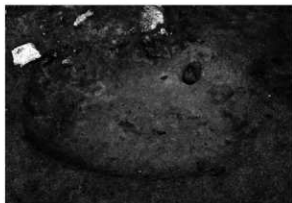
2号土坑断面西→



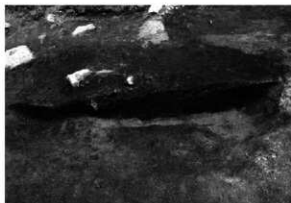
3号土坑全景南→



3号土坑断面西→



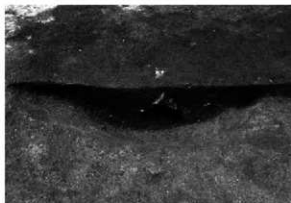
4号土坑全景南東→



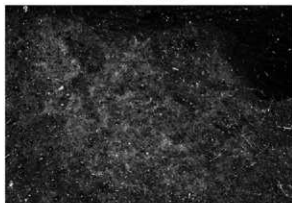
4号土坑断面南東→



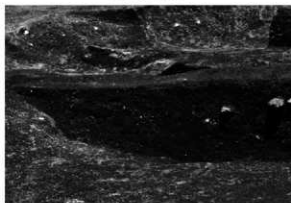
5号土坑全景南東→



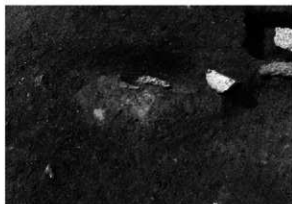
5号土坑断面南東→



2号焼土遺構全景南→



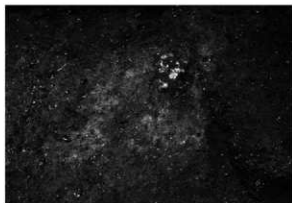
2号焼土遺構断面南→



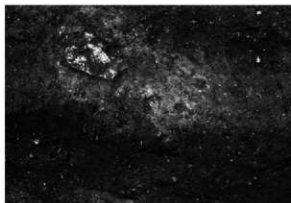
3号焼土遺構全景南→



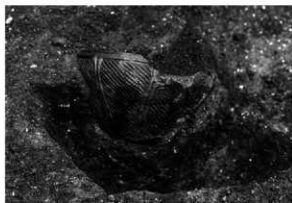
3号焼土遺構断面西→



4号焼土遺構全景南→



4号焼土遺構断面西→



1号埋設土器全景西→



1号埋設土器断面西→



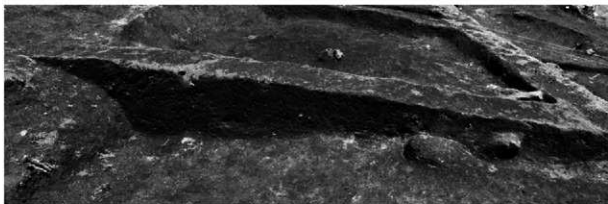
1号灰滓場断面A西→



包含層断面B西→



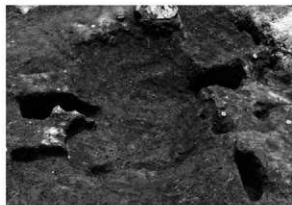
1号工房跡全景南→



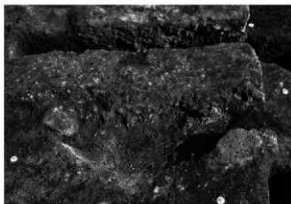
1号工房跡断面西→



1号製鉄炉全景北→



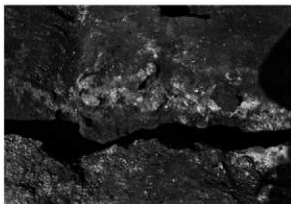
1号製鉄炉掘り方全景北→



1号製鉄炉断面北→



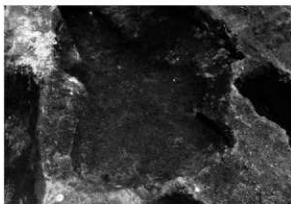
2号製鉄炉全景北西→



2号製鉄炉断面西→



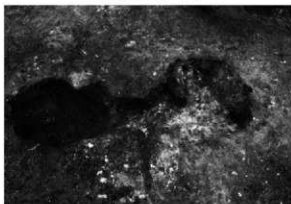
3号製鉄炉全景北西→



3号製鉄炉掘り方全景北西→



3号製鉄炉断面西→



1号工房跡 Pit1 全景西→



1号工房跡 Pit1 断面西→



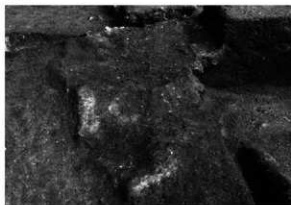
2号工房跡全景南→



2号工房跡断面東→



4号製鉄炉全景北→

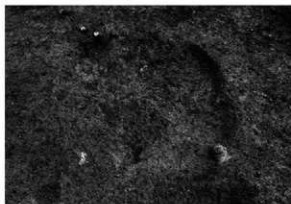


4号製鉄炉横出北→

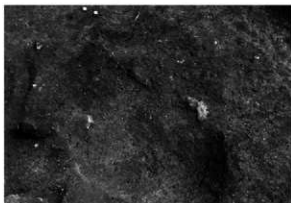
写真図版 52 2号工房跡 (1)



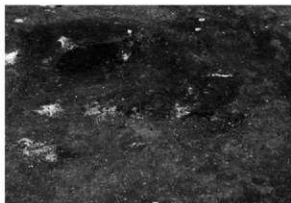
4号製鉄炉断面西→



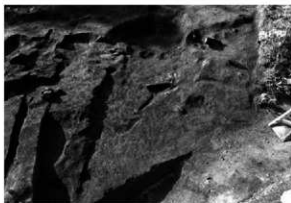
5号製鉄炉全景北→



5号製鉄炉検出北→



5号製鉄炉断面西→



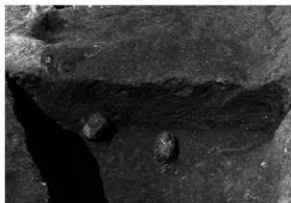
1号炭置き場跡全景南→



1号炭置き場跡断面 SNベルト南部東→



1号炭置き場跡断面 SNベルト中央東→



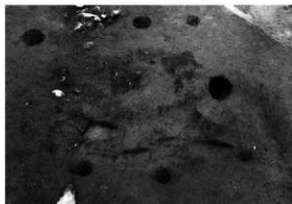
1号炭置き場跡断面 SNベルト北部東→



2号炭置き場跡全景南→



2号炭置き場跡断面南→



1号不明遺構跡全景西→



1号不明遺構跡出土状況西→



1号不明遺構跡断面(W→)



現地説明会風景



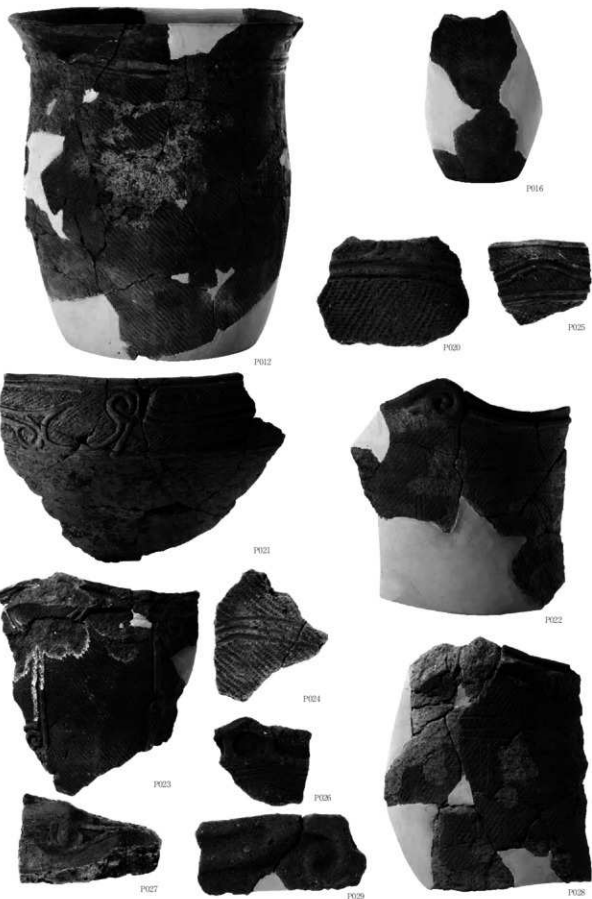
精査風景



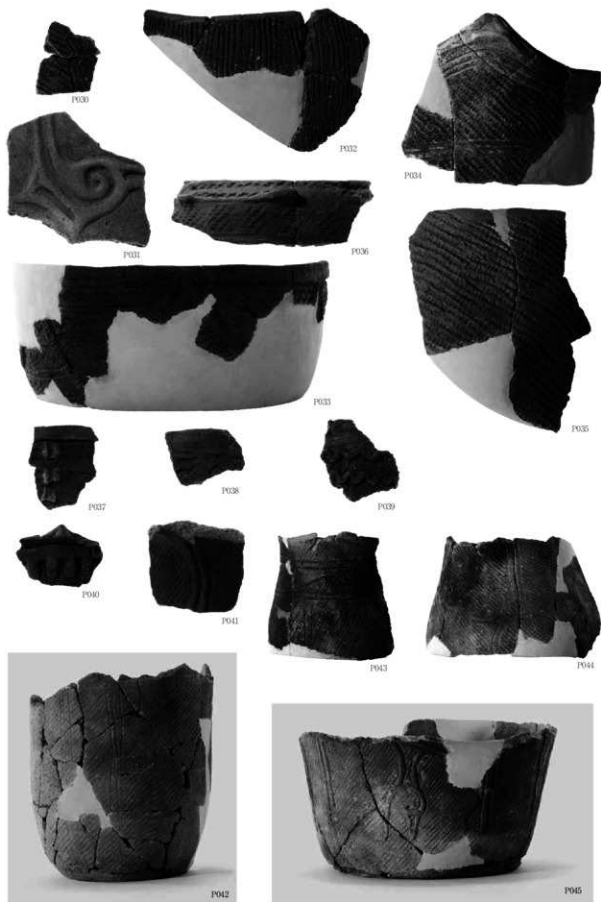
調査前南西→



写真図版 55 縄文～弥生土器 (1)



写真図版 56 縄文～弥生土器 (2)



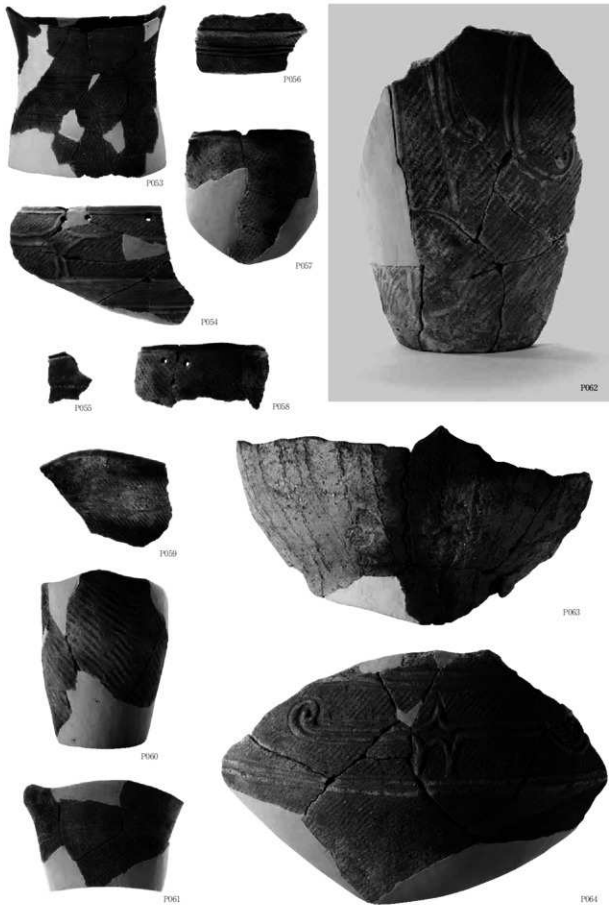
写真図版 57 縄文～弥生土器 (3)



写真図版 58 縄文～弥生土器 (4)



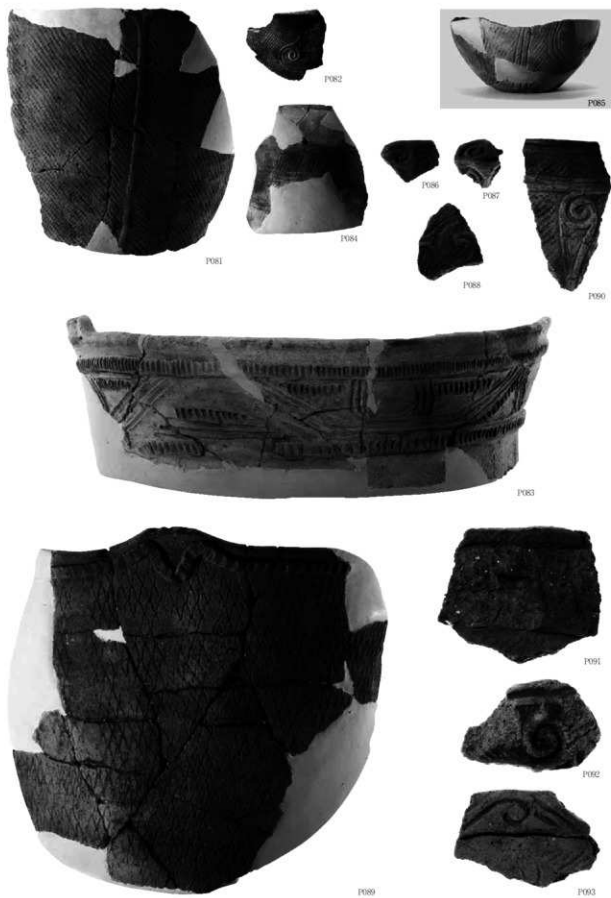
写真図版 59 縄文～弥生土器 (5)



写真図版 60 縄文～弥生土器 (6)



写真図版 61 縄文～弥生土器 (7)



写真図版62 縄文～弥生土器(8)



写真図版 63 縄文～弥生土器 (9)



P106



P101



P109

写真図版 64 縄文～弥生土器 (10)



P110



P112



P113



P115



P111



P114

写真図版 65 縄文～弥生土器 (11)



写真図版 66 縄文～弥生土器 (12)



P131



P132



P133



P134



P135



P136

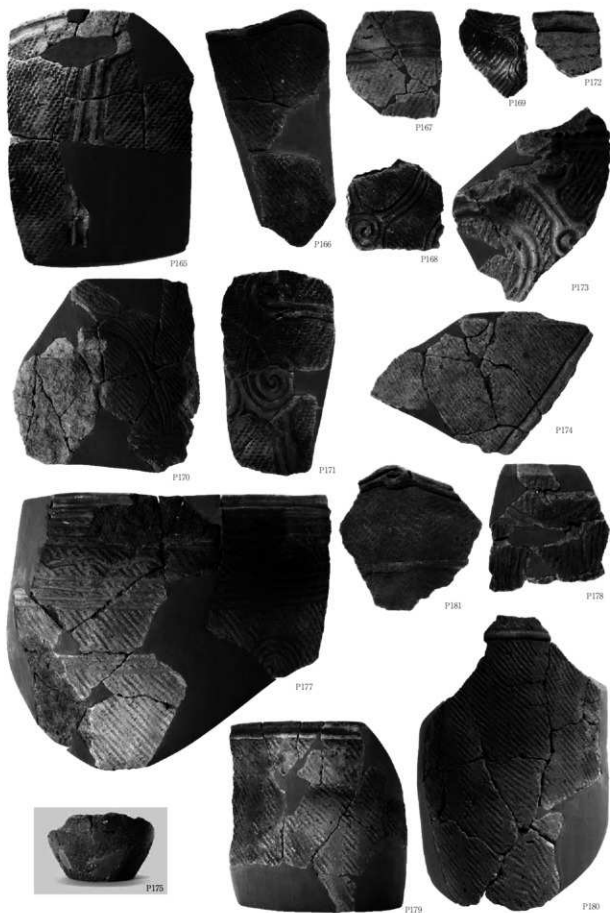
写真図版 67 縄文～弥生土器 (13)



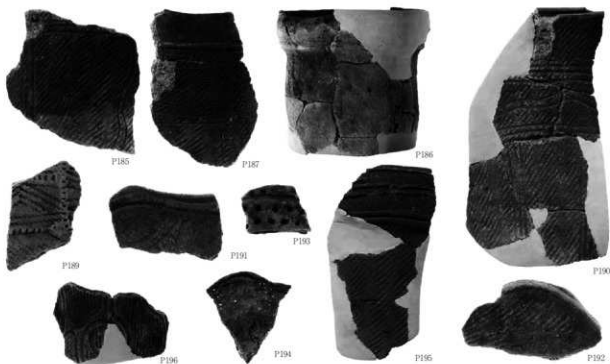
写真図版 68 縄文～弥生土器 (14)



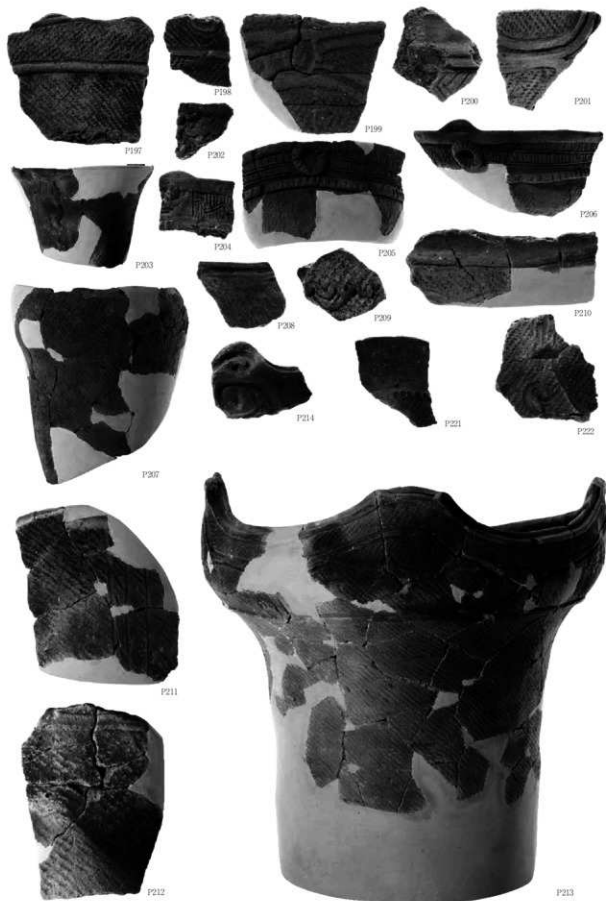
写真図版 69 縄文～弥生土器 (15)



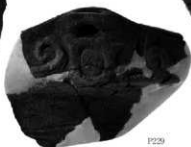
写真図版 70 縄文～弥生土器 (16)



写真図版 71 縄文~弥生土器 (17)



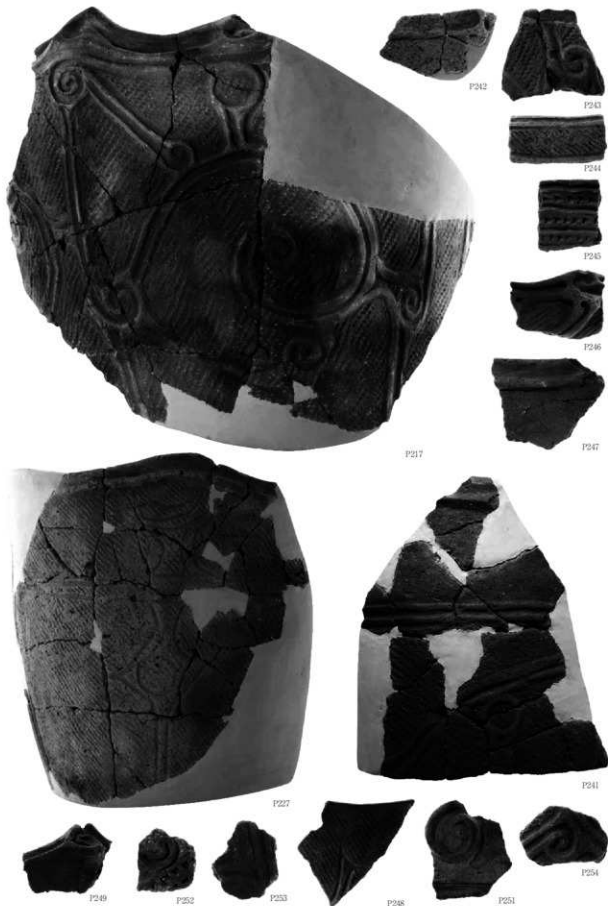
写真図版 72 縄文～弥生土器 (18)



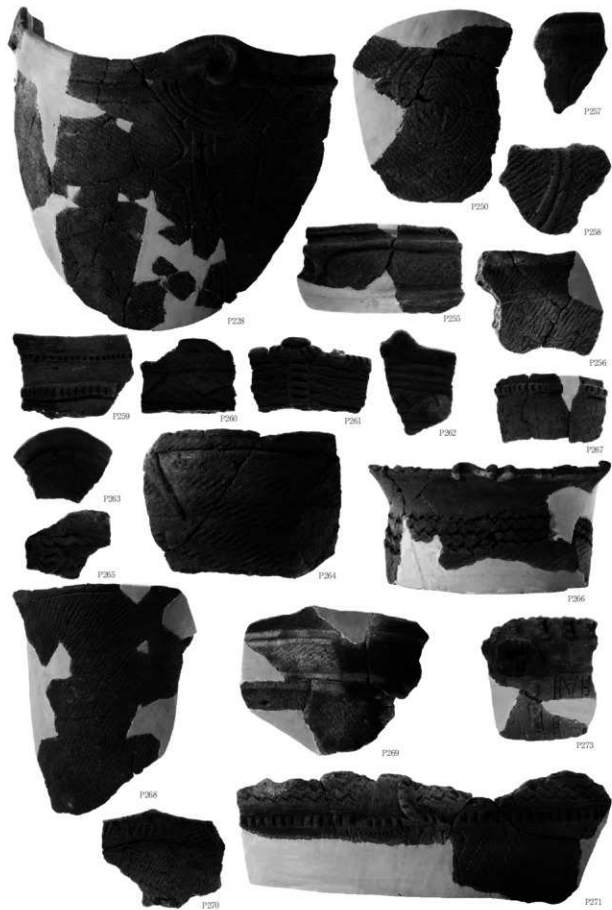
写真図版 73 縄文~弥生土器 (19)



写真図版 74 縄文～弥生土器 (20)



写真図版 75 縄文～弥生土器 (21)



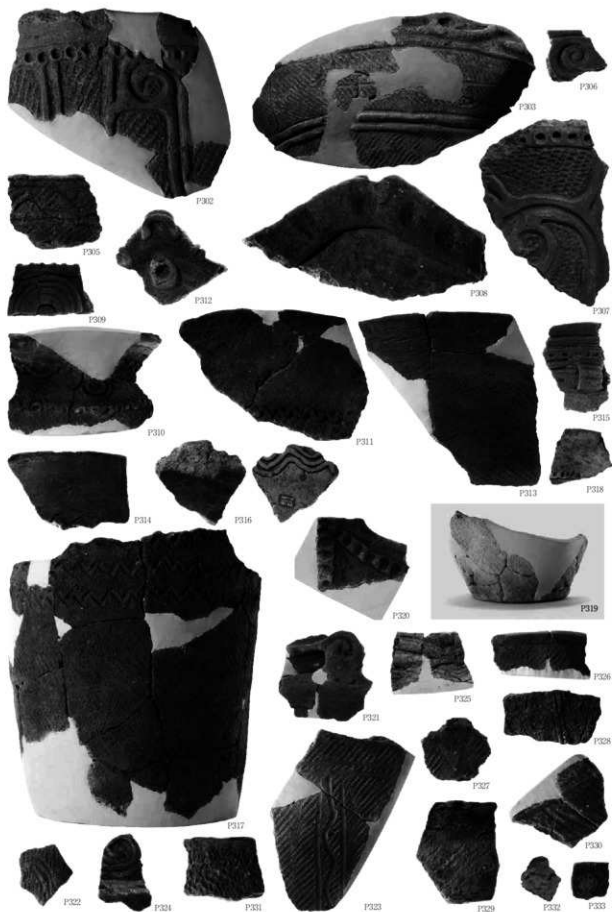
写真図版 76 縄文～弥生土器 (22)



写真図版 77 縄文～弥生土器 (23)



写真図版 78 縄文～弥生土器 (24)



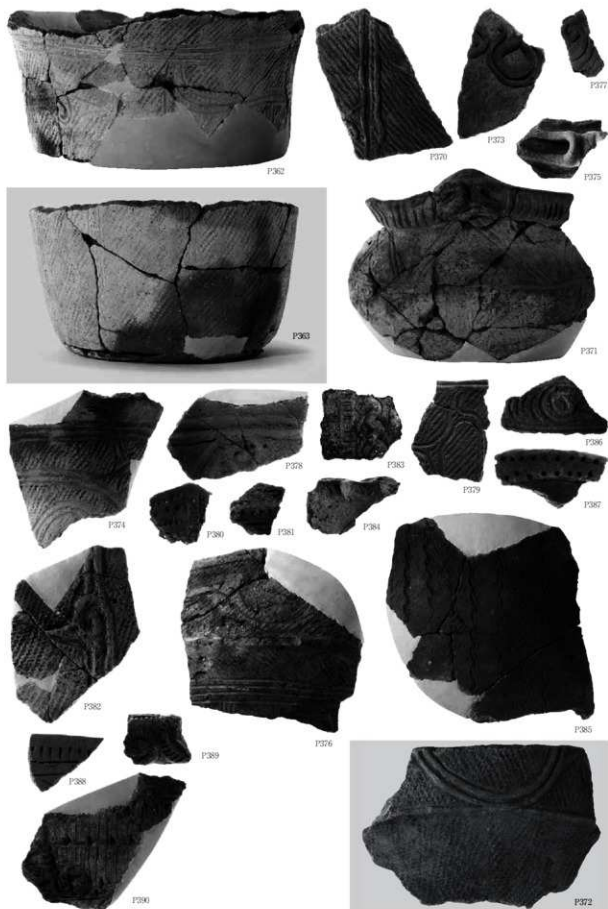
写真図版 79 縄文～弥生土器 (25)



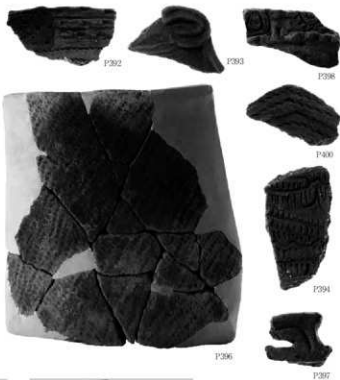
写真図版 80 縄文～弥生土器 (26)



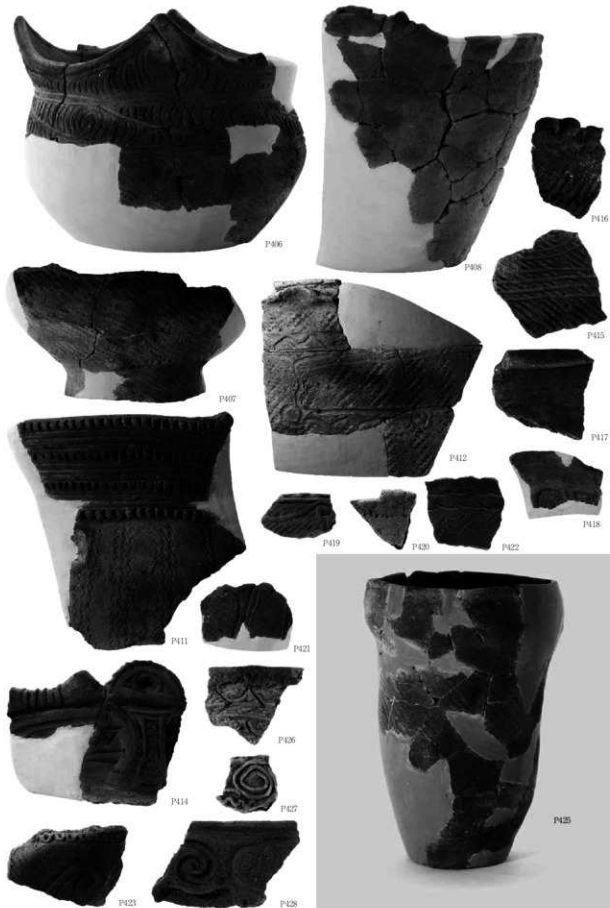
写真図版 81 縄文～弥生土器 (27)



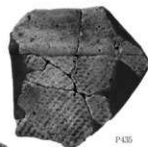
写真図版 82 縄文～弥生土器 (28)



写真図版 83 縄文～弥生土器 (29)



写真図版 84 縄文～弥生土器 (30)



写真図版 85 縄文~弥生土器 (31)



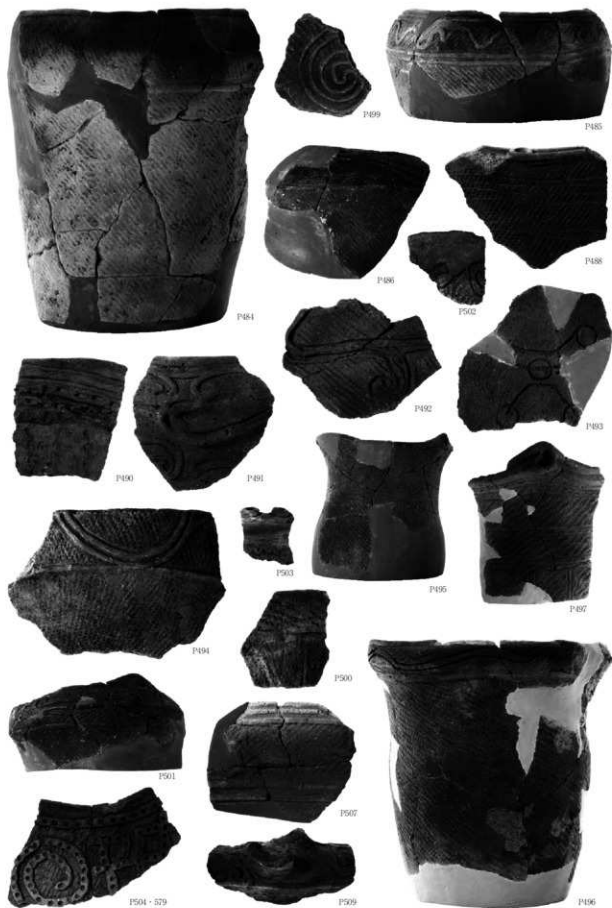
写真図版 86 縄文～弥生土器 (32)



写真図版 87 縄文~弥生土器 (33)



写真図版 88 縄文～弥生土器 (34)



写真図版 89 縄文～弥生土器 (35)



写真図版 90 縄文～弥生土器 (36)



写真図版 91 縄文～弥生土器 (37)



写真図版 92 縄文～弥生土器 (38)



写真図版 93 縄文~弥生土器 (39)



写真図版 94 縄文～弥生土器 (40)



写真図版 95 縄文～弥生土器 (41)



F578



F683



F586



F585



F589



F590



F587



F588

写真図版 96 縄文～弥生土器 (42) 土師器・須恵器 (1)



写真図版 97 土師器・須恵器 (2)



写真図版98 土師器・須恵器(3)



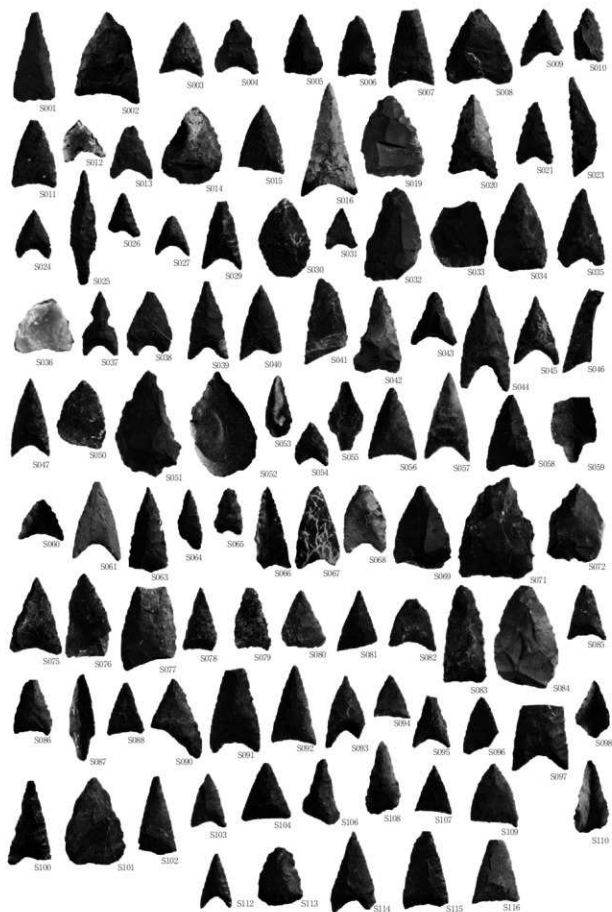
写真図版 98 土師器・須恵器 (4)



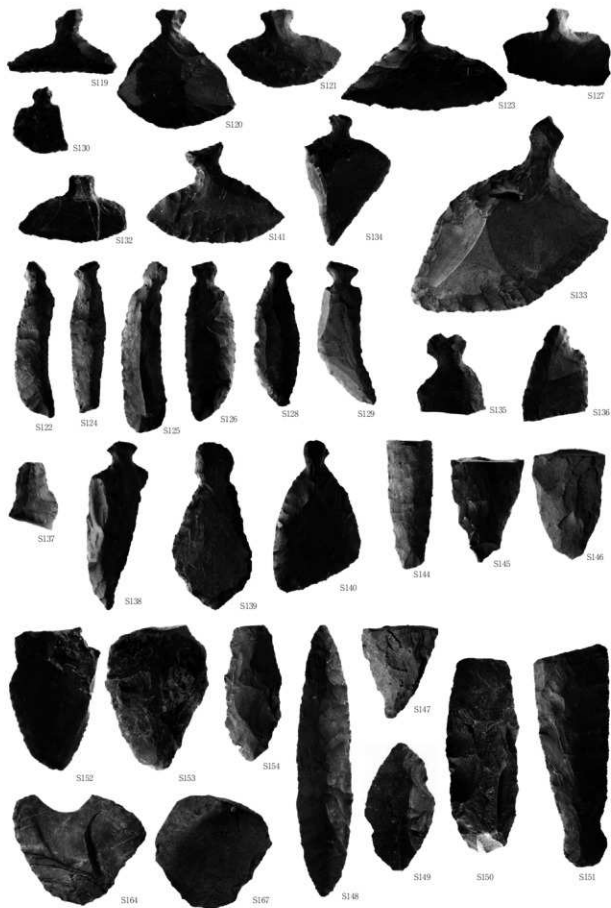
写真図版 100 土師器・須恵器 (5)



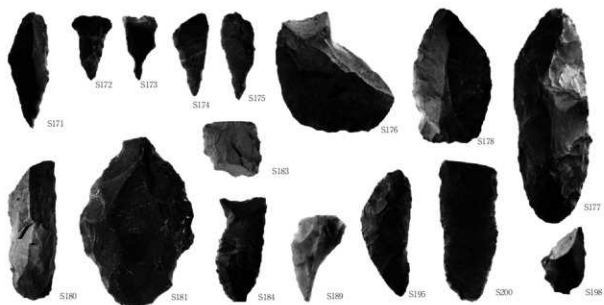
写真図版 101 土製品、石製品、鉄製品、銭貨



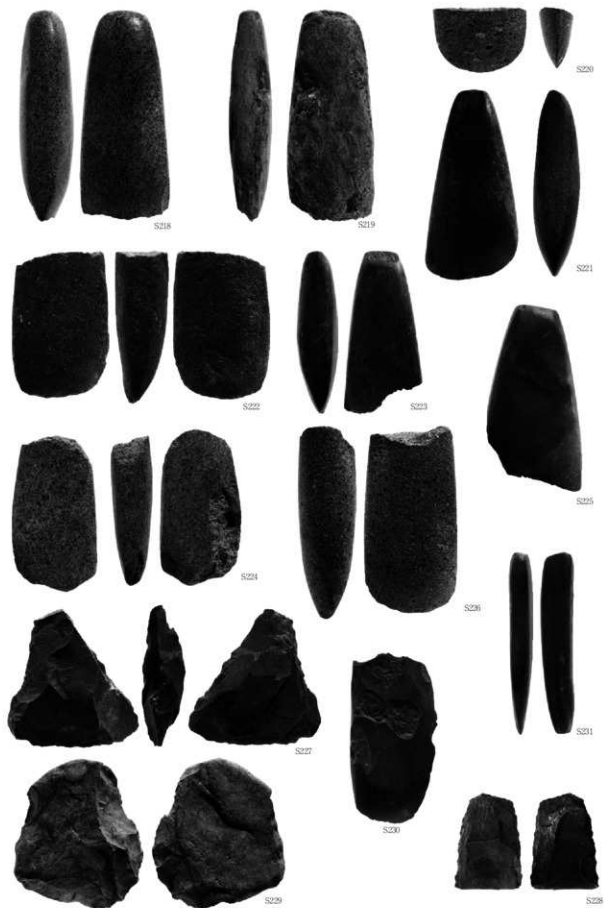
写真図版 102 石器 (1)



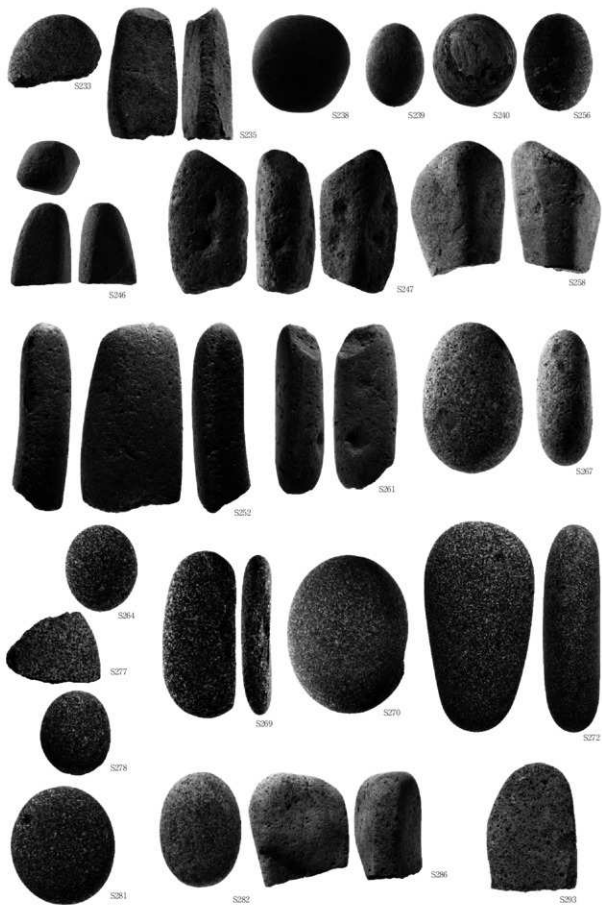
写真図版 103 石器 (2)



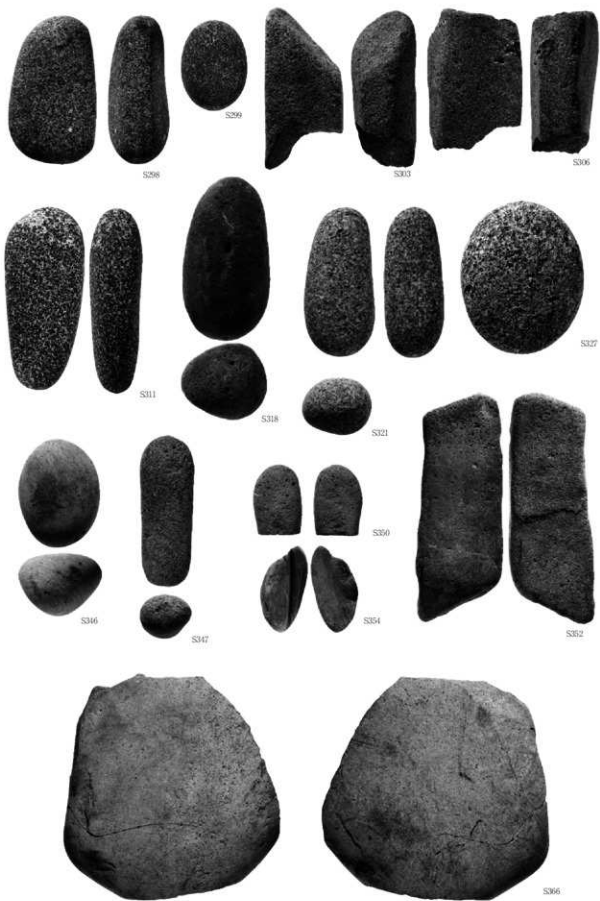
写真図版 104 石器 (3)



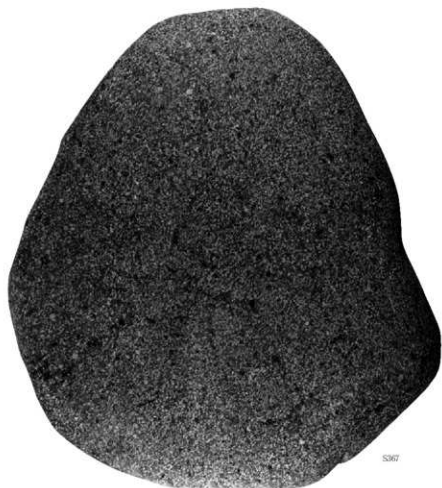
写真図版 105 石器 (4)



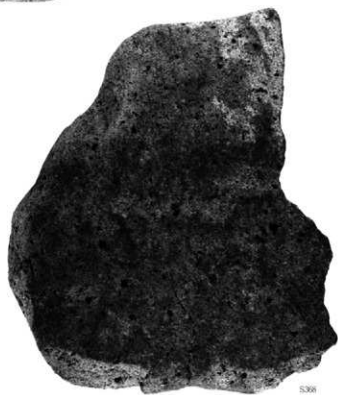
写真図版 106 石器 (5)



写真図版 107 石器 (6)

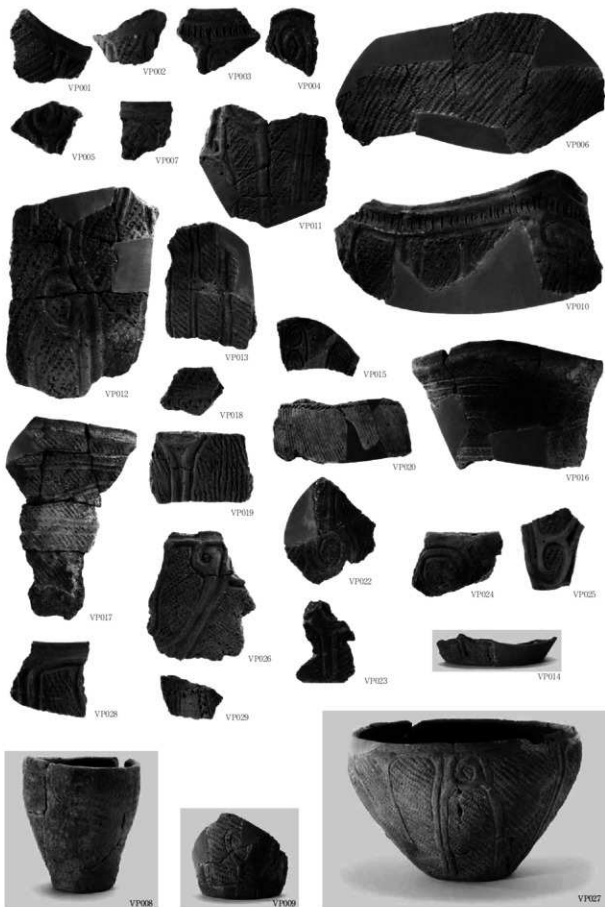


S387

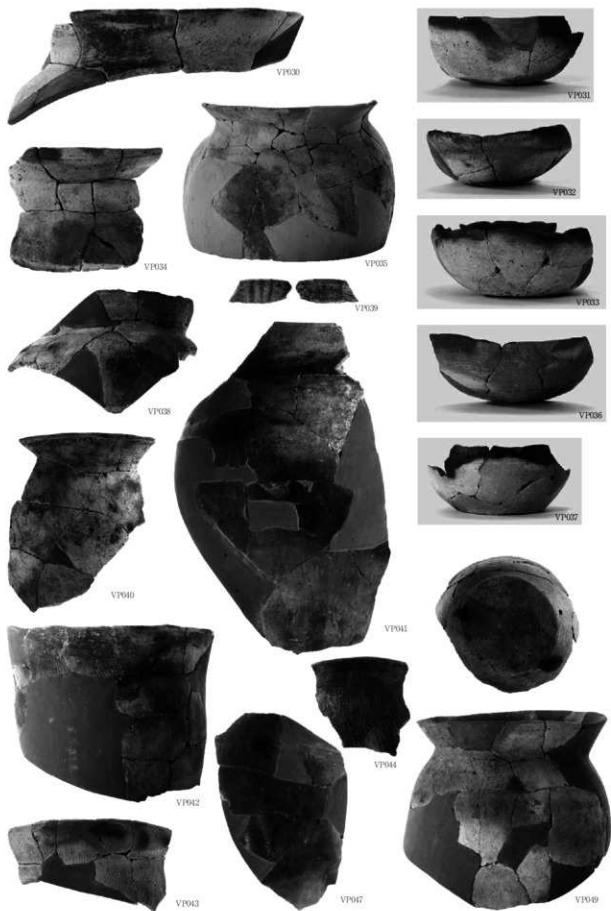


S388

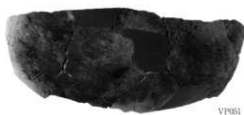
写真図版 108 石器 (7)



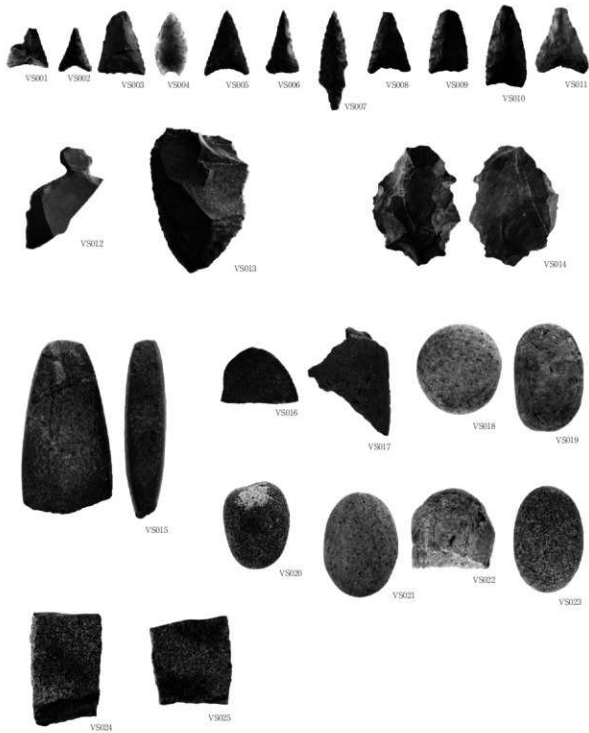
写真図版 109 縄文土器

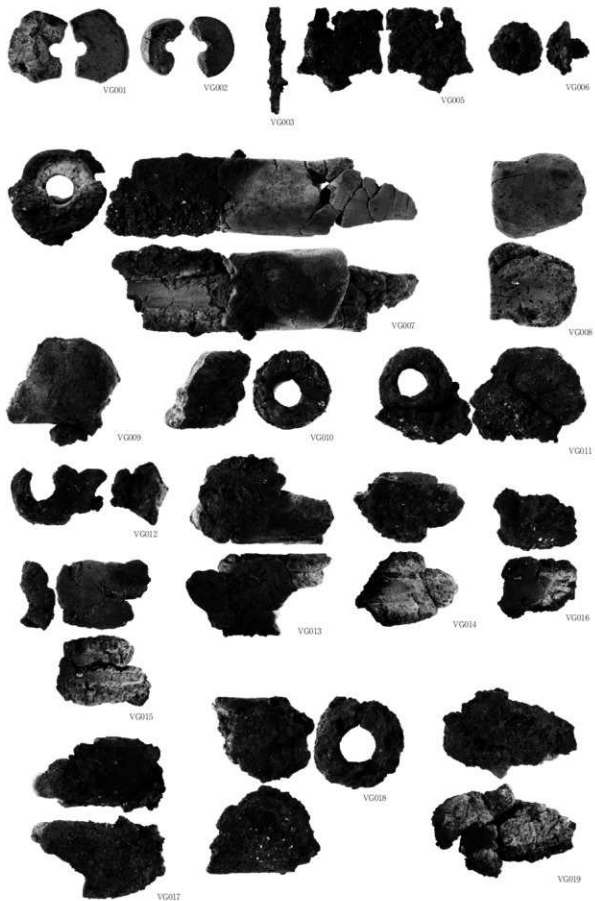


写真図版 110 土師器 (1)

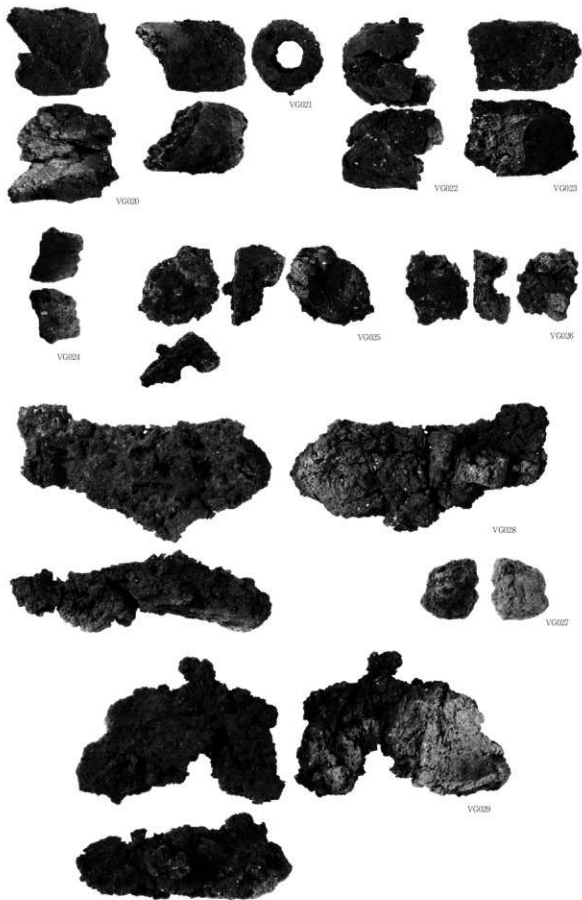


写真図版 111 土師器 (2)





写真図版 113 土製品、鉄製品、羽口 (1)



写真図版 114 羽口(2)、炉壁

報告書抄録

ふりがな	まぎど2いせき・まぎど5いせきはくつちょうさほうこくしょ							
書名	岡木戸Ⅱ遺跡・岡木戸Ⅴ遺跡発掘調査報告書							
副書名	三陸沿岸道路建設事業関連遺跡発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第640集							
編著者名	佐藤あゆみ・北村忠昭・佐藤 剛・金子昭彦・阿部勝則							
編集機関	(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	2015年3月20日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ° °	° ° °			
岡木戸Ⅱ遺跡	岩手県下閉伊郡山田町第3地割56-1ほか	03482	LG94-0007	39度28分57秒	141度57分13秒	2013.04.09 ～ 2013.07.31	1,510㎡	三陸沿岸道路建設事業
岡木戸Ⅴ遺跡	岩手県下閉伊郡山田町第3地割56-2ほか	03482	LG84-2098	39度29分04秒	141度57分16秒	2013.04.09 ～ 2013.06.30	1,200㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
岡木戸Ⅱ遺跡	集落跡	縄文時代	竪穴建物跡25棟、土坑13基、焼土遺構10基	縄文土器、円盤状土器片、石鏃、尖頭器、石匙、石匙、石錐、スクレイパー、石斧、台石、鉋磨器、砥石、石棒、球状耳飾りほか				
	集落跡	古代	竪穴建物跡5棟、焼土遺構1基	土師器、須恵器、紡錘車、鉄鏃、鉄鐙ほか				
岡木戸Ⅴ遺跡	集落跡	縄文時代	竪穴建物跡2棟、焼土遺構1基、埋設土器1基	縄文土器、石鏃、石匙、スクレイパー、石斧、台石ほか				
	集落跡・生産	古代	竪穴建物跡1棟、土坑3基、焼土遺構3基、工房跡2棟、製鉄炉5基、炭置き場跡2基、柱穴2個、廃洋場1箇所	土師器、須恵器、紡錘車、鉄鏃、兼手刀座金、刀片、羽口、如噓、鉄滓ほか				
	不明	時代不明	土坑2基、不明遺構1基、柱穴6個					
要約	遺跡は、山田町の岡木戸川に解析された谷部東側に位置する。岡木戸Ⅱ遺跡では、縄文時代前期中葉から中期後葉（中期中葉が中心）の集落遺跡であること、古代7世紀末～8世紀前半の集落であることが確認された。岡木戸Ⅴ遺跡では、縄文時代中期中葉の集落であること、古代8世紀の集落・生産遺跡であることが確認された。縄文時代については、岡木戸Ⅱ遺跡では、重複する竪穴建物跡と遺物が多量に出土し、岡木戸Ⅱ遺跡の東側や南側へ集落が狭くと考えられる。古代は、鉄滓の散布状況や立地を鑑み鉄生産関連遺構が岡木戸Ⅴ遺跡の北東側へ続く可能性がある。また、それらに関係していた人々の集落は岡木戸Ⅱ遺跡の東側に展開されると考えられる。							

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 640 集

間木戸Ⅱ遺跡・間木戸Ⅴ遺跡発掘調査報告書

三陸沿岸道路建設事業関連遺跡発掘調査

印刷 平成 27 年 3 月 17 日

発行 平成 27 年 3 月 20 日

編集 (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡 11 地割 185 番地

電話 (019)638-9001

発行 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所

〒027-0029 岩手県宮古市藤の川 4 番 1 号

電話 (0193) 71-1741

(公財) 岩手県文化振興事業団

〒020-0023 岩手県盛岡市内丸 13 番 1 号

電話 (019)654-2235

印刷 株式会社五六堂印刷

〒020-0021 岩手県盛岡市中央通 3-16-15

電話 (019)654-5610

©(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2015